THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1922

十一月號

第三十七年第十二號　第四百十五號

大正十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

獨逸 ショーペンハウエル著
増富平藏譯

五版

處世哲學

ショーペンハウエルの處世論は類書中の最尊也 偉大なる哲學者『人間を知れる者』としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを擧げて人間處世の妙諦を説き人生に於ける明闇、幸不幸、安危、得失等の根源を論じて一大秦鏡を懸くるが如く、譯文亦明快を極む。

四六判總布製 四百七十頁 定價貳圓八拾錢 郵税十二錢

獨逸 ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

十二版出來

宇宙の謎(ナゾ)

『樹木だけ見て森を見ない實驗學者』と『森だけ見て其の一々の樹木を見ない哲學者』即ち『科學と哲學との間、實驗と思索との間の不自然なる矛盾』を超越して、一元論の立場から宇宙の生成、物質の本體、人類の起源、生命の現象、心靈の本質等永遠の神秘に對して人間理智の極致を盡せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述べたものが本書『宇宙の謎』である。苟も**智識欲ある讀者**には**其興味は小説以上**であらう。著者は近代獨逸に於ける科學界の泰斗と仰がるゝばかりでなく、又有名の大思索家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかは、其發賣後多年を出でざる今日、獨逸本國にて既に**數十萬部**英譯のみにて**十四萬部**の**賣行**を見たりと云ふ事實が其の一端が知れやう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

四六版總洋布製 極美本 全一册 六百四十頁 定價參圓 送料 内地十二錢 其他十四錢

東京本郷西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

大日本

大日本地名辭書縮刷版發行！我國文獻ありて以來の最大著作！

發行の順序

首　卷＝汎論、索引（本年九月發行）
第一卷＝上方（本年十一月發行）
第二卷＝中國、四國、西國（本年十二月發行）
第三卷＝北國、東國（十二年二月發行）
第四卷＝阪東（十二年三月發行）
第五卷＝奥羽（十二年五月發行）
第六卷＝北海道、樺太、琉球、臺灣（十二年六月發行）

全七卷

本篇――全六冊
續篇――全一冊
全六千二百餘頁

以上の順序で發刊し配本の豫定ですが出版の前後する場合も生じませうから豫め御承引を願ておきます

文學博士　吉田

大日本地名辭書は近代日本の學界に於ける最も偉大なる天才的頭腦と超人的精力が前後十六年間に集積した永世不磨の一大金字塔である。單に印刷製本に對する物質上の努力のみを以てしても、正續七卷細字三段組四六倍判全六千二百餘頁といふ我國文献ありて以來の最大著作を完成することそれ自身が、既に出版界に於ける近代の一大奇蹟といはねばならぬ。曩に明治四十四年始めて本書全部の完成を發表するや、當時の讀書界は期せずしてその購買的能力を本書に集中し、重版又重版増刷又増刷、數年を出でずして遂に原版の大部分は磨滅して全く用を爲さなくなつた。隨つて絶版のまゝ久しく放棄せられて、空しく古本市價の際限なく奔騰するに任せた。しかも今や一般文化の向上、地理歴史の知識と趣味の國民化と共に、教養ある家庭の書架は勿論、

名辭書

東伍先生著

各種學校、銀行、會社、官衙、その他各種の公共團體に於て、各方面の文化を代表する基礎的著述を必備する風の年々旺盛に赴かんとする時に方り、本書の如き國寶的出版物を永く一部人士の秘藏に任すことは素より出版者の本意でない。併し原版はいかに修理するもはや絶對重版の基がない。そこで前年來百方苦心の結果、多大の費用を投じて本文全部を寫眞縮版となし、四六判二倍大の原書約半分の容積菊判に收め、三年を經て今度漸く發行することができた次第である。縮版は初刷の原書より縮寫して一點一劃を崩さず、今日の印刷術の極限を盡した驚くべき精巧なものであるが、これとて無限の需用に對していつまで重版に耐へ得るか疑問である。最も早く豫約申込によつて最も新しい刷本を手にせられることは、賢明な購讀の方法であると信ずる。

特價金五拾五圓　定價金六拾圓

送料（首卷は金二拾參錢（第四種書留）
一―六マデ各冊（書留各冊廿七錢　小包）臺灣、樺、鮮、滿、支（書留各冊五拾五錢　小包）

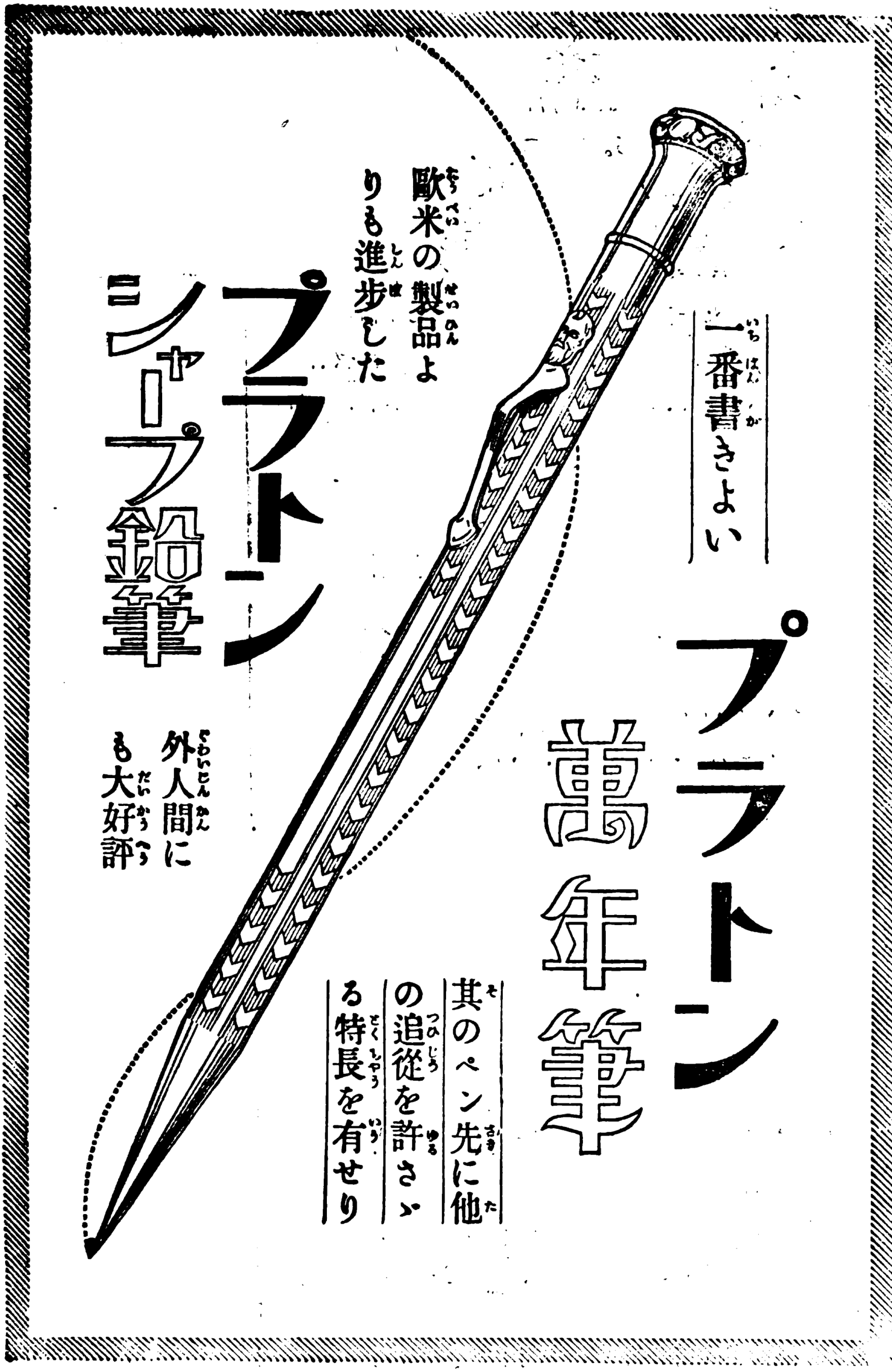
月賦拂方法（申込金五圓（九月拂込（書籍代二通算））
以下毎月金五圓宛（本年十月より大正十二年七月迄十回に拂込むこと）

送本　第一回　第二回　第四回　第六回　第八回　第九回　第十回目着金の都度

送料は上記月賦金御拂込とともに適宜御回送を願ひます


特賣特許黒中山帽
ピースダービー
紳士の帽子は
誰方様も
鷹印
ダービー
大阪
株式會社 高橋製帽所

「死を念頭に置く生活と死を念頭に置かぬ生活」


一番書きよい
プラトン萬年筆
其のペン先に他の追從を許さゞる特長を有せり
歐米の製品よりも進歩した
プラトンシャープ鉛筆
外人間にも大好評



石羅漢　　小杉未醒筆

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふな煙草も一度「カロツト」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うじて先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロツト」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵——外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロツト味(百日分) 金貳圓
カロツト具(永久使用 銀模樣入) 金五拾錢
同 象牙サツク入 金壹圓五拾錢
一組

送料(內地十八錢 海外四十五錢)
引替送料(內地卅五錢 海外五十五錢)

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

電話丸の內一九一九 振替東京五二九一一

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

大正十一年

中央公論

十一月一日發行

十一月號

第卅七年 第十二號

第四百五十號

軍閥の牽强附會を嗤ふ

沼津の平作は娘の聟渡邊志津馬に親の讐を討たさんとて、圖らず廻り遇つた旅人姿の怜重兵衛に澤井又五郎の行先を致へよと迫る。不幸にして又五郎は重兵衛に取ての恩人だ。流石に義理堅い平作は娘をして夫に操を立てさせ度いと熱中するだけ、又怜に恩人を裏切るの悪徳を犯させるに忍びない。煩悶懊惱の極遂に腹を切る。死んで行く者に耳打ちしたつて恩人に背く事もあるまいと理窟を捏ねて、重兵衛に又五郎の行先を打明けさせ、蔭に身をかくせるお米には之を聽いて急ぎ志津馬に其事を報告させる。斯くして志津馬は荒木又右衛門の助太刀により又五郎の行手を塞いで伊賀の上野に復仇の擧を成就するのである。適莫平作は一身をすてゝ男女二人の子供達に夫れ〴〵義理を全うせしめたと云ふ事になる。芝居でやると大に一般觀客の袂を絞らせる幕だ。

併し退いて考ふるに、恩人澤井の在處を口外するのが不德だとすれば、平作が腹を切つたからつて其の不德たるに變りは無い筈だ。況んや蔭には澤井を讐敵とねらふ連中の片割れが潜み居るに於てをや。夫にも拘らず、腹を切るから死人に物言ふも同じだとし、蔭に隱れてるのだから他人に聽かれたことにならないとこじつけるのは、冷靜に考へて見ると滑稽の至りではないか。併し斯うした牽强附會は實に昔は平氣で許されたのである。何故斯んな滑稽が許されたかといふに、之には大に理由がある。卽ち封建制度の持續保全の爲に必要とせらるゝ各種の社會的規範慣行は往々にして人性の自然や正理の要求に相悖ることがあつたからである。所謂牽强附會のこじつけは、形式上封建的慣行規範に勝利を讓つて而も實質上人性の自然や正理の要求を通す爲の擬制に外ならぬ。從つてまた此種の擬制は、自然なるもの乃至正しきものゝ爲めにのみ利用するを許されたのである。平作の場合も、又五郎の利益のためにするのなら世間は之に同情しなかつたらう。一死を以て正しき者の正しき仕事を助けたといふことに、昔の人は無限の感激を昂奮させたのである。

正しきもの乃至正しきことの爲めにのみ許さるゝのであるから、此種の擬制が正しからざることの爲に濫用さるゝ如きは、昔から嚴しく禁められてあつた。人の頭を張り飛ばし乍ら、貴様の頭が已れの手に打つ付かつたなど

ゝ云ふ様なこじつけは勿論通らなかつた。併し兎に角封建時代が永く續いた爲でもあらうか、我國近代の歴史には可なりに此種の犠牲が流行つたのである。かくして擬制的に白いものを黒いときめて良心の安價な滿足を求むるといふ底の風潮は、近代の我が國民性に餘りに深く根ざして一種の僻弊とさへなつた傾がないでもない。

この弊風はやがて我々國民に取り殆んど第二の天性となつたとでもいはうか、其の發生原因たる封建制度が疾うの昔に亡くなつた今日でも、其は可なり頻繁に今日なほ我々の生活を累して居る様に思ふ。一體今日は、白いものは白い、黒いものは黒いと正直に云つていゝ世の中だ。夫だのに、白いものを黒いと云つたり、黒いものを白い筈だときめて、問題を畸形的に處理すること亦頗る多いではないか。勞働者の集會を取締る警察官が會集の或者を擲つたといふ明白な證據があるに拘らず、斯かる場合腕力に訴ふ可らずと教訓してあるからそんな事をする筈はないとの上長の辨明で全然蓋を付けて仕舞はれるが如きは其の一例である。近頃此種の擬制が明白な自家の非を飾る目的の爲に平氣で濫用さるゝの多いのには、僕を以てして尚一驚を喫せざるを得ない所である。

而して自家の非を飾るために此種の擬制を最も拙劣に從て又最も大膽に濫用するの随一は、何と云つても軍閥であらう。軍閥の牽強附會は固より今日に始つたことではないが、今次の西比利武器問題の失態に於ける彼等の辨明ほど白々しいものは、又とあるまいと思ふ。

武器問題そのものに就ては、今や世論頗る喧しきものあり、吾人は更に之に附け加ふる必要を見ぬ。只玆には前論の結びとしてこれ丈の事を云つて置かう。封建制度の生んだ化石的生活原則は、自ら一種の社會的擬制の發生を促して、人性と正理とに不完全ながら何等かの發露を見るの途を開いた。世の中が進むに連れて、這般の擬制は段々喜んで利用せらるゝ様になるが、只それが不正の目的の爲めに濫用さるゝこと丈けは許されなかつた。而して封建制度の亡くなつた今日、何事ぞ、この擬制の濫用が一部の官界から盛んに世の耳目を瞞着するの目的に供せられて居るとは。昔武士道の裏道に咲いた人情の花ともいふべかりし擬制が、今日ことに武人の好んで惡用する所となつて居るのは、誠に悲むべきことであり、又惜むべきことでもある。

中央公論



第卅七年第十二號
十一月號
第四百十五號

官吏階級の生活難を論じて計表本位制に據る增俸を提唱す

法學博士　堀江歸一

物價指數と俸給指數

統計的觀念の發達した西洋諸國に於ては、俸給なり、賃銀なりの金額を指數で代表させ、一方に一般家計に於て消費される諸物價の指數を取つて、双方を對照し、前二者の增加率が後の一者の增加率に及ばない場合に於ては、名目的俸給なり、名目的賃銀なりは、或る程度まで上進したとした所で、其增進は更に大なる物價騰貴率の爲めに抹殺され、斯

くて實質的俸給又は實質的賃銀を以つて、低落したものであるとする斷定を得るのである。而して一旦斯る斷定の下されたる以上は、之を基礎として、勞働者の如きは、勞働運動に依つて、賃銀增加を事業主に要求し、以つて物價と勞働報酬との間に、均衡を保たしめる計に出でなければならないし、官吏の如き俸給衣食者亦俸給の增加を政府に要求して、以つて各自の生活に安定を得る手段に出でなければならないのである。

然るに我國に於ては、以上の如き統計は未だ完全に備はつて居らない。隨つて物價騰貴の場合に、勤勞に對する報酬が引上げられるとしても、其引上げたる、多くは傭者の自由なる裁量に依るのであつて、何等正確なる標準に據るものと考へるを得ない。勤勞に對する報酬の決定を傭者の自由意思に依つて、裁量させたならば、其れが俸給であらうが、賃銀であらうが、又俸給が官廳に依つて支拂はれるものであらうが、民間の銀行會社に依つて支拂はれるものであらうが、是等の差別を問はず、傭者一個の利益を主眼として、決定されるのは勿論であつて、斯くて報酬は物價騰貴、生活費昂進と同一の程度に於て、上進するを得ない。前者は後者に比較して、上進の率の頗る緩漫であり、又時に上進の全然行はれないことを免かれないのである。

勤勞を爲す者の境遇

唯此場合に於て勤勞に對する報酬を獲得する人々の間に於ける地位の相違に依つて、利害關係に異なるものがある。第一勞働者の如きは、團體の勢力の鞏固であり、又自己の境遇に就て、確乎たる自覺を持つて居る以上は、團體の運動を利用して、物價騰貴と均衡を保つ程度に於て、賃銀の上進を期するを難しとしない。第二俸給生活者中、營業に使役せられる者の如きは、物價騰貴の際には、概して之に刺戟されて、諸事業に好景氣の狀を呈し、事業主をして被傭者に

向つて、騰貴した諸物價に相當する賃銀の支拂に應ぜしめるに至るのである。然るに同じ被傭者の内にも官公吏學校教師の如き、第三の階級に屬する者がある。是等は自己の從事する事業なり事務なりが經濟社會の景氣に依つて、直接の影響を蒙らないことの結果、物價が騰貴して、生活費が膨脹したとした所で、俸給に同樣の引上を見るに至らない、俸給の增加を得るには、勤務年限の加重する時を待ち、又は拔擢に依る地位の上進を期しなければならず、其時の來るまでには、物價騰貴に依つて、俸給の實質的價値の減少することゝ爲り、彼等の生活を壓迫するに至るのは、論を俟たないのである。

官吏と無形の報酬

或は官吏の勤勞に對する報酬として、貨幣の形態を以つてする俸給ばかりを擧げるのは、根本に於て、誤まつて居る。官吏が官吏たるの故を以つて、位階勳記を授けられ、又爵位を授與されて、華族に列するを得る機會に富んで居ると云ふことの如きも亦無形の報酬であつて、斯る報酬のあるからには、有形の報酬の薄いことに對しても、亦之を忍ばなければならぬと云ふ說もある。或は我國民の生活が極めて安易であり、生存競爭亦甚だ緩漫である場合には、斯る議論も亦一顧を與へる價値ありとするを得たかも知れない、然も今日は著しく事情に相違がある。衣食の足らない場合に國民が禮節に拘泥する餘裕を持たないのは勿論であつて、所謂無形の報酬に依つて、人々の勤勞を刺戟しようとするには、餘りに時代の懸け離れた感を免かれない。或は之を以つて人心が物質に偏することを歎ずる人もあるかも知れないが、武士は食はねど、高楊子と云ふような時代は疾うの昔に過ぎ去つて、跡方をも留めないのであつて、今日は何としても官吏であらうが、民間の吏員であらうが、勤勞に値する所を貨幣の形で、給與する外に、其勤勞を刺戟する道はな

いのである。唯國務大臣の如き地位に爲ると、他の官吏とは聊か趣きが違つて、世間的名譽を博するもの大であり、俗衆羨望の的とも爲つて、大臣職に就いた者の虛榮心を滿足させるに足りるし、又國政上に或る經綸を持つて居る人に取つては、之を實際に試みる可き機會を得る譯であるから、俸給額の多寡の如きは、之を眼中に置かないで、進んで大臣に就任する人もあれば、又其地位を爭う人もあるようであるが、官界の事情に通ずる者の言に據れば、相當の財產家であるか、又は有力なる財力上の後援者を持つ者でなければ、今日大臣の地位に就いて、體面を維持し、下僚を手足の如くに使つたり、又所屬政黨に勢力を張つたりすることは、甚だ困難であつて、下手をすれば、大臣在職中に積年の貯蓄金を皆無にするような例も少なくないと云ふことであつて、此處にも俸給不足の實例が示されるのである。

社會羨望の中心とも云はれる國務大臣にして、斯くの如くであるとすれば、判任官階級に屬する下級官吏の生活に至つては、其悲慘なることは、言を要しないであらう。彼等には位階勳等の能く物質的報酬の不足を補うものがあるかと云へば、勤續三十年を越した位で、始めて最下級の位階勳記を授けられる、彼等には官廳の勤務以外に相當の副業があつて、收入を補足するものがあるかと云へば、勤務時間の餘暇を以つて、妻子と共に行う家庭の內職位が關の山であると云はれる、而して勤務時間は午前正九時から、夕刻に及び、局課長の在廳する間は、何としても退廳することを許されず、行政整理の行はれる度每に、馘首の危險は常に身上に襲ひ來るし、之を避けるには、萬遍なく長官の御機嫌を取結ぶことに腐心しなければならぬと傳へられる。私は時々或る用向きで、官廳に出頭する場合に、甚だ氣六ケしい、不愛嬌を極むる判任官吏などに應接することがあるが、畢竟彼等平生の執務上に於ける心勞や、生活の壓迫が此人を賢つて、不知不識の間に、妙な型に鑄込んだことゝ考へて、却つて同情の念を催ほさゞるを得ないのである。

俸給不足の結果――轉職者續出

我國官吏の俸給が不足であり、又少なくとも物價騰貴の趨勢に伴はないことは、官吏の勤勞上に如何なる結果を齎して居るかと云へば、其結果の良好であるが如きは、到底之を望むを得ない、左に其重なるものを列擧する。

第一、轉職者の續出すること。今日諸官廳に職を奉ずる官吏であつて、之を終生の仕事であると心得たり、又衷心官吏たる職に居ることを樂んだりして居る者が果して幾人あるであらうか。時に勤續數十年の久しきに亘つて、其功勞を表彰されるとか、又は一官廳に於て、生字引と稱され大小の事務を暗んずるとか云ふような人もあるが、多數の官吏は決して斯る永久的存職を希望するものでもなければ、理想とする次第でもない。一の官廳内に於て充分に志を伸ばし、又地位の昇進することを期し難い場合には、他の官廳に轉任しようとする、將來政界の大立者にでも爲ることの望みある人が大臣に爲れば傳手を求めて、其人と親分子分の關係を結び、次第に依つては、進退を共にして、他日の榮達を謀る、或は實業界の有力者と緣故を厚くし、官界は或る處で見限つて、實業界に鞍替へをしようと云ふような氣分は我國の官吏社會に於て、甚だ盛であることゝ認められる。斯の如く官吏をして其地位に安住せしめない原因は何れに在るかと云へば、其一原因の俸給の低廉であつて、官吏として在職しながら、他の報酬の厚い職業に移るの有利であることを思はせる際があるからである。英吉利の如き政黨政治の下に、内閣の更迭と共に、政務官の全部は必ず變動する、然し其政務官の數は文武百官の總體に比較すれば、固より少數であつて、政務官以外に、官吏の大多數を占める事務官に至つては、永久在職を以つて、當然の事實とする。靑年時代に文官登用試驗に登第してから、多くは同一官廳内に、時に系統を同じうする官廳、例へば大藏省と商務省、內務省と地方事務省の内に奉職し、三四十年の歲月を送迎する間に自ら各級

の事務に通曉し、才能ある者であれば、事務次官に拔擢され、何年か其職に居つてから、「サー」の榮爵を賜はり、功成り名遂げて、退隱すると云ふのが普通の狀態であつて、若しも日本流に二十年又は三十年勤續者を表彰すると爲つたならば、英國の如き諸官廳に於ける多數の官吏を片つ端しから表彰しなければならぬことゝ爲るであらう。誠に我國に於て物珍らしげに、官吏の勤續表彰を擧行するが如きは、他の一面に於て一般官吏の短期間在職を語るものであつて、官吏をして永く職に安んぜしめる工風をすることは、官吏社會に適材を置く爲めに最も必要であると考へる。

官界に適材を缺く

第二、官界に材適を逸すること。日本に於ては官吏の短期在職を以つて、原則とする。官吏中、官僚氣質が骨の髓まで染み込んだ人々ならば兎に角、他の方面に出て相當の働きをする自信があり、又能力がある人あれば、多く民間實業界に入つて、其驥足を伸ばすと共に、豐富なる報酬を收めようとする一方に、今日の青年子弟は果して官界に入ることを以つて、榮達の道と考へて居るであらうか。以前は官立大學で法律や政治を修める學生の多數は官吏を志望したようであり、伊藤公が自分の乾兒であつた渡邊某を東京帝國大學の總長としたのは、同大學を官吏養成所とし、官立大學から溫順、羊の如き官吏を供給させることを目的とした爲めであると稱され、又事實帝國大學の法學生は官吏たる以外に何等の志望がなく、年々輩出する卒業生の多數は盡く官吏に任命された事實の爭ふ可からざるものがあつた。然るに近年に爲つては、此官吏養成所の氣風も餘程動搖し出して、民間に於て職を求める者が多く爲り、必ずしも官吏たることを欲しないと云ふことである。官吏養成所と稱された所であつて、尙ほ然りとすれば、一般の大勢亦之を推知し得るではないか、一方に今日現に官吏として生活して居る者が自己の子弟を官吏にしたいと考へて居るであらうか。封建制度

の行はれた時代と違ひ、經濟的自由の發達した今日に於て、職業世襲の制度を社會に誘導するが如き、利害の點に就て自ら議論なきを得ないが、利害は別として、或職業例へば官職に就いて居る者が其實其職業に對する尊敬心を持つ、又職業に關する趣味を理解したとしたならば、又今一歩を進めて、官吏と爲ることを以つて、有利なる職業を得る道であると認めたならば、自己の最愛の子をして自分と同じく官吏たらしめようとして、其道に向く教養を心掛けるのが當然であるのに、私の知つて居る官吏に就て見ると、官吏自身か職業に對する尊敬心を持つて居らない。(是れは日本人共通の惡癖であるかも知れないが) 自分が官吏と爲つたことを以つて、一ツの間違であるとし、機會があれば、他に轉職しようと焦つて居る位であるから、官吏は自分一生限であつて、孫子の代まで、官吏にするものでないと云ふことを公言して、憚らない者が少くない。然らば現在の官吏は他の國民に向つて、官吏たる可からざることを宣傳し、官吏の後繼者を自己の家庭内から、出さないことに努力しつゝあるものであつて、斯の如くして將來良質の官吏の輩出するに至ることは、容易に之を望み得ないのである。私の先師福澤諭吉先生は明治初年我國が封建時代の餘習を脱し切れず、依然たる官尊民卑の陋態に制されて、天下の人才の官界に集注する弊を戒められたが、何ぞ知らん、今日に於ては先生の教訓が實際に徹底し過ぎて、官界に人才の拂底を映ぜざる可からざるに至つた趣を免かれないのである。

瀆職官吏の輩出

第三、瀆職官吏の續出すること。綱紀肅正とか、官吏社會廓淸とか云ふようなことが一兩年來我國に喧傳され、重要なる政治問題と爲つて居り、又事實に徴すると、高位高官に居つた人々で、瀆職の嫌疑を蒙つて、告訴されたとか告訴されんとしたとか云ふやうな向きもあり、中には有罪の判決を下された者もある。阿片事件や、印紙事件の如きは、事

の著明なるものであるが、更に其小なるものに至つては、或る官廳に請負工事に關する不正があつたとか、稅務署に於て、脫稅者を見逃したとか、海軍の造兵監督官が驅逐艦の工事に對する監督を怠つたとか、殆ど數限りなく幾多の事件が列擧される次第であつて、見樣に依つては、我國の官界には所謂貪官汚吏が巢を作つて居り、國庫に屬する資金を私したり、御用商人に不正の利益を與へて、其一部分を自家の掌中に收めたりすることが殆ど一個の役德であるかの如くに考へられて居る事實は何としても之を否定するを得ない。是れでは韓國時代の朝鮮や、今日の支那に於ける官界の腐敗、不良官吏の跋扈と殆ど異ならざるやに認められる。官紀肅正の叫ばれるに至つたのも、當然の事としなければならぬ。私は官吏を以つて、國民に正しい行の範を示すものとするが如き、古風なる考を持つ者ではない、唯官吏の如きは、天下の公僕（パブリツク・サーヴアント）であつて、而して其取扱ふ事務は國民全體に利害關係を持ち、其經費として、支辨する資金は國民の膏血を絞り上げて、收め得た收入に外ならないとすれば、官吏が其行ふ所に細心であつて、些の錯誤のあり、遺漏のあることを許さゞる道理であるのに、官界に不正事件の續出を見るに至つては、國民は普通の負擔を蒙つて、相當に重い上に、不正官吏の爲めに負擔を加重され、更に斯る不正事件を摘發し、處置するに就ての司法上行政上の負擔にも當らなければならぬ道理であつて、天下に此位馬鹿々々しき事はないのである。而して斯る瀆職官吏の續出する原因は何れに在るであらうか。一般國民道德の頹廢した餘波が此所に現出したものとすれば、一般道德の上進を待つて改善の實を擧げるより外に道はないが、一般社會の狀態は兎に角として、瀆職官吏の續出することの特に吾人の眼に映ずるに至つては、私は其原因を官界特有の事情に求めなければならない。

瀆職者續出の原因

何を以つて瀆職官吏の續出の原因とするかと云へば、職業の自由が餘りに擴張され、道德品性の低い者でも自由に官吏に爲り得られる、職業的差別の嚴重であつた時代であれば、官吏に爲れなかつた者も、今日は官吏に登用される、而して官吏と爲るには、普通教育なり、高等教育なりを受けたことを必須の要件とするのであるが、其教育なるものは智育の一方に偏して、德育には少しも顧みる所のないのが今日の一般である。斯く德操に於て必ずしも特殊の發達を遂げて居ると考へられない人が官吏と爲つた場合に、其有する權限は果して如何なるものであらうか。我國に於ては從來官僚政治が行はれ、今日に至つて、尙ほ其跡を絕たず、一方に行政の様式は家長政治である。或る事業を經營するにも、會社を設立するにも權利を取得するにも、盡く官廳の許可を要し、認可を經なければならない。仕事の種類なり、性質なりに依つては、斯る認可や、許可を得ることに就て、一日一刻を爭はざるを得ないものがある。斯る場合に認許の權利を握つて居る、少なくとも之に關する事務に執掌する官吏は其有する職權の大であるに拘はらず、收める所の報酬は多しとするを得ない。然るに斯る官吏の支配下に立つて、事業經營の運命を決される事業家に至つては、權力は持たないが、資力に豐富であるとしたならば、一方に餘れるものを以つて、他方の足らざる所と交換しよう、換言すれば事業家の方では、官吏に金錢を與へて、事業家に利益を與へるように、官權を左右しよう、官吏の方では自己の考一つで如何樣にも爲る官權を濫用して、最も不足を訴へて居る金錢を得ようとするに至るのは、頗る自然の徑路であるとしなければならぬ。是れが普通の交換であれば、當事者の間に有無相通じ、長短相補はれる次第であるが、交換の目的が官權の濫用であり、官吏に對する贈賄であつては、經濟的行爲の圈外に出づるものとして、之を排斥せざるを得ない。然も我國に於ては此般の關係から、瀆職の起ること少なからざる譯であつて、瀆職罪の當事者を見ると一方に官吏があつて、他方に富裕なる御用商人があり、而して其官吏は多く薄給であるとか負債を脊負つて居るとか云ふような私人經濟上不

如意の地位に在るものであることに徴しても、事の一斑を明にするを得るであらう。

官吏増俸の必要

斯の如く論じ來ると、私は我國官濱の俸給の菲薄であることを以て、官吏の能率上に、將た又其德操上に、種々の弊害を醸す所以であり、將來優良なる官吏の後繼者を得ることを妨げる原因であるとしなければならぬ。我國の物價が近き將來に於て如何に變動するかは、一個の問題であつて、之に對する豫想を下すを難しとするが、今日までの經過に徴すると如何なる内閣が組織されて、幾ら物價調節の必要を聲明したとした所で、實際に効果ある政策の行はれるが如きは容易に之を望むを得ない。然らば物價が下落して、生活が安易に爲るであらうと云つた所で、俸給生活をする者をして之に安んぜしめることの出來ないのは當然である。好景氣時代物價騰貴の甚だしきに至つた際、官吏の俸給には些細なる增率が行はれた、其後俸給は一定不變である一方に、物價は引續いて騰貴し、今や其騰貴の絶頂に達した物價が價格の平常點たらんとする狀態であつては、官吏社會の生活が困難と爲り、將來に於て上記四個の弊害を生ずる勢の益々濃密ならんとすることは論を俟たない。私の考へる所では、官吏社會には隨分生活上に苦艱の免かれ難きものがあらう。官吏である以上は、相當の體面を張らなければならないとか、官吏であるからには、其子弟をして高等教育を、其女兒をして高等女學校の教育を受けしめなければならないとか、官吏である故に、子女の婚嫁に就ては、此位の程度を保たなければならないとか、家屋も門構であることを要するとか、樣々の束縛があつて一方に俸給に限りがある。諸外國の官吏が斯る境遇に居つたならば必ず團結して、上長に增俸加給を要求す可き道理である。然るに我國に於ては、時々或る官廳で所屬吏員が怠業を敢てしたとか、缺勤者が續出したとか云ふような出來事に接したが、是等以外に官吏が增俸

の要求を試みた實例に接しないのは、何故であるか。第一、我國の官吏には年來官尊民卑の習俗に依つて、鍛へ上けられた一種の性癖があり、官吏であるから、體面を守らなければならぬと云ふ一種の體面偏重癖があり、斯くて忍從の德を養ひ來り、武士は食はねど高楊子式の氣風を醸し來つた。第二、啻に官吏と云はず、公吏と云はず、民間の吏員と云はず、我國の俸給衣食者階級には階級としての意識に基いて、團結するだけの訓練がない。團結に依つて、階級全體の利益を發揚するよりも、拔駈けの功名に依り、又は上長に對する阿諛諂佞に依つて、自分一個だけの増俸を企てることを以つて、早手廻しとする反階級的意識の盛なるものがあつて、爲めに團體的行動を妨げざるを得ない。第三、一個の官吏に對する規律紀綱は時に緩漫であつて、今日の如き弛廢を來すことはあるとしても、多數の官吏が團結して、或る要求を試みるようなことがあれば、官吏にあるまじき所業として、忽にして官紀の紊す所と爲る、何人も斯る犧牲者と爲ることを好まない結果、寧ろ機會あれば、官職を去らうとか、發覺の虞れなきときには、官紀に違反する所業をしようとかする者はあつても、正々堂々團結の力に依つて、所信を貫徹しようとする者なきに至るのである。

何を以て增俸の標準とする

然らば官吏社會が無事である、彼等に何等の不平がないと云ふことを單に今日表面に現はれて居る事相のみに就て、判斷したならば、其れは大なる間違であつて、靜かなる浪の底には、恐る可き暗潮が流れつゝあるのである。即ち表面にこそ現出しないとしても、或は有能の官吏をして職を辭せしめるとか、官吏志望者を少なからしめるとか、瀆職者の輩出を促すとか、種々不利なる事相を生じて已まないのである。玆に於てか私は俸給衣食者の生活に安定を保たしめる策の第一着手として、官吏の俸給は大體に於て物價の高低と權衡を保たせ、我國の如く物價騰貴の勢の續く場合には、

其騰貴と略ぼ同じ率に於て、増俸を行うことを提唱したい。貨幣本位制度の一ッとして、計表本位制なるものが債權債務を始め貸借の關係の公正を保つ上に於て、最も大なる効果ありとして、一部の人士に依つて、主張される。即ち一國に於ける物價指數を最も完全に、又最も正確に調査し、指數の高低に準じて、債權者債務者の間に授受される貨幣の金額を訂正しようと云ふのが、此制度の眼目であつて、例へば或る國に於て指數が百であつた時に、百圓の貸借が行はれたとして、一年の後其貸借の決濟される際、指數が百五十に昂騰して居つたならば、債務者は自分が借用した時の百圓で購い得たよりも、遙に少量なる物資を買得して、百圓の貨幣を收め得られる爲めに、債務の負擔を輕減されたことゝ爲る一方に、債權者は故なくして債權の價値に減損を招いた損害を蒙らざるを得ない。計表本位制に於ては此場合に百圓の貨幣を借入れた債務者をして百五十圓の貨幣を返却させることゝし、以つて當時者間の關係を公正ならしめることを期するのである。而して右の如き利害關係は俸給を支拂う政府と俸給を受ける官吏との間にも現はれるのであつて、物價の變動に對して、官吏の如き俸給と云ふ定額の所得に衣食する者の地位を確實のものたらしめるには、計表本位制に據ることを一策とする。唯此本位制の下に信頼するに足る物價指數を調製するを得るかどうかゞ問題である。從來我國に於ける物價指數として、世間に永く行はれつゝあるは、日本銀行の調製に係るものであるが、其確否に就ては、日本銀行内に於てすら、多少の異説があつて、方式を變更しようとする考さへ行はれて居ると云ふ位であつて見れば、直に之を取つて計表本位制の基礎とすることも出來ないであらうし、又政府部内で新に調製するとしても、自ら異論なきを得ない。是れが計表本位制の弱點として、已むを得ざる所であるが、政府が官吏の俸給を決定する場合に、完全なる方式の下に調製された指數を參酌することは、固より實行し得る所である。本俸其ものを指數の高低で増減するのは、穩當でないとしても、手當金とか加俸とか云ふ形に於て、指數の高低に依つて、官吏に報酬を與へることは、即ち勤勞

の實質と報酬の價値との間に、均衡を保たしめる所以であつて、此位い經濟上の正義を發揮することは、他にあるまいと思はれる。何故に我國の官吏が物價指數の增進した程度の半額にも足らない增俸を受けて、之に安んじて居るのであらうか、抑も亦物價指數と均衡を保つ程度の增俸を物價指數の動き方に基いて、主張しないのであらうか。我國官吏の經濟的智慮に缺けたことも、亦甚だしいではないか。外國の勞働組合の如きは、必ず組合員たる勞働者の專ら消費する物資の價格や、家賃に就て、指數を取り、一方に賃銀の指數と對照して、賃銀の名目的價値と實質的價値との關係を知り、後者の低落した場合には、必ず之を復舊させるに足りるだけの賃銀增加を要求し、事業主亦斯る根據の確實なる要求に對しては、之を容れざる可からざるに至るのである。我國の官吏が徒に忍從の風に制されて、報酬の增加を自ら要求しない、而して裏面に於て能率の減退綱紀の頹廢を來すが如き所業を敢てするのは、私の取らざる所であつて、彼等の知識や、見識は外國の勞働者に劣つて居ると云はれても、一言辯解の辭はないであらうと思はれる。

現職給と恩給との關係

尤も官吏の勤勞に對する給與は單に現職給のみを以て、其高低を論ずるを得ない、現職給の外に、退職手當金、休職給、恩給、遺族扶助料の如きものも亦給與の一種類たるを失はない。是等の內、恩給の如きは、官吏として或る年限以上、勤務した者の當然受く可き給與であり、其期間は本人の生涯に及び、最も永久的性質を有する點に於て、重要であるものと認めなければならぬ。元來恩給なるものは、官吏退職後の生活を保障する爲めに與へられる給與の一形態であるが、然らば國家は何を財源として、之を支拂うかと云へば、現職中に當然與へ可き俸給の一部分を與へずに置いた結果に依賴するものに外ならない。隨つて恩給受領者は現職中に得られ可き給與を國家に依つて、退職後に保留された

次第であつて、恩給を受けることは、何等國家の慈悲や、恩惠に出でた結果でなくして、受領者當然の權利に屬するのである。既に恩給にして、官吏に對する留保された支拂であり、又延期された給與であるとすれば、國家は一方に恩給制度を廢止して、他の一方に今日の現職給を恩給の包含された程度までに引上げることゝするのも亦一策である。即ち官吏は斯く引上げられた俸給の內から、一部を節約して、自ら退職後の生活を保障するに足るだけの財源を作り出すことゝ爲るからである。然しながら是れは一個の理論であり、又空想であるに過ぎない。人は概して目前の欲望を充たすのに急であつて、動もすれば將來の利害を閑却することを免かれない、退職後の生活を支持するに足りる給與を現職中に得たとした所で、果して其一部を貯蓄し、利殖して、將來の生活を安全にする基礎を築く人があるであらうかどうか、時に斯る心掛けの人があるとしても、同時に一方には現職給の豐かであればあるだけに、其之を收めつゝある際に費消して、少しも他日の計を爲さない者もあるであらう。斯くては官吏は退職後に於ける生活に支障を招き、悲慘の生涯を送らなければならぬ破目に陷る虞れがあるので、現職給の一部を割いて、之を退職後の給與に振向け、國家の力に依つて、生活上の安全を保たせる次第と爲るのである。故に恩給制度なるものは、事の根柢に於て、何も國家の恩惠でも、慈悲でもないが、家長政治の結果であることを承認しなければならぬ。而して此家長政治は何を目的としたかと云へば、官吏の生涯を通じて、其現職中たると、退職後たるとを問はず、生活に正常の狀態を保たせ、盛衰の甚だしき波瀾なからしめようとする一事に外ならない。然らば今日の官吏生活の狀態から考へて、現職給を增加することの必要であるは勿論であるとして、恩給に至つては、更に現職給に對する間隔を些少ならしめることを標準として、大に之を引上げなければならぬ道理である。即ち官吏の生活を保障し、現職中と退職後との生活に波瀾なからしめるには、現職給に對する恩給の割合を高くすることが必要であつて、現に英國の如き恩給の最高限は現職給の三分の二に當るし、獨逸

佛蘭西に於ては四分の三に上るし、伊太利に至つては、兩者同額に上るのであるに反し、我國に於ては、三分の一を以つて最高限とする。然らば現職給の一部を貯蓄することに依つて、恩給率の低いのを補う餘裕があるかと云へば、恩給率の低い如く現職給の乏しいことも亦上述の如くであつて、到底其餘裕を得るに至らないのである。

現行恩給制度整度の必要

斯の如く現職給も增加し、更に之に對する恩給の率をも引上げるといふことは、官吏に適任者を得たり、又其地位に安んぜしめたりする爲めに必要であるとしても、國庫の財源、之を許さないと云ふ說が出るであらう。國家に必要なる施設を行うに當つて、財源を云々して、之を拒否するが如きは、當らざる話であつて、殊に今日の我國の如く、十五億圓の歲計を動かしつゝある場合には、恩給金の財源の如き、如何ようにも之を得るの道に苦しまない道理であるばかりでなく、現行の恩給制度に整理を加へたならば、之に依つて若干の財源を調達することも亦難しとしない。我國今日の恩給制度に於て吾人の認めて最も不合理とる所は在職十五年を以つて、恩給領收の最短年限とする一事である。普通文官であれば、二十一二歲を以つて、高等文官であれば、二十五六歲を以つて、任官の年齡するのが普通であるのに、十五年を恩給年限とするときは、四十歲未滿又は四十歲前後に於て、多くの官吏は恩給受領の資格を生ずる。官吏として働き盛りであり、今後の働き振りで如何ようにも立身出世の望みある人に恩給受領の資格を與へるが如き、其人を老人扱にする所以であつて、斯くの如きことが果して恩給制度實施の眼目であるかどうか、疑なきを得ない。現に我國官吏の內には、十五年の恩給年限の到達するのを待ち構へ、其時の來るや否や、直に辭職して、民業に移り、民間の俸給に加ふるに、恩給を得て、家計を賑はさうとする者も少なからざるやに見受けられる。四十臺の壯齡者が民業に

從事し、俸給や、賞與金を豐富に受領しながら、國家から恩給を受け、此點に於ては老衰者であり、隱退者である待遇を受けて居るが如き、何とした矛盾であらうか。十五年勤續の壯年者に恩給を與へればこそ、我國に於ては退職官吏の恩給を受領する期間が永くも爲れば、又之を受領する者の數も多勢に上ることゝ爲り、更に一方に官吏をして頻繁に辭職するに至らしめるのである。恩給制度の設けられた精神に徴しても、官吏の在職年限を永からしめる必要から考へても、恩給受領に必要なる在職年限は少なくとも二十年なり、又は二十五年なりに延長し、眞實老齡の爲めに隱退する者に限つて恩給受領者たらしめ、將來短かゝる可き餘生の間を通じて、現職給と異ならざる程度の恩給を與へるのが至當である。恩給受領者を少なくし、受領年限を短かくし、斯くて一方に受領金額を多くするのが恩給制度に加へられる改正の眼目でなければならず、現職給に就いても、行政整理に依つて、冗員を淘汰し、多數に給與された薄給を少數者に對する厚俸とする方針に出でなければならぬ。



米國製

ムーアー萬年筆は

「漏らぬ」がモットーです

特長は振らずにすぐ書けること永年使へること

日本總代理店 東京 神戸 米國貿易會社

●東京特約販賣店●

京橋 伊東文房具店
同 文祥堂文房具店
同 文永堂文房具店
日本橋 三越呉服店
同 白木屋呉服店
上野 松坂屋いとう呉服店
神田 文房堂

大阪 三越呉服店
名古屋 松坂屋いとう呉服店

其他市内及全國著名の百貨店文房具店に有ります

戰後のインターナショナル

林　癸未夫

一　第二インターナショナルの復活

休戰後に於けるインターナショナルの最初の會合は、一九一九年二月二日から九日まで瑞西のベルンに於て行はれた。此會議に出席した者は總數百二名で、其郷國は左記二十七の邦土に亘つてゐた。

英、佛、獨、墺、匈、伊、露、和蘭、丁抹、諾威、瑞典、波蘭、西班牙、ボヘミヤ、勃牙利、エストニヤ、芬蘭、ゼオルヂヤ、希臘、愛蘭、レツトランド、パレスタイン、愛蘭、アルメニヤ、アルサス・ローレン、加奈陀、アルゼンタイン。

濠洲及ウクライナからも代表者を差遣したけれども、到着が遲れて會議の間に合はなかつた。佛獨兩國からは多數派及少數派双方の社會黨が代表者を送り、英國からは勞働黨の領袖が全勢力を代表して參加した。伊太利からの參列員は右翼の少數派に屬する者で、左翼の多數派は參加を拒んだ。瑞西、セルビヤ、ルーマニヤの社會黨は此會合の空氣を支配した右傾的傾向を慊らずとして代表者を送らず。露西亞からの參列員は單にメンセビーキに屬する者のみであつた。白耳義の勞働黨と米國の勞働聯合會とは、獨墺兩國の社會黨が、戰爭に關する彼等の罪惡を自認せない限りは、彼等と一堂に會するを潔しとしないといふ理由で參加を拒絕した。米國の社會主義者は旅券を得られなかつたゝめに來ることができず。露國のボルセビーキは別に第三インターナショナルを組織するの計畫が既に熟してゐたので、公然此會合に敵對的態度を示した。

會議は二月の三日に初まつて、瑞典のブランチングが議長席に就いた。此會議に於て論議された第一の題目は、戰爭に對する責任が何れに在るかといふ問題で、最初の二日間は全く之に費された。獨逸の多數派社會黨はアルベール・トーマの如き佛蘭西の右翼社會黨や、カウツキー及びアイスネルの如き自國の

少數派社會黨から激しく攻撃せられたので、英國のスチュアート・バンニングや佛國のロングエーなどが、會議の破裂を防ぐために、獨逸政府を憎むの情を以て獨逸人民に臨むなからんことを以て、此攻撃を緩和するに努めた。而して結局次の如き決議が通過した。

「本會議は討論の後、獨逸多數派黨が、新獨逸の革命的精神を高唱し、且戰爭責任者たる舊官僚と全く絶縁したることを聲明したるにより、戰爭責任問題は解決を告げたるものと認む。本會議は獨逸の革命と共包含する民主的且社會主義的諸制度の發展を歡迎し、之によりてインターナショナル共同運動の前途は清められたるものと思考す。……爾今全世界の團結したる勞働階級は、あらゆる軍國主義と國際的民主主義廢棄の諸計畫を壓伏するがために、最大の努力を竭すべきことを盟ふ。」

次に彼等は平和條約の諸條件や、戰後の改造問題に關する起草委員の決議案を可決した。それによると先づ國際聯盟は政府の代表者でなく、人民の代表者を以て組織すべきものであり、且民族自決主義の上に構成さるべきものであると主張した。又常備兵の廢止、軍備の撤廢、自由貿易の確立、食料及び原料の國際的配給方法の設定等の必要を指摘し、左の如く結論したる決議案を可決した。

「各國に於ける勞働階級の運動が其實力を增大するに從うて、勞働者は彼等の國際的任務を自覺するに至り、又社會主義が實現せられ、新社會主義者のインターナショナルが其勢力を加ふるに從うて、政府の武斷的政策に對する反抗の決心はます〱强められ、延ゐて國際聯盟は一層有力にして惠澤ある効果を造就することができるであらう。」

次に同決議は勞働者保護に關する將來の保證として、賃金制度なるものは、資本家階級が勞働者を搾取するの具であるから、此制度に伴ふ諸害惡を除くために、勞働者は團結の力を以て之に抵抗し、國家も亦之に干渉を加ふるの必要が在ると主張し、又『勞働憲章(レーバー・チャーター)』として、(1)强制的初等教育(2)志望者に對する無料の高等教育、(3)八時間勞働、(4)毎週三十六時間の連續休暇、(5)女子夜業禁止、(6)少年の六時間勞働(7)社會保險の普及、(8)健康診斷及療養の施設、(9)團結の自由(10)職業紹介所11或種の產業に對し最低賃金協定機關の設定(12)海員に對する特別國際法、(13)勞働官署の特設等の諸要件を國際聯盟の規約中に擧げ、且之を實施する方法として、國際的一機關を常設すべきことを要求した。

次に露西亞のボルセビーキに對する態度を決するための決議案は、右翼案と左翼案とが二つ提出されて、激しい議論の題目

となつた。先づ最初に議題となつた右翼案はブランチングによつて起草されたもので、其主要な數節を拔萃するとかうである。

「本會議は露西亞、墺匈國及獨逸に於て、帝國主義と軍國主義との舊治世を破壞し、其政府を掃蕩したる政治的大革命を祝福する。」

「本會議は是等の諸國に於ける勞働者及社會主義者が、社會主義による大改造を成就せんとするに當り、民主的及共和的諸制度の發展を以てせなければならぬことを切言する。」

「本會議は飽くまでもデモクラシーの主義を固執する。改造されたる社會は、層一層、社會主義に徹底しなければ實現することはできない。それがデモクラシーの勝利の上に樹立せられ、自由主義の中に根ざしてゐなければ、到底恒久的な建設を遂げることは難いであらう。」

「デモクラシーを構成する諸制度――言論及著作の自由、集會の權利、一般的選擧權、議會に責任を負ふ政府、人民の希望に對する一般的協働と尊敬、團結の權利等――は又階級鬪爭を實行する手段を勞働階級に提供するものである。」

「本總會の意見にては、有効なる社會主義の發達は唯民主的法律の下に於てのみ可能なものであるから、人民の多數の贊同を得る見込のないやうな社會化の方法は、總て直に之を拋擲することが肝要である。」

「此意味に於て獨裁政治（ディクテーターシップ）は、それが勞働階級の少部分のみによつて支持されてゐる間は、他の何よりも一層危險なものである。かくの如き政體の避くべからざる結果として、勞働階級は內輪喧嘩のために其力を殺がれるに違ひない。而して其避くべからざる終局は、反動的勢力の獨裁政治となるに違ひない。」

此右翼案即ち主としてプロレタリヤの獨裁政治が社會主義の正當な手段としてのデモクラシーに違背するといふ論據によつて、ボルセビーキを非難する意味の決議案に贊成したのは、英、獨、露、匈、丁抹、勃牙利、瑞典、芬蘭、エストニヤ、アルメニヤ、レツトランド、ゼオルヂヤ、アルサス・ローレン、加奈陀、アルゼンタインの代表者の全部と、佛蘭西及伊太利兩國代表者の少數派と、墺太利代表者の半數であつて、議場の約四分の三を占めてゐた。然るに此決議案に飽く迄も反對したる少數意見を代表して、佛蘭西のロンゲエーと墺太利のアドラーの兩名によつて提出された左翼案は、必ずしも正面からプロレタリヤの獨裁政治を是認したものではなかつたけれども、露國メンセビーキ派の誹謗や、不正確な報道を根據として、ボルセビーキを排斥しやうとする多數派の狹量と輕卒とを責めたものであつ

た。左に其主要な辭句を摘錄しやう。

「デモクラシーかディクテータシップかといふ決議は最も重大な反對論の原因を成すものである。過去四年有半の間、受動的にも主動的にも、インターナショナルの活動を防げた人々、及インターナショナルの會合から逍避することを以て自己の義務と考へてゐた人々と同じ人々が今茲で、インターナショナルに避くべからざる障碍を增大するやうな行動を執るために、熱心に此會議を利用しやうと企てゝゐるのである。」

「吾等は露國ソビエット共和國に對して放たるゝ、あらゆる汚名に對して警戒すべきことを勞働階級に望む、吾等は未だ判斷を下すに十分な材料を有つてゐないのである。唯吾等が知り能ふ唯一の確實な事は、中歐諸國及聯合國の諸新聞や諸代辯人が、戰時中に相互に對して行つた所の恥づべき虛僞の宣傳を、今日尙繼續して行つてゐるといふこと之である。」

「吾等は茲に政治的手段に關する早まつた決議を通過することによつて、ブルジョア諸政府の謀略や、利己的讒誣の犧牲に供せられてはならない。」

「吾等は將來總ての國々の勞働階級の會合を困難ならしめるやうな決定に對して諸君の考慮を促す。吾等は階級的利益を自覺したる總ての國々の社會主義者及革命黨に、此インターナショナルの門戶を自由に開放せんことを希ふものである。」

右の左翼案に贊成したのは和蘭、諾威、愛蘭、西班牙の代表者全部と、佛蘭西及伊太利の多數派、墺太利の半數及一名の希臘代表者であつた。

右翼案は一面から見ると其決議文によつて知られる通り、露西亞のボルセビーキを以て、同國の勞働階級の多數(マジョリティー)を代表しない、單に少數共產黨の擅斷的勢力であるといふ見解から出たものである。此案を支持した英國のマクドナルドはかう論じた。

「少數黨(ミノリティー)の壓制は個人の自由を信ずる總ての社會主義者により、又個人の自由を自己の屬する國家內に於て保持することを欲する總ての人々によつて非難さるべきものである。……ボルセビーキの謳歌者は、歐洲に於ける過去の一切の革命を是認した。併しながら如何なる革命も、壓制の一方式から他方式への推移として適確に說明されるやうな狀態を發生するものであつてはならない筈である。自由と民主は共牢乎不變の目標でなくてはならない。自由を建設しないやうな革命は、社會主義を志す革命でもなければ、社會主義者が共責を負はなければならぬやうな革命でもない。」之に對して左翼を代表するロングエーは、不正確若しくは捏造されたる中傷的の報道を根據として勞農政府を攻擊するの危險を警告した後にかう言つた。「ボルセビ

ーキに對する非難は、將來に於ける各國勞働階級の結合を防害するものである。吾等は常に各國の階級意識を有する革命的社會主義者に對し、門戸を開放して置くことを希望する。……吾等はインターナショナルの精神に叛くやうな行動に對し、其罪過を分擔することを欲しない。」

併し右翼派も露國の內情を正確に調査するまでボルセビーキに對する態度の決定を留保して置くことは適當の措置と認めた。そのため一調査委員隊を露國に派遣すべき旨を其決議文中に挿入して之を可決したので、此意味に於て左翼派は其主張を容れられたものと見て差支なかつた。

尙此會議で本インターナショナルの組織更正を立案せしめるために、各加盟團體から二名宛の代表者を擧げて常任委員會をけることを決議し、ブランチング、ヘンダーソン、ユイスマン設の三名を共執行委員に選定した。

二　第三インターナショナルの創立

第二インターナショナルの復活と殆ど同時に第三インターナショナルが創設された。第三インターナショナル總會の招集通知は一九一九年一月二十四日にモスコウから無線電信を以て發せられたが、共通知の文面は第三インターナショナル創設の趣旨及第二インターナショナルに對する其關係を明にするために重要なドキユーメントであるから、左に其全文を譯出しやう。

「親愛なる仲間よ

下記の政黨及團體の信ずる所によれば、新しき革命的インターナショルの最初の總會を招集することは、絕對に必要なことである。戰時及革命中、舊い社會主義者及社會民主主義者の諸政黨及之に伴ふ所の第二インターナショナルが完全な失敗を演じたことは、今や隱れもない事實である。しかのみならず『中央派』と呼ばれてゐた元の社會民主々義者の中堅分子も亦革命的活動を行ふの力を有たぬことが明白になつた。玆に於てか眞の革命的インターナショナルなるものゝ輪郭は今や判然と認められるに至つた。

××××××××××××××××××××××××××××
×、××××××××××、『××××』×××××××
××、××××××××××××××××××××、××××××
××××××××××××、×××××××××××××××××
××××××××、××××××××××××××、××××××
×××××、×××××××××××××××××××××××

××××、××××、×××××××××××××××××、××××××××、——××××××××××××××××××、××。

吾等の考ふる所では、新インターナショナルは次に掲ぐる諸提案を綱領として之に準據しなければならぬ。而して此提案は獨逸のスパルタカス黨及露西亞の共産黨の綱領と一致するやうに起草されたものである。

目的及戰略

(一)今日は世界の資本主義組織の破綻及壞滅の時代である。若し資本主義が其妥協の餘地の軋轢ないのために崩壞しないならば、歐洲の文化は悉く滅亡するであらう。

(二)勞働階級の目前の仕事は、××××××××××××××××××。××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××。

(三)××××××××××××××××××××××(××××××××××××××××××××××××××)從つてそれは搾取階級を組織的に征服し且剝奪すべき手段たることを要する。

プロレタリヤ國家の典型は、全く形式的の平等によつて財政的寡頭政治を敷かうとする×××××××××××××××××××××××、××。××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××，又それは資本家の官僚政治でなくして、人民自身によつて創造された行政機關でなくてはならない。かくてこそ彼等は國の行政と社會主義建設の事業とに實際に參加することができるのである。××××××××××××××××××××。

(四)××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××。大軌模な産業及其中核を成してゐる銀行の社會化、土地所有權の剝奪、資本主義的農業生産の社會化、大商業の獨占、都市に於ける大家屋及地方城塞の公有、×××××××××××××、××××××××××××××××××××————是等は今日に於ける最も肝要なる事業である。

(五)内外の敵に對し社會主義革命を防衞し、且他國に於けるプロレタリヤの戰鬪を應援する目的を以て、×××××××××××完全に武器を剝奪し、××××××××なく武裝せしめる

ことが必要とされる。

(六)現下に於ける世界の形勢から見て、革命的プロレタリヤの各部面が極度に密接し、且社會主義革命が既に勝利を得て居る諸國が結合することを必要とする。

(七)闘爭の主たる方法はプロレタリヤたる民衆の活動に俟つ×××××、××××××××××、×××××××××××××××××××××××。

社會主義諸黨派に對する態度

(八)舊インターナショナルは分裂して主として三つの集團となつた。第一は公然たる社會的擁夾論者(ソーシャル・ショービニスト)で、彼等は一九一四年から一九一八年に至る帝國主義者の戰爭中、一貫して勞働階級をインターナショナル革命の下手人たらしめることによつて、ブルジョア階級を援助した輩である。第二はカウツキーを以て理論上の代辯者としてゐる所謂『中央派』なるもので、何等一定したる政策を有せず、時としては擬れもない裏切的分子をも抱擁してゐる變通自在の一集團である。而して第三のものは革命的左翼分子である。

(九)×××××××、××××××××、××××××××××××××××××、××××××××××××××××××。

『中央派』からは、革命的要素に富んだ部分を分離せしめるために、同派に對し峻烈な批評を加へ、其首領等の假面を引剝がしてやらなければならぬ。而して其進行の或時期に於て、『中央派』から革命的分子を明瞭に分離せしめることが、組織上絕對に必要である。

(十)上記の社會主義諸黨派に屬してゐなかつたもので、しかも×××××××××××××、原則としてソビエットの力の上に立脚してゐる革命的勞働運動の諸分子を打つて一團とすることが必要である。×××××××××、×××××××××××××××。

(十一)最後に、公然左翼革命運動に加擔するには至つてゐなくとも、漸次左傾すべき傾向を示してゐる勞働階級の諸團體を全部糾合することが肝要である。

(十二)實際問題として吾々は次に記す諸黨派、諸團體及諸傾向の代表者が、各々全權を有つて第三インターナショナル總會に參加することを希望する。蓋し是等は第三インターナショナルの主張全部を承認してゐる所の諸團體である。

(1)スパルタカス黨　(獨逸)
(2)共產黨(ボルセビーキ)　(露西亞)
(3)同　(墺太利)

(4) 同 (匈牙利)
(5) 同 (波蘭)
(6) 同 (芬蘭)
(7) 同 (エストニヤ)
(8) 同 (レットランド)
(9) 同 (リスアニヤ)
(10) 同 (白色露西亞)
(11) 同 (ウクライナ)
(12) 社會民主黨の革命的分子(チエツク)
(13) 社會民主黨『狹義派』 (勃牙利)
(14) 社會民主黨 (ルーマニヤ)
(15) 左翼社會民主黨 (セルビヤ)
(16) 左翼社會民主黨 (瑞典)
(17) 社會民主黨 (諾威)
(18) 『階級闘爭』團 (丁抹)
(19) 共產黨 (波蘭)
(20) 勞働黨の革命的分子 (白耳義)
(21) 根本的諸問題に就てローリオと意見を一にせる社會主義諸團體 (佛蘭西)
(22) 同上の勞働組合 (佛蘭西)

(23) 左翼社會民主黨 (瑞西)
(24) 社會黨 (伊太利)
(25) 社會黨中の左翼分子 (西班牙)
(26) 同 同 (葡萄牙)
(27) 社會黨(特にマクレアンの代表する一派)(英吉利)
(28) 社會主義勞働黨 (英吉利)
(29) I・W・W (英吉利)
(30) I・W (英吉利)
(31) ショップ・スチユアート運動の革命的分子(英吉利)
(32) 勞働組合の革命的分子 (愛蘭)
(33) 社會主義勞働黨 (米國)
(34) 社會黨の左翼分子(特にデブスに代表せらるゝ一派及社會主義宣傳同盟に代表せらるゝ一派)(米國)
(35) I・W・W (米國)
(36) I・W・W (濠洲)
(37) 勞働者國際產業同盟(W・I・I・U)(米國)
(38) ××××××××××××××× (日本)
(39) ミュンチエンベルグにより代表せらるゝ青年社會主義インターナショナル

(十三)第三インターナショナルの基礎は、同一の意見及綱領を有し、且全體として同一の戰略を用ひつゝある諸團體が歐洲各國に組織せられたる事實に存するものである，而して共筆頭には獨逸のスパルタカス及各國の共産黨を擧げることができる。

(十四)××××××××××××××××××。此機關は斷えず意志の疏通を圖り、共産主義インターナショナルの中心と成つて、一定の法式の下に共運動を指導する。併し一箇國内の運動の利害は、國際的革命全體としての一般的利害の下に屬すべきものである。

此機關の組織及代表の具體的形態は總會に於て決定する。

(十五)總會は共産主義インターナショナル第一總會と名けられるであらう。而て之に參加する各箇の團體が共支部を構成する。

マルクスとエンゲルスは以前理論上から「社會民主黨」といふ名稱が間違つてゐると考へたことがあつた。社會民主主義インターナショナルの破廉恥なる分裂は、唯共點からだけでも右の名稱の排斥を要求するものである。そして結局此大運動の中核は既に共産主義なる名稱を採用したる多數の黨派によつて構成されてゐる。

上記の說明を考慮に入れて、吾等は、共産主義インターナショナル總會の開催に當り、友愛的諸黨派及諸團體が、討議すべき題目を提案されんことを希望する。

これが第三インターナショナル總會の招集狀の全文である。

而して此招集狀に署名したのは左の人々であつた。

レニン、トロツキー(露西亞共産黨)
カルスキー(波蘭共産主義勞働黨)
ルードニアンスキー(匈牙利共産黨)
ドウダ(墺太利共産黨)
ロージン(レットランド共産黨)
シロラ(芬蘭共産黨)
ラロヴスキー(バルカン革命的社會民主聯合會)
ラインスタイン(米國社會主義勞働黨)

第三インターナショナル創立總會は、一九一九年三月二日から六日までモスコウに於て開催された。此會議に代表者を出席せしめた各國の團體及是等の諸團體に與へられた投票權の數は次の通りであつた。

(國名)	(團體名)	(投票權數)
アルメニヤ	共産黨	一
墺太利	同	三
エトトニヤ	同	一
芬蘭	同	三

獨逸	同	五
匈牙利	同	三
レツトランド	同	一
リスアニヤ	同	一
諸威	社會民主勞働黨	三
波蘭	共產黨	三
露西亞	同	五
瑞典	左翼社會黨	三
瑞西	社會民主黨	三
ウクライナ	共產黨	三
米國	社會主義勞働黨	五
バルカン	革命的社會民主聯合會	三
露西亞	獨逸殖民共產黨	一
同	東洋諸國民の共產主義團	一
—	左翼チムメルワルディアン(註)	五

(註) チムメルワルディアンとは一九一五年九月の瑞西チムメルワルド會議に於て、レーニン等と言動を共にしたる人々の一團をいふ。

右の外に、決議に參加する權限なしに、會議に參列した人々の國籍は左の諸國に亘つてゐた。

アゼルバイヤン、勃牙利、支那、チエツコ・スロヴキヤ、佛蘭西、ゼオルヂヤ、英吉利、和蘭、ユーゴスラビヤ、朝鮮、波斯、瑞西、トルキスタン、土耳其、米國

此會議に於て決議された宣言及綱領は三月十日にバルカンのラコヴスキー、露國のレニン、トロツキー、ジノビエフ及瑞西のプラツテンの名を以て公表せられた。此宣言は第三インターナショナル創立の趣旨を述べたもので、頗る長文のものであるが、其中の眼目たる辭句を拔萃すると次の通りである。

「共產黨がプロレタリヤ革命の大先達たるマルクス及エンゲルスによつて起草された宣言の形に於て、其綱領を明表してから、既に七十二年を經過した。…… 此期間共產主義は惡路を通過した。發達に續くに大衰退の時期を以てし、成功の後で非常な失敗を演じた。それにも拘らず下底の潮流は共產黨宣言に豫言された通りの道を進んで行つた。而して最後の決定的な戰ひの時期は、社會革命の使徒等が豫期し且希望したよりは遲れたけれども、併しそれは今や到來した。」

「吾々共產主義者は、歐羅巴、亞米利加及亞細亞の諸國に

於ける革命的プロレタリアの代表者として、モスコウのソビエットに集合し、吾々自身が七十二年前に表明された綱領の遵奉者であり又實行者であることを感じ且思ふ。今や勞働階級の實際的革命の經驗を綜合し、日和見黨（オツポチユニスト）や社會的愛國者（ソーシアル・ペートリオット）の有害な提携を此運動から排除し、依つて以て共産主義革命の完全なる勝利を確保し促進するために、純眞なる革命的プロレタリヤ諸團體の全部の力を糾合することが吾々の任務である。」

次に宣言書は戰前より戰後に至る各國の帝國主義及資本主義の罪過を指摘した後にかう言つてゐる。

「戰前、日和見黨は、社會主義の漸進と稱して、勞働者に溫和であるやうに說き勸めた。××××××、××××××××××××××××、××××××××××。而して今や再び彼等は、戰爭の恐るべき結果を耐え忍ぶがために、勞働者の克己自制を要求してゐる。若し是等の說教が勞働者を聽從せしめ得るものとするならば、資本主義は過去數代の形骸を拾收して復もや新たなる且一層嫌惡すべき形態を構成し、以て世界戰爭の再發を避くべからざるものとなるであらう。が、人類のために幸なるかな、それは最早不可能である。」

「從來資本主義的自由主義者によつて執拗に反對されてゐた經濟生活の國家的統制は今や實現されるに至つた。最早自由競爭やトラスト、シンヂケート及其他の經濟的怪物の支配へ復歸することは許されない。唯一つの疑問は、國家的生產の將來の支配者が、帝國主義者の國家であるか、或は勝利を占めたプロレタリヤの國家であるかといふことである。××××××、×××××、××××××、×××××××××××××××××、××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××、さもなくば、歐洲並に最も開化したる諸國の勞働階級が、彼等自身の掌中に、動搖し頹廢したる世界の經濟を握り、社會主義の基礎の上に之を再建すべきであるか、といふ問題である。」

「×××××××××××××××××××××××××××××××××、×××××有財産の權利も認めないで、只飢ゑたる民衆の必要を充さうとするのである。此目的のためにはあらゆる物と力

とを徴發し、一般的勞働義務を賦課し、産業上の訓練を施行するであらう。××××××、××××××、×、×××××××、××××××××××××××××××××××××××××××××××××。」

「全ブルジョア世界は共産主義を責むるに自由と政治的デモクラシーの破壞を以てする。×××××××。吾等は單にプロレタリヤが權力を握つた場合に、ブルジョア式デモクラシーを適用したのでは、高級な勞働階級のデモクラシーの諸條件と諸形態を創造することが、絕對に不可能であると論斷するだけである。」

「資本主義發達の本道から投出された總ての社會階級は、政治的デモクラシーの治下に於ては、唯名目上國政に參與することを許されてゐるばかりである。××××、×、××××××××××××××××××、×××××××××××××××××。」

×××、××××××××××××××

而し「最後に、過去に於けるインターナショナル運動の歷史を回顧し、第二インターナショナルは一九一四年の開戰と同時に死滅したものであつて、戰後に其復活を企畫してゐる連中は「偏狹、無節操にして革命的に去勢された」輩だと罵倒し、次の如き文章を以て此長宣言を結んでゐる。

「墮落したる御用社會主義諸黨派の無神經、僞善及腐敗を一蹴して、吾々第三インターナショナルを組織したる共産主義者等は、バボーフよりカール・リープクネヒト及ローザ・ルクセンブルグに至るまで、數代の革命時代に於ける英雄的努力と殉敎的最後の直接繼承者たることを以て自認する。……第三インターナショナルは公然たる民衆的活動のインターナショナルであり、×××××××××××××、行爲のインターナショナルである。社會主義者の批評は既に十分ブルジョアの世界秩序を陳腐ならしめてゐる。×××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××。吾々は萬國の勞働する男女が共産主義の大旆の下に團結せんことを要請する。此旗印の下に既に最初の大勝利は博されてゐる。」

「××××××××、×××××××××、×××××××、×××××××、×××××××××

××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××、×××××！」

「勞働者のソビエットの原則の下に、第三インターナショナルの旗幟の下に、××××××××××××××××××××××××、萬國のプロレタリヤよ、團結せよ！」

次に第三インターナショナルの綱領として發表されたものは、言ふまでもなく、主として當面の實行手段を說いたものであつて、先づ其前文の冒頭にかう述べてゐる。

「新しい時代が初つた！　資本主義の崩落、その內部の瓦解の時代が。××××××××××××××。」

「世界の資本主義は最後の決戰の準備をしてゐる。國際聯盟の擁護の下に、平和主義者の笛音商賣の大洪水の中で、ぐらついてゐる資本主義組織を立直し、××××××××××××××××××××××××××××××。××××××××××××××××、×××××××××××××××、××××××××××、且それを經濟的革命、實行の手段に供することが必要である。世界のプロレタリヤの最後の勝利によつて、自由人の眞の歷史が創造せられるのである。」

次に本文の第一節に「政權の獲得」と題して武斷的革命の方法を說き、第二節に『デモクラシーとデイクテーターシップ』と題して、政治組織を說明してゐる。其中の主要な辭句を左に摘錄しやう。

「プロレタリヤの國家は、總ての國家がさうであるやうに、××××××××。併しそれは血を以てする革命に抵抗するために、あらゆる手段を盡して必死に努力しつゝある勞働掠奪者の反噬に對して、それ自身を擁護し、反噬の持續を不可能ならしめるためのものである。×××××××××××、×××××××××××××××××××××、×××××××××××。×××××××××、××××××××××、×××××××××××××××××、×××××××××××、××××××××××、×××××××××××××。」

「所謂デモクラシーなるものはブルジョアのデモクラシーであつて、×××××××××××××××××××××、××××××『××』××××、×××××××××××××××、××××××

××××××××。實際に於ては相抗爭して調和することのできない目的を有する諸階級が對立する。而してブルジョアは數に於て極めて少數であるがために、勞働階級に對する其支配力を牢固にし、民衆の上にブルジョア階級の意思を遂行するために、××××××××××、『民意』なる美辭を用ゐたのである。然るにプロレタリヤは之に反して、人民の大多數を占むるがゆゑに、その大衆の組織とソビエットの機關を通じて、公々然と其階級の力を行使することができるのである。××××××××××××××××××、××××××××××××、×××××××××××××××××××××。」

「ブルジョアのデモクラシーと共議會制度とは、政治機關を立法と行政とに分割し、又議會に於ける代表者を人民が罷免することができないことになつてゐるがために、却つて民衆と國家との疎隔を增大した。××××××××××××××、罷免の權利を與へ、立法權と行政とを併合し、且諸種の評議會を活用することによつて、政府の諸機關と民衆とを結合する。しかのみならず、此結合はソビエットの選擧が專斷的な地理的區劃でなくして、生産事業の各單位を基礎として行はれるといふ事實によつて、一層緊密を加へるのである。」

次に綱領は『ブルジョア財産の沒收と生産の社會化』と題して次のやうに述べてゐる。

「××××××××、×××××××××（××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××）×××××××××、××××××××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××。」

「××××××××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××。ユートピヤンを製造する日和見黨は資本主義的經濟組織の改訂によつて社會化を猶豫しやうと企ててゐるけれども、それは唯瓦壞の行程を遲延し、全滅の危險を增大するに止まる。×××××××××××××××、××。」

「××××××××××××生産や交換の要具を決して分割するものではない。寧ろ反對に、生産力をもつと集中して、總ての生産を組織的な一系統の下に置くことを目

的とするものである。而して其第一着手として、先づ現代に於て生産を支配してゐる大銀行の社會化を行ひ、×××××××××××、政府によつて管理されてゐる一切の經濟的生活資料を統制し、總ての公營事業を移譲せしめ、シンヂケートやトラストによつて行はれてゐる生産事業を社會化し、資本の合同や集中の度合によつて技術的に實行可能ならしめてゐる一切の生産の部門を社會化し、農園を社會化して之を共同經營に改革する。」

「小事業は其必要の程度に應じて漸次之を合併せしめる。茲に力說して置かなければならぬことは、小財産は決して沒收しないし、又勞働の搾取者にあらざる財産所有者からは強制的に其所有を剝奪するやうなことをしないといふことである。××××××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××××××。又小地主や都會の小ブルジョアは、暴利的の資本主義や地主制度から經濟的束縛を解かれ、且重稅から免かれることができるであらう。(××××××××××)」

「分配の方面に於ては、××××××××××、生産品の精確な分配によつて商業を改造しなければならぬ。此目的のために次の諸方法を考慮すべきである。卸賣を行ふ營業の社會化、ブルジョアの國家及地方自治體に屬する一切の分配機關の統制、主要なる産業組合の管理、及上記諸組織を漸進的に合同して、生産品を合理的に分配することのできるやうに、之を組織的な一系統の下に構成すること。」

最後に綱領は「勝利の途」と題して、各國に於ける革命的プロレタリヤが協力して、ブルジョア國家の反動的勢力に反抗し、黄色インターナショナルの不徹底な態度を卻くべきことを切言してゐる。

三　第二インターナショナル常任委員會

一九一九年二月のベルン會議で選任された第二インターナショナルの常任委員會は、同會議が終了すると同時に、ベルンに於て最初の委員會を開き、ヴェルサイユの平和會議に對しベルン會議の決議を齎すべき代表者の人選を行ひ、且つ執行委員中へ佛蘭西右翼のレナウデル、左翼のロングェー、英吉利のマクドナルド、スチュアート・バンニングの四名を追加することを議定した。

同委員會の二度目の會合は同年四月二十六日にアムステルグ

ムに於て行はれた。此會合には十七箇國の代表者が集つたが、其中にはベルン會議に參加を拒んだ白耳義の代表者が初めて顏を交へてゐた。此時の論題は主として平和會議に關聯した領土及民族に關する問題であつたが、同時に次回のインターナショナル總會の期日を一九二〇年二月二日と定め、同總會に附議すべきインターナショナルの新綱領は執行委員に於て之を起草すべきことを議定した。

同委員會の三度目の會合は一九一九年の八月二日から九日までルチエルンに於て開かれた。此會合に加はつたのは英、佛、獨、和蘭、白耳義、露西亞（メンセビーキ）其他十九箇國の代表者であつた。墺內兩國の代表者は旅行中の故障によつて會議に間に合はず、伊太利及瑞西の社會黨は依然參加を拒んだ。

アーサー・ヘンダーソンが議長席に就て、開會の辭を述べたが、其中で、今や歐洲の勞働者は自亡救濟の手段として「直接行動」を是認せんとするの傾向ます〳〵著しきを加へつゝありと聲明し、歐洲に於ける失業及物資窮乏の慘狀を切言し、或は來るべき冬期に於て「憤怒と絕望との恐るべき大動亂」が勃發するかも測り難いと述べた。

此會議に於て議された問題は、平和條約の內容に對する批評と、第三インターナショナルに對する態度と、次回總會の準備とであつたが、最も議論の沸騰したのは、やはり對ボルセビーキの問題であつた。獨逸のベルンスタインや、白耳義のヴンダーベルドはプロレタリヤの獨裁政治を非難し、和蘭のトレルストラや、墺太利のアドラー等は其反對に立ち、英吉利のマクドナルドや、佛蘭西のカッシヤン等は、主義としては勞農露西亞の政體を是認しなかつたけれども、彼等に對する英佛政府の敵對的政策には強く反對した。併し大勢はベルンスタインやヴンダーベルドに左袒したことは言ふまでもない。

次回のインターナショナル總會は豫定の通り、翌年二月二日ゼネヴに招集することゝし、同總會に於て確定さるべき第二インターナショナルの新組織及新綱領案は、執行委員の起草した草案が承認された。

右の草案の冒頭には次の如く記されてゐた。

「インターナショナルの根本主義とする所左の如し。

(一)社會の資本主義的形態を廢し、政治的權力の掌握と生產及交換の要具の社會化換言すれば、資本主義的社會を集產主義的又は共產主義的社會に改造することに由りて、人類の完全なる自由を獲得することを目的とする勞働階級の政治的及經濟的組織。

(二)侵略主義及帝國主義と抗爭し、軍國主義と兵備との一

般的撤廢を贊襄し、眞の國際聯盟の實現を目的とし、總ての民族の自決權と、世界平和の維持とを期する勞働者の國際的團結及活動

(三)壓制されたる民衆及征服されたる人種の利益の代表及其防衞

右の根本主義は勞働階級の運動上、三つの形によつて表現せられてゐる。政治、産業及消費組合是である。是等は其發達の程度に於て各々等差があるけれども何れも、必要であり、又其最後の目的は共通である。是等は自主的團體としてます〳〵其國家的及國際的結合を强固にし、同一の國際的及革命的精神を把持して、共に一大世界運動の一部面として、世界平和の維持のために、聯合活動をなすべき機會を捕捉すべきものである。」

然るに其年の十二月二十日に至り、常任委員會の執行委員は倫敦に會合して、翌年の二月二日に開催すべき豫定であつたインターナショナル總會を七月三十一日まで延期することに決定した。此決定は其年の春以來、第二第三インターナショナルの對立によつて生じたる新形勢に餘儀なくされた物であつて、詳しく言へば、第二インターナショナルの復活と殆ど同時に創立された第三インターナショナルが、主義に於て又戰略に於て、到底第二インターナショナルと相容れ難い立場に在ることを極めて露骨に表明したゝめに、インターナショナル運動は玆に一大破裂を生じ、各國の社會主義團體はいづれも動搖して第二に就く物と第三に趨るものとに分裂し、或は其いづれにも不滿を感じて別に折衷的の一分派を造らうとするものもあつて、各國とも甚しき混亂狀態に陷つたからである。從つて此混亂の中に第二インターナショナル總會を開會する時には、却て參列者を少くし、總會を失敗に了らしめて第二インターナショナルの立場を不利ならしめる虞れが十分あつた。尤も一面から見れば、總會の延期は第三インターナショナルの優勢に怖ぢたる卑怯の振舞であつて、マクドナルドの如きは、延期は第二インターナショナルの滅亡を自認するに等しいと言つて極力之に反對したけれども、大勢は延期説に傾いて、終にさう決定したのである。

四　第二インターナショナルの再建

曩のルチエルン會議で準備された第二インターナショナルの組織改訂及新綱領決定のために開催する總會は、『勞働及社會主義者インターナショナル』(The Labour and Socialist International)の名を以て、一九二〇年七月三十一日から八月六日までゼネヴに於て開催された。

此總會に代表者を派遣した社會黨及勞働黨は英、佛、白、獨、匈、伊、露、瑞西、丁抹、和蘭、瑞典、波蘭、リスアニヤ、ゼオルヂヤ、ルーマニヤ、濠洲及新西蘭の十七箇國に屬してゐたが、其中で露西亞、墺太利、波蘭、リスアニヤ及新西蘭の五箇國代表者は豫め會議の決議に束縛されないといふ條件を附して參加した。又右の十七箇國代表者中、各自國に於ける勞働組合又は社會主義者の大部分を網羅して居る主力團體を代表して來た者は僅に英吉利、白耳義、和蘭、丁抹、瑞典及ゼオルヂヤの六箇國のみで、其中英國からは勞働黨を代表して、アダムソン、トム・ショウ、メリー・マッカーサー、スノーデン、ハッチンソン、ラムゼー・マクドナルド、シドニー・ウエッブ、モリソン、マックレアン、ジョウェット、ブロムレー。トレード・ユニオン・コングレスを代表して、ゼー・エチ・トーマス、ゴスリング、ソーン。フエービヤン協會を代表してウエッブ夫人、フェヤフォーイルド等の錚々たる幹部が打揃つて出かけた。又白耳義からは未だ司法大臣の職に在つたヴンダーベルドが同志と共に之に臨んだ。

獨逸からは多數派社會民主黨を代表して、ミュラー、ベルンスタイン、シヤイデマン、ウエルス、モルケンブール、スタムプフェル、ブラウン、ウーエ等の領袖が參列し、佛蘭西からはアウプリオ、グランニエー、ゼローム、ルヴィー、ローヂエー等、伊太利からはヴェルセロニ、スーシ、ジオヴンニ等、露西亞からはメンセビーキ派のガブロンスキー、ルバノウヰッチ、ルーザノフ、スコームリン等が參列した。

今本總會に參加した各國の勞働及社會主義團體の實勢力を簡單に表示するために、同會議に於て割當てられた決議投票權の數を比較すると左の通りである。

英吉利	三〇
佛蘭西	三
白耳義	二五
獨逸	二〇
匈牙利	一〇
伊太利	四
露西亞	一五
瑞西	三
丁抹	一〇
和蘭	一〇
瑞典	一五
波蘭	一〇
リスアニヤ	四

濠洲　一五
新西蘭　五

ゼネヴ總會に於て決議された事項中、最も重要なる物は、社會化と社會主義の政治組織に關する其綱領であつて、第二インターナショナルの社會改造に關する主張の根本義は之によつて明白にされた。今左に其全文を譯出しやう。

「社會化」

「吾人の所謂社會化とは、民衆の生活資料を充足するに必要缺くべからざる總ての產業と奉仕(サーヴィス)とを、資本家の所有及管理から社會の所有及管理に變形すること、全く私人の利益を目的として行はるゝ浪費多き生產及分配を、最大可能の貨益を目的とするものに置換へること、及其の生產者の大衆が私人の所有權の下に於てする經濟的奉仕を、作業に從事する人々が一般的に共管理に參與するやうな方法に變形することを意味するのである。

資本主義を以てする產業の獨占的支配の繼續したる且迅速なる發達は、あらゆる生活必需品の價格を左右する私的所有者の力を增大し、延ゐて消費者を絕望に陷れる。他方に於て團結したる勞働者は、彼等を隸屬的地位に据置かうとするやうな生產組織の存續に反對してゐるけれども、彼等は實際其生活標準を向上させることができない。玆に於て資本主義は堪ふべからざるものとなり、社會化に依る產業の改造は日日に緊要なものとなつて行くのである。

社會化は各國に於ける事情の許す範圍に於て、一より他に、徐々として進展すべきものである。個人の營利的企業は社會主義者に取つて如何に嫌惡すべきものであつても、より以上の有効な形態に其組織を改造することのできる準備の調子までは、濫に之を打壞すことを避けなければならない。かくの如き社會化の漸進的順序からして、土地や資本の私有權を無賠償に沒收することは原則として之を行はない。それは只に特定の個人に苦痛を與へることが不公正だといふ理由からばかりでなく、沒收を行つたゝめに、社會化を即時に實行することのできなかつた他の產業上に於て、資本家の企業を防害することになるからでゐる。賠償に要する資金は私有財產に對する課稅(資本稅、所得稅及相續稅を含む)及相續制限によつて之を調達する。

經濟生活善く發達し、都市に居住する者の多數を占むる社會に在りては、社會化は主として次の三つの形態を以て行はれる。國家的(ナショナル)、地方的(ミュニシパル)及產業組合的(コーペラチーヴ)之である。

例へば、土地の如きは、農業行政(農民耕作地の維持保

の方法を含む）の如何を問はず、又其所在の何處たるを問はず、必ず國有たるべき物である。國家的必要の顯著なる諸產業、例へば鐵道、發電所及鑛山の如きも亦國有たることを要する。併しながら產業及奉仕の多數、例へば水及瓦斯の供給電氣の配給はいふに及ばず、食物、被服、住宅等の如きも亦、地方自治體（ミユニシパリチー）若しくは其他の地方公務署（ローカルオーソリチー）又は是等のもの丶聯合體の手に委ねられる。若干の國に在りては、各種の家庭用品の生產及分配は、大部分之を產業組合の事業に屬せしめる。

社會化を行ふことのできる程度に、未だ統一の狀態（コンセントレーション）に達してゐない產業、並に他の理由によつて卽座に社會化を實行することのできない產業は之を社會の監督（コントロール）の下に置いて、其生產及分配に關する經濟及改良、價格の決定等に干與し且豫定せられたる雇傭條件の實行を監視する。

社會主義者の社會の特質たる個人の自由を擴大するの方法として、留意すべき重要なる事項は、社會化の原理を採用したからといつて、個々の農民が國有の土地から農產物を收得すること、或は獨立したる手工職人や、美術家や、精神的職業に從事する人々が、自己の計算に於て營業することを決して排斥するものではない——彼等が常に他人の勞働を搾取しない限りは——といふこと之である。他方に於て、社會化の原理は、個人又はあらゆる種類の個人の團體が、天然の利源又は大軌模なる基本的產業の生產要具を所有することを排斥し、同時に又彼等が經營する產業に於て、個人又は集團の上に獨裁權を行使することを排斥するものである。

商品の價格に對する監督權の行使及社會化されたる產業に於て終始必要とする所の資本の供給は、社會全體としての仕事である。

社會化產業の經營。——社會化に關し最大必要の原則は、監督（コントロール）と經營（アドミニストレーション）とを區別せなければならぬといふことである、監督は一般投票により選擧された國民議會によつて行はれる。各產業及奉仕の經營機關は、政治上の諸官廳とは判然區分された特殊のものでなくてはならぬ。

國家的產業。——各產業及奉仕は、それ〲特種の事情に相當する機關を必要とするであらうが、普通の形態としては、一產業又は一奉仕每に左記の機關を設けなければならぬ。

（イ）一つの全國的機關。これは次の三種の代表者を以て組織する。

（一）當該產業に從事する勞働者

（二）幹部職員（マネージメント）（技術家を含む）

(三)全體としての社會

ロ)必要と考へられた所では、適當な地理的區劃内に於ける地方協議會(ヂストリクト・カウンシル)。これは右と類似の組織による。

ハ)各工場、鑛山又は其他の事業所に於ける工場委員會(ワークス・コンミッチー)。

各國家的産業毎に、一方に於ては幹部職員、他方に於ては當該産業又は奉仕に關係する各種の職業(ヴオケーション)との間に、團體交渉のためにする個別的の機關が設けられる。

從つて、勞働組合たると、一つの專門團體(プロフエッショナル・アツソシエーション)たるを問はず、獨立して組織されたる各種の職業毎に、一つ宛の聯合會議(ジョイント・ボード)を必要とする。各聯合會議は關係ある幹部職員の代表者と、勞働組合又は專門團體の代表者との同數を以て組織すべきである。

同盟罷業即ち團結して就業することを拒むこととの權利は、自由と離るべからざるものであつて、如何なる男女に對しても、之を拒むことはできない。それは最早營利的な資本家に抵抗するための問題ではなくて、單に社會全體から公正なる雇傭條件と適當なる生活標準を與へられんがためであるから、全體としての社會の輿論が之に對する判決として認められるであらうと豫想される。

地方的産業。――地方公務署によつて經營される各公共團(コンミュニチー)體との産業及奉仕の大部分は、數箇の地方に於ける一般投票により選擧される合議機關(カウンシル)によつて指導せられ、肉體的及精神的勞働者の代表者等をして、彼等自身の關係して居る仕事の經營に參與せしめることにする。地方的産業及奉仕の經營には、國家的産業と同樣の方法を以て、團體交渉のためにする聯合會議の機關が設けられる。」

次に社會主義の政治組織に關する決議の全文は左の通りである。

「社會主義の政治組織」

「資本主義組織の漸進的崩壞は、戰時中次第に其傾向を表はし、戰後の平和時代に入つて、一層其度を高め來つたがゆゑに、勞働が社會上の實力を養成しなければならぬ必要はます〳〵加つて來た。茲に所謂勞働とは、必ずしも肉體的作業を爲す賃金取得者のみでなく、總ての種類の理智的勞働者、獨立の手工職人、農耕從事者をも含むのであつて、一口に言へば、あらゆる種類の有用品の生産に對し、自己の勤勞を以て協働する所の總ての人々を意味するのである

(一)勞働階級が十分團結し、且其所持する力を如何にしに行使すべきかを會得してゐることは、彼等の實力養成に伴ふ根本的な一要件である。

(二)本總會は暴行(ヴイオレンス)並に一切の恐怖主義(テロリズム)を嫌忌するけれども、吾人の目的は、勞働が其產業的及政治的實力を行使せずしては、到底達成することのできないものであることを認めてゐる。××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××。それと同時に本總會は、產業上の同盟罷業が自働的に政治上の革命に變態すべき傾向を、餘り强くは非難することのできいなものであると考へる。

(三)××××××、×××××××××××××××××××××××。勞働政府の主たる事業は、立法及行政の根本基礎にして、民主主義(デモクラシー)と社會化(ソシアリゼーション)とを採用することである。

社會主義は其政治組織を獨裁主義(ディクテーターシップ)の上に置いてはならぬ。決して民主主義を屈伏すべきでない、否、反對に、其歷史的使命は民主主義を完成せんとするに在るのである。勞働の、勞働組合の、產業組合の活動の全努力は、政治界に於ける其活動と等しく、產業的社會の必要に多々益々順應することのできる樣な民主的組織を確立し、以て社會の價値をもつと完全にもつと高くならしめるやうな方面に絕えず振向けらるべきものである。

現今民主主義を保持してゐるのは、主として勞働の力である。社會主義者は、少數の朋黨が、其特權的地位を濫用して、一般民衆の自由を無視することを許さない。過去の諸革命の顯著なる傳說に鼓吹されて、社會主義者は毅然として斯の如き攻擊に抵抗するの用意を有する。

(四)社會主義議會の選擧權は一般的であつて、男女は絕對に同等であり、又人種、宗教、職業、政派に據つて何等の除外例をも設くべきでない。議會の最高の任務は、社會全體としての立場から、一切の人民の向上心と願望とを代表することにある。又それは內外からの侵害に對する防禦を掌るであらう。又それは社會の財產と財政との管理に當るであらう。

議會は法律を造り、公共の事務を取扱ふ。各省を統轄する諸大臣は議會の議員によつて互選される。國民の政府は國民の執行委員となるであらう。

併しながら議會は、社會生活の各方面に携はる人々をして、できるだけ多く其經營に參與することを得せしむるために、後に述ぶるが如き社會の他の諸機關の何れに對しても、特別なる權能及義務を代行せしめることが自由にできる。かくの如くにして議會は、特別の公務機關に消費者の代表者を參加せしめることによつて、費消者としての一般公衆の利益

を擁護することができるのみならず、將來に於ける社會全體としての利益も亦之によつて擁護することができるであらう。

(五)社會政策の一般方針を決定し、且之に關する法律を制定することも亦議會の任務である。議會は社會化の原則を如何なる産業及奉仕に、如何なる條件を以て、適用すべきかを決定する。議會は又最高の財政管理權を有し、且新規及追加の資本金の割當を定め、價格に對して最後の決定權を行使する。

(六)社會の生産的生活の發達及擴張の大部分は、總ての健康體の者の從事する生産的業務の種類に應じて組織される種々なる團體によつて行はれるであらう。從つて箇々の産業又は奉仕に從事する總ての種類の肉體的及精神的勞働者の代表者をして、經營又は奉仕に參與せしむるがために、下に述ぶるが如き方法によつて、相當の規定を設けることが必要である。同時に、手で働く者又は頭で働く者の各職業團(ヴオケーシヨン)は、其成員が如何なる産業又は奉仕に分散してゐやうとも、彼等の作業條件を彼等自ら定めることを希望するに違ひない。そこで各職業從業者は各々專門の團體を組織して、此團體に對し議會から作業條件の規定研究若しくは專門教育に關する職能を委任することができるやうにしたい。

(七)各種の産業及び奉仕に從事する人々が、相團結して成つた諸組織は、それが勞働組合であらうとも又專門團體であらうとも、將來に於ける社會的及經濟的生活の基本となるべきものである。

議會の外に、各業務(トレード)に屬する人々が任意に相寄つて組織することのできる諸産業及諸專門(プロフエツシヨン)の種々なる團體の代表者から成り立つ所の、國民産業協議會(ナシヨナル・インダストリアル・カウンシル)を設けることが必要であらう。此國民産業協議會は自由に討論し、批評し、研究し、提案し、且其決定したる報告を議會に提出することができる。議會は何時にても國民産業協議會に對し、産業全體に適用すべき法案又は一法律の施行規則の起草を委任することができる。

五　第三インターナショナルの第二回總會

第三インターナショナルの第二回總會は、一九二〇年の七月十九日から八月七日までペトログラードで開催された。此會議に參列したものは總數二百十八名で、内決議權を有する者百六十七名、單に議事にのみ參加した者五十一名で、其國籍及所屬黨派を示すと次の通りである。

一、決議權を有した者

(國名)	(黨派名)	(參列員數)
露西亞	共產黨	六五
芬蘭	共產黨	六
瑞典	左翼社會民主黨	二
諾威	勞働黨	八
同	青年同盟	二
丁抹	共產主義教師俱樂部	一
同	左翼社會黨	一
和蘭	共產黨	二
獨逸	共產黨(スパルタカス)	五
同	共產主義青年黨	一
墺太利	共產黨	四
波蘭	共產黨	一
匈牙利	共產黨	二
東ガリチヤ	共產黨	三
チエッコ・スローヴキヤ	左翼社會民主黨	二
同	共產黨	一
瑞西	共產黨	二
同	左翼社會民主黨	二
同	青年同盟	一
伊太利	社會黨	三
同	社會主義青年聯合會	一
ユーゴスラブ	共產黨	一
勃牙利	共產黨	三
ゼオルチヤ	共產黨	五
同	青年同盟	一
英吉利	I・W・W	一
同	英國社會黨	二
同	ショップ・スチュアート	三
白耳義	｜	一
佛蘭西	社會黨	二
同	青年同盟	二
同	第三インターナショナル委員	三
西班牙	國民勞働聯合會	一
土耳其	共產黨	三
リスアニヤ	共產黨	二
レットランド	共產黨	三
エストランド	共產黨	二
アルメニヤ	共產黨	二
アゼルバイヤン	共產黨	一

亞米利加	共産主義勞働黨	二
同	共産黨	二
同	獨立社會主義青年同盟	一
同	｜	一
メキシコ	共産黨	二
蘭領印度	共産黨	一
同	｜	一
朝鮮	共産黨	一
波斯	共産黨	一
｜	共産主義青年インターナショナル	二

二、單に議事に參加した者

露西亞	共産黨	一
同	革命共産主義黨	二
同	｜	二
芬蘭	社會主義勞働黨	三
獨逸	獨立社會民主黨	五
同	サンヂカリスト	一
同	｜	一
墺太利	｜	一
チェッコ・スロヴァキヤ	共産黨	二

伊太利	社會黨	五
英吉利	國民勞働青年黨	一
愛蘭	勞働黨	一
同	I・W・W	一
同	共産黨	二
同	｜	一
佛蘭西	共産黨	一
同	社會黨	二
レットランド	共産黨	二
エストランド	獨立社會黨	一
亞米利加	｜	一
メキシコ	｜	一
濠洲	共産黨	一
同	I・W・W	一
印度	｜	二
波斯	共産黨	二
｜	共産主義青年インターナショナル	一
｜	第三インターナショナル執行委員	四
支那	勞働黨	二
プハラ	共産黨	一

此總會を通過した宣言書は五節に分れてゐる。第一節は『ヴェルサイユ以後の國際關係』と題して、其冒頭にから述べてある。

「全世界のブルジョアは過去を顧みて失望落膽してゐる。內外政治關係のあらゆる基礎は崩壞し或は動搖してゐる。『明日』は險惡なる脅威として搾取者の世界を襲うてゐる。帝國主義的戰爭は舊き聯合の組織と現在の保證とを根本的に破壞して、國際的の勢力均衡と武裝的平和とは泥土に塗れた。而してヴェルサイユの平和は之に代はるべき何等新しき勢力均衡をも創造することができなかつた。」

かくて宣言書は戰役に於ける各國の政治的狀況を順次論評した後に、から結論してゐる。

「官僚的、國家的、國民的に開化したブルジョア歐洲の、戰爭及ヴェルサイユ平和以後に於ける形勢は、恰も一箇の迷宮に比すべきものである。小國の人爲的分割は、彼等を國境に於て經濟的に窒息せしめ、分裂せしめ、以て海港や、土地や、無益なる小都市のために戰爭せしめてゐる。彼等は大國の保護を求める。しかも大國間の抗爭は日に日に再燃しつゝある。伊太利は佛蘭西に對して敵意を挿み、獨逸の擡頭が可能となつた場合に、佛蘭西に對して獨逸を庇護しやうと目論見てゐる。佛蘭西は英國に對する嫉妬のために毒せられ、自國の收入を保有するために、新歐洲に四方から火を放たうと準備してゐる。英吉利は佛蘭西の援助を得て歐洲を渾沌たる疲弊狀態に据置き、自由貿易によつて亞米利加に對抗する世界的行動を實施しやうとしてゐる。北米合衆國は一九二五年までは日本が東部シベリヤを占領することに同意し、英國が其期限に先つて米國と雌雄を決しやうと決心しない限りは、その間に英國を凌駕するだけの艦隊を建造するつもりでゐる。」

「歐羅巴、亞米利加、亞細亞、亞弗利加及濠洲の勞働者及農民よ、汝等は既に一千萬の死者と二千萬の負傷者及不具者を犧牲に供した。しかも汝等はかゝる代價を拂つて何を得たかをすこしも知らない。」

宣言書の第二節は『經濟狀況』と題せられ、其末尾に次のやうに記されてゐる。

「資本主義の版圖の上には何等の救濟も存在しない。帝國主義の政治は危機を防遏しないで、却て現存物資の損耗によつて、危機を誘發するものである。」

「燃料及石灰配給の問題は一面の國際問題であつて、專ら計畫せられたる一般的社會主義的生産の基本の上に於てのみ解

決し得べきものである。」

「國債は廢棄されなければならぬ。勞働と其果實は、世界の金力政治に對する奇怪なる貢納から解放されなければならぬ而して金力政治は顚覆されなければならぬ。世界經濟を支離滅裂たらしめる××の障壁は撤廢されなければならぬ。聯合國の帝國主義者の最高經濟會議は、人類の一切の經濟的資源の集中的利用のために、世界のプロレタリヤの最高經濟會議に席を讓らなければならぬ。」

「帝國主義は亡ぶべきである。それによつて人類は再生することができるであらう。」

宣言書の第三節は『戰後に於けるブルジョア秩序』と題して、各國に於ける階級鬪爭の現勢を論評した後に次のやうに結論してゐる。

「階級としての勞働團體の反抗を緩和することゝ、議會制度による改革と、漸進的社會化と、國民的統一とのプログラムが、ブルジョア秩序の看板であつて、是等は悲劇的な道化芝居として、戰爭から産み出されたものである。」

「ブルジョア階級は改革によつてプロレタリヤと和睦しやうといふ考を棄てた。彼等は少しばかりの贈物によつて將に亡びんとする少數の貴族たちを墮落せしめると共に、××××××××××××××××××××××××××××××××。」

「×××××××××、××××××××××××ー×××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××××××。」

宣言書の第四節は『ソビエット露西亞』と題して、勞農政治の××を宣傳してゐる。而して第五節は「プロレタリヤ革命と共産主義インターナショナル」と題し、先づ冒頭に次の如く述べてゐる。

「資本主義は人類の大多數をプロレタリヤたらしめた。帝國主義は是等の民衆の勢力均衡を破つて、彼等を革命運動に從事せしめるに至つた。民衆の思想は最近に一變した。議會制度と勞働組合の時代に於て、民衆として見られてゐた人々は、今や僅に上層の一部たるに過ぎなくなつた。××。」

そして本節の末尾はかう記されてゐる。

「×××××××××××、××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××、×××、×××××、××

××××××××××××××××××。××××××××
××××××××××、×××××、××××××××××
××××××××××××××××××。××××××××
××××××××××××××××××、××××××××
××、××××××××××××××××××××××××
××。共産主義インターナショナルは、或團體が其綱領の中に確にプロレタリアの獨裁政治を承認してゐても、それが歴史的の危機を平和的に解決することを豫定する政策を取つてゐるものである限りは、之を加盟せしめることを欲しない。協議會制度（レーテシステム）（筆者曰く、ソビエットの形態に於てするプロレタリアの獨裁を意味す）の單なる承認だけでは何等の問題も解放されない。協議會統制（レーテヘルシャーフト）の組織は何等不思議な能力を有つてゐるわけではない。×××××××××××××××××
×××××××。×××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××。從つて協議會組織（レーテオルガニザチオン）は目下プロレタリヤの掌中に握るべき何より大事な武器として選擇されるのである。」

「×××××××××××××、××××××××××××
××××××××××××、××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××、×
××××××××××××××××××。」

「×××××××××××××××××××××××、×
×××××××××××××××××。それは全勞働階級としての外に、何等他の目的も活動も有たないものである。共一小部分が、全勞働階級の特別の模範たらんことを希ふが如き僭越は、共産主義インターナショナルの精神に遠ざかつてゐるのみならず、寧ろその精神に叛くものである。」

「第二インターナショナルの擁護の下に、階級組織及闘爭の方法が殆ど皆適法（レガール）であつた時代に於ては、彼等はブルジョアの管理と指導との下に最後の段終を遂げ、ブルジョアの改革的代理人は革命的階級を檢束した。×××××××××××
×××××××××××××××、×××××××××××
×××××××××××××××、それによつてプロレタリヤの前途に唯一の目的を樹立する。××××××××××
×××××××××××××××××××××。」

かくて宣言書は次の如き辭句を以て結ばれてゐる。

共産主義は「××××××指導者として、下層の群集の組織者として、勞働組合の理事者として、民衆會議（マッセンフェルザムルング）若しくは代議士に對する煽動家として、消費組合員若しくは要塞（バリカーデン）の戰士（ケムプフアー）として其全力を竭すと同時に、共産黨の訓練ある黨員

であり、××××××××××、××××××××××××××、×××××××、××××××、×××××、×××××××××××××××××××××。而して又プロレタリヤ革命の最も献身的な兵士であり、新社會の熱心な豫言者でなくてはならない。」

「男女勞働者諸君よ！　此地上には、其下に戰ひ、其下に死するに値ひする唯一の軍旗がある。××××××××××××××××××。」



亞米利加文明の思想的檢討

ドクトル・オブ・フイロソフイー
立教大學教授　小島茂雄

一

亞米利加合衆國は確かに國としては新しいが、思想的には歐洲の諸大國同様に、又英國同様に、古い。若い國であるが、頭の勝ち過ぎた國である。謂はゞ、福助見たやうなものだ。而して亞米利加の頭はマサチュセッツ州である。

七十四人の男と二十四人の女とがメイフラワー號に乘つて、三ケ月半の難航海の後、辛くも上陸したのが今日のマサチュセッツ州で、時は千六百二十年十二月二十一日であつた。彼等は後世ピルグリム・ファーザースと呼ばるゝ善男善女の一團で、英國國教の束縛を脱して、新天地に清教的國家を建設せむとして移住して來たものである。清教徒は、名目からいふと、パーカー大監督がエリザベス女皇の要求で英國國教教會の憲法を起草した時に起因するものであるが、實はそれ以前遙かに遠くヰクリッフ等の宗教改革者の影響に負ふところが多いことは明かな事實である。軈て英國國教内に舊教的色彩が一時濃厚になつて來た時、彼等は自らの信仰中のカルヴィン主義を強調した。故に清教徒の信仰は歐洲大陸に於ける十六世紀の宗教改革にまで遡るものと謂はねばならぬ。ピルグリム・ファーザースは勿論のこと、その後千六百二十九年に移住して來た一團も同じく清教徒で、彼等がマサチュセッツの名の下に合同したのは千六百九十一年であつた。

かくの如く亞米利加合衆國最初の移住民は頭の可なりに勝ち過ぎてるもので、この頭を驅つて嚴寒の風雪を忍ばしめ、亞米利加印度人と戰はしめ、徒手荒野を拓かしめた情熱は確かに形而上學的であつた。これマサチュセッツ州が亞米利加の頭で、而してその頭が福助見たやうに大きい所以である。

二

ボストン市郊外ケムブリッジにあるハーヴァード大學は正さ

にマサチュセッツを亞米利加の頭とすれば、その大腦部である。初代清教徒はこの大學の中に自らの信仰を傳へた。そこでハーヴァードは北米新開地の一大學に過ぎないが、清教徒の齎らした十六世紀宗教改革の新教的遺産を豐かに繼承してゐる點で、歐羅巴大學の如何なるものに比しても思想的には新參者だとは言ひ得ない。

何をか新教的遺産と言ふか。略言すれば、それは「神」と「自由」と「永生」との稱呼をば單に形式的に舊教から因襲するが、その内容を革命的に變改することである。例へば、獨逸の三哲人を見よ。カントはパイエティストであつた。フィヒテはカルヴィニストであつた。ヘーゲルはルッテル主義者であつた。如何に彼等が「神」と「自由」と「永生」とに就いて褸々數千萬言を費したかを見よ。併も彼等の神は天地宇宙の創造主ではなくて彼等の「我」であつた。彼等の自由は神の法治下に人間の享有する自由ではなくて、彼等の「我」の他より何等の掣肘を受けざる自由であつた。彼等の永生は神が罪人(つみびと)に賜ふ恩寵ではなくて、彼等の「我」の當然觀念的に享樂する永生であつた。則ち、文藝復興期(ルネッサンス)に發見せられた「我」はカントとフィヒテとヘーゲルとの三體系を經て完全に形而上學化或は神化せられたのである。而してこの「我」が宗教改革に進展した時に、それは形式的には「神」と「自由」と「永生」とに於ける信仰を告白したけれども、實質的には「我」以外の權威を全く無視して、羅馬法王を彈劾し、聖書の版權と解釋權とを教會より褫奪し、「聖書(バイブル)」をして「我(エゴー)」に奉仕せしめたのである。

人或は私の如上の新教主義概觀を目して、これ新教主義の寫眞にあらずして漫畫だと言ふかも知れぬ。然り、概觀と言ふ以上はスケッチである。而してスケッチである以上精巧な寫眞は到底出來ない、寧ろその特異點を摘出して漫畫を描くより他に道がない。この場合、吾人は鉛筆の先で細かに修飾したのつぺり然たるフォトグラフを眺めるよりも、線の太い筆觸の生々したカリケチャーを見る方が遙かに優つてる。そこで私は敢へて言ふ、亞米利加初代の清教徒移住民が荒野を開拓して建てた教會堂の聖所に祀つたものは經典的の意味の神でも自由でも永生でもなくて實に「我」の神化(アポセオシス)であつたと。又言ふ、清教徒の傳統を有するハーヴァード大學の哲學講座に祀られたものは古典的の意味の神でも自由でも永生でもなくて實に「我」の絕對化形而上學化であつたと。

三

ハーヴァード大學哲學講座の歷史に特筆大書せらるべきもの

はロイスとジェームズとの二教授である。

ロイスは價値の哲學を英國の新ヘーゲル派の思想に結合し、これに更に一層强固な思辨的基礎を與へたものとして、普通の哲學史家によつて評傳せられてゐるが、こゝでは彼が「神」「自由」「永生」等の大問題を回避しなかつた勇氣を買つてやつて、併も猶彼が終ひに一個の「我」の超絶論者であつたことを遠慮なく肯定して置けば足りるのである。

由來「我」は未だ體現も實現もせられてゐない天才であるが故に、物質と接觸する時に、物質の抵抗に出會する時に、始めて自らの存在を感知するものである。從つて「我」の超絶論の完成するところには、唯物史觀が發達し、國家の物質的繁榮論が傾聽せらるゝのである。これ獨逸にフィヒテの獨逸使命論(Reden an den Deutschen)とヘーゲルの獨逸文化論のある所以である、又ヘーゲル門下にフォイエルバッハ等一派の唯物論がある所以である、更にその感化の下にマルクス一派の唯物論的經濟史觀のある所以である。かくの如くして獨逸では新理想主義者たるオイケンと唯物論的一元論者たるヘッケルとが同じイエナ大學で仲よく哲學の講義が出來たのである。而して、恐くべし、吾人はこれと全く同一現象を亞米利加に見るのである。則ち、同じハーヴァード大學に「我」の超絶論者たるロイスと實際主義者(プラグマティスト)たるジェームズとは共に哲學の講座を持つて、亞米利加初代移住民の清教徒的信仰の傳統に忠勤を抽んづることが出來た。

清教徒が遙かに海を越えて舊世界から新世界に持つて來た新教的遺產の一面にロイスの「我」の超絶論に進展する一面のあることは旣に言つた通りであるが、他の一面には「我」の目覺めが經濟學上の所謂自由放任主義を養成し、又人々をして敎會權威を貶して地上の幸福を求めしむる結果金錢に愛着せしめ且重商主義に陷らしめた。清教徒移住民は、少くとも二代目頃から、自らの意志を自然世界に働きかけて直ちに報酬を得る經驗を重ねてる間に、一方には「我」の本質たる意志を强說する超絶論に向ひ、他方には實際に働きかけて報酬を得ずには置かないといふ實際主義に轉じたのである。而して總て前者はロイスに、後者はジェームズに、各々雄辯なる代言者を見出すことになつたのである。

四

プラグマティズムの眞理論は亞米利加人の此意志の働きかけを現はに表白してゐる。ジェームズに從へば、消極的には思惟そのものゝ論理的首尾一貫を眞理といふなら、論理的といふこ

とが既に何等かの規範に左右せられてはゐないか、又世には非論理的非理知的な眞理が事實存在してはゐないかといふことになる。積極的には、苟も眞理たる以上は誰かの現實的生活の上に具體的差異を生ずるものでなければならぬ。經驗的條件に於ける現金價格でなければならぬ、觀念の生來の不動狀態ではなくてこれに生起する出來事でなければならぬ。誰かに通用と利用と効用と報酬とを贏ち得るものでなければならぬ。現實に働くものでなければならぬ。則ち、ジェームズ自身が言つてるやうに、眞理は恰も健康や富や體力が作られるやうに經驗の過程中に形られるものである。

そこで、プラグマティズムによれば、眞理は最早萬人が依つて以つて事物を判斷する規範ではなくて、如何なるものでも己が意志を自然世界に働きかけて生くるその過程中に作り出すことの出來るものである。従つて眞理の立證者は最早「聖書(バイブル)」ではなくなつた。それは誰にもせよ「我(エゴー)」を自然世界に働かして報酬を得るものである。而してかゝるものを世に求めむに、何處に亞米利加人に優つて自然に意志を働きかけて豐かに報酬を得たものがあらうか。彼等は荒蕪の地を開拓して世界第一の富を作り出した。摩天樓(スカイスクレーパー)を見よ、鐵道を見よ、橋梁を見よ、船舶を見よ、工場を見よ、牧場を見よ、亞米利加人は形容詞の最上級を之等のものに冠らして、世界を睥睨してゐるではないか。併も之等の亞米利加人は、ピルグリム・ファーザースの昔は暫く措き、今日では、主として無教育な、狂的な、何處の馬の骨か解からぬ凡ゆる種類の移民である。而して彼等が皆大統領選擧に尊い一票を所有してゐるやうに、各々が勇敢に己が動物的意志を自然に働きかけて豐かに報酬を收むるところから、立派な眞理の立證者でなければならぬ。

恰もウォルト・ホイットマンが詩神を棄てゝ、土砂にも植物にも動物にも汎神論的に物言はしめ、人間の今まで閑却せられた官覺と肉慾とに發言權を許して、デモクラシーを心理學と道德とに導入した創意的詩人になつたやうに、ジェームズは荷物同樣に取り扱はるゝ三等船客となつて移住し來る多數亞米利加人に許すに眞理の立證權を以てし、デモクラシーを哲學に導入した創意的哲人である。否、彼は幽靈にすら發言權を與へむとした。彼が千八百八十二年「心靈現象研究會」に入會し、その第四回目の會長に選まれ、靈媒パイパー夫人に現はれた彼が生前の親友ホヂソン博士の靈に關する實驗は有名な話ではないか。

五

馬の背にも、狂人にも、幽靈にも、眞理の立證權を賦與する

今の亞米利加文明は、一見、當初の清教徒的信仰と相距ること甚だ遠いやうであるが、これは、如上の所説によつて明かなる如く、獨逸に於ける「我」の超絶論がヘーゲル左黨の唯物論と相待つて完成したやうに、亞米利加に於ける清教徒が歐羅巴大陸から相續して來た新教的遺産の「我」の神化の一面が「我」の働きかけのプラグマティックな一面と相待つて完成するもので、兩者は二にして一なるもの、共に「我」の業績(プラグマ)を强説する點で現代亞米利加的である、而して奇しくも世界大戰前の獨逸的である。

ゲーテのファウストは「我」の業績の象徴である。彼は「新約全書の中に燃えてゐる啓示」を求めつゝ「約翰傳」を繙くや、開卷第一にロゴスの一語を見て、「素直な感じの儘に、一遍神聖な本文を好きな獨逸語に譯して見たい」には見たいのであるが、さて語、意、力、業の中何れにせむかと苦心の結果終ひに最後の飜譯を得るのである。

かう書いてある。「初にロゴスありき。」……
はあ。靈の助だ。不意に思ひ附いて、
安んじてかう書く。「初に業ありき。」

――鷗外譯――

この業といふ文字を神の業と解して、「創世紀」の初にある神の天地創造とするのは、勿論、「ファウスト」の眞意ではない。「約翰傳」の意味するところはキリストの業で、ファウストの眞意は彼自身の業でなければならぬ。即ち、「我」の業績(プラグマ)でなければならぬ。この意味とすれば、「初にロゴスありき」は「初にプラグマありき」となつて了ふ。

神のロゴスを棄てゝ人間のプラグマを取る時に、吾人は「書」を棄てゝ「我」を取るのである。「書」を棄てて「我」を取る時に、吾人は人間に與へられた智慧を棄てゝ人間の中に動物と共に與かる動物性を取るのである。後者は文明の初歩階段で、前者はその一段進歩したものである。故に吾人は文明人たらむがために、一日も早く動物性の世界から智慧の世界に解放せられねばならぬ、「我」の世界から「書」の世界に解放せられねばならぬ、プラグマの世界からロゴスの世界に解放せられねばならぬ。

嘗てサンタヤナが戰前の獨逸「我」を評して異教的宗教と呼び、獨逸の哲學者はその豫言者、政府と大學教授とはその祭司、社會主義とデモクラシーとはその異端者、基督教徒はその欺かれ人、幾萬の獨逸人はその殉教者、更に幾萬の世界の人々はその犧牲者だと言つた。私は今サンタヤナに倣つて亞米利加「我」を同じく異教的宗教と呼び、異端者たるべきデモクラシーすらも亞米利加にあつては亞米利加「我」の信仰に化せむとしつ

ゝあることを附言して筆を擱くことゝする。

「住」の本義を闡明して住教育の振興を策す

林學博士　上原敬二

（一）

人生に於ける生活には精神的方面と物質的方面との兩者を備へて居るが、この兩域に亘つて人類共存の上に重大な使命を帶びて居るにも拘はらず、餘りに卑近なるが爲めにか閑却されがちな狀態にあるのは住生活に越したものはあるまいと思ふ。文學を愛好し、哲學を憧憬する時世にはこれ等の思想的半面をさへ闡明するの機運に達して居なかつたのである。尤もその單に形式的方面に就ては時代の趨勢に驅られて今や發展の道程にあり相當見るべきものもあり又一世を指導するかの樣な効果をさへも擧げ文化生活に貢獻しつゝあると云ふ。けれどもその根本となるべき精神的半面、思想的傾向に就ては餘りに多くを顧みられて居ない樣である。國民の日常生活に於て、衣食住の三者は今日よりも更に徹底的に、思想的に研究されて來なければならない。それが敎化問題として、社會問題として將た道德問題として意義ある人生に貢獻するだけの研究が達成せられればならぬ。國民と榮養との關係は最近國立榮養研究所の手によつて根本的に解決せられんとしつゝあるの秋、衣住の兩面は果して幾何の程度に進みつつありや、殊に喫緊の『住』に就ては私もその一班に與る身の、近來この方面の皮相的觀察と形式的樣式にのみ囚はれて居る一派の聲を聞く時に果して住生活の眞諦は那邊にありやを疑はざるを得ない位である。

私は建築を專攻した者でもなければ敎育に經驗を有するものでもないが敢て本編を草する所以のものは斯くの如き問題は之れを區々たる一二の專門家のみの所斷すべき性質のものではなく廣く國民的に超技術的に進むべき性質のものであると思ふからである。

元來人間の生活に於ける『住』は如何なる意味であるか、そ

れが國民性、歷史、文化、環境等の支配を受けて發達したものであつて日常公私兩方面に多大の關係を持つ。さうして文化生活及び之れに達する道程としての生活改善の眞意義より文化的住宅の說明を試み、住生活の根本要素を明にし、それ等の基調に及び次にそれ等が因つて來る遠因を探ねそれが社會教育とし、學校教育とし、家庭教養として如何に具體的に進むべきかを示し、それ等教育の振興によつて解決を望まれ得べき多くの住生活に關聯する社會問題、土地政策、住宅問題等にまでも言及して見たいと思ふ。

(二)

一國文化の程度は各種の施設即ち教育、産業、社會事業、宗教、藝術、科學等に基けられたるその國の開發の狀態によつて標準づけられるけれども最も外面的に、概括的にその判定を容易ならしむるものは蓋し住生活に如くものはあるまい。それも形式的に墮したるものではなくて、眞に其の國民性と文化の程度とを體現したるものでなければならぬ。その住生活の內でも、住居の問題は最も明白に直截的に之れを窺ふことが出來る。然もその住居の目的、これを利用する心理的考察等に至つては少しく內面的に反省して見る必要がある。

一體住生活の眞意義は那邊に存するか、その內容は云ふまでもなく住宅、庭園及び土地の利用の三者であるがそれは單に形式や樣式或は外形、色彩を云ふのではなく、徹底したる住生活の基調は正しく生の意義に根柢を發したものでなければならぬ。存在の肯定に立脚したる深刻さが伴はなければならぬ。ここに『住』の生命が芽ぐまれ、躍動が現はれて居なければならぬ。もともと住は形式より見れば生存の爲めの場所である。然しながら精神的に見れば住は單に雨露を凌ぐが爲めの空間を供するのではなく、技術家の手になる外形的構造物、空間的創作物の謂でもない。技術家は建築家たり、造園家たる資格の前に更に人として之に對せねばならぬ。題材に應じ、素材を取捨して之れに作者の個性を現はしたるものには違ひないがそれは一片の死骸である。之れに生の本源的力を賦與したるものでなければならぬ。生存の讃美實在の意義、これ位人生にとつて切實な根源的な命題はない筈である。萬物の思想はここに發露し、透徹したる考察はそこに胚胎せられねばならぬ。

私的生存に關してはそこに精神の安住あり公的生存に關してはそこに種族の素質が係る、住生活が教化問題として、社會問題として論ぜられるのは抑もこの當然の歸結に外ならぬ。換言すれば人と心との安住の謂であり、形と色との墓地に外なら

ぬ。換言すれば住は人生そのものの基調であらねばならぬ。之を歴史的に考察するも字源的に研究するも、その永續性に於て到底衣食の兩方面に比較する能はざる大領域を占めてゐる。

人はその種族の先天性として土地執着の念が盛んである。遊牧の時代を經てそこに種族の存續と原始産業若くは天然の利用とが創められる時まづ彼等の思想を支配するものは土地愛着の念であつた。ここに初めて原始的な住生活の歴史は初まつたのである。その利用の形式、目的、修飾等は次で支配力を有する環境に從つて文化の流れのまゝに推移して今日に到つたのである。

この長き歴史に育くまれて來た國民性はそこに住生活と思想との間に當然の聯鎖が認められねばならぬ筈である。何れの國の文化史を繙くと雖もこの半面から時代の思想を推考することが出來るのである。又之れに反して時代の思想は住生活の形式を左右すると云へやう。現代は正しくその一現象として所謂生活改善の聲を聞くやうになつたのである。人類の安住地とは頗る距離の遠い細民窟の中に完全なる教化事業の行はれる筈もなく、唯雨露を凌ぐに足ると云ふ丈けの非文化的なる住宅に日を送りつゝある階級より雄渾なる思想の生れ出やう筈もない。住宅難にさゝくれたる神經の所有者から我々は卓見を聽かうとも思はない。宗教に所謂安住の世界は遠きに求める必要はない。我々を圍む現世の意義ある住生活は即ち之れである。

土地執着の念、一度趣を代へる時はそこに郷土尊重、故郷愛着の思想となる。郷土の憧憬は理智を超越したる心的環境に於て初めて味はれる。そこに女性的なる潜勢力の存すると同時に他面男性的なる發展力を育くんで居る。郷國に對する愛好の念はそこを去つて初めて感得するものであつて單に空間的にそれを回想するのみではなく時間的に聯想を浮べそれが力強き自己内省の源泉となるのである。冷かなる現世に親しみを與へ、自己の發展と人格の外延、國家觀念の旺盛、祖國奉仕の犧牲心、祖先崇拜の復活、これ等は徐ろにその萌芽をのばしつゝある。郷土の觀念あつてこそ初めて海外發展の根柢が形成られるのであつて、そこに第二の郷國、第二の住生活が實現されるのである。說をなすものは祖先崇拜、家族制度の弊として却つて海外發展を妨げつゝありと云ふも私はそれを否定したい。海外發展とは異國に産を殖すの謂でもなければ、企業の成功を指すの言でもない。そこに意義ある住生活の延長を見るならばそれ既に成功である。貨殖、發展はその從として當然の收獲であらねばならぬ。

アメリカ土人（インデアン）に囚はれたシヤクタスはミシシツピー河畔の密

林に繋がれたその夜、篝火を圍んだ土人の鄙びた、歡さわぎを聞いて彼は郷國を回想した。そうして――

異國の祭の灯を見ないものは幸な者よ　わたしも小屋に居た時にや　あの賑な祭がうれしかつたのに　今は悲しい　囚はれの身となつて　人のよろこびを見るばつかり　心はつらい、なさけない――

ほんとに僞らない心の告白である。アメリカに移住して居る歐洲移民の中には何れも祖國の住生活にあこがれの思を籠めた心づくしが今の住居に求められて居る。テキサスに移住して成功した大農岸吉松氏が一族をして土地愛着の念と過去の住生活を外延しやうとして米作地を經營したのも何れも故あることである。

土地執着の念は一面には家族制度を招致し次では住に對する所有慾を促しここに完全に郷土に基礎づけられた住生活が實現する。それは産業としては農業となつて現はれ遂に立國の根本策となつた。

今日アメリカが恐るべき力を有して居るのは彼が農業國であるからで、一度彼國南部諸洲の農業地を巡遊したるものにはあの廣袤無限の大沃野が如何に國力發展の素質となつて居るかが看取せられるであらう。歴代の大統領はルーズヴェルト以來常に學生をして歸農生活に向はしめ、都市集中の弊を力說訓戒して居るのである。その中堅たる自作農にして國家の中堅となれるものの向背は實に彼國の文運を支配する原動力であつて今日赤化運動の一派が盛んに農民階級に宣傳して居る事實は雄辯に之れを物語つて居るのである。農民勝つか赤化崩るゝかその歸趨は一國興廢の岐路であると喚ずる政治家の出でたのは無理もない。イギリスさへも大戰中には工業立國策の非を覺つて國土の利用厚生を圖らうとしたのではあるまいか。

然も彼等國民の土地執着力は我國の夫れと著しく異るものがある。殊にアメリカ人にあつては土地、家屋を所有する欲望が少いので彼國の都市郊外にその土地賣買を業とする土地業者は盛んな宣傳をやつて種々な手輕な條件で取引、購買法を考案してその方面へ人の注意を惹かうとして居る。戰國の夫れとは反對である。就中土地に餘剩の多い新開地南部諸州に於ける活動は實に刮目に値する。南キャリフオルニア、テキサス、アリゾナ、フロリダ邊には殊に著しい。それ等大都市の中心公園近くには會社の自動車を備へ午前午後に何回と回數を定めその賣却地を實見したき人を無料にて乘用させ遠きは市外二十哩、三十哩のさきまでも連れて一巡して見せてくれる。中には用事もないのにこの無料自動車に便乘して用所を足す者さへもある。

かうして自ら經營の住宅地、田園都市、住宅建築等を喜んで案內してくれる。それ等の土地には十分な文化的施設を加へ、水道、瓦斯、電氣を初めとし道路、排水の工事さへ完全に備へてある。然も買手は決して多くはない。雜草離々として路傍を被ひ一日荒寥の觀を呈して居る。我國が秩序もなく郊外へ土地占有、住宅建築の增加するのとは雲泥の差である。各ブロック毎に仕切られたる舖裝完全なる道路は一棟の家すら見えぬ荒原に碁盤目の如くに區劃されてあるのである。人を迎へるに文化の施設を以てすることかくの如き有樣である。

然も彼等が土地を求め、建物を有たざる理由は全く其社會組織、子孫に對する思想、經濟關係、家族制度、勞働賃金其他我國とは風俗人情を異にする點に基くのである。中流以上の生活を營むに何不足のない丈けの資產を擁し又は俸給を獲て一生をホテルの一室に送るもの、アパートメントの數室を借り一家を持たない人の多いのは我々の眼にこそ不思議にも思はれるが文化的施設の普及せる彼市に於てはこれで尤に慰安も休養もとれるのである。自然と人爲と對立の極端なる彼國に於ては都市はあくまでも人爲の世界で終始せねばならぬ。自然味を都市に招致したり、我國の如く猫額大の土地に自然の山川を寫してそこに庭園趣味、自然三昧に耽ることは彼等の豫想さへ出來ないところである。家庭に對する觀念に於て異る所のあるのも又その一面の理由である。獨立したる一邸宅を構ふるが如きは贅澤と云ふよりは生活の形式を異にするものの趣味より來ると考へて居る。昨年春私がシカゴ滯在中ゴロッシウムに於て土地業者の聯合主催になる Own Your Home と云ふ題名を冠したる住宅、土地博覽會が開かれ邸宅庭園の設計、土地利用の實際、田園都市の提唱、郊外都市の施設、文化的住宅設備、邸宅土地の分讓等例によつてアメリカ式な賑な博覽會の見物をしたことがあつた。かうまでして「家を持て」と宣傳して居る有樣である。目に角たてゝ郊外の低廉な土地を漁り步く我國情と比べ面積の廣い所とは云ひながら餘りの悠長さに驚かさるを得ない。

（三）

斯くの如く生は存在の肯定であり、その肯定に基けられたる住生活の內容は如何と云ふにそれが公的にも私的にも一種の畸形なる改善運動の傾向を來しつゝあるのはそれも時代の反映として看過するを得ないであらうか。蟻垤の如き密集生活、蜂群の如き集團そのものに等しき都市の市民生活は近年著しく物質的文化の支配を受け之れを文明の恩惠と稱し、科學の發達と呼んで益々煩雜なる人生を愈々深淵に導かんとして居る。かゝ

る文化の向上は一面には經濟的壓迫となつて現れ他面には機械的單調となつて人生は刻々冷かなる影につき纏はれつゝある。形式は整ひ、日常生活は便利になるべく、あらゆる文化施設は益々我等が日常に接近しつゝある。この狀態を呼んで文化生活と云ふ。かくして現代の二重、三重の生活から生ずる苦惱より免れんが爲めにここに生活改善の聲は起つた、素々趣味に胚胎して生じたる二重生活を煩雜なりとして排斥する者の心理は果して生活改善の眞骨頭に觸れた考察的なものであらうか。

　文化的に發達せしむべき都市と原始的に保存せしむべき田園と、合理的に發達せしむべき科學と耽美的に高調せしむべき藝術と、かくの如く人爲と自然と、理智と情操と、兩々相俟つて初めて國土を通じ、人生を内觀し、社會を貫いて意義ある生を送り得るのものではなからうか。冷やかなるものを益々冷かならしむにはそこに暖き何物かが存在するが爲めである。二重生活は我等の特權である。

　生活改善の本義は單に物質的に經濟的に物の單純化と質素化とを意味するものではない、唯吾人が實用をさへ滿足し、物本來の目的を擴充してくれるならばその意義せりと考へるのは皮相の見解ではあるまいか。眞の生活改善はそこに本來の物の用途、實用性がその存在の第一義的効用を果した時に初めて達せられるべき窮極である。

　人類の生存地は常に住はんが爲めの場所のみではなく、働かんが爲めの場所もあるべく行かんが爲めの場所もあるべし、然しながら若し人を容るの場所にして飽くまで合理的に極端なる科學的設計の下に造らるるならばそこは果して最後まで人類の安住の領域となり得るであらうか。實用性の滿足にのみ囚はるる人は姑らく自然界の現象に眼を止めて貰ひたい。材料を合理的、經濟的に配合して最も能率多く空間を使用する術を心得たる蜜蜂、敵を捉ふるに當つてその荷重と浮力との比例に基いて巧に材料の節約を試みて有効に空間を利用して網を張る蜘蛛、湖水の侵入に備へ風雨を凌ぐに足る岸蓄を備へたる巣を營む海狸（ビーバー）の智慧、彼等は極端なる實用主義論者たるの誇りを享けるであらう。人類共存上に、動物と異る趣味性の涵養と教養の資を備ふる人類の事業には趣味的半面の交渉を忽にすることは出來ない、生活改善の本義ここにありとせば我等は進んで所謂文化的住宅の意義を釋明して見たいと思ふ。

　美しき名と美しき色とを持つて文化村の一角に、櫻ケ岡の一帶に建てられ、新しく世に生れ出でた文化住宅に相當に世の注視を受け忌憚なき批評をもさへ被つたと屢々聞いた。毀譽褒貶それは今問ふ所ではない。然し極めて公平に彼の文化村の批評

を思ひ浮べる時我々はこの幸先きよき誕生の喜びに一抹危惧の念を挿まなければならぬと云ふのは何と云ふ皮肉であらう。

一體住宅が文化住宅と銘打つて現はれるにはそれ丈けの內容がなければならぬ、深刻なる意義が伴はなければならぬ筈であつた。獨立に設計され、體用を無視し空想にその利用の目的を置いた住宅は之れに住生活を營む人の心とは離れたものでなければならぬ。互にその間に隔りがあり踰りがあつては畢竟その家はその人の心を容れるものではなく、その人の體を容れる箱に過ぎない。住生活の根柢に即した住宅には形や色や樣式は最後のものではない、寧ろこれに超越した「住」の眞精神が表現されて居なければならぬ、便利と稱し、改良と稱し、簡易と稱するも畢竟相對性のものである。この相對性を絕對的のものとして之れに文化の意義を賦與したのは抑々核心を外れた命名であつた。眞の文化的住宅は意義ある住生活が完全に、遺憾なく營みうるだけの形式と內容とを備へたるものでなければならぬ。豫め樣式を定め、規矩に從つて按配、設計したるものにこの精神は宿つて居ない筈である。そこに形としての住宅の藝術化と眞實味とが覗はれねばならぬ。新しき樣式の出現も可なり、傳統の破壞、舊套の踏襲私はそれ等は抑も末であり、手段であると思ふ、それ等に超越したる精神の表出であることを要する。

かくして住生活はこの搖籃に育くまれ人文の發達に貢獻するの資となる。生活改善のこの本義は單に住の問題に限らず、衣食にも及び一般の風俗、慣習にも及び得るのである住生活の本義としては全體的のものであり不可分的のものでないことが分ればその內容たる住宅、庭園、土地の利用の三者を區分することそれ自身が矛盾である。設計立案する人の意は利用の實際にあらうともそれを實生活の安住地と考へる時に何等の區別差等を設くる理由を見出さぬ。この思想に基いて設計する時こそそこに初めて文化住宅の誕生を見るのである。

本年春、文部省內生活改善同盟會に庭園の設計案を公表し、改善の目的を達すべく將來の傾向を導くに一つの參考として世に紹介した。私はその案に就て批評するのは大人氣ないから止める。物は總て實現の曉を豫想するのみでは足りない。須らくそれが現實に存在する場合があればそれを實見して初めてその可否を推稱するのが穩當な遣り方である。冷かなる、感激に乏しき作家は我々の魂を容れるには餘りに冷淡である。人生讃美の祈りは住生活の殿堂に跪拜する者の口より高らかに唱へられねばならぬ。人生を荒野たらしむるも行路の旅を寂寥ならしむるも一つに住生活の充實と安住と慰安とに係ると云つても過言ではあるまい。技術の神聖視と重要視との觀念の因つて來る所

またここにあると云つてよからう。

(四)

我々はここで眼を轉じて住生活が如何に社會問題として論ぜられ、社會事業として考察せられねばならぬかを簡單に述べそれを善導し救濟する手段の基礎として住教育の忽にすべからざることを説いて見たいと思ふ。

住宅問題が社會事業として大切なことであるのは云ふまでもないがそれは中流や上流階級の爲めの論のみでなくて現在最も喫緊な施設を要望して居るのは細民階級の夫れである。最も眞劍に遊戯氣分を超脱して人生そのものの住生活に卽する半面をこの階級に就て考ふる時我々は彼等を社會的施設、精神的教養を以て救濟する前に一日も早く住生活方面を以て救濟することの最も有効であり、最も確實であることを痛切に感ずるのである。千九百三年三月ザクセン國政府の訓令中住宅問題に就ては極力その改善の社會事業的効果のあることを力説し次の様に云つて居る。

『住宅の不良はその不良の程度に應じて一般の行爲能力と抵抗能力とを衰頽せしめ或種の惡疾殊にチブス、肺病、梅毒の發生と傳播を促し道德と幸福とを破り精神的教養を妨げ之と同時に個人並に一國民の經濟的進歩を危からしむ……』と

私は東京深川に生れ學生時代を通じ細民階級の巢窟に近く半生を送つたが彼等の日常生活を通觀する時に驚くべき矛盾、撞着、背理、葛藤はあらゆる問題に亘つて彼等の生を毀つて居る。道德も教化も衛生も保健も教養も全くかかる住生活の缺陷に胚胎すると云はれるのは理のある所である。彼等の子女の運動場は濕潤の路地であり、彼等の唯一の學校教育は亂倫なる家庭の現狀によつて却つて力強く裏切られて居る。ドイツ社會黨の領袖ロドベルツスが住宅の不良と欠乏とは學校教育をして無に歸せしめると喝破したのは細民級に於て最も著しい證據を見る。彼等は社會の敗殘者として現代の資本主義の下には奴隸的境遇に甘んじなければならぬのは宿命的の原因でもあらうが彼等にも又空間共有の特權は人類として賦與されて居るべきである。彼等の爲めに住生活の改良を圖りその改良によつて生じたる個々の全體的能率を高めしむるのは最も適切にして最も急を要する事業の一つではなからうか。

私は階級の如何を問はず、社會全般を通じ住生活の改善は社會改良の基調であり、國民思想の安定であり、個人能率の增進であり、社會組織の融和であると力說したい。

次に住宅問題の關係である。獨逸の諺にも住宅問題は土地の

問題であると云ふ、その住宅問題の解決に當り從來土地政策、土地問題が住生活の意義を徹底せしむる爲めにどれ丈け考へられたであらうか、形式や法規の力のみを以てこの大きな問題の圓滿な解決は望まれない。我々は元來都市の内に、郊外に出でて幾何の空間を所要するか、我々が文化的生活を充實し、目ざめたる生の意義に共鳴して日常生活を送る時、我々の周圍には幾何の空間を必要とするか、住宅と云ひ庭園と云ふも畢竟利用の目的に於て分たれたる分類である。之れが住生活の對象として考へられる時にそこには何等の根本的差別はない筈である。

一國の文化は住生活の淨玻璃に映じてその尺度を測られる、それは住宅問題の解決せられてあると否とと云ふ如き根本論に於ても當然のことに屬するけれども又個々の生活樣式に就ても同樣である。在米同胞が彼國人より尠なからざる排斥を受けつゝあつたその動機は少くとも住生活の欠陥に存すると私は思ふ。殊に太平洋沿岸諸州に於ける彼等の生活を一覽するならば單にその外觀に接すのみでも排日の理由となりさうな所は現に今日に於ても目擊し得るのである。南キャリフォルニア州のニードルス市附近よりインペリアルヴレー地方の近在に入つて共に同胞農業の生活内容を觀察する時は蓋し思半ばに過ぎるものがある。然し我々はまたこの地方に於けるメキシコ國境を越えて入國したる新入者にしてこの熱沙の天地に無情なる自然と闘ひつゝあらゆる困苦に堪へて開拓の任に服しつゝある同胞の力闘を驚嘆せずには居られない、文化の眼より見るときは到底正視する能はざる程度のものであるけれどもそこに我國民性の長短が表はれて居る。或は米國南部諸州に於けるニグロの住生活を見る時に之れにも増してその文化的批判の的になつて居ることを見逃すことは出來ない。彼等の生活はその形式に於ては白人の夫れと大差ないがその内容に到つては雲泥の差異がある。

昨冬私がテキサスに滯在中加州に於ける排日イニシエチーブ法案の成立を見、同地方の同胞農業者はその事業の發展上前途に不安の念は萌んで來た、借地權の消滅、所有權の不能、これ等は何れも彼等の頭を惱ました暗影であつた。同胞が加州を去つてテキサスに移住の傾向を生じたのはこの時であつた。テキサスの岸農場は之れを迎へて自家の農地を分讓した。加州の同胞はそこに新しき住宅を求めて續々として移住した。中にはその住宅はニグロの嘗つて住んだことのあるものであつた。移住の翌朝、白人は之れを見て驚異の眼を放つた。蓋し彼等は一度ニグロの住つた家には新築と増築とを問はず決して住はうとしなかつた、之れが習慣であつた、たとへ牛馬の小屋に一夜を明すとも、白人の眼にはニグロは一種の獸類とでも映ずるのであら

うか。然し共にニグロの生活內容を調べて見れば白人ならずとも我々でも彼等の日常に嫌忌の念を萌すのである。我々は此の如き極端なる惡例をキヤリフオルニアに見る反面には又パサデナ郊外都市の如き點に住生活の美的反面をそこに見ることの出來るのは何たる矛盾であらうか。

（五）

次に翻つて住生活の內容の一半たる庭園生活に就て考へて見たい。庭園が從來封建時代の因襲を破つて個人生活の本義として認められ更に進んでは社會的に種々なる意義を附して論ぜられて來たのはその方面から見るも著しい傾向であり、我が庭園史の劃期的進步である。殊に庭園の實用論の如き論の根據とその是非とを離れて兎に角、世の注視の中心となつたことは爭はれぬ現象であつた。又ここ數年來都市に蟠居せる富豪が大面積の庭園を所有することに對する批評、その民衆への解放、それ等の裏に潛む土地利用の魂膽何れも都市の公共造園の對象として自由空地問題の內容をなしつゝある。

庭園の解放については又考へなければならぬ點が尠くない。もと〳〵個人的の住生活を擴充して公共的住生活に役立てやうとするにはそこに經濟上にも管理上にも利用上にも矛盾が起るのは當然である。中には十分なる地積を抱擁する富豪であればその解放によつて生ずる一切の負擔を社會奉仕として支辨するが至當なりと云ふ人もあらうがそれは個人の自由意志に對して强要し得べき性質のものではない。私有財產の使用享樂を一般に許すに當つてはその受益者及び自治體は相當の好意を以て之れに酬ゐる所がなければならぬ。地元附近及び一般にとつては庭園は住宅地として公開する方が公園又は公開庭園として利用させるよりも歡迎されると云ふ。今後都市に於ける大庭園は次第にその數を減じて住宅地化せんとする傾向にあるは爭はれぬ事實である。然もそれが住宅地となるにしても我々の眼より見て幾多の欠陷の伴ふのは營利本意とは云ひながら遺憾に堪へぬ、自治體や都市に於ける公的住生活の眞意義に關する闡明が不十分であるの罪に坐せなければならぬ。一例として東京駒込に於ける富豪岩崎家が所有の大地を住宅地として解放したるに當り平均百五十坪內外の各區劃を設定し公開的庭園の意味に於て僅かに三百八十坪內外の土地のみを提供したのは物足りない。少くとも一千坪內外のもの二つは希望したかつたのである。

由來庭園解放はその美名の下に富豪が所有地を處分するもあるべく、華族が世襲財產を賣却することもあるであらうがその動機の如何を問はず之れを公園的取扱の下に維持しやうと云ふ

ならば少くとも法令の改正による公課の免除、維持管理費の支出、取締り上の便宜の提供等位は自治體に於て負擔せねばならぬ。市民又この犠牲に對して自覺する所があらねばならぬ、個人の住生活を公共的に擴充したる意義はここで報ひられることと思ふ。

我々は又市民として都市の内に又は郊外に生活する以上如何なる條件を滿足し、如何なる程度を以て住生活の標準とするか、その判定を俟つてそこに新なる住宅地の體制が生れ出づる筈である。自由空地、準自由空地、公園問題の先驅として都市計畫法の内容を豐にし、地域制中住宅地區に適用せらるる將來の住宅地法の淵源もここに認めるのである。

住生活の意義が波及する所前述の如く、その影響する所また斯くの如く廣汎である、果して然らば是等を社會現象として組織立て、一定の體系の下に統整するには如何なる教養を以て達し得べきかと云ふにここに新なる社會教育として私は「住教育」を推奬したいと思ふ。

（六）

「住教育」の意義は那邊に存するか。

私は教育者の經驗は淺い、又教育其物を研究したものでもなければ、建築の技術を修めた者でもない。然も敢てこの新しき名辭を大膽にも發表し、その教育の方法に就て卑見を述べる所以のものは前來述べ盡した通りそれが眞の人生の意義に胚胎した住生活の達成を望むの術としてであつて、技術を超越し、專門を離脱したる高處より觀察を立てたのである。

住に關する教養が果して教育の力によつて概念的に、考察的に個性の内に容れられるや否や、我々は姑く過去の經過に徴するの外はないがややもすれば部分的に傾いて統一を缺き、皮相的に陷つて根本を忘れ、科學的に偏して藝術味を傷ふと云ふが如き弊はなかつたらうか、現實に即するの餘りそこには便化の理法餘りに鮮にして趣味性の教養と國民性の陶汰に思ひ到らざるの餘り、文化生活に容れられざる變態を現出するの嫌はなかつたらうか、我々はここに住の内容たる建築や庭園の藝術論を繰り返すの愚をなす者ではない、過去に葬り去られたる立論を異にする論議は歴史上の遺物として措くも現代に於てもその體樣を變じて現はれたと思はれる硬軟兩派の所論を聞く時に我々は益々住教育の振興を圖らねばならぬと思ふ。

私人たると公人たるとを問はず、科學の領域に屬すると、藝術の世界に即するとを問はず現實の人生を内省し、理想、自由意思、個性の育くまれる樂園としての住を理解しこれに關する

深甚の教養を與ふることは畸形的なる文化の發達を矯正し、固陋、因循なる國民性に廣濶なる天地を授け、自然への解放、理想への接近、幸福への努力、子孫への繁榮、健康への階段となるの源泉であるを思はねばならぬ。かくして徹底したる住生活の彼岸に達することの出來る人は正しく人生超越の愉悅を享け得る惠まれたる人である。天上の樂園はそこに現はれ、滾々として竭きざる生の泉はそこに源を發せねばならぬ。

讃美すべき住生活は住教育のみが最後に導き得べき彼岸である。

住教育は單一なる教育ではなくて綜合教育である。冷靜なる科學の範圍にあつて之れを理解し次でそれを超越し、思想の半面に亘つてそれを體得したるもの、換言すれば住教育は藝術教育であり、思想教育であり、情操教育であり、併せて自然教育の一部である。實際上には社會教育であり、學校教育であり、家庭教育である。

新しき時代に處するものが新しき生活に人生を有意義に送らんとするものが習はなければならぬ教育の關門である。

婦人問題の喧かましき機會にこの教養も又關係が深いのである。今ここにはこれ等教育の特質異同を詳述するの時間を持たないのでせめては公私兩方面卽ち社會教育として及び學校と家庭とに於ける教育方針を指出して當事者の參考に資し、旣に實際上經驗せらるゝその方面よりの批評を仰いで益々斯界の發達に資したいと思つて居る。

（七）

學校に於ける住教育の實際的課程に就ては私はその經驗もなく又當事者でもないので具體的に說明することは一つの理想論となり終るからここには大體の方針を述べることとする。

義務教育としては小學校に於る上級の國語教科書の中に人間として生存上の要素を敎へ、生活と住宅、生活と土地、國民保健の大體を理解し易い程度に記事を精選して採用するのが最も捷徑であると思ふ。

私はアメリカ滯在中ロスアンゼルス市の日本人小學校の上級生に就て教師に請ふて彼等が抱いて居る公園及び庭園の觀念を知らんが爲めに作文を課し、その答案を求めたことがあつた。それを見ると故國に生れ學齡に達して渡航したもの、初めよりアメリカに生れ唯日本人なる兩親の下にあつてまだ見たことがない祖國の話を聞かされつゝこの國で教育を受けた者の兩方の答案に表はれた思想を比較して見ると彼等が如何に自分の小い住生活を見て居るか、その小主觀が窺はれる、庭園は使ふべきも

のか、觀る爲めのものか、公園は遊ぶべき場所か、習ふべき場所か、そこに直に日米兩國の住觀念の相違が表はれて居る。更にこれに興味を惹いた私はボストン滯在中ハーバート大學の造園教授を介して彼國の小學六年程度の生徒の答案を求めた、メトロポリタン大公園系統を誇りとしコンモン公園の整へる設備を誇る市民の後繼者は明にアメリカの公園利用の核心に觸れて居た。さうして次に庭園に關して求めた答案に對しても更に日本人兒童に對して求めた答案の要領よりも遙に徹底した意義を示してくれた、中に二三の歐洲より移住した許りの兩親を持つた子供が居た、それはイタリア人とチエッコスロヴキア人であつたがその考が他の兒童より異る處があつたので私は教授にその旨を話した所國民性の然らしむる所で祖國傳來の思想はかゝる方面にも認められると云つてくれた、それで私は再び興味を惹き各國の兒童がこの方面に如何なる考を有するかを知らうと思つて不圖思ひついたのはロスアンゼルス市が移民に富み各國の子女を收容し教育して居る學校の多いことであつた。私は教授を介して早速ロスアンゼルス市教育課に依賴し可及的各國の兒童をして住生活に對する考の一端を窺はうとした。その中にはポーランド、チエコスロヴキア、ギリシア、イタリア デンマーク、ドイツ、イギリス等の種類があつた、それ等の兒童は何れも同じアメリカの教育方針の下に一學校に收容され所謂國旗を中心とする教育上のアメリカニゼーシオンの統一の下に置かれた連中である、心を異にするも對象が一つである、その見解は我々に如何なる豫想を與へるかと思つた。かくして教育課の手によつて集まつた答案は讀むに從つて各々自國の國風と云ふものがその幼稚な筆勢の中に窺はれるのであつた、翌年私が渡歐してそれ等國々の中流程度の庭園や住宅を見て歩く內更に集めた答案の中に書き綴られた數々の材料は不可思議な力を以て私をその國の住生活と結んでしまつた。次に私は歸朝の後二三の小學及中學校の下級生に對して公園、庭園、住宅と云ふ樣なものに對する彼等の觀念を知らんとして學校に托して作文を課し同樣に答案を求めた、我々はその結果日米兩國の兒童の頭にかうも住に對する考が違ふかと怪しまざるを得なかつた。

義務教育に當つて兒童時代に眞の住生活の意義を知らしめることは頗る大切なことであると思ふ。殊に土地と云ふものに對する觀念の薄弱なるに至つては驚く許りである。歷史を異にするとは云へドイツ國民の土地に對する民族的執着心の如き、私はライン河地方の旅行中にも小國民の腦裡に徹底せることを實見したことがある。個人的自覺と國家的觀念とを問はずかくも少年時代より普及せることは何とも羨望の至りに堪へない。

(八)

次に女子教育に於ける住教育の必要を一言したいと思ふ。現在の中學程度の女學校に於て實踐教育の方面は營養、服制、衛生、育兒、家計及び住居の教育であるが是等を通じて他の基礎教育、文藝教育よりも多少なりとも輕蔑の眼を以て看做される理由はその根柢に思想的背景を有せざるが爲めである。否有せずにはあらずして有せしめざるが爲めに外ならぬ。

これら女學校に於ける婦人住教育の順序としてはまづ精神生活、趣味生活、物質生活の何物なるかを明にし、次に物質生活に於ける衣食住の三系を現代的に教へねばならぬ。住の內容としては前來屢述べた通りに住宅、庭園、土地の三者に亘つては蔬菜、花卉、果樹、養畜、運動施設、庭園の精神に及びその從としては生花、盛花、室內裝飾、茶湯、作法など一貫した精神から教へられる。殊に近來擡頭しかけつゝある體育問題、運動施設、遊園設備の三者は最も新しき傾向として女子教育中に考察せられねばならぬ點である。

近來アメリカに於てはホームランドスケープと稱する造園の一科は本來主婦の手によつて解決、設計、利用せらるべきものなりとして特に夫に婦人專門の學校さへも設立せられつゝある。之れは家庭造園とも譯すべきものにして婦人の特性と、家庭に於ける地位とから打算して當然婦人のみの手によつて成功せられ得べきものなることは私も同意して居る所である。我國では未だ男子に對してすら庭園教育を授ける學校機關のない今日直に女子に向つてその開設を希望するのは順序に當を得て居ない樣であるがアメリカに於ては有名なるもの丈けでも既に三校は開設され土に親しみ、水にあこがれ次々としてこの新しき領域の開發に盡しつゝある有樣である。

徐ろに家庭に於ける住生活の內容と婦人の特質とを考へて見るにその言は決して不當ではない。婦人が家庭本位に、家庭の經濟を司り消費經濟の主宰者である立場から、子女教養の中心者であり、本質としては綿密性を具有し萬物愛育の本能を有し愛撫性の發達を望むの餘り是等の特性は內的に婦人を動かして當然この住教育の任に就くべき資格があると思ふ。さうして今や外には市街地建築物法は施行され公の安寧と保安との爲めには自己の所有權をさへ完全に行使することが出來ないで幾多の掣肘を受けて居る。時世の進運に伴ひ個人の特權が公共の利益の爲めに迫害されて行くのは文明の過程上公人として止むを得ない對社會の義務奉仕である。かくの如き義務觀念は一般法制の講義として授くべきものではあるが又之れを住教育の一般と

して教へるも一法である。その他都市計畫の智識、市民教育の一班何れも婦人の自覺に俟たねばならぬ。

高等專門の女子教育にあつては更に進んで住生活の內面的側、內省的背景を教へねばならぬ。アメリカに於ては是等は社會學の一分科として教へ、家政學の一專門科として授けて居る。その思想的背景に關する心理學方面、社會學方面の考究はかなり深刻に進み我々をして之れが女子教育であるかと疑はしむる程度である。彼等は主婦たり、妻たる前に人として如何に住むべきかを教へられるのである。職業として婦人に造園の技術を授ける學校でも彼等に教へるにまづ技術者たる前に人として人の住むべき安住の郷國を創設することの根柢を授けられるのである。

學校の如き正式の教育でなくとも之れを補つて幾多の補助教育も出來得るであらう、講習會、講演會、通信教育、展覽會、旅行會、何れも教育の通俗化事業として組織を吟味するならば一日も早く世の中に紹介し得ることに屬する。

（九）

次に家庭方面に於ける教養に就て考へればこれは學校教育を長短補給し、相俟つて初めて圓滿なる教化を遂げるのである。子女教養上自然に接し、萬物繁生の所論を授け、分化育成の實驗を誠しめることは家庭教育を措いては望み難き長所である、住生活の慰安的効果、園藝的愉悅の源は正しく家庭の住教養より發足するものである。主婦の素養の大切なること家族の趣味向上はここに存するのであらう。意義ある住生活者は圓滿なる情操と發達したる意識とを家族に與へ子女の教養上に圓熟したる好感化を與ふることは社會人として質の改良に資する所少くない。徹底したる家庭住教育の波及する所には又自然教育がある。

次に男子の學校に於ける住教育を如何に善導するかの問題があるがもと中等教育に於ては常識として住の何物なるかを倫理教育の一科又は科外教育としては思想問題の一項目として授くるに如かずと考へる。

專門の學校卽ち建築、園藝の學校に於ては既に技術に就ては夫々專門家の手によつて普及されて居る筈であるが望むらくはそれに思想的背景としての技術者の理想涵養の方面に注目を請ひたいと思ふ。本來住教育その物を授くる學校はあり得べからざるもので綜合教育なるが故にそれぞれ住設計の根柢を授けて與れればよいのである。

（十）

最後に公共的方面を觀察してここに社會教育に於ける住の意義を明にしたい。

教養を終へた人の集團である社會に住教育の公的方面が考へられるのは當然であるがその指導の任に當るものの責任は餘程重大である。社會事業の一つとして我々は第一に婦人會の活動を望んで止まぬ。婦人會とさへ云へば慈善、救濟、交際に係る如く考へ花の日會、世帶の會、生活改善の會、家庭改善の會など勿論結構ではあるが更に一歩を進めて新しき都市美化運動、家庭造園の美化促進運動、公園修飾の補助等の事業にもたづさはつて貰ひたいと思ふ。

テキサス州のサンアントニオ市は人口四十萬内外の小都市であるが郊外都市の美化運動に就ては市の有力なる婦人團體が一隻眼を有して時に意想外なる妙案を立てゝ成功する。

確か年中行事の一つとなつたと思ふが四月に入ると全市の住宅庭園に亘つて婦人會の懸賞を以て美化修飾の實現を求めその期日には市吏員、農事試驗場技師、婦人會幹部等が共に一巡して審査し最も巧に庭園を美化實用したものに所定の賞金を與へるやうにする。それから又日を定めて婦人會員は全市の公園を巡廻しその施設利用の程度を分擔的に調査し公園係りに改善上の注意を促すと共に全市民の自覺を促して公園經費の直接負擔を請ふ様な手段に出る。

私は更に徹底して都市美化運動にたづさはれるホノルヽの婦人會アウトドーアサークル（Outdoor Circle）の近況を紹介し如何に市民の公生活に於ける住の享樂を圖つて居るかを知らしめたい。

千八百九十四年ハワイのホノルルに起つた一美術協會の中に都市の改良を目的とした一サークルが出來上つた。それがそも〳〵今日の都市美化運動の團體である所のアウトドーアサークルの前身であるので、最初の會長は母躰の協會の會長であつたミス・フランシスローレンスであつたが千九百六年に共頃有名なニューヨークの都市研究家チャールス・ムルフォード・ロビンソン氏が任を受けてホノルヽに都市計畫に參與するやうになつた。さうして會長と意見が合致したのでここに獨立したる一つの會として社會的に活動を起すこととなつたのである。チャーレス氏の考はホノルヽを公園の中にある都市、寧ろ公園都市として世界有數な美しい都市の班に列せしめやうとの大願望を抱いて居た。それに必要な調査を進めて來たが遂に千九百十二年に親の協會が解散した以來獨立して今日に及び現今では市に

とつて實に大切な補助機關となつて來た。

この團體の仕事としては

一、道路に綠陰樹、街路樹を植えること

二、步道を改良すること

三、古き垣根を取拂ふこと

四、廣告板を市内から取り除くこと

五、空地を綺麗にすること

六、出來る丈け市花ハイビスカスを植ゑること

七、空地は公園とすること

八、子供運動場を造ること

九、原產の植物を保存し、更に他の熱帶植物を移入して自然の風景美を助長すること

是等の仕事は現に實行しつゝあるが今の會長ミセス・マーフヰーの懷抱せる理想の一端として實行せんとし又實行しつゝあるものには左の如きが主要なるものに屬する。

一、並樹

並樹の樹種は成るべく一定する方針であつて從來の並樹は思ひ切つて植え替へる豫定、街衢は山の手と下町とで一通り每に種類を代へる、この狹い市に四千本以上の椰子やユーカリプス、キヤベ等が整然と會の手で手入されて行く。

二、步道

步道はそれに面接した地所の所有者又は占有者の負擔で改良、鋪裝、美化されることに運動して居る。

三、垣根

古い垣根は取毀すこととし、且つ將來は成るべく垣根を作らないで步道と前庭、地所の境界、步道と步道との間には何等の區劃を設けずに置くこと、モアナ郊外住宅地には現にこの理想を實現し全然垣根を作らず芝庭の美しさにこの地を逍遙する人に最も有効に快感を與へて居る、家は步道より約九間を隔てて建てられて整然と並んで宛も公園の中に建てられた樣な感じがする。古い垣根は中には婦人會の手で取り毀して後からの費用を申し受ける位積極的な活動をして居るのがある。

四、廣告板

廣告の見苦しいものは遠慮なく取り拂ふこととして着々に實行して居る。取拂ひの要求に應じない時は直接その會社へ交涉し、廣告板の揭出せられて居る間はその品物に對して非常同盟をすると云ふ申し合せを作つた。非常に有効である。今日では如何に變つたかは知らないが私の滯在中はチユーイングガムと活動寫眞と煙草の三種丈けの廣告を許すことに限定してあつた。

五、空地

空地の問題は市でも中々六ヶ敷く考へて居るのであるが會では特別の委員で取扱つて居る。或は花園とするか若くは菜園とするか又は歩道と結びつけて公園とするか色々に研究されて居る。所有者の社會奉仕の念に訴へて市民の爲めに役立つ樣に利用されることを考へて居る。

六、ハイビスカス

この花は我國のムクゲの種類であつて花の色の美しい變種がある。之れを到る所の空地、庭園、生垣に植栽して市花の實を揚げて居る。婦人會や市に關係ある裝飾にはこの花を圖案化し又はそのまゝ用ゐられる。我が東京市なども婦人會の手によつて市花の選定されるやうな機運になつて見たいと思つて居る。色々な條件に支配されるので簡單には極められまいが實現の曉には中々有効に使はれるであらう。

七、公園

除地公園とか空地公園とか色々な名稱の下に出來る丈け小公園を多く增し市内の端數の空地を利用するに努めて居る。

八、公館の前庭

公館は出來るだけ意義ある樣に作り且つ使ひたい爲めその前庭には庭園を設けて都市美觀に役立てたいとして居る。

九、教育

小學校には婦人會の委員が時々出張して都市は市民のもの、美しくすべきもの、樹木は折るべからざるもの、花は摘むべからざるもの、園内小動物はいぢめざることを說明して歩き栽培上の注意、指導、技術上の教授等を勸めて居る。小供の時分からかくの如く公共的道德心の涵養に努めるのは實に婦人會の仕事として最も有意義なものだと思ふ。

以上の如き種々な仕事をして居るがその費用は毎年演奏會又はバザーを開いて五千弗近くの經費を支辨して行き、委員は一切名譽職として無報酬で活動して居る。日本人の名流婦人も之れに加はり時に茶の湯の會とか生花の會とかを開いて物質的に補助して居る、中には白人、日本人、支那人の部が分れて夫々の國の婦人有志がその先驅となつて會の爲めに活動して居る。

我國でも最近には大阪でこの種の婦人會が出來たやうな噂があつたが實際都市に對して市民的自覺を誘起せしむる原動力としてこの種の婦人會の設立は頗る有意義であると思ふ。尚この種の婦人會の委員は都市公園に來つて市民子女の遊戲や娛樂の實地指導に從事して以て亂雜に公園を利用して居るのを矯正し市の當局を助けて共に公共生活の完璧を期したいと思ふ。

社會教育の他の方面には又文筆の力による領域があることを

忘れてはならぬ。新聞、雑誌、パンフレット等の印刷物によつて市民の自覺を奮起し大勢に順應して公生活に共鳴せしむる効果が少くない。

又一般の市民教育も市が自治體として執るべき手段であるが、その中にも住生活の公共的方面を教育することに努めて貰ひたい、單に婦人會に委すのみでなく市自身も又この責務を須たねばならぬ。市民讀本、常設講演會等も結構である。それ等に加へて青年會、ボーイスカウト、在郷軍人團等の手によつて實際的に宣傳することも出來るであらうし市民に多大の感化を與へることも出來るであらう。前述の婦人會に次で有効な活動力の素質を持つものは女子青年會の有志であらう、とにかく婦人の新しい活動方面としてこの領域あることはその指導の任に當るものの一顧を廻らして然るべきである。

(十一)

以上論じ來つた所は甚だしく多方面に亘つた樣であるが中には抽象的にも理想的にも考へられる點がないでもない、それはもと／＼ここで住設計の基本的觀念を授けるのが目的ではなくて更に深い内省的方面に亘つたが爲めであつて、實際方面に從事して居る人の眼から見れば霞を隔て丶物を望むの感がないでもないと思ふ。我國に於ては未だこの方面に着眼し、透徹した理想を以て教育の新しい領域を開いたと云ふ話を聞かないので自分はその專門が住生活の一端に係るの故を以て敢て住の全般的意義にまで亘つて論じたのである。住生活に關係ある方面の有識の士にして協力以てこの事業の一端が社會に擴められる機運の到らんことを切に望む所である。(一九二一、十、七)

豐年なるが故に農民却て苦む
不合理なる現農村制度の革新

米を溺愛し米に呪はれた農民

大原農業研究所　有元英夫

形骸ばかりの豐年踊

私は十月のはじめ飛驒の山中を旅行したとき、いろ〲見たり、感じたりしたこともあつたが、そのうち殊に私の興味をそそつたのは、一つは鐵道から三拾里も隔つた高山地帶のこの僻地に、狹い谷間の何所へ行つても、少しでも平な土地があつて水掛りの便のある場所には必ず稻が栽培して居る、それが人家から一里以上の隔りを持ち、道も無いやうな所でも尙ほ寸尺の地を利用するに油斷して居らぬ。かほどまで、我國の農民は米を溺愛し、米作に執着するものかとつくづく感じさせられた、そして彼等は米に囚はれ遂に米に呪はれて居るのを氣付かないことを氣の毒に思つた。それとも一つは、高山の町から十里ばかり山奥の或る村に宿つた時、その夜、盛大な豐年踊を見物する機會を得た。豐年踊は米作の豐年の時に限つて催され、今年は近年稀な豐作だといふので、この催しは四晩續き、私の見たのは最後の日であつたが、神社の廣場で數十の老若男女が輪になつてさも愉快さうに踊りかつ歌ひ、なか〲賑やかであつた。それを觀て私は一種の皮肉を感ぜざるを得なかつた。米を溺愛し米に呪はれた此の山間の百姓達が米が豐作だから踊るのは當り前であるけれども、若し收穫した米を販賣する段になつて米價が意外に安値であつたならば、彼等は恐らく忽ちにして歡樂の

夢から醒めるであらふ。昔しの豐年踊りは豐作に對する心からの喜悦の表現であつたけれども、既に貨幣經濟の洗禮を受けた今日の農家にとつて豐年踊りは內容の拔き去られた形骸ばかりのものに過ぎない。今では豐年踊は米が澤山取れた時でなく寧ろ米價の高い時に催さねばならぬやふうになつた。これ全く農家が米産の追及に餘りに急で他を顧る餘裕が無かつたため農業經濟上に幾多の缺陷を生じ、米を狂愛して却つて米に裏切られた結果を物語るものである。

米と物價が併行して變動しない

總ての物價は原則として、その需要供給に支配されるのは言ふ迄もないことで、米もまた生産額が多く供給が增せば從つて米價の下落するのは當然のことゝ言ひ得る。豐年でしかも米價が高ければこの位、農民にとつて難有いことはないけれども、さうした難有い年は滅多に來るものではない、矢張、豐年には米價が下落するものと見て置かねばならぬ。

然るに他の商品であれは協同的に生産を制限するとか、價格維持の手段を講ずるとか種々の物價下落對策が計畫されるけれども、米の生産者たる五百萬の農家が協同して操業を短縮するとか、不賣同盟を組織する等は到底實行不可能であるから米は他の商品の如く價格を維持する方策に乏しい結果、値が安ければ安くなり次第にみす〳〵農民は汗れ流して生産した米を手離さねばならぬことになる。それも他の諸物價も米と共に下落するものならば忍び得るとしても米ばかり値が下落して他の物價が下落しないやうな場合には苦しむのは農家ばかりで、都會の商工業者は却つて好都合に思ふ如き都鄙利害相反した現象を呈することになる。

昔しの農家は殆んど自給自足的生活を續け、當時の米作の目的は「如何に多く採るか」に在つたから、米價の高低は大して經濟上の影響を與へない。且つ當時は米の生産は國民經濟に重要な關係を持ち、米價は勞働賃銀を決定する重要な標準、否米そのものが貨幣の作用をなして居たから、米價は總ての物價の中樞をなし、米價と他の物價及び勞働賃銀は常に正比例して上下した。故に米價が下落しても、直ちに、他の物價が下落するから、兩者の高低相反するやふな矛盾は來さなかつた。茲に於て豐年は何所までも農民を悅ばせ、そして眞の豐年踊に夢中になり得た。然るに其後漸次農家經濟が貨幣經濟的の色彩が濃厚となるにつれ、米作の目的も「如何に多く採るか」から「如何に多く益するか」に變り、時には收穫は少なくても米價が高くて多く收益するといふ目的を達し得る場合も生ずるに至つた。のみ

ならず國內の農業以外の他の幾多の產業が勃興し、今日では米以上に多額の產出をする產物は數多く出來たから、往時の如く米價は必ずしも物價の中樞を爲さない、また米は國民の生活費のほんの一部に過ぎなくなつた。故に世間の景氣不景氣は各方面の經濟事情が作用して變動し、米價は澤山の物價のうちの單なる一商品として取扱はれるに至つたから、米價と物價とは必ずしも正比例して上下しない。然るに玆に農家にとつて不利なことには、都會商工業者は、現在の經濟狀態は非常米價ばかりで決定されるものでないにも拘らず、動もすれば米價騰貴を好い口實として商品の價格引上に腐心する、しかも反對に米價が下落すればそれに應じて商品の價格を引下げるかといへば、その時には他の事情を口實として却つて價格を下げ澁る。即ち都會商工業家は勝手な場合には米價の變動を利用するのである。所が米の生產者側たる農家にあつては、米價を左右する能力を持たないから、米は商人の思ふが儘に農家から買ひ取られ、たとへ物價が昂騰して米の生產費が上つてもそれに應じて米價を維持することが出來ない。これが農家經濟の最も不利な點の一つである。

農家經濟の彈力性を養ふことが急務

然らば今日豐年でも尙ほ且つ踊り得るやうにするには何うすれば好いかと言へば、先づ農家經濟を昔しの自足自給狀態に引戾して、米價の變動による經濟上の動搖を少なくする事が近路であるけれども、一般社會の經濟が年を逐ふて貨幣經濟發展い域に進みつゝあるにも拘らず、獨り農家のみ自足自給の原始的狀態に殘して置くことは到底許されない。と言つて米價維持に對し五百萬の農家が一致團結して近頃の商工業家の常用手段を眞似ることは理想としては甚だ面白いけれども實行は困難である。それならば何うしたら好いかについては具體的には幾何も方法があらうけれども、其の根本は、我國の農家にもつと經濟上の彈力性を與へる。即ち農家に對しもつと經濟上の實力をつけることである。

一體米は多くの場合、米出廻期の上半期よりも下半期の方が價が高い勿論それは餘裕の少ない我國の米の供給額が收穫期から端境期までに大部分消費し盡され、從つて端境期に近づくに從つて在米が遞減すること、及び金利、倉敷等の關係から米價は端境期に向つて遞昇する傾向を持つものであるけれども、それ以外に一般に我國の農家は生活に餘裕が乏しい、即ち彈力性が無いから、生計費、稅金、米生產費等は總て其年の米生產物を賣拂つて之に充て、とても其年の經濟を、其の年の生產物を別物

にして處理するやうなことは出來ないから、端境まで米を持ち越せば値段が出ると知りながら、みすみす收穫するや否や直に値段に構はず賣り放つて金に代へねばならぬ。故に一部の地方は全然梅雨期を越せない米を産するから仕方がないが、十月頃から十二、翌年の一月を最盛期、所謂米山時代と稱し、四月頃までには米は大部分農家の手を離れて商人の所有に移る。斯くして農家が米を賣る時には常に米價が安くて、大部分それが商人の手に入るとはじめて米價の向上を來し、その利益は總て商人に占められる有樣である。豐年のときでも多くは米價は上半期よりも下半期の方が高い。そして上半期に賣るよりも下半期に賣つた方が、金利倉敷以上に利益があるものであるから出來るならば何とかして農家をして下半期まで米を維持せしめたい。そのためには保管倉庫の完備、米品質の改良、農業動産金融機關等の必要もあるが、どうしても根本的には我國の農家にもつと經濟上の餘裕を與へるのが急務である。然らば如何にして我國の農業經濟にもつと彈力性を具備せしむべきかといへば、言ふ迄もなく現在の農業をもつと利益を多くし、其他副業、農村工業を發達せしめ、農業經營法の根本的改造を行ふことによつて目的を達し得る。

如何に農業經營組織を改造するか

維新後西洋の文物が輸入されて以來農業も駭くべき發達を遂げ、米作の如きは過去五十年間に少なくも五割以上の絶對收量を增した、この點は米作の目的として「如何に多く採るか」の解決に近づきつゝあることを示す。併し前にも言つたやうに、今日の米作の目的は「如何に多く益するか」に在るから、澤山收穫したとて米作の目的が達せられたといふ譯では無い。

米作の目的が多穫から多益に移りつゝあるにも拘らず、我國の農事試驗場は多穫主義の試驗にばかり沒頭して、技術方面に囚はれ經濟上の多益といふ點に少しも試驗の步を進めないのは全く時代錯誤の甚だしいものである。今日では米を澤山收穫するとばかり指導奬勵するのは農家經濟を向上せしめる道ではない。更に進んで農業經營法の試驗を行はねば徹底せぬのである。

國家經濟から見れば食糧問題解決のために農家をして出來るだけ澤山の米を生産せしめやうとする政府の方針は正當であるが、多く收穫したことが却つて農家の收入を減少せしめる原因となるならば個人經濟から觀て決してこれは歡迎されない。農家と雖も道樂に百姓をして居る譯でもなく、獨り農家のみが食糧問題の解決者として犧牲になる義務もない。農業の目的も要

するにお金儲のためであるから、お金が儲からぬやうな經營はやめた方が好い。若しも現在の農事試驗場が單に國民食糧問題の解決のためにのみ設立されたもので、農家の經濟的發展については敢て顧みないものとするならば、農家はこれにばかり依頼せず農會の如き民間團體に於て、もつと有利な農業經營法を研究調査すべく要求する方が好いと思ふ。殊に現在の農家が苦痛を感じて居るのは米價の下落よりも寧ろ生産費の過多にある。我國の米作ほど比較的産生費を多額に要する物は他に見ない。これは主として我國の米作が勞働的に頗る集約で、多額の勞働を最も不經濟に亂費して居るが爲めで、人間の値打の安かつた自給自足時代の昔しならばそれで好いかも知れぬが、勞働賃銀の騰貴した今日、かゝる勞働的集約農業は徒らに生産費を嵩めるばかりであるから、歐米の如くもつと機械、肥料、種子等の資本の投入を豐富ならしめて、勞働的集約農業から資本的集約農業に經營法を變へなければならぬ。更に各自の資本の貧弱な我國の農民は他の商工業者に對抗するために將來協同の力を借りて農業經營を行ふ必要がある。即ち今後は個人農業經營から社會的農業經營に進むべく改造を加ふきである。

米食、米作偏重の弊

由來わが國と米作とは歴史的に經濟的に切つても切れぬ密接な關係を持つて居る。現に米はわが國民の日常缺ぐことの出來ない、重要食料で、永い間の習慣から米以外に如何なる農産物も一般の嗜好に適せなくなつた、故に米の無い國に行くのは日本民族には甚しき苦痛であつて、時に米以外の穀物を常食する者はあつても、それは米を食へない事情があるから仕方なしに米と遠ざかるので、彼等は機會さへあれば米食に向はうとする傾向を持つ。要するにわが國民は米がなければ夜も日も明けない、たゞもう米食に向つて愛着の念を斷たないのである。更に舊時代に於て國民の大部分を占めた農民は、藁の家に住み、藁の敷物に居し、藁の外套を被、藁の靴をはき、藁の帶をしめ、藁の紙其の他の器具を使用し、米で作つた酒を飲み、米を主食物とする、しかも古代に遡るほど米と國民生活とは益々深い關係を持つのは、神樣を祭るに藁のメ繩その他藁製の裝飾品を用ひ、酒を捧げ、餅を供へ、御洗米を供へるに見ても知られる。殊に米が物品交換の媒介物たる貨幣として通用して居たことは米作と國民經濟との關係を益々深からしめた。かく米が國民生活の端々にまで喰い込んだため國民の米に對する欲求も頗る熾烈なるものがあり、從つて國家の農政は如何にして米作地を擴張すべきやにあつた。百姓は米を作るが故に尊いので、百姓より

米が大切だから百姓に米食を禁じた時代すらある。また土地は米作地に非ざれば耕地と認めないで畑地は永い間地租が課せられなかつた。古代の農事奬勵は即ち米作地擴張奬勵であつた、そして野といはず山といはず、全力を盡して米作地の造成に腐心した結果今日の狀態があるのである。今では世界で有數の米産國となつてゐるけれども、國民がこれ迄に米作に費した努力は到底筆紙につくし難いほどである。

もと稻は熱帶植物で實は寒地に適しない、併し甚だ強健な作物であるため、水田は南から北へ北へと擴張され、稻を寒地に適應せしむべくあらゆる苦心を拂つた。また水田耕作には必ず一定の灌漑水と、それを保持すべき田面の水準が必要である。この二つの難關を解決してよく水田を擴張するには、全く米の狂愛者でなければ成し就げ得ない所であらう。然るに斯の如く國民が殆んど盲目的に米作に向つて猪突した結果、農業經營が米作一方に偏して種々の缺陷を生ずるに至つた、その缺陷の重なるものは第一に種々の天災が多いこと、例へば風害、水害、旱害、病蟲害等が時々見舞う、第二に農家が米を主作するから作物の種類が單純になつて價格變動による經濟的危險が多い、第三に勞力の分配が不平均となる、第四に國民の米食に對する嗜好が發達して一般の需要が品質によつて極限される結果價格の激變を惹起しやすい、第五に生産費を多く要する等であるが併し斯かる弊害があるからと云つて今更農家は米作を廢し、國民は米食を止めるといふ譯には行かない。我國の農業は外國の如く經濟事情に適應して作物の種類を選擇する所謂自由農業は絶對に採用することが出來ないから、農民は米に呪はれながら、なほ永久に米と緣を斷つことを得ぬ狀態に在る。併し我國の農業組織を何等かの方面に改造して行かなければ、農業は遂に行詰りとなるであらう。眞に我國の農業の發達を來すのは米作偏重主義を捨てゝから後のことで、それは何百年、何千年先きかわからない。が要するに農家の經濟力をもつと充實せしめるのは農業發達、そして食糧問題解決の根本義である。

農作と農家の喜憂

上山滿之進

今年は豐作で農家が困るとの聲が聞え始めた。この喚聲は今後漸次に大きくなつて、世論をも紛糾させ、政府當局をも處置に苦しませるやうになるであらう。その聲のまだあまり高くな

い今日に於て、靜かにこの問題を研究して置くことは吾々の任務であると思ふ。

何故に豐作で農家が困るか。豐年踊のことは物の本にも數限りなく書き殘されてあるが、兇年祝なるものは未だ曾て與かり聞いたことがない。然るに近代の實相では豐年がいつも農家に呪咀せられ兇年が歡迎せられる、實に奇怪至極と謂はねばならぬ。

豐作で嫌はれるのは、豐作自體ではなく、その結果たる米價の低落である。農家の立場としては豐作米價高の兩手に花が最も望む所であるが、需要も供給も主もに國内に限られてゐる米の性質として、供給過多の豐年に價の下落するのは免かるべからざる運命である。そこで米を主要收入とする農家が豐作の年には困難することになる。特に歐洲大戰の餘波に浮き上がつた一般物價はまだ心のままに低落せず、他面に於ては一般物價に連れて一時は石五十五圓餘迄競り上げられた米價が今は三十二圓前後迄叩き落され、その好景氣時代に膨脹した生計と增課せられた租稅とは急に以前に引戾すべくもない、斯かる境遇の下に在る農家が米價安の最大原因たる豐作に眉を顰めるのは無理からぬ次第である。

然らば總ての農家が同一程度に於て豐作の壓迫を受けるであらうか。それはそうでない。

進行の便宜上茲に農家の分類をした一表を挿む。內容の事實は大正九年末現在である。この表には自分でもまだ氣の濟まぬ點があるが、農家の資産的階級別の概要だけを見るには足ると思ふ。材料は農商務統計等から取つてそれを按排した。內容の詳しい說明は今は省く。

	全國總戶數	農家戶數	內譯 地主	（地主の耕地一町歩以上所有者）	半小作	丸小作	其他
實數（萬位）	一、〇四四	五四八	一三八	八八	二三四	一五六	四〇
總戶數に對する割合	—	〇、五二	〇、一三	〇、〇八	〇、二二	〇、一五	〇、〇四
農家戶數に對する割合	—	—	〇、二五	〇、一六	〇、四二	〇、二九	〇、〇七

備考

農商務統計に所謂小作農を丸小作、自作兼小作農を半小作とし、自作農を地主と其他とに分け、地主の戶數には耕地一町歩以上所有者の全戶數を充てた。「其他」に屬するものも地主には相違ないが、半小作や丸小作に對立せしめた地主階級に入れるには、聊か貧弱であるから地主の數から除いたのである。

農家の豐作米價安に困る程度は大地主に最も重くて、中地主小地主と漸次に輕く、半小作から更らに丸小作に下るに從つて一層輕微になり、却て小農は、二者擇一ならば米價騰貴よりも

豐年の收穫多量を取るものである。

生計向上が人欲の自然である以上、何人でも普通は收入の許す限り生計を擴張するものと見ねばならぬ。勤儉貯蓄を貴ぶ點に於て吾輩も人後に落ちるものではないが、他人の立場を批評する場合には斯く考へねばならぬと思ふ。若しこの前提が許されるならば、大地主であればあるだけ猛烈に、米價低落の脅迫を受けねばならぬ。それは絶對數字に於てのみでなく、又割合に於てでもある。何となれば生計費の中で對內的のものは心掛け次第で相應に切詰められもするが、對外的のは極端に窮迫した場合の外容易に緊縮せぬのが所謂豪家の體面であるからである。特に大戰中の好景氣に調子付いて異常に膨脹した彼等の生計と地方財政とは一層彼等を困厄に陷れた。數年來地方財政の檢束なき膨脹は、商工業者の多い大都會は別として、全國到る處で最も重き負擔を彼等地主階級就中大地主に强ゐてゐる、聞く所に依ると小作米の三割乃至五割を國稅地方稅と租稅類似の公課に奪去られるのが全國一般の狀況だそうである。昨今の如く米價が低落してはその割合が更に多くなるのは勿論である。それも一般物價が米價同樣に下落でもすればまだしものこと、それは牛の歩みの遲々として捗取らず、これは奔馬の勢で急轉直下高價の半額近くにも落ちた。是等の事實を綜合して見たら、農家の窮狀は蓋し思半ばに過ぐるものがあるであらう。

地主就中大地主の斯かる苦境は全く同情に堪へぬ。それを金持の悲哀だなどと冷評するものもあるやうであるが、それは殘酷の至りである。百歩を讓つてこの冷評に一理ありとしても、同じ金持の中で農家だけが何故にこの苦艱を甘受せねばならぬか、又この苦艱に泣く地主は、苦艱の程度にこそ差はあれ、必ずしも金持のみでなく、中地主を加へて少くとも六七十萬戶の農家であると信ずべき理由があるが、この多數の同胞の境遇を吾々は越人の肥瘠と同一視し得るであらうか。

田畑合せて一町歩半位を所有してゐるものは、地主とは言ふものの自家耕作を主もにするので所有地の大部分を小作に預ける大中の地主と違つて豐年の增收は自己の所得になり、しかもその增收米の全收得米に對する割合は、自家耕作をもする大中地主のに比較すべくもなく大きいので、小地主には第一に米量の點に於て豐年に利があり、第二に價の點に於ても、大中地主同樣の不利は蒙りながら、本來賣米が少いから、不利の程度は比較的に輕い、從つて豐作米價安の爲めに生ずる地主の苦艱は、彼等には差引き頗る凌き易くなつて、中には米價は安くても豐收の爲めに却つて仕合はせるものもあらう。加之この邊の農家になると對外生計費の負擔が輕くもあり伸縮も容易である

から米價安に對する苦情は少くない。

更に下つて半小作即ち自作兼小作農（全農家の四割强）は小地主よりは一層、米價安に對する利害關係が薄い。この階級の農家は小地主と丸小作との中間に立つものであつて、小地主のことは今陳べたばかりであり、丸小作のことは直ぐ次に陳べらるので、双方を折衷したら彼等の立場も自から明かになる譯であるから、特別に半小作に付て說明する必要はないと思ふ。

耕地の一坪も持たないで全部借り地に農業を營む丸小作の數は全農家の約三割である。年の豐凶即ち米價の高低に對する小作農の利害は大體に於て地主と背反してゐる。吾輩は敢て言ふ、「豐年には小作喜び凶年には地主喜ぶ」と。

小作米は年の豐凶を通じて同額である。而して米價は豐年に下がり凶年に上がる、そこで地主は豐年でも量に益する所なくして大に價に失ふ、凶年には全くこれと反對な利益の立場にある、それでは地主が豐年を呪ふのは自然であつて、今日現に「豐作で農家が困る」との聲は主もに地主就中大中の地主を代表して起つてゐるものである。然るに小作農は豐年の增收を全部已れに收めることが出來るので量に於て大いに豐作を利益とする。而して賣るべき多額の米を有たぬ彼等には米價の低いのは大した苦痛でなく、却つて自作米を食盡して飯米の買方になつた端境期前數月間に、若し米價が高くでもなつたら、彼等には甚しき災難である。斯かる事情であるから大體に於ては丸小作農の利害は地主と反對で米價は低くても豐作の方が利である。

然らば米價安は小農（小地主、半小作、丸小作を總括しての）には殆ど風馬牛であるかと問はれるならば、無條件に然りと答へることは出來ぬ、高低の時期次第で小農の利害は大に違ふ。唯從來の實例は小農に不利益に々々々々と出來てゐるから、前のやうには言つたものの、米穀法の出來た今日では、その運用が宜しきを制して、適當な時期に米價が上がり不適當の時に落付いたならば、小農も地主と共に米價高の利益に均霑し且後日の不當な米價高に苦しむこともなくなる。

從來の豐年の場合に於ける米價の趨勢は收穫の見据の付いた頃から下がり始め端境期の十一月一日を經過して翌年の二三月迄は益々低落し梅雨明けから上がり始めるのである。この場合に政府が農家の愁訴に堪へずして引上策を行つても、政府の決斷が鈍いのと手續の面倒の爲めに實行は多くは三四月以後になり、甚しきは六七月にもなつたことがある。この時期になると賣米を有つてゐるものは結局少數の大中地主のみで、小農就中丸小作は最早賣るべき米を持たぬ、特に七八月となると地主の

中でも賣米のあるのは大地主ばかりで、中以下にはあまり無く、小農中の小農は日々の飯米さへ逆に商人から買はねばならぬ境遇に在る。斯かる時期に米價の釣上げられることは小農にとつては迷惑の極みと言はねばならぬ、然るにそれが過去の實狀であつた、これでは小農は米價高に反對せざるを得ぬ。

豐作米價安の年に於て、若し新米穀法が端境早々活動を開始し米買上に著手したならば、米價は玆に騰貴し、この時には小農も賣拂米を有つてゐるから利する所が少くない、而してその政府買入米は翌年の梅雨後最早小農には賣米なく、又米價が上がらうとする時期に至つて暴騰を威壓する力があるから、飯米を買ふ小農も無法な高値に困らせられることはなく、斯くて小農は二重に仕合はせることになる。

之を要するに「豐作で農家が困る」との愁訴は農家の種類と米價騰落の時期とに依つて一概には言へぬ、その最も困るものは大農であつて、それが中下と下るに從つて困る程度が輕くなり最下層の小農就中小作農となると米量の多寡に豐年を祝ひ米價の高低にはあまり頓着なく却つて米價が上がつては後半年の生計を脅かされる虞がある、乍併米價引上策が彼等の猶ほ賣米を有つてゐる歳末から初春に掛けて行はれたならば彼等は收穫多に加へて米價高を味ふことが出來、又後半年の飯米高を緩和せられるので彼等には無上の幸福である。

同じ農家の中に利害關係の異同厚薄こそあれ、豐作の爲めに米價の暴落するのを打捨て置くのは農家全體の爲めでない。食糧問題の見地からこれを調節せねばならぬの勿論であるが、多數の同胞が忍ぶべからざる苦境に陷つたのを救ふのも亦た固より國家の任務である。然らばその方法は如何であらう。

第一の方法は早速に政府が米を買入れて米價を引上げることである。但しその時期は新穀出廻早々が最も好い、斯くてこそ大農は勿論丸小作農の末に至る迄總ての農家が齊しく恩惠に浴するのである。萬一この時期を失つても必ずや來年三月以後でなければならぬ、四五月以後になつては唯是れ大農を利するのみで、小農には何の利益もなく却て不利益になる、又大農にも時期遲れであまり難有くない。

米買入は新穀出廻り早々でなければならぬとは言つたものの、如何なる値頃が買入決行に適當であるかは甚だ困難な問題である。米穀法に依る米の買入賣出は豫め準備してある一定の基準に依つて決定せねばならぬと吾輩は年來主張してゐるのであるが、政府にはまだその準備がないのみでなく、準備せんとの誠意の持合はせもないらしい。甚だ殘念ながら今年の米買上も昨年同樣に量の調節などと不道理な道理に不安心な根據を求め

ねばならぬであらう。この度も亦復た已むを得ぬとして、明年以後の需めに應ずる爲めに政府が速かに右の調節基準を作製することを切望する。

第二の方法は租税の輕減である。これは眼前刻下の間には合はぬが一つには後年の米價安に備へる所以であり、一つには米價問題を離れて一般的農村振興の要務である。租税輕減の途は第一に地方の行政財政の大緊縮を推さざるを得ぬ。府縣郡市町村の新任首長の入り代はり立ち代はつての功名心が、戰時戰後の不自然な好景氣に煽動せられた結果、小作米の三割乃至五割を徵收せらるる地主は、假令金持に好感を有たぬ人々でも、現代組織の下に於てはこれを救ひ出すことに萬々異論のないことと思ふ。まして社會組織や經濟組織の變革に漸進主義を取る人々は双手を擧げて贊成するであらう。

第三に希望することは速かに小作制度を改良して年の豐凶に對する地主と小作人の利害の衝突を除いて欲しい。これも當面の問題に間に合はぬのみでなく、直接には米價問題に關係がないが、これをこの儘にして置いては、この後彼の「豐作では農家が困る」問題を解決するにも種々の障礙の起り易いことは何人も想像し得るであらう。加之凡そ何の事業でも主もな關係者の利害の一致せざる限り決して永遠の繁榮を期し難きことが眞理である以上、農業には共に無くてはならぬ地主と小作人との關係を調和せずして農村の振興も食糧問題の解決も到底功を奏すべきものでない。

この外米價低落對應策として既に米の關税復活說が擡頭したやうに新聞紙に見えてをる、その中には米の鐵道運賃引上論も重ねて起るであらう、或は輸出奬勵金交付說も湧き上がるかも知れぬ、終には米專賣論の死灰再燃を見ぬとも限らぬ、その他種々の對策もあるであらう。乍併是等は米價の暴落に伴つて何時でも起きる定例行事で國民の聞き飽いた所であり、尚ほ吾輩の見る所では全然實行不能のものでなければ殆ど無効無益に近いものばかりで、採つて用ふべき筋のものは一つもない。その理由を說明したくないでもないが、今は餘裕がないから割愛する。

他の方策は兎も角として以上吾輩の提出した三つの方法が適當に實行せられたならば、差當りの米價問題は勿論農村の根本問題も自から解決せられ、始めて大農も中農も小農も、又地主も小作人も、農家全體の利害が全く一致し、是に於て乎悠長で又景氣の好い昔ながらの豐年踊を復たび村醪野蔌の前に見ることが出來るであらう。（大正十一年十月十日稿）

豐年と農民の利害

法學博士　堀江歸一

例に依つて例の如き米價問題

厄介千萬なるものは、我國の米價問題である。凶歉であつて米の收穫が平年より足らなければ米價暴騰して、都會の消費者を苦しめるし、之に反して平年以上の增收があれば、米價は暴落して、農民に大なる損失を與へざれば已まない。左ればと云つて、生產者と消費者との双方に、可もなく、又不可もないと云ふような公正なる價格の出現することは、事實に於て不可能なる望みである。蓋し米の如き農產物の產出は工業上の產物と違つて、天惠の厚薄に依つて、定まることの關係から、增減の甚だしきを常とする爲めに、斯る厄介千萬なる結果を生ぜざるを得ないのである。

現に本年の如き天候の關係から、米作の良好である可きこと、随つて米價の暴落す可きことは先頃來から一般に想像されて居つた。昨年の端境期に於て四十四五圓であつた定期米の相場が最近に於ては二十三圓臺に下落したことの如き、畢竟投機業者が近き將來に於て、米價の下落す可き趨勢を見越して、之に順應する取引を行ひつゝある結果に外ならないのである。然らば本年度の收穫高は幾らに上るであらうか。最近農商務省は第一回豫想を發表して、六千二百六十三萬餘石であるとした。果して然らば昨年の實收高に比較して、七百四十五萬石の增收であつて、增加率は一割三分五厘に當り、平年作に比較しても、尙ほ一割弱の增收に當る。世間では天候の順調であつたことに重きを置き、異常の增收の行はれるものと豫想して居り、随つて右の如く發表された豫想高に對しては、何かしら物足らぬ感を懷かざるを得ない。地方に於て米作豫想を報告する衝に當る者が增收報告の發表に依つて、米價に低落——或は暴落を招くことを恐れ、不知不識の間に、報告に手加減を行つた爲めに、右の如く增收高を內端に止まらしめるに至つたものであるか、其れとも一昨年來の不景氣の爲めに、地方農村に於ては、施肥其他增收に必要なる施設の行はれなかつた一方に關東關西到る所に小作爭議が頗る盛んであつて、地方に依つては全然土地を荒廢の狀態に委するものもあつた爲めに、增收高が豫收以下に止まつたものであるか、今日判斷に苦む所であるが、孰れにしても本年の米作は豐饒であることは、之を爭ふを得ない。而して

豐饒の程度は前年に比較して、一割三分五厘であつて、餘り大したものでないに拘はらず、其米價に及ぼす影響は著しい度合に上るのであつて、如何なる率に於て、米價の低落を惹起すか、正確の數字を豫想することは難しとしても、尙ほ既往の實驗に徵して、四五割の低落を見るものと考へられるのである。然らば米價の騰落は米の收穫高に生ずる些細なる增減の差即ちマーヂンに依つて決定されるのであつて、マーヂンの小なる割合に、價格騰落の幅の大なるを常とする。是れは米の如き、之に對する需要が極めて伸縮不自由であり、增收の爲めに價格が低廉であるからと云つて、特に需要を增加せしめるに至らないし、減收の爲めに、價格が高く爲つたからと云つて、特に需要を節約せしめるを得ない結果、價格の高い時には、益々之を高からしめ、其低い時には、愈々之を低からしめるのである。

米價劇變の影響

斯る關係に依つて、米價の時に暴騰し、又時に暴落することは、我國の農村經濟に取つて、一の病弊とす可き所であるのみならず、都會經濟に對しても、亦迷惑を及ぼす所以たらざれば已まない。蓋し今日農村と都會との間には、經濟生活上に於て、餘程密接の關係があり、都會住民は專ら農村の產物に依賴して、衣食の必要を充しつゝあることとの關係から、成る可く其等產物の價格の低廉なることを欲するようなものゝ、一方に都會に於て地方人士を顧客として、營業を行ひつゝある者の如きに至つては、米價下落、農村不振の結果として、顧客の消費力に缺乏を來したならば、各自の營業亦打擊を蒙らざるを得ざる次第であつて、是等の人々の立場から云へば、米價は多少騰貴しても、地方人士が此騰貴した價格で、米を賣り、其代金を都會に撒布して吳れることを有利であるとするに相違ない。

更に農村だけの利害關係に就て考へると、凶作の宜しくないことは論を俟たないが、豐作の結果として、米價の暴落する場合にも、甚だしき苦痛を感ずる、殊に現下の如き事情に於ては、此苦痛を大ならしめる二個の原因がある。第一は年來米價騰貴の趨勢に引摺られて、地方農家に於ては次第に生活の程度も高く爲れば、諸種の費用も嵩み、其れ等が自然米の生產費を高からしめるに至つた。今月差し當つて生產費を節減する用意もなければ、覺悟もない場合に、米價が暴落し、或は生產費以下に落込むようなことがあつたならば、農家の經濟に取つて、大なる打擊を及ぼさゞるを得ない。第二に考ふ可きは米價と一般物價との間に於ける均衡である。若しも我國の農家が自

足自給の生活を營んで居るものであれば、一般物價と米價との關係の如きは、深く意を勞するに値しないが、今日の農家の經濟たる、他の社會と廣い交渉を持つて居り、一方に米其他の農産物を賣つて、他の一方に廣く生活の必要品なり、有用品なり、時には奢侈品なりを購ふ。米、麥、味噌、豆、野菜類こそ、農家自ら之を産出して、自家の消費に充るとしても、其以外の物資に至つては、酒煙草魚の如きは勿論、織物類や、石油、鹽の如きに至るまで、盡く他の供給を仰がなければならない。其際に米價獨り低落して、他の諸物資の價格の騰貴して居ること今日の如くであつたならば、米價の下落に依つて、農家の苦痛とする所は必らず例年に倍するものありと見ることを至當とするであらう。

米價と小作爭議

今や全國諸地方に於ては、小作爭議が熾烈であつて、何時に爲つて、其平靜の狀に歸することを望み得るか、殆ど之を知るを得ない。本年の如き增收に依つて、米價が暴落したならば、第一に損失を蒙る者は大地主であり、續いて小作農である。而して兩者が互に自家の蒙らんとする損失を他に轉嫁せしめようとし、一方が小作料の引上を試みるに對して、他方が其引下を欲し、然も双方の之を望むことが米價下落に伴ふ各自の損失に刺戟されて、痛切のものと爲つたならば、將來に於ける小作爭議は益々眞劍味を加へるに至るものと考へなければならぬ

米價引上げの先決問題

地方農民の利害を考へ、殊に地方に於て選擧權を有し又選擧場裡の實權を支配する大地主の利害に訴へて、米價調節を急要とする議論は今後米價下落の勢の急なるに隨つて必ず世間に起り、特に衆議院に於て喧しきに至るであらう。政府が大正十年米穀法なるものを制定したのも、此般の必要に應ずる考に出でた次第であるから、或は米價下落の際には、直に其適用を見るかも知れず、實際の効果から考へれば、凶作の際に、供給に乏しき米の價格を低落させるよりも、豐作の際に、供給の過剩と爲つた米の價格を騰貴させる方が容易に行はれ得るであらう。然し私は政府が米價引上の目的を以つて、斯る調節策を施す前に、爲さゞる可からざるもの丶あることを警告したい。即ち米價の昂進を企てるに先だつて、一般物價の低落を謀ることは、爲さゞる可からざるもの丶一つである。蓋し今日諸物價の騰貴に依つて、國民生活の壓迫されて居ることは、掩ふ能はざる事實である。隨つて國民の內で、中流以下の階級に屬する者に取つて

は、所得の強い割合を消費する米の價格の低落することは、喜ぶ可き所であり、米價の下落は必ず一般物價や賃銀の下落を誘導することゝ爲り、物價下落の勢を促進する上に於て、累積的效果を生ずるものと認められる。然るに此有効なる米價下落を沮止する運動が起るのは何故であるか。固より米價下落を以つて、自家に不利益であるとする農民や、農民の利害を代表する人々が運動の主動者と爲るに相違ないが、尙ほ私の如き公平の立場に居る者の考へを以つてしても、此運動に多少の道理ありとする。何故かと云へば、諸物價の下落しない間に、米價にだけ下落を來さしめるのは、如何に其れが自然に發生し來つた現象であつたとしても、不合理であることを示すからである。隨つて私は米價下落の勢の確實に現はれ來つたと同時に、或は其以前から、政府に於て米價の下落と均衡の保たれるまでに、一般物價の低落を實現させる政策を施すことを以つて、最も合理的に經濟政策を運用したものと考へる。米穀法の下に、下落しかけた米價は之を騰貴させ、騰貴した他の諸物價は其儘に据置くが如きは、不合理に重ねるに、不合理を以つてするものと評さざるを得ない。即ち私をして率直に所信を語らせれば、米價の下落すると同一の程度に於て、一般物價を下落し、以つて米價に人爲的釣上げを施す必要なからしめんとするのである。固より米價の下落は自然に一般物價の下落を惹起すようなものゝ、政府に於て或る施設を講ずることに依つて、其勢の促進されるに至る次第である。私は此點に於て政府の冷靜なる判斷と機敏なる處置とを求めざるを得ない。

農民の生活に對する悲しみ

白鳥省吾

一、經濟と藝術との二方面から

ウイリヤム・モリスは快樂的勞働を高調し、あらゆる人間が商業の奴隷である境地から解放さるべき急務を主張し、然らば勞働は自然なる慰安であり、舞踏の如く愉快であることを說いてゐる。クロポトキンは現在の工場に於て機械力は職工を殺しつつある、何となれば職工は與へられた機械に生涯の奴隷となつて其他何物も爲し得ないのである。然し其れは惡い社會制度の爲であつて機械其ものの故ではない。機械には詩がある、と說く。

しかしこの卓抜な議論も一般の勞働生活に適應出來るかどうか。モリスの論は、それは工藝品の製作や野外の勞働の場合には適應する。クロポトキンの論も、現在の工場生活がもつと明るく幸福になり得ることを豫言する。それは確かに事實たり得るに相違ないが、かの鑛山や炭坑の生活や工夫や多くの工場生活にはいかに勞働時間が三四時間であらうと、それが毎日である時に、吾等は其處に果して享樂と創造的歡喜を感じ得るだらうか。モリスやクロポトキンの論は勞働の根本原理ではあるが、廣く一般には適應しない。一面に於て新鮮な感激を持ち得る「見物人」の心理であつて、實際に鑛山や炭坑や工夫や工場の生活をさういふ境地に導くには制度がどんなによくなつても、環境そのものから考へると夢想に近き遥遠を私は感ずる。

然しこれを農民の生活に於いて考へる。農民の生活は遥かに藝術的感興に近づき得るものと私は思ふ。換言すれば藝術そのものであり得る。大きな自然の中にあらゆる種子の成長と結實を相手としての勞働は、よき制度のもとに「勞働は自然なる慰安であり、舞踏のごとく愉快である」ことも當然あり得ることだと思ふ。同じく自然の中に勞働するものとしても漁夫のごとき危險はないので、大地の心を愛する淳朴な生活であり得る。農民が、現在のごとく粗食で窮乏でありながら、現在のごとく他の勞働者に比して比較的着實な精神と良き健康を保ち得てるのは、殆んど奇蹟的なことであつて、自然の惠與のいかに甚大なるかを語るものである。然るに現在の農民の生活はそれと全然反對である。苦痛そのものでありあまりに暗い。二重にも三重にも虐げられた生活である。

それはあり得べからざることである。

即ち他の勞働に比して、農民の本質は藝術的なるものである。農民生活の眞の歡喜は經濟と藝術の合致から來る。稔りの秋に於て萬頃の黄金の稻波を見るは限りなき喜びで、永い間の勞苦も恍惚として忘れるが、米價暴落と生活難とを思へば限りなき暗愁に襲はれざるを得ない。

經濟の安定は歡喜を確實に永續的にする。しかも此經濟事情を忘れてともかく或る刹那だけでも、三昧の境地にひたるほど農民の生活は自然に惠まれてゐるとも言へやう。農村の生活はもとより經濟組織の立場から大綱を論ぜらるべきであり、現今の常識となつてゐることをもつて一言すれば、資本家地主本位の社會制度の結果からの農村疲弊であるが、私は茲に部分的な問を基本として詩人的感激から管見を述べて見ることもまた農村改革の一面であり得やうかと思ふ。

さて、豐年であると凶作であるとを問はず、土地そのものの

問題として、地主對小作人の爭議は一層甚しくなるであらう。經濟、人道その孰れの方面からするも、地主が現狀よりも讓歩の餘地あることは見え透いた事實であるから仕方がない。

現在に於て小作爭議の最も多い福岡、兵庫、岐阜、愛知の各地にしても、炭坑若しくは工場附近のための新思想の感化と言ひ、他の北海道、東北等に比して耕地の不足と言ひ、若干の特殊の事情らしきものがあるが、それすらも他の地方が漸次その事情に近づきつゝある特殊であつて、換言すれば、最も普遍共通なるものの先驅をなせるに過ぎない。

豐作であれば凶作のやうに收獲を眼前にしての爭は少いだらうが、毫も小作爭議が緩和されたわけではない。吾が國に於ては俗にいふ五反百姓が多いのであるが、上田一反に一石二斗の小作米を支拂ふ契約をして、三石の豐年の場合を假定すれば、一反に付小作人の取り前は一石八斗となるのであるが、上田一石二斗といふ契約は殆んど地主と小作人が收獲折半の契約であり、小作人の方がもつと多く支拂つてゐるのが普通であり、各地で多少の異同ありと見て、豐年として一反から小作人は一石五斗前後の取り前と見るのが至當であらう。小作人は石數は多くとれるが、常にその幾分を賣つて金に換へねばならぬのであるから、米價の暴落の時は隨分ひどい目に遇ふわけである。地主は豐年と言へども一定の小作料だけしか取れないのであるから、米價の下落する豐年はあまり喜ばない。小作人も一石二十五圓として五石を賣つて二百二十五圓を取るよりも、一石三十圓で四石二斗で同一の金額を取つた方がいゝ、あまり凶作では無論こまるが、あまり豐作でなくてもいゝ。二百十日より三十日の前後は晩稻の花の盛りなるを以て農家には最も大事な時期であるが、農民はあまり靜穩で大豐作であることを喜ばない、微妙な心理がある、自分で三月でいくぶんでもいゝのを望むのが人情ならんに何といふ悲慘な心理だらう。

今年は未曾有の大豐作を豫想されて、最少限度六千五百萬石と言はれてゐる。或は新聞紙がそう傳へるのであつて事實は八分作だと說くのもあれど、ともかく上作であるに相違ない。

今、某實業雜誌に次のごとく書いてある。

『さて、六千三百萬以上の收獲を目安に置いて、幾何の相場を示すであらうか、それは容易に豫言出來るものではないが、今假りに東京の定期十一月限の相場（九月十六日）を取つて見ると、廿七圓五十錢を呼んで居る。左すれば、東北地方より北國筋の米を上中下平均の品質が東京定期米より一圓方低位に在るもの、即ち定期標準米に比して格下げ一圓と見積れば、是等の米は二十六圓五十錢となる。此の相場は東京着の相場であるか

ら、是等の地方から東京迄での運賃諸掛りを平均一圓五十錢と見れば、農家の賣値段は二十五圓となる勘定です、此の安値段で農家が賣るかどうか、之れが問題です』とある。

しかしその心配御無用である。農民は實に弱い際どい立場にある。十一月末から二月頃までかけて（新舊の年末に亘つて）、彼等は諸拂を實にこの米にかけて年末までの借りになつてゐるのである。田舍はまだ呑氣で魚、鹽、その他の消費品で年末拂ひになつてゐるものが可なり多いので、どうしても年末には金が要るのであるから。米が取れると直ぐ賣り急ぐ狀態にある。かくて米價の暴落は毎年繰り返さるゝ事實である。米價が市價一石四十圓前後の時は農民は二十圓もしくは十八圓に賣拂つて金に換へたものも多い。農民が個々に米穀商の門前に賣りに來る場合に、その價踏みは殆んど米穀商の自由であると言つていゝ。農民は米の一般的相場は知らない。金を有難過ぎてるし、掛引を知らない。一年間の粒々皆辛苦もたゞ投値の數枚の紙幣に代へられるのである。その場合金に豐たかなる地主は何も賣りいそぐ必要はない。悠々として良き機會を觀望する。

こゝに於て、米を農民は如何にして賣るべきか、といふ方法と、米價そのものの調節の重要であることを暗示する。

小作人の前門の虎は地主のみにあらず、この後門の狼は狡猾なる商人にある。

先づ事實に於て見よ、私の生れた町に於ける第一位の富豪は、赤手空拳より起れる米穀商である、その地方の農民が粗朴であればあるほど、米穀商の懷はふとるのである。

國家がこれに對して保護經營の任に當る米穀國營も一方法であらう。が、それを望み得ないとすれば農民相互が一種の組合をつくり、相當の顧問、指導者を置き自衛の途に出る外ない。

自作農と小作人

今、自分の考案の基本としての、農村の悲慘なる狀態を具體的に示し、經濟上から見て農業とはいかなるものなるかを明にしやう。

（宮城縣下に於ける大正十一年度調）

（一）稻田一反の收支決算

（支出）

（イ）耕作の部

肥料
- 豆玉二枚（今年は一枚二、五〇円—二、六〇円）……五、二〇円
- 燐酸一俵……二、一〇
- 人糞販肥料五馱（自家のものゆゑ價格不明なるも一馱〇、四〇と見て）……二、〇〇

種籾代（五升、白米の約半格）……一、二五円

合計……一〇、五五

（ロ）勞働の部

一反に二十人（食糧は働人もちで一人一、〇〇円）……二〇、〇〇円

苗代一人……一、〇〇

合計……二一、〇〇

（ハ）租税の部（税金は町村によりて異同あり）

田租……一、〇〇円

村税……三、〇〇

雜税……三、〇〇

合計……七、〇〇

支出合計金額……三八、五五円

（收入）

米收穫高　二石（今秋の米價大暴落により一石二十八円と見て）……五六、〇〇円

藁代……六、〇〇

收入合計……六二、〇〇

以上總差引收益……二三、四五

一家三人の働人あれば一町歩（十反）の田を耕し得る故、

一ケ年の純收益……約二四〇、〇〇円

養蠶業の純利得……七〇、〇〇

雜收入（日雇賃その他）……二〇〇、〇〇

總收入合計……五一〇、〇〇

自作農の生活狀態

一家三人の働人ある家で三人の被扶養者ありとすれば家族人員六人となる。いま一日、一円五〇の經費として、一ケ月四五円、〇〇、一ケ年に五四〇円、〇〇を要す。之で收入の五一〇円、〇〇と比べると三〇円、〇〇の缺損となつてゐる。家族六人で食費だけではなく社交費教育費、娯樂費等の一切を含めて一日一圓五十錢の生計は可なり切りつめた生活である。一町の田を耕す家で六人の家族といふのは多い方ではない。病人があつたり、冠婚葬祭の費用がかかつたりする場合は直ぐ借金せねばならない。自作農が立ち行かないといふのはこれを言ふのである。現今の經濟組織の下では自作農が土地を失ふのは當然である。

小作人の生活狀態

一町を小作する者、

（イ）一反二石收穫のうち一石を地主に納む

（ロ）租税は殆んど地主の負擔とす、

（一）收入

小作米差引所得　一〇石　二八〇、〇〇円

（二）支出

肥料代　九三、〇〇円

勞働賃　二一〇、〇〇

雜費（種籾代、農具損料其他）　二〇、〇〇

總計金額　三二三、〇〇

差引缺損　四三円〇〇

自己の勞働賃を收入と見れば、百六十七圓だけ殘るわけである。試に一町五段を耕すとして計算して見たらやはり六十圓ほどの缺損で、自己の勞働賃を收入と見て二百五十圓ほど殘つた。

これで前例の六人家族とすればそれなら、どうして暮らしてゐるかゞ疑問であるが、着るに襤褸、食ふに雜穀、住むに豚小屋のやうな陋屋を以てし、その他に賃仕事などを餘暇にして辛じて生命を凌いでゐるのである。

東北地方は日光の照明が短いので、九州、中國の地方のやうに三石乃至四石などといふ收穫がなく、そのかはりに、五反百姓でなく、土地の耕作地面からすれば平均一戸一町位は小作してゐる割合である。然し一反三石取れる地方でも地主一石八斗、小作人一石二斗（奈良縣下十一年度調）では小作人の一町の收穫高は十二石に過ぎないから、やはり、その生計狀態は東北地方と大差ないと見ねばならない。

農民は確實な經濟觀念に乏しいので、たゞ困る困ると言ひ乍らその日を極貧の中に送つてゐるが、收支を明確にして見たらいかに社會のどん底に下積みになつてゐるかを知るであらう。

我邦の小作約百五十萬戸（それも年々増加しつゝある）、家族約一千萬人の生活狀態は、現今のやうな社會制度の下では、平作でも豐年でも常に饑餓に脅やかされてゐるものである。

二、土地は地主のものであるか

小作農より自作農へといふ聲がする。各人が五反乃至一町位の耕地を所有することは堅實な社會に相違ない。しかし現在のやうな經濟組織では、いづれの自作農も年々缺損つづきであることも事實である。自作農も堪らない、何故かといふに、地和、肥料、生活費をさしひくと、若干の借金が殘るのが普通である。自作農さへ土地を棄てるのに、小作人が今更、土地を持たうとするものか、またそういふ能力もあり得ない。四五年まへまでは農民は土地を持つことを望んだ、土地は利廻りが合はぬほど高かつた。愛知縣知多郡では一反二千圓から四千圓までしたが、それでも自作農はひどい工面してまで土地を買つた。今日では土地は不利なことがわかつて、千圓位でも買手がないといふ仕末である。

町村の中流に位してゐる一町歩位の畑を有する農家の租稅はどんなものか。今、大正十年度にかける宮城縣下の某町の某家を記載して見る。

地租稅

田反別	一町二畝二步	地租五圓八十九錢四厘
畑反別	一反二畝八步	地租六十錢六厘
宅地反別	六畝十四步	地租五十四錢
山林原野	二畝一步	地租三厘
計反別	一町四反二畝十八步	
地租合計	七圓四錢三厘	

雜稅

田租、宅地租、倉庫稅、戶數割、町稅戶數割、町稅戶數割附加稅、縣稅地租割、縣稅戶數割、地租割追加、縣稅地租割、所得稅、所得稅附加稅、所得町稅附加稅、縣稅所得稅附加稅。

右稅金、百十七圓五十四錢

總計百二十四圓五十八錢三厘

　此の小農に課せられる稅金の種類と金額のいかに多いことよ、その外に神社佛閣の寄附金等も決して少くない。殊に寄附のごときは決して財產に比例するものでないことは當然で、下に重く上に極めて輕い。

　これ位の農家では畑の物は自給自足で、賣り出るまでの餘分はなく、必竟、米の收穫によつて一切の支拂と生活を營むわけであるが、一反からこの地方での收獲率から見て平均二石二斗としても二十三石によつて凡てをせねばならない。

　しかも一石二十五圓の賣價として、稅金のために實に五石、肥料代（百圓と見ても決して過分ではない）のため四石、差引き十四石を以て家族六七人の一切の生計をたてるわけである。

　以上はほんの概算ではあるが、大ていの農家の生活はこの狀態を往復してると見て差支へない。それに養蠶等の副業をやつて、百圓なり百五十圓なりの收益をあげて生活に辛うじていくぶんの餘裕をつくるが、それとても家內總がゝりでやることであつて一日の勞働賃金は一人前微少なものである。もし人を傭つて養蠶をやつたら、現在の二倍の高値になつたとしても割に合ふものでない。その養蠶とても氣候の不順の場合の豫想もせねばならず、必ずしもいつも上出來と限らず、米作同樣に上出來でも破格に値段の安い時もある。自作農でもこれだけの切りつめた生活である。況んや五反百姓の小作人に於て、寧ろ生きてゐるのが不思議である。水飮み百姓とはよく言つたものである。自作農でも人間として最低限度の生活である。自ら智識・情操の糧を他に求むることも、子女を普通教育以上に教育することも不可能である。

　しかも天候を相手の仕事であるからいつ凶作になるかわからない、一度凶作になればその痛手は三四年回復しないと言はれてゐる。そのために土地を失ふものも多い、地主はそういふ時こそ土地兼併の絕好機會である。農民は一度借りたら最も早

くもその幾年の秋にならねば返濟出來ないのである。これらを思うても豐年の場合になんとか農家に餘裕あらしめねばならないわけであるのに、事實は平作と大差ないのである。

土地は地主の所有であるかも知れないが、それを精檢したら「人の弱り目」につけこんで土地を兼併したものが大部分であるに氣付くであらう。農民は朴野にして世の中の事情に暗いものも多く、殊に凶作とか戰時に於て、もし冷酷に牙を磨く地主にかゝつたら、農民は一たまりもない。いまはそんなこともあるまいが、曾ては農民に證文の智識がないのに乘じて一度たしかに返濟した金をまた返濟させたといふ地主の話さへある。

勿論地主となり得たものには、非常の勤勞の結果であるのもあらうが、眞に正當な努力によつて贏ち得る土地は知れたものである。そこに法網にふれぬ程度の殘虐が働いてゐないとも言へない。その大部分は不當な一種の掠奪である。

その一例を示して見る。私の町近き一豪農は、宮城縣下での有數の大地主で、八百町歩の田を獨占してゐるが、その大部分は一代に於て獲得したものである。それはどういふ機會であるかと言ふに、卅七八年の日露戰爭に於て其の地方で一家の働き手の壯丁が戰傷するもの多く、ために打撃をうけた家も多かつたし、國民熱狂して重税の負擔なども物ともしなかつたのであるが、農村が少からず疲弊したことは言ふまでもない。しかしそれよりも重大なことはそれに引き續いて襲來した三十九年の東北の饑饉である。この大凶作のために田畑を有する農民はそれを抵當として借金した。若干の借金に利子を殖やし現在の時價七八百圓(東北地方は安い)もする一反の田を、僅か十五圓乃至八圓の元金から併合することが出來たのである。農村が擧國一致の戰爭奉仕のための疲弊、地人とともに泣くべき饑饉の際の困憊に乘じて、ひとり吸血兒の哄笑をしたものはこの地主でなかつたか。當時最低の地價二百圓のものと思定しても、それを十五圓や八圓の、(しかもこれをさへ返せぬほど悲慘な)貸金をもつて、一反の田を掠奪した地主、それを掠奪されて再び立つべからざる小作農となつた幾千戸を考へて見よ。これは社會の縮圖である。果して現狀の地主の土地は地主の所有であるか。

私は小作農が自作農となることが喜ばしいことと、思つてゐるが、土地分讓といふ美名の下には、小作爭議の多い場合である、土地を他の利廻り多きものに代へて置かうとする醜い心が隱れてゐないとも限らない。現在の時價で小作人に讓ることが美事とされるほど、今の主地は併合慾の塊であるのか。自作農さへ立ち行かぬといふので土地を棄てる場合に、小作農に土地を持たせる場合にはもつと可能なる道筋をつけてやらねばなら

ぬ。ほんの少額の補助金や、土地購資入金の低利融通と地價の比較的低減では誰も相手になるまい。しかもその程度の施設を以てしても農民の土地を購入するものが、その地方ではいくぶん增加してるといふことだから、農民の土に愛着する心はまだ絕望ではない。ともかく、その點に於て地主に於てもつと既往に溯り、人間的自覺を持つて、土地分讓にあらずして土地返還の心持まで行つたらどうか。少くとも小作人に讓渡する場合に於ては、土地返還の心理を核心として成案された時價の半額以下の自作農成案でありたい。私は其處に何等の不當を見ない。それともそれは詩人的空想であるか、學者の或者は現在の社會制度を無條件に肯定して次のごとく言ふのである。

『農業政策を論ずる者の注意すべき一事がある、凡そ小作爭議は地主と小作人との間の利益分配に關する爭ひであり互に配分の多からんことを欲するに胚胎する、然るに今日の實際を觀れば一の爭議起る毎に一般の同情は期せずして小作人側に聚められる、此を以て觀れば、多くは非は地主に在りと觀る、即ち地主は讓歩す可きものを讓歩を肯せずして不當の利を貪りつつあるものと觀られて居るのではあるまいか、其非を負はされる地主の收益も稍や穿鑿の歩を進むれば、薄きこと前述（利廻り五分以內）の如きものであるとすれば、彼等地主及び小作人の双方が共に同情に値ひするものではあるまいか、言葉を換へて言へば國民分配の取り前を、彼等双方に一層增加してやる必要はあるまいか……。』

法學博士氣賀勘重「實業」十月號十頁所載

現在の地主といふものの多くは、その土地を併合する場合に、僅少の貸金から農民の弱味につけ込んで集め得たのであつて、純粹に購入價格を支拂つて『投資の目的で土地を買入れた』ものは極めて少いと見て差支へない。かく外觀上見えるものも多くは高利貸式の土地併合と見るのが至當である。以上氣賀博士の所論のうち最後の圈點を附したる所を注意すれば、小作人にも多少の同情あるごとくにして、實は小作人の敵であることを讀者は氣附くに相違ない。かゝる現狀維持の穩健思想は、地主の勢力をのみ一層增加せしむるに過ぎない。地主は現在の土地にどれだけの購入價格を拂つたか、(その當時の物價に比例して考へても)を冷靜に考へて見るがいい。然らば、もし人間的良心あるものなら、時價を標準として利廻りの薄いことを喞くを止めたがいい。また地主の溫情主義も今まで排すべきであつて、人間全體の幸福を考察する下に、小作人の立場になつて、徹底した改革案を地主が立案すべきである。しかも斯かる劃策を地主側から望むは北極星の墮つるのを待つよりも愚である。なほ地主のあるものは土地を國家に讓渡したき土地國有をさへ運動してゐるものがあるとのことである。小作爭議の先を見込しての小賢かしき行爲に出た積りなのであらうか。ともかく、地主の土地分讓はもつと小作人本位に計劃されねばならない。かの小作米獎勵法とか小作慰安會とかいふ地主連の施設は

一として結局自己のためにする美名であつて、小作人はどれだけそれによつて幸福なり得るか疑問である。かのお上の施設である産米檢査、俵裝檢査のごときも、農業の進步ではあらうが、同時に地主に得あつて、小作人に損なものではないか、俵の重さを一定にして檢印を捺したるものを用ひ、米をつめて更に檢査を受ける。三等米以上を地主に納め、然らざるものは石數を多くして納付せしむるといふ産米檢査は地主に好都合なものでなくして何であらう。しかも小作人の手數は不問に附せられてゐる。小作人は自分等の施設のために一致結合せねばならない。現在の小作爭議の狀態は尙ほ斷片的な過程である。そしてこの小作爭議の前方に國家といふものの施設の正體をも明確に自覺して、全體的な行動に移ることも豫想出來やう。人間は忠實に働いてその幸福でない場合に、靜かにその原因を考へる。今後の人間は宿命的な忍從のみをしないであらう。

三、土地荒廢の悲劇

食糧問題が喧しく、米穀の生産の不足を外國に仰いでゐる一方、内國に於て未墾の土地も可なり多く、既に開墾された田畑も農民の最善の努力が拂はれてゐない、そればかりでなく日に日に不安な農民の生活狀態に比例して、土地が荒廢してゆく。

統計に依ると三四町の地主が減少して小作人が每年殖えてゐるが、自作農は土地を愛するが、小作農は手入れをして豐富な收穫を得ると年貢を上げられる惧れがある、それで小作人の心理には苦心するだけ損だ、いゝ加減にして置かうといふあやふやな氣持がある、せつかく土地を肥沃にすると年貢を多く地主から要求され、拒絶するとその土地を取り上げられるといふ弱味がある。永小作權は民法の上で認定されてゐるが、地主がこの特典を小作人に賦與してゐるもの殆んどない、各地にある地主組合に於ては、

「小作米ヲ延滯不納セシ小作人ニハ地主ハ小作セシメザルモノトス」等と何かといふと「小作セシメザルモノトス」を振り廻してゐるのを見てもわかる。

小作爭議にも二種あつて、群馬縣のやうに、桐生、足利の地方に近い土地で、賃織を副業として織賃一反一圓五十錢位をとつてゐたものが二十五錢位に下落したために、人々が土地に執着するやうになつたものと、愛知縣のやうに名古屋に於ける都市計畫や工場建設の人足の需要から土地を離れるやうになつたものとの二種類ある。各地の割合をいづれかと言へば、賃金の多い人足、坑夫職工となつて土地を離れる傾向が多い。かの愛知縣愛知郡鳴海町地方の小作爭議はそれであつて、大正六年から十年の春にまで引續いた爭議が遂に交涉不調となつて、六十餘町步は地主自營といふことになつた。一方その土地の農民は名古屋から手を廻して高い賃金で依賴しくるものに應じて、鳴海町から二里、横須賀町から四里半もある路を自轉車で往復して出稼するといふ奇觀を呈した。地主等はその耕地に植ゑる苗を農會等の斡旋で諸方から自動車によつて集め、技師を雇

ひ、數百の勞働者は汽車、電車で集められた。しかしその成績は思はしくなかつた。そして殺人事件さへ惹起した。それは請負人が勞働者に拂ふべき賃金の上は前をはね、肥料を買つたと稱して買はず私腹を肥やしたのが暴露したので、地主や勞働者に激憤されるところとなつた。その結果、彼が町の居酒屋から醉眼朦朧としてよろめき出た所を、釘のある古杭で撲殺されたのであつた。

　また福岡縣の北方のやうに炭坑のあるために、農事にいそしむものは老幼だけであり、小作爭議もない代りに土地が荒蕪してる狀態のものもある。(小作爭議は土地の肥沃な南方に多い)。田川郡金川村の如きは、家に殘るものも甚しく農事不熱心で、植付きも收穫も遲く、冬が來るといふのに籾のこぼれる儘に刈られざる田もあるとのことである。

　他の勞働が割のいい爲め土地荒廢の縮圖として、また一小例を舉げやう。香川縣小豆郡と稱せられる小豆島は、高松から東北八里の海上にある周三十里の小島であるが、その稻羽村堀越といふのは、半農半漁によつて生計を營んでゐる。花崗石を產するので石工も多く、また醬油釀造業に雇はれてゐるものもある。概して耕地不足で水田といふものもなく、主食物は米二分、麥八分が普通であり、中には麥だけのがある。米四分といふのは餘程贅澤な方である。一戶あたり畑四反位を耕し、大部分麥をつくつてゐる。夏物は唐黍、粟、芋をつくる。耕地が不足であるに係はらず、荒れてゐる土地が多い。昔は山の頂邊まで開墾したものであるが、今はその開墾地が荒蕪に歸してもとの山となつてゐる。それは稅金と肥料が高いため手びろくやるほど損であり、ために阪神地方に出稼ぎに出るものが多くなつたからである。昔の人は厭でも應でもこの島で大部分、生活したらうが、交通の便利な今では、そうした土地に執着する必要もなくなつたのである。

　この島では(他の農民のそうであるやうに)働いても働いても貧乏たらざるを得ないのである。この村の福島といふ家には老いたる兩親とその三人の兄弟があつた。長男夫婦に子が三人あり凡て九人家族である。三十五六の長男ははじめ船乘りになつたが思はしからず、歸つて來てもいゝこともなく、三四回行つたり舞ひ戾つたりしてゐた。家が貧乏で四反ほど小作してゐるが、常に借金がかさむのである。それから日傭になつたがうまく行かず、郵便配達をやつて自分達夫婦と子供三人だけで分家して暮してゐた。次男は船乘りになつて行方不明になつた。三男は眞面目な勤勉な男で、兵隊から歸つたばかりで、醬油釀造家の樽叩きをやつてゐた。やがて父親が亡くなつて老母だけ殘つた。するとその老母を殘して行方不明になつた。老母のみ一人捨てられたのである。屈强の男子三人ありながら誰にも世話になれない。それは若者どもの性格の悲劇ではない。彼等は(少くとも長男と三男は)勤勉であつた。いくら稼いでも環境は彼等を幸福にしない。種子は聰明にこの瘦土を見棄たのであるが、現在の社會制度の下に於て、忠實に働くもの果して正常

に報ひられるか。種子の個性を充分に成育せしむる土はどこにあるだらうか。

現在の社會制度の下では、土を離れて人間が生活出來ないに係はらず、土そのものを人は見棄て、人そのものを土は見棄ててゐる。

吾が國に開墾すべき土地が多い。しかも既に開墾された土地が痩せつつある。充分にその生産をあげてゐない、これは單にこの島だけでない。

四　地主の溫情は人生の冒瀆

地主も冷酷な者より溫情ある人に越したことはないが、地主の溫情といふものも、自分を現在の高位に据え置き、その生活に何等疑惑を持たぬものが多い。社會は毫も其處から革新の曙光が見えない、それは微溫なる現狀維持であり、人生の冒瀆である。

讀者は次のやうな一文を讀んで、どんな感想を抱かれるや。

「舊式の外套を無造作に引つかけ、小袋を提げたる三十恰好の青年がキヨトキヨトと人待顔に四邊を省みつつあるに出會つたので、互に名乘りを擧ぐれば、果して尋ねるその××氏であつた。此が資産七十萬を有する縣下の大地主、多額納税者なるかと予は一種の感に摶たれざるを得なかつた。今だに印象深きは、小作青年すら舊式を以て冠らない頭布の垂れたる同氏の外套である。展覽會を一覽して、上野公園の共同ベンチに休憩して、落花を浴びながら地方經濟に就て理想を語り合ふた。其の時氏の腰に一種異様の蝦衲様のものものの吊されてゐたるを見た予は其はと詰問した、是ですかと微笑しつつ氏の取つて予に渡されたのは、小作人の住所氏名を詳記したる、名札を一括せるものであつた。

「小作人は地主にとつて子です、親が子を忘れてどうして親たる務が果たせますか、私は朝晩これを離したことはありません、可笑しいといつて人が笑ひますが、わが子を伴れてゐて笑はれてもしかたがないです」

と質樸なる口調で物語られ、何某等の小作人の名札を繰つて、此の小作人は一番眞面目であるとか、ここに模範青年がゐるとか、此家の女房は働き手ですとか、之の家はよくよく働くが子供が多くて困つてゐる。その長男を何んといふといふやうな詳しい細い事まで、手に取るやうに物語られる。余は氏の話よりも、氏のその眞面目な態度に感動せざるを得なかつた。溫情も此の境に到つて欲しいものである。

氏はいつも下谷の萬佐旅館に宿をとられる……刺を通じて通されたのは、二階の一間で、氏は大卓の前に一人の青年を相手に、山と積んだゑはがきを西洋封筒に挿み込んでは、處理して居られる。聞けば今小作人へ便りをするところであるといふ。

『何でもないが、こうして二三枚でも私から送りますと、喜ぶのですよ、田舍は子供が多いのですからね、東京のゑはがきといふと珍らしがりますよ、子供の數だけ送りたいですが、さうも參りませんが、まあこれが私の道樂です、この青年は私の村の出身で、學校へいつてゐますが、今日手傳ひに來て貰ひました。何しろ何百人となりますので、今夜は夜中かかりませう、お金にすればしれたものですが、一晩帝劇へゆくだけあれば餘る位です。然し心持ですからね。』

青年は二枚づつ封筒に入れ、氏は萬年筆をもつていかにも忙しさうなので、長座せずに歸つたが、その時、益々氏の小作愛護の熱情に

動かされた、一事は萬事である、同氏が小作の信望を一身に纏めて、地主小作共樂の理想郷が作られつゝあるのは誠に偶然でない：：愛は一種の社會政策である。

天野藤男著「地主と小作人」二三五頁

これは確かに現代異數の溫情ある地主であらう。それほど今の地主といふものは冷血漢が多いことを裏書きするものであらう。しかもこの愛は小作人に何に値するだらうか。私は斯かる種類の愛を「愛は地主の處生術である」と書き換へたい。私は餘りに忠實なる農民の窮乏悲慘を知り過ぎてる。この場合地主はまるで童話に出てくる王樣のやうに幸福な氣分である。人々はこの溫情行爲の中に驚くべき人生への冒瀆が隱れてゐるのを見ないか、この地主の行爲は無論計畫されてしたものでなく、純粹に小作の子供等を愛する動機からであることを私は認める。しかし餘りに新思想を知らな過ぎ、全體の人間としての自覺を缺き、魂が眠つてゐると私の見るのは酷であらうか。それは小學卒業程度の學識ある好人物の見識に過ぎない。淺薄な溫情である。この場合、地主は主權者であつて農民の一人ではない。しかしそういふ心掛けが既に人間としての冒瀆だ。しかも地上の特權を無條件に肯定して他に臨むも、彼の祖先はどんな惡行を小作人等の祖先に働いて土地を集めたかも窮め知らんとも、疑はんともしないであらう。他より（小作人より）幸福の全部を奪つて置きながら、繪葉書二枚づゝを小作人に送つて喜ばせる。私はそれを單に兒戯として笑殺しはしないが、かゝる地主も百尺竿頭一步をすゝめて、小作人を幸福にしようとする魂を見開かんことをすゝめる。人間相互の禮拜、自然禮拜の中にのみ人間の眞生活のあることを知つて貰ひたい。溫情主義の地主よ、小作人に働かして自分で善人ぶる蟻の王樣よ、幸福な時代おくれの王樣よ、その天國に入るは象が針の穴をくぐるより六ケ敷いと知れ。

五、小作人の經濟的獨立と人格の自由

しかも地主の溫情に狎れ、尾を振る犬のごとく地主の前に生活しなければならないほど窮乏に陷り、良心の麻痺してゐる小作人も亦哀れである。

小作人が著しく自覺して來たと言ひながらも、この因襲が可なり根深く張つてゐるやうだ。いま大地主の多い新潟縣下に於ける地主の溫情主義と小作人の屈從とを一例にひく。

それはどういふ風かといふに、小作人は夏期にでもなつて、喰ふ米がなくなれば、平氣で地主に米を借りにゆく、地主は借さないわけに行かない。必ず一俵か二俵持たしてやるきまりになつてゐる、地主は小作人にとつて或る意味で生活の保證者である。小作人はその借りた米を翌年の小作料と共に支拂ふかといふにさうでない。借りた米はそのまま永久に支拂はないことになつてゐる。それを何年も繰り返してゐる。つまり相互に小作料の支拂と受取が不精確である、そのかはり小作人は地主から年に三十人分位の賦役を無料で働くことになつてゐる、何かある毎に呼び寄せられて『ヘイ、ヘイ、』と働くのである。つ

まり人間の勞働力に對して相互に不精確である。

そして、どちらかと言へば、小作人には「世話になつてる」といふ觀念があり、地主は恩惠を施してるといふ觀念がある。前者は召使の狀態であり、後者は旦那樣である。

小作人のもつと無力なのになると、地主のたてた家に家賃なしに先祖代々住んでゐる。さういふのになると地主の命令なら何でもきかなければならない。それほどでなくとも小作人の多數は微小なことにまでも地主の意向を伺はねばならない、世話になつてゐるのは、羽織一枚すら勝手に新調は出來ない。それはその筈かも知れない。この間、喰ふ米がないと言つて借りて行て、その後に羽織でも新調したなら地主の機嫌も惡からう。小作人はいつまでもした手に出なければならない損な立場である。それは、これまでの小作人の狀態である。何もさういふ生活を喜ぶわけもないのだが、因襲の久しき、さういふものと運命的にあきらめて來たのである。

小作人はとても暮せぬといふ所から地主に米を借りる、地主は舌打ちしながらも貸す、これまでは、小作人の方も『働いたのだからこれ位のものを借りにもいゝのだ』といふ幾分の反抗心を持つ者さへ殆んど無かつたのであらう。其處に卑屈な精神が植え付けられる。地主もまた『これ位はやつてもいゝ』と暗々裡に思つて貸しはしまい、やはり呉れてやるのだといふ恩惠施與の心が强い。

これまで、小作人の小作料支拂の不精確、地主が小作人に無代に賦役させる勞働力、それらは今後、小作人の分け前が多くなり生活の保證がつけば、相互の境界が直ちに明確になり得る。根本は單純である。小作人はもはや鞠躬如として地主に哀願して米を借りなくともいい、地主は無代で人を働かせやうとする横着心も起きて來まい。小作料と勞働力との境界が霧が晴れたやうに明らかになる。それは人格の自由と獨立の獲得である。地主も人間として冒瀆をしない生活に向ひ得るわけである。過去千餘年間も、地主と小作人が斯かる哀れむべき不明瞭な濁つた氣分のなかに生息して來たといふことは實に驚くべきことである。

小作人のこの卑屈な精神は、その結合の場合に、他の勞働運動の場合よりも、更に多く地主側に立つ者あることも豫想出來る。

倚らば大樹のかげといふ心理から、阿諛の心ある小作人は譬へば餘り上作でない年でも、地主に眞先に何の不服もなしに小作米を納入する。するとその次に行つた小作人の小作米差引の哀願は、さきの模範小作人の例をひかれて、止むなく悄々と引下がらねばならなくなる。地主の腹心として常に奉仕してるこの小作人のごときは、小作人仲間の反逆者であり、他人の不幸を食ひ者にするものである。

また小作爭議の場合に、皆と團體して地主に盾をついて置きながら、あとになて、『脅喝的にすゝめられて餘儀なくはいつた』といふ風な言ひ譯をするために地主の門を潜るのもある。

これらは、ほんの一例だが小作人の教養自覺といふものはなかく\/前途遼遠である。

六　農民は幸福であり得るか

農民の生活狀態は僅少の穀物蔬菜の自給自足と、米を賣つて代へる若干の金圓によつて生活するに係はらず、唯一の金源であるその生産せる米の價格は不定でもり、最高を豫想しても生産費に合はない、その上にその生活の環境はどんなものであるか。最も重要で割の合はない小作米、可なり高い租税に就ては既に説いた。今、其他のものに就て素人らしい考を述べやう。

(イ)日用品、

穀類、蔬菜の外に生活に必要なる一切の日用品、酒、醬油、油、薪炭、等。これ等の價格は甚しく不廉である。更に農産物の價格は他の何よりも割合に廉くて、その購買する時は諸物價に比して一番後れて上り、其の下落する場合には眞先に而も甚しく下るのが常である。現在、米價と他の物價とは均衡をとれてゐない。數年前米價五十圓の時と價格が同一なものやそれ以上のものが多いのに、米價は現在三十圓以下であるのを見てもわかる。それのためには完全なる購賣組合等の設置が必要である。

(ロ)肥料

肥料もなかく\/農民を胡麻化して利益を取り得るものである。ほんとうを言へば各々の土地に應じ作物に應じて肥料の成分が異るべきであるが、今の農民にはかゝる科學的智識が絶無であると言つていゝから、たま\/農業技師などが、買收されて或る肥料會社の肥料を宣傳すれば直ぐそれを使用するといふことになる。どれだけそれが効果が擧がるか不明である。農民が自發的に肥料の試驗をやればいゝのであるが、それは今のところ到底望みがたいから、模範的な農事試驗場をこしらへて、種々の肥料を施して成績を見せるがいい。科學的施肥といふことはいかに重要であるか。たとへば群馬縣の利根村地方に於ては陸穗、白菜が絶對に出來なかつたのを、久保田正森氏が科學的な施肥を敎へてから出來るやうになつた。

(ハ)種子

農夫は種子を自分で取らない、胡瓜、玉菜のやうなものは取るかも知れないが、最近農事改良といふので種子を東京若しくは最寄りの都市から取り寄せるもの中々多い。郵便局などでもその多いことに驚く位なそうである。ところがその種子に正當なものが少い。半分位古いのを混入して萠えぬといふのはまだいゝ方で、小さくて丸くなる聖護院といふ大根の種子を買つて蒔いたら、普通の大根が生へたといふのや、白菜を蒔いたら、普通の菜が生へたといふ話がある。東京あたりの確實な處に注文したのは未だいゝだらうが、種子賣りとして入り込んだものに中々いかさまものが多い。せつかく試みを樂しみにしてゐるのにそれを根柢から傷つけるものであつて、田園の富と時を減殺するものである。種子は小問題のごとくにして、中々重要のことである。もつと廉價な確實な方法で農民に種子を手に入れしむべきである。

(ニ)贅澤品、

好景氣の時は、時計、指環、衣類等、いかにいかさまものが田舍に入り込んだか、好景氣のときに限らず現在でもそうである　田

命の人は鑑別眼がないから、一疋卅圓の大島銘仙を八十圓位に平氣に買はされるのである。贅澤品を買ふ人はまた餘裕があるのだとも言へない。折角欲しいと思つたのだから、不正な商人にかゝるのは氣の毒である。これ等の商人も田園の空氣を亂す犯罪者、一種の詐僞である。取締が必要である。

(ハ)勞　力、

村道、學校、寺院等の割あて。

(ニ)寄　附。

これは中流階級以下が却つて負擔が多い、租税に比例して富豪は多く出してはゐまい。

その他、水道鐵道電信電話等の文化的施設に縁遠く、人間の生命を司どる醫師に良醫ないのに係はらず、遼隔の村落から夜おそく戸を叩かれては醫師も出澁る、しかもそういふのに限つて匙を投げるほど重態なものが多い。農民が町から醫師を呼べば少くとも十圓札一枚は飛ぶので、大事件であらねばならない。精神的方面を見ても娛樂機關がない、圖書館の設備も同じい。かくて、農民の生活は幸福であり得やうか、農民に自由なものは水と空氣と山水の眺望と日光だけであると言つても過言であるまい。殊に小作人は必要に迫られて、米を安値の時分に賣り、高値の時に買つて食はねばならぬのである。

いづれを見廻しても農民の生活はどん底の生活である。都會の貧民も幸福ではなからうが、農村の大部分がかく不幸であることは吾等人類全體が大に考へねばならぬことである。吾等の生活の革新は先づ資本主義本位の社會、經濟組織の改革にあるが、その大綱に就て別にその人ありと思ふので、私は微小と思はれる以上の細目を具體的に擧げて見たのである。

農村の不合理はその依つて來るところ遠い、その題目は廣汎であつて、何から手をつけて論及したらいゝかわからない。しかも所定の枚數を遙かに越えたので、終末に急がう。もし藝術的精神的な改造の方面から言はゞ、農業教育に新しき思潮を理解せしめ同時に詩味ある教育を行はねば、前述の農業の本質からしても、完全なる農業者も農業指導者もあり得ない、だが現在の教育制度ではそれを望むことは無理かも知れない。

社會といふ着物の仕立方は學者が教へる、しかし各地の土地に適應して直ちに實行し即ちその着物を着せてやることは良き指導者に待たねばならぬ。

ともかく農村生活は經濟と詩と科學の合致完成によつて美しき幸福が得られる。その三者のうち孰れが基礎となり先行するかを論ずる必要はない。遺憾ながら、今のところ農學校卒業生に新社會の指導者として餘り多くを期待出來ないから、殊に職業に對する情熱がないと思ふので私は農村生活に必要なる此の三者を加味したる平易なる農民讀本の必要を痛切に感ずる。農民生活の幸福の宣傳用としてである。其の詩は人間の協力を根本精神とせる古き不正の一切を破壞しゆく地上禮讃の農村讃美の詩でなければならない。

東京帝國大學教授 島地大等氏序

朝日融溪著

感想 一筋の白き道へ

四六判最上装 正價金一圓五十錢 送料十二錢

〔親鸞聖人の出現と思想 壹圓八拾錢 送料十二錢 姉妹篇〕

淋しいと歎く前に己の心をみつめねばならぬ悲しいと慨く前に己の心を顧みねばならぬ心の外に世界は無い。自己の心の内にあるものをのみ外界に見るのである苦悶鬪爭の世に生きてゆかねばならぬ人間は與へられたる『一筋の道』に依てのみ救はれるのである。

◇東京帝國大學教授 文學博士宇野哲人氏新著◇

第六版 支那文明記

寫眞卅餘個 石版彩色畫

四六判最上装美本全一冊五百頁

貳圓八拾錢 送料十八錢

【史學雜誌評】本書は著者が先に歷遊したる所に據り支那の珍奇なる風俗習慣を描いて精細を極む山東の聖蹟歷代の帝都たりし長安洛陽及武漢南京鎭江蘇州杭州等の名所舊蹟は勿論都市高山大河をも綴密なる觀察を以て流麗なる筆致を揮ふ日本人は多く支那の歷史を知り地名を知り亦支那の詩文に通ぜり此の多少の智識を有して本書に對すれば興味津々として湧くが如く尚卷末には支那の社會事業家族制度國民性論あり内容充實殆んど一の閑文字なく蓋し近來稀に見るの好著である。

早稻田大學教授 内ケ崎作三郎
工藤直太郎 新著

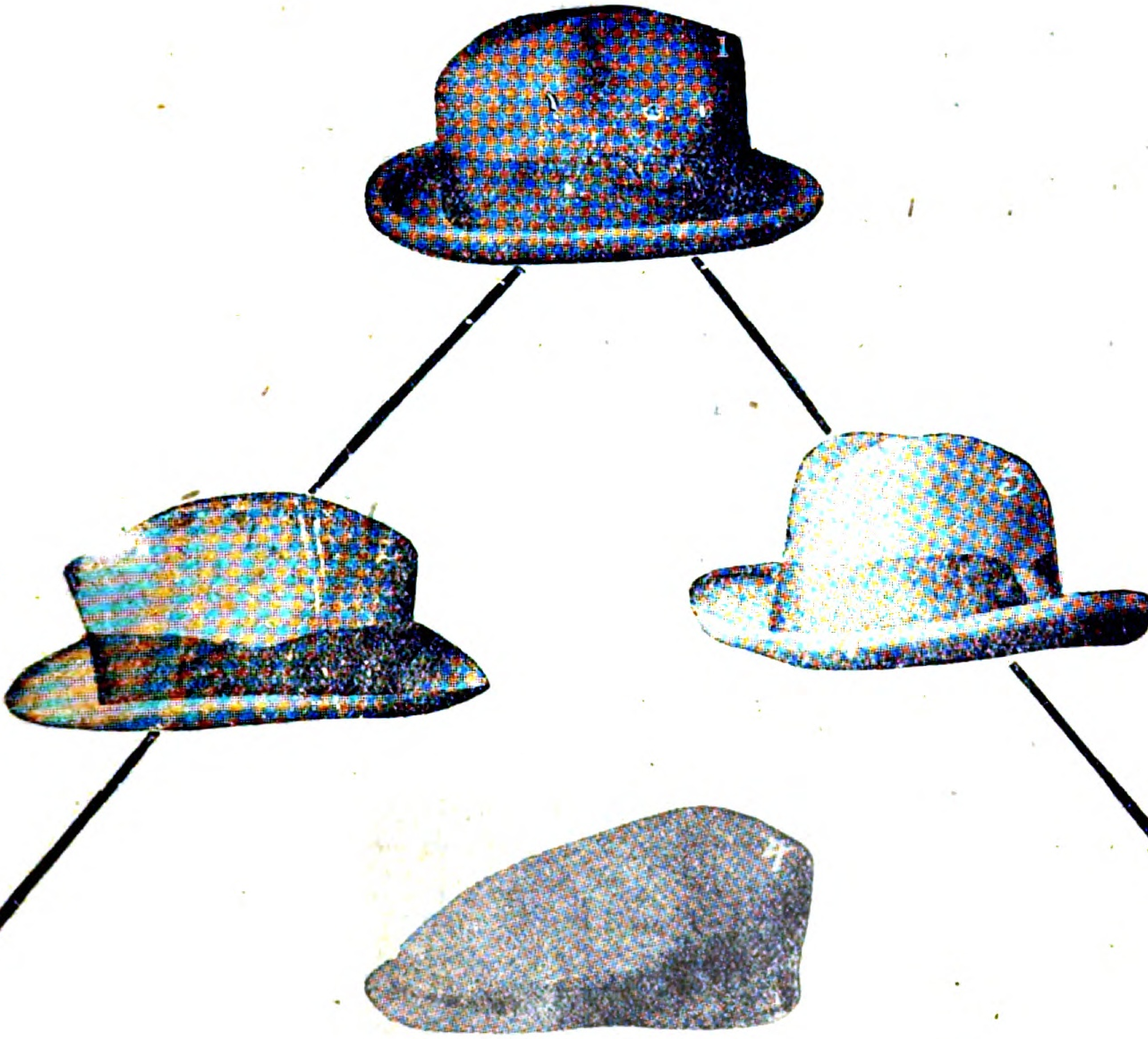
人間文化の出發

四六判最上装 金貳圓 送料十二錢

哲學宗教文藝に就いて特異な理解と知識とを有して居る著者が多年の蘊蓄を傾倒し數多の見地より縱横に新文化を解說評論せる書なり

【内容目次一斑】…人間文化の根本原理…文化發生の階段…人間愛と民衆生活…人間への思想…近代文化と唯物史觀…私有財產の文化的考察…人格の解放と社會主義…人間愛の宗教的根柢…近代自由主義の限界…社會的の不安の諸原因…人間生活の二表現…文藝の民族的基調…知識階級の貧民と人道主義

東京市神田區表神保町七番地 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番



(1) 中折（舶來）
鼠色
十一圓

(2) 中折（舶來）
薄鼠色
九圓五十錢

(3) 中折
薄茶
八圓五十錢

(4) 鳥打帽
霜降
三圓五十錢

東京今川橋

松屋呉服店



一巡りして來た支那の社會と文化觀

內ケ崎作三郎

一　支那料理の世界的勢力

今日の世界に重大なる問題が多いが、特に知識階級の注目を惹く問題は二つある。一つは歐洲の改造、他の一つは支那の將來である。勿論印度の將來も眞面目に取扱はるべき問題であるが、此責任者は英帝國なるが故に局外者の濫りに干涉することは出來ない。是は印度人と英帝國とに任せるより外はない。然るに支那問題は、勿論支那自身の問題なるが故に、他國人の干涉すべき限りではないが、其影響する範圍甚だ大なるが故に、支那の過去を研究し、現在を觀察し、將來を推論するは最も大切なる業である。されば米國の公立圖書館や大學圖書館は競うて支那に關する研究の材料を蒐集して居る。日本に於ては支那とは歷史的にも、政治的にも、產業的にも、密接なる關係があるから、支那研究は益々奬勵しなければならない。殊に日本の主なる圖書館に於ては支那研究の資料を十分に備へて、志ある人々の爲に特殊の便益を計ることが必要であらう。

私も年來支那に對する興味を有し、其研究の必要も悟つて居つたが、自ら支那を旅行することは出來なかつたから、書物を通しての外、或は他人の談話、講演を通しての外は、支那に就て知ることは甚だ少かつた。

明治四十一年歐羅巴に赴いた時には、西伯利橫斷鐵道に由つたので、浦潮、哈爾賓等に於ける支那人の發展を幾分か垣間見

た。又紐育に於ける支那街(チャイナ・タウン)、カリフォルニヤに於ける支那街をも明治四十四年歸朝の途次觀察して、其東洋的色彩の濃厚なるに驚いた。而して、一昨年米國に渡り、桑港、ローサンゼルス等に於ける支那人の活動を視察し、十年前とは著しく相違せるを感じた。一昔前の支那料理は隨分お粗末なもので、汚らしげに見えたが、現時の支那料理、即ち亞米利加で云ふ雜炊(チャップスイ)は相當綺麗なものである。又其料理も餘程米國化したやうに思はれた。桑港の支那町なるものも堂々たる店舖があつて、以前の如き危險もなければ腐敗もないやうに思はれた。紐育に於ける支那料理屋の發達も非常なものである、多分幾十軒といふ支那料理屋があるに違ひない。そこは支那人よりも寧ろ米人、日本人などが常華客である。支那料理は安くて旨いので客を惹くのである。又米國の紐育の或銀行が支那料理屋の後押をして、出資して居る、料理屋は日々の賣立を銀行に預金するといふやうな關係で發達したと稱せられるが、支那料理屋の米國に於ける發展振はとにかく人目を驚かすものがある。米國が十年前と打つて變つて、支那に對して非常に好意を示し、種々な事業を支那に於て經營して居るが、一般民衆の支那に對する親しみは、支那料理が仲介であらうと思ふ。安くて旨い支那料理を御馳走になれば、勢ひ支那に對する親しみが增して行くである。米國に於ける支那人の發展を外觀的に觀察するならば、支那料理の社會的勢力を第一に考へなければならない。

倫敦ではオックス・フォード・サアカス及びピカデリー・サアカスの如き、目拔きの場所に一軒の支那料理屋がある。殊にオックス・フォード・サアカスの料理屋は可なり大きく、一階及地下室を廣げたやうな所であるが、相應に旨い料理を比較的安く食はせる。此所には英人も來るが、日本人が大分行くやうである。而して日本料理屋は如何であるかと云へば、太平洋沿岸は暫く問はずとして紐育には相當ある。例へばスキ燒を食はせる家がある。倫敦には鰻の蒲燒を食はせる所がある、又純粹の日本料理を食はせ、一月には汁粉、雜煮位を出す所がある。倫敦でも日本料理が食べられることは確に一進步に違ひないが、日本料理は可なり高いので、客は大抵日本人であるから發展しない。何れも裏通のやうな所に小さな不景氣な家を構へて居る。鰻の蒲燒は丁抹邊より鰻を輸入して料理するらしい、で相當に旨いが値段は可なり高い。西洋人が日本人に招ばれて日本料理を食べる人もあるが、其數は極めて少い。無論英米人が日本料理屋を自分で探し當てゝ食べに來ることは殆んど無いらしい。支那料理が英米に非常に發展をなさんとして居る時に、日本料理が見るも哀れな狀態に在ることは一考を要する。謂はば日本料理

屋なるものは紐育、倫敦に於て一種の特殊部落のやうなものだ。世界の大都會に於て世界的に解放されて居ない、否することとも出來ない狀態である。

就ては日本料理の改革が必要になつて來る。日本料理なるものは、日本人の口に適ふやうには出來て居るが、之を世界的に發展させるとなれば、其土地々々の人の趣味に適ふやうにする必要がある。日本料理でも歐米人の口に適ふ物がある。スキ燒、鳥の甘煮、茶碗むしの如きは、無論歐米人の口に適ふ。かゝる料理を中心として和洋折衷の料理を工夫して、歐米の大都會に於て發展せしむることは、餘程大切なる問題と思ふ。殊に米國の如き民衆の勢力が非常に大なる所であるから、之と密接な關係を保つ爲には彼等の口に旨い物を入れることが大切だと思ふ。日本人の海外發展に就て、日本料理の大革命を念頭に置く必要がある。

日本人は幾千年の間、魚類を食して來たので、魚類の料理は相應に發達して居る。其料理には無論特色があるが、日本の如き島國に於ては、旨くて或程度迄は衞生的であつても、其料理を支那大陸や西伯利邊迄持出して行くことは考物である。大連、上海、天津、或は香港の如き、海に近い所に於て新しい魚肉を得ることは困難ではないが、奉天、長春、哈爾賓或は更に內地に這入つて、チタ邊でも氷詰で取寄せた鮪の刺身を食べなければ、御馳走のやうな氣持がしないと考へて居る日本人が少くない。チタ邊迄內地から氷詰の鮪を送ればカンジンヨリの如き刺身を食べなければならない。それでも澁い顏をしながら義理づくに舌打をして食べなければならぬとは、隨分窮屈な話だ。全く有難迷惑な御馳走である。鄕に入つては鄕に從への諺の如く、支那に行けば支那の料理法で滿足するといふ生活をすれば、民族の發展の上にも、經濟的方面から見ても極めて望ましき事である。故に支那料理に就て日本人は今少しく精密な研究をする必要があるのではないか。

二　支那料理の特色

一體支那人は徹底したる個人主義者で、又自然主義的享樂者である。支那の代々の政府が個人の生命財産に對する保護が不十分であつたから、各個人が自らを守り、自分の家を城廓の如くにして、盜賊の襲擊に備へる風がある。日本は島國で、山國であるから、外敵の侵入の惧は少い。支那は大陸であるから、外敵の侵入を防禦することは甚だ困難であるし、危險の如きも屢々起るから、無事泰平の時は十分享樂するといふやうな氣分が多く、從つて料理法の如きも特別に發達したものらしい。

は昨年の春、南は廣東より、西は長沙、揚子江一帶、北清、山東及滿洲方面を二箇月餘り大急ぎで旅行したに過ぎない。のみならず、其間七十回程の講演を爲し、十分見物する時もなかつたが、到る所に於て支那料理の御馳走を受けたるが故に、支那料理に對する素人の觀察が出來ると思ふ。

支那で最も困難する問題は良い水の乏しいことである。日本の如く水蒸氣の多い國で、降雨量も多く、山脈の分水嶺から、谷間や岩石の間を川が流れるのではなく、黄河、揚子江が何千萬年の間積み重ねたる黄土、其他の土壤の大平原を成して居る所が多いから、良い飲料水を得ることは至難である。現に揚子江南岸の武昌の如きは、井戸を堀つても、結局揚子江の水より惡い。黄河沿岸にしても、過去幾千萬年の間に、黄河が沈澱せしめたる黄土が何百尺の高さになつて居る所があるので、良い水を得る爲には何百尺を堀下げねばならぬといふ。

揚子江を航海する船は一等船客に對しては、上海なり南京から水道の水を積込む。併し二等船客に對する水は、ポンプで揚子江の水を上げて甲板の上に在る大甕に入れて置く。揚子江の流は濁水滾々と云つて居るが、汲み上げてみればさう濁つては居ない、けれども可なり泥が混つて居る。それを明礬の這入つた竹の棒で掻立てると、段々沈澱してしまふから、上水を て、二等船客にやる。それを煮立てゝお茶にする。故にお茶を 飲む時は、お茶の粉も沈澱するが、水の滓も沈澱するから、沈 いだら直ぐ飲まずに、沈澱するのを待たなければならぬ。

浙江省の杭州に西湖と稱する風光明媚なる湖水があり、天下 第一勝の評判である。成程支那の如き濁水のみ存在する所では、西湖の如き、比較的濁らない湖の在ることは珍しきことゝ 思ふ。併し日本の湖水のやうな、淼々と水晶のやうに、淸ら く滿えられて居る水ではない。琵琶湖、蘆の湖、中禪寺湖、 名湖、宍道湖、猪苗代湖、十和田湖等に見るが如き景色は、支那には殆ど見ることが出來ない。

此の水の惡い爲に總ての物を必ず煮ることが發達して來た。支那では冷水は飲まない、飲まないといふよりも飲み得ないのである。勿論完全な水道工事のある所は別であるが、一般に生水は飲まない。生肉も食べない、必ず煮るか、油で揚げるか、炒付けるか、燒くかする、是が支那料理の第一の特色である。

次に支那の料理人は時間の觀念に乏しく、極めて悠長で、一時間でも三時間でも、甚だしきは、三日でも四日でも煮ること がある。例へば支那料理で缺くべからざる鱶の鰭のスープがあるが、日本では鱶の鰭は唯だ捨てゝしまふか、せい〴〵肥料位

にしかしない。支那では何日でも煮るから、非常に軟かになり立派な料理となる。此時間を超越することが第二の特色である。

次に、魚にせよ、鳥にせよ、獸にせよ、食へる所はどこ迄も食べる。即ち廢物利用主義である。例へば家鴨の腦髓を食べる。それが非常な御馳走で、成べく客に食はせる。吾輩も度々それを薦められて食べた、之を食べれば水泳が上手になりませうなどゝ御世辭を言つた。又禽の足なども皮を剝いて食ひ、指と指の間にある肉迄も削つて食べる。又川蛇の如きも食べる、勿論鰻のやうには旨くないが、食へないものでない。又支那料理の最も得意とする所は、豚の內臟を料理することである。この臟腑の中には非常に營養分があることは、今日の醫學界では大部分承認されて居るらしいので、臟腑より藥を造つて、神經衰弱の藥にし、或は若返り法に用ゐて居ることも少くない。此頃賣出して居るスペルマチンといふ藥があるが、矢張此類である。然るに玆に問題の起るのは、臟器には無論營養分が多いに違ひないが、若し百度以上の溫度を加へれば、最も有力なる分子は死んでしまふ譯で、高き熱を加へるには眞空の所でやるより外ない。それには莫大な費用を要する、故に臟器に在る不思議なる力を攝取するには、臟器を生で食べるのが一番宜いといふ事である。併し生では食べ難いから、結局料理して食べることは宜いことに違ひない。それで支那料理は此臟器を料理して食べる。是は非常に滋養分がある。

何の爲に支那は所謂徹底利用主義、廢物利用主義が發達したかといへば、色々原因があらう。支那は度々旱魃や洪水に苦しんで、幾度となく飢饉凶作に遭遇したるが故に、其時に食へる物は何でも食べることを研究したのではあるまいか。支那人の播溜は比較的に綺麗だ、なぜなら、捨てる所なき迄總ての物を食べてしまふからである。日本人の掃溜は隨分溜り易い、なぜなら、食べられる物をも捨てゝしまふからである。物價が暴騰して容易に低落せず、依然として生活難を喚じて居る今日に於ては、日本の料理法も支那の徹底利用主義を參考とする必要なきや。其意味に於ても支那料理を研究することは必要ではあるまいか。

支那料理の第四の特色は絕えず進歩することである。紐育に於ける支那料理が米國風となり、倫敦に於ける支那料理が英國風になつて居るのを見ても明かである。支那に於ける料理共も例へばアスパラガスのスープだの、日本の海產物などを使用して居る。詰りそれで支那料理の種類が、時代と共に內容が豐富になる譯である。

支那人は生命に執着する民族であるから、享樂を非常に重んじて來た。随つて或朝廷では、新しい旨い料理を工夫した者には、位爵勳等を與へた例が屢々あつたさうだ。上の好む所下之に習ふので、朝廷が料理を非常に重く見て優遇したから、一般民衆の間にもさういふ風が行はれて來たものであらう

支那料理の比較的低廉なることは第五の特色である。香港でも、上海でも、廣東でも、値段に餘り相違はない。一卓子八人分（十人か十二人位迄加へられないことはない）であるが、御馳走の數が多くて、三分の二位御馳走が進んでから、段々旨い御馳走が出て來る。故に支那料理を食馴れて居る者は初めは餘り詰め込まないで、最後の御馳走を待つて居る。馴れない者は初めから食べるから、一番旨い御馳走が出て來る時には、滿腹して、身動きもとれない。而して一卓子は二十圓乃至二十五圓であるから、一人に對して二圓幾ら位にしか當らない、實に安いと言はなければならぬ。要するに支那料理は世界に於て最も進歩したる料理ではあるまいか。唯だ現在の支那料理屋の臺所は汚らしい、之を淸潔にすれば、支那料理は世界的に發達する望がある。日本料理も世界的に發展しなければならぬから、それには西洋料理の研究のみでなく、支那料理の研究をも併せてする必要がある。

三　獨得の淸潔法

支那人は不潔と云はるゝ、それはどういふ譯か、是も大部分は水を得ることが困難な爲めではあるまいか。井戸を掘つても綺麗な水が上らないから、そんな汚ない水で身體を拭いた所が綺麗にならない。又支那には蒙古風と稱するものがある、ゴビの沙漠から吹いて來ると言はれて居るが、眞に黄塵萬丈、篩にかけたやうな細かい砂が天を蓋うて來る。昨年の四月半ば私が上海に居つた時、或朝起きて見ると、空が淡黄色を帶びて、北方からの風が吹いて居る。日本の花曇と云つたやうな觀もある、所が自分の室の卓子の上にも何だか細かい砂塵があるやうに思はれた。それが所謂蒙古風の襲來だ。此風が吹けば窓を閉めても微細な砂塵が室の中に這入る。室の中に這入るのみでなく、戸棚にも、抽斗にも這入る。あらゆる所に這入り込む。此蒙古風はゴビからのみ來るものではない、一體支那の北方は黄河の沈澱した所の黄土より成つて居るから、是が固くなると石の如くなり、風が吹いて來れば其表面の部分が矢張細砂となつて空に舞ひ上る、其舞上つたものが北方の風に吹かれて、遙に南方迄押して來る。古い屋根などにある細砂は船醉の藥になるといふ迷信もあるとの事である。

かゝる次第で水が無いから、さう度々洗ふことも出來ず、洗つてみた所が風が吹いて來れば砂塵に汚されてしまふから、どうしても淸潔といふことを等閑にする。

支那を旅行して驚くことは靑い色を見ないことだ。支那人の着物には藍色が多く、瑠璃色の瓦などの建築もあるが、日本に見るが如き靑い色といふものはない。大抵の山は禿山である、平原にも樹木は餘りない。昔、山にも野にもある木を伐つてしまつて、其後植えないのか、生えないのか、兎に角無い。日本は島國で、個人の住宅も小さく、所有地も小さい、さういふ關係から小さい地面を能く世話する習慣がついて、或は屋敷の周圍に木を植え、庭を造るが如き美風が發達したのかも知れぬ。支那のやうな大平原では木を植えるといふやうな考が或は起らなかつたかも知れぬ。それで日本に見るが如き小さい森なども餘りない。是が亦日本人が有して居るやうな淸き自然に對する考を、支那人が起し得なかつたのではあるまいか。

蒙古邊になれば水を得ることは更に困難で、旅客の話であるが、兩手で掬上げる位の水で、口を嗽ぎ顏を洗ひ、全身を拭いてしまふ。是は水が無いから水を利用するのであるが、日本は水の多う過ぎる國であるから、水を惜むことを知らない。そこで總てのものを淸潔にする、拭掃除もやれば、溫浴も度々やる。先達英吉利の友人が來て、四五日私の宅に滯在してゐたが、この人が東京の電車に乘つて、滿員鈴生の電車に乘つて、日本の勞働者が異臭を發しないのに驚いた。詰り日本人は一週間に一度や二度は大抵溫浴を取るから、傍に居る者がその臭氣を嗅ぐことはない。併し支那には一種獨特の淸潔法がある。それは手拭を熱湯の中で絞ることである。例へば料理屋に上ると、直ぐ熱湯で絞つたタオルを持つて來て客に配る。客は顏を拭き、手を拭く。食時中に何遍となく持つて來る。而して其タオルの絞り方がある。それはタオルを二つ位に折つて兩端を斜めに持つて、眞中の部分を熱湯に浸して、兩端から捻つて行く、さうすると熱湯に這入つた部分が、兩端から段々窄まつて行くから、自然に湯が切れる譯である、若し日本流に絞つたなら手を火傷する。それから支那人の顏を拭くのはタオルを動かさないで、顏の方を動かすのである。日本人は手の方を動かす。そこは日本と反對である。日淸戰爭の時など、日本の軍事探偵が暴露された一の弱點は、支那服を着、支那語は話すが支那人のやうにタオルを使ふ時に顏を動さないで、手を動かしたことなどから化の皮があらはれたといふ事だ。食前に嚙む西瓜の實の割り方の下手なので尻尾をつかまつたのもあるさうだ。劇場に行つても同樣である。必ず案內者がタオルを持つて來る。但私は泰山に

登る爲に奉安府の田舍宿に落ちついたが、白いタオルが黒くなる程汚れて異臭を發するのを持つて來られて、之には全く御免蒙つて、手だけ拭いてやめてしまつた。併し支那人は溫浴は餘りしないが、腰湯は度々使ふとの事である。後はタオルで矢張拭く習慣らしい。

日本の美術は小さくして美しい、即ち精巧なる美術である。日光の陽明門の如きはそれである。かくの如き小さい面積に金をかけた建築物は世界に無い。然るに支那の如き大陸に於てはさういふ小さな綺麗な物は絶對に無い、なぜなら、背景が雄大であるから、それで支那の建物は所謂大かいものである、外觀は堂々たるものだ。さういふ堂々たるものでなければ、周圍の自然と釣合が取れない。其代り近づいて見ると隨分お粗末な物だ。例へば北京に文廟といふ孔子殿がある、宮殿もあれば萬壽山もある。曲阜に行けば大成殿がある。其所には大きな赤色を塗つた柱が幾本と並ぶ大建築物がある。近づいて見ると大きな柱は一本の木ではない、細い木を何十本も寄せ集めたもので、鐵の輪を篏めて赤く塗つた物だ。又萬壽山といふ西太后の住はれた所などは、池があつて、池の周圍に廻廊がある。遠くから見ると實に風雅なものだが、近づいて見ると柱や檻には安い青色を塗つてある。外觀は頗る壯大であるが、部分々々の所は極めて大マカである。日本は外觀は小さいが部分々々は實に行屆いて美しい、是で以て大陸の藝術と日本の如き島國の藝術との相違が分る譯である。

亞米利加人も矢張大陸國民であるから堂々たる大建物を立てることが好きだが、部分々々の裝飾には一向意を用ゐない。現に東京驛前に在る海上ビルディングなども米國式の建物で、實用的ではあるが裝飾も何もない。支那で米國人の經營して居る基督教學校なども、大きな學校を建てゝ居つて、外觀は立派だが、中に這入つて見ると、手を省いてある所は隨分ある。北京のロックフェラー研究所丈は除外例である、眞に善美を盡したる大建築である。一には支那は日本のやうに地震がないから、お粗末な建物でも宜いのかも知れないが、日本から行つて見ると隨分大マカな建物である。例へば支那の家屋にしても普通は煉瓦を積んで、内面に紙を張つてしまへば宜い、其煉瓦は必ずしも漆喰と限らないらしい。殊に滿洲の方や北支那の方へ行くと雨が容易に降らないから、日光に干しただけの燒かない土の煉瓦で百姓が家を築き上げて、屋根には板か何かを渡して、それに泥を厚く塗つて居る。容易に雨が降らないから、屋根の土は剝げないが、大雨でも降つて來れば屋根は流れてしまふ。かう云ふ自然的の背景がある爲に建築などにも色々な影響か及され

て居ると思ふ。

四　社交性と社交生活

支那人は辭令に巧みで、交際が旨い。是は大陸國民共通の長所である。印度人も或點迄から云ふ長所がある、歐羅巴人でも佛蘭西人、獨逸人、露西亞人は多少此長所がある。米國人も極めて打解け易い性質がある。大陸の人は昔から外國人と接近する機會が多い、例へば支那と歐羅巴との陸路の交通は餘程昔から開けて居る、支那の周圍の民族は昔から支那と交通して居るから、どうしても交際し易い。又外國人同志でなくとも、內地人同志親しくなり易い。日本のやうな島國であれば、諸所に山があるとか、谷があるとかして、交通がし難くなる。例へば山陰道と山陽道の如きものである、山一つで以て交通が容易でない。然るに支那の平原地方は何も境がないから、一地方から一地方へ動いて行くといふ、唯だ距離だけの問題であるから、違つた地方の人と接近する機會が多い。隨つて自然に社交が上手になつて來て居る。

支那人が英語などを研究して、早く達者になるのは、一は支那の言語が複雜に發達して居るからである。支那に於ける音韻學は非常に發達したもので、四聲といふものもあるが、南支那に行けば或所では六聲、或所では八聲の所もある。四聲と云へば一の音を四に使分ける、此音韻學が發達して居るから英語などを習へば容易に熟達する、是が支那文化の古いことを證明するものである。又支那人は他人と話をすることを日本人程億劫に思はない。そこで支那人は外交が旨い。それから支那に響の如く應ずるといふ言葉があるが、支那のやうな平原國では長いものには卷かれる、例へば吳佩孚が勢力を得れば皆吳佩孚の勢力になる。宣傳のきく國民だ。農業の方でもさうで、此所が土宜で、此土地には麥が宜いとなると其周圍の者が皆麥を作る、結局持餘してしまふ。さういふやうに平原なるが故に一種類のことを人がやつて居る。日本などは山があるから、平原では負けても、山で閉籠れば頑張れる。楠正成が赤坂城で鎌倉勢何萬に圍まれて之を維持し、後千早城を維持したのも山に據つたからである。支那の歷史は大抵平原の歷史であるから、痩我慢が出來なかつた。そこで單獨で事を治めて行かうとすることが發達して來た。詰り宣傳の國だ。支那は昔から宣傳の國柄だ、今でも政治上の大問題が起ると、各省の將軍が盛に電報戰をして居る。吳佩孚と張作霖が衝突する前にも互に電報戰をやつた、電報で堂々と意見を發表して、中央政府に迫つたり、新聞に出したりして宣傳し、天下の大勢を觀望して後愈々戰爭になる、

さういふのは矢張支那人の社交性と關係あることではあるまいか。

支那人の社交性は前述の食卓にも現はれて居る。支那の食卓は原則として一卓八人であるが、日本のやうに盃の獻酬はない。併し誰でも先に杯を擧げて好々と云ふ。どうぞ貴君がお好みならば一つ飲んで下さいといふのである。主人が好々と云ふと、其卓子に居る人は皆盃を受けて飲む、又誰かゞ好い加減の時に好々とやると皆飲む。そして支那の食卓は頗る自由で、卓子掛はどんなに汚しても構はない。骨などはしやぶつて床に捨てゝ構はない。お客は少々遲れて來ても構はない。用の有る時は途中で食逃げしても構はない。此食卓に無理のない所に支那人の社交性が現れて居る。

次に茶館の制度である。上海邊にも茶館は澤山ある。日本の旅客は大分此茶館に行くさうで、其茶館は大抵怪しい女の出る茶館なそうだ。私は上海では十二日程しか居らず、忙しくてさういふ所を覗く暇は無論なかつた。南京滯在中、或普通の茶館に案内された。昔の哥老會といふ秘密團體の系統に屬する茶館らしかつた。其所は回教の信者であつて、清眞といふ額が掲げてあつた。寺でも清眞といふ名のつくのは悉くマホメット教に屬するものである。其二階に上つて一碗飯を三人で食つた、何でも支那蕎麥に饅頭のやうな物を滿腹食べて、三人分が四十五錢、安いのに第一驚いた。そして近い卓子ではお婆さんや妻君達迄がもう食べて居る。朝から客が來て居る。午後になると商賣人が來て、食事をしながら取引をする。故に茶館は日本にも類のない程の發展をした、安くて便利で、商賣をもやり得る。勞働者階級には勞働者階級の又茶館がある、粗末な汚い所であるが、多數の者が集つて茶を飲んだり、何か安い物を食べたりして賑やかである。西洋の所謂喫茶店の如きハイカラなものではないが、寧ろ西洋よりも進歩して居るかも知れない、商賣迄此所でやる、それで支那人の社交性を研究するには、此茶館の制度を併せて研究する必要がある。

支那人が亞米利加人などと非常に親しくなるのは、支那人が社交性に富んで居るからである。日本人は一體社交心に乏しい、島國根性である、支那人と接するには其呼吸を呑込んで、此方でも出來るだけ社交性を發揮することが肝要である。

五　苦力と勞働問題

歐羅巴から地中海を經てポートサイドに達すると、初めて東洋的氣分を味はふことが出來る。更にこちらへ來て、印度のコロンボの港に上陸すると、印度の色彩が頗る濃厚である。所が

新嘉坡へ來ると、彼處は英國の勢力と日本の勢力の境目位になつて居るが、支那人の多いことに驚かされる。新嘉坡の人口の大部分は支那人だ。人力車夫、波止場人足が澤山に居る。支那民族の發展に驚かさるを得ない。それから香港に來る、廣東に行く、上海に行く、其波止場や街には支那の勞働者が充滿して居る。それで支那に於て最も重要な問題は苦力の問題だ。先づ第一に支那の苦力が何故斯くの如く多いかゞ問題である。尤も支那でも山東の苦力の如きは、特色あるもので、日本なら南部の出稼といふ所で、餘程確實なる苦力である。冬季は必ず郷里に歸る連中である。併し開港場などに居る苦力はさういふ確實なものではない。此勞働者の多いのはどういふ譯かと云へば、色々原因はあらう。例へば外國から漂流した者、或は被征服者であるが、私の想像では大部分は凶作飢饉の爲に、田舍に居堪らなくなつて、流れ流れて都會に集つた所の流民だと思ふ。所で支那では苦力を殖やさない工夫をしなければならぬ。それには凶作飢饉を豫防せねばならぬ。それには河川改修、堤防の造築、地下水の利用法を講ずることが焦眉の急務である。何れも莫大なる金のかゝる事だが、それをやらなければ凶作飢饉を豫防することは出來ない。之を豫防することが出來なければ流民を防止することが出來ない。隨つて苦力の問題は解決されない。

支那には昔から苦力のやうな者が多うかつたと思ふ。史記を讀むと楚の項羽が垓下の一戰に敗れて、遂に自刎した。その前に、烏江亭の長船を艤して待ち、項羽に申した。「江東小なりと雖も、地方千里、衆數十萬人、亦王たるに足る。願くは大王急に渡れ。」と、すると項羽は笑つて答へた。「天の我を亡ぼす、我何ぞ渡ることを爲さん。且つ籍、江東の子弟八千人と江を渡りて西す。今一人の還るものなし。縱ひ江東の父兄憐みて我を王とするも我何の面目ありてか之と見ん」さて子弟八千といふと立派だが、是は惟ふに苦力であらう。尤も他の場所に精兵八千と記してあるから訓練された苦力であつたらう。苦力と雖も誰かの子弟には違ひない。良家の子弟八千人のことではないと思ふ、苦力なら何所にでも居るから集つて來る。それで支那の歴史を研究するには苦力の問題を眞面目に取扱ふことは極めて重大である。

苦力の起源及散布を研究することは餘程興味あることで、單に勞働問題としてのみでなく、歴史の問題としても研究する必要がある。支那にはかくの如く人が餘つて居るから、勞働賃銀が頗る安い、又一方物資が非常に豊富である。支那は防穀令を布いて居るから、米を外國へ表向き出さぬことになつて居る、故に米が非常に安い。廣東で、昨年四月頃、何でも日本の一

白米が五六升買へた。だから一日六錢あれば一人が食つて行ける。廣東の友人から聞いた話だが、廣東邊の商人は不景氣になると店をしまつて、寢食して景氣の回復を待つさうだが、それは最も確かな方法である。なぜなら不景氣の時に商賣を續けて居れば、其損失は莫大なものだが、寢食して居れば一人一月一圓八十錢、十人の家族と見て、十八圓損して居れば宜い譯だ。兎に角勞働賃銀は非常に安い、俥賃など香港邊でも、上海、廣東邊でも、十町位走つて先づ十錢、一日傭つても一時間十錢の割でやれば宜い。

そこで將來支那に日本の製造品を送るよりも、向ふで工場を造つて、支那の安い勞働賃銀で生産する方法が確實である。既に大分日本の會社が出來て居る。勞働賃銀が安いから工賃は殆ど見ない。故に物價が安い。例へば杭州には扇子の名産がある、日本で一本五六圓するのが一圓位で、私が一本三十五錢で買つた扇子が、東京の或店では一圓五十錢で賣つて居る。南京の茶館で朝飯を御馳走になつた時に扇を賣りに來た者があつた。それは大きな竹の骨の扇子で、兩方の竹には彫刻がしてある、一本幾らだと聞いたら、八十五錢だといふ、所が同行者の中に上海に十年も居る人があつて、支那人から言ひ値で買つてはいけませぬ、私が値切りますといつて、二十錢に負けろといつたが、四五十錢が相場なので容易に負けない、すると吾々が立ちぎわに又來た、買はないかといふから、その友人は負けろといつたら負けた。而も其二十錢は銅錢二十枚のことで、一圓の銀貨を出したら——一圓銀貨は袁世凱の肖像が彫刻してあるもので、當日の相場では銅錢百十何枚に當る、そして毎日相場が變つ——向ふの言ひ値は銅錢二十枚であるから、銀貨一枚は十六枚、そこでもう一本負けろと六本に負けさせたが、是は勞働賃銀が安いから工賃は殆ど勘定に入れないから、持つて居ても仕方がない時には生産費位迄我慢して負けるらしい、値切る方も隨分ひどいが負ける方もひどい。私は友人に對してあまりひどいではないかと言つた。

上海の支那人が經營して居る西洋洗濯に又特色がある。是は一品幾らといふ相場で、一丈四方の幕を洗つても四錢、ハンケチ一枚洗つても四錢、大小を論せず一品四錢、又何百枚洗つても一箇月幾らといふ洗濯賃銀もある。

日本では女中が拂底して居るが、支那では女中が澤山居て、子守などにも頗る宜い。アマと稱するのである。それからボーイ、クックのやうな者も賃銀は頗る安い、向ふで食べて十圓位であるのを見ても、如何に生活費が安價であるかゞ分る譯である。天津でも昨年は十錢で玉子が十一買へた。四川省の奥で交

通不便な所では玉子を持餘して一圓銀貨一枚に四百位が相場と聞いた。青島ではロースの無類飛切で一斤二十五錢位で、總てが非常に安くて支那に居つたならば內地に歸れない、居心地が好くて物が安い。香港邊に居る日本の青年實業家などは女中を三人位備つて居るから、床を上げることから何から、一切合切して吳れる、若い奧さんは用が無くて困つて居る。吾輩は其間に支那語でも英語でも勉强して支那でも研究したら宜からうと若い奧さん達に演說して來た。

要するに支那の勞働問題研究は非常に興味がある、而も此頃は勞働者が大分目を醒して來た。今年の一月香港に起つた船人足の同盟罷業の如きは、非常な團結力で、英吉利の船主側を苦しめて居る。將來勞働賃銀がいつ迄安くは續くまいと思ふが、支那の社會を知るには支那の苦力を研究することが必要である。

六　陶淵明の村に日貨抵制の宣傳

歐羅巴を橫つて香港に着いたのは昨年の三月末であつた。それより廣東に行き、上海に來た時は四月中旬であつた。當時日貨排斥は幾分下火になつて居つたが、尙其餘勢を見ることが出來た。最初私は日本人の團體の依賴に應じて講演をする積りで行つたのであるが、上海に居る友人諸君の周旋で、基督教青年會或は復旦大學といふやうな、支那の純粹の私立大學、何れも日貨排斥の中心と認められた場所に於ても講演をした。其講演の內容が新聞にも詳しく報ぜられたので、杭州、南京、漢口武昌、長沙、延いては北京、天津、濟南、奉天等に於ける講演をするに非常なる好都合であつた。

日貨排斥の原因は今更喋々する必要はないが、日貨排斥は社會の有ゆる方面に宣傳されて居つたことが認められた。以前は洋傘は大抵日本から輸入した、然るに日貨排斥後は日本から輸入したくない爲に、支那人が獨特の發明をした。それは油紙の傘へ洋傘の柄を着けたもので、大分上海で見ることが出來た。又ブリキの玩具の如きも日貨排斥前には日本から行つたが、ブリキの玩具位は支那でも出來るといふので、大分支那製のブリキの玩具が上海の店に廣げられて居た。それから日本の仁丹に對して人丹といふ藥があり、支那製の燐寸、支那製の齒みがき大分あつた、是は日貨排斥が支那工業を刺戟したからである。

五月七日は國恥記念日になつて居る、是は主に日本に對しての國恥記念であるが、一般の外國をも含んで居る。國恥といふ言葉は、子供の讀む幼年雜誌の如きものにも書いてある、扇子に書いてあるのがある、又南京の織物に

迄國耻と示したのがある。楊子江を遡つて行くと、南京と漢口の間の南岸に彭縣といふ村が在つて、柳の木の多い非常に平和な村で、昔詩人陶淵明が知縣（今の郡長）をした場所である。其村が船の上から見える、其所に白壁造の土藏のやうなものがあつて、そこに大きく日貨抵制と書いてある、其大きな文字が白壁造りの建物に綺麗に浮んで居る、日貨抵制は即ち日貨排斥である。それで、詩人陶淵明が治めたことのある平和な村にすら、是れ見よがしと日貨抵制の文字が出て居ることでは、支那の人民が如何に日本に對して險惡であるか私はつく〴〵考へこませられた。

併し支那人は又大國民だ。一方には日貨排斥をして居るが、日本人を必ずしも排斥するのではない。是も人に依り切りで、吾輩は學者として支那に乘込んだ。支那は昔から學者を尊敬する國だ、同じ日本人でも商賣人でない、軍人でもない、政治家でもない、學者だといふので大に氣を許した譯である。吾輩は何も日本の宣傳に行つた譯でもなし、政府から派遣されたのでもない、唯だ日本の一教育家、一思想家として、或は世界の大勢を論じ、或は東西兩洋の文明を批評し、或は戰後の歐洲の狀況を述べ、或は東洋文明の特色を論じたりしたので、政治外交の問題には少しも觸れる所がない、それで皆安心して聞いた譯である。尤も日本の自由主義進歩主義者の思想は可なり紹介した積りである。

南京に國立高等師範學堂といふものがある、是は主として日本の教育家が行つて創立に參與したものだ。水戸の菊池謙二郎氏などが大に努力された。中々廣い地面を有する立派な學校で、日本流の庭も造つてある。所が今は日本の勢力は殆どなくなつて、日本語を教へる支那人の歴史の教授が一人居るが、日貨排斥以來日本語を習ふ者は一人もない、それで日本語を教へずに圖書館の事務の手傳をして居る。之に反して米國歸りの人々の勢力は非常なもので、中々良い人が其局に當つて居る。此學堂から吾輩の講演を頼んで來た。教授諸君と夕飯を共にし、大講堂へ行くと千人ばかりの學生が一杯這入つて居た。そして其學校は一昨年から男女共學にしたので、女學生も數十名居る、這入切れない學生は外に立つて、廊下の窓から頭を出して聞いて居た。吾輩は英語演説を林教授の通譯で二時間半ばかり試みたが、學生が非常に共鳴した。私は日本語でもあのやうに共鳴された演説をしたことは餘り記憶にない程であつた。

それから南京の出來たての公會堂、督軍と省長が臨んで落成式を行つたばかりで、まだ公開講演に使つたことのない公會堂で、頼まれて英語演説をやつた。南京の第一中學校長が通譯を

し、江蘇省の教育總長(文部大臣)が私を紹介した。是も中々盛會であつた。

それから長沙で蔡鍔を記念した景松學校でも講演した、小さい學校であつたが、講演が濟んでから校長や教員と一緒に西洋料理の御馳走になつた。又矢張長沙の教育會の講堂では、講堂が損じて居たので大勢の學生を寄集めることが出來ない、又教師に給料を拂はないとかで多くの學校が閉鎖して居た爲に、官吏とか教師とか、學生の代表者とかが三百人ばかり集つた所で講演をしたが、是も非常な熱心で、楊君といふ人が日本語演説を通譯したが、非常に良い通譯であつた。湖南省の總司令の張恒惕君は私を晩餐に招ばれたが私が立つので時がなく、態々使を寄越して葡萄酒に煙草を贈つて來たが、日本人倶樂部に寄附して來た。

かゝる有樣で一方では日貨排斥をして居るが、一方では學者に對して十分の親しみと尊敬を持つて吳れる。故に日本の學者は大に支那に行つて巡回講演をすべきである。それが日支親善の爲に餘程效果がある。支那の學生の勢力は侮るべからざるものがある。何となればやがて彼等は社會の中心人物となるべき運命を有するからである。明治初年の我が國で書生の盛力の旺盛なる時代に似てゐる。私は諸所の學校で學生から質問を受けて、日本にも貴方のやうに考へて居る人が澤山居るかと聞かれた。日本人は餘程偏狹な、排他的、侵略的、武斷的の國民で、文化の思想や、人生問題、宇宙觀等に就て眞面目な考察をして居る者が殆どないかの如く考へて居る。其誤解をとく爲にも日本の學者が行つて、支那の學校で講演する必要がある。

英吉利のラッセル氏は所々で講演して居た、殊にコロンビア大學のドューウェー博士は盛に講演した。支那の新聞では杜威博士と書いてあつた。私も數に於ては少くも、ドューウェー博士に負けない位やつた積りである。

日貨排斥は眞面目な問題で、殊に山東問題解決以後、日本に對する感情が變つて、上海邊に於ては日華美術展覽會なるものが行はれた位で、今後は餘程親善の度を回復することが出來ると思ふが、吾々は何も日貨排斥を恐れて引込んでのみ居る必要がない。どん／＼乘出して支那の團體や學校に接近することを考へねばならぬ、所謂國民外交である。

七　牧畜文明と農業文化

支那は東洋に國を成して居つて、日本文明に大なる影響を與へた國である。人種も其外觀は餘程似てゐる。又漢字を採用したるが故に同文同種の間柄とも言ひ得る、支那を旅行してから

の私の印象は支那と日本の間の似て居る部分が多いと同時に、違つて居る部分も非常に多いといふ事である。違つて居る方面はどういふ所から來て居るかと云へば、支那民族は昔から北方は牧畜が盛であつた、今でも蒙古では駱駝と羊を飼ふ。北清地方、即ち直隸省、山陝、山東、河南等は矢張羊を飼つて居る、豚は南清に至る迄飼ふ。支那には南清を除いて北清には田がない、所謂田は畑だ。水田ではない、日本は農業文明の所有者であるが、同時に水田文明である。支那は北方には水田がない、所謂畑文明、同時に牧畜文明である。歐羅巴も矢張牧畜文明で支那との間に生活の共通點がある。支那には日本のやうに樹木がない、そこで土を固めたり燒いたりして煉瓦を造る。萬里の長城は煉瓦で築いてある。南京城北京城も煉瓦で築いてある。其他椅子があつて腰を掛ける、食卓あり、寢臺あり、靴を穿いた儘床に上がる、是は餘程西洋と共通な所がある。日本は昔から牧畜は殆どしたことはない。水田専門にかゝつたやうである。日本人が住宅に履物を脫いで這入ることは、多少水田に關係あることではないか、日本の先祖は今でもさうだが、水田に行つて泥の中に這入るので、其儘では迚も土間にも這入れないから、今のやうに發達して居ないで、莚でも敷いて居つた時代でも、其儘這入れないから、井戶端なり堀へ行つて足を洗つて上つて來る習慣になつた。そこで成べく綺麗にして居たいといふので床板を張り、疊を敷くやうに發達した。支那は雨が降らないから土はさう汚なくならぬ、靴も雨が降らないので直ぐ汚れないから床の上に這入つて來る。其邊は日本と違つて居る。日本と支那は同文同種といふが、その根本に於て、この通りの相違がある。一方は島國で他方は大陸。日本は山國、支那は平原の國。日本は水蒸氣が多う過ぎる程ある。支那は乾燥する國である。日本は牧畜に殆ど無經驗、支那は何千年の間の經驗を有して居る。そこが日支の文化の相違であらうと思ふ。

今一つの問題は古代支那は天といふことに非常に重きを置いたことである。日本には天といふ思想が發達しない譯ではないが、頗る無關心であつた。支那が天といふことに重きを置いたのは、何の爲めかと云へば、支那は大平原を蔽ふものは大なる天であるから、天といふものは非常に大きく見える、即ち天の威力を痛切に感ずる。日本は森に遮られ、山に限られ、海に接近して居るから、比較的制限されて居るやうな心持になるが、大平原の天は殆ど無制限の感を與へる。隨つて天の威力が感ぜられる、故に天を畏れる思想が起つて來たと思ふ。

漢口から北京迄二晝夜半急行列車でかゝる、其間に唯だ一箇所隧道があるといふことだが、私は知らずに通つた。所謂中原

鹿を追ふの場所で、眞に天の威力を感ずることが出來る。北京から天津まで汽車で四時間かかるが、其間は殆ど山を見ない。所謂黄土の大平原の上に廣がる天を見るのみである。曲阜の停車場から曲阜の街迄支那馬車で二時間もかゝる、其間矢張殆ど山を見ない。

支那の平原國なることは、上海から杭州迄百六十五哩だが、汽車の窓から見ると山も何もない畑である。杜牧之の「千里鶯啼綠映紅」といふ句があるが、一里は六丁のことだから、千里といつた所が六分の一で、百五六十里の平原で、此位の平原は何所にもある。それで百五十里もある平原で、鶯が啼いて綠の色が紅の花に映ずるといふ所は絶景だ。支那には運河が多いから菜の花の間々から帆がすべるのを見る。捨て難い風景である。

支那に江湖の諸君といふことがある。楊子江以南には湖水が多い、廣東の方に行けば三角洲が到る處に在る。昔の人は船に浮んで江湖に放浪した。江湖の諸君といへば今の民衆諸君といふやうなものだ。其樣に水利の便が多い。之に反して北清及滿洲の方へ行くと川も少いし、湖水は殆どない、黄土の平原だから馬に乘つて歩く。所謂南船北馬だ。

滿洲の大平原の春先まだ高粱が芽を吹出さない中は、赭い色の如で、其所を遠く通る人は、まるで豆のやうで、眞に寸馬豆人の形容を滿洲の平原で見ることが出來る。

直隷省邊でも蜃氣樓が見える。春の日午後の汽車で北京から遠くない所へ近くと、東方遙かに、松林や海があるやうに見える。汽車で、行つても行つてもそれがあるやうに見える、併しそんな近い處に海がある筈がない、それが蜃氣樓である。夏の初め滿洲を旅行してみると、左側の方に矢張松林の山や海が見えるやうだ、勃海の一部が見えるのだと思つて居ると、さうではない、矢張蜃氣樓らしい。春先、北清滿洲にはさういふ蜃氣樓が平原の中に見える、其位大きな處だ。隨つて天といふ考も浮んで來た譯であらう。

孔子もかゝる所を始終見られて居つたから、勢ひ天を恐れられたものであると思ふ。併し支那北方の平原は砂漠ではないから、アラビヤ人やエスラエル人の如く、砂漠に住んで居つて、物質的欲望から超越してひたすらに精神を集中して熱烈な宗教心を發達させて、神を認むるに至るまでの經驗はなかつた。孔子の天意は一神教の對象物に近い。兎に角、支那を理解するには、支那民族の發達したる天といふことを研究することが必要である。

八　佛蘭西語のやうな梅蘭芳の臺詞

私は北京で支那の芝居を二度見た、一つは文明茶園で金少梅、一つは吉祥茶園で梅蘭芳を見た。後者は講演と講演との間の時をぬすんで三十分ほど觀たに過ぎない。支那芝居は文劇と武劇とがあつて、武劇は鳴物入の立廻りで隨分雜駁なものだ。文劇は日本の所謂世物語で、艶物で中々情味のあるものだ。殊に梅蘭芳は非常な評判で、眞に名優であると思つたが、其臺詞を聞いて居ると、佛蘭西語を聞くやうな感がある。支那音といふものは非常に優美な所があつて、名優の臺詞を聞かなくても、天津の教育會で支那人の學校長の集つた所で講演した時、山東省出身の一青年が通譯したが、非常に上手で、其人の支那語を聞いて居ると盤上玉を轉ばすやうで、私は其青年の通譯の言葉に能くは分らぬが、聞惚れた。朝鮮の言葉はどちらかといふと獨逸語に近い。支那の芝居は鳴物入でドンチヤン〳〵騷ぐのだが、聞馴れると宜いものだ。支那の芝居は幕がない、のべつ幕なしに出て來る。前と後と全く違つたものがのべつ幕なしに出て來る。そして囃子方ではドンチヤン〳〵やつて居るから、前の幕の印象を消してしまはなければ、新しい物の印象は十分にいかぬ。併し支那の芝居も見様に依つては宜い。但し支那の芝居は土間で、木戸錢を拂はないで空いた所に腰掛けると、お茶を持つて來る、手拭を持つて來る、今度は座料を取りに來るといつた風で、大分日本の芝居と違ふが、研究する値打がある。

九　支那文化の獨創性

支那は東洋文化の中心地であるだけ、昔から發明工夫をした人達が多い、それは支那の文化にも現れ、政治行政にも現れ、思想にも現れてゐる。支那では隨分種々な思想が現れて居る。政治の形式にも色々なものが現れて來た。羅針盤を發明したのは支那人、紙を發明したのは支那人、火藥を發明したのも支那人となつて居る。支那人の世界文化に對して貢獻したことは大なるものがある。現代の文化は餘り振はないが、支那の文化は行詰つたのではなくして、新しい支那が古い支那の殼から現れ出やうとして、今産みの苦みをして居る形である。私が旅行中此支那人の獨創性に就て色々の方面から感じたことがある。第一に感じたことは支那の駕籠である。殊に香港に行れる支那駕籠である。長い、夏向きの駕籠、それに乘つて苦力に昇がれて、香港の坂道をユタ〳〵揺られて行く氣持は、又特別であつて、私のやうな重い者は恐縮に堪へないと思つて、恐る〳〵乘つて居つた。

南京で私の感じたのは、草履である、スリツパのやうな、何かの草で編んだ草履であるが、フハリとして非常に穿き心持が宜い、私の泊つた家で其支那草履があるので穿いて見たら、氣持が好いから、褒めたら一足お持ちなさいといつて貰つて來て、半年ばかり穿いて切れてしまつたが、實に美しく造つてあつて、氣持の好い物で、私はこれ迄、此草履のやうな氣持の好いスリツパは穿いたことがない。さういふ所に一種の獨創性が現れて居ると思ふ。それはなるたけ窮屈なことをしたくないといふ支那の國民性が現れて居るのかも知れない。

次に私の驚いたのは、泰山の山駕籠である。其駕籠を舁ぐ人足は非常に強い、大抵是は同教信徒である。此山駕籠は欅の木のやうな細長い丈夫な棒が二本あつて、網が張つてあり、眞中にトツプリ腰を掛けるとお尻が這入るやうになつて居つて、網には蒲團とか毛布を敷く、網の上の方には藤蔦のやうなものが付いて居つて、兩肘が掛かるやうになつて居る。二本の棒から一尺ばかりの糸が二本下つて居つて、細い横木が一本付いて居る。そこへ兩足が掛かるやうになつて居る。そして二本の棒の兩側に丈夫な革の組紐が付いて居て、苦力は直接棒を肩に掛けないで、丈夫な革の紐を肩に掛ける。さうして舁ぐ者は眞直に歩いて行くが、乘つて居る者は横向きになつて居る、其乘工合といふものは天下無類である。泰山は海抜四千五百尺（千五百米突）の高山だが、段々石段を登つて行くのである。最後の難所千五百級の急勾配を登る時は六人で舁いだ。前に二人が控へて、後ろに手を廻し、後の二人が私の身體を押すやうにして六人で舁ぎ上げたが、降りる時はこの難所を飛ぶが如くに二人で舁ぎ降りた、危い所だが、未だ付て怪我がない。其山駕籠は世界無類の、極めて自然に出來た物である。詰り乘つて居る者も舁ぐ者も出來るだけ樂にして、安心な物を發明した。さういふ所に矢張支那人の獨創性があると思つた。私は後、青島に來て柳樹山に登る時に、其所の駕籠に乘つた。その駕籠がといふと、日本の人力車の箱へ棒を二本付けたもので、登つて行く時は宜いが、降りる時にはお尻が滑つて、頗る間が悪い。そこにも所謂日本の形式主義、官僚主義なるものが現れて居つて、非常に不愉快に感じ、何故に青島の民政廳當局者が泰山の山駕籠を參考としなかつたかと不平を洩した。

もう一つ支那人獨特な事に感服したのは、揚子江から南の方へ行くと、運河が非常に多い、田でも畑でも運河よりずつと上になつて居る、それで水を汲上げなければならぬ、どうして汲上げるかといへば、ダービン式になつて居る水車が平面に廻つて居て、水が上がるやうな仕掛になつて居る。重に水牛を使役

してゐる。又關東州の渤海灣に面した所に鹽田がある、其鹽田で海水を引上げる車がある、それは南部支那に見るやうな式だが、牛も人間も使はない。横に平たい車があつて、其車に小さい帆が幾つか掛けてある、其帆に風が當ると車が廻る、すると海水が鹽田に濺る。而も風の力で廻るのだから非常に靜かに廻つて、海水が鐵に迴入らない。依つて鹽田は損害を受けずに、海水を汲み上げることが出來る。さういふ所は實に能く工夫したものである。

奉天と安東の所に線香を造つて居る水車がある、その外觀は汽車から見えるが、松葉か何かを搗いて線香を造る。中には這入つて見ないが小さな水車があるさうだ。其事情に通じた人の話を聞くと、非常に能く考へたもので、今の歐羅巴の新しい機械學の原理に適ふやうに造つたものである。かういふ點を見ても支那人には中々獨創性があつて、餘り無理をしないで、業をして行けるやうな方法を研究する傾向がある。此精神を刺戟し發達せしめたならば、古い支那文化より、更に新しきものを創造することが出來るやうに思はれる。

之に關連して考へるのは支那の社會事業である、支那の社會事業は歐米の宣教師のみがやつて居ると思ふが、さうではない。支那獨特の社會事業がある。天津に長盛育嬰堂といふ孤兒院がある、直隸省の鹽商人の團體が年に四五萬の金を出して維持して居るが、日本人で之を見に行つた者がない。天津の領事が私に見ないかと言はれて、領事館の方に案内されて行つたが、日本人として初めてだと言はれた。大變親切に見せて呉れたが、其所の特色は赤兒一人に保姆一人付て居ることである。赤兒が八十人居れば保姆も八十人居る。是は今日保姆を安く傭へるからであらう、詰り後家さんや不幸な婦人が多いからであらうが、赤兒一人に保姆一人付て居る孤兒院は世界にあまり例はあるまい。建物も中々清潔であつた。

奉天には同善堂といふ綜合的社會事業がある、病院もあれば、施療所もあり、無錢宿泊所もあれば、授産所もあり、其他貧民學校、醜業婦救濟所、捨兒の受取所迄ある。是も其地方の富豪などが寄附をして、一種の財團を造つて、其地代や何かの利益で維持して居るのである。面白いのは濟良所といふて、醜業婦救濟所で、虐待された婦人とか自由廢業した婦人が何十人集つて、毎日日課があつて、學問を教はり、裁縫を習つて居る。容易に男子の參觀は許されない。私は奉天新聞の主筆の佐藤君に案内されたので許されたが、其濟良所の表に、女達の中に結婚したい希望者の寫眞が飾つてあつて、其女を貰ひたいと申込むと、其男の身元を調べて、其女と結婚しても相當の家庭を造り

得る見込が立てば、初めて見合を許して、双方が宜いとなれば結婚させる。さういふ所は随分痒い所に手が屆くやうである。

又捨兒を受取る所は横丁に面した所に室があつて、其通りに向つて一尺四方位の窓が付て居る。捨兒したい者は夜コツソリ來て、窓の外からベルを鳴らすと、室に居る婆さんが窓を開けてその兒を受取る。捨兒する方も受取る者も默つて受渡をする、何者の子か、どうして捨てるか、理由は聞かない。唯だ捨兒を救へば宜い。之を日本式にやるとすれば、捨兒をする本人の住所姓名年齢本籍を調べ、それから受取るか受取らぬかを極める。そこは支那は碎けたもので、捨兒をする位な者は公然自分の名を明かすことが出來ないから、唯だ受取つて育てれば宜いので、ダンマリの中に受渡の手續を終了する。かういふことは頗る解つた方法である。是が支那獨特の方法か或は露西亞邊から輸入したものにや解らない。英吉利、西歐、亞米利加などには殆どないことであらう。

支那の社會事業は哀憐の情から發したものでなく、社會事業を行はなければ金持が損だといふ自衛主義から起つたものらしい。が、さういふ立派な社會事業が經營されて居る。近頃は同善堂が醫學校迄經營せんとして居る。頗る包容的な自由な特色がある。日本の社會事業家も歐米の社會事業のみを研究せずに支那の社會事業をも併せて研究する必要がある。かういふ所にも支那人の獨創性が現れて居るからである。

一〇　雨に縁のない生活の様式

私は昨年四月の六日蕭々たる春雨の中に上海の埠頭に着いた。上海に滯在中一日雨が降つたと思ひ出す。

四月下旬漢口に滯在中可なりの雨があつた。雨を冒して長江を横つて武昌に赴き、武昌から汽車で長沙に行つた。長沙でもしとしとと春雨が降つて、遂に黄興の墓や、曾國藩の廟には行きかねた。

五月上旬北京で微雨に逢つた。其の後六月の五日朝鮮の國境に這入る迄、殆ど雨に逢はなかつた。私は米國より携へ廻つた洋傘を、手持無沙汰に持つて歩いた。

日本は島國である。随て大洋の影響を受くることが多いから、雨が多い。然るに大陸は海の影響を受けることが少いから、雨が少い。日本で雨が降るから、世界到る所雨が多いと考へると、大なる間違ひである。概して雨は島國に多い。英國も雨が多く、霧も深い。

この様に日本は雨が多いのに、毛織物の發達しなかつたのは、牧畜をしなかつた爲めである。其の代り雨合羽の如き物は發達

して居る。然るに支那は雨の降ることが少いから、雨具の用意の無い人間が多い。現に雨が降れば北京でも、人力車夫は殆ど姿を隱してしまふ。なぜなら、人力車自らが雨覆を持たない、人力車夫も雨具を持たない、故に客を取ることが出來ない。一たび雨が降れば、人力車夫は蜘蛛の子を散らすが如くに、何所かに隱れてしまふ。旅客に取つて此位不自由なことはない。

支那人の靴は布で造つたもので、雨の降る時は歩くに堪へない、雨が降れば全く外出を中止するより外ない。雨が降れば人通りが非常に少くなる、時としては皆無な場合もある。

支那の兵隊の制服は太絲の木綿織を灰色に染めたものである。彼等は毛織の外套を持たない、故に雨が降れば行軍することが出來ない。戰爭中雨が降れば休戰となる。恰かも我國の運動會の如く、少し雨が降ると雨天順延となる。兵士の靴も布で造つた靴が多いから、雨中の行步には堪へない。

但し湖南省の長沙では木製の高下駄のやうな物があつた。多分この省は、比較的雨が多い所であるかと思はれる。洞庭湖や湘江などといふ大河があるから、可なりに水蒸氣が多いのかも知れない。一體に湖南省の風物は山に松が茂り、農家に窓がついてゐる有樣など何處となく我が國と似通うてゐるやうに見えた。但し水田や畠の畔を黑色の小豕などが小犬やうに驅け廻つてゐる光景は無論我國で見ることが出來ない。

朝鮮には舟形のやうな雨靴があつたやうに思ふ。

人力の事を書いたから、支那の人力車と日本の人力車との相違に就て書いてみたい。日本のは車が大きくて、バネがあつて箱が馬鹿に高い、頗る乘心地が好くない。見榮はする。如何にも偉さうに見える。併し乘つて居る心地は餘り好くない。支那のは梶棒は馬鹿に長い、そして車は小さく、箱が低く出來て居る。車の後に鐵の尖つた棒が出て居つて、若し前に行く人力車につかへるやうな時には梶棒を上げる。梶棒を上げると客がひつくり返へるやうに思はれるが、さうではない。後に出張つて來る鐵の棒でピタツと止るから安全である。傍から見れば支那の人力は恰好が惡い、併し乘心地は餘り惡くない。私は大連へ來て久し振りで日本流の人力車に乘つて見たが、如何にも落着ちさうで、飛されさうで、乘心地は惡かつた。寧ろ支那の人力車を參考にして、もう少し安全なる人力車を工夫する必要があるのではあるまいか。

日本の人力車に提灯の付いてゐることを外人、殊に歐米人は興味を持つて稱讚するが、雨の降る時は困る。詰り手拭なんかで提灯の蓋をするが雨滴が垂れるから、蠟燭の灯は消える。然るに支那の人力の燈火は提灯ではなく、自轉車用の洋燈であ

から、雨合羽は無いが、燈火だけは雨の爲に消える氣遣はない、日本の人力車も其點は寧ろ支那の人力車に學ぶ所がなければならぬ。日本でも抱車などは洋燈式であるが、一般の辻車などには朦朧提灯がある。支那では人力といふ人力は皆洋燈式を採用してゐるらしい。

一　徹底個人主義

支那人は愛國心が無いと言はれる。支那は平原に國を成して境界が極めて漠然たるものがあるので、自ら國家意識が十分に發達しなかつた。近頃青年學生が國家的運動を起すやうになつたのは、外部の壓迫の結果である。壓迫がなければ彼等は愛國心を振ひ起すことはない。支那は大國で、平原國であるが故に政治も、行政も、敎育も行屆かなかつた。然るに日本のやうな島國であれば、或は谷あり、或は入江あり、或は山あり、丘あり、林ありで、小區劃の地域が到る所に存するが故に、政治も、行政も、敎育も割合に纏つて、爲政者の恩惠に浴することが出來た。之に反し、支那は中央集權が極めて薄弱なるもので、漠然と天下に號令するとか、或は世界を打つて一團とするかといふ、理想の下に出來上つたる聯邦であるから、勢ひ政治も、行政も、敎育も不行屆きである。即ち政府が個人の生命財產に對する保護が十分でなかつた故に、支那人は徹底個人主義者となつた。自己の生命財產は自分で保護するより外ない。富家の邸宅は高き壁を以て圍まれて、一種の城廓の如きものである。內亂騷ぎとなれば直ぐに外國租界に隱れる。中には平常外國租界に店を出したり、永住したりしてゐる者も少くはない。都市その物は高き煉瓦の城壁を以て圍まれて居る。故に日本のやうな明白なる國家意識が發達して居らないからと云つて、支那人を輕蔑することは出來ない。是は全く地理的影響の結果である。

支那人は國の爲めといふ考は餘り發達して居らないが、自分の家族親族の爲め、或は自分の鄕里の爲には隨分獻身的の行ひを敢てする。例へば今日の敎養ある青年が、或は代議士となり、或は官吏となるのは、何の爲めかと云へば、出世して早く名を擧げて、一族及鄕黨の爲に利益を分ち與へたいといふ希望の爲めである。同鄕人相倚相助くる精神は可なり發達して居る。支那人の發展して居る所には何所にも一種の倶樂部の如きものがあつて、相互扶助の精神が動いて居る。支那の政治家が變動或は革命の爲に失脚することがあるが、衣食に窮することはない。なぜなら、同鄕の人々が助けるからである。詰り隣保扶助の精神が發達して居るからである。故に道德の標準が違ふ。日本人の普通の道德は、國家本位の道德に重きを置く。が、

支那に於ては個人本位の道德に重きを置く。

支那人は大國民である。悠々として迫らざる所がある。例へば扇を使ふにも、大きな扇を右肘を張つて悠やかに風を運んで來る。日本人のやうにパタパタツと急いではやらぬ。道を歩くにも悠々と濶歩することがよいとなつて居る、小刻みに急いで歩くことは餘り褒めない。

慢々的（マンマンデー）といふ言葉がある。是は遲くとか、ユルリと、とかいふ意味である。支那人の考へ方は慢々的（マンマンデー）である。日本人の考へ方はセツカチで、氣短かである。支那人は喧嘩口論をしても中々手を出さない。盛に罵り合つても滅多に擲り合をしない。日本人は默つて、イキナリ鐵拳を飛ばす。日本人の氣短かは、一は日本の氣候が變化に富み、氣候その物がのんびりした所がないため、其の影響を受けて居ることは少なくない。仍て支那の現在及將來に對しても急いではならない。落ち着いて判斷し行爲して差支ない。例へば中華民國成立以來、幾多の變亂が起り又革命が行はれ、內訌が續いて居るが、支那人の如く個人主義に徹底したる民は、容易に相互に信用することが出來ない。相互に排斥を事とするのは已むを得ない。邪推することは已むを得ない。故に南北相對立するも已むを得ない。同じ北方が、又直隷派と奉天派とが爭ふも亦已むを得ない。かゝる事が茲五十年や百年位は續くものと見なければばらない。折々支那に內亂が起るから、支那が滅亡するであらうと考へて、悲觀說を出す必要はない。日本のやうな島國で、小さい國柄であれば、十年も內亂が續いたならば、非常に國民は衰へるかも知れぬ。併し支那の如き大國民は五十年や百年位ゴタゴタがあつても、國が亡びる氣遣はないと考へられる。支那に對しては日本人は慢々的（マンマンデー）式を以て臨まなければならぬ。滿洲に於ける金建問題の如きもこの民族心理を理解せず、何でもかんでも劃一的にやりたい癖が出たのである。要するに島國心理で大陸心理を束縛せんとしたのである。愚の至りである。決して功を急いではならぬ。長い間に成功するを以て理想としなければならぬ。外交に於ても然り、教育に於ても然り、宗教に於ても然り、商業に於ても亦然りである。

一二　南方支那の驚異

南方支那の風物は、中央支那及北部支那とも大分趣きを異にする。然るに香港に船を寄する者は、廣東に訪ねる人は割合に少ない。北部支那及び長江沿岸を視察する人は多いが、廣東迄足を向ける人はない。然るに廣東の風物は楊子江沿岸とも大に

違ひ、殊に北部支那とは非常な相違があるから、廣東地方は是非見て置くことが必要である。

私は香港より夜船で廣東に赴いて、翌朝早くその波止場に着いた。廣東は珠江の三角洲の上に立つ街で、昔から外國と交通し、貿易をした所で、廣東人は南洋地方、米國邊迄も發展して其の勢力は中々なものである。殊に上海、北京、天津でも、大きな商人には廣東人が多い。廣東人は支那に於ても最も國際的活動をなす人種である。又富の勢力を支配しつゝあるものがある。けれども廣東の教育その物は餘り振はなかつた。廣東人が南洋及米國に發展して、海外に於て教育を受けた人士が少くない。是等の人々が國に歸つて來て、政界の中心人物となつたるが故に、中華民國以前より、廣東は宛然たる一大勢力を成して居つたが、第一革命以後は殊に廣東の勢力は隆々たるものとなつた。

廣東で第一に驚くことは、水上生活者の多いことである。是は蜑民と稱する者である。其數約十五萬と稱して居る。是等の人種の起源に就ては、色々説がある。或は滅亡したる前時代の朝廷の遺臣だといふ。例へば明の遺臣が陸を捨てゝ水上生活をして居るのだともいふ。併し是も一説であるが、蜑民の祖先はマレー人種ではないかと思ふ。マレー人は水上生活を盛にやる。遠い國に冒險的航海を試みたことを以て名高い。蜑民は船に生活して居るが、此船は廣東を中心としてる珠江の到る所に群集して居て、實際之を目撃するにあらざれば、殆ど信ずることの出來ない觀物である。蜑民は河の水を汲んで、飯を炊き、茶を煎ずるのである。無論大小便の如きも皆な江中にやる。死人も恐らく河に抛り込むのだらう。この船には料理屋もあれば、藝者屋もあれば、娛樂場もあり、殆ど一切が備つて居るといふことである。かゝる夥しき水上生活者は、廣東及江南地方以外に於ては見ることの出來ない現象であらう。

廣東で聞いた話であるが、廣東の商人の組合は非常に強いさうである。日本も昔、寺町には寺が澤山あり、穀町には米穀商が竝んで居たといふことであるが、今でも廣東では米屋ばかりの町、或は薪屋ばかりの町といつたやうに同じ種類の商人が一區域を成して居る。若し其の中、一軒不幸にして破產にでもなるやうなことがあれば、他の組合員が醵金し合つて、急を救ひ、月賦か何かの簡便なる方法を以て返却させる。さうして一軒なりとも自分らの組合の者を破產させないやうな事を講ずるさうである。かゝる事から見ても廣東人の、商賣人としての秀れたる才能のあることを理解することが出來ると思ふ。

廣東の大通りには大きなデパートメント・ストアーがある。其建物は三越のやうな立派なものでない。お粗末なものである。可なり大きなもので、日本のデパートメント・ストアーより特色のあるのは、中に活動寫眞館迄あり、寫眞屋あり、料理屋あり、一切の店がある、活動寫眞のあるデパートメント・ストアーは、まあ廣東だけではないかと思ふ。

廣東は以前は道路の狹きを以て名高かつた所である。併し今でも、古き町はあつて、精々石を敷いた四五尺、或は一間位の道幅の所がある、隨分狹苦しく感ずる。然るに二三年前に陸榮廷一派の武斷派が廣東を支配した時に、强制的に市區改正を斷行した。廣東の街に碁盤の目のやうに、大きな線を引いて、其線に當つた所の地面及建物は無償で沒收した。其爲に無財産になつた人間が少からずある。それを氣にして自殺した者さへ可なりあるさうだ。然るに武斷派の政府はかゝることには一顧も與へず、思切つて市區改正を斷行した。又城壁を崩して、其煉瓦を推いて新設の道路に敷き詰めたから、今日の廣東には自動車が走ることの出來る道路が、四通八達したやうな譯である。是は古き廣東を見て居つた人の夢にも信ずることの出來ない點である。

廣東に滯在中、廣東軍政府に赴いて、孫文先生と面會した。軍政府その物は、ペンキ塗の建物で、餘り立派な物ではないが、可なり廣いものであつた。奥まつた二階の大廣間に通されると、孫文先生は恰度來客と話されて居つたが、それをおへられて、私と二三十分會談した。私は八九年前に早稻田の大隈邸で孫文氏と會見したことがあつたが、其時は尙ほ綠髮滴るばかりの壯年であつたが、孫文先生も大分老境に進まれたやうに思ふ。非常に質素な支那服を著けられて居て、此人が二三日中に南方支那の大統領に戴かれる人かと思ふと、何となく、奥ゆかしさと尊敬の念を新たにせざるを得なかつた。

孫文先生は先づ吾輩に戰後の歐米の有樣を話して呉れ給へと注文した。私は十四五分で大體の話をした。引き續き孫文先生は日本の軍閥に對する批評をされた。私が日本は支那に對して多少の過ちもありましたらうと云つた所が、過ち以上であると訂正し、日本の軍閥が張作霖を助けて復辟運動を計つて居る報道が頻々として北方より來るから、日本の軍閥の代表者某々三氏に警告を與へて貰ひたいといふやうな話もあつた。

昨年の四月初めには名聲隆々たる先生も、今は廣東より出奔して、流寓の生活を再び繰返されて居ると聞いて、甚だ同情に堪へない。捲土重來して、再び南方支那に於ける重鎭となる日のあまり遠からざらんことを祈る。戰には負けても、勝つた陳

聰明などは側へも寄つてつけぬ大人氣であるとは孫文先生もえらいと讃美しなければならぬ。

一三　長江の詩趣と史的聯想

支那の海岸線は比較的に短く、良港に乏しい。併し河流には大なるものがある。昔から江、淮、河、漢と呼んでゐる。江は楊子江、淮は淮江、河は黄河、漢は漢江である。私は此度の旅行で、西北部の支那を見なかつたから淮江を見ることが出來なかつた。が、楊子江は上海より漢口迄遡り、漢口と漢陽の間を流るゝ漢江も見た。湖南省の長沙よりの歸途、福州の洞庭湖を横つて、京漢鐵道で夕方少し暗くなつてから、黄河を横つた。それで支那四大河の中、三大江を見た譯である。

楊子江は八省の會といつて、八省の水が集り流るゝ河と考へられて居る。冬は減水するが、春先から夏にかけて、西藏より流るゝ所の雪解けの水が加はるから、洋々として溢れる。其時は河口より漢口迄一千餘里の間、一萬噸の軍艦がユツクリ遡ることが出來る。仍て名高い俗謡がある。

「一千餘哩長江の流れ一萬餘噸の汽船が通ふ
見せてやりたや隅田安治川船漕ぐ人に」

楊子江航海中、見物の一つは、大きな筏である。多分四川省若くは湖南省邊の山奥より流れて來るものであらうが、大小種々なる筏がある。大きなのは幅が二十間位、長さ一町位ある。かゝる大きな筏には小屋が二軒も三軒もあり、二三家族位住んで居る。そして豚小屋もあれば、小さい畑もあつて、野菜を培てゝ居る。此筏は支那流の慢々的（マンマンデー）式に、自然に流れて來る。山の奥から自然に流れて來るから、南京邊迄流れて來るには、一年位かゝる。更に筏を解いて、賣つて、郷里に歸れば、足掛け三年目になるといふのもある。若い夫婦などは二人で出て、赤ン坊を連れて郷里に歸るといふやうなこともあるさうだ。

楊子江航海中のもう一つの見物は家鴨飼である。家鴨の子を何百となく家鴨飼が率ゐて、自分は盥のやうなものに乘つて、河岸に添ふて下つて來る。別に糧食を携へないで、河に泳がせながら食はせる。夜になれば、河岸に上陸して、假寢の夢を結んで、翌れば再び盥の舟に乘つて、家鴨の集團を指揮して、悠々と太江を下る。時に或は蒸汽船の音などに驚いて、家鴨の長蛇の陣が亂れる。そこで指揮者が杖を振れば、家鴨は再び鶴翼の陣立をする。中々興味がある、さうして出て來る時は少さい家鴨でも、南京邊迄來る中には可なり大きくなる。隨て相當の値で家鴨を賣つて、金を携へて又郷里に歸る、かゝる大きなのんびりした景色は楊子江獨特の景色であつて、他に之を見ること

はむづかしい。

揚子江の沿岸には名所舊蹟が頗る多い。南京の對岸に近い釆石磯には楚の項羽が自刎した烏江がある。更に溯れば右岸の蕪湖には王陽明が讀書した九華山がある。左岸に安慶を望み、五十浬ばかり溯れば小姑山の江中に屹立するを仰ぐ。孔明が曹操を破つた華陽鎭はその附近にある。小姑山と相對して陶淵明が知縣であつた彭澤縣といふ楊柳の村がある。誰も注意するのは赤壁である。蘇東波が有名なる赤壁の賦に詠じた赤壁である。これは漢口に近くなつてから、黄州府の黄岡縣城から遠からぬ所に十丈位もある崖が見える。現在の江岸からは數丁離れてゐる。舟から見ると、幾らか赭色の崕であるが、決して高い崕ではない。『斷岩千尺、山高月小、水落石出』と實際とは大違ひである。併し揚子江は年々歳々上流より泥土を齎して、淺くするから、蘇東坡の時代には赤壁の岸はずつと深くあつたかも知れない。今よりも何倍となく深くあつたかも知れない。が、今は淺い所であつて、崕も極めて低い、何等の趣向を惹くやうな所はない。

揚子江から眺めて最も雄大なるは廬山である。廬山に入つて廬山を見ずといふ程の大きな山である。今は宣教師達が避暑地として、之を利用して居るさうであるが、此山は樹木鬱葱として如何にも幽邃なる景色を含んで居るかの如くに思はれる。再遊の折は是非登つて見たいと思ふ。清少納言で名高い香爐峰はこの山中の一名勝である。

白樂天の琵琶行で名高い潯陽江は南岸の九江に在る。九江の港に碇泊中覗いて見たが、實に薄汚ない河である。併し秋風月明の夜は流石に「楓葉荻花秋瑟々」の趣きを暗示するものがあるかもしれない。「忽聞水上琵琶聲」の代りに九江燒を賣る商人の甲高い聲である。この平凡の背景を詩化したる白樂天の文藻絶倫なるに驚かざるをえなかつた。

支那文化史を本氣に勉强して、四千年間の變化と發達とを腦裡に收めて、もう一度長江を航行して見たい。

一四　南京城の懷古

南京は隨分衰えて居るが、依然として中央支那の一大中心である。日本が朝鮮と初めて交通した頃、支那の都であつた關係上、南京の字音即ち吳音なるものが、朝鮮を通して日本に傳つて居る。「法蓮華經」といへば「法蓮」は漢音であるが、「華經」は吳音である。今日、日本の佛敎の敎典などは吳音で讀むものが多い。其他にも漢音と吳音を混ぜて讀むものもある。其起源は遠く遡つて日韓交通の初期に於ける南方支那の勢力に迄遡り

ゆく必要がある。

私は少年時代に三國志を愛讀したものであるが、呉の孫權が都した建業は南京のことである。私は個人としては蜀の玄德が好きで、次に孫權を好み、曹操は最も嫌つた人物であつた。そこで孫權が都した所であるといへば、何となく懷しく思ふ。長髮賊の亂に洪秀全が南京を占領して十三年間その本據地であつた。今日の督軍府は即ち洪秀全が造つたもので、甚だ粗末なものであるが、歴史的追懷の場所として餘程興味のある所である。吾々が江蘇省督軍齊燮元氏と會見したのは、洪秀全が應接室として用ゐたらしい場所であつて、吾々が歴史的空想の力を逞しうさへすれば目前に洪秀全を見るやうな氣持になる。

南京で最も私の目を悅ばせた所のものは、南京城廓である。是は高さは三丈乃至五丈もあつて、長さは三十二哩もある。十三の城門があつて、九門丈通用門となつてゐる。明の太宗が此城壁を築く爲に、七年の間、毎日一万の土工を用ゐたといふことである。明の太宗が天下を統一して、所謂今日でいふ裁兵問題に苦んだ。若し軍費を節減して、兵士を歸休せしむるときは、失業者問題が起るが故に、此問題を圓滿に解決する爲に、恐らくは兵士を用ゐて、大城壁を造つたことゝ思ふ。北京城に比して遙かに雄大である。又萬里の長城よりはどことなく落付いて居る。鷄鳴寺の側から城壁の上にのぼれば、玄武湖は脚下に横はり、大江は洋々として天容を浸す。展望廣くして氣宇自ら大を致す感がした。南京城は兎に角世界に於ける見物の一である。

私は江蘇省の省長王大人と面談したる時、循吏の典型と仰がれて居る長者と、語るべき特別の話題もなかつたから、南京城保存論を主張した。

日本に於ても維新の當時、上野公園や不忍池などをも、或は畑にしたら宜いぢやないかといふ説もあつたが、兎に角あれが保存されて、今日の東京の風致を大に加へてゐる。將來南京城に對しても、あの煉瓦を以て家を建てたいとか、或は南京城を取崩した跡に大きな道路を造りたいとかいふやうな意見が出るかも知れないが、世界の文化の爲に南京城を保存される方が宜いと述べた。所が王大人大に共鳴して、實はお説の通りである。かゝる城壁を保存する必要はないから、此煉瓦を以て建物に充つるが宜いとか、城壁の跡に道路を造る方が宜いといふ説もある。が、吾々は深く考へて、其説には反對して居ると言はれた。

南京で誰でも見る物は明の孝陵である。此陵は隨分大きなもので、明の太宗の築かれたる塚は、可なり大きな山であつて、

麓から頂上迄一町位登つて、澤山雜木が生えて居る。

一體支那では、なぜかゝる大きな墓を造るかといへば、一は帝王の威風堂々たる所を示す爲めでもあるし、又一には人夫を多く使役して、失業者問題を解決する爲めでもあるだらうと思ふ。もう一つの理由は小さい墓を造れば、敵の爲に必ず發かれる憂ひがある。然るに大きな塚を築けば、敵と雖も發くことは出來ない。故にかゝる大きな墓を造つたといふ說がある。是は面白い意見である。

南京に有名なる運河がある、それは誰人も知つてゐる秦准といふ。狹い運河で、兩側に汚らしげな家があつて、河はドブ泥である。併し秦准の畫舫といへば天下に名高い。實は杜牧の「烟籠寒水月籠砂。夜泊秦准近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花」の一詩が秦准を世界に紹介したので、今更のごとく文學の力の偉大なるに驚かざるをえない。

私は南京の總領事の好意に依りて丁度落ち合つた小笠原伯一行に加はつて、畫舫を其泥水に泛べたが、しかも午後の强い春の日の下に浮べたのである。實に殺風景なものである。年若き藝者が二三人來て、歌をうたひ、男がついて來て、胡弓のやうなものを彈く。杜牧の詩の背景が幾多眼前に現はれたやうな氣がした。とにかく數多き廢墟の中に立ちて方孝孺や顏眞卿等などの忠烈の士のありし日を思ひ出すことは一種の靈感である。

南京に有名なる貢院といふものがある。科擧の試驗場、卽ち官吏志願者の所謂試驗所である。小さい部屋が二万以上もあつたといふ。何万人といふ志願者が、試驗期日の間、其所に這入り込んで、動かず、寢食から排泄物迄此の場でやつて、試驗を受けた所だ。其貢院が見られると思つたが、あらかた取壞されて、其處は一種の遊園地になつて居る。東京の淺草の奥山といつたやうな所に變化しかけてゐるので、貢院を昔の儘に見ることが出來なかつたことは殘念であつた。物質的文明の風が遠慮會釋なく、南京の古き都にも襲ひ來りつゝあることを考へるときは、一種の感に打たれた。されば支那を變らないといふ人が多いが、この變りつゝあるといふことも忘れてはならぬ。

一五 支那時文研究の急務

或漢學者が上海に行つて、苦力の人力に乘つた。その車夫が矢鱈無性に驅け出したので、靜かに！ 靜かに！ と聲をかけたが、日本語では無論分らぬ。そこで漢學者先生一生一代の智慧を搾つて、漢文で話せば分るだらうと思ひ、徐行！ 徐行！ とやつた。それでも車夫は分らないで、韋駄天の如くに驅けたといふ話がある。

これと同じやうな話がある。亞米利加歸りの日本人が京城に行つて、總督府の前の坂を、朝鮮の車で來て、餘り早いものだから、遲く！　遲く！　と云つた。が、日本語は分らない。朝鮮の言葉でオソオソといふのは早く早くといふ言葉だから堪らない。車は益々驅出した。

漢學者は漢文で行けば、支那で用は辨ずると思ふ。成程或程度迄は辨ずる。讀書人とは筆談が出來るが、支那の時文と日本の漢文との間には大分相違がある、其例を三つ四つ記憶に殘る儘を書いてみやう。

「閑人免進」といふ看板がある。是は無用の者入る可からずといふことだ。「開水」とは湯のことである。「熱水」とは熱湯のことである。

「小心火車」とは汽車に用心すべしといふことだ。「太平龍動」はポンプ、「德律風（テレフオン）」は電話、「火柴」もしくは「洋火」はマッチ、「汽車」は自動車、「大律士」は辯護士、「輪船」は汽船、「押」「質」「當」は各々小、中、大の質屋、「大菜番菜」は西洋料理のことである。更に面白い語を拾へば、「蘋菓」は林檎、「龍鬚菜」はアスファラガス、「放假日」は休日、「姑媽」は叔母、「表哥」は從兄、「爺爺」は祖父、「奶奶」は祖母である。「瞎子」は盲人のこと、「戯班子」は役者、「女旦」は女優のことである。

能く新聞に「禁煙」とある。是は阿片を禁ずるといふ意味である。烟草を禁ずるといふ時分には「禁烟火」と書く、支那人が日本の新聞を見て、禁烟の文字に接すると、日本人も阿片を飮むかと考へるさうである。

「月臺」といふのは停車場の歩廊（プラツトホーム）のことだ。是は文廟で孔子の祭典をするときに舞をする、その舞臺のことを月臺といふらしい。それから來たのであらう。

「禮拜一」といふのは月曜日、「禮拜二」が火曜日、以下禮拜三四、五、六、とあつて、是が水木金土に當る。而して日曜日は「主日」といつて、英語のLord's Dayを直譯したものらしい。日本が陰陽五行道に則りて一週の各日に命名し御本家の支那が新に譯名をつけたことは面白い對照である。

かくの如くに、支那の時文は、所謂漢文とは非常な相違がある。

漢文を學んで居れば、支那の古文を讀むことは出來るが、現代の支那の新聞雜誌を讀むには不十分である。殊に此頃は白話といふ、言文一致體の文章が唱へられて、日本の新體詩のやうなものが試みられて居る時代であるから、現代支那を理解するには、支那の時文若くは白話を研究する必要がある。

私一個の考としては、漢文は中學だけで澤山ではないかと思

ふ。特別にやる者は、便利な注釋本や飜譯本が多く出來て居るから勝手にやれる。專門學校以上に於ては、漢文の代りに寧ろ時文を教へた方が宜いではないかと思ふ。其教師は日本人にして支那語に精通した人を採用しても可なりであるが、相成べくは支那の少壯學者を招聘して教へて貰ふ方が宜いではないか。さすれば彼等も亦日本を研究するの機會を有し、日本の青年と接するの機會を與へられる譯である。又吾々の立場としては、新しい支那人の心が分り、其希望が分り、其理想が分るといふことになるから、一擧兩得ではあるまいか。

漢文を研究することの必要なるは、歐米に於て希臘語羅甸語を研究するの必要なると異らないが、漢語は謂はゞ死語である。時文は活語である。故に此活語たる時文を研究することが必要である。

日本の新聞雜誌には支那の事は餘り書いてない。ヨクヨクの大問題でなければ書かないから、支那の事情に精通する爲には支那の新聞雜誌に接近することが肝要である。それには支那の時文を研究しなければならぬことになる。

一六、「醫者となるには水泳第一」

日支親善の方法は幾らもあるが、第一は醫術を通しての日支親善は或程度迄成功して居る。同善病院の事業の如きも可なり成功して居る。殊に成功したのは濟南府に於ける濟南病院である。誰も知るが如く濟南は日貨排斥の主なる中心地である。然るに青島の軍政廳が、完成する迄には約二百萬圓を投じて大病院を建てゝゐる。今院長は牧野醫學士で、有爲の醫學士が數名之を助けて居る。最初此病院には支那人は餘り來なかつたさうである。濟南には齊魯大學といふ基督教主義の大學があつて、其の附屬醫科大學病院があるので、支那人は主に其病院へ行つて居つた。然るに濟南病院は諸機械が完備して居り、又療法が新しいといふので、次第に信用を得て、山東に於ても最も信用ある病院となつた。牧野醫學士の如きは非常なる尊敬を受けて居る。支那人は病氣を治して貰ふと、お禮として大きな、木の額へ金文字を入れて、醫者の徳を稱へる。それを大勢の人夫に輓かせたり、舁かせて、樂隊などを入れて持つて來るものださうだ。それが濟南病院には何十枚となくある。之を以ても如何に其病院の信用があるかといふことが分る。面白いことには、排日運動の張本人も、病氣になれば此病院に來る。かゝる譯で病院事業は日支親善の最も好い働きとなる。

天津に醫學士田村俊次君の東亞醫院といふのがある。是も非常な信用を博して、獨り支那人のみでなく、西洋人なども入院

して居る。田村氏は該病院設立の趣旨冒頭に、「余嘗て支那駐屯軍病院長として天津に在りし時、公務の餘暇を以て支那人の診療に從事し、支那に於ける日本醫術は日支親善の一大權威たることの實證を得たり云々」と述べてゐる。その成功は日支兩民族の同慶すべき所である。

私が漢口から出發した時、丁度河南省の信陽かに開業して居る日本の醫師某君と室を同じうして、色々經驗談を聞いたが、其町には日本人は其醫者と細君と二人だけで、支那人から非常に尊敬され、頼りにされて、愉快な生活をして居ると聞いて、大に意を強うしたことがある。

支那には日本の醫者が發展する餘地は十分にある。眞面目で親切にしてやれば、神の如く尊敬される。

同善病院の如きも中々立派なる事業であるが、其の直ぐ傍に米國のロックフエラー財團の金殿玉樓のやうな大病院が出來た。六百萬圓も設備費にかけたといふ大建築物で輪奐の美を恣にしてゐる。其傍に在る二階建の同善病院の煉瓦建が頗る貧弱に見える。將來益々病院事業を通して日支親善を進むることが大切である。

支那に長く住んで居る基督教主義の醫者は、宣教師が醫者を兼ねて居るので、醫術は必ずしも新しくない。隨分舊式の醫術をやつて居るが、支那に長く居て支那語は十分である。隨て醫術以外に支那人より信頼を博して居る向もある。其事に就て牧野院長に聞かされた話だが、一昨年頃、山東省の督軍が濟南に居る外國の醫者を招待した。そして醫は仁術であると云つて、盛に醫者の功德を褒め稱へた。日本の代表者は極めてお座なりの型に嵌つたやうな答辭を述べた。愈々齊魯大學の醫科大學長の答辭となつたが、此米國人は永年支那に居るので、支那語を非常に旨く操る。是は非常に有利な事である。其の上中々面白い話を知つて居る、即ち次の樣な話をした。

只今督軍閣下は晋々醫者を、仁術であると大に稱讚されたが、甚だお恥しい次第であつて、醫者にも色々の種類があるかういふ話がある。或醫者が大病に罹つて死に瀕した。彼はその一人息子を呼んで、遺言した。お前は何になりたいか。息子は矢張お父さんの業を繼いで醫者になりたいと答へた。すると臨終の病父は我が意をえたと喜んだ樣子であつたが、思ひ出したやうに突然に醫者となるには水泳を稽古しなければならぬと苦しい息氣。そこで息子が驚いて、何の爲に醫者になるのに水泳が必要ですかと質した所が、親は苦しい息を吐きながら說明した。俺が若い時に或富豪から呼ばれて診察に行つた。所が其病人は其家の一人息子で、大切な人である、脈を診た所が、直

態ではあるが、一日二日で死にさうもないから、先づこれを飲めば、當分は宜いでせうと云つて、藥を飮ました所が、病勢俄かに改まつて其の場で落命した。そこで家人怒るまいことか、此藪醫者の爲めに大切な一人息子の生命を取られた。たゞは置かないといふので、各々獲物々々を取つて、掛かつて來たから藥籠も何も投げ捨てゝ、命からがら逃げ出した。後から大勢の奴が棒や刀劍を持つて、追掛けて來るので、汗を流して、目くら滅法に駆けて來ると、大きな川があつた。仕方がないから川の中へ飛込んだが、泳ぎを知らないから、水を飲み、這々の態で向ふ岸に著いた。さうしてヤツと追手の者から助かつて、命からがら家に歸つた。其時から醫者になるには、先づ水泳を稽古しなければならぬものだといふ確信を抱いた。だからお前も醫者になりたいなら、先づ醫術を學ぶ前に、水泳術を學んだ方が宜いと云つた。

此面白い話を其宣教師は非常に巧妙なる支那語を以て話したから、今迄鹿爪らしい、形式一遍の答辭ばかり聞かされて居つた將軍其他の大官連は大喜びで、腹を抱へて笑ひ崩れた。

牧野院長曰く、吾々には迚もあゝいふ藝當は出來ない、醫術を以て競爭することは出來るが、あゝいふ卓上演説、而も支那語でやるなどといふことは迚も出來ないと云れたが、日本人の演説は堅くなり過ぎる。人を喜ばすやうな演說を稽古する必要がある。そこへ行くと、支那人でも亞米利加人でも、共に大陸人なるが故に共通の點がある。演説を稽古することは肝腎だが、人を怒らせるやうな演説は、割合に容易い。人を喜ばせ、笑はせる演説は一寸むづかしい。その呼吸は一朝一夕にして呑込めるものでないから、豫め稽古して置かなければならぬ。私は支那に行つて醫術を開業する諸君に對して、水泳術も必要であるかも知れないが、支那語で面白い話の出來る稽古は大切であることを附加へる。

一七　「顧而言他」

吾々が漢文を研究した時分、顧て他を言ふといふ句があつた。今度支那を旅行して、此言葉の意味が大分分つた。汽車で初對面の支那人は、初めの中は遠慮して話をしないが、一日位一緒に居ると段々話をする。話が出來ないから、鉛筆と手帳で筆談をする、さうすると中々面白い筆談が出來る。相手が新聞記者とか政治家であると、其人々と關係の無い問題の時には、中々正直に雄辯に筆談する。が、何か自分に直接關係の有る問題を聞かれると答へない。顧て他を言ふ。何遍聞いても他の事を云ふ。

現に私が長江沿岸を旅行して居たとき、或省の督軍に匹敵する青年政治家と對談した。吾輩は貴國に於て最も大切なる問題の一は裁兵問題である。明の太宗の南京城建築の事等を引いて、貴國に於て裁兵問題を斷行するには、何か具體的の方法が必要であらうと話した所が、通譯が付て居たが、其政治家は少しも答へないで、私の問と關係の無いことを逆に問ふて來る。同じやうなことを何遍も問ふて來る。戰後の獨逸の狀態は如何などと問ふて來て、遂に此重大なる問題に對する意見を聞取ることが出來なかつたのを遺憾とするが、支那人は辭令に巧みで、人をそらさない。が、同時に自分に直接影響ある問題になると、口を閉ぢて容易に話さない。願て他を言ふことは、依然として支那の民族性となつて居るやうに思はれる。

一八　日支親善の根本義

將來の日支關係はどうなるか。要するに共存共榮主義で進むより外ない。今日迄日本人の多數は、支那の爲に犠牲も拂つたが、同時に實際問題になると、自ら利するだけで、支那側に餘り利益を與へない。彼を利し、吾を利するといふやうな方法で行つた場合は少い、例へば合辨事業をやつても、實際、日本人ばかり利益を取つて、支那には餘り利益を與へないといふやうな實例は少くない。かゝる事では日支親善の實は擧らない。

日支親善の第一義は、支那は日本を理解し、日本は支那を理解することである。支那は何といつても大國である。第一革命以後、内亂相踵いで起り、國庫は殆ど空乏とならんとして居るが、新文化勃興の氣運が著しいから、現代支那の文化と人情風俗を研究することが必要である。從來日本人の支那研究は、或は軍事上の目的、或は貿易上の目的、或は政治上の目的で研究したのだから、支那の政治、外交、軍事或は產物等に關する日本人の研究は、可なり精密なるものがあつて、信用するものがある、然るに支那民族の國民性、或は風俗習慣の觀察等の如きは、或少數の場合を除いては、餘り顧られなかつた。然るに歐米人の方は、言語の不便があり、文字の難解があるに拘らず、兎に角彼等は或程度迄の努力を捧げ、忍耐と勤勉の結果として支那の文化或は風俗習慣を或程度迄研究した。是は大に尊敬すべきである。一體政治、外交、軍事、或は產業の如きは一時的現象で、其興亡隆衰はあてにならない。然るに支那の國民性、風俗習慣、文化その物は、永久的のものであるから、政治も外交も、教育も宗教もこの共通の源泉から湧いて來るものと考へるのが至當である。仍て日本の支那研究者も、單に目前の利益を得んが爲めの研究にあらずして、古代より今日に至る迄、綿

々として盡きざる所の支那文化を、有ゆる方面より見て、現代支那を理解すると共に、將來の支那の發展を創造するだけの準備をしなければならぬ。要するに古い漢學者がやつた古典的研究に加ふるに新しい科學的研究を以てすべきである。

次は支那人をして日本を理解せしむることに努めねばならぬ。日本に留學生が支那から大分派遣されたが、其留學生は速成を貴んだものであるから、勢ひ粗製濫造の嫌ひがある。袁世凱が曾て日本派遣の留學生を拔擢したのは、かういふ理由ださうである。例へば袁世凱が政治の體面を整へる爲に、或る法令を發布したい。其準備を各國の留學生上がりの官吏に命ずるとする。獨逸から歸つて來た者は、獨逸の法律書を出して之を飜譯するに十日位かゝる。佛蘭西から歸つた者も、英吉利から歸つた者も、飜譯だけに數日を要する。然るに日本の留學生は、日本の法規大全を出して、その間の假名を除いて、ひつくり返して漢文に直せば、求められたる新法令が出來る。そこで一夜漬で作つて、翌日持つて行つて、袁世凱に見せるから、袁世凱は日本の留學生は、實に重寶だと云つて感服したさうだ。さういふことが日本の留學生が勢力を得るに至つた所の原因だといふことである。これは袁世凱の時代に天津にゐた長友某君の親察談である。

そこで多數の留學生の中には、單に免狀を貰つて、資格を取らうといふ考で來た人がある。かゝる人は唯だ法律を學び、政治を學び、經濟を學び、數學を學び、物理を學ぶといつたやうな譯で、それ以外の事を研究する餘裕のない人々であつた。日本の歷史を研究し、地理を研究し、國民性を研究する餘裕はない。況んや文學藝術の如きは研究する必要もない、興味がない。故に日本の良い所を學ばずして、下宿屋、電車、汽車等の中で、直ぐ見えるやうな、日本の醜惡なる方面を觀察して歸るから、日本の文化を尊敬する氣にならぬ譯である。それで日本に來る留學生の中で、日本の文化を研究する篤志者は割合に少い。かゝる篤志者は、或は日本に來ないで、支那に居る學者の中に多いかも知れぬ。さういふ人々に便利を與ふる爲に、北京大學、南京大學等、主なる國立大學に、英語や、佛語、獨語にて書かれたる日本研究の材料、或は日本の書籍を寄附したならば、それによりて、日本を研究する精神を起すやうになるかも知れない。是は餘り金も要らない、又日支親善の押賣でもない。彼より進んで行ふ日本文化の研究心の發露である。

日支親善の爲には矢張交換教授の例を開いたら宜いと思ふ。支那の少壯學者を呼んで日本の大學で講義して貰ひ、日本からも少壯學者が行つて、支那の大學なり、高等師範學堂、基督教

主義の學校で講演することである。

支那で講演するには、日本語の良い通譯を見出すことが出來る所もあるが、出來ぬ場合もある。何となれば支那の學府に於ける日本語の勢力が著しく凋落したからである。之に反して英語で講演すれば、英語を通譯し得る支那の少壯學者は到る所にある。故に支那に行つて巡回講演をする時に、英語の即席演說位出來る人であつて欲しい。私は南京、漢口、武昌、北京、濟南等に於ては英語演說をやつて、支那の少壯學者が之を支那語に譯すか、或は宣教師が之を支那語に通譯した所も二三あつた。濟南の齊魯大學及奉天の文華學堂に於ては校長の英國人が支那語に堪能な人々で、私の英語を支那語に飜譯した。それで支那語演說の出來る人であれば理想的であるが、それが出來なければ日本語を通譯する人のある所では日本語で話し、英語を通譯する人があれば英語演說をするといふ風にやれば宜いと思ふ。

多數の日本人は從來、日本の軍隊などの勢力のある所へ行つて、阿片だのモルヒネを密賣して利益を得た者がある。謂はゞ搾取主義で、不正な方法を以て利益を貪つたのであるから、尊敬さるべき理由はない。今少しく大樣になり、下らない利益を、支那の苦力或は乞食のやうな人間から捲上げることのないやうにあつて欲しい。それには日本の國民教育を改造する必要がある。

日清戰爭は日本の支那を恐るゝ餘り、支那に對する反感の宣傳が效き過ぎた。藥が效き過ぎた。それから支那人を非常に輕蔑するやうになつた。是が大なる誤である。吾々は支那の文化に興味を持つて、研究すると同時に、見識と威嚴を以て支那人に接しなければならぬ。そして彼等が能く努めれば賞を與へ、怠る時は制裁を加へるやうに、恩威併せ行ふ方法も宜からう。時かぬ種は生えぬのであるから、先づ資本を下して、眞に中華民國の文化の進步發達に力を盡すことに努力しなければならぬ。

次は教育の方面であるが、從來日本が支那に對する教育は二種に區別することが出來る、第一は支那政府から招聘せられたる日本人の教師の問題である。是は日露戰爭以後張之洞が盛に日本流の教育を奬勵した結果である。それで一時は數百人の日本人教師が支那各地の學校に歡迎せられた。が、今日はその勢力は殆んど皆無となつた。是は當時支那中央政府と地方政廳とに資金が缺乏したので、永く日本人教師を待遇することが出來なくなつたのである。若し我國の政府が一時立換金なり、寄附

位をして支那の各地に日本人教師を引き續き駐在し得たならば此の上もなかつたのであるが、其の事の出來なかつたのは甚だ遺憾である。

歐米人の宣教師は支那より何等の報酬を求めず、寧ろ費用を本國の傳道會社から齎し來つて、熱心に教育事業に從事して居るが、日本人教師は支那側から相當以上の報酬を受けてゐたのである。而も人格力量に至つては幾分か宣教師より劣つて居ると支那側より看破せられた人々もないと限らなかつた。それで支那の青年に感化を殘した者もあるが、何等の感化を殘さなかつた教育家の方が多いやうな噂さを耳にする。是は大に考慮せねばならぬ。

第二に、日本に於ける支那人教育はどうであつたかといふに、これは前述の如く餘り速成主義で、粗製濫造の弊があつた。南京に金陵大學といふ基督教主義の學府がある。日本總領事館の隣に聳ゆる堂々たる建物である。此學校の入學者は非常な秀才か金持でなければならぬといふやうな内規になつてゐるらしい。故に卒業して職業に困るやうな者はない。富豪の子弟は求職の必要なく、秀才ならば職業を容易に見つけるからである。學校を卒業しても職業を得ないといふことが、不平の種子になる。粗製濫造をすれば必ず職業に就きえさる者が生ずる。是が學校の地位と名譽を落すのであるから、斯る不賢明な遣方である。日本に於ても將來支那人を教育するならば、卒業後迄も、就職口を見出す方面の世話もしてやらなければならぬ。此の意味から、日本が支那に於て醫科大學と工科大學を開くことが最も大切なことであると思ふ。又東京や、大阪邊の會社や商店にて支那青年を採用する道を講ずるも面白い。

要するに日本は島國文化、支那は大陸文化であつて、島國と大陸とは根本的に、地理學上大なる相違があることを痛切に考へて貰ひたい。而して島國民根性を以て支那大陸を判斷せずに欲しい。支那側も亦日本を以前の如く東海の三島國なりと稱して輕蔑せず、日本が過去五六十年間の努力の結果今日あるを見るに至つた原因を能く研究して、さうして提携して進むべき方面に力を注いで貰ひたい。一體中華民國の成立は、日本及び歐米の留學生が感奮激勵した結果である。故に日本は中華民國成立には間接の刺激を與へて居る譯である。然るに今日の支那はもう立派な民國であつて、日本などよりも徹底したる政治の運用が出來るもので、もう日本より學ぶ所が無いと考へるやうになつた青年が少くない。此點は日本の思想家と教育家とは特別に注意を拂ふべき點である。

一九　小車の軋音を通して苦力の訴へ

支那を旅行して最も早く外客の目に着くものゝ一つは小車（しようしや）と稱する荷車である。それは日本の荷車の如きものゝ眞中に車が唯一輪あつて、挽くのではなく、押して行くのである。支那には廣い道路が少いから、田舍を旅するときは、二輪車では困難な場合もある。一輪車なら如何なる細道も通ることが出來る。詰り不完全なる道路に適應する爲に已むなく發達した事であらう。此車は、車輪の兩側に荷物を積むか、或は客を腰掛けさせる。荷物を積んで押して行くのは申す迄もないが、工場に通ふ女工などを兩側に三人づつ、六人位乘せて、押して行くのを見る。全く是は奇觀である。支那の苦力は中々力が强いので、汗を流しながらユツクリと根氣よく押して行く。是も支那人の民族性を現して居る。

道路といへば山東省濟南の南の方で見、又青島附近に於ても見たが、或川は全くのから川である。一滴の水も無い。偶々出水の場合には非常な勢を以て濁水が流れる。平生は全く水を見ることはない。かゝる所に、わざわざ空中に橋を架けて置くことはないから、川底に石を敷いて置く、二間幅位に、或は三十間、或は一町も二町も石を敷いて置く。それが空川橋だ。水が出れば勿論往來止になる。是も支那人が周圍の事情に適應するやうに工夫を凝らした譯である。

私は朝鮮の江原道を旅したとき、矢張同じやうな川を見た。かゝる川には、なぜ支那流の川底の石橋を造らないのかといふた所が、お役所でも多少氣が付いて、其計畫があるといふ答を聞いた。

滿洲では道路と川が一致してゐる所もある。即ち雨が降れば川となつて流れ、雨の降らないときは、一滴も水が無いから道路となる。雨が降れば往來止となる。かゝる次第であるから、道路の發達は頗る不完全である。故に此小車の必要も甚だ大なるものがあつて、殆ど私の旅行した範圍内に於て、小車を見ない所は無かつた。

此小車の製法に色々秘法がある。車の底が强き軋音を出すのが名人ださうである。故に小車はギイギイと軋音を出して道を進む。殊に濟南の小車は非常に癇高い軋音を出す。私は同府の停車場樓上のホテルに二泊したが、朝未明から幾百臺と續く小車の軋音が、恨が如く、泣くが如く、縷々綿々として盡きない。苦力の歎き、悲み、悶へが一輪車の軋音となつて、社會に向つて訴へつゝあるかの如く感じた。私は朝早くベツトの上に横はつて其音を聞き、窓を明けて其音を聞き、或は街上を人力

に乘つて斷廻つてゐるときに其音を聞いて、實に悲壯の感に堪へなかつた。又同情に堪へなかつた。恐らく支那に苦力の救濟主が現れて、彼等の生活問題を解決する迄は、永へに小車の軋音はやまぬであらう。

青島では獨逸政府が小車の軋音を禁じたので、音を出さずして進む小車が通つてゐる。かゝる點に於ても獨逸人の周到さ加減がわかるのである。

二〇　文字の邦、金看版の都會

いふ迄もなく、支那は書道の國である。昔から書を以て藝術とした。今日は昔のやうな有名なる書家は無いやうであるが、支那人は一般に書に對する趣味は非常なものである。一種の宗教的態度すらもある。字を書いた紙に對しては、尊敬の意が顯ふて居るので、字を書いた紙を拾集めて、燒捨てる爐の如きものが所々に在る。苟も字を書いた紙を忽せに取扱はない。路傍に捨てゝあつても、之を拾集めて燒捨てる。それで日本製の卷煙草は、吸口に字を書いてあつた爲に賣れなかつた。なぜなら、吸口を捨てるのが勿體ないからである。

それで西湖や泰山の如き形勝の地に行くと、到る所に種々なる石碑があつて、昔から名高い文人墨客の筆跡が刻んである。泰山のごときは全山に字が刻んであるといふも過言でない。朝鮮の金剛山も同様である。九龍淵には無數の刻字がある。されば是等の刻文の石刷の如き物も相應に賣れて居つて、馬鹿に安い。西湖畔の岳飛の墓の前の露店では一枚五錢で賣つてゐた。日本に持歸れば數十錢の値打のあることは云ふ迄もない。

支那の書には僞物が多い。畫にも僞物が多い。それは尤もである。四億の國民中名家の筆蹟を要求する者は從つて多數である。是等の人々に對して一々眞物を供給することは、數學的に不可能な事である。故に贋物の多くなるのは當然である。

支那の習慣として嫁入の時、持道具の中に大家の法帖を持つて行く。或は名畫家の畫帖に、一流學者や書家の跋や贊詞を付けた折本や卷物を持參するそうである。而して本物を得ることは殆ど不可能に近い事であるから、僞物が出て來る譯である。

それで支那の書畫の僞物は日本以上に發達して居る。現に北京城の文華殿、武英殿に於ける清皇室秘藏の書や繪畫の中には驚くべき傑作もあるやうであるが、中には役人がすり替へて、僞物を代りに置いたといはれる陳列品もあるとの事である。

上海では唐紙に石版刷にした大家の書を軸物にして賣つて居つた。例へば明治の初年日本に來つて、支那公使館の書記官を

勤めて一六や鳴鶴の師と仰がれたる揚之徵の如きもの丶眞物も支那に於ては得ることは甚だ困難らしい。其證據にはこの書家の半折一行物を石版刷の掛物にして賣つて居るのを見た。僞物を掛けて居るよりは宜いかも知れないが、何所となく氣品の足らざるを感じた。

六

吾々は子供の時に軍談本などを讀んで、金看板といふことを見たものであるが、支那に行つて初めて金看板の御本家を見たやうな感じをした。新嘉坡邊の支那人街へ行けば、看板は相當に立派なもので、堂々たるものである。香港の街に於ける看板は又中々なものであるが、上海に來つて更に驚いた。又漢口でも、武昌でも、到る所看板の仰山にして立派なのには目を丸くした。殊に驚いたのは湖南省の長沙であつた。長沙は古い街で道路は極めて狹いが、石を敷いて一寸趣きのある街で、四川省の成都と共に古き都市の中で特色ある者の一つと見做されて居る。此所の看板は更に大きいもので、中には五六尺幅、長さ二間半位の金看板を下げて居る店は幾つもある。金を塗つた中に漆で黒く大きな字を書いて居る。實に堂々たるものである。無論看板の字であるから、氣品とか、餘韻などはない。併し字の恰好は整ふて居る。是は推賞すべきことである。日本の看板屋にも相應に整ふた字を書く者があるが、支那の看板の字は相當な恰好をしたものである。餅屋の餅は違つたものだと感服した。

奉天の城内で、支那料理屋へ招かれた時に、其所の主人が多少書道の心得があるものと見えて、知合ひからでも頼まれたのであらうが、看板の文字を何十となく書いて居つたのを立見したが、大きな筆で以て、兎に角威勢よく書いてゐた。矢張恰好は相當に出來て居た。書道は何と云つても支那に敵はない。

但し日本の書道に於て支那人を驚かすに足るものがある。それは草書及假名である。支那人は楷書及行書は整ふて居る。殊に楷書に特色を發揮する。非常に丁寧に書く。日本人のやうな性急な者には、支那人のやうな丁寧な楷書を書くことは不可能である。支那の古本屋にゆくと本の端に丹念に綺麗に書名を判で押した様な揃つた字で書いてあるは一つの驚異である。私は廣東の大きな本屋の前に立つて好奇心を刺戟せられた。日本に於ける支那の留學生の答案なども頗る綺麗なものである。近頃は日本の學生の惡影響を蒙つて、可なり粗末な答案を書く者もあるが、大體一字一句苟もしない。洵に謹嚴鄭重を極めた字體である。然るに日本の書家の草書は兎に角特色がある　殊に假名書きに至つては相當に優美にして變化に富む趣きは、支

勢の書家も驚く所である。故に日本人が支那に行つて字を書くならば、假名書き若くは草書で以て書くべきで、楷書や行書を以てして、赤恥を晒してはならない。私は自ら書畫を書くことは出來ないが、多少の趣味を有して居る。殊に支那旅行の副産物として字の恰好に對する趣味は俄に高まつたやうに思ふ。

十一年前に半月あまり伊太利を旅して、英國に歸つたとき、自分の目の前にミケランゼロやラフアエルなどの名畫がチラ付いて、暫く忘れることができなかつた。テームス河の河畔を散歩したり、雲雀の囀る岡の上に立つて瞑目して考へるとき。どことなくラフアエルのマドンナの大き繪のやうなものがボンヤリ浮んだりした經驗があつたが、今度支那を旅行して、支那の都會の大きな金看板の肉付の好い、勢の好い、恰好の好い字が幾つとなく、頭の中に浮んで來て、東京の電車の窓から眺めて、恰好の悪い醜字の看板を見るとき、ヒヤヒヤすることども度々ある。

看板に就て想ひ起すことがある。上海の街を通つた時、「中西理髪舗」といふ床屋が幾つもある。「中西藥房」とか、「中西茶食」といふ看板も所々に見える。仍て私は（私のみではない、他の多くの日本人も同様であるが）中西といふ男が上海で發展したものだと氣が付いた。氣が付くのは當然である。然るに上海在住の日本の友人に聞けば、「なかにし」ではなくて、ツンシイと發音するので、中國と西洋のことで、日本で云へば和洋といふ所だ。餘程ハイカラな看板で、中國と西洋の折衷理髪店とか、折衷商會とかいふ意味であるから、一種の西洋崇拜の氣分が現れてゐる看板である。かゝる看板には金看板は殆ど無く、矢張ペンキ塗の看板が多い。古い店にはそんな看板はない。一時の出來心で店を開いた理髪店位が中西理髪舗といふやうな看板を掲げてゐるに過ぎない。私は最初此看板を見て、日貨排斥の盛な今日、中西といふ人がえらく發展したものだと思つて感服したが、後で興が醒めて自分ながら苦笑せざるを得なかつた。私などは偶然之を友人に質問したから分つたが、多數の日本の旅客は質問もせず、自分極めで、是は中西某氏の店だと思つて居る者も少くない。

二一　最も困難なる社會問題

支那の苦も困難、且複雜なる社會問題は苦力の問題であることは前に述べた。が、獨り苦力の問題のみでなく、乞食の問題もある。一體支那は日本の如く小さく纏つた國柄でなく、平原に何等の境もなく、所々に不自然なる都會を建てゝ、國を建てたのであるから、纏まりの付かない國柄である。隨て代々の支

那の政治家は下層階級に對する社會政策を疎かにした。其爲に支那に於ては最も困難なる社會問題として乞食の階級がある。

廣東で、或人が説明して、苦力と、人力車夫と、乞食と、托鉢僧と、兵士と、巡査と寺小屋式の小學校の教師と土匪とは悉く同じ階級に屬すると言つた。是は多少誇大の言であると思ふが、苦力と人力車夫の間に區別は無い。兵士も傭兵なるが故に苦力を傭つて來て、それに軍服を着せれば直ぐ兵隊になる。かくの如くして巡査も造ることが出來る。上海の巡査は劍を持たないで、鐵砲を持つてゐる。或人が冷笑して鐵砲は持つて居るが彈丸は持つて居ない、あれはおどしの鐵砲だといつて居つたが、私は無鐵砲よりは宜いだらうと答へた。

支那の兵隊で劍を持たない兵隊が多い。劍を與へれば其劍を持つて土匪に投ずる虞がある。又土匪に食はしむるに糧を以てせば、之を軍隊に招致することも出來る。托鉢僧の如きに至つては最も社會的に虐待されて居つて、人の二三人も集つてゐるやうな所を、傍を通るにはお辭儀でもしなければならぬ位である。寺小屋式の小學校の先生の社會的地位も甚だ低いさうである。隨て此數箇の階級の如く見えるものも、一階級に還元することが出來るといふのである。是は廣東のみでなく、支那の各地方に於て當嵌まることかも知れぬ

日本の平民は封建時代には大分苦んだ。殊に九州地方の平民は非常に苦んで居る、例へば鹿兒島の如きは、士族と平民の間には劃然たる社會的區別があつて、兩者間の結婚は殆ど出來ぬ位であつた。百姓は滿足な草履を穿くことを禁ぜられて、半分しかない草履を足の先に突掛けることを許されたに止まつたさうである。其他九州の各藩に於て、平民は大分壓迫された。隨て今日九州地方に於ては、社會的に現れて居る者は平民よりも士族が多い。無論日本全國を通じて、今日社會の上流に立つて居るものは士族が多いが、東北地方に於ては比較的寛大な態度を各藩が執りたる爲め、平民は九州地方よりも餘程樂な生活をしたと思はれる。要するに我國の封建時代の政治には缺點もあつたかも知れないが、又或程度迄專制政治、武斷政治が謳歌されたけれども、平民を親切に世話することは多少實現されて居つた。然るに支那は廣大無邊の國土を有して居つて、其間の纏まりが十分に付かない爲に、下層階級が具に辛酸を嘗めて居る。其結果として乞食の階級が到る所に存在して居る。支那の讀書人なる者、所謂智識階級に屬する所の人は、辭令に長け、禮儀に厚く、泰然自若として居る所洵に立派である。然るに下層階級はワイワイ騷ぎざわめいて居る。其狀は全く名狀すべからざるものである。例へば大きな停車場に降りると、殊に夜分

などは提灯を下げて宿引が、わめき騒いで客の取合ひをする有様は凄じい。日本の宿引も大分騒ぎ立てるが、支那の宿引に較べれば温和しい方である。殊に車夫の如きに至つては、競ふて客を取り、客の承知しないのに荷物を引攫ふて行くので、中々油斷は出來ない、かゝるざわめく連中には宣傳はきゝそうだ。一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふとか、風に靡くが如くとか、響の如く應ずるといふやうな形容詞の生じたのは怪むに足らない。

私が上海で乞食を見たのは、湖心亭といふて、東京なら淺草のやうな所があつた。それは繪に描けば随分綺麗に見える。寫眞などでは綺麗に見える所であるが、行つて見れば湖といふのは溝泥で、汚ない、臭氣を放つ所で、其處に乞食が澤山居る、老若男女の乞食が群をなして居る。一人に銅錢を遣れば他の乞食が雲霞の如く集つて來るから、容易に慈善を施すことは出來ないので、相濟まぬとは心に思ふものゝ、三十六計逃ぐるに如かずといふ策戰計畫を執るより外なかつた。

廣東で前に記した碁盤の目のやうな自動車の通る道路から横道に這入つて、狭い横町に住んで居る友人を訪ねたことがある。すると一人の少年乞食が金を呉れろといふから、知らぬ振りして行くと、パラパラツと二三間驅けて行つて、地面に手を付いてお辭儀をして、金を呉れと強請る。又知らぬ振りして二三間行くと、又それが前に出て來て同じことを繰返す。餘り煩いから十錢銀貨一枚遣つた所が、大喜びで近所の人々に銀貨を見せびらかして居た。

泰安府から泰山に登つて行くと、二間以上の幅の石段が、或は登り、或は降り、頂上迄數千段ある。其兩側に岩屋があつて其中に乞食が巣をくつて居て、參詣人や登山者に金を強請る。其數は男女老若數百で、麓から頂上に至る迄絶えない。泰山を降りて、泰安府の停車場で切符を買つて居る内に、十數人の乞食がやつて來る。中には子供を背負つて居る女乞食も居る。或は素裸の子供が二三人混つて居た。其中の二三人の者に銅錢を遣つた所が、忽ち十數人の乞食が寄つて來たから、匆々にしてプラツト・フオームに來て見ると、其裸の子供が二人程跟いて來て金を強請る。叱り付けるとプラツト・フオームを降りて行つて、貨車の下に隠れて居る。又出て來て強請る。私の傍に宣教師とでも見える老いたる西洋婦人も居たが、お構ひなしに素裸でプラツト・フオームを横行濶歩してゐた、其頃は夏の初めで、暖かであつたから宜いが、寒い時はどうして居るのだらう。彼等の顔の皮が鐵面皮となつて居るのみでなく、全身悉く鐵面皮となつて居るのかと想像される。實に氣の毒に思つた。一寧の

朝あれも人の子樽拾ひ」といふ句があるが、此裸の子供も誰かの子であると考へて、實に氣の毒に思つた。

濟南でヨボヨボした勞働者が小車を押して居る前に、十四五になる男の子が素裸で綱を付けて引張つて行くのを見て異樣に感じた。日本では雲助と雖も裸體で道中は出來ぬ。少くとも褌位はした。然るに濟南の街の眞中を、如何に子供なればとて、本當の裸一貫で道中して居て、それを巡警が咎めないとは、誠に、寛大なものだと考へた。

是も濟南に居る時のことだが、人力に乘つて居るとき、子供の乞食が踵いて來て、金を吳れといふ。同行の友人は一度遣ると癖になるから遣るなといふ、そこで遣りたいのは山々だが遣らずに居た。車は二丁も三丁も驅ける。其間子供が驅けて來る。餘り氣の毒だから、銅錢數枚を投じた所が、それを拾つて歸つて行つた。

此乞食の問題を如何にして解決することが出來るか。南北統一は或は之を實現するの時があるかも知れぬが、乞食の問題を解決するの時は容易に來ないかとも思はれる、極めて眞面目なる問題である。

二三　日本人の企てたる文化事業

一昨年直隷省、山東省、河南省に於て、大旱魃があつて、大仕掛の飢饉が行はれたことは、吾々の記憶に新たなる所である。其所謂飢民は南の方へ流れて漢口邊迄來た。漢口の場末の町を通ると飢民が群をなしてゐた。或は路傍に斃れて居る者もある。それを道行く人は少しも顧みない。なぜ顧みないかといへば、餘りに數が多くて手の付けやうがないといふ口實である。

漢口から京漢鐵道に依つて、北京に向ふ到る所の停車場のプラツト・フオームには飢民が群をなして居る。さうして彼等は漢口に向ふ汽車に乘込まう乘込まうとしてゐる。無論金は持たない。列車の昇降口に取付いて離れない。巡警が棒を持つて揮れば蜘蛛の子を散らすが如く逃げて行く。が、巡警が居なくなると又來て、縋付いて、打たれても叩かれても離れない。其內に汽車が發車して何人かの飢民は只乘して次の停車場に行く。そして次の機會を待つて居る。又飢民か勞働者か知らぬが貨車の屋根にも何十人となく乘つて居るのを見た。

一體プラツト・フオームの中に斯の如く自由に飢民が這入つて來るのはなぜかといへば、前述の如く、支那には完全な道路

が無い。彼等は鐵道の線路を傳はつて歩いて來る。歩いて來れば自然プラット・フォームに這入つて來る。這入つて來れば便利の所であるから、其所に群をなして或は寢たり、或は屈んだり、立つたりして汽車の來るのを待つて居る。無論只乘であるから數百人の者が一度には乘れないから、一汽車毎に十人位づゝ乘つて、銘々の番の來るのを待つて居るのであらう。

亞米利加の宣教師らしい人は、小錢を用意して居ると見えて飢民に對して銅錢を撒いた。或は自分で出かけて行つて銅錢を遣る。それで飢民は宣教師を神樣の如く有難く思ふかも知れない。漢口を立つ時にさういふ話をして與れる友人があつたらば、吾等も二圓や三圓は銅錢に換へて來て、遣ることが出來たが、四五十錢しか銅錢が無かつたので、一度撒いただけで、二度と撒けなかつた。

又田舍の小さな停車場で子供が物を賣りに來る。茹玉子三四個持つて賣つて居る。或は自家醸造の變な酒を急須のやうな物に入れて賣つて居る。僅かばかりのものである。それを買ふのは飢民にあらずして、三等のお客さんである。あんな僅かばかりの商賣をして、幾らも利はあるまいが、それでも賣れば幾らかになると見えて賣つて居るが、兎に角金融狀態が頗る貧弱なことがそれでも推し計られる。

濟南から南へ行つたとき、停車場で細い赤大根を五六本位づつ藁で束にしたものを賣つて居つた。何でも五六本一束一錢位で、お客さんは汽車で鹽も付けないで食べて居る。

飢民の救濟の爲には基督教青年會が中心となつて、大活動をして義捐金を募つて居た。上海の基督教青年會は竹の筒を造つて、それを持つて青年會員が路傍に立つて、その中に銅錢を入れて貰つた。それから色々飢民の狀態を書いて、之を唐紙に印刷した宣傳ビラを諸所に掲げた。漢口では義勇軍がカーキ色の服を着て、車や自動車で通る人から金を強請つて居つた。兎に角基督教青年會の主事などが非常に骨を折つて居る。殊に北京の基督教青年會の主事のエドワードといふ人が中心になつて、各國の聯合救濟會を開いて、物資を集めて之を汽車積にして、飢民救濟の旗を立てゝ、各地に送つて居るやうな有樣で、非常な努力をした。

我國の日華實業協會でも、此飢民救濟事業の爲には大分金も集めれば骨も折つた。が、天津で聞いた話であるが、日本で支那の飢民に與へるといふので、藍色の木綿の支那服の綿入れを造つて、貧民の間に配つた。所が、支那人はそれを感謝したかといへば、自分の身體に合はぬので、日本から着物の見本を貰つたと云つて居つたさうである。更も小袖といふこともある

が、寒い時に日本で造つて、天津に送つた時には暖かであつたので、綿入は要らなくなつたから、折角配つた物を皆な質に入れてしまつたさうである。是は支那の事情に通ぜぬ人が開に迂入つた仕事であるから、骨折損の草臥儲けといふことになつて居る。

然るに玆に毛色の變つた救濟事業をやつた日本人がある。それは清水安三君の事業である。同君は同志社の神學部の出身者であつて、支那傳道を目的として北京に滯在して居る。非常な支那贔負の人である。支那語も中々うまい。此人が日華實業協會から依賴を受けて、此救濟事業をやつた。先づ場所を得なければならぬといふので、支那の陸軍省へ行つて、城外に在る倉庫を借りた。是は段祺瑞が曾て造つた物だ。其倉庫を幾棟かと、數百坪の地面を借りて、其所で飢民の子供を數百名收容した。清水君は中々賢い人で、どうせ助けるなら怜悧さうな子供を選拔してやらうといふので、直隷省や、河南省邊の凶作地に行つて、子供を世話するから連れて來いといふと、地獄で佛にでも遭つたやうな譯で、母親が子供を澤山連れて來る。其中より身體の丈夫さうな、容貌も佳い、賢さうな者を選拔して、六百名ばかり收容した。それから同君夫婦で日本風呂を造つて、皆な裸にして石鹼をかけて洗つてやつた。數百名の兒童を一週間に一度だけは風呂に這入るやうにした。最初は嫌つたさうであるが、一度這入ると氣持が好いから、二度目からは喜んで這入つたとの事である。又汚ない着物を脫がせて、仕立下しの新しい着物を著せた。其著物の作り方も中々考へたもので、北京の貧民窟に行つて、女共に縫はせた。貧民窟の女は工賃を得る。又此方から誇ふれば幾らか安く仕立てることが出來るから一擧兩得だ。

それから旅順の醫學堂卒業の支那の醫者及助手數名を雇つて、粗末な病院のやうなものを拵へて、其所で藥を遣つたり、病兒を看護してやり、健康な子供には小學程度位の教育をする。而もそれは基督教主義で、讃美歌などを歌はせる。初め日華實業協會は基督教主義でやることには反對したが、清水君が基督教主義でやらなければ支那側が信用しない。又自分にも確信があるので、それでなければ厭やだといふので、遂に清水君の意見が貫徹した。

私は北京滯在中、或朝、清水君に案内されて其收容所を訪れて各室を見、教師などにも會ひ、最後に中庭で數百名の子供に話をした、是は支那のお醫者さんが通譯した。私は何を話して宜いか分らないので關羽の話をした。關羽の話なら支那の子供は大抵分らうと思つて、關羽樣も矢張皆さんのやうな子供であ

つた。段々偉くなつてあのやうになつた。それであるから若さんも清水先生其他の先生方の教へに從つて、身體を丈夫にして勉强すれば、遂に關羽樣のやうにもなれるといふ話をした所が、子供は手を叩いて居つた。分つたのか分らぬか知らぬが、清水君が骨を折つて集めて來ただけあつて、何れも怜悧さうな子供で、其選拔宜しきを得たことに少からず感服した。

此事業に對しては北京在住の日本の婦人團體も、非常に同情して折々訪ねて呉れるといふことである。是が支那に於ける日本人の試みた最初の社會事業である。今迄日本の僧侶は行つて居るが、日本人の葬式ばかり司つて居たので、日本人の間に折々法話會の如きを開いたかも知れないが、支那人の爲には何等の方法も講じなかつた。兎に角清水君は甚だ小規模であるが、思切つて支那人の間に傳道もした。慥かに是は將來實を結ぶことであらう。飢民救濟事業も一先づ終りを告げたから、此收容所は解散された。

其代り清水君は北京城外に於て數千坪の地面を買取つた。是は大阪の實業家高木貞衞氏が後押しをした。其他東京の男爵森村開作氏、神戸の田村新吉氏等の後援に依つて小學校を建て、其兒童が小學校を卒業する頃迄に中學校女學校を建て、次第に大學迄設立しやうと、非常なる熱心と抱負と理想を持つて清水君夫婦が努力して居ることは、大に意を強うする所で、吾々は日本人の支那人間に試みる最初の宗教的教育事業として、偏へに其成功を祈るものである。

二三　裁兵問題の複雜なる背景

支那の軍隊の制度は、其財政方面に於ては請負制度であるさうだ。例へば或省の税金の大部分を督軍が天引して、それを軍事費に充てる。督軍は之を軍團長に、軍團長は師團長にと次ぎ次ぎの請負制度で備ふから、結局兵士の貰ふ金は極めて少くなる。而も傭兵制度であるから、皆な妻子眷族を養ふ義務がある。大抵一人前兵士は五圓位にしか當らないさうであるから、幾ら物價の安い支那でもこれ丈の小額で一家族を支へることは出來ない。假に一日の生活が一人前六錢としても、五人の家族なら三十錢。食費だけで一月九圓要る。然るに給料は五圓しか渡らないといふことになれば、何のごえんでくへぬ兵隊となつたかと言はざるを得ない。

そこで兵士の生活問題が起る。兵士が度々掠奪をするのも亦已むを得ない。或は富豪を威嚇して金を捲上げやうとするのも已むを得ない。支那の汽車は廣軌鐵道であるから乘心地は可なり好いが、甚だ不愉快なのは兵士が跋扈することであつて、等

室などにも兵士が乘込んで來やうとする。食堂車の食卓丈兵士に占領せらるゝことがある。中には自分の細君なども引張込んで居る連中も稀にはある。之を車掌も巡警も如何ともすることが出來ない。なぜなら、不斷兵士を虐待して居るから、無錢で汽車に乘らうとするのを拒絶する譯に行かないらしい。最も評判の惡いのは武昌、長沙間の汽車である。此汽車はボロ汽車である。實際はもつと良い客車があるさうだが惜んで出さないのだといふことである。兵士のためにメチャ〳〵にきたなくされるを恐れてゐるらしい。此ボロ汽車でも相當の賃銀を取つて居るが、一等車でも夜中兵士が乘つて來て、中に這入込む、私は武昌を發つ時其事を聞いたので、同行の支那通の一友人がボーイと相談して、夜、寢る前に外から鍵をかけて貰つた。所が案の如く夜ふけてから兵士が二三人廊下を通る。やがてコトコトとノックして居つたが、吾々は知らぬ振りして寢て居つたから、吾々の室には這入込まなかつた。かゝる不躾な事をするので旅客は甚だ迷惑する。中には錠も下してない室に這入つて、お客の荷物を引攫つて行く兵士なども無いとは限らぬさうで、物騷千萬な話である。私は幸にして何等さういふ經驗を持たないことを喜びとする。

又京漢線、或は粤漢鐵道などの停車場には帶劍したる兵士が四五人づゝ立つて居る。甚だしきは帶劍の儘汽車中の旅客を改める。初め見た時は頗る物騷に思つたが、看慣れると平氣で、少しも恐いとは思はなかつた。

目下吳佩孚が裁兵問題に付て色々研究して居るやうであるが之を斷行することは容易な事ではあるまい。例へば督軍が北京に出發する時などは仰々しいものださうで、まるで日本で陛下を奉送するが如く、全軍隊が路傍に整列して之を送る。督軍が北京に入る時は、必ず一大隊位の兵士を連れて行く。恰かも戰國時代に、地方の大名が入洛する時に、各々手兵を提げて來たと同じ趣きがあるさうである。其兵力を擁するが故に督軍に力があるので、彼等より兵力を奪ふたならば、木から落ちた猿同樣となる。故に督軍は裁兵問題には反對である。さういふ實際問題が伴ふて居るから、之を斷行することは餘程むづかしい。若し吳佩孚にして此複雜なる問題を、快刀亂麻を斷つが如くに解決したならば、確に支那一流の政治家として尊敬を博することが出來る。

何故支那に戸籍が無いかといへば、要するに行屆いた政策が行はれなかつたことを、有力に語る證據である。戸籍が無いから

兵士の本籍は無論分らない。故に戰に出て戰死した兵士の遺族に對して、遺族扶助料の如きは無論下らない。何者が死んで、何者が傷いたかさへ分らない。赤十字のやうな組織も、不完全ながら行はれて居るさうだが、重傷の兵士は顧みない。迚も仕方がないから拋つて置く。淺い手負ひの者を助けるさうである。殊に揚子江沿岸の戰爭や、珠江附近で戰爭が行はれた時は、戰死者の骸は河の中に拋込まれて流れて行く。すると江上を往復する民船は、屍骸に寄付かれては厄介だから竿で押して、下流に浮んで行くやうにするさうである。故に兵士も眞劍に戰をする勇氣が無い。金の爲に戰をする。それで支那では金の多い方が大抵勝つ。なぜなら人間の力で爭ふよりも、金の力で爭ふ。例へば張動が復辟運動をやつて、北京を騷がしたとき、政府軍が勝つて、張動側の或部隊を押込めてしまつた所が、彼等も窮鼠却て猫を噛むの勇氣を出して、一つ暴れ出して北京城内で掠奪してやらうといふ計畫を立てたらしい。政府軍の軍師は之を察して、外國の或銀行から相當な金を借出して、さうして談判した。お前達に是だけの金を遣るから、兎に角逃げて吳れと頼んで、背後に一方の血路を開いて金の俵を積んだ所が、其晩に皆な退散してしまつたさうである。所謂戰はずして勝つの兵法を用ゐたものである。然るに馮玉祥や呉佩孚の部下は訓練厳重にして軍紀振興して、最も有力なる軍隊と見なされてゐる。張作霖が一度起つて忽ちに頓挫したのは舊式が新式のために敗れたのである。

支那の政府でも將軍でも、金が無いから、外國が一方の借款に應じたと聞けば、他の方は大騷ぎをする。例へば南北對峙して居るとき、北方に或國の政府が金を貸して、南方に貸さぬといふことになれば、北方はそれだけ有力になり、南方はそれだけ勢力が劣ることを諦るものである。貸すならば兩方に貸さなければならぬ。或は兩方に貸さないのも一の方法である。兎に角一方だけを助ける政策は宜しくない。又兩方助けることも甚だ以て誠意のない遣方である。寧ろ兩方を助けず、超然主義を執つて、成行に任せて、大勢の赴く所に依つて支那問題を解決せしむる方が宜くはないか。

二四　姓名改造の三條件

支那人の姓名は何れも多少の意味を有して居る。其名を聞けば何れも堂々たるものである、日本人若くは西洋人の姓名は、主として地名或は職業から來たものが多い。支那人の姓名にも地名や職業から來たものがあるかも知れないが、大部分は何等かの理想が現れ、何等かの聯想のある文字を用ひて居る。朝鮮人の

姓名は支那人程複雜でない。或は柳、或は崔、或は宗、或は閔と極つて居るが、支那人の姓名は頗る複雜である、そして多少の意味がある。又無くてもあるらしく聞える。殊に發音が西洋人にも分り易い。日本人の姓名は長くて、くどくて、何等の意味を持たないのが多い。餘りくだけた名である。餘り平民的である。發音の場合に於て、頗る西洋人に都合が惡い。殊に吾輩の姓の如きは「ウチガサキ」と五綴りより成つて居る。隨分長い。其上名も又五綴りである。卽ち十シラブルスで一個人の姓名を現すやうな譯であるから、是は歐米人にも頗る有難迷惑な名である。殊に支那人、朝鮮人から見ると、殆ど無意味な姓名である。何等の雅致もない、何等の含蓄もない姓名の如く思はれる。

姓名の如きは何でも構はぬやうなものであるが、將來姓名を付ける場合には、姓名判斷に依ることもないが、多少の考慮を要する。第一の條件としては餘り長くない名を付けること。次はローマ字に直して讀み宜い、間違へられないやうな名を付けること。其他支那人や朝鮮人に見せて多少の意味があり、理想があり、含蓄あるやうな文字を選ぶ。それで名には一字名が宜い。短かくて立派な、趣きある、意味のあるやうな一字名で、ローマ字に直して餘り長くない、むづかしくない。まぎらはしくないやうなのが宜い。此三つの條件に適ふ名が宜い。又選擧の場合などを考へて見れば、餘りむづかしい字を用ゆることは考物である。尤も選擧の方法に至つては、亞米利加流の選擧法なら、候補者の名を印刷してあるから、有權者はそれにしるしを付ける。故にむづかしい名でも宜いが、それには選擧法を改革しなければならぬ。

序に申せば「百家姓」といふ本には四百八の單姓と三十の複姓とが擧げてあるそうである。最も普通なのは王、張、李の三姓で、我が國の佐藤、高橋、齋藤、鈴木や、英國のスミス、ヂョンス、ロビンソン等に匹敵するものである。しかし支那人の個人的名稱は隨分と澤山ある。生れると幼名がつき、學校にゆくやうになると又名がつく、雅號のやうなものであらふ。結婚すると「字」がついて親類間に用ゐられ、又知人間に用ゐらるゝ「號」がつく。又文人墨客は幾多の「別號」を有する。外に役人となれば「官名」がつく。死後には又特別の名がつく。しかもいつれも工夫に工夫を重ねて、奇拔にして意味深長なるものをつける。この點に於て歐米人と日本人は名については甚た無頓着で、實用主義を專一として來た傾向がある。

二五　足の解放と自由

支那は共和國となり、政治上空前の大革命が行はれた。人心は一變した。青年學生は大なる幻を見るやうになつた。併し政治や法律の如き改革は斷行することが出來るが、風俗習慣の改善は言ふに易くして、行ふに甚だ難い。現に支那を旅行して、最も氣の毒に感ずる現象は依然として婦人の纏足が存することである。是も法律を以て禁じてある筈であるが、老婦人や中年婦人の纏足は今更之を如何とも爲し難しとするも、年若き婦人達の間に、今尚此惡習の存在することは現だ同情に堪へない。勿論纏足の風習は漸次廢れつゝあるので、遠からずして撲滅せらるゝことも困難であるまい。恰かも吾々が子供の時に、我國の結婚した婦人達が齒を黑く染めたと同じやうな習慣である。今日は殆ど齒を染めて居る人は無い。が、田舍に行くと折々かゝる人を見る。されば吾々は必ずしも支那婦人の纏足の習慣を笑ふことは出來ない。日本にも之と同じ樣な、或は生理的に、或は精神的に、時代遲れの思想や風俗習慣が澤山にある。併し兎に角纏足が今尚存在して居る、この最も奇異なる一習慣を、風俗として之を觀察することは差支あるまい。

纏足の起源は何であらうか。之れに就ても種々の説がある。之を政治的に考ふれば、清朝が漢人種に對して與へたる壓制の名殘であるとも考へられる。現に滿洲の婦人は纏足をしてゐない。身體が大きく、堂々たる風采をして居る。頭には種々ゴテゴテした裝飾を施すが、足は自由である。臺灣でも此風習があまりに行はれてゐないそうである。廣東の水上生活者間には殆んど稀だといふことである、しかし今より千年もしくは千五百年前に宮中の一美姫の小さい可愛い足が流行の源だといふ説もある。多分支那の婦人達の纏足は清朝以前から存在して居つた習慣であるらしい。兎に角足は研究に値ひする問題であらふ。或人は纏足をすれば足が小さくなる。隨つて歩行の際は、たをたをと、なよなよとして男に手を引かれるとか、凭掛かるとかせざるを得ない。而してお尻の振方に一種の趣きを添へるといふ性的官能の方面に甚く觀察もある。是は果して事實なりや否や、吾々の目から見れば、纏足婦人の歩み振りは餘り快感を與へるものでない。又一説には昔から支那には强盗が多かつた。時としては女子と財産とを併せて奪はれることがある。かゝる場合に若し婦人が普通の健脚を有して居れば、强盗に連れられて、遠く逃げ延びるべく强請せられるかも知れない、然るに足が小さければ强盗と共に急いで歩くことは出來ない。即ち追手がそれに及ぶことが出來る、故に纏足の習慣をやめないで今日に至つたのだといふ。是等の見方の何れが正しいかは兎に角、支那が纏足といふ不思議な習慣を、今尚ほ存して居ること

は洵に不思議である。流行の心理といふものは專制的勢力を振ふものらしい。善いとか惡いとかいふことを超越して、流行だからやる、他人がするから、さうしなければ都合が惡いといつたやうな心理狀態より、かゝる不自然なる習慣が今日迄存在して居ると思ふ。私は纏足の習慣が一日も早く消滅せんことを心から希望する。

私は支那婦人の纏足について述べたが、同時に一部の非常な進歩的傾向を認めてゐる。私は長沙の教育會で演說した時、三百人餘の聽衆の中に二十名前後の女學生がゐたが、其中五六名は切髮にしてゐたことに氣がついた。これは米國邊の新流行である。日本でも近頃之をやる婦人が出て來たやうだ。停車場の步廊などでは西洋人夫婦のやうに腕を組みあはせてあるく若夫婦を見ることは稀ではない。

歐米の婦人は支那婦人の纏足を笑ふが、又同情を寄せて居る。が、歐米の一部の婦人の靴は極めて細く小さく、爪先で步くやうなものである。彼等は大きな足を小さく見せる爲に、踵で步ます、爪先でのみ步むやうな靴を穿いてゐる。是亦一種の歐米流の纏足ではないか。故に歐米人は支那人のみを笑ふことは出來ない。

足に就て最も自由な見解を有するは日本人である。支那では婦人は勿論、苦力に至る迄足を現はさない。必ず靴下を穿き、其上に靴を穿いてゐる。然るに日本婦人は夏は內地に於て素足で步いてゐるのみでなく、布哇でも、上海でも、或は濟南でも、或は滿洲、朝鮮でも足を出して居る。是は少くとも西洋人及支那人には非常に不愉快なる印象を與へるらしい。此爲に日本の婦人方がどれだけ侮蔑の念を惹起さしめて居るか知れない。併し香港上海邊の婦人は餘程注意して居る。が、私は山東鐵道沿道に於て日本の婦人達が素足で雪駄を穿いて、或停車場より騰揚に汽車に乘つて、支那人の群に這入つたのを見て、甚だ不注意なことであると思つた。鄕に入つては鄕に從ふべしで、素足を支那人が嫌ふなら、わざわざ素足で步くことはない。矢張足袋を穿けば宜いではないか。

序でに日本婦人の服裝に就て述べて置から。上海邊では普通の和服を着て居る日本婦人を支那人は尊敬しない。否、尊敬しないのではない、幾分尊敬の度が薄くなる。其譯は、奥さんと藝者の區別が付かぬ。上海でも其他の日本人の集る所には日本の藝者が居る。其藝者の仕度と奥さん達の服裝の區別が付かぬ。それで和服を着た奥さんを見れば、日本の藝者や娼妓ではある

まいかといふ氣分と聯想とを惹起すらしい。洋裝の日本婦人を見れば、是は相當な金持か役人か實業家の奧さんであると思つて、多少の敬意を表するさうである。

滿洲の長春邊は冬は非常に寒い。日本婦人は冬の間炬燵にでももぐり込んで殆ど外出しない。空氣の流通の良くない日本室内で、外氣に觸れないから血色は大分惡くなる。然るに露西亞婦人の如きは、折々橇にでも乘つて運動する。日本婦人の引込み勝は全く冬期の運動に適せない服裝に原因する。北滿の寒氣酷烈なる所に於ても、日本婦人が溫帶に於て發達せる服裝を捨て兼ねることは、日本民族の發展といふ見地より見て、甚だ心細い事である。服裝の改革は大切な問題であるが、少くとも海外に於ける日本婦人は、洋裝若くは和洋折衷服位の新案を考出して着用すべきである。今年は殊に目立つて小學の女生徒、高等女學校程度の若き女達の間に洋風の夏服がはやり出したことは、大に結構である。支那の婦人の服はズボンと上着と分れて居るから、洋服に近いが、今は中々ハイカラな、見て氣持の快い、西洋服と支那服との折衷服が着用されて居るので、支那の女學生などの態度は、頗る輕快に氣持快く見らるゝ。朝鮮の婦人も上着と袴と二つに分れて居るので、是も洋服に近い一種の折衷服のやうな、ハイカラなものが着用されて居る。是も大變快い感じを與へる。日本の着物は家に居つてゴロゴロしてでも居るか、書齋で勉强でもするとき、或は湯上り等の時に大變都合が好いので、今日は東洋通ひの船にはドレッシング・ガウンの代りに、日本流の單物を用ゐて居る西洋の男子も女子も多いので、是は慥かに宜い。併し此樂な着流しの風を屋外に持出したり、汽車、電車の中に持出さなければならぬ理由はない。日本風の衣服の特色も生命もあると共に、自由自在に活動しなければならぬやうな時、或は街を通る時、或は汽車電車に乘る時に迄之を着用しなければならぬ筈はないから、徐々に日本服の改良を企つるやうに吾々は注意しなければならぬ。

二六　勸善懲惡の法律

支那の或刑罰方法は昔風の儘、今尚殘つて居ることを聞いたが、北京滯在中偶然に其一二を觀察するを得た。昨年五月上旬の朝早く北京の或大通を歩いて居ると、一隊の兵士に守られて荷馬車で運ばれて來る者がある。同行の友人に聞けば、是は總て城門外に引出されて、公衆の目前で銃殺に處せられんとする重罪人であるといふことだ。で、私も特別な注意を以て此不幸なる人を觀た。年は五十歳前後の髯むしやの男で、見るからに獰猛な容貌をして居た。多分强盜殺人でも行つた人間であらう

と思つた。此男は案外泰然たる樣子で、路傍に山なして集つて居る人々に目送せられつゝ城門外に引かれて行つた。もう一時間も經てば或廣場で幾百人、幾千人といふ見物のたゞ中に於て銃殺せられることゝ思つた。死刑に處せらるゝ罪人をかくの如く見せびらかすとは、餘りに古い方法であるが、支那の刑法は之を一種の勸善懲惡の方法と考へて居るかも知れない。其ことあつて一兩日後、吾々が八達嶺に赴いて、萬里の長城を見んとて停車場に馳付く途中、五六人の罪人が數名の巡査に護衛せられて、或町を歩いて居るのに逢つた。其罪人は帽子も被らず、大きな紙の札を首から胸に下げてゐた。其札には澤山字が書いてあつたやうだ、是も同行の友人に聞けば、彼等は女を誘拐した罪人で、あの札には此者はいつ何所其所に於て女を誘拐したものであるから、此男の顏を見知つて置いて、以後注意せよと書いてあるのなそうな。かくして是等氣の毒な罪人達は、朝から晩迄北京の町々を歩ゆまされて居るらしい。其證據には吾々がその日の夕方北京に歸り着いて、吾々の宿に行く途中、朝とは異つた町を、矢張同じ罪人達が歩いて居るをみた。詰り彼等は早朝より夕方に至る迄北京の主なる町々を引廻されてゐたと考へられる。かくの如きことは甚だ野蠻な方法かも知れぬが、支那の法律では實際的効果があると思はれてゐるのであらふ。兎に角是は面白き刑罰の方法である。此刑罰が果して理想的なりや否やに就ては、自ら意見が岐れるであらうが、かゝる方法が百事更新の中華民國に殘存して居ることは、一寸面白い事である。清朝の末に假刑法三百條が發布せられ、袁世凱が新法典を以て之に代へんとして成らず、今日の民國は依然として舊法を使用してゐるらしい。

二七　娘々廟の社會的位置

私は上海で三四回結婚式の行列を見た。或時は幸ひ結婚披露の宴が、恰度私が招かれて居た料理屋に開かれたのをも見た。是などは餘程文明流の遣方で、花嫁花婿、列席者一同自動車に乘つて、樂隊を先に立てゝ行列して行つた。餘程進歩した結婚式である。其他私の見たものは旗を立てるやら、鳴物入の仰山な行列であつたが、花嫁は駕籠に入れられて而、も其駕籠には窓も無い、全く籠の鳥のやうなもので、隨分窮屈さをしのばせた。北京で見た行列の花嫁の美しい駕籠は、是は全く息の吐く所もなさそうに密閉されたもので、體の弱い女は駕籠の中で、氣が遠くなるといふ話も聞いた。

知識階級の間には文化的結婚式なるものが行はれて居る。婚姻式に友人や親戚を招いて御馳走し、一同寫眞を撮るといふや

うなのが文化的結婚式らしい。基督教會で結婚式を行はざる外國留學生、或はハイカラな役人や知識階級の人々が行ふ結婚式らしい。併し文化的結婚をやつた夫婦でも、家に客をしても細君は顏を出さない。結婚式は文化的であるが、結婚後は依然として昔風の生活をして居る人も少くないやうだ。何れにしても思想上新舊思想の混沌たる支那に於ては、結婚に關する制度も餘程混沌たるものである。或程度迄は日本に於ても同樣である。

滿洲を旅したとき、五月末であつたか、何でも大石橋近くであつたと思ふが、汽車から西南方の高い丘の上に、一面に露店のやうなものがあつて、何萬といふ人が集つて居るやうである。其時滿鐵の上田恭輔氏が偶然同車されて居つた。同君は非常に博學な人で、百科全書的の知識を有する人である。それで私は其說明を氏に求めた所が、同氏は次の如く說明された。

あれは滿洲で名高い娘々廟(ニャンニャンミャー)といふお祭りで、一年に一回男女が相集まる祭日である。平生は男が集つて居る所に女は顏を出さないが、此祭りの時だけは男女が一緒になる。それで嫁を探したい者、或は嫁を貰ひたい者、或は娘を賣りたい者とか、嫁に遣りたい者などが知らず識らず集まるから、かくの如くに大繁昌をして居る。彼處に集まる娘達の中で、最も容貌の佳い者は三四日湯水を飲まないで居て、頂上に柱を立てゝ、其柱に大切な娘を縛り付けて廣告をする。此娘は何百兩とか何千兩で賣るとかいふ廣告をする。すると何萬といふ群衆は其柱の傍へ行つて、其娘を見て、或は品定めをする。結局買手が付けば其娘は買取られる譯になる。そこで私は娘に取つては隨分苦しいことではありませぬかと云つた所が、上田氏はニコリと笑つてイヤ苦しいどころではない、苟も滿洲に生れた女として娘々(ニャンニャン)廟(ミャー)のお祭りに引出されて、柱に縛られる位の名譽はないので、皆な競ふて其柱に縛られることを甘んずるのだと申された。

果して其の日も娘々廟(ニャンニャンミャー)の頂きに於て妙齡の婦人が柱に縛られて居つたかどうか、汽車からの遠見では無論知るに由かない。或は最近はさう云ふ風習は無くなつて居るかも知れないが兎に角近頃迄滿洲には斯う云ふ風習が行はれて居たことは面白い。

其夜私は鞍山製鐵所からほど遠からぬ湯崗子溫泉に宿つた。翌朝は其附近の娘々廟(ニャンニャンミャー)の祭禮で、朝から大變な人出であつた。吾々も見物ながら小高い社へ行つた所が、數千人の老若男女が出掛けて居つて、色々の露店があつて、中には變な臭ひのする乾肴を賣るものもあれば、玩具を賣るものもあれば、獅のやう

な物を賣るもある。所が奇態なことには其頃になると、大一人居なくなつてしまつた。是は其土地の習慣として午前だけ祭りをやつたらしい。其所には柱に縛られて居る娘さんなどは無かつた。

この祭禮日には汽車に乘つて來る者もあるが、廣い平野を馬に乘つて來たり、歩いて來る者が多いので、何里と續く大平原の中を小さい人が黒く見えて居るのは、一寸面白い觀物であつた。夏になれば高粱が成長するから、人影を見ることが出來ないであらうが、まだ晩春の頃であつたから、黄土の大平原に黒色の服を着た支那の男女が黒く浮び出づる。餘程遠くに行つても小さく見えるので、是は汽車から眺めても、少し小高い所から眺めても興味ある事である。

滿洲の娘々(ニヤンニヤン)廟(ミヤー)の祭禮の時に氣の付いたことであるが、農夫の婦人達の服裝が極めて質素なることである。太糸の藍縞織の無地の着物で、何の裝飾も無い。唯だ頭髮に種々な赤い簪のやうな物を差して居るだけで、其質素なことは、日本の田舍の娘さんのお祭り裝束には較ぶべくもない。唯だ體格の堂々たる所は、確に滿洲婦人の一特色であつて、日本婦人の遠く及ぶ所でない。

娘々とは堯の娘にして舜の妻であつた娥皇女英二人をいふのである。頗る傳奇的材料に富むである。さて、なぜ滿洲に娘々(ニヤンニヤン)廟(ミヤー)が發達したかといへば、日本で謂ふ緣結びの神樣である。男女の間に殆ど交際のない舊支那に於ては、男女相擇する機會は甚だ乏しい。殊に土地に比して人口の極めて稀薄なる滿洲に於ては、隣近所に相當な配偶者を見出すことは甚だ困難な場合も少くあるまい。故にかゝる人々に取つては一年に一度娘々(ニヤンニヤン)廟(ミヤー)に參詣した序でを以て見合ひをするとか、自分の好きな人を見定めることも、餘程大切な事件に相違ない。滿洲に於ける婦人の社會的位置を研究する爲には、娘々(ニヤンニヤン)廟(ミヤー)成立の歷史及その社會的位置を研究することは大切な事と思ふ。

二八　上流及下流社會の購買力

支那の社會は非常に富める者と非常に貧しい者との兩階級が多く所謂中產階級なるものは極めて少い。然るに日本は、中產階級は次第に衰へつゝあるかの如く見えるが、今尙ほ有力なる社會的要素としての勢力を失はない。支那は前述の如く大國なるが故に下層階級に對する中央政府や地方廳の監督制度が行屆かざる爲め、流民細民が殖えに殖え、苦力といふ大なる階級を生ずるやうになつた。が、一方富豪階級を見れば、彼等は日本に於て殆ど想像し得ないやうな廣い土地と財產とを所有して、日

本の大名以上の生活をして居る者が少くない。隨て物貨に對する要求も日本人の考へて居ること丶大分違ふらしい。例へば日本には一袋十錢の賣藥がある、或は一袋五錢の齒磨がある。支那は貧乏な國であるから高いものは賣れない。で、一袋十錢の賣藥とか、一袋五錢の齒磨が賣れるであらうと考へるのは無理もない。然るに是等の品物の賣行は如何であるかといへば、どうも旨く行かない。なぜなら一袋十錢の賣藥は苦力に取つては高過ぎる。せめて一袋五錢位でなければ買ふことが出來ない。又富豪から見れば一袋十錢とか二十錢とかいふのは餘り安過ぎる。彼等は中々贅澤で、歐米より高價な贅澤品を買ふだけの資力を有して居るので、日本製品の一袋十錢や二十錢の物は買ふ氣にならぬ。其結果はどうであるかといへば、生産者と、販賣人とが豫期した程賣行がないことになる。然らばどうしたら宜いかといへば、安い物は一袋五錢位にし、高い物は五十錢でも一圓でも宜い。兎に角十錢といふのは宜くないらしい。一袋五錢位の物であれば、苦力が買ふかも知れない。苦力及下層階級が買ふやうになれば賣行が非常に宜いに違ひない。又五十錢一圓の物は富豪階級が買ふから、是亦相當なる販路を見付けることが出來る。かゝることは餘程支那の事情に通じた人でなければ氣の付かないことで、通り一遍の私が氣が付く筈はないが、上海に於て、私を案内して吳れた一友人が說明して吳れたことを思出したので、此所に記して置く。

二九　自動車の我儘氣儘

私は長く東京に生活して居る。東京は實に住み好い所である。贅澤をすれば限りもないが、如何に質素な生活をしても、批評する人は無い。どんな乘物を用ゐても驚く人もない。テクシーでも怪しむ人がない。然るに支那は今尙階級思想が深き所を有して居るから、步く人と、駕籠に乘る人と、人力で走る人と馬車で走る人と、自動車に乘る人との間に、傍から見れば幾分相違があるやうに思はれる。故に外出するにも、人を訪問するにも、乘物を擇ぶには多少の注意を要する。步く者より人力に乘る者の方が威張り、人力より馬車で行く方が威張つて居る。馬車は中央を驅けるが、自動車は一層我儘で、專制的である。自動車で乘廻して行けば、どんな所でも大抵通り抜けることが出來る。殊に役所に行くに、馬車か自動車かで行けば門衛などの待遇も違つて來る。

日本の道路は惡いので、自動車は雨天の時は泥除けを付けて居る。然るに支那の自動車にはまだ泥除けがないから、自動車を飛ばして水溜りに這入れば、泥水がピシャツと跳ねる。若し

不幸にして其附近に人が居れば、必ず其人の着物を汚す。汚された者は汚され損となつて、汚した方の自動車の運轉手は氣の毒な顔もせず、申譯も、お詫びもせずに默つて走つて行く。私は或朝北京の郊外の學校に講演する約束で、一人の友人と共に自動車で赴いた。石を敷き詰めた道を走つて行くと、一つ二つ凹んで居る所があつた。前晩大雨が降つたので、水が溜つて居た。自動車が其所へ這入ると案の如く泥水が跳ねた。すると一間位離れた所に、相當な智識階級と思はるゝ若き夫婦の紳士淑女が居て、其人々の着物にかゝつた。私達は氣の毒に思つて、直ぐ帽子を脱つてお辭儀をしたが、運轉手は平氣なもので、止めよと云つても、車も止めずに飛ぶが如くに行つてしまつた。私は今でも吾々の乘つて居た自動車から迷惑を蒙つた、あの紳士淑女に對して相濟まないことをしたといふ考を懷いて居る。

滿洲でもまだ自動車に泥除けを付ける規則になつて居ないらしい。旅順の工科學堂で講演をして、停車場迄自動車で送られて來た時、道路は大抵宜かつたが、一つ泥水が溜つて居る所があつて、其所へ自動車の片輪が這入ると、矢張泥が跳ねて、而もそれが日本の一將校にかゝつた、吾々は直に帽子を脱つて申譯をしたが、日本人の運轉手でも平氣なもので、申譯もせず走つて行つた。で、今日の支那及滿洲に於ては自動車は一種の專制的君主であつて、之に乘つて居れば、どんな我儘でも出來るといつたやうな氣持を私に與へた。慥かに是は所謂淺薄な文明開化病が蔓つて居ることを語るものである。

三〇　保健と娯樂と社交のための競馬

上海、天津、北京、大連、奉天其他の都市に於て日本の實業家が大部發展して居るが、料理屋の發展は目立つて著しい。上海で最も成功したものは、日本料理屋であるといふ噂がある位である。天津でも、奉天でも、中々立派な日本旅館や料理屋があつて、それが相當に繁昌して可なりに成功して居る。是はかゝる所を根城として散財する日本人の御得意客が多いことを證明するものである。支那滿洲に居れば儲かることも多いが、其大部分が動もすると、此料理屋に吸收せられる傾向があるらしい。是は必ずしも日本人のみの缺點とは云へないので、植民地らしい所に於ては、何れの國の人も金遣ひが荒くなる。何となく淋しい。知識的或は精神的の刺戟が足りないので、勢ひ生活が放漫になり、惰弱となる傾向は免れ難い事である。それにしても海外に出て居る日本人が、其收入に比して娯樂費として使ふ金が割合に多う過ぎると思ふ。詰り宴會費が多う過ぎる。西洋人でも娯樂費を使はない譯ではないが、概して相當に使つて

居る。併し彼等は其大部分を體育費として用ゐて居る。例へば吉倫母には大きなテニス・コートやフット・ボール・グラウンドがあつて、盛に英國人は運動遊戯をやつて、生理的に惰弱になることを豫防して居る。香港でも、上海でも、漢口でも、大きな競馬場がある。殊に漢口の競馬場は東洋一の稱ある立派なものである。其競馬をする人々は專門家の騎士ではなく、皆な素人の騎士である。其爲には平生稽古しなければならぬ。又馬券を支那人に賣つて、其利益で以て競馬場の經費及修繕費に充てる。故に會費は比較的少くて間に合ふらしい。かくの如く、歐米人、殊に英米人は金を使ふにも健康を保全する目的を以て使ふ金高が割合に多い。それで彼等は比較的氣候、風土、食物の相違せる東洋に來つて健康を持續すると共に長命をする。隨て活動能率を發揮することが出來る。日本人側に於ても近頃は健康上より見ても、社交上より見ても、西洋人の競馬場に加盟する方が得と考へて、漸次之に參加する人々もあるが、其數は甚だ少い。

大戰中、英米獨佛人等が支那の主なる場所を引揚げた跡を、日本商人が買取つて、或は之を會社とし、或は住宅として中々羽振は好いが、果して此好景氣がいつ迄續くか、最早既に反動の時代が來て居るやうに見受ける。併し好景氣の時代に促されて一部青年實業家などが、社交上或は健康上西洋人と共に運動遊戯をすることの必要なるを考へ付いたことは結構である。然るに日本の婦人達は其方には餘り氣が付かないので、健康狀態も宜しくない。矢張男子が或程度迄運動して、健全なる娯樂を行ふ如く婦人達も亦同樣なる娯樂と運動を試むるやうに努めねばならぬ。

上海の英佛租界に於ては道路の片側に砂を深く埋めて、是が十町も續いて居る所がある。何の爲めかといへば、其所で騎乘を試みたいからである。普通のアスファルトや石で敷詰めた道路は馬蹄が痛むし、乘心地も快くない。そこでかう云ふ道路を造つて氣持快く馬に乘れるやうにした。併し或時を經過すれば其砂は固くなつて、土の如くになる。其時には安い賃銀を拂つて、苦力を傭ふて其砂を堀出させて、新しい砂を持つて來て之に代へる。隨分贅澤なことで、若し支那以外の國であるならば餘程の大富豪か貴族でなければ、かゝる暢氣な騎馬をやることは出來なからうが、幸にして勞働賃銀の極めて安い支那であるから、彼等も亦王侯貴人のやうな贅澤な騎馬をして居る。が、それにしても彼等は境遇が與ふる所の一切の機會と特權とを利用することに努めて、異郷に於ける滯在が極めて愉快であるやうに仕向けて居ることは學はなければならぬ點である。

三一　支那、朝鮮、日本、及び歐米の色彩觀

白人は東洋人を黃色人種、歐米人を白色人種と區別した。而して白色は優良人種獨特の色彩であるかの如く考へて來た。然るに支那に於ては、其標準が全く轉倒してゐる。支那で最も重んずるのは黃色である。即ち天子には黃帝があり、大江に黃河がある。清朝の國旗は黃色の中に龍を描いたものであつた。北京の紫禁城即ち皇城の瓦は黃色瑠璃燒である。南京の明の故宮若くは孝陵の瓦も矢張黃色である。是は五行說より來たといふことである。即ち靑は東を表し、白は西を表し、赤は南を表し黑は北を表し、其中央は黃である。故に天子は天下の中央に在つて、四海萬民を統治する意味から黃色を以て天子の色とした。

理窟を云へばかくの如きものであるが、實際支那を旅行して居れば、黃色に重きを置くことは當然のやうに考へられる。前にも述べたる如く支那には日本のやうな澄んだ美しい流はない。黃河も、楊子江も、漢江も、洞庭湖も、悉く皆な泥々たる濁水で、いづれも黃色を呈して居る。又支那の平原は黃色の泥土の沈澱したる黃土と稱するものより成る。又支那の氣候は日本の氣候と大同小異にして、寒帶にあらず熱帶にあらず、溫帶なるが故に、日光の影響が人間の皮膚の色にも影響して居る。白人は何故に其皮膚が比較的に白きかといへば、過去何萬年の間、彼等は冬の長い、夏の短い北歐地方に棲息したるが故に、夏の烈しい日の光に直射せられなかつたから、皮膚が熱けなかつたに過ぎない。印度或は中央阿弗利加或は南洋に住んだ人種は、赤道直下の最も強い日の光に幾萬年の間照されるが故に自ら日に燒けて皮膚の色が黑くなつた。然るに溫帶地方の人種は春夏秋冬の別があつて、夏は相當に暑いが、熱帶地方に較ぶれば餘程樂である。冬も多少の寒さを感ずるが、寒帶と違ひ、相當な日光に浴することが出來るので、程よく日に燒けて黃色となつたのである。故に溫帶地方に於ては黃色は有ゆる色彩の中心の色であると言ひ得る。適に支那は建國以來五千年も經過したる古き歷史を有するが故に、自ら此環境と氣候との結果、黃色を重んずるやうになつたのではあるまいか。

概して大陸人の色彩觀念は原色を重んじて、間色に對する趣味は甚だ乏しいやうである。例へば支那人の普通の着物は藍色である。殆ど千篇一律的に藍色である。然らざれば黑色である。今より十數年前、西伯利から露西亞を旅したことがあつたが、此地方でも色彩は主として原色が行はれて居たと記憶する。例へば婦人の着物に赤い色がある。或は冠ぶる風呂敷のやうな物

も赤い色に、一寸ばかり模樣の染めてある物が多うかつたと思ふ。鴨綠江を境として朝鮮へ這入ると、藍色の國より白色の國に移つたやうな感じは誰も懷く。朝鮮人の服裝の白色に就ては色々な說があつて、昔、或親孝行の國王があつて、一生涯喪に服されたるが爲に、一般人民も之に倣ふて、遂に白色の喪服を常用するやうになつた。是も一說であるが、他に解釋の方法もある。それは朝鮮の傳說に依ると、素色即ち白色は餘程古い起源を有するもので、開國の當時より行はれて來て居るやうにも思はれる。後人の捏造かどうか知れぬが素色は箕子之を制定したと云ふ。未だ十分に研究をしないから、輕々しく之を論斷することは遠慮するが、私の直覺的感想としては、白色は太陽崇拜の色だと言ひたい。

世界の諸民族は、歷史的發達の或時期に於て、必ず一度は太陽崇拜の時代があつた。是は有ゆる宗敎に今尚附隨して居るやうである。基督敎にも佛敎にも太陽崇拜の名殘が殘つて居る。日本の神道の如きは最も强き痕跡を有する。隨つて神主の服裝或は巫子の服裝には白色を用ゐて居るのは、之に關係があるのではあるまいか。朝鮮人も古い東洋民族にして、日本民族と同じく太陽崇拜を行つたもので、朝鮮といふ國號其ものが既に太陽を聯想せしむるやうに考へられる。日本といふことも其意味に於ては非常に接近して居るのではあるまいか。矢張太陽に關係ある國號ではないか。太陽崇拜が白色を重んじて、此宗敎的原因が種々なる歷史上の事件と錯綜して、今日のやうな白色が主なる朝鮮人の服裝の色となつたのではあるまいか。或は又朝鮮に於ては日本に於けるが如く藍の栽培を奬勵せず、又外國より染色を輸入することも奬勵しなかつたので、遂に白色といふ最も簡單なる、併し同時に最も衞生的なる色彩が勢力を得るやうになつたのかも知れない。

朝鮮の女の子供達は白い上着に黑い袴を穿いて居るのが多い。昨年の舊五月の節句に私は京城より仁川に往復したが、女の子供達が、赤い上着や、青い袴を穿いて盛に鞦韆をして戯れて居るのが汽車から能く見えた。(序でに言ふと、朝鮮の子供は鞦韆を非常に好む。太い繩で鞦韆を造つて、男女共に鞦韆の競爭するのが非常な樂しみであるさうだ。)それで朝鮮でも矢張原色を貴んで、間の色に對する發達はして居らないやうである。

私は朝鮮に於て四五の女子高等普通學校を參觀した。設備も中々能く出來て居る。又生徒も數多き朝鮮の若き婦人より撰拔された人々であるから、聰明さうな、綺麗な人達が多かつた。然るに大抵の學校の室内や廊下の壁は白く塗つてある。其中に殆ど白色盡しの女生徒が居る。壁も白いし着物も白いから、餘

り單調なやうに思ふて、私は校長に對して、此壁を白く塗らないで、何か間の色を用ゐて、知らず識らずの間に生徒に對して色彩の趣味を刺戟してはどうか。又廊下や教室の壁に、何か美しい繪畫か、生徒自身の製作したる大きな刺繡類などを掛けて美觀を添へるやうなことをしてはどうかと述べたことがある。

此點に於て日本人の色彩に對する趣味は、大陸に於けるそれと大に異なるものがある。日本は原色よりも寧ろ間色を尊重する。又間色のみではない。色々と模樣に數寄を凝して、粹なもの、或は澁いものを好む。是は日本國民の審美的性情と關係のある問題で、研究題目としては甚だ興味ある事項である。

日本の繪畫に於て線を重んずることは、空氣が透明で、殊に秋頃の空氣は非常に透明にして、山嶽の線などが餘程ハツキリ見えるから、それに依つて刺戟されたのかも知れない。又色彩に變化のあることも、日本の自然界の多種多樣なる色彩に依り刺戟されて居るのかも知れない。又島國なるが故に水蒸汽が多い。水蒸汽は或は霧となり、或は霞となる。此霧や霞を徹してものを望めば其所にボカシが生ずる。ボカシは即ち間の色である。かゝる自然風物の影響に依つて、日本人の色に對する趣味が漸く發達したのではないか。此意味に於て歐羅巴人は日本人よりも餘程遲れて居る。歐羅巴人は大陸に長く生活した爲めのみではない。英吉利人のやうな島國人でも長い間深い霧の間に埋もれて居るから、(其霧は日本に於けるやうな奥床しいものでなく、毒々しい程濃い、深いものであるから、日本のやうな詩的聯想を豐かにするやうな霧とは違ふ、即ち濃霧と稱すべきである)英吉利人の色彩は矢張原色、殊にキラキラしたものを好む。例へば英人の家具類の如きは皆な金色に塗られて居る。寢臺の棒の如きも金色に塗られて居る。大きなホテルの食堂の如きも餘程多量の金色を含んで居る。かゝるケバケバした色でなければ冬の間引立たない。陰氣な、憂欝な、沈んだ冬の色に負けてしまふ。で、勢ひケバケバした色に執着するやうになつて來たのではあるまいか。日本國民の世界文化に貢獻する方面は多々あるに違ひない。其一は慥に色彩に對する日本民族の訓練を世界的に普及せしむる事である。此意味に於て日本の美術は多くのことを歐米人に敎へたのである。ニュー・ヨークのアドラン博士の倫理會堂の内部は殆んど兩部白木造りであつて、非常によく落ちついた氣分を出してゐた。日本建築と色彩の影響があるのであらふ。今後は支那朝鮮に對しても此普及を圖るべきであるが、支那及朝鮮側の人々も、或は政治上外交上其他の理由に基いて、排日的感情は容易に去らないかも知れぬが、日本文化の此長所を學ぶことに依つて、支那の文化、朝鮮の文化

の内容が、幾分か其深さと清さとを添へるので或る程度迄之を學ぶに何等の遠慮もなからう。

三二　漢詩の誇張と實際

私は前の項目に於て、支那は文字の國であるといふて、支那人の字の上手なことを推稱したのであるが、啻に恰好が旨いのみでない。字の組立及文章其ものが頗る巧妙であつて、支那は寧ろ文章の國、詩歌の國であるといふて差支ない、其形容の巧妙なることは迚も日本の文人墨客の及ぶ所でない。また日本の文人墨客にして形容の巧みな人は、支那文學の感化を受けた人々である。

長沙から汽船に乘つて漢口に歸る時、洞庭湖を横つて岳陽樓なるものを仰ぎ見た。此有名なる樓は洞庭湖口の岳州に在る、岳州は長江と湖岸の灣口を扼して居る要害の地である。岳陽樓は此湖岸に添うて岳州城の西門の上に高く聳えて居る。此樓は唐の時代に建造せられたが、其後度々改築せられて、現在に存するものは、清朝の乾隆帝第五年に造られたものである。此樓に登つて洞庭湖を望む景色は絶景であると稱せられて居る。古來人が「岳陽樓下水漫漫。獨上危樓凭曲欄」と歌つたのは此所である。杜甫が「乾坤日夜浮」と詠じたのは此大觀を詠つたものであらう。而して岳陽樓に關する文の中で、最も有名なのは、范仲淹の名文である。此名文は慥に洞庭湖の春夏秋冬の氣象萬千の風致を詠じ盡したものである。しかし「若し夫れ霪雨霏霏として、連月開けず、陰風怒號し、濁浪空を排し、日星曜を隱し、山岳形を潛む、商旅行かず、檣傾き檝摧け、薄暮冥冥として、虎嘯き猿啼く」といふ形容はあまりに誇大でないかと思はれる。洞庭湖は夏から秋にかけて漫漫たる大海の如くに水が增して、冬になると殆ど水が枯れて湖底を現すといふことである。水が漫漫と溢れて居る時に暴風雨が起れば、それは「陰風怒號し濁浪空を排」するかも知れない。又「日星曜を隱す」といふことも事實であらうが、「山岳形を潛む」といふのは稍ゝ形容に過ぎて居る。彼の岳陽樓に登つても、殆ど晴天の時でも山岳を望み見ることは出來まい。尤も岳州の後の方に小高い丘があるから、それを山岳といへば云へるかも知れない。又「薄暮冥冥として虎嘯き猿啼く」といふ句があるが、岳州のやうな小さい山に虎が出て來ることも、猿が啼く筈もなからうと思ふ。恐らく是は暴風の形容に用ゐたのではあるまいか。かくの如く名文は名文であるが、隨分形容タツプリで事實に遠い點も無いと限らぬ。併し支那の名高い詩の中には眞に實景を描いたものであるといふ感じを起させるものも少くない。例へば武昌に黄鶴樓か

在つて、それは全く焼けてしまつて、跡方もないが、其樓趾に立つて、楊子江を隔てゝ漢陽や漢口を眺むる風景は雄大なものである。李白の「孤帆遠影碧空盡。惟見長江天際流」、或は杜牧の「溶溶漾漾白鷗飛」或は崔顥の「白雲千載空悠々。晴川歴歴漢陽樹」等は最も眞を穿つたものである。

支那の旅行は日本人に取つて極めて興味がある。私は多少歐米の文學をも學んだるが故に、歐米を旅行するときは、種々なる文學的聯想が生じて來る。例へば倫敦に行けばジョンソンやカーライルなどを聯想し、ストラット・オフ・アーヴォンに行けば沙翁を想出し、エヂンバラに行けばスコットやロバート・バアンスに對する敬意を新たにする。巴里に行けばユーゴーを想出し、フローレンスに行けばダンテを想出し、ワイマーに到ればゲーテやシルレルを追懐する。米國に渡れば、コンコードに於てはエマースン、ケンブリッヂに於てはロングフェローを想出す。これと同様に長江一帶は申す迄もなく、西湖や、湖南や、湖北や、河南や直隷や山東の各地では殆んど應接に遑がないほどに文學的、宗教的、政治的、藝術的追懐の對象物が去來する。

洞庭湖の岳州よりほど遠からぬ所に君山といふ平たい島がある。此島は一に湘山と稱して、其所の祀堂に娥皇女英の二女を祀つてある。吾々は舟から遠望したに過ぎないが、滿目蕭殺風景な濁水の楊子江には、一脈の青螺の如く浮び出たる此山を何となく懐しく眺めた。秦の始皇が洞庭湖に巡遊し、此祀堂に來られた時、此神は何であるかと尋ねた所が、博士答へて、堯の娘にして舜の妻であると申上げた。始皇は大に怒つて、刑徒數千人を發し、湘山の木を伐つて赤禿としたことが史記にも書いてある。始皇の傍若無人の態度は此一事に徴して理解が出來る。

三三　北京より八達嶺まで

漢口から北京に行く京漢鐵道の沿線には古代支那の都會の跡が頗る多い。殊に河南省直隷省には歴史的の遺跡は非常に多い。北京は實に現代支那の中心なるが故に、一層名所舊跡に富んで居る。北京に於て見るべきものは皇城である。殊に皇城の中の古物陳列所である文華殿、武英殿であつて、此陳列所の内容の點檢は慥に支那の美術史研究に缺くべからざるものである。又北海や萬壽山、文廟の如きも見る價値がある。此文廟に周の先王の獵碣と稱するものが殘つて居る。是も歴史的遺物として研究する價値がある。文廟の入口に持敬門といふ通用門があつて、其門の左右に進士及第者の名を記せる數十の碑文がある。其最も古いものは元の時代のものもあるが、此碑を建つるものは、同時代の進士及第者中の最も成功したる役人であるぞ

うだ。是等の碑の中には李鴻章、張之洞、徐世昌の名も刻まれてある。然るに三人とも不思議なことには、最上の成績を示しては居らない。張之洞は上列の第三位、李鴻章は上列の三十番位の所に在る。して見ると何れの國でも同樣に、一番二番で卒業したものが必ずしも最後の勝利者ではないことが分る。

文廟の中に國子監といふのがあつて、元時代の學校である。學制改革以前迄は、全國最高の學府であつたさうであるが、今日は唯だ教育上の遺物として存するのみである、此所の觀物は乾隆帝時代に建設せられた十三經を石に彫刻したる石經なるものがある。是は支那特有のものである。

北京に於て私の最も興味を感じたのは、天壇である。是は明の永樂十八年（西暦千四百二十年）に建設せられたもので、周圍には九支里餘の垣を圍らして居る大きな廣場である。是は帝政時代には最も崇厳なる場所として、一般人民の出入を禁せられて居つた。近頃は縦覧券を賣つて一般に解放されるやうになつた。老柏が欝蒼として聳えて、樹木の少い支那に於ては目も醒むるばかりである。此偉大なる自然を背景として白い石を以て築かれた天壇がある。天に形取つて、圓い形をして居るから天壇と稱せられる。壇は上中下の三段に築き上げられて居つて、下段の直徑は二十一丈、高さ五尺。中段は直徑十五丈、高さ五尺二寸。上段は直徑九丈、高さ五尺五寸。上段を皇穹宇と稱して、天子自ら親しく登つて三拜九拜して天を祭つた所である。是は日出前七刻（一刻は十五分）前に行はるゝので、緣の下には篝火を焚いて、暗を照らしたさうである。若し天變地異があり、萬民塗炭に苦しむやうな場合には冬至を待たずして天子が此所に臨幸して天を祭つた所である。兎に角理想として支那の君主は天の子である。即ち天意を代表するものである。故に天を祭つて天意を知り、それに從ふといふ精神から、かゝる祭壇を築いたと思ふて、遉に支那人の雄大なる宗教的思想をも垣間見ることが出來る。或は天壇を築いて以て天子の威儀を示し、國民を統御する一方便としてたのかも知れないが、遉がは大陸風なる宗教的一表現として目すべきもので、北京を見る者は必ず逸すべからざる所である。

北京に行けば萬里の長城を逸してはならない。北京の南口より京睢鐵道に依つて百支里程走つて青龍橋驛に降りる。其時間は四時間程である。大部分は北支那の平地を走るのであるが、三分の一位は山地にかゝつて、山間を鐵路が縫つて行く。驛を出て十二三町も坂路を進めば八達嶺に達する。其坂路には驢馬を牽いて居る苦力が居て盛に驢馬に乘れと薦むる。試みに値を聞いて見れば十錢で宜いといふ。それで乘つて見たが、私のやう

な重い者でも驢馬は溫和しく歩く。下り坂になると頗る危險で落ちさうになるので、下り坂は降り、登り坂は乘つて、兎に角八達嶺の關門の所迄乘せて呉れたから、二三十錢拂つたら大に喜んで居た。八達嶺上に於ける萬里の長城の城壁は十五尺より三十尺位ある。壁の幅は十五尺から二十尺位あつて、建築材料は煉瓦と石である。壁上には三百六十尺位置いて烽火臺が構へてある。所々に暗路を頂上より穿つて壁外への通路として居る。又所々の山の上に高い臺が聳えて居る。是も矢張一種の烽火臺で、夜は烽火を舉げ、或は烽火を揚げて警報を發したる所である。此長城の壁を攀上つて一番高い所より四方を展望するときは、高峰峻嶺四方に連亘し、其上を長い長城が長蛇の如く蜿蜒として連なつて極まる所がない。實に壯觀である。而も長城は一重と極つて居らない。場所に依つては二重にも三重にも交叉して居る。

此長城は秦の始皇帝が造つたといふ傳說であるが、恐らく此起源はもつと古いもので、周の時代に諸侯が協力して、北方蠻族の侵入を防いだもので、秦の始皇帝が之を完成したのであらう。其後も時々修繕を加へ、明の時代になつて迄も大に增築ししたといふことである。八達嶺附近の城壁は明が造つたもので秦の始皇が築いたものでないと言はれて居る。此邊には土中より折々鏃を堀出すことがあつて、土地の子供や百姓はそれを堀出して旅客に賣付けて居る。

萬里の長城もユツクリ見物し、歷史的に研究すれば興味もあらうが、北京より多く一日がゝりの大急ぎで來るから、何となく興が醒める。亞米利加邊の婦人達迄來て見て居るので、どことなく遊山氣分になり、眞面目な歷史的追懷の念が起り難いのは甚だ遺憾である。

三四　支那研究の興味と必要

兎に角支那は歷史上日本と密接なる關係を有して居るのみでない。吾々が少年時代より親炙したる四書五經や、唐宋元明の名高い詩や文章と關係のある遺跡が多いのみでない。現代の日支關係は非常に密接なるもので、餘りに密接なるが爲に夫婦喧嘩のやうな排斥問題が起るので、どこを斬つても血が流れるやうに思はれる。されば支那に對する研究熱は尙ほ一層盛にしなければならぬ。從來漢學者若くは支那の文學や思想に興味を有する人は支那研究をやつたが、一般人は支那に對する深き理解がない。隨て支那の國民性に對する眞面目なる洞察も缺いて居る譯である。是は甚だ困つた事で、日本人は歐米を研究すると共に、併せて支那をも研究しなければならぬ。日本は經濟的に

言へば、米國と支那とが最も大切な方面である。今日、支那に於ける米國の勢力は非常なものであるから、支那を知るには米國を理解しなければならぬ。米國を理解するには支那の現狀を研究せねばならぬ。要するに日本は太平洋を眞中にして、西に支那、東に米國、北に露西亞といふ三大大陸國を相手に存在しなければならぬのであるから、厭でも應でも米國と支那と露西亞は研究し觀察しなければならぬ。米國の事情を知ると共に絶えず支那の事情をも知らねばならぬ。然るに日本の新聞にも支那の事情は傳へられるが、十分ではない。此缺陷を補ふ爲には有識階級が支那に旅行を試むる必要がある。歐羅巴に關することは活動寫眞、繪畫、書籍等に依つて居ながらにして幾分か理解する便宜が多いが、支那に關する材料は比較的少いので、居ながら支那を理解することは困難である。百聞一見に如かず、支那は少くとも日本の如き島國人に取つては、直接見なければ分らないことが多いから、是非旅行を奬勵したい。

從來政府も留學生は主に歐米に送るので、外國といへば歐米の事を意味するやうになり、あちらといへば西洋のことを云ふやうになつて居るので、今日迄は是は已むを得ない事としても今後は外國といへば必ずしも歐米のみでない、他の國々をも含むこととし、漫然とあちらなどといふ言葉は使はぬやうにせねばならぬ。それに付けても政府が政治經濟等に關する留學生を海外に派遣する時には、往復何れかは必ず支那、滿洲、露西亞、朝鮮を通過するやうな命令を發することが必要である。支那を廻ることは億劫であると考へる者もあり、或は下らぬ迷信を懷いて英國に三四年も留學すると、英國崇拜家となり、英國位良い國はないと考へて、亞米利加を廻つて歸ることすら折角染まつた英國の氣風を途中で無くしてしまふ虞があると心配する者がある。況んや折角磨き上げた氣分を、支那滿洲朝鮮を廻つて居る中に皆な落してしまつて、日本に歸る時には何等のお土産が無くなるなどと氣遣ふ者もあつて、歐羅巴より直航して日本に歸つて見たいといふやうな心持の人も少くない、殊に船が上海にでも着けば歸心矢の如しで、矢も盾も堪らぬで一氣直往して日本に歸りたいのは人情であるかも知れない。併し度々海外に出ることは容易でないから、出た序でに支那を廻つて來るのは、時間の經濟から云つても、費用の上から云つても大に利益である。

私は一昨年米國に行き、歐羅巴に渡り、歸途香港より廣東に行き、支那滿洲朝鮮を一周したことは、時間の上に於ても、經濟の點から見ても非常に利益があつたと思ふ。私が僅に三月餘りの東亞諸邦の旅行に依つて得たる利益の莫大なることを考へ

る時は、是非他の日本の有識階級にも此旅行を勵めたい。露西亞を見た者は露西亞だけを知り、獨逸に行つた人は獨逸にかぶれ、英國に行つた者は英國、米國に行つたものは米國と其國々の事のみを知つて、それに心醉して居る。併し日本はどこ迄も日本で、英國でもなければ、米國でもない、露西亞でもなければ、佛蘭西でもない。日本は世界を相手にしなければならぬのであるから、世界の有ゆる國の事に通じなければならぬ。好きとか嫌ひとかいふ感情の問題ではない。而して支那の國情に通ずることが最も大切である。一部專門家以外の有識階級が、是非興味を以て研究しなければならぬ一大問題である、

三五　支那旅行の便利不便利

支那の旅行で最も不都合なものは旅館の不完全なる設備であらう。私は支那旅行中は大體日本の友人の厄介になつて、非常なる滿足と便利とを與へられたことを感謝せざるを得ない。普通の旅客が日本旅館に泊ると案外費用が高い。西洋流のホテルに泊れば、是も案外高い。歐米の旅行位に費用を要する。一番安價なのは支那の旅館である。併し隨分粗末なものである。支那の田舍宿の一例として曲阜の宿のことを記すと、私は曲阜に午後の二時頃着いた。それから支那馬車に乘つて、孔子の墓參りをし、大成殿に參詣して再び支那馬車に揺られて歸ると午後の六時か七時になる。泰山に廻るとすれば午前一時位の汽車を待たなければならぬ。それ迄は厭でも曲阜の停車場附近の支那宿に休憩しなければならぬ。此必要上支那の宿屋を覗いたが、室は云ふ迄もなく煉瓦で疊み上げてあつて、床にも煉瓦が敷いてある。椅子も卓子もある。室の隅に寢臺がある。寢臺といつても長い腰掛のやうな物に戸板の如き物を載せて、アンペラを敷いてあるだけで、銘々持參の夜具に寢る。宿屋は細長い枕を貸すだけである。其代り安い。一泊五十錢位で、食事は註文すれば持つて來るが、一食三十錢もあれば鱈腹食することが出來る。で、田舍の支那宿は頗る安い。但し毛布なり夜具を持つて歩かなければならぬ不便がある。

杭州に行つた時に西湖の邊に大きな旅館が在つた。折衷式のペンキ塗の建物で、粗末ながら室は西洋風に倣ふて、一室に寢臺が三つ位ある。白い薄い紗のやうな物に覆はれた風雅な寢臺である。一室の値段は一晩二圓五十錢から三四圓らしい。三圓も出せば相當な寢臺が三つあるから、三人寢ることが出來る。吾々が行つた時は同行者が舊馴染だといふので、何でも二割位の割引があつた。其他に料理を取る。宿屋の料理は餘り旨くないが飢を凌ぐに足る。故に折衷旅館は頗る安い。かゝる宿に泊

るのが一番輕便である。

支那人の旅行でも持物は可なりあるらしい。それは北京邊の大きな宿屋でも蒲團を貸さないので、持歩かなければならぬ。職を求めて轉々する苦力が背負つて居る物は菰の中に蒲團を包んだものである。是は頗る億劫である。此風を一新することが支那内部の交通を頻繁ならしむる爲に必要なことである。そこへ行くと日本の旅館位便利なものは世界に無い。日本の旅館は家庭的である。近頃は室の内部から鍵を下して閉めるやうな設備も出來たが、殆ど開放して、襖一重隣りに人が居ても平氣で寢て居る。又鍵もかけないで、品物を廣げ放しで出歩くが、其割に盜難の危險は少ない。宿屋で着物や寢卷を貸す所は世界廣しと雖も日本の宿屋以外には滅多にあるまい。甚だしきは風呂場で手拭を貸したり、石鹸を備ふるのみか、朝は齒磨、楊子迄も供へる。日本人の趣味は、此方面に於ても頗る氣むづかし、發達して居つて、氣樂でのんびりと家に居るやうな心持で居りたいといふやうな條件が付いて居る。そこで日本獨特の旅館が發達したのであるが、此旅館の制度を朝鮮支那滿洲でも用ゐて居るので、割合に費用がかゝる。其爲に日本の旅客が朝鮮や支那滿洲の旅行を億劫がるやうになつた一つの理由である。私の經驗や見聞に依れば、支那、滿洲、朝鮮の旅行は案外金がかかつて、西洋を旅行するのと變らない。今日歐米を旅行すれば平均一月千圓位と見るが、支那滿洲朝鮮の旅行も大抵其位はかゝる。私は支那旅行の時は講演旅行をやつたので、幾分便宜であつたが、朝鮮の旅行は其便利がなく、ホテルの費用を自辨して居たから、隨分費用は嵩じた

滿洲を旅行して居る中はのんびりした大陸氣分であつたが、鴨緑江を越えて朝鮮に這入ると餘程せゝこましくなる。餘程日本流になつて來て居る。一面から見れば日本よりもせゝこましい所がある。共喰的氣分が中々盛である。何でも他人の勞力を搾取らうとするやうな態度が赤裸々に現れて居ることは、日本よりひどい。是は矢張朝鮮の社會が何といつても日本よりも貧弱であるといふやうなことより來て居るのではないか。而して朝鮮にも日本流の安い宿を建てゝ、日本の多くの青年學生を惹付けて、安上りに滯在せしむるやうな設備をしなければならぬ、今のやうに費用の高まる旅館では青年學生が夏休みに出掛けやうとしても不可能である。是は日本民族の大陸發展上眞面目に研究しなければならぬ問題である。

三六　宣教師の文化事業

支那に於ける基督教宣教師の位地は幾多の變遷を經て來た。

支那に對する彼等の態度も大分變つて來た。邪推の目を以て見れば、宣教師は一種の探偵である。併しかゝる邪推の目を以て見れば、凡そ外國人は悉くスパイである。私が曾て英國に留學したとき、英國の事情に通ずる爲に、毎晩寢る前に英國研究に必要なる事柄の新聞切拔を集めて、根氣よくスクラップ・ブックに貼付けた。足掛け四年の間に大きな帖が四五冊一杯になつた。同じ寄宿舍に居た英人は、君は日本のスパイであるとからかつた。無論冗談に云ふことでもあるから、こちらは喧嘩の相手にもならなかつたが、氣の毒なことには、此友人は大戰の犧牲者の一人となつた。

吾々が外國を旅行して、其國の事情を觀察し研究して歸り來つて、其利益なりと思ふ點は、之を日本に施すのであるから、一種のスパイのやうなものだ。其意味に於て日本から支那に赴いて居る商人も、軍人も、外交官も、共に一種のスパイではないか。基督教宣教師のみを以て間諜なりとするのは無理なことと思ふ。

又基督教宣教師は、支那に於て商業上の地盤を築かんとする米國富豪のお手先であるといふ批評もある。是も甚だ當らない。宣教師は銘々の宗派の傳道會社から派遣されてゐる。而して傳道會社なるものは、富豪の寄附も含むかも知れないが、先づ一般善男善女の小さい獻金の蓄積である。一般の善男善女は必ずしも支那の商業上の利益を希望するものではない。彼等は單に自已の信ずる、眞の宗教なりと思ふ所のことを、支那人に傳道したいといふ熱心に驅られて、宣教師の費用を分担して居る。故に支那に於ける宣教師の事業を研究するには、色眼鏡を取らねば宜くない。色眼鏡を掛けて見れば白も黑に見え、赤が紫に見えたりする。

兎に角支那に於ける基督教宣教師の貢獻は大なるものである。此天主教會には、教民なるものがあつて、支那國家の保護の及ばない範圍に於て、其信者を保護する。又信者は教會の保護をかさに着て、不逞の行動を敢てする者も無いと限らない。かゝる者を教民といふので、此教民が我儘な事をする爲に、天主教會以外の支那人が折々反抗して團匪事件の如きを惹起す。併し是は支那政府が弱いからで、政府の施設宜しきを得れば、教會の權利も自然消滅に歸するであらう。

宣教師の行ふて居る事業の中で、最も成功したるものは教育事業、次は病院事業である。此事は世間に於ても研究して居る人が少くないから、蛇足を添へる必要はない。其以外の點に於て多少私の耳に挾んだ事を記してみたい。

支那の內地に深く這入ると、郵便事業や銀行事業の如きは殆

ど無い。仍てかゝる所の商人が上海邊の商人と取引するとき、代金の送達に少からず苦心をする。若し其地に宣教師が居れば金錢の送達を宣教師に相談する、宣教師は上海に自分らの宗派の傳道支局があつて、其所から毎月金を受取るのであるから、宣教師の方に於て、其地方の商人より支拂を受けただけの金を上海に於て取引の商人の方に渡すやうに、傳道支局に取計つて貰へばそれで用が便ずる。此恩澤に浴して居る交通不便の地方の商人は少くないさうである。つまりかゝる場合に於て宣教師は小銀行家の務めをやる譯である。

北京の街を歩いてゐる時、氣が付いた事であるが、或天主教會の前に、勞働者には多少の資本を貸してやるといふ廣告のあるのを見た。無論、無條件ではあるまい。信者でなければならぬとか、勤勉な者でなければならぬといふ條件が付くかも知れぬが、資本に渴して居る支那の下層階級に對して、小資本を提供して、彼等の生活の安全を保障することは、洵に結構な事であると思ふ。天主教會がかくの如くして健實なる地盤を築かんとしつゝあることは大に注目を要する。

南満地方の運河の多い所などには渡し船が幾らもあつて競爭する。或船頭は某教會に屬して居るといふ證明書のやうな物を客に見せて、自分はこの様に信用のある者であるから、どうか自分の船に乘つて貰ひたいなどといふ者もあるさうだ。是もをかしい事であるが、其教會の勢力が此邊に迄及んで居ることは注目に値する。

北京のロック・フェラーの醫學研究所及附屬病院は六百萬圓を費したる所の輪奐の美を極めたる大宮殿である、此地面は日本の同仁病院の隣地で、最初買はないかといふ相談を日本當局者が受けたが、買はなかつたさうである。それを米國側に買取られて、隣に堂々たる建物を建てられ、日本側の建築は顏色ない。それで今日不平タラタラであるが、要するに身から出た錆で、自分の不明を悔いなければならぬ。何故早く買取らなかつたのであるか。

扨、此研究所の監督者はグリーン君で、日本に長く傳道したグリーン博士の令息である。此人がロック・フェラー財團の中心人物の一人である。建物はかくの如く立派で、設備も完全であるに拘らず、毎週一回位所員が集り、會食して相談するさうだが、其時の食事は極めて質素なもので、日本の金で一圓位の費用で間に合せて居るさうである。詰り使ふ時は使ふが、手を縮める所は非常に手を締めて居る。是が米國式である。日本側は使ふべき時に使はないで、使つてならない時に使ふといふ惡い

傾向もあるやうに思はれる。宴會などに馬鹿な金を使つて、社會公共の爲には、之を惜むやうな惡い癖がある。是は俄に改良することもむづかしいが、米國式を參考としたらどうか。

濟南の齊魯大學といへば一名山東基督教大學と呼ばれて相應な學府である。此學府に一の博物館がある。廣智院と呼んで居る 是は或宣教師の個人經營である。其宣教師が自分の一生の中に蒐集したる物を陳列して居る。建物も貧弱で、陳列品も餘り多くはないが、動植物の標本より機械類、地圖、種々の品類に至る迄、一と通りの物は集めてある。是が富豪のコレクションでもなく、宣教師が道樂に蒐めたものが、是だけの分量をなして、かゝる博物館が出來たとは、實に敬服に堪へない。之を見る支那人は勢ひ宣教師を尊敬せざるを得ない。若し日本人が支那に於ける宣教師の勢力が羨しいと思ふなら、何故にかゝる善事を以て彼等と競爭しないか。自ら善を爲さずして、唯だ指を啣へて居つて、彼等を嫉むのは、女々しい事ではないか。

が、中には種種なる矛盾がある。或基督教青年會を訪問したとき、其寄宿舍に餘り品の良くない米人が居るので、あれは何人かと支那の友人に聞いてみた所が、亞米利加の煙草會社の出張員だといふことである。其町に西洋流のホテルも無いから、已むなく青年會の寄宿舍に泊めて置くのだと思ふが、一面、禁酒禁煙の青年會の寄宿舍に煙草會社員が寄宿して居ることは、一種の皮肉である。

杭州に某なる宣教師があつて、此人は不思議にも支那の美術に興味を持つて、陶器類を隨分集めた。之を蒐むること數十年にして、倫敦に携へ歸り、賣却して巨萬の富を得た。其富を何に用ゐたかといへば、彼は再び杭州に歸り來つて病院を經營した。今、天下第一の勝の名ある西湖を見下す丘の上に相當な設備を有する病院がある。是は宣教師の美術道樂の結晶である。

日本人で支那に於て骨董を蒐め、陶器類を集めて來た者はある。それで多少の富を爲した者はあるかも知れぬ。が、彼等は其金を果して支那の文化事業にどれ丈捧げたであらうか。

三七　愛國心の發露

支那人は愛國心が無いと批評されて居ることは、前にも記した通り國が廣過ぎるからで、國といふ觀念が乏しい。然るに現代の支那の青年學生は可なり愛國心を有して居る。私の尊敬して居る一壯年學者は、私は排米であり、排日であると私に向つて宣言した。苟も支那の利益を蠶食せんとする所のものは悉く排斥する。而も其人は熱心なる基督教信者である。私は答へた。君の立場は頗る公平で宜しい。日本が惡ければ日本を攻擊すべ

し、米國が惡ければ米國を攻撃すべし、宜しく公平にやらなければならぬと應酬して置いた。

基督教青年會は中々盛大なる事業をやつて居た。單に青年の風紀問題、健康問題、信仰問題を指導するのみではない。或は幻燈に依つて衛生思想を鼓吹し、其他社會事業を經營し、殊に教育事業には相當な貢獻をして居る。北京、天津、上海、漢口等には中等程度の學校を經營してゐる。

私が上海に滞在中、恰度中國基督教學生青年會本部の落成式があつて、それに招かれた。會場は六階の上の屋上運動場で開かれた。支那の目出度い儀式の時に用ゆるのであらう、葉の付いた竹が會場の周圍に幾十本となく立てゝあつた。王正廷君始め支那側の名士、米國側の宣教師の代表者なども招かれて居た。其時讃美歌も歌つたが、中華民國の國歌を歌つた。それは英國々歌の譜を採つたもので、中華民國自身の歴史、文化等を讃美したもので、堂々たる歌である。學生青年は非常に欣んで歌つてゐたのを目撃した。かゝる歌が唱せられるに從つて、愛國の精神は燃える。日本の教育は餘りに國家意識を宣傳し過ぎるので、基督教の方は遠慮して、餘り其方に手を出さないのみか、却つて、その缺陥を補はんがために世界主義を高調したのも無理かない。支那は國家が愛國教育を施さないから、基督教青年會が進んで其方を分擔して居るといふやうな、不思議なる對照をなして居る。是も支那の建國の事情を研究する上に於て心得へ置くべき點である。

三八　理想と信念は國境を超越す

北京大學は相當な煉瓦建物である。是は服部宇之吉博士などが支那政府より招聘されて、其成立に參與されたのである。然るに今日は日本の學者の勢力は殆ど一掃されてしまつた。無論日本歸りの留學生の中、教授たる者もあるが、多數は米國歸りの留學生である。北京に着いた翌日かに北京大學を訪問して、李大釗及胡適君と會つた。當時學校は休みであつた。政府が俸給を仕拂はないので教授がストライキをやつてゐたとかいふ話であつた。其一兩日前に北京大學に怪火があつて、それが放火らしいが、直ぐ揉消したさうである。人の噂に依ると、何者が火をつけたか分らぬが、政府に關係ある者がやつた惡戯ではないかといふ。なぜなら、あんな學校があればこそ月給を拂はねばならぬ。學校が無ければ月給を拂ふ必要がなくなる。それで手を廻したのではあるまいかといふ流説も行はれてゐた。無論據り所のない道聽途説であらふ。兎に角支那政府の財政困難なるが爲に、眞面目なる學校は一方ならざる困難な境遇にあるこ

とは同情に堪へなかつた。

一夕陳啓修君の宅に招かれた。此人は東京帝國大學法學部の出身で、北京大學の政治學の教授である。それは五月七日の夜であつた。この日は國恥記念日で、其朝の新聞は擧つて國恥記念號を出した。私は友人と共に萬里の長城を見るために八達嶺に赴いた。ゆふ方歸ると直ぐに此招宴に赴いた。其夜は胡適君、李大釗君始め少壯教授、新聞記者諸君、七八名の寄合で、中々愉快であつた、今日吾々は新聞で書いただけでない、どこの學校で國恥記念の演説をして、來たとか、排日論をやつて來たとか鼻息の荒いことであつた。然るに私一箇人に對しては熱誠な友情をこそ持て、何等の悪感を有たないので、隔意なき意見を交換した。其時日支親善の議論も出で、其實行方法に就ての胡適君の意見は頗る要領を得たものであつて、吾輩の日支親善策に大なる參考となつた。

一昨々年の五月四日の朝は曹汝霖の邸宅が燒打された。其時曹汝霖は親日黨の一頭目と見なされた。誰が燒いたか分らないが、學生がやつたのだらうとの評判であつた。私が漢口から北京に着いたのは五月二日で、恰度國恥記念週に著いたのである。若し一昨年頃であつたら、排日氣分が濃厚で、私が北京に於て學生青年に對して講演するやうな機會は與へられなかつたかも知れない。然るに昨年は餘程緩和されて居つた。その結果私の北京に於ける運動は非常に都合よく運んだ。私は到着の夕清水安三君に案内せられて、基督教青年會のエドワード君と會見した。そして意志の疎通を計つた。五月四日の朝は北京の基督教青年會の講堂で、約一千人の青年學生に對して英語演説を試みた。彼等は拍手喝采を以て吾輩の演説を迎へて呉れた。其他燕京大學、協和醫學堂、精華學校等に於ても講演をした、支那の中央政府所在地、而も國恥記念週間に於て、吾輩が此特權を與へられたことは非常に滿足であつた。

これに付けても大陸人、大國人の氣風が、島國人の考とは餘程違ふやうに思はれる。若し日本で、かゝる慷慨的精神が起つてゐたとしたら、私のやうな外來者が自由に講演などすることは許されなかつたかも知れぬ。而も更に記憶すべきは私は北京に於ては主として、基督教主義の學校、青年會に於て主に講演したことである。一體亞米利加人はのんきな所があつて、支那人と餘程共通の點がある。こちらから胸襟を披いて談じ込ばめ、大抵は受入れて呉れる。そして一度會見して、此男は必ずしも排米熱を鼓吹するものでない、國際協力主義を主張する人であるといふやうな印象を與へたならば、次から次へと門は

かれて行く。例へば北京の基督教青年會で講演をしたのは、前に述べた如く、エドワード君に會見した結果である。協和醫學堂で講演したのはロツク・フェラー研究所のグリーン氏と會見した結果である。協和醫學堂の精神指導の主任のシワルツ君といふ人は、まだ青年であるが甚だ愉快な人物である。吾輩は午前七時から三十分間同學堂の講堂で、男女の醫學生に對して感話を述べた。「醫學の目的は先づ天地の化育に參ずることである。神と共に働くことである。諸君は人生に幸福を齎すべき神の協力者である」といふ意味のことを述べた。シワルツ君は非常に欣んで、次の日曜の朝精華學堂で講演して呉れないかと申込んで來た。故に早速引受けて其所で數百名の支那學生に對して講演した次第である。

是は必ずしも自分の功ではないが、凡そ旅客は常に一の端緒を摑んだら、それを手繰つて手繰つて行けば、段々奥の方に這入り得る道が開けるものであることを確信するが宜い。かくして私は排日々々と騒いで居る支那を東西南北に歩き廻つて、少しも排日の感じを懐かれずして、非常に愉快なる印象を齎して旅行を繼續し得たことは不思議である。併し考へて見れば別に不思議ではない。人類共通の愛を懐いて相互に接する時は、何等そこに人種的、民族的、或は國家的差別は無いものである。人情に國境なしといふことは十年前の外遊で經驗したが、この度は理想と信念は超境を超越することをしみ／″＼と感じさせられた。

三九　青島開發に顯れたる獨逸魂

濟南を發つたのは五月十四日の朝であつたが、可なり暑苦しかつた。然るに其夕方青島に着くと非常に涼しい。確に溫度も十度位違ふ。恐らく青島は支那全體に於て最も氣候の良い所である。獨逸人が此良港と、此氣候の溫和なるを見付當てたことはその先見の明を讃美しなければならぬ。

日獨戰爭の結果として、獨逸の勢力は一掃されたが、獨逸人の青島經營の方法に就ては餘程學ぶべき點がある。元、青島は其名に反して少しも青々としない所であつた。裸か山で、しかも石山であつたが、獨逸人が來てから盛に植林をした。其植林の方法が餘程面白い。獨逸の專門家が青島の緯度、氣候、風土等を詳細に研究して、日本及獨逸に於て、青島と同緯度若くは同濕度、同氣候の地方に育つ樹木の苗を集めた。或樹木の苗木は獨逸より齎したが、日本の三州岡崎附近が青島の氣候に似て居るといふので、松の苗木を同地方より取寄せた。日本は關東州に於ても隨分植林には注意して居るが、主として松林であ

る。然るに青島には松のみではない。落葉松もあれば白楊樹もあり、色々な木がある。若し一と色の樹木を植えたならば、蟲が付いた時に困る。樹木は全滅する。故に種々様々な樹木を植えて、蟲害の損失を減少する豫防方法を講じたのである。

支那には昔から樹木が無かつたのか、あつたのを伐採して使つて、其補植を怠つた爲に裸か山のみとなつたのか、それは研究の餘地があるが、兎に角現在樹木の無いことだけは著しく目立つ。曲阜の孔林といふ、孔子の墓へ行くと栢樹の並木がある。かゝることは頗る珍しい。去りて孔子の廟を拜した時、庭に幾本かの樹木があつて。枯枝が一本落ちてゐた。すると案内者は其枯枝を極めて大切さうに拾つて、自分の家に持歸つた。樹木の無い支那に於ては、一本の枯枝と雖も珍重せるゝものらしい。

有名なる泰山にも登つたが、是も殆ど裸か山である。唯だ頂上に近い所に岩石の絶壁の上に一叢の松林を認めた位である。されば支那人は樹木が非常に欲しい。獨逸人が折角植林しても少し大きくなれば支那人が伐採する惧があつた。故に獨逸政府は嚴重なる法律を作つて制裁を加へた。樹木を採伐するものは死刑に處するといふ様なかゝる嚴重なる法律を作つて、漸く樹木を繁茂せしめた。日本軍政署も獨逸の計畫を襲うて、更に此植林を受繼いだので、今は青島は名詮自稱青々とした場所となつて居る。殊に青島の水源地の周圍には、立派なる茂林が密生して居る。獨逸時代よりも數倍大きな森となつた。是は慥かに日本施政の一大貢獻である。

青島の道路の綺麗なことは、恰かも伯林の街を見るが如くである。如何にも獨逸式で氣持が好い。單に綺麗であるだけならあれ位のことはやり得るが、最も獨逸式が現れて居るのは、コンクリートで固めた道路の片方に、切石を敷いた一本道があることだ。是は支那固有の小車の通り道である。又四五尺の間隔を置いて、二本の切石を敷詰めた所もある。是は荷馬車の通る道だ。折角美しく造つた道路を重い荷物を積む小車や荷馬車の爲に、臺無しとなるのを惜んで、特別に斯様な道を造つたのだ。是は流石に獨逸人の綿密なる頭腦から割出された計畫であつて、英米人にも又日本人でも考へ付かなかつた點であつたらふ。

ワルデック總督の住んでゐた官邸の如きは、高臺で展望のきく所で、あまり廣くはないが、隨分と贅澤をした立派な邸宅である。山東に於ける獨逸の野心の大なることを想像し得る一材

料である。

獨逸が經營した山東大學の建物もあるが、日本では鐵道局に充てゝ居る。其講堂の一部分に疊を敷詰めて、柔道の道場に使つて居るやうだが、是は甚だ遺憾である。何故に日本軍政省は學校を造らないか。特に此建物は、先年三階の物置に火事があつたが、一室だけで、二階にも、隣室にも何等の影響がなかつた。それは各室がコンクリートで固めて置いたから。此點にも獨逸式が現れて居るではないか。用意周到なものである。

日本人の經營して居る學校に青島學園といふのがある。主に日本の子弟を集めて實業教育を授けて居る。又支那の學生も幾十人か收容してゐる。是が青島に於ける教育上の日支親善の一機關である。

日華實業協會が青島に商科大學を建てるといふ計畫があつたが、如何なる事情であるか中止になつたことは甚だ遺憾である。或は濟南病院の附屬として醫科大學を經營する方が更に有效かも知れない。何れにしても日本は獨逸の後を受繼いで、青島に莫大な金を投じた。高等女學校の如きも立派である。青島中學校も形勝の地位を占めて居る。

山東問題交渉の結果、青島は支那の手に歸するのであるが、そして軍隊も撤退する譯であるが、殘されたる日本人は何をするか。官權の力や軍隊の背景に依らず、自己の實力と信用と努力とに依つて其地位を守らねばならぬ。否、一層高めなければならぬ。今や青島在住日本人に取つての一大試錬の時が來りつゝある。果して此試錬の火に依つて潔めらるゝか、或は燒捨てらるゝか、是は大なる問題である。

四〇 虎威を借る狐狸の群

日本人が支那で評判が惡いことに就ては色々な理由がある。

軍隊の駐屯して居る場所に於ては、日本人は軍隊の虎威を借りて我儘を仕盡したこともあるやに聞く。例へば或所に日本の軍隊が駐屯する。其所に日本の小商人などが行く。彼等は苦力とは競爭が出來ないので、僅かばかりの金を以てボロイ商賣を始める。阿片の密賣かモルヒネの注射をする。阿片の中毒者に對してはモルヒネの注射が一時的の慰安を與へるので、阿片癮者である勞働者や乞食のやうな者でもモルヒネの注射を頼む。それで日本の小商人は表は雜貨商とかいふ名目であるが、裏に於てはモルヒネの注射などをする所があつて、何十人といふ乞食のやうな者どもに注射をする。それを歐米人などに寫眞に採られたのもある。かくして金を儲けた者は少くないらしい。甚だしいのになると、こういふ例もある。大戰中支那の青錢を買

受けた者がある。田舎へ行つて馬で青錢を買集めたものに、或家に行つたら拂ふと云つて、申合せて置いた友達の店に來て、それを下させ、自分は裏口から逃げてしまふ。そこで支那人は其店の主人に向つて、青錢に對して銀貨を拂つて呉れといふ。其所の主人は、イヤ先刻來た日本人に金を拂つたから、お前には拂はないといふ、支那の百姓が何と云つても受合はない。結局逃げられて泣く泣く客馬を挽いて歸るより外ない。こんな事も折々行はれたらしい。かゝる惡辣なる小商人が跋扈して居つては、日本人全體の名聲が高まる筈はない。

滿洲に於てもステッキの中にモルヒネを仕舞ひ込んで、內地に這入つて注射用に用ゐて、數百金を儲けて、大連邊の根據地に歸つて出直すやうなことも少くなかつたらしい。

私は支那に居る日本人が、苦力を擲るといふ話を聞いて、心苦しく思つて居つたが、幸ひにして此度の漫遊中一度も支那人を虐待して居るのを目擊しなかつた事を愉快に感ずる。之に反して上海で偶然、或西洋人が支那の車夫を擲つて居るのを見た。なぜ日本人がかく態度を變へたかといへば、恐らく是は日貨排斥の結果であらうと思ふ。日貨排斥が凄じい勢ひであつたので、支那人も怒ると恐しいものだと感じたので、態度を變へるに至つたのではあるまいか。

日本人は義俠を以て名譽とし、弱きを助けて、惡を挫くを理想として居る。然るに自分よりも國家的に弱い地位に在る支那人に對して壓迫を加ふるが如きは、寔に以て我が民族の名譽を傷けるものである。併し今後は次第に此惡習慣は一掃せらるゝことゝ思ふ。

歐米に於ける資本に對する勞働の反抗は、寧ろ十九世紀に於ける資本の態度に對する傳習的敵愾心が現代の勞働を刺戟して居るらしい。現代の資本は勞働に對して相當の理解があり、相當の待遇を與へて居る。併し以前の惡待遇が禍を爲して、現代の資本に對しても依然として反抗的態度を執らしめて居る。之と同樣に最近日本人の支那人に對する態度は餘程立派になつたと思ふが、前々の惡しき態度が今尚ほ傳習的敵愾心を、彼等の間に喚び起さしめて居るのではあるまいか。

（完）

美術の末路に就て

ヴェ・ブブノーヴァ

歴史とは人間の心理の進化、時代精神の進轉といふことを意味するに過ぎぬ。人間生活の如何なる諸條件に由つて此の進化變遷が起るのであるかはまだ今日に至るまで明かでないにしても、兎に角、範圍を廣くとれば人類全體の、さうして範圍をせまく限つて論ずるならば一民族、一國家、一社會團體內の思想とか精神とかといふものは、徐々に、然し乍ら不斷に、日夜推移しつゝあるものである。又一つの新しい思想が或る一定の程度まで發育し生長する時、其れは從來使ひ慣されて來た所の總ての形式を必ず破壞しはじめるものであるが、其の破壞力たるや、從來の舊き制度が人々の生活の中に根をおろすと深ければ深かつた程、それだけ大いなる反動力となつて發現し働くのである。

此の破壞 ― 即ち其れが革命の瞬間なのである。其れは決して破壞の爲めの破壞ではなくして、其處まで進化し生長し來つた新しい時代精神を鑄込む可き新たなる制度をば建設せむが爲めの空地を作ることであり、場所を淸めることである。

進化の誘因となる所の諸ての條件や、其れ等の間の相互關係を知り盡すといふことが不可能であると同樣に、目覺めたる民衆の心が、已れの生長をば阻止しつゝある舊き制度をば破壞す可く、果していつ如何なる時機に革命的叛亂を起すに至るかといふことを定めるのも、また勿論極めて困難なことである。

革命それ自身の爲めに身を捧げたる革命の闘將等は、革命の完結と共にいつも舞臺から影を消し去つて行く。何故なれば彼れ等は只、連續せる歴史の中の革命的瞬間の表現者たるに過ぎないのであるから。革命的瞬間が過ぎ、新たなる次ぎの瞬間が來る時、其れは既に彼れ等をばも早や用なきものとして投け出すのである。彼れ等の代りとして、新たなる主義と、社會組織と、法律とを提げた新たなる人々があらはれて來、さうして其れ等のものを以て、一民族（或ひは人類全て）の精神が、更らに一段の進化を遂げるまでに必要な一時的の容器となり（また同時に拘束物ともなる）所の制度文物を造り出すのである。斯

くしてきた地上に新たなる革命までの時が經つ。

卍　卍　卍

一九一七―一八年の革命は舊きロシヤをば根底から覆へし終へた。世の中には未だにあの革命をば今度の大戰爭の結果であると考へ、乃至甚だしきに至つては、ドイツの策略によつて起されたもの〻如く考へてゐる人達もある樣な話しだが、たとひさういふ事情が幾分其の誘發を援けたといふことは事實であつたにしても、其の眞の原因はやはりロシヤ自身の地の中に潜んでゐたのである。實に革命は土の中から我々の所にやつて來た、さうして既に幾多老若男女の屍をば地の上に横たへ、また之れより以後もなほ其の上に横へるであらう。其れは我れ等の木造なる百姓家やまた古き宮殿をば共に跡形もなく打ち壞し、さうして我れ等の鄕土をば無數の墓を以て蔽はむとしてをる。新らしき人々の來らむ日までなほ暫くの間、ロシヤの歷史には此の黑き苦悶の日が續くことであらう。

未だ曾て世にロシヤ人よりも多く奴隷の辛苦を嘗めた國民はなかつた。けれどもまた同時に、我れ等ロシヤ人よりもより多く自由であり得たる國民もなかつた。何故かといへば、我れ等の双眼はいつも順良に笑ふことが出來、さうして咎めるといふこと無しに全ての物ごとを眺め得たから。我々は自分等のいのちを枠に入れることをしなかつたのだ。

けれども、枠こそなけれ、我々の生活の形式は――斧で削つた木造りの小屋の、屋根の上には朽ち傾いた破風、部屋の隅には煤けたる聖像（イコーナ）……――まことにせまくるしくもあはれなるものであつた。さうして、其れ等の狹くるしき生活の形式から逃る可く、自然、我々は打ち開けた廣い野原に出て行つたのだ。我々はいつも、一望千里眼を遮る者もなき曠野の上に立つて、後から〳〵と空を飛んで行く夏雲を眺めた。さうして冬の長い〳〵暗い夜が續く間、我々は其れ等の雲のあなたに一體何があるのだらうかといふ樣な事ばかりを考へて暮した。

我々は空想と思索とに生きる人間である――自分等の魂の良き大半を、我々は我々の現住せざる世界に住まはむが爲めに捧げてをるわけなのだ。瘠地の上の勞苦も、沃土の上の怠惰も、生活の窮乏も、生活の饜飽も、共に我れ等をば驅つて寺院と飮酒屋とに赴かしめ、我れ等が都會生活の遽しき喧騷と塵埃とは我等をして所謂『絕對永遠の眞理と正義』との探求に嚮かしめたのであつた。

斯くして我れ等の『土地』は依然として窮乏と懶惰なるまゝに殘り、其の處々に散在する大小の『都會』達も、またいつも灰

色に塵深きまゝ留まつてゐた。さうして其の(都會の)中の美しきものと雖も、或ひは白夜の微光の中に、或ひはまた夏の炎天の下に、昔から帝王達の意志と無數の奴隸共の手によつて造られたる圓柱を立て並べた大厦高樓の『眼』を以て、深き空想に耽れるもの〻如く世の中をば眺めてゐた。

卍　卍　卍

今はまう可成りの過去となり昔となつた十九世紀の後半、始めて歷史家や考古學者等が古きロシヤ(Staraja Rossija)なるものを『發見』したる時に、さうして其の文藝の物質的記念物をば蒐集し研究し始め、其れをば了解し、終ひに其の壯麗にして神秘的なる面影に幻惑されゐたる時に、實は其の古きロシヤなるものは業に已に過去のものとなり終つてをり、ロシヤの新しき自覺と感情とは暗々の裡に不斷に成熟しつ〻あつたのである。

國の全てを擧げて國民的自覺と自負心とに燃え上りつ〻あつた時、さうして貴重なる國家的史料の蒐集や、博物館、記錄所、國家考古學の新しき訓練、……等の創立に我れを忘れて沒頭しゐたる時、――忽然として「打ち壞せ、古物館や古ぼけたる文明を!」「滅ぼし去れ、古ぼけたる藝術を!」なる叫びの第一聲が、實に何處からともなくきこえたのであつた。――亂暴者の太き杖の如く、冒瀆者の罵詈暴言の如く、街頭の怒號の如くに、其れ等の叫びは人々の耳にきこえたのであつた。

けれども人間心理の進化、時代精神の變遷といふことは、眼の前に其れに抵抗しつ〻ある傳統、習慣、因襲……等の力を眺め乍ら我々が想像するよりも遙かに早く完成せられ實現せらる〻ものである。

歷史家や考古學者等は、未だ古き文化の寶庫の底をば極はめざる間に、早くも既に枝葉問題や衒學の死したる砂の中に、當初彼れ等の有したりし生きたる學究心の泉をば涸らし盡してしまつた。然るに之れに反し、社會の心理、時代の精神の方には、其の頃既に多大の變化が起つてゐ、時と共に益々頻繁にきこゆる樣になつた彼の『滅び去れ!』の叫びも、次第に世人の同感的注意をひくに至つたばかりではなくて、終ひには其れに共鳴し、其れを支持する人々をも見出すに至つたのであつた。

然るに終ひに時は來た。革命の堅き瓦礫は突如として我れ等の頭上に降りかゝり、一齊に全ての者をして起ち上らしめた。石は我れ等の頭上に烈しく降りかゝつた。さうして多くの人々は絕望し仰天してたゞ其の場に立ち竦んだ。

けれども、必ずしもさういふ人達ばかりでもなく、中にはまた豪氣なる人々もあつた。耳をも聾せむとする破壞の地響きか

身の邊りにまだ切りなる時、彼れ等は起つて、まう新しい建物を建てることをやり始めたのだ。絶望し恐怖し切つた人達は其れ等の人々に向つて遠くの方から喚き叫んだ「馬鹿をやめろ〱！ 家なんか建ちはしない！」と。さうして實際、多くのものは、まだ建ち上らずして地に崩れた。

人類の歴史あつて以來、最近にロシヤに起り、現になほ續きつゝある今度の革命ほどの大變動は未だ曾て一度もなかつたのかも知れない。兎に角それは、たゞ單にロシヤ一國のみに就て云ふも、西はヨーロッパのバルト海、北氷洋の岸より、東はアジヤなる日本海にまで達する一大陸の上に於て、二億にも近き數の人間が耐へ忍びつゝある所の苦悶であるのだ。其れは實に殆ど人間の耐へ得る力の極度をば超えて限りなく大なる悩みである。然し乍ら、恰かも、單獨に己れ一人のみではなく仲間と共に擔ひて行く重荷の割合に輕く思はるゝ如く、我々がロシヤに於て忍ぶ可く持つた非常なる苦惱窮乏の重荷も、衆と共に耐ゆれば、まだどうにか持ち堪へることが出來たのであつた、たとひ其の重さに壓されて倒れたる人の數も可成りに夥しくあつたとはいへ。

我々は衆と諸共に其の重荷をば持ちこたえた。さうして各々自分等の家は相當に護り乍らも、破壞の跡をば眺め、また新たに建てむとして働く人々の群れをも眺めた。舞ひ上りたる砂塵が再び靜まり、さうして古き瓦礫がきれいに片付けらるゝ時、其の時はじめて其の新しきものは現はるゝであらう。我れ等人類が未だ曾て持ちたることなき其の新しきもの、――新たなる人間生活の建設の爲めに力を一つにして努むる共同作業の事實――が我れ等の目前に現はれるであらう。

我れ等の心は既に熟してゐる、手は、然し、まだ暫しの時を待たたければならないのだ。

我れ等をば震駭せしめたる新しき精神は、本來、外でもなき我れ等自身が生み出したる精神である、さうして其の精神は今やまた更に新しき我れ等をば造り出すのであらう。肉體と頭腦との勞働、――此の地上に於て、諸共に力を協せて、而して全てのものゝ福祉の爲めに行ふ所の仕事、――其れこそ我れ等が新精神の基調たる可きものであり、さうして既に基調をなせるものである。

我れ等は我れ等の觀實主義と、從來我れ等が持ちゐたる到達し得ざる『彼方』への憧憬とを、『此處』にての仕事の爲めに棄て去るであらう。無限無盡の富をば天より與へられ乍ら、けふまで其の恩惠を感ぜざりし我れ等地上の人類は、今や自然の力の神秘をば己れ等の勞力に從へ、然かも己れ等の精神は、我れ

等が既に此の世より消え去りたる後にもなほ自らの働きを止めざる宇宙のシステムに委ねつゝ、其の富を利用して眞の生活をば創造り出すであらう。我れ等は須らく我れ等の身をも魂をも、生活と勞働との樂觀主義によつて滿たす可きである。但し、生活と勞働とはどこまでも同じ一つのものゝ別名でなければならない。

卍　卍　卍

働き無き信念は死んでゐる。

然し我れ等の『働き』は既に鋼鐵の脚を以て地に立ち、アルミニウムの翼を以て天空を飛んだ。彼れ等（人類の『働き』、諸業績）は地球の大いさをば狹ばめ、星より星への距離を短縮し、さうして我れ等の全宇宙をば擴大した。

我れ等の『今日』は實に明確に、昨日は古きものゝ破壊を絶叫し、けふは既に新しき道に從ひつゝ萬難を排して進み行く新しき藝術家の働きをば、我れ等の眼の前に示してゐる。

古き觀賞主義は、繪畫藝術や、美術館や、展覽會……を生みさうして宇宙の視覺的認識の中に個々の藝術家をば各々個性的に沒頭せしめた。

之れに反して、新しき積極的行爲なるものは、――而して新しき藝術家はみな其の行爲に身を委ねるのであるが、――人間の實生活の爲めに役立つ各種の『機物』をば作り出すのである。人間の生活其のものがつくり出したる所の、さうして、あとから〳〵と限りもなく出現し來る所の、殆ど『超自然的』とも稱す可き可能性と力とを具備したる種々なる材料を利用して、其れ等の『機物』をば地上に創造り出すのである。

此れ等のものは、或ひは、道路に横はる石や砂利の如く我れ等の生活の中に只單にバラ撒かれたる所の靜力學的『機物』となり、或ひはまた生きたる動力學的の機械となつて、我れ等自身や我れ等の思想を東西南北に飛び交さしめ、我れ等を地の低きより九天の高きに登らせ、山を削り去り、岩に河を通し、諸の新しき物象を建設し、乃至また其れ等をばより新たなる創造の爲めに破壊もする。或ひはまた此れ等のものは、我れ等の爲めに人類の諸事萬端に就いて叫びを擧げる『機物』となり、我れ等の思想が如何に變りつゝあるか、人間の生活が如何に動きつゝあるかといふことを、時々刻々、密かに報道し、さうして強靭なる一つの輪となつて、終ひに我れ等が今日の民族や國々を大きく一つに結合し樣とする。

從來の所謂『繪畫』なるものは、其の性質よりいふもまた其の主意とする所より云ふも、我れ等が住める物象界の諸相

の描寫である。然るに其の描寫なるものが多くは有名無實にして單に『ゑかき』なるものがうたゝねの夢であり幻影であるに過ぎず、少しも物象の實相をば寫し表はしてをらぬことが多いのだ。――半ば睡れる朦朧狀態の頭を以て動かさるる手には到底『繪の具』といふ如き脆弱なる材料を活かして用ふることが出來ず、『形』は、其れによつて必ず皺苦茶となされ、また毀されて當然、滅茶苦茶となされる可き筈である。

然るに『機物』なるものは、我れ等が日々に持つ『今日』てふものゝ明晰なる確認であつて、建設者の手は其の日に與へられたる材料をば、一つ一つの材料がもつあらゆる利用法を敏捷に捕捉し、また巧みに彼れ等の内部に默せる組織構造の法則に從ひつゝ、智(さと)く賢く組織立てゝ行く。また建設者の手と心とは、逆に『機物』の爲めに、新しき法則を持つ新しき材料をば不斷に創造し更らに其れ等の材料の未曾有なる組み合はせをつくり出すこと、恰かも園藝家が蒼容色のバラの花を作り出すといふが如くであるのだ。

從來の『繪畫』なるものには、人々が四方より參集し禮拜する所の神聖記念物にも似たる趣きがあつた。其れは殆ど香を薰じ讚美歌を捧ぐることをすら人々に要求してゐたのである。其れは貴重なるものであつた。さうして特に唯一にして無二のものであるといふ事のみの爲めに、其れは屢々寶物として崇められ、人々が繪畫を利用するには非ずして、却つて繪畫に奉仕し使役せらるゝにまで至つたのであつた。畫家は恰かも玉磨きが、人知れぬ地中より得られて金錢と榮華との爲めに使はる可き珍貴なる寶玉の表面を琢くが如くに畫面をば仕上げ、さうして其の繪もまた畫運目出度き時は、光榮と永久不滅のものとなる可く畫室をば出て、或ひは國立美術館の一隅に納まり、或ひはまた他をば出し拔かむと焦る聚集家の慾望的懷の中へと入つて行く。

之れに反し『機物』は自ら人類の爲めに奉仕するものである。

人間の心と手とによつて產み出され、其れは人間生活の潮の流れに從つて移り動く。さうして我々人間の生活は、其れをば遠慮なく消耗し、遠慮なく破損し、さうして終ひに其れをば忘れ去るのだ。其れ等の『機物』は、恰かも水が地の上に擴がりさうして土の中に滲み透りて行くが如く、出來得る限り廣き範圍に擴がり、低き層に到徹せむことを自ら努める。其れは何人の手にも適せむことを望み何人の用にも役立たむことを希ふ。さうして終ひに廢物となる時、其れは假りにも自分等の爲めに壯麗なる墓場などを(例へば美術館、博物館……)要求する様な心は持たず、い

つも喜んで、己れよりもより完全なる新しき『機物』に、直ぐ其の地位をば明け渡して行く。斯くして、凡そ、我々に有用なる『機物』といふものは決して我々の生活を廢物によつて取り散らかさうとはしない、――彼れ等は我々の招きに應じて現はれるが、一旦各自の役目を果したる上は、世の中に『きのふ』の塵埃をば堆積さすことはせずして、直ちに其の影を消してゆく、此れが實に彼れ等『機物』なるものが、常に『藝術的作品』てふ高き名稱を欲する所の、種々なる古器物や骨董品とは根本的に異なる所以である。

さて、我れ等が『今日』及び近き『明日』の『繪畫』に就て言ふならば、今や彼れ等は次第に從來の觀賞物的、骨董物的境涯をば棄てゝ、或ひは街頭の廣告柱、或ひは摩天樓の側壁、或ひは工場、學校、乃至明るく照されたる劇場、集會、祝祭日……等を舞臺として、自ら飛躍し活動せむことを期しつゝある。彼れ等の數量的生産は印刷機を用ふることによつて實行せられ、また彼れ等の著大性（Monumentality）は例へば投射機で幕の上や、或ひは街頭の壁などに映寫することによつて實現せらるゝであらう。其れ等の種々なる場處、様々なる演壇の上から、彼れ等は我れ等人類が持つ『今日』の苦悶・要求や熔慰・滿足に就ての叫びを舉げ、而してまた恐らく既に『今日』の日を打ち切つて『明日』に移り行く可き時ではあるまいか、といふ様なことをも叫ぶであらう。

卍　卍　卍

從來我れ等が人間的存在の物質的基礎を構成して全世界の市場に流通しつゝある所の物品なるものには、元來二つの主なる型(タイプ)をば認めることが出來る。

一つの型は、『最小限の勞力、最大限の休息』といふことを理想とせる生活を作り上げ、而して其の偷安的なる生活は、出來るだけ自らの理想に應ぜむが爲めに、遊惰なる肉體へのあらゆる快樂(コムフォルト)と、活氣なき心及び鈍れる感覺への刺戟とに役立つ總ての物品を創造り出したのである・則ち一方に於ては、限りなき口腹慾の滿足に資す可く金ピカに照り耀かされたる料理屋の廣間や、其のテカ／＼と光る纎弱(きやしや)なる座敷道具等をつくり出し、また他方に於ては、外部の世界から厚き石の壁や緞帳を以て遮斷し孤立させられ、安樂椅子や、良きバネの入つた柔かき寢臺や、羽根ぶとん、……などを具へた靜かなる家庭内の諸造作をば產んだ。斯くて『最小限の勞働、最大限の休息』を理想とせる生活の產物として出來上つた、上記、物品調度の二つの型は、（即ち娯樂的家庭型と眩惑的料理屋型との二型は）、休養す可き資

格の有無に關せず、只休息することのみの爲めに此の世に生きつゝある人々の間に、實に到らざる處もなく廣く行きわたつたのである。——例へば汽車や汽船や停車場の中にも、或ひは自働車の上にも、乘合ひ飛行機の室内にも、乃至は劇場でも、銀行でも、商店でも、さうして、此の頃は餘り建てられることがない教會などの中にさへも。

然るに第二の型に屬する所の物品は、其の外觀に於ては殆ど上記二型に屬するものと同じであるけれども、只其の實質をば異にした所のあらゆる模造品であつて、其れ等は、實に始めもなくまた終りもなく、自分等の全生涯を勞作のみの爲めに費す人々の爲めに作られてゐるのである。日夜、興味もなく趣味もなき仕事、自分等の力では捨ひ切れざる仕事を負擔し行く可く運命づけられてゐる多くの人達は、日常生活の形式の上に於てもまた、前記、遊惰的生活の形式の權力下に全部壓伏せられてゐる。未だ曾て今日に至るまで、奴隷の境涯に置かれたる魂や勞力が已れ等の獨創的なる新しき形式をば作り出したることなく、彼れ等はたゞ模倣と快樂との製造の中に醉生し夢死するのみである。

曾て人類の過去の時代にあつた、(さうしてまた現時に於ても未開なる社會にある)如き、全然他よりの强制や壓迫に因るに非ず自立し獨立して自ら勞作する人々の、自由なる心や手によつて有機的(organisch)に創造り出されたる品物、——即ち原始的手工品とも云ふ可きもの——は、數量的なる需要をば滿たすことが出來ず、また近代の工業的製産法に對抗するすること能はずして、今や殆ど全く其の跡を斷たうとしてゐる。

我れ等の『今日』は、常態なる人間の身體並びに精神の常態なる活動をば總て勞働たらしめ、其の最も深き意味に於ける我れ等が諸の『勞働』を以て人類生活の根柢たらしめむことを、既に已れの解決問題なりとして確定した。さうして、常態なる活動力を持てる人々の爲めに、人類生活の物質的公式化として、現代はもろ〳〵の『機物』をば考案しつゝある。

新しき時代精神による『機物』の新しき思想は、全ての器物調度なるものゝ爲めに幾多の新しき『形』を生むことであらう、——遊惰生活的の型のみを作りつゝあつた我れ等の『昨日』が、如何に案出せむことを努めても無駄だつた樣な全然新しき型をば我等の『明日』は必ず生み出すであらう。

けれども、新しき『機物』を創造らむとする新しき勞働の爲めには、我れ等はまた新しき見地より出發しなければならぬ、——我れ等は今日までの如く單に少數なる遊惰階級(肉體的並びに精神的兩樣の意味に於ける)の利益のみの爲めにではなく

て、日夜實際に身心の力を出し各種の勞働に從ひつゝある多數の人々の階級、如何に働けども働けどもいつまでも其の日ぐらしであり、さうして屢々貧窮の中に斃れたる人々の階級、さういふ多數階級の利益を目標として働く可きである。——則ちだうしても其れ等多數の人々の實際的要求を察知し、其れに應じて實際彼れ等に有用なる『機物』を作る可く、何人の手にも渡り得る材料と、其の材料を以てする多量製産法とを見付け出さなければならないのだ。

此の精神と仕事とは、次第に人間生活の全ての廣さと深さとを征服しなければならない。斯くしてそれは終ひに精神的及び物質的勞働の中心として幾多の工業『市』や田園『市』を創造し、住宅、各種の公共の建築物、工場及び倉庫、我等が勞働の爲めに必要なる諸ての道具、交通機關、其の他あらゆる不可能事を化して可能事ならしむる所の種々なる機械的設備の複雜なる構造、……等を地上に現出せしむるであらう。凡て此れ等の『機物』はみな即ち（我々は只單に一つの建築物といふ如きものばかりではなく、例へば都市とか田園とかいふものを、やはりそれ〳〵特殊の目的によりプランによつて造形せられたる一つの『機物』であり、また、あらねばならぬ、と考ふる者であることを念の爲め附記して說く、）我れ等の新たなる人間心理、新たなる時代精神が注ぎ込まれ、さうして次ぎの新たなる變動期まで其の中に固定さる可き所の、物質的形相の表現なのである。

卍　卍　卍

上に記したる我れ等が『今日』の問題の解決は、既に本質的にいふも、當然、大規模に行はれなければならぬことであつて是非とも一社會或ひは國家全體の支持あることを必要とし、其の製産及び建設を遂行するに當つては、其れが工場に於て行はるゝと野外に於てなさるゝとを論ぜず、一方に於て各種の技術家、工業家等が必要なると同時に、また彼れ等と相連絡し協力して、（『形』と「材料」との正當なる結合統一者としての）美術家の參加することをも必要とする。或ひは、更らに一步を進めていふならば、將來の美術家なるものは、實に全體として其のまゝソツクリと、今日の所謂、機械工業・建築、土木、造船等の技師・技術者の中に、即ち廣義に於ける『明日』の『建設家』の中に加はつて、其の力を致す可きであるのだ。また、問題の解決は、必然的に、全ての製産品の社會化及び社會的分配といふことに連關して居り、市場に於ける利益とか、個々の商人、會社等の得失・いふことゝは、本來の主意の上から全然反對の立場にある。

舊きヨーロッパは、人間の活氣ありまた自由なる精神の創造物たる『機物』の價値といふものを或る程度までは認めてゐた。けれども其れにも拘らず、物品調度に關する舊ヨーロッパの思想觀念は、やはり最近に至るまで依然として古きがまゝに殘つてゐたのである：其れが目標としてゐた所の階級は——果てしなき遊惰と長き〳〵休息との代表者達であり、其の目的とし理想としたる所は——單に皮相的なる形の上で法則まがひのものを作り出すこと、（例へば呉服屋などが所謂『新型』といふものを作り、年々段々『流行』といふものを作り出す如く）而して其の最も重要なるものとしては、世界市場の獨占であつたのだ。實に此の故にこそ、所謂『新しき』ヨーロッパの物品の『形』は依然として古きものであつたのであり、また同樣にして此の理由ありしが故に、舊ヨーロッパの『新しき』機物の中には、いつまでも安つぽき料理屋(レストラン)氣分や、浮調子なる貴婦人の化粧室氣分が脱けなかつたのである。

斯かる時に當り、今や漸くにして自己の政治的革命をも爲し遂げたる『新しきロシヤ』と、其處に於て『今日』にまで達したる人間自覺心の進化の道程には、或ひはあの廣く新しき社會團體の中に於て其の最初の活動飛躍を現ずるかも知れない。

いつのことであつたか、遠い〳〵むかし、古きロシヤの叙事詩的觀賞主義は高大なる宗教藝術を産み出した。其の宗教藝術は、自己の内容實質に於て最も民衆的なものだつたのであつて、上は王侯貴族より下は最下層の農奴に及ぶまで、ロシヤの社會のありとあらゆる階級を縱橫に滲潤した。其れは到る處に己れを求むる人々と己れを産み出す人々とを見出し、さうして擴がり方が深くなればなるほど、其れだけ益々多産的なものとなつて行つたのであつた。其れはロシヤの全國土をば、恰も白や五色とり〳〵の花咲き亂れたる野の如く、寺院を以ておほひ、其れ等の寺院や家々の壁をば聖像(イコン)を以て覆ひ、また書籍の紙面をば生き〳〵としたる宗教畫の數を以て埋めた。——斯くして其れは實に、中世紀に於けるロシヤの物質的外殼をば形づくつてゐたのである。——幾多の聖像(イコン)の堅固なるワニスと耐久性强き繪の具、寺々を建立せる石材や金屬、厚き表裝の頑丈なる木の板……等を以て、其れは今日に至るまで時の流れに反抗し、（曾て、遠き昔、其れ等諸(もろ〳〵)の『形』をはじめて創造り出したる精神をば今なほ内に潜めて强く保持しつゝある所の）其の『形』の力を以て、時代精神の進化に反抗して立つてゐる。

然し乍ら、今や我れ等の持つ我れ等の新しきロシヤは己れ自らの新たなる物質的外殼をつくるであらう。——廣く大きく人類の社會性を包容する所の外殼、科學上の新しき發見、技術上

ぬ速かなる變化に能く適應する彈性に富みながらもなほ實質の頑丈なる外殼、自己の壯健にして、日に日に新たなる身體の內に、同じく壯健にして常に新たなる精神を盛れるが如き外殼を終ひに必ずつくり上ぐるであらう。（終）

附記　著者は此の稿に筆を執ると同時に、新しい人類社會觀の立場からした自分の造形美術論の根柢を明かにする爲めに、『現代に於けるロシヤ繪畫藝術の趨勢に就て』と題する一文を草して其れをば既に雜誌『思想』の十月號に揭げた。此の稿は實に其の姉妹篇とも稱す可きものであつて、彼れの足らぬところを幾分此れが補つてをると同時に、此處にて充分論じ得なかつた種々なる點を、自分は其處に於ては可成り詳細に說くことが出來た。もし此の篇に幾分なりと興味を感ぜられた讀者諸氏が、併せて其の方の本文と附圖とを參照して下さつたならば、著者の大いに喜びとする所である。此の稿の中に於て、自分が特別に說明を加ふることなく使用した『形』、『材料』、『機物』、『形と材料との結合統一者』、『藝術』、『工業』、『建設』……等の如き言葉の意味も、其の『思想』の方の論文を見て下さればハッキリとわかる筈である。

（飜譯責任者　小野俊一）

洞庭夜話

田中貢太郎

唐の高宗の時に柳毅と云ふ書生があつた。文官試驗を受けたが合格しなかつたので、故鄉の吳に歸るつもりで涇川の畔まで歸つて來たが、その涇川の北岸に同鄉の者が住んでゐた。毅は先づ知人の許へ立ち寄り、やがて別れて六七里も行つたところで路傍にをりてゐた鳥の群がばたばたと立つて飛んだので、馬がその羽音に驚いて左にそれて走つた。そして六七里も矢のやうに行つたかと思ふとぴつたり止つてしまつた。柳毅は馬の頭を向けなほして本路に出やうとして、ふと見ると羊を伴れた若い女が路ぶちに立つてゐた。それは品のある綺麗な女であつたが、何か悲しいことでもあるのか涙ぐましい顏をしてゐた。柳

毅は磊落な思つたことはなんでも口にすると云ふ爽快な質の男であつた。

『貴女のやうな美人が、どうしてそんなことをしてゐるんです、』

女は淋しさうに笑つてから、

『私は、洞庭の龍王の娘でございます、父母の命で、涇川の次男に嫁づいてをりましたが、夫は道樂者で、賤しい女に惑はされて、私を省みてくれませんから、お父さんとお母さんとに訴へますと、お父さんも、お母さんも、自分の子供の肩を持つて私を虐待して追ひ出しました、私はこのことを洞庭の方へ云つてやりたいと思ひますが、路が遠いので困つてをります、貴郎は呉にお歸りのやうでございますが、どうか手紙を洞庭へまで屆けて戴けますまいか、』

女はすすり泣きをしながら云つた。

『僕も男だ、君のさう云ふことを聞くと、どうにでもしてあげたいが、僕は人間だから、洞庭湖の中へは行けないだらう、』

『洞庭の南に大きな橘の木がございます、土地の者はそれを社橘と云ひます、その木の在る所へ行つて、帶を解いて、それで三度木を打つてくださるなら、何人か來ることになつてをります、』

『それで好いなら、屆けてあげやう、』

女は着物の間に入れてゐた手紙を出して毅に渡した。毅はそれを腰の嚢の中に入れながら聞いた。

『貴女は何のために羊を牧してゐるんです、』

『これは羊ではありません、雨工です、』

『雨工とはどんな物ですか、』

『雷の類です』

毅は驚いて羊のやうな獸に眼をやつた。首の振方から歩き方が羊とは違つた荒荒しさを持つてゐた。

『では、これを洞庭へ屆けてあげやう、その代り、歸つて來た時は、貴女は逃げないでせうね、』

毅は笑つた。

『決して逃げは致しません、』

『では、別れませう、さようなら、』

毅は馬を東の方に向けたが、ちよと行つて振り返つて見ると、もう女の姿も獸の姿も見えなかつた。

毅はそれから一ケ月あまりかかつて故郷に歸つたが、自分の家に行李を解くなり、旅の疲勞も癒さずに洞庭へと行つた。女に教へられたやうに洞庭湖の縁を南へ南へと行つた。葉がくれに黄ろな實の見える大きな橘の木がすぐ見付かつた。毅はこれ

だなと思つたので、帶を拵へて解いた帶で橘の幹を三度叩いた。そして終つてその眼を水の方にやつたところで、一人の武士が水の中から出て來た。武士は毅の前へ來て拜をした。

『貴客は何方からゐらつしやいました、』

毅はこんな者に本當のことは云はれないと思つた。

『大王に拜謁するために來たのぢや、』

『では、お供を致しませう、』

武士は先に立つて步いて行つたが、水際に出ると毅を見返つた。

『すこしの間、眼をつむつてくださいますやうに、さうするとすぐ行けますから、』

毅は武士の云ふ通り眼を閉ぢた。毅の體は自然と動きだした。

『此所でございます、』

毅は眼を開けた。其所には宮殿の樓閣が參差と列つてゐて、その間には珍らしい木や草が花をつけてゐた。すこし行くと、大きな殿堂が來た。それは白璧の柱で、砌に青玉を敷き、牀には珊瑚を用ゐてあつた。

『此所でお待ちくださいますやうに、』

武士は毅をその殿堂の隅に連れて行つた。毅は此所はどうした所であらうかと思つて聞いた。

『此所は何所だ、ね、』

『靈虛殿でございます、』

『大王は何所にゐらるる、』

『今、元珠閣で、太陽道士と火經を講じてをりますから、すぐお出ましになります、』

紫の袍を著た貴人が侍臣に取り卷かれて宮門の方から出て來た。

『王樣だ、』

武士は周章てて走つて行つて、一行を迎へた、紫衣の貴人は靜にやつて來た。毅は洞庭君だと思つたので恭しく拜をした。

『先生が此所へ見えられたのは、わしに何を敎へてくださるためでございます、』

『私は涇川の畔で、大王のお孃さんにお眼にかかつて、手紙をあづかりましたから、それでまゐりました、』

毅は女からあづかつて來た手紙を出して洞庭君の前に置いた。洞庭君はそれを取つて開けて讀みだしたが、みるみるその顏が曇つて行つた。

『これは私の罪だ、』

洞庭君は涙の眼を毅に向けた。

『お蔭で早く判つて有難い、この恩は屹と報います、』

侍臣の一人が傍へ寄つて來た。洞庭君は女の手紙を渡して宮中へ持つて行かした。

『娘が可愛さうだ、』

宮中の方から女達の泣く聲が聞えて來た。洞庭君は周章てて傍の者に云つた。

『あんな大きな聲をしては、錢塘に知れる、何人か早く宮中へ行つて、大きな聲を出さないやうに云つて來い、』

一人の侍臣はまた宮中の方へと行つた。毅は錢塘とは何人であらうかと思つた。

『錢塘とおつしやるのは、何人のことでございます、』

『錢塘とは、わしの弟ぢや、堯の時の洪水は、あれが怒つたから出來たのぢや、』

不意に百雷の落ちかかるやうな大音響が起つて、殿堂が崩れるやうに揺ぎ渡つた。と、赤い大きな龍が火を吐きながら空に登つて行くのが見えた。毅は吃驚して倒れてしまつた。

『懼れることはない、先生に害はない、』

洞庭君は起つて來て倒れてゐる毅を助け起した。毅はやや安心したものの、氣味が惡くなつてたまらないので歸らうと思つた。

『今日はこれでお暇致します、』

『さう急がないが好い、一つわしの志を差しあげやう、』

洞庭君は饗宴の席を設けさして毅と盃をあげた。洞庭君は酒を飲みながら毅が信義を重んじてわざわざ娘の手紙を屆けてくれた禮を云つて喜んだ。

軟らかな風が何所からともなしに吹いて來て、笑聲が聞え、その笑聲に交つて笛や簫の音が聞えて來た。毅は不審に思ふて外の方を見た。澤山の女の姿が空中に見えてゐたが、その中に涇川の畔で見た彼の女の姿があつた。

『涇川の囚人が歸つて來た、』

洞庭君は嬉しさうに云つた。女達の姿は紫の霧に隱れたり見えたりしながら宮中の方へと流れるやうに行つた。

洞庭君はちよと席をはづして宮中の方へ引込んで行つたが、すぐ出て來て毅の相手になつた。紫の裳を着て青玉を持つたいかつい顏の貴人が、何時の間にか洞庭君の傍へ來て立つた。洞庭君は毅に云つた。

『これがわしの弟の錢塘ぢや、』

毅は起つて行つて拜をした。錢塘君も毅に禮を返した。

『先生がなかつたなら、女姪は涇陵の土となるところであつた、』

錢塘君は傲然として云つてから、今度は洞庭君の方を見た。

『先つき此所を出てから、巳の時に涇陵へ行つて、午の時に戰つて、歸りに九天へ行つて、上帝にその譯を訴へて來ました、』
『どれくらゐ殺した、』
『六十萬』
『稼を傷ふたか、』
『八百里傷ひました、』
『馬鹿者はどうした、』
『喰つてしまひました、』
『馬鹿者は憎むべきだが、お前もあまりひどいことをやつたものだ、』
　毅はその晩凝光殿に泊つた。翌日になると洞庭君は凝碧宮に饗宴を設けて御馳走をした。その庭には廣樂を張つてあつて、錢塘の破陣樂をはじめ樣樣の音樂を奏した。
　翌日洞庭君は新に淸光閣に盛宴を張つた。錢塘君は酒に醉つて毅に云つた。
『わしは先生に云ひたいことがある、是非女姪を家内にして貰ひたい、』
　毅は錢塘君の威壓的な言葉が厭であつた。
『私は王の剛決明直なやり方は非常に感心してをりますが、さう云ふやうな結婚は、厭でございます、これは大王の御判斷を仰ぎたいと思ひます、』
　錢毅君は自分の云つたことに氣が注いた。
『これはわしが悪るかつた、どうかこらへてくれ、』
　毅と錢毅君とはその時から知心の友となつた。翌日になつて毅が歸ることになると、洞庭夫人が潛景殿で送別の宴を張つた。其所へは宮中の者が男も女も皆出ることを許された。
　夫人の傍には何時の間にか經川の女が來て坐つてゐた。夫人は泣いてゐた。
『今日お別れして何時またお眼にかかることが出來ませう、』
　毅は錢塘君の言葉を聞かなかつたが、女と別れることは苦しかつた。毅は燃えるやうな眼をして女の方を見た。女も悲しさうな眼をして毅の顏を盜み見た。
　毅は王宮を出て歸つて來た。十餘人の者が洞庭君からの贈物を嚢に入れて隨いて來た。毅は後にその贈物を持つて廣陵へ行つて寶物の店を開いたが、瞬く間に巨萬の富を得て一大豪族となつた。
　毅は其所で結婚することにして、張姓の家から娶つたが、すぐ亡くなつたので、今度は韓姓の家から娶つたが、これも二三ケ月してまた亡くなつた。
　毅はそれから金陵に移つたが、鰥暮しでは不自由であるか

ら、范陽の盧姓の女を迎へた。見るとその女の顔が洞庭の龍女に似てゐた。毅は昔のことを思ひだして女に龍女の話をして聞かした。一年あまりするとそれに子供が生れた。その子供が生れて一ヶ月ぐらゐすると女は毅に向つて云つた。

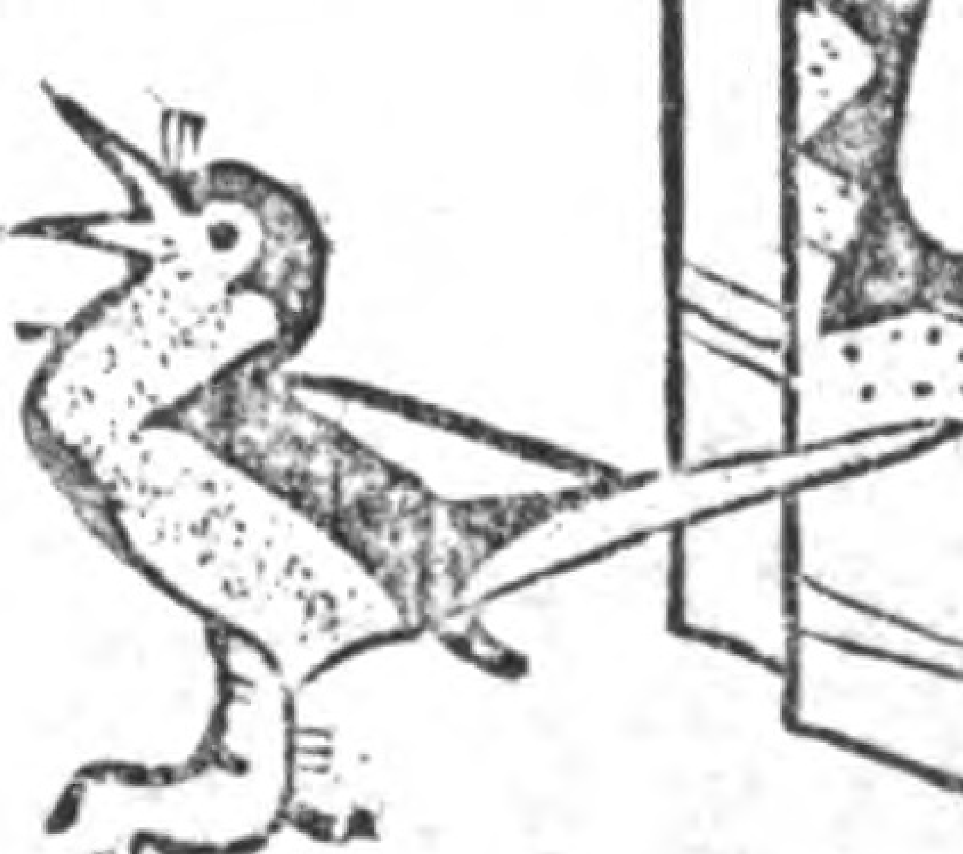
『私は、洞庭の女でございます、子供が生れたから本當のことを申します、』

其所で毅は女と連れ立つて洞庭へと行つた。後、毅は南海に移つて其所に四十年ゐたが、容貌がすこしも變らないので、南海の人が驚いた。開元になつて玄宗皇帝が神仙のことに心を傾けて、道術を聞きに來たので、煩さがつて洞庭へ歸つて行つた。

開元の末になつて、柳毅の義弟の薛嘏が京畿の令となつてゐたが、東南に謫官せられて洞庭湖を舟で通つてゐると、不意に水の中に碧碧とした山が見えて來た。船頭は彼所には山がないと云つて怪しんでゐると、一艘の綺麗な船が嘏を迎へに來た。嘏がその船に乘つて山の麓へ行つてみると、宮殿があつて、その中に毅が笑つてゐた。毅は嘏に五十粒の藥をくれて云つた。

『これを一粒飲めば、一年命が増す、これを飲んでしまつたなら、また來るが好い、人間の世にをつて、苦しむには當らない、』

其所で二人は酒を飲んで別れたが、その嘏も後に行方が判らなくなつてしまつた。



死を念頭に置く生活 死を念頭に置かぬ生活

「死」の現象に現はれた「自然」の精妙な技巧

長谷川　如是閑

（一）

生と死との關係は甚だ微妙なもので、人間の場合にも、之を主觀的に觀るものと、客觀的に觀るものとは、非常な違ひがある。主觀的には、死は自分の最後である。自分といふものは元來生に立脚して居るものだから、死は何うしても自分に對して最も恐ろしい敵のやうな地位に在る。それは何人に取つても嫌惡であり、恐怖である。それが永久に來ないことは、自分に取つて最も望ましいことのやうに思はれる。之に反して、客觀的に觀ると、生活といふことが動的性質を有つた進化過程である限り、永久の生といふことは考へられない。尤も、永久の生が考へられないといふことは、人間に取つて極めて絶望的のことなので、人間は常に永久の生を想定する。併しこの觀念上の永久の生活は、所謂生死の問題を離れた思惟の上の事柄なので、暫く問題外とする。進化の過程の上では、死と生とは生物の生存に取つて互助的の作用を働いて居るのである。死が無かつたならば、生は不可能になる。それは生が無ければ死の無いのと同じである。宇宙を生の連續と觀る事が出來るならば、同時にそれは死の連續であると觀ることが出來る，創造は生の過程であると觀ることが出來ると同時に、死の過程であると觀ることとも出來る。流れて居る水は、水が去つて行くのだといふ事も出來れば、來て居るのだと云ふことも出來る。進化とは、個體の

爲めに個體を破壞することだといふ說明もあるが、それは死の側から進化を觀た考へ方である。この意味で死は生命である。

生死のかやうな地位は、自ら生活の道德を作り上げる。常識的には生は善いもので、死は惡いものと思はれて居るが、道德上の意識では必しもさうではない。死に對する理解といふことが道德上また宗教上の重大な目的となつて居るとは、死が進化の上で占めて居る正當の地位を、信仰的に承認しようとして居るのである。この考へ方が、思惟の長所であり又短所である所の觀念的昻揚によつて、遂に死を讚美するやうな哲學や道德を生むに至るのである。思惟の生活が最も發達して居たといふ希臘に於いて、殊にさうであつた。「神に愛せられる者が早く死ぬ」といふ希臘の諺がある。プラトーンは、死は凡ての感覺の消滅だから、夢の無い眠のやうなものである。吾々のみならず、波斯(ペルシア)の大王と雖も、苦しい晝よりは、樂しい夜の方を好むであらう、と云ふやうな意味のことを曰つて居る。從つてストア學徒などが、死について極端な考へ方をしたと云ふのは、當り前の話である。希臘の屬邦のスレース人は、人の生れた時は弔詞を述べて、死んだ時には慶びを述べる習慣だつたと云ふ。古來哲人と云ふやうな人々が、死を忌むべきものと考へないやうに人々に宣傳するに苦心したものである。

人間自身がさういふ風に、死に對する嫌惡を調和しようと努力したやうに、自然も亦死を人間になるべく嫌ひにさせないやうに努めて居ると想はれる。

人間が死ぬのに、どれだけの死に方があるかと云ふのに、通常、自然の死と偶然の死との二つに分けて居る。自然の死は老衰の死であるが、自然は人間が老衰の死に襲はれるやうになるまでには、巧みに其人から、死の恐怖を取去つてくれる。老人は生の欲求が次第に薄らいで、やゝ信仰的の傾向の老人は、却つて死を憧憬する心理狀態になる。さうでないものも、死を痛ましく感ずる心理を失つて、生理的にも心理的にも、苦痛なしに死んで行く。自然の此の工夫は誠に哲人などの理窟攻めと違つて、萬人を承服させて、死の生物學上の必要を人々に納得させて居る。そればかりではない、所謂偶然の死についても、自然はかなり工夫を凝らして居る。

偶然の死は、病死、災害に由る死、其の二つが無意識的のそれであるが、更に犧牲的の死がある。之は意識的の偶然の死である。是等の本人の壽命以外に來る當然不服であるべき死についても、自然はその不服を巧く緩和させて居る。病死の場合を考へて見ても、生理的苦痛が非常に強い。その爲めに却つて死に對する心理的苦痛の起る暇が無い狀態である。急病の如きは

殊にさうで、常人が死を問題としないうちに死んで了ふ。之は何でもないやうであるが、なかく巧みな組立てであつて、造化の精妙を思はせる。少し長い肺病のやうな病氣になると、その初期には死に對する心理的苦痛が猛烈に襲つて來るが、それはきつと版で捺したやうに、死に對する無感覺に變じて行つて、長い病人は大抵所謂平和の眠に就く。又災害に由る死でもその通りで、出來事が起らない間、即ち生が無事に進行して居る間には、かなり死の恐怖が強いが、一度死の過程に突き入らうとする刹那に却つて死の恐怖は消えてなくなる、例へば高い所で危險な作業をして居る人は、其間時々死の恐怖に襲はれるが、一旦足でも踏み外して墜落すると、意識は溷濁して、心理的の苦痛は混亂の間に消え去つてしまふ。それが尚ほ續くと、全く意識を喪失して、心理的にも生理的にも苦痛を感じないで死に到着する。この過程に於ける自然の巧妙な手續きには感服しない譯には行かない 更に犧牲的の死に於ては、永い間生死の奮闘が心理的に行はれる。然し之に對しては、その犧牲の死は個體を滅す事に依つて種を保存すると云ふ働きなので、その作用が道德的意識に表はれて、死の恐怖は道德的に打消される。だからこの場合は、高い所で仕事をして居る場合と違つて、生が進行してゐる間に、もう死の恐怖が減じられて居る。さうして死に突き進む刹那に於いては、本能的に死に對して無感覺になる。自然が生存の上に缺くべからざる「死」と云ふものを人間に選び取らせるについては、それほど苦心をして居る譯である。自然は生が大切である爲めに、極端に生に執着せしむるの心理を人々に與へて居るが、同時に、死の必要に對しても、それに對する心理的調和を工夫して居る。

（二）

或る科學者は、凡ての生物は他の生物の爲めに滅びて行くといふやうなことを云ひ、又或る哲學者は 個體は個體の犧牲に於いて構成されるといふ風なことを考へたが、それは生物學的に證明されることなのである。一切の生物無生物は、互の生存を互々の犧牲によつて組立てて居ると云つてよい。牛が草を食ひ、人が牛を食ふといふ關係から云へば、人と牛との間に關係があるばかりでなく、人と草との間に關係を有つことになる。その意味から一切のものが互に關係を有つ。而かもこの關係はその一方の個體の破壞が、他の個體の生存に役立つといふ意味に於いてである。同じ種に屬する生物の間に於てもその通りである 親は子供に生を與へる爲めには、自分の生を滅却又消滅させなければならない。その子供の生が發達すれば、その親に

は屹度死が來る。だから種其物から云へば、親の死は子の生を作り上げる必然の過程であつて、その價値は生と同じ度合にある。だから、種の上から云ふと、その種の生命が保障されなければ、決して死は來ない。之を言ひ換れば、個體に死が來る時は、種に生が持ち來たされる時である。だから死は種に取つては生である。死と生とがさう云ふ關係にある生物だけが永く保存されるのである、

其爲めに面白い現象がある。それは生物の死は生が保障されない間は決して來ないと云ふ事である。非常に容易に死んで了ふ生物は、人間の眼からは甚だしく種の生存が脅かされて居るやうに思はれるが、實はその反對で、容易に死ねば死ぬ程、自然はその生物に對して、その種を保存するに足るだけの繁殖力を與へて居る。蜉蝣の生命は、命の短い例に引かれて居る通りであるが、この蟲が一度に何萬となく死ぬ時には、それに何百倍する繁殖を遂げるのである。若し風や雨が之に偶然の死を與へなかつたならば、忽ち地球は蜉蝣の爲めに蔽はれる筈である。百分の一吋の大きさの微生物(インフエーソリア)は、若し偶然の死に遭はないで、順當に二年間繁殖したならば、現在の天文學の知識が達し得る限りの宇宙の空間をこの蟲で埋めることが出來るといふ計算を、或る生物學者がして居るが、さうかも知れない。鼠算と云ふ言葉のある通り、鼠の繁殖は劇しいことになつ居るが、之もその生が偶然の死に脅かされる爲めに、助かつて居るので、若しそれが無かつたなら、一夫婦が四年間で百萬匹になると云ふ勘定である。鳩のやうなものでも、北米の或無人の地方に往くと、二百何千哩と云ふ廣い地面が鳩で一杯になつて、數へたらば二十億以上になるだらうと計算した人がある。而もこの鳩は豆だとか虫だとかを食はなければ生きて居らないのだから、その地方には、この二十億の鳩に食はれるだけの物が鳩の繁殖力よりも何億倍も烈しい繁殖力で、繁殖して居るに違ひない。この鳩が一日に五勺の豆を食ふにしても、十萬石の豆を食ふ。一年に三千萬石の豆が要る譯で、優等生物を生かす爲めに犧牲となる所の個體が、如何に豐富でなければならぬかと云ふことがそれで分る。而してその犧牲は即ち個體に取つては「死」である。個體の生存の爲めには、個體の死が如何に必要であるかがそれで分る。

之が又心理的に精妙の關係を作つて居る。それは何であるかと云ふに、澤山の死が要求される個體程、死に對する苦痛が少いと云ふことである。澤山の死が要求される時に、その殺される個體が、凡て死の苦痛を心理的に感じたらば、大問題が起る。何千萬匹の蟲が鳥などに食はれることを心理的に苦痛に感

じたならば、諸の社會に絶えず危險な社會問題が起つて居るに違ひない。で自然は死の心理的苦痛を死の分量と反比例にして居る。全體に死の數が多ければ多いほど死の苦痛が少い。その極端な例は、人體とそれを組成する細胞といふ個體との關係である。人間の個體は蜉蝣や鼠に比べると死の總量が遙かに少いので、死の心理的苦痛は非常に強い。所がその人體を組成する細胞は、四百兆の個體である。一秒に一つ宛數へると、千三百萬年かゝると云ふ。從つてこの細胞は日々莫大な數が殺されて行くのである。所がこの個體の死には全く苦痛が無い。若しこの個體が主人公に苦痛を訴へた日には、所謂新陳代謝の過程は、生理的にも心理的にも、一大苦痛となつて人間に現はれることであらうが、それが無いので助つて居る　つまり絶對に要求される事は、絶對に承認されると云ふ微妙な自然法則である。

（三）

絶對に要求される事は絶對に承認されるといふ法則を證明して居るのは、初めに云つた、死に對する人間の感覺もその一つであるが、此法則を圓滿に進行させる爲めに、自然がいろ〳〵骨を折つて居ることが見える。生理的苦痛と心理的苦痛の關係を觀察すると、そのことがかなり能く認められる。生理的苦痛が生物に與へられたのは、個體の破滅を招くやうな障害に遭遇した時に、個體をしてその障害から逃れしむる爲めなのである。高い樹が仆れると、その下に居る人間は必ず逃げ出す。その恐怖が生の障害から個體を脫せしめようとするのであるが、逃げ損つてその柱に打たれた時に非常の苦痛を感じるのは、その傷害の狀態が個體を危險に陷れることの警鐘であつて、それによつて個體は生を安全にする行動を取るのである。若しこの苦痛が無かつたならば、個體は知らない間に滅ぼされて了ふ。個體がそんな風に滅ぼされることは、種に取つての生存の危險なので、そこで個體に苦痛が與へられて居るのである。從つて個體の破滅がそれ程直ちに種の危險を惹き起さない場合には、その個體の苦痛も烈しくない。換言すれば、個體の苦痛の度合は、個體の破滅が種に惹き起す危險の度合と正比例するのである。だから非常に繁殖力が強く、個體の破滅がさうすぐに種の危險を惹起さない生物になると、苦痛の感覺がそれに應じて次第に衰へて行く。繁殖力の少い高等生物ほど、苦痛の感覺が鋭いのは、彼等の種の保存が、非常に鋭敏な心理的感覺に依賴する度が烈しいからである。人間のやうな生物になると、生物學的には何等の障害とも思はれないことに、烈しい心理的苦痛を感じる。そしてその心理的苦痛は、結局生理的苦痛に轉じて、病

氣や死の原因となる。國事を憂へて憤死すると云ふやうなことが出來するのである。人間は種の生存が危害を受ける時に、その危害の意味を頗る廣く取つて、數年先きのこと、又は數千里を隔てたことに對して苦痛を感じるのは、人間の複雜な生存が、さうして初めて維持されるのだからである。之に對して蛙のやうな、社會が簡單で、繁殖の容易な生物は、脚を身體から捥ぎ取られてもその脚が動いたり、全體の皮を剝がれても平氣で游いだりするほど、感覺が鈍くつて濟むのである。だから自然は苦痛の感覺がその生物の種の生存に絕對必要でない場合には、決してそれに死の苦痛を與へないと云へる。從つて自然は必要に應じて出來るだけ無用に死の苦痛を與へないやうに、巧みに處理して居ることは、初めに云つた通りであるが、この自然の工夫は、下等の生物の間にも、非常に巧妙に工夫されて居る。例へば他の生物を餌食にする生物に取つては、他の生物の死が、その肉食に絕對必要なので、この場合必要から云へば、食はれる方の生物には、全然死の痛苦の無いのが望ましいので、自然は出來うる限り、さう云ふ手續きを取らうとして居る。生物が互に殺し合ふ場合に、お互に死の苦痛を少くするやうな、武器なり手段なりを持たされて居るのはその爲めである。例へば、虎とか獅子とかにある、猛惡な牙や爪は慘忍の武器のやうに見えるが、その實、慘忍の度を減ずる武器なのである。氣に敵を殺す方法は、死の苦痛を減ずる一つの手續きなのである。蜂の針、蛇の齒の毒のやうなものも、結局は死の苦痛を減じさせる用心である。人間が文明の進むに從つて次第に、殺人の武器を有力なものにするのも、無意識的に已むを得ない死から苦痛を取去る工夫をしてゐるのである。野蠻人が魚の骨で人を殺すのは、非常の苦痛を對手方に與へるが、文明人の日本刀のやうな銳利な刄物、又は鐵砲の如きは、遙か野蠻人の武器よりも苦痛が少いのである。で死の恐怖を惹き起させやうとする場合には、意識的にその反對のことをやる。維新前の鋸挽きの刑罰は、竹の鋸で刀で斬つた傷痕を他人に勝手に挽かせるのである。又オーストラリアの土人の刑罰には、足を全くサヽラのやうにする慘刑がある。之は自然の死の手續きが苦痛を伴ふことが少いので、人爲的に苦痛の死を與へることによつて、制裁の目的を達しようとするのである。それほど自然は死と苦痛とを別々のものにしようと苦心して居るのである。實際苦痛は生の現象であつて、死に伴ふ現象でないと云へる。

（四）

死は種の生存に缺くべからざる過程であると云ふことは、嘗

に種を存續せしむると云ふのみではない、種が次第に進化するのにも、死の現象を措いて、それを可能にする途は無い。個體の生命がその個體の上に連續して居る間は、その個體には進化は來ない。進化はその個體が死によつて殘した生活體が發展した場合に起るのである。人間の進化は、親が子になり、その子が親となつて殘した子供と云ふ順序で向上して行くのであつて、彼等個體の一代は各限定されて居る。で、生物學者が種を進化せしめやうと云ふ場合には、一つ個體の生命を續けさせることによつてそれをしようとはしないで、その個體から生活體を取上げて、その子供を守立てることによつて進化させようとする。馬や豕を改良させるのも皆さうである。又植物の場合でも、一つ木を育てゝ居る間は、その木は改良されない。接木とか芽蒔しとか實生とかいろ／＼の方法で、母體を捨てゝ初めて向上進化が得られるのである。それは謂はゞ死の人爲的促進である。人間の生活に於ても、さういふ現象が全く無いとは云はれない。原始時代に於て、老人を殺害する風習があつた。又今日までも老人を引退させる隱居制度とか停年制度とか云ふいろんな方法がある。之は個體の死が種の向上に必要である事を示してゐる一例である。

かやうに生死の價値が、生物學的に何れを重しとし、何れを輕しとする事が出來ないといふ事實は、人間の心理的生活に表はれて、生死一如といふやうな道德的情操を生んだ譯である。

此生死を同價値に置く人間的感情は、その哲學を作り、その道德を作る哲人達は、無意識にやつて居るのであらうが、頗る巧妙に人間の生物學的生存を心理的に圓滑にするはたらきを務めて居る。例へば永遠の生命といふ人間的感情の發生したのももともと個體の生命が生物學的に限定されて居る事實が、生に立脚する個體に取つて非常に不安なとである爲に、生を悲觀する傾向を生じ、その悲觀の爲めに、種の保存が危險を感ずるといふ事實を防ぐ爲めである。それには何かの意味で生が永遠であるといふ信仰を有つのが、考へらるゝ最も良い方法である。人間は自己の種が生に對する自分の不安の爲めに脅かされるといふことを、自分から調節しようとして、右のやうな觀念的傾向に赴いた譯である。所がこの生の永遠性はもと／＼生に對する執着から發したものであるから、死を嫌ふ心理狀態であるべき筈だが、死を嫌ふといふことは、生物學的に矛盾を惹き起すので、人類はそこで自家調節を行つて、生の永遠性が少しも死を嫌惡することにならないのみか、却て場合によつては死を憧憬する位の心理狀態を喚び起すやうな過程を取つたのである。生物學的に限定された生が、永遠であるといふ信仰は、要するに

生の固執ではなく、寧ろ死の承認である。即ち死そのもののうちに生の永遠性が流れて居るといふのであるから、寧ろそれは死が事實上成立つた時から發展するやうな過程である。死そのもののうちに生の永遠の過程が進行しつゝあるといふ信仰程、死を觀念的に美化したものはない。結局その信仰も死の讃美に終るのである。

生死一如といふやうな信仰はかやうにして、生の固執よりは寧ろ死の承認を意味することになつて居る。生死の道德が常に人間を生の味方たらしむるよりは、寧ろ死の味方にして居るのは 如何に死が生活の上に重大なる意義を有つて居るかを思はせるのである。

（五）

更に生物に於ける化學的過程に移つて考へて見ると、一層死の重大さが思はれる。それは甚だ複雜な問題であるが、手取早く云へば、生は化學的靜態（アナボリズム）であつて、死は化學的動態（カタボリズム）であるとも考へられる。前者は化合作用であつて、後者は分解作用である。で人間が榮養を攝り、個體を作上げる時には、この二つの作用によつて居るのであるが、その人間が仕事をするとか、戰爭をするとか、物を考へるとか凡て人間的活動又は動物的活動と云はれて居る一切の活動をする時にはその人間のうちにある細胞は突然急劇な勢で破壞されて行くのである（分解作用）。座つて食つて行けば肥るが、右のやうに動けば瘠せる。それは人間のうちある個體がその活動の犧牲となつて殺されて居るからである。即ち個體が死の過程を取る所の、分解作用が人間の活動 絶對必要の働きなのである。言ひ換れば、個體の死が個體の活動に絶對條件なのである。個體の死が無ければ活動が起らない。それは丁度兵隊が死なければ戰爭が無いのと同じである。人間的活動を戰爭と見るゝ、個體の破壞は兵隊の戰死である。それがなければ活動があり得ない。

人體に於て右のやうに行はれて居る化學的作用は、社會的にも同じやうな過程を取らざるを得ないのであつて、比喩的に云へばそこに一つの社會化學が存在する譯である。そこでは社會的活動、即ち種の進化を持ち來す集團的活動が行はれて居るのであるが、その活動に於いて個體はどうしても犧牲的地位に在ることを免かれない。個體が如何に自己を發揚しても、結局その個體には死が來る。而してその死によつて集團の進化があり得る。如何に立派な個體でも、永遠に生きて居られては、社會の進歩を妨げるに定まつて居る。で、進化の劇しい社會程、個體の新陳代謝が劇しい。停滯した太平の世の中では、比較的

老人が仕事をして居るが、進化の激烈な革命時代に於ては、老人の捨てられるとは極めて早く、新しい個體、即ち新しい人々が盛んに活躍する。それは人體に於て運動の劇しい時に、細胞の新陳代謝が劇しくなるのと同じとなのである。個體の死は之を要するに人間的進化の根本條件である。で、一切の人間的道德がこの根本條件に適應すべく形造られて居るものは當然である。

今日の生物學者のうちには、往々誤つた應用方法によつて、早急に科學の思想を社會的に利用しやうとする傾きがある。例へば、個體の生存は、種の保存の爲めの犠牲であるといふ事實の發見から、今日の制度（習慣や法律や道德や）が私共に要求する犠牲を盲目的に承認しなければならないといふやうな思想を構成したがるのである。然しそれには種といひ個體といふ科學的範疇は社會の現實の事實の上で何を意味してゐるかを正確に知らなければならない。今日の概念が作り上げてゐる社會的の「種」は、果して生物學上の「種」に該當するや否やといふ困難なる事實上の判斷を必要とする。生物學的には個體は種に盲從することになつてゐるが、社會的には人間は決して國家や社會に盲從しなければな　ないことにはなつてゐない。それは、概念的に構成された國家とか社會とかいふものが、必ずしも、（現實の科學的事實の上からは）個體維持の過程としての「種」に該當してゐないことが多いからである。此の現實の事實を見落して、科學の法則を、盲目的に社會に利用しやうとするのは、丁度昔の軍國的大名が、死を輕んずる觀念的傾向を利用して、その大名の爲めの外、何の役にも立たぬ討死を奬勵したのと同じである。人間は「死」の過程について、科學的現實を捉へないと往々無駄死にをする。

對死管見

水野廣德

一　人生の意義？

靈魂果して不滅なるや否やは哲學上並に宗教上に於ける難究難解の問題にして、常識に生くる凡俗の僕等には判らない。玆に死と稱するは專ら肉體的生理的の意味であつて、心靈的哲理的の意義ではない。靈魂の不滅が若し明確に實證せらるるならば、死に對する人間の恐怖は著しく減ぜられ、生に對する人間の道德は著しく進步するであらうと思はれる。併し遺憾ながら今の人間の頭は其處まで進步して居ない。

凡そ死なるものを思想的に知るには、先づ生なるもの〻意義を了得することが必要であると思ふ。死が、恐るべきものであ

るか、悲しむべきものであるか、將た又祝すべきものであるか歡ぶべきものであるかは、「人生の意義」を如何に解釋するかに從つて決する問題である。一部藝術家の言ふ如く人生を以て歡樂と見れば、死は恐るべく悲しむべきものである。之に反し一部宗敎家の說く如く人生を苦惱と見れば、死は寧ろ祝すべく歡ぶべきものである。然るに人生の意義なるものは、古來幾多の賢哲に依つて硏究せられたるも、今以て明確なる解釋を發見しない。幸に人生を悟了し得たる人ありとするも、其の意義たるや其の人限りに通用するもので、之を以て萬人を律することは出來ない。殊に從來多く唱へられたる人生の意義なるものは、道德若しは宗敎上の功利主義に立脚し、哲理の上に根據を有して居ない樣に思はれる。旣に生の意義が不可解なる以上、死の意義も亦不可解たるを免れない。

併しながら吾人の短き體驗と、平凡なる實感とに照らせば、人生は縱令歡樂にあらずとするも、吾人は少くも歡樂を求めんと努めつゝある。又縱令苦惱にありとするも、吾人は少くも苦惱を脫せんと努めつゝある。故に若し死に依つて生よりもヨリ以上に歡樂を求め得るならば、死は寧ろ望むべきである。心中の如きが即ち夫である。熱愛の頂點に達したる時、多くの人は、生きて愛の斷絕を悲まんよりも死して愛の繼續を撰ぶであらう。又生に依つて苦惱を免れ得ざる時、死に依つて解脫を求むるであらう。貧の自殺の如きが即ち夫である。貧困の窮極に陷ゐりたる時、多くの人は生きて苦しまんよりは死して安んずることを欲するであらう。併しながら兩者の場合に於て死に對する觀念或は死に對する希望は全然正反對である。前者は死に依つて生前の歡樂が繼續せらるゝものと信じ、後者は死に依つて生前の苦痛を免れ得るものと信じて居る。是等の非常特別の場合を除き、人生の常態としては生を愛し死を惡むが人間の普遍性である。自由意識を有する禽獸蟲魚が生を愛し死を恐るゝは素より、無心の草木までが肥地に向つて根を延ばし日光に向つて枝を張るのも、悉く是れ生に對する愛著と死に對する反抗とである。左れば總ての生物は必ず死の運命を有せると同時に死を惡み恐るゝの天性を具へて居る。

二　文明と死

生物に死の運命あればこそ生に愛着する。生に愛着すればこそ、生を充實せんが爲めに優者たらんことを力める。更に生物に死の運命あればこそ死を恐れる。死を恐るればこそ、死に抵抗する爲め强者たらんと力める。生物が優者たらんとし、强者たらんと努力するが爲めにこそ、生物の進步があり發達があ

る。而して生物の此の努力は、其の生存意識（慾）の大小に從つて强弱の差がある。卽ち生存意識の大なる動物は生存意識の小なる植物よりも强く、生存意識の最も大なる人間は、生存意識の比較的小なる他の動物よりも强い。更に同じ人間に在つても、文明人は野蠻人よりも生存意識が大である。從つて文明人は生に對する愛着と死に對する反抗が野蠻人よりも强烈である。是れ文明人は野蠻人よりも、生を充實し生を享樂することが大にして、生の價値を認めることが强き爲めであらう。之を以つて一般論としては生に愛着するは文明人の特徵である。死を恐れざるは野蠻人の證據であるとも言ひ得る。

生に對する愛着が果して文明人の特徵であるならば、今日文明を以て誇る歐米人までが戰場に於ける戰士の死を稱揚讃美するは何故であらう。是れ今日の歐米人が尙ほ未だ野蠻の域を脫せざる證據である。元來戰爭なるものは純人道上より見れば蠻的行爲である。蠻的行爲を遂行する爲めには蠻的手段を要す。蠻的手段を是認する爲めには蠻的道德を要する。而して道德は必ずしも眞理ではない。唯人間が時代思想に基いて、國家生活、社會生活の爲めに便宜的に設けたる慣習に外ならない。左れば戰場に於て戰士が死を恐れざるは、縱令其の動機が責任觀念に出づるにせよ、或は名譽慾に出づるにせよ、畢竟する處野蠻時代の蠻的道德に捉はれたる蠻的心理である。とは云へ、吾人は今日猥りに戰場に於ける勇士の死を非難し攻擊するものでない。戰爭の尙ほ根絕せざる現代の如き野蠻時代に於ては、國家生活、社會生活の爲め、正當防衞の手段として蠻的道德を便宜とし且つ必要とすることを遺憾ながら承認せざるを得ない。吾人は蠻的道德を攻擊する前に、先づ野蠻時代を破壞することが必要である。

之を要するに、文明の進步するに從ひ、人間は益生を愛し死を恐るゝの觀念を强からしむるものであることを疑はない。卽ち生を愛するは文明人の誇である。死を恐れざるは文明人の恥である。一國の法律が幾干程度に國民の生命を擁護するかを見れば、略ぼ其の國の文明の度が判斷せられる。不法不義殘忍非道なる監獄部屋とかが默認せられたり、演說會場に於て辯士の安全を保證し得ずと公言する如き官憲を有する國は決して文明國とは言へない。社會道德が幾干程度に自他の生命を尊重するかを見れば、略ぼ其の社會の文明の度が推知せられる。二た言目には國粹の出刄が飛び出したり、民衆運動の度每にサーベルが鞘走しる如き社會は尙ほ野蠻の域を脫しない。

日本の舊き軍人達は、日淸、日露、日獨と戰爭を經る每に、日本の兵隊は弱くなると、常に憤慨悲觀して居る。自分の見に

依れば、是れ日本人が弱くなつたのではく、日本の文明が進歩して、國民が道理に目覺めかけて來た爲めであると思ふ。世に文弱と云ふ語がある。普通悪しき意味に於て用ゐられて居る。凡そ文明が進歩すれば、人間は事物の正邪曲直、是非善悪を道理に從つて判斷するに至り、自ら死を恐れざる蠻的爭鬪心を消磨するは免れ難き數理である。凡そ人間界に於て蠻的爭鬪の最大なるものは戰爭である。而して戰爭の目的を達成する爲めには戰士をして死を恐れざらしむることが極めて必要である。故に戰爭本位より論ずれば、文明は慥に人間の爭鬪心を弱からしむるものである。戰爭を以て人生の總ての如く信ぜる一部の軍人より見れば、人間をして死を恐れしむる如き文明の進歩は誠に呪ふべきものであるであらう。唯之が是非に至りては、人間は戰爭をして塀の埋草となる爲めに生れて來たのであるか、或は又生を完成して理想の天國を形作らんが爲めに生れて來たのであるかに依つて決する問題である。

三　原氏と乃木大將の死

生に愛着し死に反抗するは萬有生物の天性である。就中文明の程度高き人間に於て、此の天性は最も强烈に發達して居る。而して生きんが爲めに食ふ一般生物界に於ては、生存其のものが生に對する唯一で而かも全部の目的である。息が通つてヒダルくなければ、生の目的は達せられるのである。故に此等の生物は自ら生を傷ふことは爲ない。即ち自殺なるものがない。然るに食ふ爲に生き、働く爲めに生きる人間界に於ては、單なる生存のみが生に對する目的の全部でなく、意義ある生を營まんとする欲求がある。故に時としては人間各自の個性に刺戟せられ、周圍の境遇に促され、無意義の生よりも有意義の死を望むことがある。即ち人間は一面に於て强烈に生を愛し死を恐るゝと同時に、他面に於ては死が生よりも價値ある場合には、生を捨てゝ死を取るの理知を有して居る。凡ての生物中、自殺を行ふものは恐らく人間ばかりであらうと思ふ。

中岡青年の義憤の刄に殪れたる前首相原敬氏は日常死を覺悟し、毎年正月遺言狀を書いたとか言ふことである。一國の首相たる人の責任は重い。種々の意味に於ける政敵も少なからざるは事實である。併しながら原氏が常に死——暗殺——を覺悟したる心理を考ふるに、彼は日本の國民性が頗る兇險なるを知れると共に、自己の行爲が時としては死に價するものと自覺せるが爲めであると思はれる。原氏に好意を有せるものは、彼が死を賭して尙ほ所信に忠なりしを擧めて居る。原氏に反感を抱けるものは、横暴彼の如きに對し死は天の制裁であると詐つて

居る。其の孰れが當れるやは知らぬが、原氏をして死を覺悟せしめたる心理は、彼の爲したる政治が、彼自身の意志に發したると、周圍の環境に據なくされたるとを問はず、兎に角彼としては斯く爲して死ぬることは、斯く爲さずして生きることよりも價値ありと認めたる爲めなることは疑を容れない。即ち彼が死を覺悟したるは、死を恐れざる變的心理の爲めでなく、生と死とを天秤に掛けたる理知の發作である。

先帝に殉したる乃木大將は至忠至誠の人にして、思想の上に於てこそ贊否はあれ、其の人格の高潔に對しては何人も疑を挾まぬであらうと信ずる。大將が殉死を敢てしたる心理に就きては猥りに他人の窺測すべきでないが、惟ふに、先帝を追慕し奉る切なる哀愁の情意に出でたるか、或は此の濁れる世を憤り心の苦悶を逃れんが爲に自ら生を捨てたるか、或は又世道人心の頽廢を歎き一死以て國民を警醒せんと欲するに出でたろか、其の何れかに歸するであらう。而して其の何れにしても大將の場合に於ても亦、先帝に殉死することが、碌々として生を貪ぼるよりも、國の爲め或は自身の爲め、大なる價値があると信じたからであらう。素より功利の爲めでなく至誠に出でたるを疑はない。

原氏の場合に於ては、彼は常に死を覺悟して居たかも知れぬが、死を決しては居なかつた。東京驛頭匕首一閃の瞬間までは、彼は毫も死を豫期して居なかつたであらうと思ふ。從つて死に對する彼の觀念は頗る空漠たる物で、彼の覺悟は傳染病者に接する看護婦の覺悟程度に過ぎなかつたであらう。之と異り乃木大將の場合は啻に死を覺悟したるばかりでなく、死を決心して居たのである。從つて死に對する大將の觀念は極めて深刻であらねばならぬ。先帝崩御の日より大葬の日に至る迄一年有餘の間、大將は日夜に死を考察したのである。之を思ふ時大將の死に對して一層の嚴肅味を感ずる。

五　死の軍人心理

戰場に於ける軍人が死を恐れざる心理は、前兩者とは較や趣を異にして居る。「男兒軍に從ふ生還を期せず」などと言ふが、如何に國家の爲めとは云へ、軍人とても徒に海底の藻屑となることを望むものではない。無名の墓標の主となることを欲するものではない。彼等の最大の希望は、赫々たる武勳の擧を擔ふて無事凱旋せん事である。此の最大の希望を遂せんが爲めに、彈丸雨飛の間を勇敢に突撃するのである。風浪怒號の間を猛烈に突進するのである。唯此間に於て運の惡き者が飛彈に打たれ、怒濤に沒はれ、名譽の戰死者となつて靖國神社に祭られ、運の好き者が名譽の凱旋者として胸間に勳章を飾るのである。彼等は

原式に或は死ぬかも知れぬと覺悟はして居るが、乃木式に必ず死ぬとは決心して居ない。多くの場合に於ては寧ろ彈丸なるものは決して中るものではない位の樂觀的考へを持つて居る。彼の所謂決死隊と稱する比較的冒險なる特別任務に從事する者と雖も、鐵砲丸の如く百人が百人、盡く生還せぬものと豫め相場が定まれば、之を志願するものは極めて少數であらう。百人中二人でも、三人でも生還する望みあればこそ、冒險兒が競つて之に應ずるのである。而して何れも皆此の二三人の生還者中に己の加はらんことを希望して居る。否な寧ろ之に加はるものと自ら期して居る。日露戰爭の際屢々行はれたる決死隊行動に照らして、此の間の消息を知ることが出來る。大冒險兒の多くは常に大野心家である。軍人は名譽慾の爲めに、投機者は金錢慾の爲めに。併し敢て之を非難するの意ではない。

併しながら軍人が戰場に於て死を輕んずるは、必ずしも名譽慾の爲めのみではない。戰酣にして兩軍近く相見ゆるや、彼我の軍人は燃ゆるが如き敵愾心に鼓舞せられ、制し難き群衆心理に刺戟せられ、加ふるに砲煙の迸り、砲聲の轟き、銃劍の閃き、突喊の叫びに、獣的爭鬪心は愈が上に挑發せられ、生死を念頭に置かなくなる。熱し易き日本人の如きは演習の際に於てさへ、往々假設の敵兵を突き殺すことがある。是れ熱血的感情性に富む日本の軍隊が突撃に勇なる所以である。之を以て軍人をして死を鴻毛よりも輕からしむる爲めには、彼等の敵愾心を最高度に鼓舞することが必要である。彼等の名譽慾を最强度に挑發することが必要である。加ふるに群衆心理を巧みに刺戟せねばならぬ。左れば敵愾心の鼓舞と名譽慾の挑發とは軍隊教育の二大綱目である。然るに人間の智識が進歩し、思想が發達するに從ひ、從來の如き低級なる敵愾心や淺薄なる名譽慾は漸次衰退するを免れない。今や軍隊教育の一轉期である。勳章を見せびらかして軍人に死を要求する時代は既に過ぎつゝある。

戰場に於て軍人の死を促がす他の因由は戰爭の苦痛である。生米を咬り、雨水を飲み、困憊疲勞の身を以て、或は炎天に峻嶮を攀ぢ、或は寒中に氷水を渡る苦痛は、意志の强からざる軍人をして生よりも寧ろ死を希はしむるに至るものである。獨逸の或將軍の如きは、戰場に於て兵士の給養を豐にし、生活を安易ならしむるは、軍隊の士氣を緊張せしむるの途でない。兵士は戰鬪力を減ぜぬ程度に於て及ぶ限り生活苦を甞めさせねばならぬ。彼等が生よりも死を希ふことに依つてのみ、初めて勝利を得ることが出來るとさへ言つて居る。頗る非人道の嫌はあるが、戰爭なる野蠻行爲の手段としては或は斯かる野蠻策も必要であるかも知れぬ。斯かる場合に於ける軍人の死は、苦痛に惱

む重病人が死を望み、窮乏に苦しむ貧困者が生を呪ふと同一心理で自暴自棄の死である。海軍の戰爭に於ては殆んど其の例を見ざるも陸戰に於ては此の種の死が少くないであらうと思ふ。

之を要するに、戰場に於ける軍人の死は、極めて冒險性に富み好んで危地に就く小數の勇士と、遲疑逡巡して味方將校に斬り殺さるゝ小數の怯者とを除けば、大體に於て、

一、命令に要せられ、死を期せずして死するもの

二、無我無中の中に死ぬるもの

三、苦痛の爲め自殺自棄的に死を望むもの

の三種である。而して何れの死も刹那の現象であつて、靜思の結果ではない。從ふて軍人は生死の巷に出入するとは云へ、死なるものに對して何等哲理的考察を有せざるが常である。自分の乏しき經驗に照らせば「明日をも期せぬ命」などゝ勿體らしく口でこそ言へ、仰山らしく手紙にこそ書け、本人の心中には死に對する意識などは殆んど宿つて居ない。唯之から愈襲撃に向ふ場合とか、或は暗夜機雷の浮流せる海面を哨戒する場合とかに於ては、流石に死なるものを考へさせられる。再び此の山を見ることが出來るであらうかとか、明日の日出を拜することが出來るであらうかと云ふ樣な事も考へる。家族のある者は家族のこと、愛人のある者は愛人のことも無論考へるであらう。併し斯かる想念は砲火一たび閃めき砲彈一たび飛び來るに至れば全く念頭を去るのが常である。斯くて幸に無事に任務を果して歸還すれば、次の襲撃或は哨戒までは死と云ふことは殆んど意識に上らない。若し否らずして長い戰爭の期間、絕へず「明日の死」に脅かされるとせば、大概の軍人は神經衰弱を卒業して狂人となるであらう。左れば戰場の軍人は局外者の想像する程、死を念頭に置いて居ない。戰友の死に對しても亦、初めの間こそ「氣の毒」とか「可愛想」とか、同情惻隱の念を生ずると共に「明日は我が身か」との哀感も起るが、次第に狎れるに從ひ、特別の關係あるもの以外の死に對しては「アレもやられたか、運の惡い男じや」と、隣家の犬の子が死んだ程にも思はなくなる。戰爭は人間の心をして斯くまで殺伐無情ならしむるものである。

六　軍人を死せしむるの途

日露戰爭當時、自分は尙ほホヤ／＼の大尉として、親も無ければ妻子も無く、係累絕無の天上天下唯我獨在の身であつた。從ふて後顧の憂に惱まさるゝこともなく、死の問題を極めて簡單に扱つて居た。當時死に對して如何なる觀念を有したかに就て、今日明確なる記憶を喚起し得ざる程である。唯或る場合に

於ては死に對して寸毫の恐怖を感ぜず、寧ろ冒險に過ぐる行動を執り得たるに反し、或る時は死に對して非常に諦らめの悪るきことゝもあつた。而して後者は命令が不公平或は不條理と信じたる場合である。心平らかならざれば死すとも瞑せずとは、或は斯かる場合の死を云ふのかも知れぬ。

其後歐洲大戰中、自分は商船の乘客として、獨逸潜水艇の跳梁せる危險海を二回航過した。此の時には死に對して非常に强烈なる恐怖を感じたることを白狀する。第一には此の航海は自分として何等の責務を有しない。此處で獨艇に沈められて鱶の餌となることは全く無意味の犬死であると云ふ心理に依り、自己の死其ものを厭ふの念である。第二は自分の死後に於ける遺族の窮迫を憂ふる所謂後顧の念である。自分は此の心驗に依り、第一に責任は死に對して人間に勇氣を與ふるものなることを知つた。第二に係累は死に對して人間を怯ならしむるものなることを知つた。

之を以て軍事當局者は生存者の胸間を勳章で飾るよりも、死者の遺族を優遇して後顧の憂なからしむることが、軍人をして屑よく死せしむる上に於て逈に有効である。生殘者の榮華に引き代へ死者の遺族の窮狀を眼前に見せ付けられて、足一本でクエンレの廢兵の叫びを聞かされて、誰が次の戰爭に死ぬる氣になるものか、怪俄する氣になるものか。愛國心や大和魂の押し賣は時代錯誤である。足一本のピン／＼せる軍縮離職者に多額の涙金を與ふる慈悲心があるならば、先づ死者の遺族を救へ、不具の廢兵を救へ、と叫びたくなる。

死の凝視によつて私の生は跳躍す

小川未明

何故に死を怖れるのか？　まだこの世に於てなすべき享樂があるといふのか。すべての所有する物から、また愛する人々から、獨り別れて行かなければならないからであるのか。それとも、また理由なく怖しいのか。

たゞ、今日かうして生きてゐるといふことは、昨日の繼續に過ぎないのである。昨日は何と言つたか？　單調で仕樣がない。何の面白いこともない。酒を飲むか、女に戯れる位のものである。それとてこの上いくら經驗をしたつて異つたことがない。それ等のこともあまり刺戟に感じなくなつた。人生の理

想？　そんなことは、大抵頭の中に考へるだけであつて、人間は、やはり他の動物と同じやうに食つて、子供を産んで死んで行くまでだ。地球の命數すら、分りきつてゐるのに、人間だけが永遠を考へたり、また超人間的のことを考へるのは、强いて夢を求めるものである。そして、夢を求めた人間は、自然の與へた幸福にすら反いて、一生を空費して行くのである。……あるがまゝの生活――これが全的に人生そのものなのだ。自分は、この人生のすべてを知つてしまつた。さう、昨日は言つたでないか？

それだのに、なぜ、今日は死が怖しいのである。矛盾も、また甚だしい。ほんたうに、長く生きてゐるといふことは、この一日を徒らに繰り返へすのに過ぎないことだ。一年がたとへば、一日の三百六十五の連續であるやうに、一日の憂鬱は、等しく一年の憂鬱であり、一生の救はれざる憂鬱である。

人間は、産れると同時に、死の宣告を受けてゐる。一日、一日は、たゞ、その死の日に至るのを待つ過程に過ぎないとは、アルツイバシエフの作に書かれた人物が、よく言ふことである。

現在の生活を宿命的に考へた、ペスシミストには、さう正さしく考へられるにちがひない。かゝる思想の所有者が自殺するのを私は怪しまない。

私は、曾て、死にかゝつたことがある。また、子供の枕許に坐つて、その死を見詰たことがある。

其時から、私は、死といふものを今迄のやうに怖れなくなつた。アルツイバシエフの厭世思想の一面には、さまで動かされなくなつた。そして、今迄忘れてゐた、生を考へるやうになつた。死の上に立脚してゐる、刹那の生をもつと深く、穿つて考へるやうになつた。

醫者が、隣の室で、私の絶望を友人等に宣告してゐるのを聞つた時も、私は、案外平氣でゐることができた。そして、慌てなかつた。靜かに眼を閉ぢた。熱い涙が、たゞ止め度なく流れて出た。それは、別に悲しむのでもなければ、たゞ、この世に遺した、一種悔恨の情に近いものであつた。もう、あの街は散歩することが永久にないのだと思つた時に、ちよつと淋しかつた。しかし、それよりは、私は、もう働くこともなければ、また生活の上の苦しみも感じなくなる。その苦惱から脱れるといふ喜びの方が、ずつと大きかつたことを今でも想ひ出すことができる。

私が、六つになつた、長男が病院の一室で疫痢のために、急に死んで行つた時にも、また長女が十二歳で、ある冬の寒い夜

中に、私の顔を見詰ながら息を引取つた時にも、感じた悲痛の思ひはずつと深かつた。

この時の想ひは、なほも私の胸を激しく掻き挘る。そして、鋭く、私を鞭打つ。

病院の庭は、眞白に雪に覆はれてゐた。私の眼からは、涙が出つくして、呆然として、硝子窓の方を向いてゐた。

「許してくれ、これがお前の一生だつた。後から來て、先に行き、前から生きてゐて、まだかうして生き殘つてゐる。未知の經驗を年のいかないお前が先にしてしまつた。自分が幸福でありたいといふ考へは、もう私になくなつてしまつた」

これが、私のすべてゞあた。

私は、自分の生活を顧みた。この世の中の文明や、幸福が自分達の上にも分かたれたゞらうか。自分の子供等は、缺乏を感じずに暮らしたゞらうか。妻は、そして、兩親は? それはかりでない。私の半生に於て相知つた、其等の貧しい人達は、どんな暮らしをしたゞらうか。屈辱に、いつまで甘んじなければならぬといふのだらうか? そして、それはいつたい誰が、正義のために戰はなければならぬのだらうか?

生きるために戰ふといふことは、議論でなくなつた。享樂に反いて、苦しみのために生きなければならぬといふことは、いつしか信仰となつてしまつた。

「私の生は、あの時……子供の死んだ時、すでに、死の中に計算されてゐる」

これは、いつも私が、筆を採る時に、身に染みて感ずる。さびしい、暗い、心臟を締めつけるやうな感激である。

生きるといふことは、所有するといふことでない。

所有するために、生きるといふことが、どんなに無意義なことであらうか。國土を擴大せんために、多くの人間が相殺し合ふといふ事實がある。また、富を積まんために、健康を自由を自から蹈み躙つてゐる人間がある。彼等は、それをいつまで自分達が所有し得ると考へるのであらうか。

私は、奈良へ行つた時に、唐招提寺の丹塗の門の下に立つて家根を仰いで泣いたことがあつた。千年の昔からの建築は、風雨に晒らされて、なほ此處に存在するのに、其の間に幾何の人生は、去來したであらう?

私は、所有によつて、自己の生の空虚を充たさうとする程、怯儒でないことを信ずるのである。

死の觀念は、瞬間も私の頭から去らない。無窮の青い空を仰いだ時のやうに、無限の闇である夜に面接した時のやうに、死を考へた時は嚴粛な感じが私を戰慄せしむるのである。

私は、生の眞實に觸れたいと焦燥する。たゞ、ほんたうに生きたいと思ふ。產れ落ちた時から持つてゐる、胸の裡の溫かい性情に生きたいと思ふのである。

それが、どんなに短かい間であつても、ほんたうに、眞實な生活をこの地上に營みたい。それには、人間性によつて、新しい社會が、この地上に建設されなければならない。

ほんたうの人間的の生活――或は、可なり後代にならなければ見ることができないかも知れない。しかし、自分は、せめてもそれに希望を持たう。そして、そのために働いたといふ滿足を抱いて、二たび決して歸らない眠りに入らう。

私は、斯くして、ペスシミズムから脫れたと信ずる。否、全く脫れ切らないが、積極的に反抗し、戰ふだけの勇氣を得たと信ずる。私は、生命の表現が卽ち生活であることを知つた。實に生活は、それ自から意義がなければならない。生活は卽ち創造でなければならない。創造を意味しない生活は既に死んでしまつたも同然である。

創造の感激も、喜びも、人生の愛に盈されてゐるのである。

私は、正直な、貧しい人間の姿を眼に描く。そして、筆を採る。また、弱きが故に無智なるが故に、不遇なるが故に、虐げられつゝある寡婦や、老人や、子供や、哀れな人々の姿を眼に描く。私は、情に於て忍びないがために、また、不正を憎むがために、身をもつて戰ふことを辭せないのである。

私は、あの時、死んでゐたのだ、そして、私の逆境時代の子供等は、いま、風が梢を吹く、地の下に眠つてゐるのだ。

それにつけても、街頭をぞろ／＼と歩るく、醉生夢死の輩を、私は、憎視する。――投げ付けた爆彈から立上る黃色な煙と共に、自身の體も消え失せた、彼のニヒリストにも人生に對する强い愛はあつた！

生活は生命の表現である。

―十一年十月十日―

自然の死は人間の理想

文學博士　三宅雪嶺

人は性質及び境遇にて死を重く視たり、輕く視たりし、或は最も重きを置き、或は有るか無しかに取扱ふ。人が死なねばならぬかは今日のところ生理的で、證明し難いやうであつても、事實が死なねばならぬ事を示し、剩へ略ぼ一定の年齡で死すべき事になつて居る。若し人が死ぬとならば、從來の生活狀態を

一變するの必要を生ずる。子孫の繼續に變化を及ぼし、延いて男女關係に變化を及ぼし、殆と想像し難い狀態にならう。之れまで不死國を想像した者あるが、何分にも想像が足らず、更に一層想像するのも面白からう。下等動物でヒドラの如き、不死と云ひ得さうであつても、一體で子孫連續するのであり、普通の生活を以て視る事が出來ぬ。普通の生活と認め得るのは、悉く略ぼ一定の期間に死すべき事になつて居る。

人の平時爲しつゝあるところ、死を豫定しての事であつて、死が無ければ何處まで狂ひを生ずるか測り知られぬ。チトノスが若い時に類ひ無い美貌であり、曙の女神エオスが之を愛し、大神に願つて不死の特許を得たが、不老の特許を得る事を忘れ、年數を經て次第に老衰し、皺深く、眼凹み、見る影も無い有樣になり、それで何時までも生存するのであつて、エオスは困り抜き、之を蟋蟀に變じて了ふたと傳へられる。美女の成れの果には、不死でなけれど、卒塔婆小町の如きがあり、生命が徒らに厄介者となる。希臘で不死の特許を得るのは、大抵不老の特許を得、老人は老人で何時までも同じ老人顏で通し、少年は少年で何時までも少年顏で通す事になつて居る。美童は大神の盃持ちになり、何時までも其姿を保つ事になつて居る。何年經ても年齡に變り無く、常に同じ顏であつて、後に老人が神になれば、少年で早く神になつた者よりも、老人顏をする事になり、隨分事が難しさうに思はれる。

神話は理窟を抜きにすべきであるが、理窟で押すと共に大紛亂を生ずるの餘儀なきに及ぶ。不死として、年齡で容貌が變化すれば、眼も當てられぬ狀態に陷り、さりとて何時までも不老とせば、交際關係が單調に流れ、何時でも同一事を繰返す事にならぬか、時間に於ける變化を超越して考へ得ぬでなからうか、いろ／＼考へ樣もあるが、現在の世界で死を以て何人も避くるを得ないところとせねばならぬ。生れてから死ぬに定まつて居り、人ならば約一百年以內の壽命を享けて來て居る。「門松は冥途の旅の一里塚」と云ふのは、事實を云ふたのに過ぎぬ。蠟燭が燃えて居れば消滅するに定まつて居る。

それで人が死に就て矢釜しく云ふのは何の爲めか。生れ落ちてから死ぬと定まり、定まつた通り死ぬに何の不思議がある。煎じ詰れば、人の死に重きを置くのは、死其物に重きを置くのでなく、生を完くしようとし、之を妨げるものを防ぐに努めるのである。若し人が定まつた壽命の通りに死んだならば、特別に問題の起るのでない。生れて生長し、成熟し、老衰して死ぬならば、之を自然とする事、河の流を自然とするに異ならぬ。人が百歲で死ぬならば、誰が悲しむであらうか。今は百歲になる

のが稀であつて、偶ゝ百歳になり、それが死ぬのは惜しい氣がするものの、普通に死を悲しむと頗る異つて居る。九十歳でもさうである。悲しむのは尙ほ生きて何事かを爲し得るのに、病氣又は他の事故で死なねばならぬと云ふところにある。當人も生きて居らうとし、他人も其の生けるのを當然とし、それに死なねばならぬので、悲しみの情を禁ずる事が出來ぬ。老耄して意識が有るか無いか分らぬ位になつては、死を當然とする事になる。佛教で御芽出度と云ふのは、極樂往生を意味するにしても、老衰して死ぬのを以て壽命を完くし得たとし、芽出度く感ずるところがある。血氣壯んな者が怪我して死に、同じく極樂往生するにしても、誰も御芽出度いと云ふ者が無い。御芽出度いと云ふのは、往くべき途を往き終らせたところを祝して居る。

他の動物は捉へられて逃げようとし、煩悶狀態を察し得るけれど、自然に死ぬのに音沙汰が無い。蟲は壁に食付いた儘に死んで居る。犬は死に際に身を躱したりする。飼主に暇乞ひの樣な事をして、隱れるのもある。本能で死を知り、隱れて靜かに死なうとするのであらう。鳥や獸や、獵師に襲はれて恐慌を起すけれど、自然に死するに於て少しも騷ぐところが無い。何程自然に死し、何程災に罹つて死ぬか、此比例を明にし難いが、人類は自然に死ぬよりも、病氣又は或る事故で死ぬのが多く、平均壽命の延長するを以て文明の兆候とする。それでも最も延長したところが六十を超えて居らず、所謂自然に死ぬ者の少いのを示して居る。死を悲しみ、或は之を人間の最大事とするは、自然に死なず、死ななくて可い年齡に死するのが多いからである。死に重きを置くのは、不時の死の多い時代に最も著しく、其の減ずると共に漸く輕く視る事になる。宗教家が死に重きを置き、人をして死を恐れしめ、依て宗教に引入れようとするのは、死ななくてよい年齡に死ぬ者が多い時代に於てする。戰國時代と云ふやうな時が最も効がある。歐洲で中世に死を恐ろしくし、葬式を嚴にするとか何とか、死を重く視ささうとし、人が死を重んずると共に、信仰三昧にならずに居れぬ。醫術の進步で平均壽命の高まつたけれども、尙ほ多く高まらず、剩へ時として戰亂を免かれず、近く世界戰役の如き、戰死七百萬人を數へ、あたら人の死んだので、死に重きを置かずに居れぬ。其處で一しきり死を輕く視るに傾いたのが、復た重く視さうなところがある。併し歐大陸よりも英米は死に重きを置かず、重きを置いてもなるべく輕く感ずるべき社會狀態になつて居る。廣く世界に活動するの機會があり、家に閉ぢ籠つて考へるやうな事が尠く、未だ生を知らず焉んぞ死を知らむと云ふの痕がある。

孔孟は絶えず道を説いて奔走し、死の事を考へず、老莊は坐して考へ事し、死を考へたらう。死を考へても、つまり壽命を完くするを望む事になる。養生法を工夫するのは、之を完くしようとするのである。不時の死であるが故に悲しく、老衰して死するが故に悲しくないと考へるのでなけれど、自づと其邊に落着く。道教で養生に重きを置くのは、自然の死を遂げようとするところがある。人が悉く自然の死を遂げれば、死に就いても悲しみが減じ、或は全く無くなつて了ふ。人が自然の死を遂げないが爲め、醫學とか、病院とか、生命保險とか、さまざまの事が起つて居り、自然の死を遂げるやうになれば、種々の方面に變化を及ぼさう。遺傳もあり、悉く自然の死を遂げるの時代に達し得るか何うか、疑を免かれぬけれど、平均八十位に達したならば、死に重きを置く事が餘程減するであらう。

之れまでも壽長ければ辱多しとか、長壽の願はしくない事が知れて居る。實に長壽の爲めに災を招くのがある。近い頃大富豪が八十四歳で殺されたが如き、其一例に處る。チチアンは數へ年百歳まで繪畫に手を放さず、實に多くの傑作を貽したが、百歳で疫病に罹るや、從者が其所有品を奪つて逃げ去つた。瀕死の病人は何とも手の出しやうが無く、憐れな狀態で終つた。生き永らへて災に遭つた譯である。

併し長壽の爲めに利益を得たのも少くない。公山縣、侯大隈、六十で死んでは彼の如く見られず、七十で死んでも彼の如く見られず、八十を超えたので彼の彼たるを得た。公松方の如き、壽命の長いだけ位人臣を極めるを得た。伯山田は早く歿したが爲め、其能力の何分の一程にも認められて居らぬ。それかと云ふて、伯板垣が岐阜で仆れたならば、自由の神となつたらう。壽命の長い短いで利害得失を一樣に云ふ事が出來ず、各々別々の事情の下に考へねばならぬ。大體に於て自然の死を遂げるを以て望ましい事とし、社會の多くの事が之に力を添へつゝ、力の足らぬのを憾むべき狀態になつて居る。

他の動物は危害に遭つて死ぬのが多いらしく、人類は病氣に罹つて死ぬのが多い何故に人は自然に死ぬ事が出來ず、病氣で苦んだり惱んだりして、死なねばならぬか。人工に長じ、自然より遠ざかつて、病氣を得る事尙ほ乳牛が乳を多く出すやうに身體を變じ、結核に罹り易いに似て居らぬか。さうしては何時まで經つても病氣の付き纒ひ、病氣の種類が增すとも、減じない樣であるが、設備の整ふに伴ひ、比例年齡の高まるところから考へれば、極めて遲い速度を以てしながら、自然の死を遂げるに近づかうとして居るのでないか。自然の死を遂げるまで死に重きを置き、悲しんだり、嘆いたりせずに居れぬ。十分に壽命

を果さず、不時の災難に出遭うのを嘆ずるの聲である。

さらば假りに人が悉く壽命を完くし、自然の死を遂げるに至らば、死は問題とならぬのであらうか。さうならば今日の如く、死を恐れて之を問題にせず、生其物を問題にするであらう。壽命其物が大問題たるを失はぬ。死は單に生命の盡くるを意味し、生命より取離して問題とするに及ばぬ。生命を解し得れば自づと死を解し得らる。死んで自己が消滅するか、全世界が消滅するか、將た全く異なる境遇となるか。昔から人が興味を以て考へ、今日も興味を以て考へ、將來もさうであらう。其測るべきが如く、測るべからざるが如きところに、無限の興味がある。タニエル・ウエブスタアが死に際に身を起し、朗かな聲で云ふやう、「生か生か、死か死か、何と奇なものであるよ」と。彼は哲學者でもなく不哲學者でもなく、普通の言語で普通に考へるところを云ふたのである。人の多くは、あらはに云ふと否とを問はず、かゝる事を云ふの心持があらう。悉く生死が解決し得たならば、興味が滅ずるでなからうか。解決とは何事か、之れ亦長く續くべき問題に屬する。

親しく「死」と面した頃の日記から

醫學博士　北川完三

御問合せに對してお答の出來るやうな立派な統一した考へを持つて居りません。それは他に斯う云ふ問題を論ぜらるゝ立派な方がおありのことゝ存じます。たゞ私は此二月以來の日誌を御見にかけることだけは出來ます。試みに御要求に關するやうな部分だけを拔き書きして御送り致します。斯うして纏めて讀んで見ると我ながら淺薄なのに恥かしくなる。それに日によつて考へが違ふ。一つの纏まつた論文のやうに統一がない。併し或は此方が反つて生活を語るものであるかも知れぬ。御覽の上如何に御處理下さつても差支へありません。

二月五日病院では誠に親切な待遇を受けたが生憎北向きの室しかなく寒くつてたまらぬので、まだほんとうに動いては惡るいのだが昨日退院して家へは寄らずに直ちに此處に來た。さすがに暖い。そして空氣も柔かだ。斯うして障子にうつる日影をながめ乍らねて居ると氣がのんびりする。あの時からもう二十

日になる、まるで夢のやうだ、みんなに心配を掛けた。各方面の知人が態々病院に見舞に來てくれたのは、面會は叶なんだが段々よくなる頃から家人から聞いて實にうれしかつた。自分はそれ程つくしても居らぬにこんなに親切にしてくれるかと思ふと嬉しくもあり恥かしくもある。御禮や退院の通知は總てS君に賴んだが、もつと〳〵深く感謝して、正しく考へねばなるまい。

●●●二月十五日　N君が見舞ひに來られてあの時はどうだと聞くから

急ぎの仕事で日夜心身を使つた、と云ふやうな譯で、用心に用心をして居たのだが、それに少し風邪氣であつた。そしてあの日は稀な寒さに、式服を着けるので比較的薄着で、戸外に外套なしで居たのだ。全く疲勞と、寒氣と、感動とのために病の發作を起したのだ。事實あの澤山の人々が祭壇に向つて金を投げるのを見ては、爪先から血がぞく〳〵上るやうで、頸がめりこんで、身内が縮むやうに感じた。裏の茶屋に行つて休まうとしてとう〳〵途中でやられた。あんな困つた事は一生に一度だ。しまつた、やられたな、と思ふと足が地に着かないやうに感じて、胸が波打つやうに高く鼓動を始める。驚きと恐れとに依つて生じたこの心臓の烈しい運動が反つて病を增長させる。それでも茶屋まで辿り着いたが、誰れも手の着けやうがないので、初めの中は遠くから眺めるだけで、助けて世話をしてくれるものもない。たゞもう一人でのたうちまはつた。容態の段々惡くなつて行くのが自分にも分つた。後に脈が惡くなつてカンフルの注射を受けた程なのだから。

これは此處で死ぬなと思つた。何よりも妻に會ひたい。醫者を呼んで貰ふと云ふ事は念頭になく、早く家へ電話をかけてくれと賴んだ。醫師よりも妻に會はねばならぬとは矛盾のやうだが、實際さう考へた。妻に會へばよいのだ。そして此波打つ胸をしつかりと抱いて貰つて落着いて死にたかつたのだつた、電話も通じ、賴んだ通りの處置も整ふて仰臥して居ると、もう妻さへ來れば死んでもよいと思つた。そして反つて落着いて心臓も緩かになつた。死ぬと云ふ事はそんなに辛い事でもなかつた。運命だ、仕方がないと思つた。しかし死ぬよりは生きる方がいゝと思つた。

自分が斯う答へたらN君も

僕も急病で突然たほれた時、全く同じやうに始めは驚きと恐れで胸が烈しく波立つたが、軈ては落着いて死と云ふ事に就いてそんなに辛い事とも思はなかつた。死ぬのも仕方がない

が、死ぬよりば生きる方がよいと思つた、確かに誰れもさうらしい。長い病氣で段々衰弱して行く人が死を感じて來ると、初めの中は煩悶に煩悶を重ねるものだが、末期に近く愈々死に面接する時は反つて平靜になつてこれと同じやうに心が定るらしい。戰場でも同樣、死刑囚も同樣だ。
と話して居た。

　自分のあの時の經驗は未だほんとうのものでなく、次の瞬間にもつと深刻な感がやつて來るものだらうと思つて居たのに、眞にあれだけのものであらうか。恐くはあれが神に任せきつた心持と人の云ふそれかも知れぬ。確に最後は自然のまゝに、絕對の平安、恒久の平靜に入る一種の法悅を持つ。それが或人には天國に入る歡喜、或人には彌陀の淨土に行く喜びとなる。それは平常の宗教觀によつて異るものであらう。可愛さうなのは犯せる罪惡から末期が地獄に墮ち行く人である。茲に宗教的の慰め、言葉が必要である。

　二月二十二日　N君から國木田獨歩氏の「病牀錄」が屆いた。開いて見ると處々に朱線が引いてある。N君は先日の話に餘程興が乘つてこれを送つてよこしたものらしい、此書は眞山青果氏が日々獨歩氏の病感を誌したものだ。初の中は只焦せりに焦せつて煩悶嗟嘆を事として居るが、末期に近くに從つて自分の考へと同じ所に來て居る。此病牀錄は三段に分つて考へる事が出來る。第一段では自分は日々に衰弱して行く。漸次に死に近きつゝある事が察せられる、それには相違ないがそれは死を知ると云ふ事丈けで、實際死に觸れるのではないから、如何にしても免れぬ場合と知りながら「余は遂に死すとは到底自ら思ひ信ずる事を得ざるなり」と云ひ、又死とは細胞は解け、纖維は溶け、總てが物質（サブスタンス）に復する事ではないか。今茲に嚴として存する自分が死んで自然の中に散失するとは信じ得られない、と云ふて居るが、第二段では、余は死を見たり、極めて瞬間的なりと雖も、余は三度或は四度それを經驗せりと冒頭しての長い記事がある。されどその言語は死を見たりと云ふよりも寧ろ單に死の恐怖を泌々と感じたりと云ふに過ぎない。そして引續いて生に對する強い執着が叙してある。第一段から第二段と順次に日々の悶々が深くなり勝り行く樣が明かに想像される。併し第三段として、臨終に先立つ事五六日に至つて初めて

　余は昨夜飜然として悟れり、曰く、生や固よりよし、されど死も亦惡しからず、疾病は彼岸に到達する階段のみ、順序のみ、又吾生の一有事たりと稽ふれば別に煩悶する事を要せず。

と云ふ境地に達して居る。獨歩氏の此間の心境が眞に如何な

るものなりしやは到底知るよしもないが、云ふ事は自分の考ふる事と一致する、

若し病がじり／＼と緩やかに進んで行つたなら、青年期にある人は誰しも此順序に心の變化をとるものであらう。併し年齢も四十となり、五十となり、更に六十となり、七十となり行くに從つて此最後の斷定に到達する道程に相違があらうし、人々の特性に依つても亦自ら異るものがあらうが、思ひがけざる突然の死に面する者は――勿論頭腦の昏亂を來した者は別として――之れらの過程を極めて急激に通過する筈である。

獨歩氏に此言あつて後は

病苦を訴へざりしは事實にして常に昏々として眠るが如く覺むるが如く心極めて平靜なりしもの丶如し。

と青果氏は書いて居る。然も猶ほ其後に

二十一日の夜半夫人治子ひそかに起きて容態を窺ふに流涕頬を傳ふて嗚咽する事久し。夫人怪みて故を問ふ「急に何だか悲くなつて」とのみにて多くを云はず、又微かに泣く。蓋し死を去る二日前なり。

と誌してある。此「急に何だか悲くなつて」と流涕する所が實に還殺の眞面目を傳へて居る。これは決して再び迷ひを生じたと見るべきではない。此涙は前の煩悶時の涙とは自ら異つて居る。如何に生死を超越した人でも此世の別れは悲しいに決つて居る。譬へば卑近な例ではあるが、希望と歡喜とに滿ちて外國に旅立つ人でも、日頃の戀が叶つて遠く嫁ぐ人でも家人との離別の悲しいのは人情だ。況んや永久に此世の別れとなるのだから悲しいのは當然の事だ。

●●●●●

二月二十七日。今日は愉快な日だつた。T君の訪問を受けた。不相變淋しさうな表情をして居られた。例の謙遜な態度でぽつり／＼と話して行かれた。話の中には死の問題があつた

自分は自己の永世に存在する事を信ずる。其永世も一盃の水が大海の水に合するやうに、我々の魂が眞如へ浸入して存在すると云ふやうな永世ではなく、我々の此個性、此人格が此肉體を離れても尙靈體となつて存し、此世界で學んだ事、經驗した事、修養した事を土臺として更に靈界に活躍し、そして永遠限りなく眞善美に向つて向上發展して遂に神の如く全きものとなるべき運命を有して居るのだと信ずるのだ。

と。T君は實際あゝ云ふ風に信じて居るのだらうか。信じられたら幸福だと信じて居るのではあるまいか。勿論眞面目に敬虔なT君の事だからさう信じ切つて居るのかも知れぬが、それにしても餘り智識的な說明だ。自分にもさう信じられたらもつと道念的な生活に行けるのだらうが、今の自分には余く丞への

外にある。自分にとつては死は絕對の平安、恒久の平靜それなのだ。水は流れて滾々、雲は飛んで悠々、草は青く石は滑かなり、そこに特別の意義もないのだ。それにしても彼の詩人メーテルリンクの「青い鳥」にあるやうに、親しき人々の回想に依つて何時でもそれらの人々と面接する事が出來る筈だ。昔から幽靈が對者に最も印象の深かつた姿其儘で出て來るのはあれはほんたうだ。

三月三日　今日は東京の子供らから思ひ〳〵の見舞狀をくれた。それらの文句には眞に父を思ふ心が見える。可愛いものだ。何事を差措いても早く健康を恢復せねばならぬ。そして彼等の心と一體となつて出來るだけ長く此世で生を送らねばならぬ。

子供等の思出の國を豐にしたい。そして長く其國に住みたい。

三月二十六日　もうこゝへ來てから五十日になる。よく青天が續く。病後の恢復にはかうせねばならぬものだらうが、毎日かう云ふ風に呑氣に生活をして行くと精神が墮落して行く。こんな生活をして長く生きたとて何になる。假令命は短くとも、もつと感激的な生活をしたいなどと云ふ考へが浮ぶ。妻を扶け、兒を育つべき責任ある身として、斯くの如く考ふると云つたら大なる罪惡だと非難を受けるに相違あるまいが、併し門人等が辭世の句を求めたのに對して、臨終の床にあつた芭蕉が、既に作れる我句は悉く之れ其日々々の辭世である、と云つて其求めを拒絕したと云ふ、彼のやうに一日々々を以て其生命として緊張した生活を送りたいと云ふなら差支はならう。

四月四日　未だ蛙を聞かないが、もうそろ〳〵何時もの通り何か制作をやりたい慾望の炎ゆる時が來さうだ。極樂寺坂の切通しが此一日から開通した。今日出かけて見た。天氣がよくて實に愉快だ。鎌倉のB醫師を訪ねて見た。丁度十時頃で、來診患者の診察に忙しいので患者溜りで暫く待つ。若い男女の患者が七八人は、自分の順を待つて居る。烈しい感情を詠つた詩集を持つ若い夫人があれば、甘い戀愛小說を讀んで居る青年がある。彼等の殆んど總ては長い病氣で此地に轉地して居る者だ。來る人と歸る人との挨拶の有樣を見ると殆んと相互は知り合ひだ。彼等の間には友人と云ふ程度以上に親みを持つ者の多い事は人から聞くことであり、又海岸や停車場などでそれらしい人々を見掛けることもある。病人と云ふ者は我儘な者だ。自分丈が可愛さうなのだ。病者に對しては世間が大體の事は大目に見てくれてもよいと云ふ考へがある。家庭を離れて居る淋しみもあるが、亦反つて行動の自由もある。爲すべき日課と云ふもの

もなく、空想を事とし易い。それに海岸の光線と空氣とは官能的に人を導く。何よりも短命と云ふ囁きが心の何處かにある。其處に多くの悲劇や喜劇の生ずるのは當然だ。憐れむべき病者を——其心を救ふ道は何であらう。

四月十五日　春もやうやう闌けて來た。日に益々退屈で物憂い。早く東京へ歸りたい。

只凝然と仕事に追はれて機械のやうに働いて暮すのでは、それはほんたうのライフではなく單なる存在其物だと云ふ言葉を聞いた事があるが、今日の此無爲の狀態も亦同樣單なる生存其物だ。

私にはどうしても間斷なき強い刺戟があつてそれに追はれて暮すのでなければライフの感じを感じ得ないのだ。これが確かに惡い事なのだらう。此事が自分を不健康に導くのだと云ふ事はよく分つて居るのだ。それで居て實際には此刺戟から遠かる事がどうしても出來ないのだ、

親しき人の此世を去る事こそ悲しいが、自分の死はそんなに辛い事でもない。生きんとするから苦しいのだ。意義ある生活に生きんとするから苦いのだ。

四月二十四日　評判の高い倉田氏の「出家と其弟子」を讀み了つた。何時もの癖で早く事實を讀み取らうとする亂讀的のやり方だから作の佳い惡いは分らなかつたが、親鸞と唯圓との對話の中に親鸞が

四季の移り變りの速い事、年を老るとそれが殊更早く感じられるものだ。此世は無常迅速と云ふて居る。其無常の感じは若くても解るが、迅速の感じは老年にならぬと分らぬらしい。もう一年過つたかと思つて恐ろしい氣がすることがあるよ。人生には老年にならぬと分らない淋しい氣持があるものだ。と云ふ言葉が氣に入つた。

自分は「あすをも知らぬ命」などゝ云ふ事は信じはしないそれは蓋然性(プロバビリチイ)の法則を知らぬ人の言だ。過去より歸納して現在に及ぼし、現在が頗る健全の狀態にあるならば、明日も亦健やかに生を營み得る事は確かだ。若し萬に一つ死ぬやうな事があつても、其プロバビリチイは字の如く眞に萬に一つ、即ち萬分の一、或はもつと何萬分の一にも當るだらう。之れを以て見ても健康の人に對して明日をも知らぬ命などゝ云ふ事は論理が許さない。只之れが明後日となり、一週間となり、十日後となり、更に一箇月となり、一年となり、十年となるに至つてその隔りの遠い丈け健康の狀態は不明になる。自分は健康ではない。人よりも遙かに弱い。健康の人に對して明日の死のパロバビリチイが何萬分の一ならば自分のはずつと多く、何千分の一に當るか

も知れない。それにしても今日の狀態から推して「あすをも知らぬ命」などとゝは思はない。と云ふて少年期に母を失ふた自分は佛者の無常を感ぜぬ譯ではないが。

　親鸞の云ふ迅速の感は老年にあらねども短命が氣遣はれる丈け深く感ずる。過去の迅速であつた事は三十歲以上の人ならば誰れでも感じて居るやうだ。たゞこれが老年者か、或は自分のやうな短命の氣遣はれる人でなければ切實に此考へを未來へ及ぼす事をしないのではなからうか。

　療養のためとは云ひながら斯うして無爲に日を銷する事が惜くてならぬ。早く東京に歸りたい。そしてライフの感じを感じ得るやうな刺戟に浸つて日を送りたい。只考慮すべき事は其刺戟の中から眞に自分にとつて意義あるもの丈けを撰別して受け取る事だ。これが至難の點だ。

　顧れば自分の今日までの生活は行き當りばつたりにやつて來たのだ。此邊で眞に自覺的の生活に入らねばなるまい。過去は惜いが致し方もない。自分が體を弱くしたと云ふ事は、自分をして今後の生活に劃然たる段落を置かしむるために最も都合のよいことかも知れぬ。爾後は意義ある感激丈け取入れて眞に充實した生活を續け、下らぬ事に心をつかふ事さへせなんだなら、過去の損失を取返し、猶且つ長命に處しても意を充し得る丈けの事が出來るかも知れぬ。

五月十八日　A子さんが修學旅行で駿河の龍華寺へ行つたとて、其處から出した樗牛先生の遺墨の繪葉書を受け取つた。それに近詠一首として

　如何にうるはしく空に輝けばとて終には地に沈むべき日ぞ、
　靑春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき

とあつた。

　先生には高等學校で英語を習つた。纔か一箇年であつたが深い印象が殘つて居る。大學卒業後間もなく赴任せられ、一箇年敎職に在られた事と思ふ。自分が大學に在る間に死なれたのだから多分三十前後であつたらう。惜しい人を若死させたものだ。それに氣の毒な事は、後に殘された一人のお孃さんの身の上に就いてだ。未亡人とお孃さんとは五六年前まで私の隣家に居られたが、どう云ふ譯か幼少の頃からお孃さんの腦が惡いのだつた。容貌や姿の美しい丈けに一入お氣の毒に感じて居る。他所へ移られる頃にはもう年頃になつて居られたが今はどうして居られるか。

　此繪葉書を受け取つてから頻りに先生の墓が見たくなつた。一人で旅行が出來るやうになつたら是非出掛けて見やう。

六月十日　興津から龍華寺を見て、それから濱名湖の辨天島ま

で行つて來やうと、午後から出掛けた。興津に着いた頃は强い雨で外へ出る事も出來ぬので、宿屋の二階に閉ぢ籠る。所在なさに新刊の佐藤文學士譯のモリス藝術論を讀む、その開卷劈頭藝術目的論の中に次のやうな文字があつた。

　藝術の目的、即ち、何故人々は辛苦して藝術を勵み、且之を實行するかを考へるに當り、私は私が多少知つて居る人間の唯一つの標本、即ち、私自身を根據として概說せざるを得ない。さて私が何を欲するかを考へる時、私はそれに對して幸福といふ名稱以外の名稱を與へることは出來ない。私は生きて居る間幸福でありたいのである、私は死に就ては何等の經驗も無いから死が如何なるものであるかは全く知らない、從て私の心をそれに集中させる事さへ出來ないからである、私は生きることの何なるかを知つて居る、死ぬことの何なるかは推測さへ出來ない。それで私は幸福でありたいのである。…………

●●●●●六月十一日　朝早く宿を出て產業のよく發達した町や村を眺め乍ら俥上ゆるやかに舊東海道を江尻に出て、それから龍華寺へ向つた。昨日のあの吹き降りに似ず今日は實に好い天氣だ。富士は頂上近く僅かに鹿の子まだらを殘して濃い紺青の姿をあらはして居た。三保の松原は霞んで海は靜かであつた。もう數日の後には田植が初まるのであらう、道の兩側の田圃は既にうなひ終つて用水からの水が滾々として流れ込んで居た。苗代は風にそよいで綠の「びろうど」のやうに滑らかであつた。龍華寺は田圃からはずうつつと高い小山の中腹にある。名高い大蘇鐵はまだ葉を出しきつて居らぬ。「さぼてん」の花の眞盛りで本堂の軒には雀が巣を作つて騷いで居つた。

　先生の墓は本堂の裏の一段小高い境、それは左には富士、前には三保の松原を眺め、駿河灣を一眸の下に踏まへた丘の上にある。「ショッペンハウエル」の墓の寫眞に基いた圖案に依て建築したものださうで、背後の崖に沿うて列柱に依つて飾られた障壁が立ち、その前に平たく墓石が伏せてある。墓石は白い大理石で表面に「吾人は須く現代を超越せざるべからず」といふ句が彫られてある。

　寺で賣る繪葉書のうちに、先生がこゝを墳墓の地にしたいといふことを故鄉の父君にいひ送られた手紙の栽つて居るものがある。それには

　……先づ此度は墓地の事申上候駿河國淸水港附近龍華寺と申すは三保の松原より富士山の眺望本邦無二と存候私も數回遊覽し常に墓居候土地に有之候若し小生死後に相成候はゞ龍華寺に埋葬相願度候素より故鄉には祖先の墳域も有之候ながら

かの陰鬱なる禪宗寺は私の氣には如何にしてもかなはず是非々々相願候通に被成下度云々

とある。

此の丘上からの景色は割合に横線が多く、ために靜かな柔かなものに見える。且つ「三保の松原に富士」といふ事から來る聯想が更にそれに「ヴェール」をかけて呉れる。先生も是等の理想からと一つは家康が久能山を墳墓の地として遺言をしたひそみに倣つて此の地を選ばれた事であらう。

それにしても近代の工業化は三保の松原をあの羽衣の傳說にあるやうな美しい物にはして置かなくなつた。清水港に碇泊して居る汽船の悪い石炭の煙で黒く澱んで、甚しく趣きを傷けて居る。それに又三保と此方の陸地の間に深く入り込んで見える靜かな入江が船溜りになされる設計中だとの事、自分は今はこれらの問題に就いて善惡の議論はしたくない。只先生の靈がどんなに悲んで居られるかと云ふ事を想像すると厭な氣がする。尤もインモータルはそんな小さな量見である筈はないが、それにしてもさうあつて欲しいと強く考へられた事が裏切られて居る事を見ると氣の毒に堪へない。

未來に就いては人々に依つていろいろの考へを持つて居る。藝術目的論の中にモーリスの云ふて居る如く考へて居る人もあるし、昔の詩人にも死ぬ前に自作の詩稿を悉く燒き捨てた人もあり、アミエールのやうに、偉大な思想に充ちた其日誌を、死後出版してもよいと云ふ風に暗示的に書き遺した人もあり、又先生のやうに墳墓にも出來る丈けの考慮を費されて行かれた人もある。斯う見ると何か先生が心の弱い、名聲を氣にする人のやうにも考へられるが、併し先生が自信ある才能を抱いて若くして逝かれた事を考へたらば、そしてあの「……青春人にして幾時ぞ思へば惜しき過去なりき」と云ふ句を味つたならば、如何に此世に強い執着を持たれたかと云ふ事が知られる。自分は寧ろ之れを先生の強い人格の現れと見たい。恐らくはモーリスも詩稿を燒いた詩人も、アミエールにも、先生も孰れも其儘でよいのだらう。どれがほんたうでどれがうそだとか、誰が徹底的で誰が不徹底だと云ふ事はないのだらう。

ヒポクラテスの句に Ars longa, Vita brevis. と云ふ事がある。これは「藝術は長し、人生は短し」と云ふ意ではなく、實は「老ひ易く學成り難し」と譯すべきものださうだが、之れを今日までの仕來りのやうに「人生は短し、藝術は長し」と解して先生は恐らくは斯う云ふ心を常に抱いて居られた事であらう。併し先生の長きは一面確かに姉崎さんと云ふ友人を持たれたによるだらう。先生の目的は姉崎さんによつて完成された。

先生と姉崎さんとは丁度マルクスとエンゲルスのやうにあつたのだ。此點に於ては島村抱月さんなどの方が寧ろ御氣の毒だ。

先生が墳墓の地を定めた事に就いて父君に送られた手紙の後には次のやうな文句があつた。

右墓地は私儀健康回復次第彼の地に罷越豫め談合買求置度考居候、此れ亦御含被下度候、兎角の御異存は被爲候やも不被測候へ共此事は私の頑固なる願に候間新之町とも御相談是非御許可被下度候斯様の事緣儀不宜事には候へ共生前に於て死後の事を計るは毫も怪むに足らずと存候へば何も御氣に止められまじく、私も出來る丈けは攝養可仕候初子里子も丈夫に暮居候間御安心被下度云々

里子さんと云ふのがお孃さんで初子さんが奥さんであつたやうに記憶する。此お孃さんとお孃さんの病氣のために強い神經衰弱に罹られた奥さんを知つて居る自分は、此末文を讀んで感傷的な氣になつた。先生の靈が最も親しい人々の思出の國に生きる事が少い事を想像してゞある。

さう長くは墓地には止まらなかつた。又間もなく俥上の人となつて初夏の氣持よい風に吹かれながら江尻驛に着いて停車場前の宿屋で辨天島に行く汽車を待つ間の長い間に此記を認める。

六月二十一日　K老人が死んださうだ。餘りに突然な通知で驚いた。未だ此春新築の住居が落成して落着くか、落着かぬに氣の毒な事をした。まるで此世の卒業制作として住宅を遺して逝つたやうなものだ。都會の中流の人々には此行き方が多い。働らいて漸く金の出來る頃は老年になる。理想の住宅を作らうとしてなか〳〵考へが纏まらぬ。やう〳〵定つて新築を始める。他から見るとそれに渾身の力を籠めて居る。それは確かに旺盛なる藝術的活動だ。落成して幾らも住まはぬ中に彼の世へ旅立つ。後に殘つた息子は親父の作つた家は自分には住み難いと他に賣り渡す。かう云ふ例が澤山ある。此世に理想の住居を作つて殘して行くと云ふ事が若い時からの一生の目的のやうである。そこに人生の憐れさが現はれるやうにも見ゆる。

六月三十日　もうそろ〳〵海水浴の季になる。一日と雖も海濱に止まるのが厭だ。それに體も殆んど恢復した。醫者の許しも出た。明日は東京に歸らう。

刹那々々の充實した生活

本間久雄

――兄

死を念頭に置く生活とそれを念頭に置かない生活といふことについて、自分の生活態度を云へと云はれると、私には一寸返答に窮します。

正直のところ、私に意識的に、「死」を凝視したことがありません。これまでそれをする機會に遭遇しなかつたのです。ですから「死」を念頭に置いて、――少くも死を、凝視して自分の生活態度を定めるといふ深刻な、或ひは逼迫した經驗も私には持ち合せがありません。

しかし「死」を念頭に置く生活と置かない生活とでは、どういふ相違があるか。この二つの何れを吾々は採り、又それに對していかやうた態度を取るべきかといふことについては、多少の考へがないこともありません。それをこゝで、思ひついたまま書き記します。

――兄

近代人は意識的と無意識的とを問はず、大抵「死」を念頭に置いてゐます。「死」を厭離するか、享樂するかの相違はあつても、とにかく「死」のすがたを凝視しようとしました。見守らうとしました。

「死」は「生」の對照語です。ですから生に對する執着と歡喜とがあればあるほど人は「死」を厭惡します。

しかも「死」が人間に取つてどうにもならない必至的な宿命的な自然意志であるといふことが、はつきりわかつて來ると、そしてその人の生に對する執着と歡喜とが強ければ強いほど、そこに絶望的な心持の生じて來るのが當然であります。

近代人は、この絶望的氣分を基點として、それから、さま〴〵の方向に生活の歩みを取つて居るのだと考へられます。或人はその絶望的な氣分を紛らすために輕快な享樂主義者となります。或人はその絶望的な氣分を超越し、解脱して三昧の宗教的境地に這入ります。或人はその絶望的氣分に浸り漬つて、つひにはそこに死の醜惡そのものをさへ享樂する惡魔主義者となります。その歩む途こそ、人に依つてちがひますが、「死」そのもののの宿命的自然意志であることを感知してゐるところから醸し出される、生に對する絶望的氣分を基調としてゐる點は何れも

同じだと思ひます。この意味で近代人は所詮厭世家であります。たとへ、その人がどんな享樂主義者であつても。

——兄

ユーゴーが「ボオドレエル君よ、君は藝術の天にたぐひなき凄慘の光を與へた。即ち未だ曾てなき一つの戰慄を創造した。」と云つて推賞したそのボオドレエルはその有名な詩集『惡の華』の中で「死のよろこび」と題して次のやうに歌つてゐます。

蝸牛匍ひまはる粘りて濕りし土の上に、
底いと深き穴をうがたん。泰然として、
われそこに老いさらぼひし骨を横へ、
水底に鱶の沈むごと忘却の淵に眠るべう。

われ遺書を厭み、墳墓をにくむ。
死して徒らに人の涙を請はんより、
生きながらにして吾れ寧ろ鴉をまねぎ、
枯れたる骨髓の端々をついばましめん。

おゝ蛆虫よ。眼なく耳なき暗黑の友、
君がために腐敗の子、放蕩の哲學者、
よろこべる無頼の死人は來る。
わが亡骸にためらふ事なく食入りて、
死の中に死し、魂失せし古びし肉に、
蛆虫よ彼れに問へ。猶も惱みのありやなしやと。

（永井荷風氏譯）

ボオドレエルがいかに「未だ曾てなき戰慄を創造した」かはこの短かい詩によつても窺はれるではありませんか。いかに絶望的な眼で、死そのものを凝視してゐるかは容易に首けるではありませんか。

——兄

死を念頭に置いた生活といふことを考へて第一に思ひ浮ぶのは、死の暗黑を光明に轉じた人としての故綱島梁川であります。不治の病に冒され永く病床に横つて常に、死に面してゐた梁川は死について他の人の思ひ至らない深い境地に到達したと云はれてゐます。彼れは自分と同じやうに病のために生命をさいなまれて、やがて死んで行つた病鶏を傷んで、自己の感慨を述べてゐます。

「汝と我と人生の悲哀をこゝに集めて、我は汝の中にわが悲哀を見、汝は我の中に汝の苦痛を見る。嗚呼々々、かくして汝

と我と、刻々死といふ大魔王の威力の前に屈服しつゝ、跪きつゝ、喘ぎつゝ、苦しみつゝ、歩一歩暗黒無邊の底に沈みゆくなり。」

から云つて彼れは自己と病鷄との、死にゆくものの苦痛を更に次のやうに深刻に述べてゐます

「苦痛は一切を默せしむ。我等が前には大地消え、萬有失せぬ。桓根に笑ふ花、苑面に戯るゝ狗兒、晴をよろこぶ鳥聲、露をたのしむ蟲語、日光、樹影、空色、水聲、すべて一樣何の有る所ぞ、有る所は、生死大海の流轉のみ苦痛のみ、悲哀のみ。唯々〳〵此の沈痛なる一事實あるのみ。友なし、親なし、君なし、神なし、國土草木なし。嗚呼、汝と我とかくして遂に滅びゆかんとする乎、つひに滅びゆかざるべからざる乎。」

實際死に面した人の心持ちはかうであらうと思はれます。死といふ沈痛な一事實の前には實際このやうに一切が空に見えるだらうと思はれます。

しかし梁川は、病鷄のいよ〳〵死んだのを見て忽然と覺醒したのです。彼れの自覺は忽然として「此の恐るべき同感的苦痛の威壓」から反跳し覺醒したのです。そして「死の苦痛と共に、其の自覺を有せざるものは、解脱なくして眠るを得べし。されど苦き〳〵死の苦痛の自覺を有する我等は解脱なかるべからず、又實に解脱の權能あるべきなり」と云ふとを悟つたのです。そして彼れはこのことを悟ることによつて「死を味うて勝利を叫ぶ」ことを、「因果に死して神に生き」ることを、同時に悟つたのです。彼れの有名な「見神の實驗」はかやうな悟りの上に築かれた彼れの體驗に外らないのであります。

――兒

梁川の悟りも、無論立派な悟りにはちがひないと思ひます。又、行住坐臥、死に面してゐたならさういふ體驗も得られるかも知れません。しかし現在の私には梁川の悟り、「因果に死して神に生きる」といふやうな宗教的な悟りは、縁が遠いのです。現在の私には、さういふ悟りに這入ることよりも、ボオドレエルの樣に死を憎み、嫌ひ、憤り、嘲る心持ちの方が本當のやうに思はれます。梁川の樣な悟りの體驗は、私には容易に出來さうにもありませんし、又私はそれを望まうともしてゐません。

――兒

さて大ぶ餘談に亘りましたから端的に、この文の冒頭に掲げた問題についての愚見を述べませう。

死を念頭に置く生活は人間を深刻にします。死を念頭に置かない生活は人間を常に低級な樂天家にします。これは云ふまでもありません。事實吾々は――低級な樂天家でない限り、死を

念頭に置かざるを得ないのです。一歩すゝめて云へば、吾々に取つては、無意識的であると、意識的であるとを問はず、死は厳とした一種の自然意志として、因果律として吾々の念頭に存在してゐる疑ふべからざる一個の事實です。

たゞ吾々に取つての問題は、この厳として、疑ふべからざる一個の事實に對して、吾々は果していかやうな態度を取るべきかといふことです。

私は梁川のやうな法悦の悟道に入ることを望みません。と云つて、ボオドレエル及びその他デカダン派の詩文人のやうに、死を憎み、嘲り、憤ることによつて、生活そのものを自暴自棄的にしたくはありません。私は、死を宿命的な一事實として厳格に考へることによつて、生活そのものを一層愛し慈しみたいと思ひます。

私の尊崇して措かないウオールタア・ペイタアはこれについて非常に暗示的なことを云つてゐます。

吾々はユーゴーの云つたやうに悉く死刑の宣告の下にあつて、只、不定の猶豫を與へられてゐるに過ぎない。その間隙が終ると共に、吾々は吾々の場所を去つて了ふ。普通凡庸の人は、この間隙を極めて不注意に過して了ふ。たゞ賢明な人のみが、それを最も充實した生き方で費す。

ペイタアはかういふ意味のことを云つてゐます。そしてその充實した生き方といふことを説明して、彼れは又かう云つてゐます。

吾々に取つて一番貴いのは刹那の印象といふことである。印象は元來が刹那々々のもので、吾々がそれを、捕捉しようとするうちに、去つて了ふのが常であるから、その刹那の印象を、その消え去らないうちに、力強く感受しなければならない。そこに人生の目的がある。人生の目的はさういふ刹那の印象を感受した後に求めるべきものではなくて、さういふ刹那の印象の感受そのものゝ中にある。言葉を換へて云へば「經驗の結果が目的ではなく、經驗それ自身が目的である」のである。だから、常に吾々は感受性を鋭敏にし、絶えず新しい印象を豐富に味はなければならない。

ペイタアの上の意見は、吾々の生活態度として極めて暗示的だと思ひます。實に刹那に生きること――これこそ、死を念頭に置くものに取つて最も生き甲斐ある生き方ではないでせうか。そしてそれこそ死刑の宣告の下にあるやうな吾々に取つて、最も生活を愛し慈しむ所以ではないでせうか。

――兄

死を念頭に置くことによつて、私は一層生活を愛し慈しみた

いと思ひます。そしてそのために刹那々々の充實した生活を望みます。死を念頭に置くといふ點から云へば私たちは前にも云つたやうにたしかに一種のペシミストです。しかし私は、此ペシミステツクな考へに更にオプテミステツクな考へを加へたいと思ひます。といふのは自己の生活を愛し慈しむといふ個的の感情は、自ら人類愛の全的感情に擴つてゆくからです。それは自己そのものが滅しても、人類は無限に進展するといふ人生肯定の信念に根した博大な感情です。この最も正しい意味のオプテミステツクな人生肯定の感情の裏づけられない限り、本當に生活を愛し慈しむ心持ちにはなれない筈です。たとへなれてもそれは偏狹な、自我的なエゴテイズムです。ですから死を念頭に置かざるを得ない私たちはそして死を念頭に置くが故に一層私たちの生活を愛し慈しむ私たちは、最も正しい意味の生活肯定の信念を心の底の底に把握してゐなければならないと思ひます。

思ひついたまゝを雜然と書き記しました。最後のところは無論細説を要することでせうが、それはいづれ他の機會にゆづります。

死に對する恐怖と不安

正宗白鳥

私は輕井澤にゐた時に鐵道線路で轢死した男を見たことがあつたが、同情の念に打たれるよりも、人間の死の醜惡に眉をも心をも顰めさゝれた。先日大磯で老いたる溺死人を見た時には目を閉ぢ口を閉ぢたその男の顏面がいかにも平穩なのが不思議なやうであつたが、私はいくらそれを熟視しても、死の神秘も尊嚴も感ぜられなかつた。

人間でも犬でも猫でも、死んだものはみんな醜い。そして、今の私の心には死者を恐れる氣持は些しもない。私は怪談や幽靈噺を讀むことがあるが、一度も怖いと思つたことがない。

しかし、私は自分の死を恐れてゐる。普通人以上に恐れてゐるのであらう。死に對して、動搖しない覺悟をしてゐなければならぬと思ひながら、私の死に對するアヤフヤな態度は十數年前も今も同じことなのである。

○

私は現代の智識階級の一人として、基督教や佛教やその他の

宗教に說かれてゐるやうな死後の信仰を持つてゐない。地獄や極樂があるとは思つてゐない。ソクラテスが毒杯を手にして靈魂不滅を說いたことを考へても、私の心には何等の希望をも生じない。今日の新聞雜誌に現はれる通俗科學程度の知識が、私をして古來の聖人高僧哲人の敎へを輕んじしめるやうになつたのである。私は數百年前の歐洲に生れてゐたなら、多分ローマンカソリックの傳統的信仰に全心を捉へられてゐたであらう。(それを秘かに疑つてゐたかも知れないがその疑ひは、今日の私が進化論を疑ひ、天體の運行を疑ひ、醫術を疑つてゐる程度の疑ひに過ぎなかつたであらう。)私が數百年前の日本に生れてゐたなら多分神儒佛の正統の敎へに信賴して安んじてゐたであらう。近代化した意味でなしに、文字通りに淨土を信じたり肉體や靈魂の復活を信じたりしてゐたであらう。また私が百年後に生れるなら、百年後相應の信仰に支配されるであらう。死といふ動かすべからざる大事實についてさへ時代々々によつて、人間の態度は違つて行くのである。よく考へると人間の知識は出鱈目だと思はざるを得ない。そして死後の世界など、人智では永遠に分らないのであらうといふことを今日の時代に生れた私は考させられて、一生を不安に過さねばならぬやうになつてゐる。

○

肉體が健全で食色の欲望が障礙なく充されて社會的名譽も傷つけられてゐなければ人間は死については考へることはあるまい。考へてもそれは輕い遊戲に過ぎない。死を思つたゝめに一度の食事がまづくなることもあるまい。露西亞の作家などで死の恐怖を痛切に書いた人もあるが、その人々もさういふ凄い文章を筆にしながらも、葉卷の香りをうましとし、酒の匂ひを喜んでゐたので、砲彈の前に立ち、あるひは白刃を喉に向けられた人のやうに、身に迫る死を痛感してはゐなかつたのにちがひない。死の恐怖を筆にし口にしてゐる人は、まだ眞にそれを感じてゐないのである。私もよく眠つた天氣のいゝ朝海岸を散步するとか、綺麗な料理店の食卓でうまい者でも食べてゐる時とかには、生きてゐる幸福を感じていゝ氣になるので、やがて身に落ちかゝる暗黑の死などを痛切に感じようたつて考へられないのである。

法然やバンヤンは、平常時に死後の地獄を生きながら實感して戰慄したといふことだ。私はさういふ氣持になれない自分の鈍感を悲しむとゝもに、また、今日のみを樂んで、死の問題などを毫も念頭に置かない多數人のやうにもなれないのを悲しむ。

歐洲の中世紀の人々は來世を現世よりも重んじて、[illegible]な

ども繁盛した。印度には今でも來世のために現世を犠牲にして難行苦行をする人が多いと聞いてゐる。現代の日本人並みの常識を持つてゐる筈の私が、それを一笑に附し得ないのは、私の心にはまだ現代の通俗科學だけでは滿足し得ない何かを持つてゐるためなのであらう。

○

私は死の問題について、確信をもつて他人に說き得るやうな非凡な體驗をも知識をも持つてゐない。それについて、他人の說くところに信を置く氣にもなれない。

生死を忘れて現在の生活を充實したい

法學博士　吉野作造

○

與へられた問題に就てどう答へていゝか分らない。振り返つて省みるに、僕は平素「死」といふ問題をあまり深く考へて居ないやうだ。

僕の生活振りを有の儘に白狀すれば、コツ〳〵其日〳〵の生活を生まじめに築いて行く丈の事である。何時死ぬか分らぬからとて狼狽へることも無ければ、當分は斃れまいと安心して油斷するといふ程でもない「死」といふ非常の場合のことは頓と氣に留めないで甚だ平凡な生活を續けて居るのである。

而して僕はまた今のところ斯の平凡單調な生活に格別の不滿を感じても居ない。

○

若し僕が病身であつたら少しは「死」といふ問題を考へたかも知れぬ。所が生れ付き甚だ薄弱の質の癖に、物覺えして以來實は病氣といふ程の經驗をしたことはない。此頃は年のせいか若干倦怠を覺へることあり從つて可なり、用愼はしてゐるが、兎に角自分は活き物だから少し位の病氣には勝てると自信してやつて居る。相當の注意をし不合理にからだを酷使しない限り、人間のからだは案外強いものだといふが僕の多年の確信である。世間の人が少し位の病氣に神經を過敏ならしむるを見ると、僕はいつも云ふ、彼等は人間をば病氣製造機と觀ておると。生命の力に活きてゐるといふ確信は、どれ丈け我々の心身を丈夫にするか分らないと考へて居るのである。

夫れにも拘らず不時の災厄に斃れたとしたら、其時は仕方が

ないと諦めて仕舞ふのみだ。其際僕に於て不平もなければ遺憾もない積りだ。

夫れかと云つて僕は不治の重患を抱いて瀕死の病床にもがいて居る人々の經驗に全く同情がないではない。僕も時々胃痛にでも取り憑かれたらといふ樣なことを思ひ廻らすこともある。いよ〳〵斯くなつた場合には亦自ら別個の覺悟をするに相違なからうが、併し僕は無病息災なる現在に於て、他日非常の災厄を想像して故らに現在の生活方針をモヂフアイする必要はないと考へて居る。

○

と云ふ意味は、僕の現在の生活振りが「死」を眼中におく夫れに傚つて居るといふ意味では毛頭ない。

病人でもないくせに何時死ぬか分らぬとて死後の計を爲す人がある。斯うした「死」を眼中におく生活は、死生の境に彷徨して居る人に取つては勿論當然の行き方だらうが、健康無病な平人に取つては好ましい行き方かどうか疑はしい。鐵の草鞋に石橋を叩いて渡るのは、安全は安全だが、斯くては我々の生活に高い力強い味ひが出て來ない。相當の人物が斯んな往き方をして居るのを見ると、生長盛りの子供が去年拵へた狹い洋服を窮屈さうに着てゐるのと同じ樣に、如何にもみじめな感が浮ばないでない。

人間らしい創造の生活には、多少の冒險を伴ふのは已むを得ぬ。前途の心配をする遑がある位なら、我々はモツト現在の生活を充實して行きたい氣がする。此意味に於て少くとも僕は、「死」を眼中に置く生活なるものに何等の親みを有つて居ないのである。

○

そんなら「死」を眼中に置かぬ生活といふ方はどうか。之を生死のけじめを忘れて現在の生活を充實するに專念するといふ意味に取るのなら僕は大賛成だ。僕自身現に今「死」だの「生」だのといふことを深く念頭に置いて居ない。けれども一部の道學先生が往々我々に教へて呉れる樣に、之を「死」に依て心を動さぬ即ち「生」に執着せざる生活を鼓吹する意味に取るのなら、僕は敢てこゝに大嫌ひだと斷言する。人間「生」に執着するは自然の情だ「死」を眼中に置かざらんとするは則ち不自然極まる修養といふべきではないか。而して特にまた「生」に執着す可らずとする道德的理由もない。命を惜んで節義を誤るの避く可き位の道理は、決死の修養を說かなくとも呑み込ましめ得ることと思ふ。

ことに僕が「死」を眼中に置かぬ生活なるものに反感を有す

るは、從來我國にこの事の說かれたのは、主として戰國道德としてゞあるからである。常に命は君の爲に捨てたものと思へ。天地前に挫けてもビクともするな。即ち腕力の鬪爭に於て臆病であるなと敎ふる所に全部の意味は存するのである。而して斯んな態度は決して平和開明の今日に必要不可缺要件ではない。犬に吠えられて飛び上つたり、雷が怖いとて震ひたりしてもいゝから、我々は寧ろモツト眞實と溫情とに富んだ人間でありたいと思ふ。

所謂「死」を眼中に置かぬ生活を輕卒にもてはやすモ一つの結果は、不自然なる修養に骨折ることより性情の溫藉を傷くる事であり、「生」に未練を殘さぬを誇る所より好んで危險に身を投ずることであり、又「生」に將來の望を絕てるより道義的責任を蔑にすることである。所謂命知らずの無鐵砲が社會に迷惑をかける例は、今日に於ても可なり烈しいではないか。此點に於て僕は更に進んでこの「死」を眼中に置かぬ生活なるものを呪ひたいとさへ思ふ。

あくまでも現實萬能

菊池寛

自分は、死に就いて何も考へたことがない。自分は、あくまでも現實萬能だ。むろん、大病にでもかゝつて死に面するときは、多少の煩悶はするかも知れない。然し、それが死病であれば、そんな煩悶も、死が短かくして呉れるだらう。生に就いてさへ、考へ切れない。況んや、死についてをやだ。生きる丈生き、そして死が來れば百年目だ。臨終は、少し苦しいかも知れない。が、いよ〳〵となると、案外あきらめが付くやうな氣がする。未來は必ずないだらう。もしあつたら、儲けものである。

死の價値

杉森孝次郎

世に甚深の問題のひとつは、死の價値だらう。古來なに人か

永生を欲せざりしものがあつたらう。しかも、なに人か脅生に過ぎしものがあつたらう。求めよ、さらば與へられん、叩けよ、さらば開かれんとはかなりの知言だが、人の永生欲と、かれがその欲求を滿たしうるりとの間には、求めて與へられず、叩いて開かれざる一例が確實に横たはつて存在することを、またなに人か正直に否定しえよう。

プラグマチストのシラー氏であつたと記憶する。『人間主義』の卷末あたりの一二章に於いて、不死問題、來生問題を扱つて或る新鮮味を發揮した。死を怖れ、憎み、厭ふこゝろは、生きとし生けるものみなを通じて、至切だ。しでらく人類だけについて見ても、このこゝろは最も普遍的にして且つ最も深强なるものゝすくなくとも一だ。これほど一般的な、そしてこれほどまじめな要求が、絶望的に、本質的に、絶對的に不達成であるといふことは、考へられない。子々孫々のかたちにおいて永生するとか、事業や感化のかたちに於いて永生するとかいふたぐひの物足らない可能としてでなく、明確に切實に各人の永生欲を、もしくは惜死性を滿足させる可能が客觀的に、科學的に人類には許されてゐるにちがひない。もしもさうでないとするならば、人類の要求があまりにばかげたものとして見なほされることになる。といつた風の論理がかなりの熱を帶んで展開されてゐたやうに回想する。

シラー氏が試みた論斷は、人間性の正直な告白としての價値を、それの構想の一大部分に於いてたしかに帶着してゐる。しかし、氏の不死論を讀んだのちに、わたくしの怖死性は、多く影響されなかつたやうに追憶する。わたくしは。死にたくない。しかし、事實と、眞理と、聰明と、知識とを欺くことには、それみづから死に値するなにものかがある。生の一要素はわれらにあつては、知識に對する愛だ。知識に對する愛を犠牲にして、永生を信ずることには、本質的困難がある。それは實に不可能事だ。

人生に死がなかつたなら、なに人も避けがたき絶對的運命としての死がなかつたなら、人生の品質は、現にそれがあるよりも劣惡に於いて加はる一面の可能はたしかに考へられる。『自然は、われらに永久のわかさを拒否することに於いて、すくなくともわれらを非利己的に、そして高尚になるやうに招請した』とは、サンタヤナ氏の觀察だが、含意と價値はこの觀察に限りもなく豐かに長く帶ばれうる。

各人の身の上に不死が許された人生が、いかに貪慾の無制限的自己肯定の獨占場となるかは、大ほかた豫想される。英雄がどんなにかれ自身の意力と智力を恃んでも、また權勢慾心に氣おごつても、百年をも待たずしてかならずくるにきまつてゐるか

れ自身の死に想到せば、かれもまた謙抑と「不可能」を學びうべき境遇下に生きると觀ぜられる。いかなる美人も、たかが百年の久しきにわたつてさへかの女自身の美に驕誇することはできない。曾つて漢は興こり、楚は亡んだ、興漢の主人公沛公が、羽をして、漢軍四面皆な楚歌するを聞かしめし當夜の瞬間に、なに人か沛公の、遠からず見舞はるべき死のかげを明視することができたらう。力は山を抜き氣は世を蓋ふ、時利ならざれば騅逝かずとは、アルプス突破のナポレオンの天馬行空的意氣に滿ちた項王が、急にセントヘリナの落日を眺むるに及んだ際の告白だが、その事ありし瞬間の次ぎの瞬間ともいふべき近き後人の目から見れば、漢楚興亡ふたつながら丘土、なに人の雖も時の不利をまぢかに望む。

本朝に於ける死の勝利の劇的一例は、平相國の最後か。「今生の望は、一事も思ひおくことなし。ただ思ひおくこととては、兵衛の佐頼朝が首を見ざりつることこそ、何よりも、また本意なけれ。」たとひ、人に、入る日を扇ぎ呼びとむる力は持たれようとも、かれの、またかれの愛友のいのちを松の一樹の壽命ほどだにも保ちつなぐ力はなささうだ。かなしきは生あるものの、その生に執着するこゝろと、そのこゝろも、その生も、外力によつて、裂かれるなま木のやうに、有から無へ移されることだ。われらの永生欲は生排される。その永生欲が人に必在であると同じたしかさに於いて、その生排は人に必至する。

思想史上に於ける佛教の全位置は、死を問題とした點に専ら倚繫するとさへ考察される。死は、いかなる結論に到着するかは別事として、意識する生類によつて、問題とされる資格を確實に持つ。佛教の不完全は、しかしながら、死を問題とした功績あるにかかはらず、その結論が、生の勝利であつたところにある。基教に於いては、死が、恐らくは不十分に問題とされた。しかし、基教に於いては、結論が生の勝利に傾いてゐるだけは功績だ。「そして見よ、われなんぢらと共に常にあり、世界の終末に至るまでも」の言尖は、無限に永かるべき將來を、有限に短かい將來であるかの如くに指す創造の針さきだ。生は創造だ。創造の反對が死だ。

生くる限りば創造主義の實践的信者であることが、正しい生きかたであると思ふ。死は、死するものにとつて、すでに非自己の領域に屬する事柄だ。死は生の非存在のかたちだ。生は、それみづからによつて顯著だが、死は、生の不在によつて顯著だ。生といふ實在はあるが、死といふ實在はない。實在即生であり、非實在即死であるのだ。

眞善美を、科學、道徳、藝術の諸形式に於いて生産し且つ消

費することは生の自己肯定の理由を形成する主要素たりうる。科學、道徳、藝術は、それみづから生のそれだけの存在だが、先づ生きないでは、科學も、道徳も、藝術も、不可能だといふ一層原始的な、それ故に根源的な事理もある。

各人が與へられる各瞬間は、各人によつて滅多に充足されないと考察される。確實に、また現實に與へられてゐる瞬間をだに十分に使用しない分際にゐながら、生の短かきを歎じ、永生を欲するが如きは不まじめだ、無自覺だと判斷される餘地はたしかにある。永生を願欲するひまがあるならば、現瞬をもつとよく生かす、すなはち現瞬にもつとよく生きるやうに省察するが正道であるにはきまつてゐる。眞に永生を要求し、眞に暫生をかなしむ有資格者が、古來一人でもありえたかは、その眞にの標準次第では、否なと明白に答へられる問ひだ。われらの生は、われらにとつて、永がすぎるとも見られる。かばかりの生產と消費とをなすに、こんなに永い生はいらぬ筈だと判斷される可能はたしかにある。瞬間をだに滿たしえない辯に、永生を貰つてどうするかと、われらの理性は時あつてかささやかぬでもない。

多くの有神論者が意味するやうな神の存在をば、信じない方が生に忠だと、また眞善美だとわたくしは考へる。しかし、假にもし或る種類の神があつたら、その神は、人類が、百年足らずの暫生をだに十分に享用しえない心的低能狀態から進化してもつと永い生を立派に享用しうる能力者になつたのを見定めて、しかるのちに永生人に機會を與へるのではなからうか。

各個生の滿足は、それが內に本質的に具有するすべてに、十分なる自覺及び實現が與へられた場合の問題であるべきだと考へる。しかし、個生は全生を不完全にはらむ存在だから、死の悲劇は、否な實に死の悲哀は、いかなる正しき人生觀によつてさへも決して全然は救除されない、生きとし生けるものにとつての、殊にすくなくとも進步的文化人にとつての一本質的可能だと確認されるかたちに於いて再認される。

いはゆる靈魂不滅は、輪廻轉生と同樣に、無智を原因とする現象だ。眞に永生をねがふこゝろは、そんな安價な解決案をば、輕蔑と義憤をもつてむかへるだけだ。心理學者ジエームスの發表の、この點に關して多少不滿足な感をわたくしに與へたものを讀んだ覺えがある。

時論

武器問題に依て惹起せられたる我が東亞對策の疑問

―敢て軍閥の人々に問ふ―

法學博士 吉野作造

○

所謂武器問題はどうにかかうにか鳧が付いたやうだ。併し形の上で始末のついたのは、要するに表面を糊塗したに過ぎぬので、軍閥の陰謀又は放恣に關する多數國民の疑惑に至ては、決して實質的に氷消したのではない。

武器問題の新聞に現れた時、僕は二十年來軍閥の東亞に於ける各種陰密の活動と照し合して、直に「又か」と合點したのであつた。換言すれば之亦軍閥多年の目論見の一つの試みとして誠に有りさうなことゝ思つたのであつた。前科何犯の泥棒が深夜人の家に入り込まんとした時、之を正式裁判に窃盜罪として訴へやうといふには成る程明白な證據も要らうが、僕達が彼を泥棒だとひそかに認定して互に警戒する分には證據も何も要つた話でない。泥棒だと思はれたくないなら、向ふから今度だけは潔白だといふ明證を擧げ來るべきだ。今度の問題に就ても、多數の國民が直に軍閥の禍心を疑つたのは當然の話で、證據の有無を待て始めて論ぜらるべき問題ではないのである。

然らば軍閥は過去に於てどんな事をやつて居るといふのか。僕の寡聞を以てしても尚幾多の事例を擧ぐることが出來るが、煩しければ今は說かぬ。玆に僕が主として讀者と共に考へて見たいと思ふのは、之等の事實を綜合して軍閥は一體東亞の天地に昨今何を目論見て居るかの根本問題である。此點をよく念頭に入れて置くと、軍閥暗中の活動に關する各般報道の意味も分るし、又其が國家に及す功過の判斷も明白につくと思ふのである。そこで先づ此の軍閥の目論見なるものゝ輪廓を露骨に描いて見る。そは大凡そ次の樣なものであらうと思ふのである。

(一)張作霖を極力援助し、寧に彼を滿蒙の主人公たらしむのみ

ならず、遠く北京一帶にまで其勢力を張らしむる事（出來得べくんば支那全部又は少くとも揚江以北に彼の號令を行れしめんと冀ふことは勿論である）。

（二）西伯利に在ては所謂白派と稱する保守的反動的勢力を十分に援助し、其の反對に所謂赤派は徹頭徹尾之を抑ふる事。

（三）日本に對する双方のこの關係を利用して滿洲と西伯利とを連結せしめ、斯くて東亞の天地に日本と特殊な關係に立ち又從つて特に日本に好意を有する勢力の樹立を圖る事。

（四）斯くすることを日本帝國の一大利益なりと爲し、從つて此目的を達する爲には有らゆる手段を取て悔ひざる事（國際信義や世界の道義的批判の如きは所謂國家の利益の前には顧慮するに足らぬとすることと勿論である）。

○

若し國際上の問題が技師が機械を運轉する樣に此方の思ふ通りに動くものとするなら、かの軍閥の筋書の如き、固より我が帝國の一大利益たること一點の疑がない。張作霖が日本の力をかりて優勢になり、之が同じく日本の援助の下に優勢となつた西伯利白軍と結んで、茲に東亞の天地に有力な一個不拔の勢力が樹立せられ、而して之が一から十まで日本軍閥の制令を奉じ唯々諾々維れ命遵はさらんと力むるものとせば、我が日本に取つて之れ程幸なことはない。滿洲や西伯利がさう旨く筋書通り運ぶものなら、序に歐露も、否、全世界をも、日本軍閥の藥籠中のものにして貰ひたいものだ。少くとも朝鮮などは一日も早く溫柔猫の如くならしめて欲しいものだ。が、併し事實は中々さううまく行かぬではないか。何故思ふ通りに行かぬかと云ふに、そは相手は活きた人間だからである。由來軍閥者流の計劃には、機械と人間との見定めの付いて居ないと云ふ弊害がありはしないか。折角の人間の魂を無理に殺して詰らぬ機械のやうに之を酷使するのは、一歩軍隊の營門を出ては通用しないのだ。況んや外國の民衆と接觸するに於てをやだ。

故に吾々は、單純に日本の立場のみから觀て誠に結構の樣に見ゆる前記の計劃の如きも、之をいよ〳〵實地に行ふ段になると如何云ふ結果を相手方に生ずるものか、之を極めて細心の注意を以て觀察するの必要があると思ふのである。而して此見地からして我々は敢て斷言する、わが軍閥の計劃の如きは實に荒唐無稽無益有害の甚しきものであると。

○

聞くが儘を書く。張作霖と日本軍閥との腐れ緣は一朝一夕の事ではない。その日本が附いて居て而かも此の春の戰爭に奉天軍の一敗地に塗れたのは、張彼自身の不名譽といはんよりは實

に日本の名折れだと、軍閥の人々は考へて居るさうだ。支那に於ける日本の威信の恢復の爲にも、是非もう一度戰爭をして勝つて見せねば相濟まぬと信じ切つて居るといふことである。之がまた張作霖自身の燃ゆるが如き復讐心と相結んで、滿洲の野にはこの半年來極めて險惡なる空氣が漂うて居たのである。張作霖は實に斯くして西伯利方面から盛に武器を輸入して居る。西伯利の武器が無數に奉天に向つて流れて居るの事實丈けは、天下公知のことゝして最早何人も疑ふことは出來ない。

之に對して滿洲の土民は如何考へて居るか。その初め絕對に戰爭を再びせぬといふ張作霖の確約の下に就任したと云ふ省長王永江が先き頃錦州に引退した事件の裡にも明白に現れて居る通り、一般の土民は勝負の如何に拘らず此上兵を動かし此上課税を徵せらるゝに堪へ難しと怨じて居る。況んや不評判なる擧兵の結果如何なる意外の出來事に依て張の沒落を見ぬと限らぬに於てをや。若し斯んなことにでもなると、頭首を喪へる滿洲の天地は少くとも一時どんなに紛亂を極めるか分らない。

張の再戰準備に汲々たるを觀て如何に滿洲の商民が心中の不平を燃やして居るかは、一度滿洲に足を入れた者の如何にしても見逃し能はざる所である。而して彼等土民は、張をして再戰の決心を固めしめたもの、少くとも張をして再戰に決意せしめたものは、日本の助力だと信じて居る。日本の軍閥には勿論相應に辯明の途は立て居るであらうが、土民の方では張の準備が整うと正比例してまた陰に排日の感情を高めつゝある。知らず、我々は之れ程の犧牲を拂つてまで張作霖の我儘を助けるの必要があるのだらうか。又知らず、我々國民は排日感情の昂騰に因る各種の損害を忍んでまで軍閥の陰謀を默視せねばならぬものだらうか。こゝに我々は第一に大なる疑問を懷くるものである。

○

また聞くが儘を書く。此春日本軍撤退の閣議の決定が彼地に傳るや、西伯利の赤派は時到れりと爲してソロ／＼動き出して來た。傳統的に赤派を嫌忌する我が軍部は、スワコソ一大事と白派を武裝して之に對應せしめんとした。之には武器が要る。併し公然武器を供給することは長春會議の手前出來ぬ。何とか目に着かぬ樣白派武裝の目的を達する方法はないかとて思ひつかれたのが、チエツクより保管を賴まれてゐる武器を貨車ぐるみ輸送することであつた。軍閥昨今の宣傳に依れば、メルクーロフの一派が盜んだともいへば原少佐が獨斷で授命したともいふ。同一官憲より發する說明の彼此異る所に、滑稽なるゴマカシの暴露あるかにも感ぜらるゝが、何れにもせよ斯んな問題の

起るのは、畢竟わが軍閥が極めて淺薄な見識に基いて赤白の區別をつけ、そして盲動的に赤を抑へて白を押し立てるに熱中し來れるが爲ではあるまいか。殊に外務當局が政府の決議に基き或る條件の下に赤派と交渉協議を重ねつゝある眞最中、無遠慮に白派を助け、國家的信義を傷けて屁とも思はぬなどは、傍若無人を通り越して、正に狂人の沙汰としか思はれない。二重外交の弊の叫ばるゝも尤もの次第だと思ふ。

○

滿蒙を支那本部より、又東部西伯利を歐露乃至チタ方面より、强て分離せしめて玆に獨立の政權を樹立することの當否如何、殊には這の計劃に人爲的援助を與ふることを敢て我が帝國對策の大綱とすることの得失如何は、極めて愼重に考慮すべき問題だと思ふ。之を大きな問題だといふ所以は、啻に之が爲に費す所の人的並に財的犧牲の巨大なるが爲のみではない。假令之が帝國の將來の爲にいゝ事だとしても、公然と質せば知らざる眞似して國民の耳目を全然掩塞し、二三軍閥の策士が暗々の裡に之れ程の大事を專斷擅行するのは、其自身甚だ恐るべきことではないか。

更にもつと恐るべきは、其の目的を達する爲に採る所の手段である。否、目的を達する爲には手段を擇ばざらんとするの態度である。今は昔、同じく軍閥の策士は、腹心の者を使嗾して在外同胞の住家に放火せしめ、甚しきは土匪と通じて掠奪をすら敢てせしめ、之を口實として支那の領内に兵隊を送らんと企てたこともあるとか。いろ〳〵の形で言論の自由が拘束されて居るから、內地の同胞は案外平氣で知らずに居るも、支那に於ては無論のこと、遠い外國に於ても之等の點が公知の事實として幾ら日本國民の信用を傷けて居るか分らない。今度だつて之に類した事全くなしと考へられぬとて、內外の物議は可なり高い樣である。斯んな淺墓な、すぐ尻の割れる樣な馬鹿を盡してまで、盲滅法に侵略的突進をやられては、我々多數國民の有難迷惑は誠に此上もないのである。

我等は數歩を讓りて軍閥の人々の誠意を諒としやう。彼等といへども日本の爲めよかれと謀るのであらうから。併し其考は實は根本的に間違つて居るのみならず、其の手段に至ては亂暴とも何とも云ひ樣がないのだ。火事があつては大變だらうからとて、飛んでもない時ドン〳〵水をぶつかけられては堪つたものではない。軍閥の人々にして眞に國家の爲に闘らうとなら、モ少し謙遜に他方面の言説にも耳を傾けて貰ひたいと思ふ。帷幄上奏の牙城に立て籠り、天下の群言を蹂躙しつゝ獨自の妄見を振り廻す一方では、誠意があればある丈益々國民の迷惑はひ

どいのである。

○

僕は軍閥の人々の策謀を淺慮だと云つた。色々の意味で其の淺慮を嘆ずるものであるが、中にも援助の目的物を思ふ儘に操縱し得る底の木偶漢中に求むるが如きは、其の最も淺薄拙劣なるものであると思ふ。木偶の坊を權力者に守り立て、之を傀儡として蔭から我々の經綸を行ふといへば、誠に旨い話の樣だけれども、此種の望みは結局本當の勢力にはなり得ない。幾ら援けたつて援け甲斐がないのである。現に軍閥の連中は、セミヨーノフに於て、ホルワツトに於て、又コルチヤツクに於て、既に屢醜き失敗を繰り返して居るではないか。若し又偶々當の相手が本當の傑物であつたとしたら、困る間だけ猫を被つて我々にすがり、適當の潮時を見計つて我に寢返りを打つにきまつて居る。レーニンが獨逸皇帝を利用した樣に、又清朝時代に日本に賴み切つた支那青年の革命黨が今や必しも日本の傀儡でない樣に、少しく氣骨のある程の者は何時までも他人の制令に聽くものではない。助け甲斐のある奴は必しも日本の思ふ通りにならず、操縱の完全に利く類の者はどうせ早晩滅亡するに極つて居るとせば、軍閥の人々の目論見は、畢竟砂上に樓閣を築くやうなものではあるまいか。

狡猾なる御用商人が動もすると官界の俗吏と結托して濫に不正の利を貪らんとするが如く、正々堂々の戰陣を張る丈けの勇氣と才能とを缺く候補者が、賄賂に依て不義の勝利に急ぐが如く、眞實の力を以て自由競爭に勝つの自信と奮發心と無き者は、ともすると醜汚な手段に由て傀儡を作りたがる。斯くして世を毒するは勿論、併せてまた自己の眞實の發達を傷くること夥しい。この陷り易き過誤を繰り返して悛むる所を知らざる、軍閥の爲に僕は甚だ之を惜むものである。

軍閥の人々が是れまで白羽の矢を立てた連中の如何なる種類の者かは、餘りに氣の毒だから此上詮索はしまい。只茲には之等の連中は日本軍閥の到れり盡せる援助あるにも拘らず、盡く敗亡して――而して我々から觀れば之は當然の成行なのであるが――跡方もなくなつたことを一言するに止める。斯くてもなほ軍閥の人々は從來の謬見から自らを救はうとしないのであらうか。

（九月十二日）

小題小言四則

此間古本屋で榴彈私說と云ふ寫本を買つた。著者は越中富山の儒者殿岡北海である。美濃紙十枚に綺麗に書いてあり、中一

枚飄弾弓なるものゝ密藏をさへ入れてあるのから想像すると、之を版下にして其儘上木する積りであつたらしい。嘉永六年十一月の日附があるのでも、ペルリの渡來に促されて起つた例の外冦掃蕩策の一種たること疑ない。

其の云ふ所を聽くと斯うだ。このたびの夷狄渡來の魂膽は、要するに近來滿清に戰勝を占めたるに乘じて我が國をも併せ席捲せんとするに在るや疑ない。然るに西人は戰爭をするに弓銃を用ひず鐵炮及榴彈を用ゐる。故に我々も亦之に應ずる特殊の設備がなければならないと。乃ち著者は進んで榴彈の功用を述べ、其用法や製法等にも說き及んで居るのである。西洋では圓徑二寸五分の鐵丸を用ゐ、まゝ木又は玻璃にて作れるもあるが、自分のは木で作るのだといふ。木製のは、害人的功力に於て稍劣る所あるを免れぬも、携帶に便に又投げ易く、ことに價の安い（一個銀十匁の豫算なりといふ）といふ長所がある。之を用ふる方法は、手にて投げるのだが、更に飄弾弓にてはじき出せば五十間は優に飛ぶ。密集し來る敵陣を挫くに最も妙だ。而して彼方は船で遙々渡來するのだから自ら其携へ來る數に限あるが、我方は日に〳〵製造して行くのだから謂はゞ無盡藏だ。故に之に依りて大に敵を苦しめ、彼等の膽を消し舌を卷かしむることは決して六つかしい事ではない。

最も有効に榴彈を使ふ方法は、彼等が『上陸して城邑に攻め來らむ……其時我が兵山上に埋伏し、賊兵山下を行過るを待ち、其殿の兵既に來着せるとき、伏兵起りて其跡備の程よき所を、兩方の山上より榴彈を霰の如く投掛る』のださうだ。斯うすれば榴彈それ自らが大に敵を殺すのみならず、『賊兵等擔ふ所の火藥に燃付き寇等一時に虀と爲して盡く灰燼と爲すに至』らんともいふて居る。

併し敵が此方の注文通りうまく山の裾を通て呉れゝばいいが、然らざる場合はどうするか。夫には敵が船からまだ上陸せざる中にやつ付けて仕舞ふ方がいゝ。其爲にはまづ角力の才氣ある者を撰んで隊長とし、足輕仲間の類を集めて平素擲彈の稽古を爲さしめ、又江戶の町鳶を拔擢して特務隊を作る。敵船段々陸に近くを待ち、鳶等をして各三間乃至五間の長竹梯を數百座海岸に並べしめ、其上より兼て用意せる兵士をして千餘人代る〳〵榴彈を亂投せしむる。左すれば敵は事の意外に出づるに狼狽て、我軍の必勝を得ること萬々疑ある可らずと云ふて居る。

猶ほ榴彈の製法については悉しい事は述べて居ぬ。最後の一節に、『甚秘と雖も有志の人其君侯の命を奉じて來り問はゞ、喜んで其製法を傳ふべし』と、北海先生頗る眞面目である。

今から觀れば噴飯に堪へざる愚論だが、之が當時の堂々たる學者の口から出た說だといふ所に、僕は讀者の注意を促して置きたい。平素世界の形勢を研究し置かず、突如其の押し寄せ來る新興勢力に打ツ付かると、餘程の識者でも、狼狽のあまり、飛んでもない愚論を憶面なく吐くものと見へる。昔の儒者を今でこそ笑へ、今日でも實は此種の人々は案外に多い。例へば勞農露西亞とか共產主義などに對する當局者又は識者、殊に官僚軍閥の人々の態度のうちに果して斯うした憐むべき妄斷がないだらうか。否僕は今日に於てもなほ此種幾多の北海先生をわが有識階級に見出すを遺憾とするものである。就中、最近數年間の我が軍閥の滿蒙西比利に於ける幾多の陰謀（？）の如きは、――果して道途說く所を眞なりとせば――其荒唐無稽突飛有害なる點に於て正に北海先生以上である。昔の事は一場の笑話として聞き捨てにしても濟む。今日目前の事實に對しては、我々國民はモット張目聳耳して警戒監視する所なければならぬではないか。

○

旅に出て汽車の中に週刊朝日を讀む。十月一日の朝だ。「滿洲の馬賊」といふ題のもとに斯んな事が書いてある。『かういふわけで、馬賊といへどもその道を以てすれば別段こわいこともなく、恐しいこともない。然るに琿春事變の如き或は最近の局子街事件の如き大事變を出來させ、可憐の同胞をして無慚の最後を遂げしめたのは、これ全く無智の然らしむる所であつて、全くわが陸軍の罪である。蓋し何の事情も知らず、地方の風俗慣習も辨へない出征先の若い將校が、暴虎馮河の勇にかられて、廢せば可いのに、なまじつか馬賊討伐などをやつて見る。甚しきに至ては百何十名といふ大勢の馬賊を捕縛し、之を百里も二百里も引摺り廻して、遂に安東縣まで連れて來て支那官憲に引渡し、日本兵の監視のもとに悉く之を銃殺せしめる。爾來彼等の殘黨は、父兄の迷魂を弔ふためには、子々孫々にいたるまで日本人に仇して見せると豪語して居るのである』。この記事の作者は、多年大連の滿鐵本社に在て專ら調査研究に從事せらるゝ上田恭輔君である。僕の平素最も提敬する學友上田君の筆なるだけ、この記事は特に僕の注目をひいたのである。

○

外國留學の途上に在る友人から船中の消息を洩し來れる私信の一節にこんなのがある。『いろんな人に遇つていろんな話をきゝますが、中に就き最も笑止千萬なのは、印度人が英吉利を嫌つて日本人に好感を寄せてゐるとの觀察の下に、其獨立運動にも加擔してやらうかと云ふ樣な俠氣を出して得意になつて居る

船客が可なり多かつたことでした。隣りの朝鮮を暴虐の手に委ねたまゝ、遠い印度を先づ助けやうと云ふのでせうか。其の印度人の所謂對日好感を朝鮮人の對米好感――彼等が嘲笑の的とする所の――よりヨリ理由あるものと考へてゐるのでせうか。』支那に於ける對日反感の一つの重なる原因は、其のむかし熱心に革命運動を助けた俠勇の志士が、其後餘りに彼等の感恩を利用したからではないか。向ふの運動の眞の動機を深切に理解するの勞を取らず、漫然として人の難に走せ赴くといふのは、快は即ち快なりと雖も、今日の國交に於て之程厄介なものはない。渉外的問題に就て我々はモツト聰明をひらく所なければならない。

○

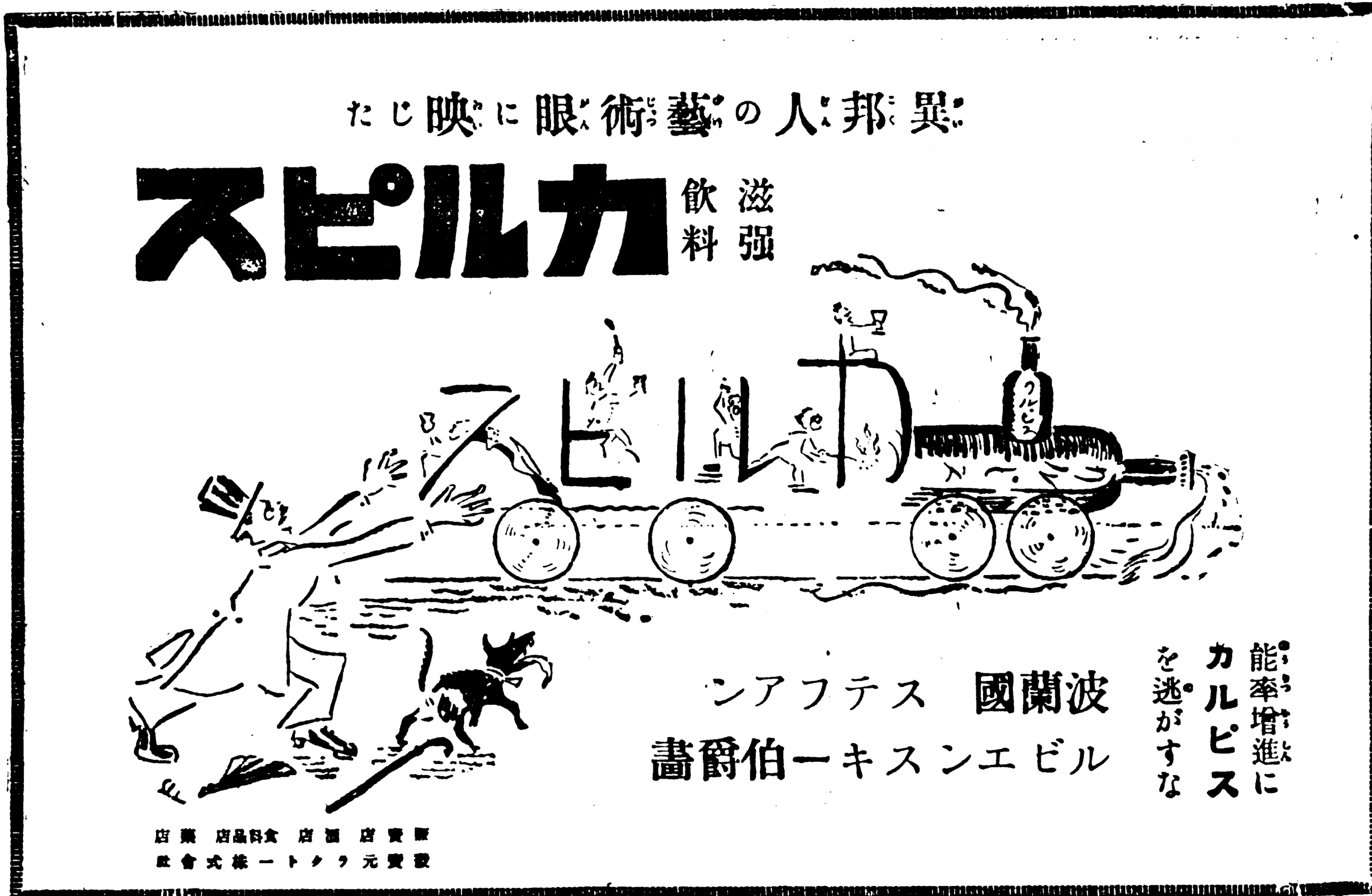
最近讀んだ書物の二つ三つを紹介する。

學友小川市太郎君の近著『住宅及土地問題』よりは得る所頗る多かつた。住宅問題並に土地問題を我々の現實の生活に緊密の交渉ある問題として考へて見ると、色々の方面に色々の事項が我々の頭に浮ぶのであるが、之等は大抵本書に於て論述されて居る。論究の範圍に於て殆んど洩す所なきを本書の特色と謂ていゝだらう。加之論述は頗る平明快適である。和洋參考書も澤山擧げてあるから、一層深い研究を爲す者にも便利だ。望蜀の念には卷末に索引を添へられたら一層便宜であつたらう。小川君は僕の多年の友人、此方面に深廣の學殖あるを知るを以て、特に僕は本書を推薦するの自信がある。大阪毎日新聞に在て多年斯の問題を研究せられ、先年は更に其研究を深うするの社命を帶びて歐米にも遊ばれた。其の結果は固より本書にも現はれて居るが、君の蘊蓄は決して渺たる此書に盡きたのではない。近き將來更に浩瀚なる著述に出つて、典籍に乏しき斯の方面にモツト大きな貢献を寄せられんことを希望する。

文學博士齋藤阿具氏著『ヅーフと日本』は、或意味に於て古典の列に加ふべき貴重なる文献といつていゝと思ふ。ヅーフが日本に於ける洋學の發達に關係深きは云ふまでもなく、西洋に歸て日本を紹介せし點に於て。又佛蘭西革命の結果定期更任の機を失し、永く我國に在りて德川時代の外交史上に特殊の地位を占むる點に於て、頗る興味あり又特に研究を要する人物である。夫にも拘らず我國に在ては一ト通り名前は知られて居り、ことに和蘭字書と牽連して今日でも可なり人口に膾炙して居り乍ら、詳細なる事蹟に至ては更に知られて居ず、又之を知るに史料も甚だ乏しいのである。而して著者は往年親しく蘭國に赴き、或は國立圖書館につき或はヅーフの遺族について、殆んど完全に材料を涉獵し、世人未知の事實をも探られたといふ。此

點に於て本書は他の倣ひ難きユニックの特色を有する者である。因に云ふ。著者は僕に取つて靑年時代の恩師である。東西文明の交渉史に於て獨特の研究に力め居られしは其頃から伺つて居る。恩師なるが故に故らに推稱するのではないが、著者の學殖と其苦心とから想像しても、本書の如きは獨特の地位を學界に占據すべき價値あるものと信ずるのである。

文學士藤井甚太郎君の『日本憲法制定史』からも僕は得る所尠なくなかつた。日本の憲法は如何なる事情の下に制定されたかは、僕の如く當面の政治を研究する者に取て極めて必要だ。制定に到る迄の事情が現在の運用方針に意外に強い影響を有つて居るからである。一ト通り憲法制定の歷史を官制の年表式に並べたものは世上に間々ある樣だが、之は役人の履歷書の樣なもので、少しも活きた姿が現れて來ない。藤井君のこの小著は、此方面に於て十分に世上の渴望に應じ得るものとは思へないが、斯うした學界の要求を相當に充たすものたるは疑ない。肝腎の現行憲法制定の表裏兩面の事情は、惜らくは甚だ簡略に失して居る。小冊子の論述としては已むを得まいし、維新史料編纂局に職を奉ぜらるゝ關係上獨自に發表するを得ない事情もあらうかと想像さるゝ。併し立憲政治に對する理解と憧憬とが舊幕の末から存し、維新の改革と共にそが勃然として盛となつた事、並に此思想が曲りなりにも實際の制度に現れたこと等の史實の一斑は、可なり明瞭に示されて居る。此點たけから云つても、本書は形の小なるに反比例して相當に大きな學術的價値を要請し得るものと思ふ。之についても僕は著者に向つて更に大きな詳論を一日も早く公刊されんことを希望せざるを得ない。


異邦人の藝術眼に映じた
カルピス
滋強飲料
能率増進に
カルピスを逃がすな
波蘭國
ステファン
ビルエンスキー伯爵畫
販賣店 酒店 食料品店 藥店
發賣元 ラクトー株式會社



整腸に消化に保健に

ビオフェルミン

は第一の良劑として選ばる

既に腸疾患に惱むもの、常に腸機能の衰弱せるものはビオフエルミンの服用に依つて速に健康に導かる。

粉末及錠劑あり、全國知名藥店に販賣す（說明書郵呈）

發賣元 大阪市東區道修町 武田長兵衛商店

製造元 神戸市二番町 株式會社神戸衛生實驗所



栗山大膳（四幕六場）

此戯曲を謹んで森林太郎先生の靈前に捧ぐ。

長田秀雄

人物

栗山大膳利章

黒田右衛門佐忠之

井上周防入道道柏

小河内藏允　黒田家家老

黒田美作　同、

倉八十太夫　同、

お秀の方（側室）

土井利勝　老中

酒井忠世　同、

井伊直孝　同、

柳生宗矩　　大目附役
成瀬正虎　　（尾張家附家老）
安藤直次　　（紀州家附家老）
竹中采女正　　九州日田御目附役
板倉重宗　　京都所司代
黒田市兵衛　　黒田家家臣
老女岩尾
大音安太夫
小林内匠
山下平兵衛
明石四郎兵衛
衣笠因幡
野村右京
喜多村助之進　　（以上）家臣等
名も知れぬ虚無僧。
槙江　　大膳妻
大吉　　大膳長子

吉次郎　　同次子

大橋辨藏　　大膳家老

その他、公儀役人茶道士民武士侍女など。

時代——寛永年間。

第一幕

筑前箱崎社頭の海岸。奥は一面の松原、中央に遠く箱崎八幡の大鳥居。渚に近く黒田家の定紋を打つた大幕を張つて、足輕の一隊が、その周圍を警護してゐる。立てつらねた旗や鐵砲や鎗が林のやうに日に輝いてゐる。幕の内には、黒田家の重臣たちがひかへてゐる。前は一面の海。

寛永九年四月末の午後、大御所秀忠の葬儀に出府した黒田右衛門佐が海路歸國の日である。黒田の家臣は主君出迎のため、此濱に來てゐるのである。幕の内にゐた井上道柏がいらいらした様子で出てくる。

道柏。（小手をかざして沖の方を見る。やがて幕の外にひかへた侍者に向つて）次之丞。

侍者。はつ。

道柏。俺(わし)の老眼ではよう見えぬ。殿のお船はまだ、姿を見せぬか。

侍者。まだ見えませぬやうで御座ります。

小河内藏允が幕の内から聲をかける。

内藏允。御老體。海路の事で御座れば、多少の延引は免れますまい。

道柏。併し、昨夜下の關より參つた早打の言では、九つには、此濱へお着と御座つた。

内藏允。只今が九つ半——八つまでにはお着で御座らう。

道柏。友之丞。遠眼鏡は持つて參つたであらうな。

侍者。はつ、持參仕りました。

道柏。そちはあの松原の磯馴松に上つて、足場をくみ、殿のお船の見ゆるまで、見張をいたせ。

侍者。かしこまりました。(退場)

道柏。(また幕の内の座にかへる。)美作殿よりの早打の狀だけでは、この老人には、大公儀の思召の程がよう分らぬ。

内藏允。さればで御座る。貴殿も御聞及びで御座らう。肥後の加藤殿の此度の事件など思合すれば、決して油斷はなりませぬ。

道柏。忠廣公を、江戸表へお召しのため、稻葉丹後どのが上使として、江戸をお立ちなされたとはきいたが、自體事の起りは何で御座るかのう。

内藏允。某とて委細は存ぜぬ。たゞ、將軍家に對しておだやかならぬ謀があつたとか申す事で御座る。

道柏。ふむ。俺の思案のとほり、やはり讒口ぢやな。忠廣公は決して公儀に對して逆心など抱く人では御座らぬ。俺はよう知つてゐる。

内藏允。いや、加藤ばかりでは御座らぬ。將軍家の御連枝、駿河大納言どのも、御不審のかどあるにより、甲府の城中に御謹愼中と承はる——決して油斷はなりませぬ。

道柏。俺の氣遣ふのもそこで御座る。かの福嶋左衛門太夫を初め近年大名の城地を召上らるゝ者、少なからず御座る。

栗山大膳の家老大橋辨藏が伴を召しつれて出てくる。

黒田市兵衛。おゝ、栗山殿の家老大橋辨藏か――して、大膳殿は。

辨藏。（一同に式代して）主人大膳儀、今日殿様御出迎のため、參上いたしまする筈のところ、生憎、昨日より俄かに心地悪しく熱發いたし候まゝ、某を名代として相つかはしまして御座ります。恐入りまするが、御前よろしくお取成し願上げまする。

道柏。大膳殿御病氣とな。それは、それは、――殿には俺がよう申上げて置く。

辨藏。（平伏して）有難う存じまする。

黒田市兵衛。辨藏。まだお着までは間があらうと存ずる。そちはさがつて休息いたせ。

辨藏。はつ、然らば、御許し下されませ。（退場）

内藏允。（不審さうに）栗山殿病氣とは不思議で御座る。昨夜、美作殿よりの早打の狀披見の上、大膳殿の手元までお届けいたせし節は、直々使者にお會ひあつて、城中の様子など尋ねられしと申す事で御座る。

道柏。殿も片意地、大膳も片意地――困つた者で御座るなう。

内藏允。美作殿は殿のお伴、大膳殿は日日の登城もされず引籠もり居らるゝ折も折とて、此度の大事、某たゞ當惑いたすばかりで御座る。

道柏。俺は隠居の身の上ぢや。先君御遺言を以つて政治向の事は、御身たち三人に任せあるゆゑ、口を入るゝ事もないが、大膳とて、當家の棟梁、殊に大公儀まで名のきこえた者ゆゑ、たゞ殿に對する一片の意地をもつて、國政を忘

る丶事は御座るまい。

内藏允。それは申すまでも御座らぬ。

道柏。殿は歸國あらせられた上、俺が申しなだめ、大膳の登城を促す事といたさう。

内藏允。某なども近頃は何となく大膳殿と心が隔たり申した。それが心がゝりでなりませぬ。

道柏。我ら奥書して殿に進ぜた大膳自筆の諫言狀以來、殿は大膳に言もかけさせられぬやうになつたのぢや。大膳一人がお憎しみをうけたわけぢや。

内藏允。あの諫言狀には、某も美作殿も名をつらねましたに、かやうの次第になつては、たゞ大膳殿にお氣の毒でなりませぬ。

お秀の方附の老女岩尾侍女たちをつれて出て來る。

侍女。（幕の外にひかへた侍者に向つて）殿さまお出迎のため、あれなる松原にお休息中の樣々のお使として、御老女岩尾さまお出で御座ります。

侍者。暫らくこれへお待ちを願ひまする。（幕の内へ入つて）御老女岩尾どの、樣々お使としてお出で御座ります。

道柏。これへ御通し申せ。

侍者。はつ。（幕の外へ出て）どうぞお通り下さりませ。

岩尾一人幕の内に入る。

道柏。おゝ、岩尾どの。御苦勞ぢや。

岩尾。（式代して）これはこれは道柏さま。御老體御隱居の御身分にもかゝはらず、御出迎御苦勞に存じまする。また此

度は、殿さま、大御所さまの御葬儀御無事にお勤め遊ばして久々の御歸國、樣々にも御喜びで御座りまする。ついては樣々にもお出迎のため、あれなる松原までお運びで御座りまするが、殿さま、御着船の折は、これまでお出迎いたしましてもよろしう御座りませうか、重役のお方まで伺上げまする。

道柏。お秀の方お出迎、ようお心付で御座つた。濱邊までのお出迎、家中の者ばかりの事ゆゑ、差支御座るまい――殿も定めし御喜びで御座らう。

岩尾。道柏さまお言、有難くお受けいたしました。その趣早速樣々にお傳へ申上げます。さらば、取急ぎますので、これで御免をかほむります。

道柏。お秀の方によろしう御傳へ下され。

岩尾は恭しく一禮して幕の外に出で、侍女たちを伴なつて退場。

武士一人慌たゞしく登場。

幕の内に入る。

黒田市兵衛。何事ぢや。

武士。(平伏)はつ。只今、江戸表、桐山丹波殿より早打ちで御座りまする。

内藏允。何、桐山丹波より早打が參つたか。

武士。さやうで御座ります。

内藏允。(道柏の顏を見る)何事で御座らう。

道柏。して、その使者は。

武士。非常に疲勞いたし居る躰に見受けましたゆゑ、取りあへず、城内に休息いたさせ、某代りに御狀を捧へまかり出でました。(首へかけたる狀箱を出だす)

黑田市兵衛これを受取つて、道柏に差出す。

道柏。(急いで狀を開いて讀む)………

内藏允。(道柏が讀んでしまつたのを見て)何事で御座る。

道柏。(狀を卷きながら武士に向つて)そちは休息いたしてよい――御苦勞であつた。

武士。はつ。御免。(退場)

道柏。内藏殿。我らが心配いたしたとほり困つた事になり申した。まづ、これを御覽なされ。(狀を渡す)

内藏允は狀を受取り默讀する。みる〳〵内に額に不安の色が現はれる。座中の人々が緊張する。

野村右京。(耐りかねて)小河殿、御狀の趣、われら憂慮に耐えませぬ。何事で御座るか。

道柏。此處に居られる方々は、例れも黑田家の重役ぢや。内藏殿。江戸表よりの來狀御披露あつても差支あるまい。

内藏允。然らば某より御披露いたす。江戸表桐山丹波より申越されし儀は、まことにお家の一大事で御座る。

此時、幕あきの侍者、遠眼鏡を背に負ひ、走しつて出て來る。

侍者。申上げまする。

内藏允は何か云出さうとして、俄かに口をつぐむ。明石四郎兵衛が立上つて侍者の方へ二三步進む。

明石四郎兵衛。何ぢや。

侍者。殿の御乘船寶玉丸が、あれなる岬の蔭に現はれまして御座りまする。

道柏。(立上つて)何、寶玉丸が見えたか。

一同立上る。

侍者。はつ。常の水路とは違ひ、岸に近く進んで參られましたため、かやうに間近になりまするまで、少しも氣がつきませんで御座りました。

一同渚に近く出て沖を見る。

明石四郎兵衛。不思議な水路をお取りなされたもので御座るなう。

衣笠因幡。さやうで御座る。あの水路は淺瀨暗礁(かくれいわ)が御座るため、百石以上の大船は通る事はまかりならぬ掟で御座る。

道柏。多少の危險を犯しても近道をなされやうとの殿のお心ぢやな。

内藏允。殿も餘程、御心配あらせらるゝやに見え申す、

短かい沈默。

道柏。もはや御着船ぢや。

内藏允。(後を振返つて、黑田市兵衛に)殿の御着、御出迎ひの用意を組々の頭にお觸れ下されい。

黑田市兵衛。はつ。かしこまりました。(退場)

あたり次第に騷がしくなる。

老女若尾の案内で、お秀の方、奧女中たちにつき添はれて出てくる。

遠く寶玉丸着船の合圖がきこえる。

若尾。(一同に向つて)御出迎のため、様々(さまざま)お出で御座りまする。

道柏を始め諸士默禮する。

お秀の方。(一同に式代して) 御重役の方々、御出迎御苦勞に存じまする。

小林内匠。只今あれなる渚より御迎の端舟を漕ぎ出しましたゆえ、もはや間もなく御上陸で御座る。

お秀の方。大御所秀忠公御葬儀につきましては殿さま何かとお心をつかはせられ、例の癇癖の御性分とて一入の御辛棒、定めし御疲の御事と御推もじいたしまする。

道柏。さればで御座る。殿、御役儀の表御辛勞さぞかしと察せらるゝが、さすが、如水公のお血統は爭はれぬ。首尾よくお役勤めあげさせられ此度の御歸國一同祝着に存ずる次第で御座る。

岩尾。(遠く沖合を見やつて) 様々、御覽遊ばしまし、かねがねお噂に承りましたは僞では御座りませぬ。此度御新艘のあの寶玉丸の大きさ、お美くしさ、城中の御殿をそのまゝ水の上に浮べたやうでは御座りませぬか。

お秀の方。ほんに岩尾の云ひやるとほり、御立派な御座船ぢや。

少林内匠。天晴五十三萬石の大守の御座船で御座らう。大御所薨御のため至急御國表御出發には間に會ひかねましたが、殿、御不在中に殘る限なく出來上り、御迎のため、大阪安治河口まで出張いたし、彼處より殿をお乘せ申しはるばると下國いたしました。

明石四郎兵衛。御船頭は松本能登。猩々緋の板頭巾を戴き、突堅染の羽織をきて、船麾おつとり、水夫揖取を指揮して、川口の港に乘入つた有様は、定めしあたりをはらつて見へたで御座らう。

岩尾。殿さまの御威勢、眼のあたり見るやうで御座りまする。

小林内匠と明石四郎兵衛とが、圖に乘つて、寶玉丸の説明をするのを、道柏と内藏允は苦り切つてきいてゐる。

お秀の方。（何氣もなく）岩尾。この御座船はわが身幼少のみぎり平戸の港にて見馴れた南蠻の軍船とやらに、大さたり造りなりよう似てゐるやうぢや。

内藏允。（狼狽して）いや、軍艦とは違ひ申す。

道柏。岩尾どのに申入れる。只今、江戸表御本邸より御座船の儀につき内密の早打が參つた。かやうの大船は人の眼を曳きやすく、思はぬ疑を受きやうも知れぬ。以後、御座船の儀については、何事も仰せられぬやうお願申す。

岩尾。（顏を赤らめて）御隱居の仰、恐入りまして御座りまする。

お秀の方。（道柏をジロリと見て）女子のはしたなさ、云はでもの事を……申譯御座りませぬ。

道柏。（苦り切つて）たゞ、御心づけ申しただけで御座る。

黒田市兵衛、足輕をつれて出て來る。

黒田市兵衛。殿御着きで御座る。

一同市兵衛の來た方に向ひて頭を下げる。

やがて家老黒田美作、倉八十太夫その他の人々を引つれて黒田右衛門佐忠之が旅裝束で出て來る

道柏。（進み出て）遠路の御疲もなく御無事御歸着、恐悅至極に存じまする。

一同その言についてまた頭を下げろ。

右衛門佐。おゝ、周防か。そちも達者で喜ばしう思ふぞ。

道柏。恐入りまする。

右衛門佐。內藏允その他の者ども、出迎太儀。

一同。はつ。有難き御言——
右衛門佐。秀か——よう參つたな。
お秀の方。何時もお變りあらせられず美はしき御機嫌、御嬉しう存じ上げまする。
右衛門佐。そちも變る事がなうて重疊ぢや。（お秀の方以下頭を下げる。右衛門佐は諸士を見廻して）ときに大膳が見えぬが、如何いたした。
内藏允。大膳御出迎に參上いたすべきところ、生憎昨日より不快にて、引籠り居りまする由にて、名代大橋辨藏あれに差ひかへて居ります。
右衛門佐。（不快の顏色）大橋辨藏をこれへ呼べ。
黒田市兵衛。かしこまりました。栗山大膳殿御名代。殿のお召ぢや。
大橋辨藏。はつ。御免下され。（進み出て平伏する）大膳名代、大橋辨藏に御座ります。
右衛門佐。（毒々しく）辨藏。大膳は病氣引籠中とか申すが、足腰も立たぬ程の重態か。
大橋辨藏。はつ。（間を置いて）何分にも熱發甚だしく、見苦しき姿にて御眼通りも如何かと存じ、御出迎御遠慮仕ると主人申しつけまして御座ります。
右衛門佐。（引きつれたる諸士の方を振返つて）山下平兵衛。
平兵衛。（列中より進み出て平伏する）はつ。
右衛門佐。（そちはこれより辨藏と共に大膳の屋敷へ參つて、よく容態を尋ね、病氣全快次第早速登城するやう申せ。
平兵衛。はつ。御錠の趣申傳へまする。

右衛門佐。（辨藏に）なほ、そちからも、よく申しつたへえ。
大橋辨藏。はつ。然らば御免かうむりまする。
大橋辨藏、山下平兵衛退場。
右衛門佐。秀、そちは先に歸れ。酒宴の用意申しつくる。
お秀の方。はつ。かしこまりました。それなれば、私はお先へ御免をかうむりまする。
岩尾以下をつれて、恭々しく一禮して退場
右衛門佐。（幕の内に入る。小林内匠床几をすゝめる。それにかけて）十太夫。
十太夫。はつ。
右衛門佐。家老たちを殘して、餘の者どもは、あれなる松原に休息させい。
十太夫。はつ。（一同に向つて）御諚で御座る。殿御歸城までには、ちと間も御座れば、おの〳〵方はあれなる松林にて御休息下されい。
一同。はつ。かしこまりました。（退場）
幕の内には、以前出迎の重役の内道柏と内藏允、お伴の内より黒田美作、倉八十太夫とが殘る。
右衛門佐。（四人を見廻して）下關より出したる早打の手紙は皆々、讀んだであらうなう。
道柏。昨日拜見仕りました。
右衛門佐。とも角も心がゝりぢや。
内藏允。われ〳〵一同御狀拜見の上、大膳屋敷へ使者を以つて、御狀の趣、申しきけ置きまして御座りまする。

右衛門佐。然らば大膳は、あの手紙を承知いたして居るのぢやな。

内藏允。さやうに御座りまする。

右衛門佐。(間を置いて)使者には大膳は自身で會ふたか。

内藏允。(曖昧に)その邊の事は、しかと確かめませんで御座りました。

右衛門佐。して大膳の返事は。

内藏允。當御城下へ大公儀より隱密の入りこみ居ると申す噂については、大膳も少々考へ居る事も御座れば、何れ殿御歸國の上、登城申述ぶるとの事で御座りました

右衛門佐。大膳一家老として日々出勤の件は承諾いたしたか。

内藏允。病氣はかばかしからざるため御役御免を願ひし身で御座れど大公儀よりのお聲がゝりとあれば一應考慮の上、御返事いたさうと云ふ事で御座りました。

道柏。(黑田美作に)大公儀よりは、何と仰せられたので御座るか。

黑田美作。土井大炊頭殿を以つて、栗山大膳は、黑田家に取りては柱石の御家來と承はり及ぶ。その大膳が引籠り居るとは不都合千萬。匆々出勤、右衛門佐殿を輔佐いたすやう取計はれたがよからうと某まで御内意が御座つた。

右衛門佐。(不快の顏色)强いて病氣と申張れば大膳がお咎をかほむるばかりぢや。

倉八十太夫。若年の某、憚り多くは存じまするが、御家の大事ゆえ、御叱をもかへりみず申上げまする。恐れながら、大炊頭殿よりの御内意は、當地に入込み居りし隱密より内々御聞取の上かと存じまする。

右衛門佐。予もさう思ふのぢや。

倉八十太夫。殊に大御所御薨去、天下の人心定まらざる折で御座りまする。御病氣もさる事ながら曲げて大膳殿御出勤をお勸めいたさねばならぬかと存じまする。

道柏。いかにも十太夫の云はるゝとほりで御座る。我らは大膳の父備後とは莫逆の友で御座つたゆゑ、明日にも我ら大膳屋敷へ趣き、理解をといて出勤いたさせるで御座らう。

右衛門佐。周防、然らば大膳の事はそちに任すぞ。

道柏。承知仕りました。

右衛門佐。内藏允。その後江戸表より、消息はないか。

内藏允。はつ。(道柏と顏を見合せる)……

道柏。御尤ぢや。すぐさま御披露然るべく存ずる。

右衛門佐。何事ぢや。

内藏允。道中の御勞れさぞかしと存じ御歸城まで御披露さしひかへて居りましたが、只今、江戸表より早打が參りました。(懷中より江戸表よりの狀を取出す)

右衛門佐。何、早打が。

道柏。容易ならぬ儀と存ずる。内藏どの、御前にてお讀み下され。

内藏允。承知仕る。桐山丹波よりの御狀で御座りまする。——一筆啓上仕候、殿樣江戸表御發足後、保科彈正樣より此度御新艘の大船寶玉丸大阪河口へ到着のよし、專ら風聞有之候ところ、右の大船は公儀御法度の五百石積以上の物にはあらざるかとの御評定、御老中の間に有之候ひしやに承はる。右衛門佐殿御如才もあるまじけれど、大御所御

發去まもなき際萬一の事ありてはと存じ内々お知らせ申上候との御申越有之候、まことに容易ならざる儀と存じ候間、取不敢急使を以つて申上候。恐々謹言。四月二十三日認むと、御座りまする。

右衛門佐。(倉八十太夫を見て）思ひもよらざる儀ぢや。かの寶玉丸は掟通り五百石、玄海の荒浪をしのいで參勤交代をいたすために新造いたせし船ぢや。かやうの事にて、御老中の御疑をかほむるとは、心外である。

倉八十太夫。恐れながら公儀御役人衆が、豐臣家恩顧の大名に對して、近頃、御不審の點多く、わづかの落度にも、嚴罰をかほむる例は、かの福島左衛門太夫殿、近くば加藤肥後守殿の御有様に照らしても分明で御座ります。

右衛門佐。われらもそれを思ふのぢや。

黒田美作。成程御當家は如水公以來故太閤殿下に深き御好も御座るが、それと共に、かの關ケ原の合戰この方、權現様御會釋淺からざる御家筋で御座る。殊に當代奥方は大御所御養女として御輿入あらせられた御方で御座れば、よもや、福島殿、加藤殿のやうな事は御座るまいと存ずる。

道柏。美作殿の云はるゝとほり、まづ、そのやうな心配はあるまいとは存じ申すが、然し決して油斷はなりませぬ。

右衛門佐。……寶玉丸の一件は、兎も角も歸城の上、とくと思案いたすといたさう。

倉八十太夫。殿。

右衛門佐。何ぢや。

倉八十太夫。加藤肥後守殿御不審の次第これ有り、江戸表にお召の上使として稻葉丹後殿お下り、御領内御通行は今明日の内と承はりましたが、稻葉殿は當今出頭の公儀お役人、かやうな機に御懇志をつくさせられては如何で御座り

ませう。何かと行末御爲にならうかと憚りながら愚考仕りまする。

右衛門佐。うむ、さすがは十太夫。よい處へ氣がついた。內藏允。上使御宿は何れぢや。

內藏允。稻葉丹後殿は明日街道筋遠賀郡、山鹿宿へ御泊りと承はりました。

右衛門佐。十太夫。

倉八十太夫。はつ。

右衛門佐。歸國さうさう御苦勞ながら、そちは使者として山鹿へ參り丹後殿、遠路の勞をお慰め申せ。

倉八十太夫、はつ。かしこまりました。

右衛門佐。なほ、副使として黑田市兵衛を差添へつかはす。

黑田美作。（ためらひつゝ）市兵衛は筋目の者、十太夫の副使としては如何かと存じまする。

內藏允。殊にこの年の始まで十太夫殿の上席に居りました者で御座れば……

右衛門佐。（むらむらと癇癖の筋を額に現はす）云ふな。十太夫は新參ながら、この春より予が眼識を以て家老の列に加へた者ぢや。早速市兵衛に予が命を申傳へえ。

內藏允
黑田美作
（恐入つて）はつ。

山下平兵衛が汗馬に鞭を當てゝ出て來る。平兵衛は幕の外にて馬から降り、幕の入口に跪く。

平兵衛。（平伏して）只今戻りまして御座りまする。

右衛門佐。おゝ。大儀であつた。して、大勝容體は。

平兵衞。栗山殿御熱發甚しきため、御子息大吉殿代つて應對いたされて御座りまする。
右衞門佐。大膳奴予が使者たるそちに面會もいたさぬのぢやな。
平兵衞。御意のとほりに御座りまする。
右衞門佐。して、屋敷の模樣はどうであつた。
平兵衞。不思議な御有樣合點の行かぬ事ばかりで御座りまする。
倉八十太夫。平兵衞殿。どのやうな御樣子で御座つた。
平兵衞。御家老御病中と申すにもかゝわらず、武器、物の具など引散らし屈強の男ども幾人となくその間を驅けまわつて居りました。
右衞門佐。何と申す。
道柏三人の家老たち、互に顏を見合はす。

幕

第二幕

第一場

五月始めの朝。
栗山大膳屋敷書院の光景。正面の床には、唐畫二幅をかけ、その前に、黑田家重代の寶物、水牛の兜が安置してある。

庭先には、大膳丹精の牡丹幾株となく咲きみだれてゐる。

井上周防入道道柏が主人大膳と話をしてゐる。大膳はつやつやとした血色で、病氣とは見えない。たゞ、月代だけはのびてゐる。

道柏。大膳殿。御丹精の牡丹、美くしう咲き申したなう。

大膳。これは大明國より到來の種子をそだて上げましたるもので御座る。

道柏。俺は若い頃は、武邊の沙汰で日を暮らしてしまふて、このやうな風流がましい事は少しも知らなんだが、この頃隱居いたしてから、つれづれのあまり、草花などいらうてみるが、なかなか味のある物で御座るなう。

大膳。仰せの通りで御座る。――この牡丹は、楊貴妃と名づけましたるもの。貴殿もしお望みならば、一枚二枚お慰みに切つて進ぜませう。

道柏。それは何よりぢや。所望いたす。

大膳。（手を拍く）誰か參れ。

美くしい小姓が出で來る。

小姓。御召で御座りまするか。

大膳。そちは庭へ下りて、あの楊貴妃を一枚二枚切つて參れ。

小姓。かしこまりました。（椽先より下りる）

道柏。（間を置いて、獨語のやうに）俺が來たのは、無益な事ではなかつた――やはり昔ながらのト庵殿の御子息ぢや。やれやれ安堵いたした。

大膳。(いぶかしげに)何と仰せらるゝ。

道柏。いや、年を取れば心がゆるむ。卜庵殿の御存生中は、たびたび參つたが、いま御身のその頃と露變らぬ様子を見て、安堵のあまり、ふと、口がすべつたのぢや。

大膳。(凝乎つと道柏を見つめる)……(何か云はうとすると小姓が牡丹の枝を捧げてくる)それを井上殿御作の若黨にお渡し致すのぢや。

道柏。俺が所望いたした牡丹ぢやと云ふて下され。

小姓。はつ。かしこまりました。(去る)

大膳。(靜かに)われら進退について、殿のお怒りさこそと推しまゐらす。御老體をわざわざ運ばせられたは、その事では御座りませぬか。

道柏。全く御推察のとほりぢや。內藏殿より內々御知らせいたせし大公儀御不審の一件にて、殿の御癇癖いやが上にも募らせられし折から、御身は登城もせられず屢、御召あるにもかゝわらず、引籠つて居らるゝゆえ口善悪なき人々の噂ばなしも自然殿の御耳にも入り申す。

大膳。さうで御座らう。

道柏。所詮このまゝには、すむまじき城中の有様と相成り申したゆえ、卜庵殿以來の古馴染の俺がお召に應ぜぬ御身の心底ひそかに承はりたく推して參つたわけぢや。

大膳。いつもながら御厚志有難う存じまする。

道柏。大膳殿、君臣互に心疎隔するときは即ちお家衰微の基、かやうな道理を、嗚呼がましくも御身へ向つて說法いたす

わけでは御座らぬが、城内の有様、あまり氣がゝりで御座るでなう。

大膳。某の愛ふる處もそこで御座りまする。不肖ながら大膳、大義名分の何たるかを忘るゝ者では御座りませぬ。いやしくも三代恩顧の主に對し、かやうな面當がましき事を致すは、深き仔細が御座りまする。

道柏。成程、幼少の時より、父卜庵殿にさへ舌をまかせし御身の事ゆえ、深き慮あつての事とは存ずるが、大膳殿。殿には容易ならぬ御覺悟をなされたのぢや。

大膳。容易ならぬ御覺悟と申すと……

道柏。一昨日箱崎御着船の折、山下平兵衛使者として御身を見舞ひ歸つての復命に、屋敷の内には、武具を立てならべ、屈強の者どもその間を立ちまわる有様只事とは見えずと申し上げたのぢや。

大膳。われら殿に對して……思ひもよらざる儀で御座る。成程、一昨日上使御見舞の折は、家例によつて、武具の虫干、損處をしらべさせて居りました。

道柏。さうで御座らう。かねがね輕率者の山下平兵衛、平生ならばさやうな事を申上げたとて、お取上に相成る筈も御座らぬが、何さま、機が惡う御座つた。

大膳。周防殿。殿の御覺悟と申すは。

道柏。殿は城中へ入らせらるゝと、すぐさま脈取長松庵を御前へお召しなされて、御身の容態を尋ねられた。長松庵は兩三同御身を診察いたしたが、さしたる病氣とは見受け申さぬと申上げたのぢや。殿はそのまゝ奥へ入らせられたが、今朝急使をもつて俺に登城の御諚ぢや。何事かと思ふて出仕してみると、美作十太夫内藏允の面々が、大廣間にむつかしい顏付で並んでゐる。殿は俺を見らるゝと、すぐさま烈しい御聲で、周防、如何に功臣とは言へ、もはや

許せぬ。早速大膳に切腹を申しつけえ。」との仰ぢや。

大膳。(色を作して) 周防殿。殿如何に某を憎ませ玉ふと云へども、先君興雲院殿御遺命により國政を輔佐するこの大膳を、さしたる罪もなくして濫りに刑罰に處せらるゝ事は叶ふまじと存ずる。あまり御無體が過ぎ申す。憚りながら大膳は、陪臣でこそあれ、大公儀まで名のきこえたる者で御座るぞ。

道柏。(きつと) 殿の仰は、申すまでもなく御無體ぢや。然し、御身にも、全く罪なしとは云はれまいと、この老ぼれは思案いたす。

大膳。(恐ろしき顏色になる)然らば某御家に對してひそかに反逆の心を抱くと云はるゝので御座るか。

道柏。いや、御身の誠忠はわれら決して疑ひ申さぬ。さればこそ人々とともに殿を御諫いたして御身の切腹を申しなだめ、その足で此處へ出向いて參つたのぢや。

大膳。(顏色を柔げて) 貴殿はじめ、皆樣の御盡力、大膳疎には存じませぬ。

道柏。いや、そのやうな挨拶には及ばぬ。自體、殿も片意地、御身も強情ぢや。はは……困つたもので御座るなう。(大膳苦笑する) 殿は御身を先君御在世中より、兄君のやうに隔意なく思つて居られた。御身もまた殿を弟といつくしんで參つたのぢや。その間の我儘がかうじたまでの事、殿とても利發な御方、たゞ例の御癇癖から前後の思慮もなく切腹と仰せられたのぢや、

大膳。(冷やかに) 殿の御後には、倉八十太夫がひかへて居りまする。また奥向ではお秀の方が如才なく御酒のお相手を務めまする――某に切腹の御諚も大方、その邊のたくらみで御座らう。

道柏。俺も心痛いたすはそこぢや。何時ぞや俺と卜庵が奥書して殿に奉つた御身たち三家老連署の諫言狀を御披見なさ

れて以來、殿は御身一人を憎ませらるゝやうに見受け申す。

大膳。あの諫言狀にあげし二十五ヶ條の表にこそ露はれて居りませぬが、十太夫を重用しお秀の方に溺れさせ玉ふ柔弱の御心を難じ參らせし點は殿も御氣付きで御座る。即ち筆者を某と御思ひなされての御憎しみと見えまする。

道柏。堂々と經史を引いた文章ぢや、御身より他にあの文章を書くものは藩中に御座らぬ。お秀の方は兎もあれ、十太夫も只今では、藩中の利者、御身を快よく思はぬ上は才智鋭どき男だけに、決して油斷がなり申さぬ。

大膳。われらの眼の黑い間は、彼奴にそのやうな振舞はいたさせませぬ。

道柏。さて大膳殿、殿の御怒も未だ全く解けたと云ふでも御座らぬ。かつは、十太夫御身に害心を含むとすれば、この上どのやうな事が起らうも知れぬ。公儀の隱密も御領內に入込み居るやの噂さへある今日、御身に萬一の事ありては面白う御座らぬ。此處は一つ御身も平生の强情を捨てゝ、殿の御心を解くやうに計らはるゝが、俺は何よりと存ずる。

大膳。(間を置いて)先刻も申上ぐるとほり、ちと仔細あつて、殿の御怒も憚らず、かやうに振舞ひましたが、貴殿御配慮も御もつともと存じ申すにより、某に他心なき證據として、殿に誓紙を參らせ、なほ兩三日中より登城いたすで御座らう。

道柏。その御思案至極と存じ申す。(間、意味ありげに)したが、大膳殿誓紙だけでは殿の思召如何かと思はれまするなう。

大膳。(容易ならぬ眼光で道柏を見つめて)殿われら反逆の御疑――ふむ。人質の義で御座るか。

道柏。殿の御諚ぢや。强つて惡しうは計ひ申さぬ。御子息お一人か、御內室でも……

大膳。(憤然たる心を押えて)先刻も度々申上ぐるとほり、某の心は決して變りはいたさぬ。されど殿御不承とあらば致方御座らぬ。大吉は嫡子ゆえおゆるしを願ひ妻梭江を差上げまする。

道柏。御心底御察し申す。

大膳。次男吉次郎いまだ幼少で御座る。母親の手を離すも不憫と存じますれば、同伴いたさせまする。

道柏。いや、差支御座らぬ。なほ一日も早く御內室を御手元へ御歸しあるやう取計ひ申すで御座らう。や、思はぬ長居。然らば、後刻御內室御迎の上使を參らす。その節までに御用意お賴み申す。

大膳。承知いたして御座る。

道柏。城中でも皆々待ちかねて居るで御座らう。御免下され。(立上る)

大膳。御老體、御苦勞と存じまする。(手をたゝく、小姓出て來る)周防殿御立ちぢや。御案內いたせ。

小姓。はつ。(先へ立つて行く)

道柏退場。

大膳も見送つて退場。間、やがて大膳、長男大吉、次男吉次郎を抱いた妻梭江、出て來る。

梭江。殿さま、御召——何ぞ御用で御座りまするか。

大膳。おゝ、大吉も吉次郎も參つたな。

大吉。はい。

大膳。(凝乎つと三人を見つめる)そちたちも薄々は存じ居つたであらう。われら既に年久しう殿と御仲違ひいたし居つたのぢや。

枝江。はい。もとより女子の身、たゞ蔭ながら御心配申上げて居りました。

大膳。殊に此度殿御歸國の折はわざと病を申立てゝ御出迎も致さぬわれらが心底、そちたちも定めし不審に思ふたであらう。いま先君御魂こもれるこの水牛の御兜の御前でその仔細を打明けて云ひきかす。(枝江、大吉は頭を低げる)過ぐる元和九年八月四日、先君興雲院殿御他界のみぎり、御遺命によつて、われら殿の御後見を承はつて以來、思へば長い年月であつた。然るに、近頃殿は興雲院殿の御遺言を何と思さるゝか、かの倉八十太夫を足輕頭より取立て、拔群の高祿を賜はつて、國政萬端、われらはじめ家老の小河内藏允、黑田美作などには、何の御相談もなく、ひそかに殿と十太夫と取定めらるる有樣ぢや。まことに安からぬ事と思ふて見てゐると、果して御政治向一般に弛みが出て參つた。此頃の役人たちの登城の時刻の遲さは何うぢや。(間)われら深くそこを案じ申すによつて、三家老連署の諫言狀を殿に差上げたのが、一昨年の事であつた——それ以來、殿はわれらを白い眼で見らるゝやうになつたのぢや。もとよりわれらまごゝろより致したる事、たとへ殿の御怒りにふれても決して恐るゝ處ではない。然るにわれら心血をそゝいだる諫言狀を讀ませられたるにもかゝわらず、殿の御行跡は更にあらたまらず、十太夫の御寵愛は以前にもまさる有樣ぢや。戰場往來の古兵たちが、三百石四百石の秩祿に甘んじて居る內に、一戰の功も致さぬ十太夫がわづか五六年の間に、九千石の大身となり家老の列に加はつたのは、以ての外ぢや。このまゝに進んでいつたならば御政道は暗黑ぢや。

大吉。(一心に)父上、何故命を捨てゝも殿を御諫めなされませぬ。

大膳。うむ。やがてはさやうな時が來るであらう。併し、まだ早い——古語にも生は難く死は易しと申す。あらゆる手段をつくして、なほ志をとげぬ時には死なねばならぬ。これが武士の取るべき正道ぢや。然るにこゝに權道がある。

表に逆を取つて、實は順を守るのぢや。

大吉。逆を取つて順を守ると申しますと……

大膳。たゞ、これだけ申したのでは成程分るまい。即ち、これは不義不忠ぢやと氣付いても、これぱかりの踏違は行末のためには、已むを得ぬと、强く見切つて行ふのぢや。それ故これを見切とも云ふ。

梭江。つねにことなる此頃の御振舞、何か仔細のある事とお推もじいたして居りましたが、……

大膳。そこが即ち表に逆を取つて、實は順を守るわれらが苦心ぢや。ひたすら御家を思ふわれらを遠ざけて、才發けたる士太夫づれを重く御用ひある上は、少時、殿の御傍を遠ざかつて徐ろに御政治向の有様を見やうと存じたのぢや。御家中一般、只今のやうな様子では、末始終よい事は決してあるまい。萬一、公儀の御不審にてもあらば、その時こそこの大膳が畢生の力をふるつて、御家没落を防ぐつもりであつたのぢや。

梭江。將軍家よりは、かの大船實玉丸御造營の儀について、もはや御不審があつたとか申す噂を承はりました。

大膳。殿箱崎へ御着と一緒に江戸家老桐山丹波より早打を以つて御不審の儀を申して參つた。(間容易ならぬ顔色で)これは秘中の秘ぢや。決して口外はならぬ。まことを云へば、大船御造營の儀は、われら腹心の者を江戸表につかはし公儀御役人の御耳に入るやうに云ひふらさせたのぢや。

大吉。(血相をかへて)父上、これはまことで御座りまするか。

大膳。いかにもまことぢや。のみならずそちたちもきいたであらう。この頃公儀の隱密が福岡城内に入りこみ居る噂が高い。これもわれらがひそかに云はせた事ぢや。

大吉。(詰めよつて)それが忠義の途で御座りまするか。

梭江。殿さま。逆を取つて順を守るとの仰もさる事ながら、只今のお話、私つやつや腑に落ちませぬ。（涙をこぼす）もしや、御家に傷のつくやうな事が起りました節は、何として申譯なされまする。
大膳。そこはわれらも深く思案いたした處ぢや。まことはわれら、先君よりひそかに御あづかり致した一封の御墨附がある。まだそちたちには見せぬが、かの、關ヶ原の大戰の折、黒田一家權現樣に御味方いたせしを、深く喜び玉ひ、下し玉はつたる御墨附ぢや。未來永々黒田家を疎略には存じ申すまじくと忝なくも御直筆にて記しある大切の御墨附、御家萬一の折はそれを持つてわれら江戸表へ馳せ參じ公儀御役人に訴へ出づる覺悟ぢや。
梭江。そのやうな深い思召があるとも知らず、たゞ、女子の淺かな心から無益しい諫言だておゆるしなされて下さりませ。
大膳。いや、そちたちの心慮ももつともぢや。
大吉。父上、何故武士の正道を守り、あくまで殿を御諫めいたす事はなりませぬか。
大膳。成程年少のそちには、分るまい——大吉。人間は傍から押付けれただけでは、決して性根まで直るものではない——われらは殿、御心の底よりの御悔悟を望むによつてかやうな權道を行ふのぢや。
梭江。これ大吉。父上の御苦心、よく心に留めて忘れぬやうにしやれ。
大吉。かしこまりました。
大膳。（歎息して）併し今になつては、わが苦心もことごとく水の泡ぢや。
梭江、何と仰せられまする。
大膳。（凝乎つと梭江を見つめて）梭江。今日われらに切腹の御掟が下つたのぢや。

梭江。（顔色かはる）え。

大吉。（かすれた聲で）父上、切腹と仰せられまするか。

大膳。（むつかしい顔付で）さうぢや。殿は眞實われらに腹切らせやうとお思ひなされたのぢや。その折御前に居られた井上周防殿、小河内藏允などがやう〳〵に申しなだめたと申す。

梭江。して何故の御咎めで御座ります。

大膳。それが誰にも分らぬ。たゞ、一昨日殿より御見舞の使者として參つた疎忽者の山下平兵衛が、武具の虫干に驚きわれら謀反と殿に復命したと云ふ話をきいた。

大吉。山下殿の御復命、何とも合點行きませぬ。

大膳。殿の御傍には大膳に向つて牙を磨ぐ狼どもがつくばうてゐる——もとより齒牙にかくる程の者どもでもないが、彼等がさまざまの事をたくらむのぢや。

梭江。して、その後の御沙汰は何と御座りましたか。

大膳。その後の御沙汰が言語道斷。われら不肖ながら先君御眼識によつて國政を執る一家老の身の上。思ひも及ばぬ辱（はづかし）めを受けたのぢや。

大吉。（急きこんで）父上、殿の仰、何と御座りました。

大膳。（悲憤の調子にて）兎も角も反逆のお疑をかうむつたる上は、妻子を人質に差上げよとの御沙汰ぢや。

梭江。人質に——私が人質で御座りまするか。

大膳。大吉は嫡子ゆえ、吉次郎とそちとを差上げるやう先刻井上周防殿より仰があつたのぢや。

大吉。あまりと云へばお情ない殿の御沙汰――父上無念で御座りまする。

大膳。殿の御疑をとく爲めに誓紙を奉るやう申上げたにもかゝらず更に人質を差上げよとの仰ぢや。もうやがてそちたちを迎取るために上使が參るであらう。

梭江。すぐさま城内へ參るので御座りまするか。

大膳。(暗然として)そちには何とも氣の毒ながら、御掟とあればやむを得ぬ。上使と一緒に行つてたもれ。

大吉。母上。(泣く)

梭江。殿さまと大吉のためならば、私は何のやうな辛らい事も決して厭ひはいたしませぬ。(袖を顔にあてゝ泣く)

小姓現はる。

小姓。只今御城内より上使として、明石四郎兵衞殿、御出で御座ります。

大膳。何、上使が見えられたと申すか。大吉、そちはお出迎をいたせ。

大吉。はつ。

大吉小姓退場。

梭江。(顔を上げて)火急の事で御座りまするゆえ、衣類その他は後より御送りを願ひまする。それでは仕度をいたして參りまする。

大膳。もはや少時はそちにも吉次郎にも會はれぬ――堅固でくらせ。

梭江。(泣く)はい――殿さまも御無事で……

吉次郎母に抱かれて聲高く泣く。梭江は吉次郎をだましだまし、涙をおさへて退場する。

上使明石四郎兵衛入り來る。大膳は座をすべつて上座に上使を迎へる。

大膳。御上使御苦勞に存じ申す。

四郎兵衛。(會釋して)御家老には、御病氣のよし、如何で御座る。

大膳。いや、さしたる事でも御座らぬが、長年の持病さし起り引籠つて居りまするゆゑ、御出迎もいたさず、失禮の段おゆるし下され。

四郎兵衛。(威儀を正して)さて、上使の趣申述ぶるで御座らう。

大膳。はつ。

四郎兵衛。貴殿、殿に對し奉つていさゝかも異心をさしはさまれぬ證據として誓紙を奉り、更に、内方、椒江どのと次男吉次郞どのを城内に送らるゝ趣、殿に於かせられても、神妙至極との御沙汰で御座つた。卽ち仰をかほむつて、某、御迎に參つた次第で御座る。

大膳。先刻より御上使のお出をお待ちいたして御座る。然らば誓紙を認むるで御座らう。御城内に參る妻子の者どもは、只今仕度致させ居りますれば、少時御猶豫下され。

四郎兵衛。承知いたした。

大膳。(手を拍く)誰か參れ。

大吉が出てくる。

大吉。はつ。

大膳。先刻申しつけ置いた料紙を持て。

大吉。はつ。（退場。やがて料紙硯箱を持つて出てくる）

大膳。（料紙を開いて、さら〳〵と誓紙を書く。書き終つて、一讀し、小柄を拔いて、指尖を切り血判を押す。今一度默讀。誓紙を上使に差出し）これでよろしう御座るか。

四郎兵衛。（受取つて一讀する）結構で御座る。（誓紙を懷中に深くしまひ）さて大膳殿。

大膳。何で御座る。

四郎兵衛。殿の仰今一つ御座る。謹んで御聽きなされ。

大膳。はつ。

四郎兵衛。先君興雲院殿より貴殿におあづけありしあれなる水牛の御兜は、御家重代の寶物、先君はじめ御先祖の御魂こもれる品で御座れば、殿御傍に置かせられて朝夕に拜し參らせたき御望、早々差上げよとの上意で御座る。

大膳。（顏色をかへる）何、水牛の御兜を差上げよとの御上意で御座るか。

四郎兵衛。さやうで御座る。

大膳。これは某に國政を輔佐し奉る證として先君よりおあづけありし品で御座る。（眼をぎら〳〵輝かして）それを召上げ玉ふとは、先君の御魂に對し奉つても憚りある儀と存じ申す。

四郎兵衛。貴殿の仰せもさる事ながら、何にいたせ、かゝる機の事で御座る。われら一同の心痛も汲ませられて、一先づ、御返上あつては如何かと愚考いたす。

大膳。（瞑目して）成程、致方が御座らぬ。然らば御渡しいたす。（大膳は床の方へ向つて坐り、香を燒いて水牛の兜を拜し、これを箱に入れ四郎兵衛に渡す）

四郎兵衛受取る。大吉現はれる。

大吉。母上の御仕度とゝのひまして御座りまする。

大膳。さやうか。御上使御歸りを、玄關に御待ち受けいたずやうに申せ。

大吉。はつ。（退場）

四郎兵衛。（立上つて）然らば御暇申す。

大膳。さやうで御座るか。病中の事ゆえ、御見送りはおゆるし下されい。（手を拍く）誰か參れ。御上使の御立ちぢや。御案内いたせ。（四郎兵衛會釋する）

小姓現はれて四郎兵衛を案内する。

大膳後を見送つて、凝乎つと思案する。

第二場

城内奥殿、若葉に包まれた瀟洒たる茶室造りの一室、前は數奇をこらした庭。うらゝかな初夏の日光をさへぎる藤棚からは、紫の花房が、裳のやうに地に垂れてゐる。右衛門作忠之は、盃をあげてお秀の方とたつた二人で宴を開いてゐる。

前には漆塗朱房の立派な籠に、一羽の鸚鵡が入れて置いてある。

遠く表の方から、謠曲の聲と鼓の調子を調べる音とが響いてくる。鸚鵡が「上様、上様。」と頓興な聲を出す。

お秀の方。ほほゝゝ、上様、御聞き遊ばしまし。片言ながら、可笑しげな聲で人間の言を眞似いたしまする。

右衛門佐。(興ありげに)うむ。賢こい鳥ぢや。して如何いたして、そちは手に入れたのぢや。

お秀の方。平戸に參りまする南蠻の甲比丹から求めまして御座ります。

右衛門佐。成程、平戸はそちの故鄕ぢやな。

お秀の方。さやうで御座りまする。私幼少のみぎり、平戸の南蠻の商人が、この鸚鵡を飼ひやしない、朝夕に、なでいつくしんで居りましたを、小供心に羨やましう思ふて居りました。恐れながら上樣お情をもちまして何不自由なき身となりましたゆえ、つてを求めて早速一羽買ひとりましたので御座りまする。

右衛門佐。さやうか。欲しいと思ふたものが手に入つて、さぞ嬉しいであらうなう。

お秀の方。(微笑)はい、嬉しう御座りまする。

右衛門佐。(微笑)そちも一つ飲め。(盃をさす)

お秀の方は盃をうける。右衛門佐は酌をしやうとする。

お秀の方。あれ、勿體なう御座りまする。

右衛門佐。よいわ、予が酌して取らす。

鸚鵡がまた「上樣上樣」となく。お秀の方聲たかく笑ふ。侍女入口に手をつかへる。

侍女。申上げまする。

お秀の方。何ぞ用かや。

侍女。只今、明石四郎兵衛どの、御錠口まで御越しで御座りまする。

右衛門佐。何、明石四郎兵衛が戻つたと申すか。して、大膳から水牛の兜を受取つて參つたか。

侍女。はい、水牛の御兜御持參で御座りまする。なほ、四郎兵衛どの申されまするには、栗山どの御妻子如何取計らひませうかと御座りました。

右衛門佐。よし、さらば、水牛の兜と大膳の誓紙とはその方此處へ持つて參れ。妻子は、黒田兵庫が方へ預けるやう取計らへと云へ。

お秀の方。黒田兵庫どのは大膳どの身御に當らせらるゝと承はりましたが、まことで御座りまするか。

この間に侍女退場。

右衛門佐。さうぢや。一家老の人質さう無下にも取扱はれぬ。と道柏が取りなすによつて、身にあづくる事にいたした。

侍女忝しく水牛の兜と誓紙とを捧げて入り來る。

右衛門佐。よし〳〵、その兜は床に据え置くのぢや。誓紙は予におこせ。(侍女は兜を床に据え誓紙を右衛門佐にわたして退場。右衛門佐はまづ大膳の誓紙をよんで懐中にしまひお秀の方に向つて)秀、そちが拜みたいと申した兜はこれぢや。(かう云つて、箱をひらき、兜を取出す。自慢らしく)どうぢや。父君興雲院殿は朝鮮の役をはじめとして、大小さま〴〵の戰場にこの兜を頂いて出陣いたされ一度も後を取らせられなかつたのぢや。予が家に取つては、まことに稀代の寶物、この五十三萬石の礎とも云ふべき重器ぢや。

お秀の方。御家の重寶は水牛の御兜と幼少の折より承はり居りましたが、かうしてまのあたり拜み奉るはわが身に取りまして此上もない譽で御座りまする。

右衛門佐。(快よげに)さすがの大膳の奴も、これを取りかへされては、もはや、我慢にも廣言は出來まい、はは……

お秀の方。あのやうに情の強い大膳どの。お怒の程、思ひやられまする。上様、私は何うやら恐ろしうてなりませぬ。

右衛門佐。（不快げに）何が恐ろしいのぢや。

お秀の方。大膳どののお怒り、何か上樣御身に禍となつてふりかゝりは致しませぬかとそれが恐ろしう御座りまする。

右衛門佐。（揶揄の笑）何と申す。いやしくも予は大膳に取つては三代恩顧の主ぢやぞ。

お秀の方。（右衛内佐の顏をチラと見て）心の狹い私ゆえ、やはり氣がゝりでなりませぬ。

右衛門佐。（不快げに）もう云ふな。予のあたふる祿を喰んで露命をつなぐ上は、生かさうと殺さうと心のまゝぢや。

（鸚鵡が「上樣上樣。」と叫ぶ。右衛門佐はむらむらとして）えゝ、諂ひ者め。やかましいわ。秀、その鸚鵡を予が前に置くな。氣にさわつてならぬ。

お秀の方。はい。（壁に下がつてゐる繩を曳く。遠く鈴の音がして、侍女が現はれる）

侍女。お召で御座りまするか。

右衛門佐。その鸚鵡を退げえ。

侍女。はつ。（鸚鵡の籠を抱き退場しやうとする）

右衛門佐。これ。

侍女。はつ。

右衛門佐。岩尾をよべ。

侍女。かしこまりました。（退場）

お秀の方。上樣、ふつゝかの私、御氣にさわりました段は、何うぞ御許し下さりませ。

右衛門佐。（顏色を和らげて）そちを咎むるではない……が、秀、もう大膳の事は云ふな。

お秀の方。仰かしこまりました。

老女岩尾が出てくる。

岩尾。御召によつて岩尾罷出でました。

右衛門佐。おゝ、岩尾、その方は表へ参つて十太夫は山鹿よりまだ戻らぬかきいて参れ。

岩尾。かしこまりました。(退場)

お秀の方。(鼓の音に耳を傾けて)上様、もはや、お能が始まりまする様子で御座りまする。

右衛門佐。能か。——家中の者どもの素人藝見たうもないわ。

お秀の方。御家中の人々は今日のお能を楽しみに致して居りまする。上様御覧遊ばされずば、さぞ落膽いたすで御座りませう。

右衛門佐。それもさうぢや。併し予はそちとたつた二人で静かに酒宴がしてゐたい。わづらはしい事を見きゝ致すと、疳が高ぶるばかりぢや。

お秀の方。(沈んで)それでは私が困りまする。

右衛門佐。異な事を申すではないか。——どうしてそちが困るのぢや。

お秀の方。(涙ぐんで)上様。はしたない事をお耳に入れまして申譯が御座りませぬ。どうぞおゆるし下さりませ。

右衛門佐。秀。包むには及ばぬ。云ふてみい。何ぢや。

お秀の方。こればつかりは御許し下されませ。

右衛門佐。(間を置いて)これ、秀、そちは予に隠してゐる事があるのぢやな。(恐ろしい顔色でお秀の方を凝乎つと見

つめる)

お秀の方。(泣く)そのやうな滅想な……何で私が上様に……

岩尾が出てくる。

岩尾。(お秀の方の様子を見ない振をして)岩尾申上げまする。角八様はまだ御歸りは御座りませぬ。

右衞門佐。何、まだ戻らぬか。

岩尾。さやうに御座りまする。

右衞門佐。その方は退つてもよい。

岩尾。はつ。御上御休息中、恐入りまするが、やがて御能が始りまするよし、御表より申して參りました。

右衞門佐。(うるさげに)十太夫にちと用事がある。十太夫が戻つて參つてから、予は見所へ罷越すであらうと申せ。

岩尾。はつ。かしこまりました。(退場)

お秀の方。上様。さやう仰せられず、すぐさま見所へ御出で願はしう存上げまする。

右衞門佐。何故そちは見たうもない能を予に見せうとするのぢや。予が此處にゐては五月蠅いか。

お秀の方。(ほろりとして)またさやうな事を……お情なう存上げまする。

右衞門佐。(執ねく)それならば包まず云ふたがよいではないか。

お秀の方。(俯向いて)私には人さまの惡口は云はれませぬ。

右衞門佐。それは誰の事ぢや。(お秀の方は默つて答ない)秀。(險しく)申せと云ふに申さぬか。

お秀の方。(ハラハラと泣く)上様。私は御家中の皆さまから憎まれさげすまれて居りまする。もし、上様、お能御覽が

ない時は、また私が悪ざまに云はれねばなりませぬ。

右衛門佐。どのやうな悪口を云はるゝのぢや。

お秀の方。私が上様を御離し申さぬゆえ、御能御覧がないのぢやときつと云はれまする。(泣きながら)私は何のやうに憎まれても構ひませぬが、上様までおかゝり合ひにでもなつてはと、それが恐ろしう御座りまする。

右衛門佐。(間を置いて)して、家中の誰々がそちを憎んでゐるのぢや。

お秀の方。重役の方々から下々にいたるまで、皆私をお憎みで御座りまする。

右衛門佐。(笑つて)そのやうな事があるものか。

お秀の方。いえ、いえ、偽では御座りませぬ。先日上様御迎に箱崎へ参りました折も、口惜しい眼に合ひました。

右衛門佐。どうしたのぢや。

お秀の方。岩尾と二人で御座船寶玉丸の話をいたして居りますと、井上道柏さまから満座の中で御叱りをうけました。

右衛門佐。(打沈んで)寶玉丸については予も心配いたし居る。困つたものぢや。

お秀の方。恐れながら私は上様が御痛はしうてなりませぬ。賤しい生れの私は、上様などは何事も御自分の思ふとほり、御羨やましい御身の上とばかり存上げて居りましたが、かうして御側近くお仕へ申してみますると、見るときくとは、大した違ひで御座りまする。

右衛門佐。(盃を傾けて)そちにも大名の辛さが分つて参つたか。

お秀の方。(酌をして微笑)上様。私は恐れ多い事では御座りまするが、上様とたつた二人で、人も何も居りませぬ處で氣隨氣儘な暮らしがしてみたうてなりませぬ。

右衞門佐。(打解けて)うむ。予もさう思ふ。將軍家に對する遠慮もなく、老臣たちに氣兼もせぬところで、のんびりと酒を飮んでみたいものぢや。いや、然し、そのやうな事は夢にみるばかり、とても此世では行はれぬ。が併し、秀、今に見るがよい。この筑前五十三萬石の家は見事予が一存でおさめて見するぞ。鹿爪らしい老臣たちには、口も入れさせぬわ。

お秀の方。上樣、早うそのやうな時が參ればよろしう御座りまするなあ。

右衞門佐。うむ。その時こそ、十太夫を一家老に取立てゝ、家中の侍のたばねとするのぢや。(思出して)十太夫はまだ戻らぬと見える。

お秀の方。只今の御家老たちが生きておいでになる內は、なかなかお望は叶ひますまい。

岩尾が出てくる。

岩尾。只今倉八さま御歸りで御座ります。

右衞門佐。うむ、戾つたか。これへ參れと申せ。

岩尾。はつ。(ためらふ)御奧へお案內いたすので御座りまするか

右衞門佐。(氣付いて)いや、十太夫は予が腹心ぢや、ゆるす。奧へつれて參れ。

岩尾。恐れながら、御錠口の掟を破りましては、御表より喧しう申して參るかと存じまする。

右衞門佐。(怒つて聲たかく)予が申付くるのぢや。つれて參れと申したらつれて參れ。

岩尾。はつ。(退場)

右衞門佐。(酒氣を顏にあらはしてつぶやく)老臣が何ぢや。時勢もわきまへぬ頑固な事ばかり申す。よるとさわると鬪

ヶ原、朝鮮の戰の自慢ばなしぢや。己れらのやうな頑な心で、この太平の御代がおさめてゆかるゝと思ふか。諸國の浪人たちの慘めなさまを見るがよい。皆腕節ばかり强くて時勢に合はぬ奴等ぢや。

岩尾に案内されて十太夫が旅裝束のまゝ出てくる。

岩尾。倉八さまお出で御座りまする。(退場)

十太夫。只今戻りました。殿御待兼と承はりましたゆゑ、裝束もあらためず參上いたしました。無禮の段おゆるし願上げまする。

右衞門佐。(打解ける)おゝ、待兼ねたぞ。まづ、一献つかわさう。(盃をさす)秀、酌して取らせ。

お秀の方。はい。

十太夫。これは恐入りまする。然らば頂戴仕る。(にじり寄つて盃をうけ飮み乾して)いさ、御返盃。

右衞門佐。(受ける)十太夫。遠路大儀であつた。して、稻葉殿は別に御變りもなかつたか。

十太夫。(ハラハラと涙をこぼす)殿、殘念で御座りまする。

右衞門佐。どうした。十太夫。

十太夫。拙者奴には上使御眼どうりおゆるしが御座りませんでした。

右衞門佐。何と申す。

十太夫。副使黑田市兵衞は筋目の者とき丶及ぶが、倉八十太夫とは、つひにきかぬ名ぢやとの仰によつて、市兵衞だけ御眼通りが叶ひましたやうな次第で御座りまする。

右衞門佐。何、予が正使たるそちに眼通りすらゆるさなかつたと申すか。(顏色かはる)

十太夫。もとより卑賤輕輩の生れ、有難き殿の思召によつて、家老の列にまで入りし拙者奴で御座りますれば、たとへお眼通り叶はずとも、わが心には何の恨むところも御座りませぬが、たゞ、殿御威勢を傷け、御家の名譽を辱かしめました段が十太夫何とも殘念でなりませぬ。
右衞門佐。うむ。そちに罪はない——如何に重き御役目柄とは云へ、遠路の御旅行御苦勞と存じ、慰問の禮をつくしたるわが使者をさまでに辱かしめらるゝとは、無禮千萬。(切齒。盃を出す)
お秀の方。上樣、そのやうに召上りましては……
右衞門佐。(烈しく)えい。何を愚圖々々いたして居るのぢや。なみなみとつげ。
お秀の方。はい。(酌をする)
右衞門佐。(一呼吸に飲乾して)予を若輩と侮どつて蹈付けたる仕方ぢや。たとへ稻葉殿とて、この儘ではすまされぬ。して、寶玉丸の儀については、稻葉殿御考は何うであつた。
十太夫。黑田市兵衞より承はりましたところでは、たとへ御掟どほり五百石積であらうとも、さやうに華美をつくしたる大船は、人目にも立ち申す。早々燒捨てらるゝがよからうと以つての外の御氣嫌であつたと申す事で御座ります。
右衞門佐。(疳癖の笑)うむ、面白い、船手の者どもに命じて、早速燒捨てさせい。
十太夫。殿。寶玉丸御燒捨の儀は、一應家老中に御相談然るべきかと存じまする。何分大金をかけました船で御座れば……
右衞門佐。(決然として)いや、すぐ燒捨てさせい——予が不始末は予が掫く。誰にも遠慮氣兼は入らぬ。

十太夫。はつ。

右衛門佐。(强情に)しかと命つけたぞ。

十太夫。かしこまりました。(間。俯向いて)殿。

右衛門佐。何ぢや。

十太夫。十太夫御願で御座りまする。何うぞ拙者奴に御暇を玉はりたう存じまする。

右衛門佐。何、暇をくれいと……

十太夫。はい。(聲をくもらせて)拙者、足輕頭より殿の御眼識を以てお取立にあづかつてより既に十年、殿、拔群の御恩を思ふて、ひたすら御奉公いたしましたが、もとより不敏の生れ、一家老栗山殿はじめ、故參のお方々のお氣に入るやうなお務が出來ませぬ。

右衛門佐。十太夫、その儀は心にかくるな。何事も予がよう知つて居る。彼等はそちの立身出世を妬むのぢや。

十太夫。(平伏して)はつ。何時もながら有難き御言、感泣の外は御座りませぬ。拙者一身はもとより殿にさゝげましたる物、たとへ如何やうに故參の御方々に憎まれませうとも、少しもいとひませぬが、今度の事拙者一身の耻辱はともあれ、殿御威勢が立ちませぬ。

右衛門佐。うむ。なるべく人々に知れぬやうに、伴の者どもに口止いたして捨て置くがよい。稻葉殿には予がきつと申談じてつかわす。

十太夫。殿。拙者が稻葉殿御宿の玄關から追歸されたと申す事は、もはや福岡博多の町中にかくれなき噂で御座りまする。

右衛門佐。（勃然として）憎き町人どもぢや。以後、かりそめにもそのやうな噂話をいたす者は、何人にもあれ、すぐさま切つて捨つるやう家中の者どもにふれさせい。

十太夫、お秀の方平伏する。鼓の音、笛の音、謡曲の聲が靜かにきこえてくる。右衛門佐は頻りに盃を傾ける。

幕

第三幕

第一場

城内。幾重にも折れまがつた屋敷の大廊下。曲り角にそふて家老たちの詰所がある。正面大襖、墨色鮮やかに五葉の松がかいてある。

六月十五日の早朝の事である。

茶道二人宿直の侍と話をして居る。

茶道甲。奥御殿では、まだお酒宴が果てぬと見えまするな。

侍。夜どほしの御酒宴は前代未聞ぢや。

茶道甲。殿樣の御酒量は、この頃またお上りなされました。

侍。お相手の倉八殿が、さぞお疲れであらう。

茶道乙。（遠く離れてゐる。獨語のやうに）殿樣が、なんぼお强いと云ふて、あのやうに召し食つては、お身體がたまる

まい

侍。莫大の國費をかけて、やう〳〵出來あがつた寶玉丸は、公儀思召しに叶はぬとあつて、あのとほり、お燒拂ひになるし、やれ御城下に公儀の隱密が眼を光らしてゐるの、何んのと、さま〴〵な流言が、行なはれるし、殿の御心の荒ぶのも、御無理とは思はれぬ。

茶道甲。寶玉丸の燒けるのを、昨夜私共は御天主の上から、見物いたしましたが、あれだけの大船が、焔硝の火に包まれて燃え上る美しさは、何とも云はれぬやうでござりました。

侍。何しろ、海上三里の間は、眞晝のやうに照らし出されたと申すからなう。

茶道乙。百姓共の上げた御年貢が、そのまま燒けてなくなつたやうなものでござりまする。栗山樣の御顏が見えぬので、この頃御殿が一段と亂脈になりました。よい事ではあるまい。

茶道甲。もうそろ〳〵皆樣の御出仕で御座りまする。早う御酒宴がすめばよいがなあ。

侍。なか〳〵すむまい。近頃は、殿の御癇癖が昂じてゐるからな。

茶道甲。(首をすくめて)恐い恐い――われわれはなるべく御傍によらぬやうにしませう。

茶道乙。(また獨語のやうに)栗山樣もお氣の毒ぢや。水牛の御兜は御召上げになるし。奥方や、御次男は、黑田兵庫樣におあづけになるし……

茶道甲。城内では御威勢が、パツタリ落ちたなう。

茶道乙。人の行末はわからぬものぢや。

侍。それにひきかへて、當時出頭の倉八殿。あの尊大な御樣子はどうぢや。

茶道甲。しつ、しつ――そのやうな事は云はぬ事、云はぬ事、誰れかに聞かれて、バッサリやられては、叶ひませぬ。

茶道乙。命あつての物種ぢや。

　遠方より「栗山大膳殿御出仕」と云ふ聲が聞こえる。

侍。何。栗山殿御出仕――ほう。珍らしい事ぢや。

茶道甲。やかましい殿ぢや。早う御出迎へいたしませう。

茶道乙。突然、早朝の御出仕、只事ではあるまい。

　三人退場。

少時空虚。

茶道乙に案内されて、栗山大膳が出て來る。前幕でのびてゐた月代をきれいに剃つてゐる。大膳は、家老詰所に入り座る。

茶道乙。(平伏して)久々の御出仕、御變りもあらせられず、恐悦に存じまする。

大膳。おお、其方も達者で結構ぢや。

茶道乙。恐れ入ります。

大膳。早速ながら、取次役の者を呼んで貰ひたい。

茶道乙。(當惑して)直ぐ樣御目通りでござりまするか。

大膳。至急殿に申上げねばならぬ事がある。もはやお眼覺めであらうな、
茶道乙。(もぢ〳〵して)はつ――兎も角も取次役の衆を呼んでまゐりませう。(退場)
少時。以前の侍が出て來る。
侍。御召しで御座りまするか。
大膳。おお、大儀ながら、至急殿へ御目通りいたしたく存ずる。取次賴む、
侍。はつ。(もぢ〳〵する)
大膳。(いぶかしげに)何といたした。
侍。(云ひにくさうに)殿に御目通りの儀只今はおむつかしいかと存じまする。
大膳。どうしてぢや。
侍。倉八殿を召させられて、昨夜より御酒宴。殿、御大醉でござりまする。
大膳。何。御酒宴――昨夜よりひきつゞいてか。
侍。さやうでござりまする。
大膳。(苦りきつて)夜どほしの御酒宴、これまでついぞ聞かぬ事ぢや。
奥の方より「倉八十太夫殿御退出」といふ聲が聞こえて、十太夫が水牛の兜の箱を捧げながら、大廊下を歩いて來る。
十太夫。(大膳を見る)これはこれは、栗山殿。うち絶えてお目にかかりませぬ。して、早朝の御出仕、何か御用ばしござりまするか。

大膳。十太夫か。久しう合はぬ。只今承はれば、昨夜よりひきつゞいたる御酒宴にて、殿、御大醉の趣、しかと左樣か。

十太夫。(大膳の態度にむつとするが、それをおさへて)いや、某、內密の御用にて、御奧に伺候いたし、御用終つて御酒宴が御座りましたが、殿は左程深うは召上りませぬ。

大膳。何人の許しを得て、御錠口を通つたのぢや。

十太夫。(昂然として)殿の御許しを得て罷り通りました。

大膳。殿の御許しとあれば差支へはないが、自體、男禁制の御奧に一夜を過ごすなど、其方家老の列に加はりながら、謹しまねばなるまいと存ずる。如水公以來の城中の掟は、破つてはならぬ。

十太夫。(赤面して)殿の御用に心を取られておりましたため、その邊の事は、一向心づきませんでした。御注意恐れ入りました。

大膳。以後氣をつけ召され。

十太夫。(皮肉に)はつ。御心づけ、膽に銘じて忘れませぬ。

大膳。(傍に跪くまつた侍に向つて)某がお目通りの儀如何いたした。

侍。はつ。(もじ〳〵する)

十太夫。栗山殿。御目通りの儀、折角ながら、只今は相叶ひませぬかと存じまする。

大膳。何故叶はぬのぢや。

十太夫。この頃の御鬱氣、お晴らし申上んため、某お勸めいたして、岩戶村附近へ鷹野の御催し、只今、御支度中で御

座る。

大膳。（屹として）只今より鷹狩りの御催しと申すか。

十太夫。左様で御座る。

大膳。して、其方がお勸めいたしたと申したな。

十太夫。如何にも某お勸めいたしました。

大膳。言語道斷——近頃、公儀思召しも穩かならず、さま〴〵の流言も行はるるなかに、夜どほしの御酒宴、ひきつづいて鷹狩りの御催ほしとは沙汰の限りぢや。押てお目通りいたし、きつと、申上げねばならぬ。（取次の侍に）其方、取次いたせ。

侍。はつ。（退場）

十太夫。これは異なことを承はる。成程、近頃世上の取沙汰も穩かでは御座らぬ。また、公儀思召しも面白からぬ點これあるやう承はる。殿の御鬱氣も、もとはそこで御座る。これをお慰め申すは、憚りながら臣下の務めかと存じまする。たかが御酒宴、小鳥狩りの御慰み、筑前五十三萬石の太守が、あながち御遠慮にも及ぶまいかと存じまする。

大膳。成程、其方の云ふとほり、五十三萬石の御家柄では、御酒宴、小鳥狩りの御遠慮はいらぬ。しかし、それには自づから時がある。彼の大御所御薨去以來、將軍家に於かせられては、外樣大名に對して御會釋も、以前とはちがつてまゐつた。のみならず、殊の外疑ひ深かうならせられた御様子ぢや。隣國の加藤殿を見るがよい。さしたる事もないのに謀反の御疑ひぢや。太平の時はいさ知らず、かやうな際には、何事も御謹しみなくてはかなはぬ。それを何ぞ

や、其方たち家老の末席を汚す者が、先に立つてさやうな事をお勸め申すとは、全く沙汰の限りぢや。

十太夫。（無言で俯向いてゐる）……

取次の侍出で來る。

侍。申上ます。殿は只今、鷹野御支度中に御座りまするゆゑ、御目通り叶はぬとの御諚で御座りまする。

大膳。久々の大膳が登城、決して御酒宴の御相手や、鷹狩りの御伴にまゐつたのではない、御家の一大事につき言上いたしたき儀があるのぢや。其方、御苦勞ながら今一度取次頼む。

侍。はつ。かしこまりました。（退場）

大膳。（十太夫に向つて）十太夫。某が今日の登城、別儀ではない、昨夜、多くの者共が騷がしい聲を發して、濱手の方へ走りまゐるによつて、何事のおこりしかと思ひ、物見へ上つて見れば、沖は一面の火ぢや。こは容易ならぬ事と、若黨共をつかはして樣子を聞けば、公儀御不審のかかりたる大船寶玉丸を燒き拂ふための騷ぎぢやと申す。何人の指圖でかやうな輕卒な眞似をいたしたのぢや。殿のお傍に御奉公いたす其方が、知らぬ事はよもあるまい。

十太夫。それはかやうの次第で御座る。先日、某上使を承り、御領内御通行の稻葉丹後守正勝殿を、御訪ねいたせし節、寶玉丸の儀につき、散々の御機嫌にて、早々燒き捨てらるべしとの御諚が御座りました故、殿思召しを以て、御燒き拂ひになりましたので御座る。

大膳。さほどの大事を、苟しくも國政輔佐の任にある某にも相談なく、輕々しく取決めらるるとは何事ぢや。

十太夫。某も一應は、重役の方々に、御相談然るべくと、申上ましたが、「予が不始末は予が裁く。」と以ての外の御機嫌で御座りましたゆゑ、是非もなく差控へし次第で御座る。

大膳。「予が不始末は予が裁く。」と仰せられたか。然らば、其方の不始末は、誰れが裁くのぢや。稻葉丹後守殿、御訪ねの上使として、身分不相應にも、三百五十人の足輕に、守護せられてまゐつた其方が、御目通りも叶はず、玄關先きより追ひ返へされたと申す噂さ、市中に隱れもない。御家にとつて、これ程の恥辱があらうか。この不始末は何といたすつもりぢや。

十太夫。某、門地賤しきばかりに、かやうの恥かしめを受けましたる段、御家に對して何とも申譯は御座りませぬ。卽ち、歸城早々、旅裝も解かず、殿に御暇の儀、願ひましたが、どうしても御許しが御座りませぬ。

大膳。稻葉殿が、黑田家の上使を退けられしは、其方の門地賤しきためばかりではあるまい――が、然し、それは今更云ふまい。只心得がたきは、昨今、福岡市中にて、當時の噂をいたす町人共が、幾人とも知れず、城內の者に切り捨らるる事ぢや。

十太夫。(狼狽して)殿、一徹の御氣象、御家の名譽にかかはるとの御怒り、如何程御諫め申せども、更に御聞き入れが御座りませぬ。

大膳。然らば、何故、死を以て御諫め申上げぬ。

十太夫。はつ。

大膳。其方の身より出でたる不始末を何故、其方が裁かぬ。其方の噂が町人達の口の端にかかるは、其方身の治まらぬ證據、何人を恨むところもない。然かるに無慘にも罪なき町人共を切つて捨つるとは、呆れ果てたる暴虐ぢや。

十太夫。其儀につきましては、某申上げたき事も御座るが、仔細あつて只今は何事も申上げませぬ。只。恐れ入るばかりで御座りまする。

大膳。自體、近頃のお政治向きは、以前にも増して、弛みが見ゆる。此度の寶玉丸の事なども、某には一向承服が出來ぬ。たとへ、稲葉殿より御沙汰があらうとも、一旦は御家老臣共に、御相談がなければならぬ筈ぢや。また、公儀御不審のかかつたる大船を、何等證も立てず、直ぐさま焼き捨つるは、却つて御不審を深うする道理ぢや。

十太夫。（早くこの場を逃がれやうとして）栗山殿仰せ一々御もつともと存じまする。

大膳。先年某が、諫言狀を奉つたは、ひとへに今日の事を憂へたからぢや。然かるに、殿、血心を注いだる諫言狀を見返へりもし玉はず、只某に御憎しみが加はつただけぢや。しかも、諫言狀に載せたる二十五箇條は、今日、悉く我等目前に行はれてゐるのぢや。まことに御家の大事、このままにしてまゐつたならば、公儀のお咎めを蒙むつて、御領地を召し上げらるるやも知れぬ。

取次の侍が出て來る。

侍。申上げます。もはや、御鷹野の時間相迫りましたゆえ、御目通りは叶ひませぬ。

大膳。かほどまでに申上げても、御目通り許させられぬのぢやな。

十太夫。（立ち上つて）某は、殿の御伴をいさねばなりませぬ。栗山殿御免。（退場せんとす）

大膳。（十太夫が捧げたる、水牛の兜の箱に凝乎眼をつける）これ十太夫、それは、水牛の御兜ではないか。

十太夫。（當惑して）さやうで御座ります。

大膳。して、それをいづれへ持つてまゐるのぢや。

十太夫。（止むを得ず腰をおろして）殿御手づから某に拜領仰せつけられて御座りまする。

大膳。（眼をぎら〳〵光らす）何、其方が拜領仰せつけられたと申すか。

十太夫。（太々しく）如何にもさやうで御座りまする。某殿の御眼識に叶ひ、御家老の列に加はりましたものの、もとより小身者の悲しさには、家に傳はる什器、寶物が御座りませぬ。此度の上使として不覺をとりましたも、つまるところ、家に由緒が御座らぬゆゑで御座りまする。卽ち、殿、深き御憫を以つて、この御兜を、拜領仰せつけられたので御座りまする。

大膳。（取次の侍に）城代、大音安太夫は出仕いたしたか。

侍。はつ。只今御出仕で御座りまする。

大膳。大目附、喜多村助之進はをるか。

侍。はつ。御詰所にゐらせられまする。

大膳。至急申談じたき仔細がある。これへ伴なひまゐれ。

侍。かしこまりました。（退場）

十太夫。某はこの御兜を一旦家に持ち歸つて、狩り場の御伴をいたさねばなりませぬ。御免下され。（立ち上る）

大膳。少時待たれい。（城代、大音安太夫、大目附、喜多村助之進、取次の侍に伴なはれて登場）

侍。大音安太夫殿、喜多村助之進殿、御出で御座りまする。

兩人平伏する。

大膳。安太夫、助之進、太儀であつた。近う。

兩人。はつ。

大膳。十太夫、その御兜を、これへ。

十太夫。はつ。(大膳へ兜の箱を渡す)

大膳。(恭々しく受取つて、座の中央に置き)如何に、安太夫も、助之進も承はれ、これは、御家の重寶、水牛の御兜ぢや。この御兜の貰い理由は、苟しくも、御家の祿を食む以上、一人として知らぬ者はあるまい。其方達も知る如く、先日までは、この大膳が、勿體なくも、先君與雲院殿御遺命を以て、御預りいたしをつたのぢや。然るに、殿、御傍に置かせられて、朝夕に、拜しまゐらせたき御望み、至極、御道理の儀と存じ、謹んで、御返し申上げたのぢや。今日、某、久々にて登城いたし見れば、これなる十太夫が、殿より拜領したる由にて、御兜を持參いたしをる。思へば、十年の昔、先君、臨終の御遺言に、「この兜は、しかと大膳に預けおく。まさかの時は、これを持つて、我身に成り代り、右衛門佐に諫言せよ。」と仰せられた。弓矢八幡も照覽あれ。只今の口上には一點の相違もない。さればこの御兜は、御家の重寶とは云へ、殿御一人の御儘にはならぬ。何人に御預けあるにしても、一應は大膳に、御計りあるべき儀と存ずる。然るに、一言の御沙汰もなく、さしたる手柄もせぬ十太夫に拜領仰せつけらるゝとは以ての外の儀、察するところ、殿、思召し違ひか、十太夫聞き違ひか、この二つの外はあるまいと存ずる。この御兜はとりあへず、其方たち兩人に預け置く、大切に守護し奉れ。

十太夫。(憤然として立ち上り聲高に)あまりと云へば御無體千萬。この上は、殿の御裁を仰ぎ申す。(かう云つて奧の方へ馳け入る)

安太夫、助之進の兩人は、互に顔を見合せて、躊躇してゐる。

大膳。兩人共心配いたすな。萬事は某が胸にある。決して其方たちに迷惑はかけぬ。追つて沙汰いたすまで、しかと守護し奉れ。

安太夫。承知仕りました。
助之進。然らば、御免下され。
　兩人は、兜の箱を捧げ持つて退場。
大膳は、凝乎つと、思案に沈んでゐる。やがて、「上樣御成り」といふ聲が聞えて、茶道二三人、詰番の侍など大廊下を走り過る。
續いて、近習の侍たちを從へた右衛門佐が、狩裝束で十太夫と並んで出て來る。一行が、家老たちの詰所の前を通り過ぎやうとすると、大膳が進み出る。
大膳。（大音に）殿、申上ぐる儀が御座る。少時、御待ち下され。
右衛門佐は、返事もせず、冷酷なる眼で、チロリと見て通り過る。
大膳。（後を追かけるやうに）殿、少時。（一行の姿が遠ざかつたので、其儘口をつぐむ。長き間。深き聲にて）此度こそ、切腹は逃がれぬところぢや。（長き長き間。恐ろしき顏付にて）此上は、ただ、斷の一字あるのみぢや。
　急ぎ足に立去る。

第　二　場

福岡市外。道路に添ふた毘沙門堂の前。遠く福岡市街の屋根の上に、城の天主を見晴す。
前場と同日の夕刻。
名も知らぬ虛無僧一人汚れた衣服を着て堂の前に立ち、しづかに尺八を吹いてゐる。土民七八人そのまわりに立

つて聞入つてゐる。

尺八の曲終る。

土民一。さてさてうまいものぢや。

土民二。(錢を懷より出して)虛無僧殿。進ぜまする。

虛無僧。(受納める)有難う御座る。

老女。(また錢を出す)私も喜捨いたします。

虛無僧うけとる。

土民三。今のは何といふ曲ぢや。

土民二。さあ、何といふ曲か、私は知らぬわ。

土民三。(土民一に向つて)お主は知つてゐるか。

土民一。いや、知らぬ。

虛無僧。あれは「鶴の巣籠り」ぢや。

土民三。「鶴の巣籠り」とよう名は聞くが、正のものを聞くは始めてぢや。虛無僧殿、私も、何ぞ喜捨したいが、この頃は、御年貢の取立が嚴しいので、貧乏この上なしぢや。許して下され。

土民四。貧乏は誰も同じ事ぢや。役にも立ぬ大船が出來たために、どれだけ我々百姓は、痛められたか知れぬわ。

若い女。虛無僧殿。此處にゐる人たちは、皆心がけのよい者ばかりぢや。只貧しうて、何も進ぜる事が出來ぬ。お氣の毒ぢや。

虚無僧。いや、その心配はいらぬ。我等は、施す者があれば貰ふ、なければ貰はぬ。只、この一管の笛を吹いて自から樂しむのぢや。

土民五。この村も、四五年前までは、このやうに貧乏ではなかつたがなう。

虚無僧。年貢の取立が、さほど嚴しいか。

土民五。嚴しい段か。丸で無茶ぢや。

虚無僧。役人に評判の惡い者はないか。

土民一。評判が惡いと云へば、まづ御家老の倉八様ぢやな。

土民二。これ、そのやうな事を云ふとまた首が飛ぶぞよ。

土民四。何の、此處らは片田舎ぢや。役人の廻つてくる氣づかひは無いわ。

土民三。(虚無僧に向つて)足輕頭の息子からわずか十年ばかりの内に、御家老まで成上つた人で御座ります。

虚無僧。ふむ、大した出世ぢやな。今は昔とちがふて世の中が、定まつてしまうた。家柄の者でなければ、なかなか出世は出來ぬ。われらの若い時分には「下剋上」と云ふて、土民の間から出た剛の者が、天下を取つたり、大名家老になつたりしたものぢや。

土民四。はゝゝゝ、そのやうな世の中に生れたら、誰も汗水たらして、田の艸を取る者もあるまい。

虚無僧。いや決して僞りは申さぬ。論より證據、故太閤殿下をみるがよい。尾張中村の水呑百姓ぢや。我等がもとの主君、福島左衞門太夫殿とてやはり、その仲間であつたのぢや。

土民四。虚無僧殿は、福島様の御家中か。

虚無僧。(淋しく笑つて)もとは、鎗一筋の主ぢや。朝鮮征伐の折りには、拔けがけの功名をして、殿の御佩刀を貰ふた事さへあるわ。

土民二。どうして虚無僧にはお成りなされた。

虚無僧。(淋しく笑ふ)零落のはてぢや。浪人を、召抱ゆるやうな大名は、近頃見あたらぬ。我等も黒田殿の家老にでもなりたいものぢや。して、その倉八とやら云ふ男は、どのやうな悪事をいたすのぢや。

土民三。噂はいろいろ御座ります。

土民四。何でも、つい、此頃の事、博多の町人、お多福屋嘉兵衛の、大切にしてゐる浮世又平の六枚屏風を、家來をやつて、無理強に取上げたと、云ふことぢや。

虚無僧。無法な事をいたすなう。

土民一。しかし、因果は覿面ぢや、この間、公儀の御役人が、御領内をお通りなされたとき、上使に立つて、玄關口から、追返されて、吠面かいたわ。

土民三。はゝゝ。あの時はよい氣味であつたなう。

この時、一人の狩裝束の武士が、毘沙門堂の裏から出て來て、土民達の高調子の、立話を立止つて聞く。

土民二。あの錢のかかつた寶玉丸を昨夜燒沈めたのも、やはり倉八樣の差金ぢやと云ふ噂ぢやなう。

若い女。虚無僧殿、御覽なされましたか。濱手の方は昨夜それはそれは、えらい騒でござんした。

虚無僧。俺も、丁度城下に泊りあわせたので、濱手へ出て見たが、沖はまるで、螢のやうに、火に照らされて、明るく輝いてをつた。

土民四。百姓が、汗水たらして納めた年貢が、その儘焼け沈むのぢや。日輪樣のやうに、光り輝かうぞ。

突然、立聞きしてゐた、武士が大刀を拔いて、躍り出る。

武士。おのれ不屆者奴。(土民四を立どころに切り倒す)

「それや出たわ。」「危い。」などとわめき騷ぎながら、土民たちは逃げ隠れる。武士は、物も云はずに、續いて虚無僧に切りかかる。

虚無僧。(深編笠をうしろへかなぐり捨てて尺八を持つて身構する。銀の如き白髪)何をするのぢや、無法者奴。

武士。手向ひいたすか。(切りかかつてゆく)

虚無僧。(尺八で受止めながら)罪もなき者どもを切つて捨つるとは狂氣の沙汰ぢや。

武士。倉八殿の事をかれこれ申す者は、速刻切つて捨ていとの、殿の嚴命ぢや。

虚無僧。ははは……老ぼれてもまだ腕は鈍らぬ、そちたちには、ちと、手硬いぞ。(尺八にてあしらううち、武士は次第に敗け色になる。とうとう逃げ出す)口程にもない奴ぢや。ははは……。

毘沙門堂の後などに隠れて、覗いてゐた土民達が、恐々出て來る。

土民二。虚無僧殿、御傷は御座りませぬか。

虚無僧。いや、何とも御座らぬ。(死骸を凝乎つと見る)袈裟掛の深手じや。氣の毒ながら助かるまい。皆で、葬つてやらるるがよい。儂も出立といたさう。

土民三。虚無僧殿は、どちらへお出なされまする。

虚無僧。いや、何處と行衛は定めぬ。行く先々で、日が暮れれば泊るだけぢや。お別れいたす。(城に背を向けて歩き

出す)

土民一。これこれ、虚無僧殿。その道は行かれませぬ。

虚無僧。行かれぬ。何故ぢや。

土民二。殿様御鷹狩でござります。これよりさき、岩戸村一圓の地は、百姓は勿論、旅人さへも、通る事罷りならぬと、嚴しい御布令でござります。

虚無僧。鷹狩の區域は何人も通さぬと云ふのか。

土民一、二。(不平らしく)さやうで御座ります。

土民三。百姓共は野良へ出る事も叶はず、かうして、一日遊んでをります。

虚無僧。黒田家も、もう末ぢやな、長い事はあるまい。如水公は、才智鋭く、何事にも抜け目のない人であつたから、うまく、徳川殿に取入つて五十三萬石の大大名となられたが、この有様では、やがては、加藤、福島の後を追はねばなるまい。それが世の中ぢや。(市中の方へ向つてトボトボと歩み去る)

土民二。(後を見送つて)偉い虚無僧殿ぢやなあ。

土民三。(死骸に氣が付く)何はともあれ、松蔵の死骸を早う、家へ擔ぎこまねばならぬ。皆の衆、手を貸して下され。

二人にて死骸を擔いで退場。土民一は後に付添つて行く。

土民一。自體、松蔵は、口に毒があつたから、かやうな目に會うたのぢや。(退場)

少時空虚。

四五人の狩装束の武士が出て來る。その中に先刻の武士もまじつてゐる。

武士一。別に異狀もないやうぢや。

先刻の武士。もはや逃げ去つたと見ゆる。

武士二。(先刻の武士に向つて)貴殿に切り倒された土民の死骸も見えぬでは御座らぬか。

先刻の武士。されば、もはや家へ運び去つたかも知れぬ。(血の痕を見つける)おお、此處に血が滴りをる。(得意らしく)これぢや。

武士一。うむ、村の方へ血の滴りが續いてをる。家へ運んだのぢや。よい幸ぢや。殿の御目さわりにならずにすむわ。

先刻の武士は、血の痕を踩じつてゐる。

武士三。(何者かを見つけたやうに、するすると進み、遠くを見込んで)誰れぢや、何者ぢや、其處にまゐつたのは何者ぢや。

武士たちは、バラバラと集まる。笠をかぶつた町人體の男が出て來る。

男。へい、へい、私は、博多の町人で御座ります。栗山樣の御領分の、右左良の城内に用事があつて、まゐるもので御座ります。

武士三。殿御鷹野ぢや。此處を罷り通る事相ならぬ。

男。それはそれは、つひ、存じませんで……では仕方が御座りません、別の道をまゐりませう。御免なされませ。(立去る)

武士一。(凝乎つと見送つて)何とも怪しき奴、引捕へて詮議いたさうでは御座らぬか。

武士たちは口々に「承知いたした」と答へて後を追ふ。

少時。鷹狩の一行が、右衛門佐を取りかこんで出て來る。

反對の方より、怪しき男を捕へたる武士たちが出て來る。

右衛門佐。(馬上よりそれを見て)十太夫。

十太夫。はつ。(傍による)

右衛門佐。あれは何者ぢや。訊いてみい。

十太夫。かしこまりました。(武士たちに近よる)方々、その男は何者で御座る。

武士一。(進み出て)怪しき奴と存じ、只今此處にて、召捕へましたところで御座る。

その間にも、怪しき男は隙を覗つて逃げやうとする。

右衛門佐。(凝乎つとその男を見つめる)これへ曳け。予が直々に取調ぶる。

十太夫。(武士たちと一緒に)はつ。

右衛門佐は馬より下りて、毘沙門堂の椽の上に床几を置きかける。十太夫以下の面々は、左右に居ながれる。武士たちは、怪しき男を曳いて、中央に出る。

右衛門佐。笠を取れ。

武士たちが嫌がる男の笠を取る。

十太夫。(怪しき男の顔を見て驚く)殿、曲者の面體、お見覺えは御座りませぬか。

右衛門佐。うむ。たしかに見知つた面ぢや。誰れであつたか。

十太夫。栗山大膳殿の腹心、大橋彌藏で御座りまする。

右衛門佐。さうぢや。辨藏にちがひない。こりや辨藏、其方は、何故姿をやつして、此邊をうろつくのぢや。

辨藏。殿樣直々の御調べ恐れ入りまして御座りまする。實は本日ちと急ぎの用事が御座りましたゆゑ、殿樣御鷹狩を存じながら、此邊をひそかに、通り拔けんため、かく、姿をやつしてまゐりましたところで御座りまする。」

右衛門佐。それは其方一人の思案か。それとも大膳の差圖か。

辨藏。私一人の思案で御座りまする。主人は、何事も存じませぬ。」

右衛門佐。して、大膳は如何いたしてをるか。

辨藏。今朝、御城内より歸りましたる後は、一室に閉ぢこもり、深く謹愼いたしをりまする。

右衛門佐。こりや辨藏、左右良（まてら）へまゐる用事と申すは、大膳の用事であらう。包まず申せ。

辨藏。只今も申上げましたるとほり、私自身の用事で御座りまする。

右衛門佐。しかとさうぢやな。

辨藏。決して、僞りは申上げませぬ。

右衛門佐。（武士たちに）これ、辨藏の身體（からだ）をあらためい。

武士たちは「はつ」と答へて立上り、「これは御無體」と叫びながら、身を守らうとする辨藏を押し伏せて、身體中を調べる。

武士三。（辨藏の襟を裂いて、一通の書狀を取り出す）こりや何ぢや。

辨藏答へず。

武士一。（それを受取つて差出す）殿、かやうな物を、所持いたしてをりました。

右衛門佐。（受取つて凝乎つと見る。驚いて早口に）十太夫、辨蔵は左右良へまゐるのではない。公儀、御目附竹中采女正殿を訪ねて、日田へまゐるのぢや。（書状を裏返す）しかも、大膳の手紙を持つて……

一座動揺。

十太夫。（覗き込むやうにして）日田の御目附、竹中殿へと仰せられまするか。容易ならぬ儀、早速御開封差支へないかと存じまする。

右衛門佐。姿をやつし、偽りをかまへて、日田へまゐるは、只事ではあるまい。（開封して、手紙を讀む。顔色サツと變る）

十太夫。何事で御座りまする。

右衛門佐。（喪心したやうに）以つての外の儀、予が、將軍家へ對し、ひそかに、謀反を企てをるとの訴狀ぢや。

十太夫。何と仰せられまする。

一座大動揺。

右衛門佐。（力なく訴狀を十太夫に渡す）先これを見い。

十太夫。（受取つて讀む。顔色變る。大息をついて）此訴狀、何とも解せませぬ……。

右衛門佐。予にも分らぬ……。さうぢや、とも角も、辨蔵を退げえ。

十太夫。大切の四人、嚴重に見張りをいたされよ。

武士たちは「はつ」と答へて辨蔵を曳いて毘沙門堂の裏手へ退場。

右衛門佐。十太夫その訴狀の日附は。

十太夫。今日の朝になつてをりまする。城中より、退出いたしてから、認めたものと思はれまする。
右衛門佐。まこと、大膳が認めたものであらうなう。
十太夫。王羲之を學んだる手跡、まがふ方も御座りませぬ。
右衛門佐。（間をおいて思ひ定めたらしく）とも角も、此まゝには置かれぬ。只今までは、歸城早々、腹切らせうと、思ふてゐたが、もはや、かくなりし上は止むを得ぬ。直に、大膳の屋敷に押しかけて、予が自ら成敗いたす。（聲鋭く）小林内匠。
小林内匠。（座中より）はつ。
右衛門佐。其方は至急城中へ立歸り、事の仔細を家老共につたへ、出陣の用意をさせい。
小林内匠。かしこまりました。
右衛門佐。予も直に歸城いたす。
十太夫。殿、少時――
右衛門佐。何ぢや。
十太夫。此道筋は、御城下より、左右良へまゐるたつた一筋の往還で御座りまする。大膳殿、萬一屋敷を引き拂ふて、左右良の要害へ籠られなば、一大事で御座る。
右衛門佐。成る程さうぢや、此處は押へて置かねばならぬ。内匠。出陣の命をつたへたならば、直ぐさま、天主の窓に火を點せ。それを合圖に時刻をはかつて予は此處よりたゞちに大膳屋敷へ馳向ふであらう。
十太夫。幸、狩場の事ゆえ、弓、鐵砲も少々は御座りまする。

小林内匠。然らば御免。(馬に飛び乗つて退場)

あたりが次第に暗くなつてくる。

右衛門佐。十太夫。辨滅を召捕つたのは、天いまだ、我を捨て玉はさるしるしぢや。

十太夫。全く危い處で御座りました。

右衛門佐。この訴状が、竹中殿の手に入つた上は、安穩ではすまぬ筈であつたわ。

十太夫。(間)大膳殿に、かやうの恐ろしい、たくみがあらうとは、今の今まで、思も及びませぬ處で御座りました。

右衛門佐。人の心は分らぬ。(十太夫に)今朝そちが會ふた時は、寶玉丸燒拂ひの事を、啌ましう云ふてをつたと申したな。

十太夫。さやうで御座りまする、昨夜の、御酒宴の儀につきましても、何かと申てをられました。

右衛門佐。如何に、公儀思召しとは云へ、予の意に叶ふた船の燒くるのを、酒でも飲まずば、見てはをられぬではないか。そちはさう思はぬか。

十太夫。殿の御心、深く御察し申上げます。

右衛門佐。(急にならくとして)面に賢人を粧ひながら、主を賣るとは、憎い奴ぢや。(切齒)思ひ知らせてやらうぞ。

衣笠因幡。

衣笠因幡。(座中より)はつ。

右衛門佐。足輕は總勢幾人まゐつてをる。

衣笠因幡。三百人で御座りまする。

右衛門佐。鐵砲は何挺ぢや。

衣笠因幡。五十挺御座りまする。

右衛門佐。弓は。

衣笠因幡。八十張御座りまする。

右衛門佐。其方は、足輕頭を集めて、大膳屋敷へ馳せ向ふよしを布令(ふれ)てまゐれ。

衣笠因幡。かしこまりました。(退場)

右衛門佐。(凝乎つと、訴狀をひろげて見る。突然、しわがれ聲で)十太夫、これを見い。追而書(おつてがき)に「なほ、この書面、相違なく御手元に相屆き候やう、一通にいたし、一通づゝ、使者に持たせて、別の道より參るやう取計らひ置き申し候。」と書いてある。一大事ぢや。

十太夫。や。

右衛門佐。今一人の使者に追手をかけやうにも、何處と訊ねる途もない――その内に、訴狀は竹中殿御手元に屆くであらう。

十太夫(深く思案して)さやうで御座りまする。

右衛門佐。十太夫。如何いたしたものであらうなう。

十太夫。殿。殘念ながら、訴狀は竹中殿御手元に屆いたものと思諦らめるより致方は御座りませぬ。

右衛門佐。果して屆いたとすれば予は公儀の御譴をうけねばならぬ。

十太夫。(間を置いて)殿。大膳どのは迂闊には御成敗出來ませぬな。

右衛門佐。予もさう思ふ。訴人を殺しては、御疑がいよ〳〵深くなるばかりぢや。

城の天王の窓に火が點る。衣笠因幡が出てくる。

衣笠因幡。足輕頭にはお布令を廻しまして御座りまする。殿。御覧なされませ。天主の御窓に灯が點りました。

靜かに幕

第四幕

二月二十四日、朝。江戶、土井大炊頭役宅大書院の光景。外には、雪が降りしきつてゐる。床の間には、白梅の大枝が、馥郁たる香を吐いてゐる。正面欄間には、「君臣佐仗」といふ大字の額が、掛つてゐる。一隅に、翠綸飛龍の大衝立がある。土井利勝、酒井忠世、酒井忠勝、松平忠弘、永井尚政、青山幸利、稻葉正勝、尾張家附成瀨隼人正、紀州家附安藤帶刀、大目附柳生但馬守、秋山修理亮、水野河内守、加加爪民部、等の人々が、威儀を正して、竝んでゐる。下座には留役の侍が、机をひかへてゐる。

土井大炊頭。一同に申上げる。伊井掃部頭殿、今日の對決に、御立會これ有るべき筈のところ、今朝、將軍家御用にて、登城いたされましたゆゑ、自然、御臨席これ無きかと、思ひまする。

酒井忠世。此大事に、御登城御苦勞と存ずる。

柳生但馬守。大炊頭殿に申上げまする。此度の訴人、栗山大膳には、竹中采女正附添ひの上、只今、參上仕りました。

土井大炊頭。大膳、相手の家老たちは。

柳生但馬守。先刻より、あれに、差しひかへてをりまする。

土井大炊頭。さて、各々方、昨年六月十五日、黒田右衛門佐の家臣、栗山大膳か、右衛門佐事、公儀に對し、ひそかに、叛逆を企てをるとの訴狀を、御目附役、竹中釆女正の手元まで、差し出だせし儀で御座るが、昨冬以來、右衛門佐を江戸表に呼寄せ老中に於て、取調べしところ、別段の儀もなく、答辯いづれも、理義、明白で御座つた。訴人大膳は、黒田家の柱石、恐れ多くも、將軍家まで、名の聞えたる者で御座るに、かゝる虚僞の訴をいたせしは、何ともいぶかし儀で御座る。これには何か、仔細があらうと存ずる。よつて、今日かの大膳と、はる／＼筑前より、馳せ上つたる、右衛門佐家臣たちとの、對決をいたすため、各々方の御立會を願ふた儀で御座る。折からの大暑、御出御苦勞と存ずる。（一同、頭を下げる。大炊頭は大目附席に向つて）一同の者を、此處へ、呼び入れられい。

加加爪民部。かしこまりました。（書院の襖を開けて）黒田右衛門家老、栗山大膳、黒田美作、倉八十太夫を、これへ案内いたせ。（云ひ終つて、座に戻る）

やがて、大膳に、竹中釆女正、附添ひ出で來る。續いて、黒田美作、倉八十太夫が侍に案内されて、出で來る。

大膳と、美作、十太夫とは、相對して座る。

竹中釆女正。黒田右衛門佐家老、栗山大膳を、召しつれまして御座る。

大膳平伏する。

竹中釆女正。また、あれに、ひかへをりまするは、同じく、家老、黒田美作、倉八十太夫に御座りまする。

兩人平伏する。

柳生但馬守。（大膳の訴狀を開いて）黒田右衛門佐家來、栗山大膳、面を上げい。

大膳。はつ。（顔を上げる）

柳生但馬守。其方主人黒田右衛門佐、公儀に對し、謀反の企てありとの、訴狀の趣き、しかと相違ないか。

大膳。恐れながら、いさゝかも、相違御座りませぬ。

土井大炊頭。天下泰平の折から、まことに、容易ならぬ儀と存ずる。右衛門佐を、これまで、數度取調べたが、答辯、いづれも理義明白、更に疑ふべき點が見つからぬ、また、目附役においても、さまぐ\な手段をもつて、右衛門佐國元を、相調べたが、成る程、家來の任用をあやまり、上、御不審のかゝるやうな大船を作るなど、政治向きの弛みは認むるが、謀反の證據は一つも上がらぬ。

大膳。國元政治向き、言語道斷に御座りまする。

土井大炊頭。聞くところによれば、其方、右衛門佐と、仲違ひいたしをると申す。何で、仲違ひをいたしたのぢや。

大膳。右衛門佐、ひとへに、佞人を寵び、某の諫めを聞き入れませぬためで御座りまする。

土井大炊頭。こりや、大膳。其方、右衛門佐を憎むあまり、虚僞の訴狀を作つて、主を陷入るゝ所存ではないか。

大膳。(眼をギラ\/と光らす)不肖ながら、國元政治向き、萬端の後見をいたす某、決して、さやうな事はいたしませぬ。

土井大炊頭。しからば、謀反の證據は何ぢや。申述べて見い。

大膳。此度の事は、深く存ずる旨があつて、申上げた次第で御座りする。先年、某か、諫言狀に認め置きました、二十五箇條、また、其後、次々に、起りました似合の出來事を、しかと、お調べ願ひ上げまする。恐らく、此度の事の起りが、相知れませうかと、存じまする。

土井大炊頭。其方、諫言狀の箇條は、公儀において、すでに御調べ濟みぢや。其後似寄りの事件なども、耳にしてはをるが、いづれも、謀反の證據にはならぬ。たゞ右衛門佐の、不行跡と申丈けぢや。其外に申上げる事はないか。

大膳。只今申上げました事より外には、何も御座りませぬ。

土井大炊頭。しからば、黒田美作に相訊ねる。(美作平伏する)其方も、家老の重職にをる者ぢや。右衞門佐謀反の儀、存じをるか。

黒田美作。いや、一向に存じませぬ。某、右衞門佐を、幼少より、よく存じてをりまするが、さやうな、謀反などを、企つる心は毛頭御座りませぬ。

十太夫。(平伏して)恐れながら、十太夫、申上げまする。

土井大炊頭。何ぢや。

十太夫。主人、謀反などとは、跡形もなき儀で御座りまする。某、傍近く、勤めをりまするによつて、主人の心は、誰よりも、よく存じてをりまする。大膳、虚僞の訴をいたし、公儀を騒し奉る段、亂心の沙汰かと存じまする。

土井大炊頭。黒田美作、(美作平伏)寶玉丸と申す大船は、たしかに、五百石積であつたのぢやな。

黒田美作。御意の通りで御座りまする。

土井大炊頭。しからば、公儀御法度には背かぬ。それを、何故狼狽へて、燒き捨たのぢや。

黒田美作。はつ。(十太夫をかへりみて)其儀、十太夫より、仔細に申上げまする。

十太夫。かの大船、寶玉丸の儀につき、公儀御不審の趣、江戸家老、桐山丹波より申ゐりました折から、領内御通行の、稻葉丹後守殿に、黒田市兵衛をもつて、伺ひましたるところ、早々燒き捨ていとの御言葉で御座りましたゆえ、恐れ入つて、さやうに取はからはせまして御座りまする。

土井大炊頭。(稻葉正勝に向つて)十太夫の申條、相違御座らぬか。

稲葉正勝。いかにも、相違御座りませぬ。其、右衛門作とは、入懇の間柄で御座れば、心附のため、さやう申聞けさして御座りまする。

土井大炊頭。美作、しからば、公儀へ届出もなく、足輕三百餘人を庸ひ入れた仔細は。

黒田美作。十太夫、新參の身を以て、家老の列に加はりましたるにつき、組下へつけまするために御座りまする。

土井大炊頭。分に過ぎたる僭上の沙汰ぢや。きつと叱りおく。

美作。
十太夫。（平伏）恐れ入りまして御座りまする。

柳生但馬守。大炊頭殿に申上げまする、此度の訴訟につき、右衛門作國元の重臣、井上道柏、小河内藏允の兩人、憂慮のあまり出府いたし、當御役宅へ、早朝よりつめかけてをりまする。いかが取計らひませうや。

酒井忠世。道柏、内藏允は、世に聞えたる者で御座る。差支へ御座るまい。呼入れられては如何で御座る。

土井大炊頭。これへ、案内せられい。

加加爪民部。かしこまりました。（立つて襖を開け）井上道柏、小河内藏允、案内頼み申す。（座に戻る、侍に案内されて、井上道柏、小河内藏允、侍につれられて入り來る）井上道柏、小河内藏允に御座りまする。

兩人平伏。

酒井忠世。（道柏に向つて、）道柏は、淡路の父ぢやな。

道柏。さやうに御座りまする。

内藏允。小河内藏允申上げまする。此度、主人、右衛門作よしなき御疑を蒙り、澁谷長谷寺に、蟄居罷り在る儀、臣下

の身としては、何分とも、見るに忍びませぬ。大膳、訴訟の趣、われわれ一同ひとへに理解に苦むところで御座りまする。一體大膳は、家中の、最、重き家柄で御座りまする。先代の主人、筑前守長政は、大膳が生れましたその節、守、脇差、産衣に、酒肴を添へて、父親備後に贈られまして御座りまする。其時の使者は、某で御座りました。大膳の父備後は、跣足のまま、某を門まで、送つてまゐり、涙を流して、厚く禮を申まして御座りまする。大膳も、筑前守には、並ならぬ不憫をかけられてをりまする。(涙を落す)しかるに大膳、莫大の主恩を忘れ、かかる仕業に及ぶとは、正しく、天魔の魅入し振舞——右衛門佐、未だ若年には御座りまするが、公儀に對する道は、存じをる筈、何で、逆意など、抱きませうや、(手で顔を押へて泣く。やがて)萬一、右衛門佐に、反逆の心が御座りするならば、此處にをりまする井上道柏が、知らぬ筈は御座りませぬ。

道柏。凡そ、天下は、武を以て取り、文を以て守るもので御座りまする。若し、右衛門佐が、反逆を企てまするならば、戰場の場數を踏んだ侍に、打明くる筈で御座りまする。黑田家におきましては、先づ、美作、内藏允などが、老功の侍で御座りまする。かく申す拙者も、朝鮮の役、關ケ原など小々は覺えが御座りまする。しかるに、右衛門佐の企を、戰らしい戰(いくさ)も仕らぬ、大膳ばかりが、承知いたし、我々共か、毛頭知らぬと申す事は、いささか腑に落ちかねまする。右衛門佐若氣のため、政治向き、不行屆とあつて、領國を召上げらるるなら、いたし方が御座りませぬが、無實の罪だけは、何とかして、晴らして進ぜたいと、思ひまする。

土井大炊頭。道柏の言は、一々道理(もつとも)と存ずる。

道柏。(大膳を睨んで)伜(せ)は、御身の父、備後とは、莫逆の友であつたが、備後は、生涯、嘘は云はなんだ、御身は父に生れ劣つたぞ。

大膳。（冷然として）貴殿は、御隱居の身の上、近頃の事は御存じ御座らぬ。

土井大炊頭。（酒井忠世、同忠勝と、小聲で何か語り合ふ。やがて）もはや、御調べは濟んだ。追てまた、呼出すであらう。一同の者を退げられい。（大目附席に向つて云ふ）

加賀爪民部。かしこまりました。皆々、立ちませい。

大膳、美作、道柏、内藏允、十太夫は平伏する。

土井大炊頭。（大膳に聲をかける）大膳待て。加加爪民部に導かれて退場。

大膳。（襖の傍に蹲る）はつ。

土井大炊頭。其方の御用はまだ濟まぬ。控への間に、休息いたしをれ。

大膳。かしこまりまして御座ります。（退場）

土井大炊頭。（凝乎と後姿を見送つて）何さま、一癖ありげな面魂で御座るなう。

酒井忠世。器量は右衞門佐よりも數倍立ちまさつて見え申す。若年者では成程御しきれますまい。全く外樣大名には、惜しい家來で御座る。

板倉重宗。いや、將軍家御旗本には、あのやうな男は、欲しう御座らぬ。

酒井忠世。重宗殿、異な事を申さるゝ、何故で御座るか。

板倉重宗。あの眼の光を御覽なされい。如何なる者にも服しまじき眼ざしで御座る。——逆心が明らかに見え申す。

侍が出てくる。

侍。（末座に平伏して）只今、井伊掃部頭樣御越で御座りまする。

土井大炊頭。おゝ、見えられたか。丁度、よい處ぢや。これへ御案内いたせ。

侍。かしこまりました。（退場）

土井大炊頭。もはや、上様御用済みと見えまする。この大雪でさぞ御寒う御座つたで御座らう。

酒井忠世。されば、われらと違ふて、掃部頭殿はお年がお年で御座るからなう。

井伊掃部頭が出て來る。

井伊掃部頭。（設けの席につく）これは、これは、各々方、お揃で御座るな。拙者、生憎と上様御用にて、思はぬ遲參を致し申した。

一同會釋する。

土井大炊頭。御挨拶痛み入りまする。先日御耳に入れ置きし黒田家重臣たちの對決只今相濟みました處で御座る。

井伊掃部頭。して、勝負は如何御座つた。

土井大炊頭。やはり黒田家側が勝公事で御座る。重役どもの申すところ、右衛門佐答辯といさゝかの相違も御座りませぬ。

井伊掃部頭。大膳は何と申しましたか。

土井大炊頭。たゞ、此度の事は、深く存ずる旨あつて申上げた次第で御座るとのみ申して、その後は口を開きませぬ。

井伊掃部頭。（考へる）ふむ。深く存ずる旨あつてと申しましたか。……（やがて）上様今日の御用も實は黒田家の事で御座つた。昨夜深更に及んで、御乳母春日局屋敷へ、黒田家の梶原平十郎と申す侍が參つて眼通りを願ふたと申す事で御座る。

竹中采女正。梶原平十郎は右衛門佐血筋の者で御座る。

井伊掃部頭。さやうで御座るか。春日殿は夜陰の事ゆえ、勿論會はれぬ。するとその侍は、懐中より一封の書狀を出して、「然らば此狀御披見の上、將軍家へ御傳達頼み入る。」と申して何處ともなく立去つたと申す。

酒井忠世。將軍家へ御傳達頼み入ると仰せらるるか。

井伊掃部頭。處か、雅樂頭殿。その書狀の中から、勿體なくも權現樣御墨附が出て參つたのぢや。關ケ原の戰の後、筑前守長政に下はつた、未來永々、黑田家を疎略には存じまじく候。」と云ふ御墨附で御座る。

土井大炊頭。成程、そのやうな御墨附があると申す事は仄かに承はつて居りましたが……

井伊掃部頭。某が、御召にあづかつたのは、その御墨附が、將軍家御手元へ屆いた處で御座つた。

酒井忠世。ふむ。右衛門佐、御咎めを申しなだむための、黑田家老臣たちの仕業で御座るな。

井伊掃部頭。いや、梶原平十郎は、大膳の、はからひによつて、春日殿を、お訪ねいたしたと、その狀に、認めてあります。

土井大炊頭。これはまた、意外の御話で御座る。

井伊掃部頭。かの御墨附は、元來、栗山家に御あづかりいたしをりしものなるが、今回の大變につき、大膳ひそかに、これを平十郎に與へ、黑田家が、いよいよ、危ふなつた場合に、春日殿手元に差出すやう、申附けしとの儀で御座る。

土井大炊頭。大膳の心底、いよいよ以つて、解しかねまする。

井伊掃部頭。御墨附を、手に取らせられて、恐れ多くも、將軍家には、御涙を浮べさせられた。（一同頭を下げる）そ

して、この掃部頭に仰せらるるには、「右衛門佐が不行跡は、其方たちの調べによれば、只、若氣の過といふにすぎぬと思はるる。もし今日の對決に、黒田側が勝公事であつたならば、戒めのため、一旦領國を召上げ、然る後、代代の勳功に免じて、新に筑前一國を拜領仰せつけられては、如何であらう。」との思召しで御座る。

板倉重宗。憚りながら某は、上樣思召し至極の儀と存じ申す。

成瀨隼人正。（安藤帶刀をかへり見て）末席より申上げまする。某等兩人は、平生、右衛門佐と入懇の間柄で、御座りまするゆゑ、實は昨日、慰問のため、澁谷長谷寺へ、うちつれてまゐりましたが、右衛門佐には深く恐れ入り、眞實悔悟の體と、見受まして御座りまする。

酒井忠世。自體は利發な人で御座る。上樣仰のとほり、ただ、血氣にはやつて、思はぬ過を、犯したまでで御座らう。

土井大炊頭。各々方、御異存がなければ、御諚のとほり、取計らひませう。如何で御座るか。（一座を見渡す）

一同頭を下げる。

井伊掃部頭。黒田家一同の喜びが、思ひやられまする。

柳生但馬守。聞くところによりますれば、右衛門佐、重き御咎を蒙る上は、家中の侍一同、城を枕に、討死の申合せをいたしたさうで御座りまする。

板倉重宗。何様大藩の黒田家、さやうの儀も御座り申さう。

土井大炊頭。（間をおいて）幸、掃部頭殿も御出下されたゆゑ、今一應大膳を呼出し、彼の心底をとくと、聞きただしてみては如何で御座らう。

井伊掃部頭。其儀、一段と存ずる。

他の人々も輕く頭を下げる。

土井大炊頭。(大目附席に向つて)民部殿、大膳を御呼び下されい。

加加爪民部。かしこまりました。(退場)

土井大炊頭。釆女正殿、貴殿は、筑前の國情をよく御存じぢや。此儀は、貴殿に御任せいたす。とくと、御調べ下されい。

竹中釆女正。かしこまりました。

加加爪民部に導かれて、大膳が出て來る。

加加爪民部。栗山大膳を召つれました。

大膳平伏。

竹中釆女正。(席をすゝめて)こりや大膳。公儀において、御取調べに相成りたるところ、黑田右衞門佐謀反の儀は、いよいよ、其方の、僞りと相わかつた。其方一身の邪より、かかる大事を引起し、恐れ多くも、公儀を騷がし奉る段、不屆至極であるぞ。

大膳。(平伏して)恐れ入りまして御座ります。

竹中釆女正。元來、其方は、黑田家の一家老ではないか。家中の儀表となつて、衆を率ゆるべき身を以て、君臣の義をみだり、三代恩顧の主を陷入るとは、何事ぢや。(大膳、眼をギラギラ光らして釆女正を見つめる)公儀に於かせられても、深き御憤りぢや。そもそも如何なる仔細あつて、其方かやうな訴訟を、思ひたつたか。(間をおいて)もはや、かくなる上は、いたし方があるまい。せめて、武士たる義を思ふて、潔よく白狀いたせ。

大膳。仰せ、一々恐れ入りまして御座りまする。(顔を上げる)某が一身は、もとより、覺悟の上で御座りまする。然らば、仰せにしたがひ、主を賣つたる、某が心底申上げまする。(一同堅唾を飲む)主人、右衛門佐に、謀反の企ありと申しましたは、某の一命を取止むる苦肉の計で御座りました。

竹中采女正。何と申す。

大膳。思へば、昨年六月十五日と申す日は、某にも、黒田家にも、いとも危うい日で御座りました。右衛門佐憤りにまかせ、某があのまま、國元に於て、成敗せられましたならば、政治向不行屆の御咎をもつて、右衛門佐は公儀の御調べも受けず、何時かは領國を召上げられましたで御座りませう。さやうなためしが、近頃は處々に、御座りまする。もとより、某一個の犬死は、惜しむには足りませぬが、先代、長政より、しかと、頼まれましたる某、黒田家の、前途を見屆けずして死ぬ事はなりませぬ。此取計ひは、憚りながら、武略の一端かと存じまする。

一座感動。

酒井忠世。天晴の振舞。雅樂頭感じ入る。

大膳。(平伏)有難き御言、恐れ入りまする。ただ、此上は、某の御成敗御願ひ申上げまする。

酒井忠世。大膳。右衛門佐は、將軍家御諚を以つて、不行跡御咎めのため、一旦召上げられたる、筑前一國を、代代の忠勤を思召され、あらためて、下し玉はつたるぞ。

大膳。(涙をこぼす)有難き御沙汰、大膳この上の喜びは、御座りませぬ。

土井大炊頭。大膳、其方の御調べは、もはや、相濟んだ。引取つてよからう。

大膳。はつ。(平伏)然らば御免下されませ。(退場)

井伊掃部頭。成る程、器量人と、噂には聞いたが、天晴な者で御座るなう。

酒井忠世。さればで御座る。さすがは、黒田家の柱石、あのやうな男は、なかなか、見あたりませぬ。

土井大炊頭。しかしながら、このまま大膳を、黒田家に引渡すわけにもまゐらぬ。何といたしたもので御座らう。

柳生但馬守。家中の侍どもが、ただは置きますまい。只今のところでは、打殺しもいたしかねまじき、勢で御座りまする。

板倉重宗。(突然)大膳には切腹を、仰せつけらるるが、よからうと存ずる。

酒井忠世。何と仰せらるる。

板倉重宗。成る程、大膳は、豪傑の士で御座る。あれほどの、器量を持つ者は、一代のうちには、あまり出ませぬ。しかし、先刻も申したるとほり、彼がもし、将軍家の、御旗本に御奉公いたしをりましたならば、恐れながら、公儀御政道を、亂す者で御座らう。

酒井忠世、重宗殿の仰せ、某には、とんと、解せませぬ。成る程あれ程の男を、御してまゐるには、骨は折れまするが、主が主ならば、大膳とて、服せぬ事は、ないかと思はれまする。

井伊掃部頭。某もさやう信じ申す。

板倉重宗。いや、やはり、切腹仰せつけらるるが、一番で御座る。

土井大炊頭。板倉殿、御言では御座るが、悪事もいたさぬ者を、成敗は、如何かと存ぜられまするなう。

板倉重宗。然らば、大身の大名に、御あづけなされて、隠居、せしめらるるが、よからうと、存ずる。「本來人間には己れにもわからぬ欲があるものぢや。」と申す事を某年少のをり、權現様仰せに、よく承りましたが、只今、はじ

めて、思ひあたり申した、かの、大膳の面魂を、つくづく御覧なされい。筑前一國を、我物と思ふ様子が、ありありと見えまする。

酒井忠世。かの大膳は、深く經史をおさめ、心の工夫をつんだる者と承りまする。君臣の別を忘るる事は、よも御座るまい。

板倉重宗。いや、如何に經史を讀んでも、心の工夫を積んでもまことの性根は、變り申さぬ。器量勝れたる者ほど、恐ろしう御座る。(間をおいて)所詮、天下の御爲にならぬ男ぢや。

土井大炊頭。板倉殿仰せ、我等、同意で御座る。然らば、將軍家へ申上げ、彼奴を、何處か、大身の大名に、生涯御あづけといたしませう。

板倉重宗。それが、宜しう御座らう。

土井大炊頭。天下の大訴訟もこれでやうやう相濟み申した。各々方。お立合御苦勞で御座りました。

幕

作者附記、この戯曲は、先年、森林太郎先生の御作「栗山大膳」をよんだ時に、ヒントを得たものであります。先生が生きてゐらつしやる内に、完成したらば、一本をお贈りして是非見て頂くつもりでしたが、急にお亡れになつたので、やむを得ず、御靈前に捧げる事にしたのであります。



彼等の行く方へ

小川未明

「このまゝ何處へ行かうと自由なんだ」

石田は、自分の穿いてゐる靴の先きを見詰た。乾いた往來を歩いて來たので靴は、埃で白くなつてゐた。それを見ると、獨り靴ばかりでなく、全身に埃を浴びてゐるやうに、一種の憂欝を感じた。汗は、背となく、腋の下となく、服を透して浸み出てゐるので、いつそ足許の地面に躰を投げ付けて、轉げ廻はつて、躰中が黄色な埃に塗れたら、却つて痛快を感ずるであらうと思つたのであつた。

「ほんたうに自由なんだ。それだのに、なぜこんなに、俺の心は、暗く、欝いでゐるのか？」

彼は、誰も、自分の歩るいて行くのを障げることは出來ないと思つた。そして、力を籠めて手を前後に振り、いまゝで氣にしてゐたことを忘れて、埃だらけの靴を高く上げて、前に蹴るやうに運んで見た。すると、煙の立つやうに、格別風もなかつたけれど埃は渦を卷いて起つた。

あちらには、湯屋の煙突が聳えてゐた。その下には、雜多な、小さな、さながら紛糾した生活を其のまゝ見せるやうに町の家屋が固まつてゐた。煙突はその家根を見下ろしながら、折から澄み渡つた青い空に、頭を突き入れようとしてゐた。しかし、それは、長さがあまりに低かつた。

彼は、其等の揉み合ひ、いがみ合つてゐるやうな眼前の光景から目を放して、遠くの空を見た。すると、其處だけは想像も及ばないやうに、この現實の醜惡極まる經驗から類推するには、あまり遠く隔つてゐるやうな氣持がした。青い、青い、空の色は、何となく淸澄な感じを誘はずに置かなかつた。

自由の世界が、其處だけには、空想でなく、この實生活とはもつと異つた、何等か別種の樣式で、具象化されてゐるやうにすら思はれたのであつた。

あてなく其方を眺めて茫然として、足を佇めたのであつたが、彼は、この時、無意識の裡に、やはり頭を押へられてゐるやうな重苦しさを感じずにはゐられなかつた。

「何故だらう?」と、彼は、考へた。

しかし、深く、それについて考へて見るまでもないことを直に悟ることが出來た。歩るいて何處へ行かれるものか。十里、二十里、三十里、百里、二百里、……先きへと行つたところが、不安なしに、勞働をして、生活ができるだらうか? 何處へ行つても、躰のうしろには、重い、生活の錘を引摺つてゐるのだ。

かうして身は社から外に出て、社長や、主筆の眼のとゞかない處に脫れても、この鏈を自分の力で斷ち切ることができない限りは、自由ではなかつたのだ。目に見えない處にゐて、彼等はいつでも必要な時には、この鏈を引くであらう。さうすると自分の躰は、否應なしに、彼等の目の前へ、引摺られて行く。みぢめな樣子で引摺られて行くのだ。

此日の午後二時頃であつた。主筆兼營業部長の命令には、默つて、彼は、頭を下げて聞いてゐなければならなかつた。

「創刊の日の淺い我が實業新聞は、まだ利益を得るに至らないばかりでなく、月々が損失である。諸君が、この新聞を本城とする限りは、潰れないやうに努力する義務がある。面白い有益な記事を成たけ多く載せるやうに心掛けるのは勿論のこと、今月からは、當座臨時に、責任價格をきめて、廣告をも取つてもらひたい」

痩せた、顏色の黑い主筆が、前に立つた三人の記者の顏を見ながら言つた。其の中の一人は、平氣で他のことを考へてゐるやうな顏付で聞いてゐた。また、この社に來る以前には、他の新聞社にゐたといふ、どことなく老巧さうに見えるHは、笑つてゐた。獨り、石川は眞面目に、主筆の言ふことを聞いて考へてゐたが、それには直に服從し難い、何か間違つた條理が其の言葉の中に含まれてゐることを直覺的に感じた。そして、そのことは彼に不快を覺えさせた。彼はその不條理が、なんであるかを自分の頭の中で知らうと主筆の言つたことを繰り返へしてゐた。

老巧さうに見えるHは、この時、笑ひを含んで、極めて自然に、また直截的に、主筆の顏を見上げて

「廣告を取つて來ましたら、いくらかの步合が頂かれるのでせうな」と、言つた。

Hの言つたことを聞くと、みんなは頂垂れてゐた頭を一樣に擡げて、同じやうに主筆の顏を見た。

主筆は反身になつた。黑い光つた顏を前方へ突き出すやうにして、額際に小皺を寄せて、輕く頷きながら、

「先づ責任價格をきめてもらはう。一割位の謝禮は出してもいゝ」と、明快な調子で言つた。

畢竟、此日の要件といふのはそれだけであつた。みんなは、やがて其の室から出た。老巧さうに見えるHは、次の瞬間には、煙草の煙を吹いて、鼻唄をうたつてゐた。

石田は、考へを續けながら、社の入口から、憧がれてゐた、窮りない空の下に出たのであつた。……社は、諸君の本城である……潰れては困るから……責任價格をきめて廣告を……一割の謝禮をする……これは、果して正當な條理であらうか？

たしかに、主筆はさう言つたのだ。それは正しい條理であらうか？　彼は、一刻も早く主筆の眼から離れて、廣々とした、誰にも拘束されることのない世界に出たいと心の中に希つてゐた。――いま、彼の頭の上には、無窮な青い空があつた。どこへでも自由に行くことが出來るのであつた。

しかし、彼は、なほ、頭の中に、主筆の言つたことを繰り返へして考へてゐた。そして、何が、自分を不快に、不條理に感じさせたのだらうかといふことを、はつきりとよく考へて見ようとした。そして、さうしなければ、自身の行動をどちらにもきめることができないやうに思つた。彼は、下を向いて、社を出ると、そのことについて考へて來たのであるが、ふと、心に浮んだことがあつた。

「大に新聞が儲かつた時には、其の利益を等分にするだらうか？」

このことは、當然彼の立場になつたなら、考へなければならないことであつた。彼は、この疑問に逢着すると、現在にあつては、よしやそのことが正義であり、正義を楯に主張しても、結果は、あまりに分りきつたことであるのを知つた。そして、主筆の言つたことは、條理としては、眞に一顧の價値もない。全く自分達を欺瞞せんとしたものだといふことが分つた。彼は、あの時、仲間の一人が、ぼんやりとして、他のことを考へてゐるやうな顔付をしてゐたのを當然だと思つた。また、あの老巧さうに見えるHが、恰悧に、報酬について反問をしたことは意味のあることであり、あの場合に於て、痛快な程當然なことであつたと知つた。彼は、何となく自分の馬鹿正直を恥かしく感じたのである。

しかし、たとへそれを悟ることができても彼は、それだけでは快活にはなれなかつた。

すぐ前に、公園の入口が見えてゐた。公園の中には、木が青々として繁つてゐた。彼は立止つて、木を見上げた。このまゝあちらへ往來を通り過ぎてしまはうか、それとも、なんといふ考へがあるのでないが、公園をぶらついて見ようか……惑つたのである。

やがて、彼は、公園の入口から、奥の方へ入つて行つた。何處へ行かうと、彼は、依然として自分の後方に、重い生活の錘を引摺つてゐる。樹木は欝蒼としてゐた。秋になつたら、其等は悉く凋落してしまふといふことが考へると不思議に感ぜられる。たとへ去年はさうであつたとしても、今年は、さうであるとは信じられないやうな氣がする。或は、今年の秋には、誰もが曾て記憶しなかつたやうな異例な現象が生ずるかも知れない。どうして、現在かうして生氣に滿ち溢れてゐる木々の葉が、幾日かの後には、一枚殘らず、凋落してしまふのだと、かうして眺めてゐる彼自身には思はれやう。

未來は何うであつても、現在目に見る自然は、繪よりも美しかつた。自然が美しくあることは、人間の生活とは關係がなかつた。彼は、まだ衣食住の苦しみを、知らなかつた時分に見た自然のなつかしみのある輝きが、いま眼の前に垂れ下つた枝に閃いてゐるのを知つた。

死んだ祖母が勝手許に立ちながら庖刀を動かしてゐる。蜩が、遠方の寺の林に鳴いてゐる。あの時の夏の光りが、幽かに、この木の葉の上を照らす太陽の閃きの裡にも見られるやうな氣がした。しかし、たゞ瞬間だけ、さう感じたゞけであつて、其の時分のやうに、ほんたうに自然の生命に觸れることはできなかつた。

ちやうど鳥籠の中に置かれてある止り木が、たとへいかやうに自然の枝らしく、格好が面白く曲つてゐても、小鳥の

眼には、其れが、林の中や、野原の中にある枝の如くは、感ずることができないであらう。

生活が渦卷いてゐる。巷の中では、どんなに青々とした木を澤山に植ゑて、公園を造つても、人間は、其處では、のんきに、衣食住の惱みを知らなかつた時分に見た、自然の美を二たび見ることができないにちがひない。躰の後方に引摺つてゐる比較的長い、生活の鎖の重みを感じずにはゐられないからだ。そして、たへず惡夢のやうな重苦しさに壓されつゝある。其の眼で梢を仰ぐのであつた。そして、彼等は、眞に青々とした葉の姿が眼の中に映らないものゝ如く、茫然として、何か他のことを空想しながら、溜息を吐くばかりである。

木の下のベンチの上には、商人らしい男や、學生らしい青年が仰向けになつて臥て、心地よげに眠つてゐるのであつた。折々、枝を襲ふ風のために、縞のやうな影が、其の人達の躰の上に動いてゐた。彼は、決して、其の人達が幸福の夢を見てゐると思ふことができなかつた。

歩るいて行くと、白髮の老人が、四つばかりになつた、男の子を抱いて、やはり一つのベンチの上に横はつて、二人ともよく眠入つてゐるのを見た。ベンチは木の下にあつたが、いつの間にか太陽は、先刻あつた處から異つた方向へ廻はつてゐた。そして、蔭つてゐた處が、日にカンカンと照り付けられて、二人の躰は炎天に晒されてゐた。それでも二人は、ぐつすりと眠入つてゐた。子供は、柔らかな肥つた手を老人の肩にかけてゐる。老人は、また子供の體の上へ頸を投げかけるやうにしてゐる。二人とも、額際に汗を結んでゐた。

この傍のベンチには、全く誰もゐないのでなかつた。日蔭に、二人、三人と腰をかけて、氣ぬけのしたやうな顏付をして、考へ込んでゐる者もあれば、互に額を摺り寄せて、笑ひながら囁き合つてゐる者もあつた。けれど、一人として親切に老人と子供を搖り起して、日蔭に移してやらうとするものはなかつた。かうして構はずに置く方が、道德的であ

るといふよりも、さうすることが、彼等には甚だ物憂かつたのであつた。

しかし、石田は、自から言つた。「無關係であることが、却つて道德的である場合もあるものだ。が、この場合は、二人を起して、日蔭に移してやつた方がいゝものか、このまゝ眠らして置いた方がいゝものだらうか？」

しかし、どうしたらいゝものだかといふことは、畢竟彼にも分らなかつたのである。

たゞ、彼は、かう思つた。

この老人と子供は、家にゐる時には、若い人達から邪魔者に扱はれてゐるにちがひない。それで老人は、晝飯を食べると子供の手を引いて、この公園へ時間を過すためにやつて來たのだ。

街の方を見渡すと、熱さうな日の光りが漲つてゐた。銀色に霞んだ底の方から、いろ／＼な響きが流れて來る。其處には、一生懸命に働いてゐる人達があつた。彼は、もう一度振り向いて、老人と子供を眺めた。老人の顏には、細かな皺が刻んだやうに寄つてゐる。頭髮は白くなつて、殆んど黑い部分は見えなかつた。もう活動するだけの氣力が失せてしまつて、子供の守をして、子供といつしよに夢のやうに日を送つてゐる。行手に、この老人を待つものは、たゞ死があるばかりである。この公園よりも、もつと廣くて、木の澤山にある、もつと、もつと靜かな、恐らく何處よりも靜かな墓地に行つて、永久に眠りに就く日があるであらう。けれど、誰がこの老人が若かつた、過去の日のことを同時に考へないものがあらうか？　十年も、二十年も、もつと若かつた日があつたのだ。その時分は、この人が、どんなに敏捷に働いたらう。他の若い人達と互に競爭をして、仕事にかけても、女にかけても負けないだけの勇氣があつたにちがひない。そして、實際若い女達に持てはしなかつたゞらうか？　毎日のやうに遲くまで稼業をしたこともあれば、或は酒を飲みに出かけたり、時に喧嘩をしたこともなかつたらうか！

彼は、遂に眼を轉じた。公園の花壇には、白、紫、紅の花が星のやうに、頭を並べて、それ〴〵特色のある美しさで咲いてゐた。また池の水には、午後の日の光りが射して、此處にも、人間の感覺では容易に知ることのできない微妙な世界のあることを物語つてゐた。

他の人達の顔を見た。彼は、其の人達の眼が何もの丶上に落ちてあるかを注意した。しかし、青々とした木の葉の上にも、花壇に咲いてゐる美しい花の上にも、其の瞳は向いてゐなかつた。また遠い空の彼方に漂つてゐる雲にも注がれてはゐなかつた。空間に、其の視線は沒して、すぐ近くのものすら凝視する氣力を缺いてゐるやうに、瞳の光りは、疲れて鈍つてゐた。其の樣子付で、何事か案じてゐるか、もしくは職を失つて途方に暮れてゐる人達の如く、考へられたのであつた。

働かうと思つても、其の場所を見出し得ない者が、實際幾何この都會にゐるであらうか。彼等には、行く處がなかつた。この公園に來る者の中には、花を見るためでなく、また人間を見るためでなく、眞に行くところがなくて公園をさ迷ふ者がどれ程多いかを知つたのである。

次には、彼自身の問題であつた。兎に角、ベンチの上に彼は腰を下ろした。

「これから、何處へ行つて面白い記事を探して來ようか？　また、何處へ行つて廣告を取つて來ようか？　俺にだつて當てがないのだ」

かうして、空の下に、自由に放たれてゐながら、やはり自由を知らなかつた。頸を廻はすにも、手足を動かすにも、ちやうど縛られてゐて、許される範圍がきまつてゐるやうであつたのを彼は感ずると同時に、誰が、いつたいこんな苦しい日に自分を遇はせるのかと思つた。

人間は、生れ出ると、誰でもこんなに苦しい日を經驗しなければならぬのか？　もし、みんなが一樣に苦しい日に遇ふのであつたら、なぜ、この世の中には、この苦痛を知らずに生活してゐる者があるのであらう。生存即ち苦痛といふやうなことが、どうして、人間にとつて信じられやう？　生存は、飽迄、幸福な事實でなければならない。靑い空の下にある人間は、あの花と同じやうに、また樹と同じやうに、また鳥と同じやうに、自由であるべき筈であると考へた。

經濟學者のKの名が、この時、彼の頭の中に浮んだのである。Kには、曾て寄稿の約束もあるのであるから、今日はこの人を訪ねて、現在危期に頻した社會狀態に對して、どんな意見を持つてゐるか聞いて見よう。それは誰のためでもなかつた。先づ迷つてゐる自分が、敎へられるところがあれば幸だと思つたからだ。彼は、ベンチから立ち上つた。水邊の道について、だん〱と木の繁みを分けて入つて行つた。やがて道は、公園の出口に逹してゐたのである。

電車から降りて少し行くと靜かな屋敷町があつた。西洋館が處々にあつて、木の間から、その白い壁や、赤い家根を見せてゐた。一帶に有產階級の住宅地であつた。Kの宅は、やはりこの間に挾まれてゐて、大きな門は何となく餘裕のある生活振りを示してゐた。

石田は、門の前に立つて名札に眼を注ぎながら、暫く佇んで考へるともなく――こんな家に住んでゐて、第四階級の實生活の有樣が、Kに分つてゐるだらうか？　世間の人々は、Kが無產者の頼み甲斐のある味方の如く思つてゐるのであるが……。

彼は、頭を傾けてゐた。林の奧深い彼方から、梢の繁みを潜つて、ピアノの響きが波打つて來た。美しい令孃か、若い夫人が、ピアノに向つて、しなやかな指で彈いてゐる姿が、眼に浮んだ。Kの家でか……それとも、隣りでか……音は、柔らかな葉の上を、花壇の花の中を轉げ廻はつて來るのであつた。

玄關に立つて、名刺を出すと、間もなく應接室に通された。しばらくしてから彼はKと卓を挾んで相對してゐた。硝子窓の外には、青々とした木の枝が垂れ下つてゐた。こゝでは、先刻公園で見たとは異つたやさしい日の光りが、枝と枝の間を洩れて葉の上を照らして、その光りは反射してゐる。それを見てゐると、遠い田舍の景色がどことい ふはつきりした記憶がないが思ひ出されるやうな、涙ぐましい感じがそゝられたのであつた。

彼の前には紅茶の茶碗があつた、Kのかけた金緣眼鏡の光りと、この白い滑らかな陶器から立ち上る紅茶の香りとは彼に、エキゾチツクな、氣の遠くなるやうな快感を與へたのであつた。彼は應接室に通つてから、Kに對してかうしてゐると。先刻までの焦燥が何處へとなく去つてしまつて、何んとなく心の落付くのを覺えたのである。そして、Kの話に耳を傾けてゐた。

「私は社會政策によつて、目的の一部が達しられると考へてゐます。參政權を平等に與へることゝ、敎育を普及することゝが、どの道義務であります……」

石田は、默つて耳を傾けてゐた。しかしこの話に含まれてゐる眞理よりも、紅茶から發散するデリケートな香氣と、Kが燻らしてゐる強烈な煙草の香氣とを巧みに嗅ぎ別けつゝあることに彼は、この際無限の興味を人知れずに感じてゐた。其の感じは、印象派的の幻想を繪として眼に描かせずに置かなかつた。そして、先刻途上で望見した、湯屋の煙突を思ひ出したり、また遠くの空の色を眼に想像したりして、此處とは關係のない空想に囚へられたりしたのであつた。

Kの家を辭して、夕暮の街に出ると、往來する人々の足が慌しかつた。彼は、歩るきながら考へた　權利の平等――社會政策――敎育――しかし、それは、同じことではないか？　現在の狀態をそのまゝ押し進めるといふことではないか？　そして、どの道、いまほんたうに働いて、苦痛を堪えながら、どん底にゐる人達を社會の表面に立たせると

いふことではないのである。眞理は、たゞ一つしかない。ほんたうに働く者が、自から排した幸福を誰にも奪はれずに自身に受けるといふことなのだ。それ以外に何の眞理もないではないか？

Ｋの言つたことに對して、彼は、何となくもの足りなさを感じた。應接間が明るく、澤山な書籍が裝飾的に、棚にぎつしり並べられてあつたことを思ひ出した。またピアノの音が聞えたりしたことなどを思ひ出した。そして、此の如き生活が、第四階級の生活と何の共通點もないことを思ひ出した。

この時、彼は思つた。

「新聞などといふものは、博士の名でさへあれば、いゝ加減なことを書いて置いてもそれで濟むんだ。また世間の人達は、大抵がいゝ加減に、それをば單に頭の中だけでほんたうだと信じてゐるんだ。しかし、生活の事實だけは、決してどうすることも出來ない。ずん／＼と思はない方向に發展して行くだらう。そして、思はない時に、すべてのものが覆がへされてしまふのだ」

かう思ふと、彼には、新聞記者の生活も、またさびしく感じられたのであつた。

「明日は、明日だ。そして、今日は、もう暮れるのだ。俺だけは、廣告などを取つて歩るくものか？」

石田は、急ぎ足になつて、人々の間を分けて歩るいて行つた。

生活は萬態であつたが、同じ時間の中にすべてが蠢めき、そして、時期が至れば、前後してみんなが死んで行つてしまふ。人生は、思ふにたゞそれだけなのだ。理想を——希望を——誰が、其の死後に於てもなほ期待するものがあらうか？

かうして生といふものが疑はれる時があつた。しかし自殺することを正しいと考へて、實行しない限りは何人も生に

引摺られて行く。生は、誘惑である。彼は、この誘惑を特に都會に感ずるのであつた。

蟲が火を慕つて寄つて來るやうに、人間が賑かな都會へ押し寄せる。蟲は、美しい自分達を喜ばせる花だと思つた炎に燒かれて死ぬやうに、人間は、生活の黑い渦に卷き込まれて、閭巷に苦しんで死ぬのであつた。

もし、自分に着るものが無かつた時、また食べるものが無かつた時、そして、窮死しかゝつた時に、彼等は何うするであらうか？ 恐らく冷然として、通り過ぎて行くにちがひない。彼等は、さうすることに疑ひを抱かないばかりか、當然であると思ふだらう。何も自分達が知つたことでない！ さう言ふにちがひない。其時自分は「兄弟！」と叫いても、誰も顧みてくれるものがないのだ。

「汝自身の運命だと思へ！」

冷然として、流目で見て、彼等はかう言つて過ぎ行くにちがひない。しかも自分は、最後までこの都會を慕つたであらう。美しい、愉快なところと思つたからだ。また人生を限りなく懷かしんだであらう。誰でもみんな自分の兄弟のやうな氣がしたからだ……。

都會に限つたことではないが、ある人達が一方に、笑つて、喜んで、腹を滿たしてゐる時に、一方では、ある人達が貧乏のために苦しんで、悲しんで、悶えてゐる。世の中が進步するにつれて、人間の生活は平等に近づくのが眞理とされてゐるのに、事實はこれに反して益々幸福な者と不幸な者との差別が隔つて行く。それ程、この社會は賴み難く冷かであつた。

たとへ、一人の人間が、今夜街頭で生活ができなくて、みぢめな死方をしても、この夜の光景には何等の變りがないであらう。そして、享樂に耽つてゐる人々の心にも變りがないのだ。それ程、個人と社會とは無關係であつた。誰も、

この矛盾について怪しみもしなければ、やはりみんなは無自覺に都會を讃美してゐる。そして、賑かな明るい巷を慕つて歩るいてゐるのであつた。

日は全く暮れてゐた。青黒い空の下を火を目がけて、人間の黑い波がうねつてゐた。この波に揉まれ、押し寄せられまた押し流されて、彼は、體が火の中を自然に泳いでゐるのを感じた。

ちやうどその時、あちらでは後ろ鉢卷をした男が片肌を脱いで、赤い色をした空氣枕を片手に差上げて、片手で、力を入れてパン、パンと擲つてゐた。金屬を叩くやうな冴えた音が、群集の頭の上の空に、刎ね上つては消えて行つた。その間に、耳のそばでは女の囁く聲が聞えれば、子供の泣き聲などが聞えたのであつた。

彼は、群集に押されて、みんなの歩るいてゐる方へと行つた。たび〳〵入つたことのあるレストランで珈琲でも飲みパンでも食べようと思つたからだ。

この時、不意に、暗い路次から出て來た男が彼の肩を叩いた。その男は酒氣を帶びてゐた。

「どうだ、廣告が取れたかい」

顏を覗くと、社の老巧さうに見える記者のHであつた。石川は、既に、晝間のことを忘れてゐたが、廣告と聞いて、主筆が責任をもつて取つてくれいと言つたことを思ひ出した。すると不快を感じたのである。

「貧弱な新聞さね。それでも一割の歩合をくれるといふからやつて見る氣になつたのさ。いくら少なくても僕には、五百圓はたしかに取れる自信があるのだよ。今日S會社で二百圓の廣告を出してもらふ約束をして來たよ。あすこの販賣部の主任を知つてゐるんだ」

「實業新聞なんて、みんなこんなものかね」

石川は、まだ入社してから長くも經たないので、友に向つて聞いて見たのであつた。

「東京には、こんな種類の新聞がいくつもあるのだよ。僕だつて、いまのところはほんの腰かけのつもりなのさ。誰がいつまでもあんなところにゐるものかね。いつまでゐたつて實力を認めてはくれないし、全く働き甲斐がないのだよ」

「しかし、君のやうに、廣告でもなんでも取れる技倆があれば、どこにゐたつていゝぢやないか」と、石川は、廣告から得る彼の歩合と月給とを胸の中で計算して見ながら言つた。

「君は何處か廻つて見たかね」と、Hは紅い醉顔をちようど傍にあつた蕎麥屋の軒燈に照らして言つた。

「僕には、廣告を取ることは駄目だ。あれからK氏の方へ廻つて來た」と石田は答へた。

二人は、いつの間にか、群集の往來する路から避けて、路次のうす暗がりの裡に立ちながら話をしてゐた。

「この間、校正に來てゐた青白い顏の男を君は憶えてゐないかね」と、Hは、たづねた。

石田が入社してから、間もない後のことであつた。ある四五日の間、校正係の机に、青白い二十三四の青年が坐つてゐたのを見た。石田は、この青年を、あまり周圍などに注意をしない、たゞ自身のする仕事だけを見詰てゐる青年だと思つた。そのうち、この青年は來なくなつた。

「あの青年なら、記憶に殘つてゐる。あの男が何うかしたのかね」と、彼は、Hを見た。

すると、Hは、言つた。

「僕は、一度あの男と口をきいたことがあるよ。あの男はどこへ行つても病身なので雇つてくれなかつたさうだ。その上に、國には年老つた母親があるので、三度の食を二食にしても金を送らなければならないと言つてゐたよ。僕も、氣の毒に思つてね、他にいゝ口があつたら探がして見ると言つたのだが、そのうち誰にも斷らずに、あの男は社へ來なく

なつてしまつた……」

「ほんたうに、まだ僕等が想像のできないやうな生活があるのだね」と、石田は、心の中で、あの男なら、三食を一食にしても、或は意志の通りに實行するかも知れないと思つた程、その青年の印象が頭の中に深かつた。

「あの男は、ソシアリストなんだね」

「あの男が？」

「いま、僕は、あの男を見て來たのだ。君、あすこの銀行の前まで行つて見たまへ」と、Hは、言つた。

石田は、いつ見ても、常に幸福を感じてゐるらしい樂天的のHを心の中で羨ましく思つた。そして、Hに別れると彼は二たび黑い人間の流れに加はつて、あちらへ歩るいて行つた。

銀行の入口には、鐵の扉が堅く閉つてゐた。ちやうど夜見ると廢墟のやうに、白い壁が、街頭の露店の火で闇の中に浮き出されてゐる。其の前に、人が集つてゐた。青白い顏をした髮の長い青年は、黑い洋服を着て、片手をポケットに差込んで、片手にはカードを翳しながら、群集に向つて叫んでゐた。その眼は、怪しく光つて見えた。

「諸君、この寫眞が見えますか？」

其の寫眞は、暗つぽくてよく分らなかつた。

「骨と皮ばかりになつてゐる子供なんです。この寫眞を撮つた時は、まだ生きてゐたが、もうこの子供は、とつくに死んでゐるかも知れない……」

どうして、あんなに大きな聲が、あの瘦せ細つた體から出るかと驚かれた程である。青年は、言葉をつゞけた。

「日に幾百人となく、幾千人となく、斃れつゝあつて、露西亞のボルガ近傍の飢餓は、すでに、諸君は新聞で、また噂

によつて、知つてゐられる筈です。諸君の子供達が笑つて、樂しく遊んでゐる樣子を見られる時、無邪氣な子供が、どんなに可愛か、そして、また弱々しいものであるかを諸君は、知つてゐられる筈です。子供に、東西の區別はありません。この子供等の哀れな姿をご覽なさい。傷ましいとは思はれませんか、諸君、諸君には、熱い涙がありませんか。

「諸君、親愛なる生産に從事する勞働者諸君、私達は、お互に無產者です。しかし、一粒の米も食へない者に比較した時は、また、一枚の着るものも持たない者に比較した時は、まだ餘裕があるといへます。露西亞の飢えた人々は、死んだ人間の肉を食ひ、土を食ひ、草をも食ひ盡したといつてゐます。人間の惱みに國境がありますか？ 悲哀と憐憫の情に國境がありますか？ 子供達の胃の腑の中に、土や、草が入つて消化するでせうか。諸君は、自分達がそんな悲慘な目に遇つた時のことを想像したことがありますか？ 明日の運命を誰が知ることが出來ませう。相互扶助を措いて、この人生の不幸を救ふものがないのです……

「私達は、無產者で、病氣になつても碌々醫者にもかゝれなければ、また藥を飮むことも出來ません。しかしこの人達のことを考へる時は、それは殆んと比較にはならない。私達の良心や、感情は、果して、この人達を見殺しにして置いて、鞭打たれずにすむものでせうか？

「飢饉救濟のために造る金です。志のある人は、どうか、この繪はがきを買つて下さい！」

青白い、痩せた青年は、かう言つて叫んだ。群集は、青年が言ひ終つた時に動搖してゐた。青年は、受取つた錢をポケットに入れてゐた。

石田は、前に進み出て、直にも青年の手を取らんばかりにしたが、思ひ止つて、自分を名のらなかつた。

「僕にも下さい」と、彼は言つて、錢を渡して、繪はかきを青年の手から受取つた。

青年は、ちつと石田の顏を見た。何處かで見覺えのある顏だと思つたらしい樣子であつた。そして、しばらく、其の眼を彼から離さなかつた。

石田は、二たび、其處を離れて、群集に混つて歩るき出した。たちまち彼の姿は、呑まれる如く、眩ゆき兩側の燈火の蔭に沒してしまつた。

朝は其處から出た、彼は、借間の一室に歸ると、はじめて終日の疲れを身に感じたらしく、兩足を疊の上に投げ出して溜息を吐いた。窓は、開かれてあつた。紫ばんだ夜は、次第に更けて行つた。彼は、わざと電燈を點けずに、そのまにして置いて、窓から洩れて室の中に射し込む、星の光りをちつと眺めてゐた。遠くの方で、潮の寄せるやうに、濁つた物音が、幽かに低くなつたり、また高くなつたりして聞えて來た。いましがたまで、彼は、その中を、人間の黑い波の間を押し分けて歩るいてゐたのであつた。そのことが彼の頭にも思ひ出されるのである。

「人生は、何のために存在するのか？　人間は、何をなさんために生れてきたのか？」これは、よく、彼の考へる、分りきつてゐて、そして、また不思議な謎であつた。彼は、漠然とした、憂欝な氣持に捕へられてゐた。

畫間あつたこと、いまし方見て來たこと、主筆に、老巧なHに、博士のKに、また公園で見たあの老人と子供に――今頃は、あの老人も、子供も、何處かで床の中に入つて眠つてゐるであらう――若いソシアリストに、もうみんな其等は過去となつて、やがては永久に忘れられて行くのであつた。しかし、彼はもう一度靜かに其等を顧みて思ひ出すことが出來た。かうして、いまは今日の終刻であり、今日は永遠に逝くのであつた。

明日も、恐らく、自分の生活に、また彼等の生活に、そして、この社會の上に、格別の變化がないであらう。眠むさうに、星の光りは瞬いてゐた。

「空の星よ、悉く金貨となれ、然らされば、火の箭となれ！」

彼は、空を仰いで、心に叫んで見た。もとより、星のこれに應へる筈がなかつた。しかし、彼は、人間に、この頭がある。希望がある。そして、理想があることを知らずにはゐられなかつた。

精神こそ、ほんたうに不滅のものだ。

明日は、明後日は、かうして、今日と變りがなく、何もかも同じくあつても、誰が、五年の後……十年の後……社會がいつまでも同じであると斷言ができやうか？

彼は、火の消えた暗い室の裡で、いつまでも空想に耽つてゐた。

自分の前に投げ出された繪はがきには、飢えた子供の寫眞が撮られてゐたが、闇の色に包まれて、たゞ紙の色だけがほんのりと浮き出て見えるばかりであつた。

――一九二二、九作――



直輔の夢（下篇）

里見弴

往來からは十間ほども引ッ込んで建つてゐるのだけれど、それでも去年の夏、まだねたり起きたりしてゐた頃の直輔には、元氣のいゝ大聲で、何か頻りと喋りたてながら門前を通る海水浴の客どもが、うるさく、厭はしくてならなかつた。誰それに、君がこゝにゐると聞いたから、などゝ、まつたく思ひもかけない昔の友達が尋ねてくれるのまで、なんだか健康を見せびらかしにでも來られたやうで、大して嬉しくもなかつた。酷暑の頃には、海邊の、微溫くぼや〳〵と締りのない風さへ肝癪のたねで、蚊を憎んでは、玄關前に今を盛りの蓮池を、餘計なものを掘つたもんだ、と呟き眺めたほどだつた。――それからすれば、今年は、まだ海水浴こそ禁められてゐるが、まるで別人のやうに快くなつてゐるし、氣にしな

いやうでゐて、以前には、矢ッ張り病人らしい僻みをもつてゐたことも、自分ながら否めなかつた。が、その僻み根性を除て考へてみても、仲間があつて、毎日眞ッ黑になつて海にはいるのでもなければ、かう云ふ土地の、一年ぢうで一番住み心地の悪いのは、なんと云つても夏だつた。それで、今年は、暑い盛りだけでも山へ行かうと思つてゐたが、ふと伊香保に行つてゐる筈のりゑに氣がついて、手紙で、今からでも靜かな部屋がとれさうかどうか、訊き合せてやつた。それにしても、夏場の馬鹿高い家賃を拂ひながら、一月かそこら、老婢を留守番にたゞ遊ばせて置くのも、あんまり勿態ないやうな氣もするし、さうかと云つて、荷物を片づけてどこかに預け、一時明け渡して、秋口になつてまた改めて借りると云ふのも億劫な話だし……と迷つてゐるところへ、ひとに誘はれて鎌倉まで來たから、と、或る土曜日の夕方、仲の兄がひよツこり尋ねて來た。

「どうするんだい……」

と、挨拶がすむかすまないに、「君、ほんとに箱根へ出かける氣かい」

その前の上京でこの兄に逢つた時、直輔は、どこか山へ行きたいと云ふやうな話はして置いたのだが、それがいつもの性急な獨合點で、ちやんともう箱根にきまつてゐるのが可笑しかつた。

「箱根……ときめたわけぢやないが、……いま伊香保の宿屋を訊き合してゐるところだ」

「で、行くとなると、このうちがあくね？」

「うん、それでちよつと困つてたんだが、借つぱなしであけとくのも勿態ないからね」

「ぢア丁度いゝ。兄さんとこのと、俺ンとこのと、一小隊くり込ませるよ。今年はもう輕井澤はいやだつて云ひ出したんだ。先達ちう、兄さんとこのが二人と、俺ンとこのが一人、大きいのだけ、學校の先生に引ッ張られて、千葉縣の、

なんとか云つたつけが、あんまり聞いたことのない海岸へ十日ばかり行つてゝね、奴さんたち、すつかり海水浴の味を覺えちやつたんだよ。それで今年は、なんでもかんでも海へ行くんだつて聽かないんだ」

「あゝ、それア、子供たちにやアこゝの海はもつて來いだ。どんなにほつたらかしといたつて間違ひはないよ。うちの荷物は、はいるだけ物置に入れさせて、あき家のやうにして行くから、あとは、どんなにひどくあばれたつてかまやしないし、老婢も子供好きだから大嬉びだらう。あゝ、それア是非よこしたまい」

「よし、それぢア、老婢つきで一夏俺たちの方へ借り受けることにするかな」

「だけど、はいり切るかしら」

「なアに、どうせ俺たちは來られやしないんだから、子供たちと、書生と、それに女中が二三人くらゐなら、どんなにしたつてもねられらアね」

「でもなんだらう、たまにやア君たちだつて……」

「來るかも知れないけれど、それアまたその時のことで、どうにでもなるさ。それより、こいつを一つ云つとかなけれアならないが……」

「なに？」

「氣を惡くするなよ。……この家を一つ、大消毒をやらせるぜ。君が箱根にたつちまつたあとなら、少々ホルマリン臭くしたつていゝだらう。歸つて來る時分にやア大丈夫消えちまうし……」

「あゝ、なんだ、そんなことなら……」

「何しろ子供たちのことだからね。……君だつて、その方が氣持がいゝだらう」

「さうともさ。君の方でしなくつても、僕の方で、出かける前にさせて行かうといま思つてたところだ。それア、是非十分にやつて貰はふ」

「よし〳〵。ぢア、それもきまつたと……」

それから、あちこちへ二つ三つ話題が飛んだと思ふと、晩飯に引き止めるのも聽かずに、さも忙しさうに歸つて行つて了つた。――なんとなく直輔の氣持も輕くなつて、山へ行く決心がはつきりついた。

なか一週間ほどして、やつとりゑの返事が、東京の、川村と云ふ、旦那の住所の方から屆いて來た。旦那は、四五年前に細君に死なれてから、頻にりゑを繼聘になほしたがつてゐたが、彼の女の方で、なんのかのと態よく斷つてゐるやうな風に、以前から聞いてゐたが、矢ツ張りいつかその住所へも寢泊りするやうになつて來てゐるのだな、と思ひながら、直輔は封を切つた。それには、末の子がチブスに罹つたとの知らせに、急に歸つて來て、直輔の手紙は宿屋から附箋をしてよこしたのを東京で見た、宿屋はどこもかも可なり一杯らしいが、行つたら行つたで、どうにかならないと云ふほどでもなからうと思ふ、病兒は病院に送つたが、上の子供たちを預つて、自分は明日にも鎌倉へ歸るつもりだ、と云ふやうなことが認めてあつた。

おや〳〵、たうとうあの人も良妻賢母か、――なんとなく苦々しいやうな氣持で、直輔は、さう肚のなかで呟いた。同時に、伊香保と云ふあては、さつぱりと捨て了つた。

「やツ、これアどうも……」

萬壽が突調子もない聲を出したので、直輔も新聞から目をあげてみると、そこにりゑが乘り込んで來てゐた。
「まア、お珍しい方にお目にかゝるものね」
「どうも相濟みません御無沙汰を致しまして、申譯ござんせん」
すぐ萬壽は席を開いて、二人の間に腰かける場所をつくつたが、りゑが、向ふ側の車窓（まど）へ行つて、乘り出すやうにしてゐるのを見ると、
「なんです、御荷車ですか」
と、如才なく立つて行つて、りゑに代つて、信玄袋を受け取つたりしてゐた。
「ぢアちよつと行つて來ますから、子供さん方（がた）によく氣をつけてあげてくださいよ」
さう歩廊（プラツトフオム）の男に聲をかけてから、直輔の隣に來て、腰かけながらのお辭儀をして、
「まアほんとに口惜しい。あつちにゐる間にいらしてくだされば、どんなに面白かつたらうのに……」
「どうも御返事を有難う。然しもう、伊香保はやめましたよ、あなたがゐないんぢアつまらない」
「あらまアお世辭のいゝこと。……で、今日は、東京ですか」
「いゝえ、これから出かけるところです」
「どちらへ」
「取敢ずまア箱根へでも、つて云ふんですが、何しろこれが、とんでもないやつにとつツかれてますからね……」
と、顎で指した時、荷物を取り込み終つた萬壽が、振り向いて、
「え？　なんですつて？」

「すみませんどうも、御苦勞樣でした」

「いえ、どう仕りまして」

その時發車の呼子が鳴つた。

「ぢア、行つていらつしやいまし」

車窓から覗き込んで、さう挨拶した男の顏に、直輔は見覺えがあるやうな氣がした。

「御苦勞樣、何分お願ひしますよ」

大樣(おほやう)に答へて、そろ〳〵と動きだした汽車のなかで、ほツとひとまづ息を入れると、帯の間から唐扇をぬいて、自分と直輔とに、等分に風を送りながら、「へえ、どうしてまた……」

と云ひかけるのを、直輔は、抑えるやうな手つきをした。

「ちよいと〳〵、それアあとでゆつくり話すがね、今送つて來てゐた人、誰でしたつけね。なんだかかう、こゝらまで出かゝつてゝ……、確に見覺えがあるんだが……」

「いゝえ、御存知ないでせう、うちの近所の桶屋の息子ですけれど……」

「あ、分つた！」

と、思はず直輔は手を打つて、「あれ、あなた、知つてるかい？」

「まアいやだ、あなたこそ、知つてるかい、ぢアありませんか」

「あれね」

と、耳に口をよせて、「あなたンとこの、お花さんだつけ、あのいゝ女の女中さん……」

「まア、驚いた、どうしてあなた……」
「それアもう、千里眼だもの」
「へーえ、不思議ですねえ」
と、まぢ〳〵と顔を見詰めながら、「あたしたちよりほかに、だアれも知つてる人はないと思つてましたがね……」
「ちよつとこれア吃驚したでせう」
と、子供らしい得意で、却つて恥しさうにニヤ〳〵しながら「あれは、ほんにいゝ御夫婦ですよ。あなた、なんとか口を利いて、一緒にしてやつちやアどうです。あたし、なんとなく、二人とも好きだな」
「えゝ、もうさう云ふことにきまつてるんです。何しろあなた、お花はこれなんですからね」
と、ほんのするかしないほどに、手つきで姙娠と云ふ意味を見せて、「それも、つい先達、伊香保で一緒にお風呂にはいつて分つたばかりですのに……。それにしても、あなたが御存知つてのは、どう考へてみたつて不思議ですわ」
「いゝえ、それア、大部分あたしの想像さ。この春、あなたの留守の時に行つて、偶然、一つうちのなかに、あの二人きりでゐたことを知つただけのことさ。だけど、その時の感じが、なんとなくいやらしくなかつたから、あなたにさう云つて、夫婦にさしてやりたい、なんて、ちよつと思つてみたことがあつたんだよ」
「へえ、随分あなたは勘がいゝんですね」
「いゝえ、女將さん」
と、萬壽が、いゝ加減の聞きかぢりに、横合から口を出して、「そこがそれ、蛇の道は蛇つてやつでしてね、つまりそれがこちらの……」

「うるさいな」
直輔は笑ひ消して、「それで、早速兩方の親たちへ話してみたんですか」
「えゝ、もうさうなつたからには仕樣がありませんから、あんまり目立たないうちに、早く話だけでもつけといてやらうと思ひましてね、伊香保から手紙で、兩方の親もとへさう云つてやりましたんですがね、いゝ按配にどちらもすぐ承知してくれましたので、あたしもやつと安心したばかりのところですの。今度歸つて來ましてから、桶屋の爺さん婆さんとも逢ひましてね、よく話をしてやりましたが、二人とも、それアもう大へんな喜びでした。こんなに樂にまとまつた話つてのも、珍しござんすわ」
「ふうん、さうですか、それア……。だけど、さうまたうまくいかれると、なんだか今度は、ちつと癪にさはるやうな氣もして來るな。ほんとに、お花さん、綺麗ですからね」
りゑは輕く笑つて、
「綺麗つてんぢやないけど、まアちまちまツとしてゐて、可愛らしいから……」
「桶屋の息子、幸福なやつだな」
「あれね、御自分が岡惚してたもんだから、口惜しがつてるんですよ」
悄れツ子のやうな口の利き方をして、萬壽がさう云つた時に、汽車は隧道にはいつた。轟々と云ふ響のなかで、怒鳴るやうな聲で、萬壽は、りゑに、改めて一別以來の挨拶をし、あれこれと、土地の變つた出來事なども喋つたりしてゐた。
「どうしてきた……」

と、隧道を出てから、りゑは直輔の方へ、「から云ふ珍しいおつれが出來たんです。またなんですか、そろ〳〵あつちへお出かけなんですか」

「いゝえね、大方利口なお客にでもあつて、養神亭あたりでまかれちまつたんでせう、昨夜ひよつこりうちへ現はれたんですよ。丁度あたしは、荷拵へなんどしてゐた最中だもんだから、――忙しい人間なら大抵斷るだらうと思つて、」

――勿論萬諍さんなんぞは年中忙しい人間だと思ひ込んでるから、明日ッからどこか山の溫泉でもあてなしに廻つてみるつもりだ、なんてね、つい誘ふともなく喋つたのが間違ひのもとさ。結構ですな、是非お伴を……と來て、これが、自分一人なら一月ゐられるところを、十日で歸らなければならないやうな目にあはされるやつです。世の中、可怕いよ」

「可怕い、まつたく世の中は可怕い。お中元を持つて、態々東京から罷り出れば……」

「すぐそれで鯛が釣れるんだから、大した稼業だよ。四五十錢の湯飲盆、一圓かそこらの羽織の紐……」

「うるさい。ねえ、女將さん、すぐあゝものゝ値段を云ひたがる、あれだからあたしは、平民の子とつくあひたくないんですよ」

「まつたくですね。……あたしンとこにも、あのお盆なら、毎年二度づゝ頂いたのが澤山たまつてますけれど、へえ、さうですかね、あんなものが四五十錢もしますかね」

「あ、いけない、うは手が出て來た……」

「それアさうと、お子さんはどんなです」

「有難うございます。おかげさんで、大きにいゝ方なさうでございますが、今日はちよつと見舞に行つて來ようと思ひ

まして」

「上のお子さんたちは、矢つ張りあなたのとこですか」

「えゝ、もうどうも實に……」

と、顔をしかめてみせて、「さう申しちア、誠に相済まないわけですけれど……」

「あゝ、あなた、せんから子供が嫌ひだから……。あたしなんぞなら大喜びだけれど……」

「いゝえ、子供つたつて、もう一番上の女の子なんぞ、二十ですもの。それアもう、いろ〳〵うるさうござんしてね」

「あゝ、それぢアね。……おい眞さん、この次で乗換だぜ、そろ〳〵仕度をしないかい」

「へ、かしこまりました」

「箱根ですか、羨しいねえ」

「どうです、女将さん、御一緒にお伴しようぢアござんせんか」

「あゝほんとに、さう云はれて、すぐ行ける身分になりたい」

「意義ある生活つてやつね。うん、さう云へば、お愛さん……」

「あ、さう〳〵お愛さんがゐますよ……」

「どこに」

「小田原に。どうせ通り道でせう」

「へえ、いつ越したんです。ちつとも知らなかつた」

「あたしも、二三日前に手紙を貰つたばかりです。えゝと……、十字町は十字町なんですがね、何丁目だつたかしら。

一丁目とか二丁目とか、誰か数の若い方だつたと憶えてますがね、時間が、ありでしたら、ちよつとでもよつてあげてくださいませんか。折角御近所になつて、これからは時々でもお目にかゝれると思つてゐたら、またこんな馴染のない土地へ來て了つたつて、大へん淋しさうに泣いて來てありましたから……」

「お愛さんつて、小しんちやんのお話ですか」

網棚の荷物をおろしたりしながらも、自分ひとり默つてひつこんではゐられないと云ふ風に、口出しをする萬壽には、

「えゝ、さう」

と、簡單に答へた、甘へるやうに首をかしげると、「ねえ、あなた、萬壽さんつておつれもあることですし、ちよつとでもよつておやんなさいましな」

「えゝ、……でもね、あのいつぞやの新派悲劇以來、なんだかかう、少しへんな具合になつちやつてね……」

「あゝもう、あれだけは勘忍々々。この通りあやまり入ります」

「どう致しまして。あやまられては恐縮なんだ。これで、内心ちよつと嬉しがつてるところもあるんですからね」

「いゝえ、冗談はのけて、お愛さんほんとうに喜んでましたわ」

「お志は、誠に有難うございますが、つてやつたらう？　ますが、あの『が』がつくと、大抵もう脈はあがつてますね」

「芝居の方でいくと、よく、と申したけれどそりやならぬ、つてのがありますが、矢つ張りあの口ですか」

「まアま、似たやうな意氣でせうね」

「すぐさうひとの云ふことを茶化して了ふもんぢアありませんよ」

「折角忘れてる子に、思ひ出させるやうなことを云ふもんぢアありませんよ」

「おやく〵？　おつなことをおつしやいましたね」

と、萬壽に顏を覗き込まれる。と、全く思ひもかけなかつた血が、かつと頰へのぼつて了つた。ほんのたゞ、言葉の組合せを面白くするだけのつもりだつたのに、謂はゞ自分の刃で自分が切りさげられたやうな、この不思議な赤面には、いゝ加減花柳界好みの輕口に長けた直輔だつたけれど、どうにも始末のつけやうがなかつた。その、うッとつまつた容子を見ると、そこは有繋に玄人で、はたの二人は、慘たらしく止めまで差さうとはしなかつた、――「窮鳥」を殺さない「獵師」の寛大をもつて、目を逸した。それどころか、一瞬間、助け船の出しやうに困じて、そこに、間のぬけた穴さへあきさうになつた。が、丁度お誂へ向きに、その時グッグ、、グウ、と下駄の裏から擽つたい響を傳へながら、齒止が利いて、ゴトンと一つ搖れ返すと、汽車がとまつた。

「ぢア、さようなら」

「あゝどうも失禮いたしました。ぢアまア御機嫌よく行つてらつしやいまし」

「えゝえ、もう手前がついてますからには、一月のところは十日と……うるさいな、へ、それでは御免くださいまし」

赤帽を呼んで荷物を賴んだりしてゐる間に、直輔だけ先におりて、りゑが首を出してゐる車窓ぎはへ寄つて行つた。

「また云ふやうだが、一體あの桶屋の息子さんとは、どうして馴れ初めたもんでせう」

「大へんお氣にかゝるとみえますね」

と笑つて、「いゝえ、つい近所ですし、爺さんが差配代りのやうなことをしてゐるもんですから、あたしの歸りが晩くなるとか、ひよつとまた泊つて來るとか云ふやうな時に、賴んで泊つて貰つてたんですもの……」

「成程ね、ぢアまア、始つからあなたにも責任があるやうなもんだ。然し、實際あれが御夫婦になつたら仕合だらう。

それアもう一生仲よく暮すに違ひない」

「どうも大へんな御贔負ですね。あなたにそれほどまでに云つて頂けるだけでも、あの人たちは仕合ですわ」

そこに萬壽もおりて來た。

「すぐ行かなくつても、時間はあるんだつたね」

「えゝ、二十分ばかり待たなけれアなりません」

「ぢアまア、ゆつくりお見送りをして行かうぢアないか」

直輔は卷煙草に火をつけた。萬壽も、そばから手を出して、燃えさしのマッチをうけとりながら、

「どうなさいます、いきなりぶつつけに小林さんのとこへ行きますか」

「さアそれがさ、壹日中、旅によごれた汗臭いのが二人して飛び込んで行くのも、どうだね、少々むツと來やアしないかね」

「さうですね、まアどこぞで一風呂あびて、一杯あがるならあがつて、それからつてところでせうけれど、どうも小田原ぢアさう云ふうまいうちが……」

「ソオら、そろ／＼贅澤を云ひ始めやがつた。……まアいゝやね、萬事、行きあたりばつたり主義でやらうよ」

「あ　それがようがせう。えゝと、十字町、一丁目か二丁目だつておつしやいましたね」

「えゝ、誰かさうでした。番地も書いて來てあつたんですけど……」

「なに、大丈夫ですよ、大抵知れませう。……さアもう發車しますよ、あなたもうちつとさがつていらつしやらないと、あぶなかアござんせんか」

「どうも態々お見送りで恐入りました。ちアどうぞ、お愛さんにくれ〴〵もよろしくおつしやつてくださいまし」

「え、ちアさよなら」

「さようなら、どうも失禮を……」

「萬諍さん、いろ〳〵お世話様でした」

「どういたしまして」

汽車が出て行つたあとは、午近い日射で、いきなり目の前が、ぎら〳〵と耀き動いた。瞼をよせて、直輔は、陸橋の方へ歩きだした。

「これアどうも……」

「へえ？……」

「ひどい暑さになつて來たよ」

「お勞ンなりましたか」

「さうでもないが、これア、自動車で、ブヾツと一息に山へ登つちやつた方が利口らしいぜ」

「まアどうぞ、さうおつしやいませんで……」

さつき赤くなつたので、萬諍め、すつかり早合點をしてゐるな、と思つた。さうは思つたけれど、その早合點と云ふ言葉が、直輔の心持のなかで、矢ッ張りなんとなく尻の据りがわるかつた。氣がつけば、お愛の訪問を、さも御難らしく云つたのにも、拵へたところがないとは云へなかつた。日盛の暑さ、陸橋のあがりおり、亞鉛屋根の下で、二十分もボカンと汽車を待たなければならない退屈さ、そんなこんなが一緒になつた今の不快な氣持に嘘はないが、それの延長

の上に、お愛の訪問を載せて考へたと云ふのは、ちよつと不自然だつた。これが、例へば、小田原に行つてから芝居を見る、とでも云ふやうな事柄なら、云はずとも、その延長線上のものだけれど……。理由もなくちよつと不機嫌になつて、返事をしずに、直輔はさつさと陸橋の階段に足を運んだ。

晩い晝飯をすませ、一風呂あびてみると、存外氣持がシヤンとしたので、ぢア散歩がてらお愛さんのとこを探してみようか、と云ふことになつて、宿屋でおよその見當を訊いて出かけた。電車通りの、米、酒、醤油など商ふ大きな店によつて、萬壽がいろ〳〵に云つてみたが分らなかつた。それから、菓子屋、荒物屋で訊いて、矢ツ張り知れなかつた。特別えらかつたその日の暑さにあてられてもゐたのだらうが、直輔はまたすつかり氣持が重くなつて來た。よして宿へ歸りたかつたけれど、餘り萬壽が熱心なので、さうも云ひ出しかねて、ひとりぶら〳〵先に歩いて行つた。

「どうも弱りましたな」

と、早足に追ひついて來た萬壽が、「いまも俥夫に訊いてみたんですが、矢つ張り知らないんです。なに、いよ〳〵いけなけれア、郵便局か警察に行きアすぐに分りますけれど……。十字町つてのは、餘つ程この廣いやうですね」

「知れなきやもういゝやね」

「おや、馬鹿に氣がないんですね」

「なにしろ暑い。小田原つてとこは、これア夏場來るところぢアないね。夕凪が永すぎる。まるツきり風つてものがありやアしない」

「大ぶんお疲れのやうですね。なんなら、また明日のことにして、そろ〳〵歸りませうか」
「あゝ」
と、溜息のやうな曖昧な返事をして、「どうも、今日はすつかりまゐつたよ」
「あれぢアまゐりますとも。ですからあたしは、初ッからおよしなさいつて申上げてるんだのに……」
「いや、それでばかりぢやアない」
「ぢア、あとから來たガリガリ博士の方ですか」
「何から何まで、今日の午後は大不出來さ」
「矢ッ張り、眞ッ直に山へあがつちやつた方が利口でしたかね」
小田原の停車場で、さうしようか、半日こゝでごろ〳〵しうよか、と迷つた末に、お愛を尋ねると云ふこともあるので、兎も角もと、海岸に近い宿屋へ落ちついて了つた。その時分には、まだ直輔も元氣で、ちよいと一口と云ふやつが、二本三本となつて、久振りに藝者と云ふものゝ顔がみたい、などゝ云ひ出した。
「およしなさいましよ。この溫氣に、絽縮緬が裾を引いて來て、三味線を鳴らされて御覽んなさい、大抵うだつちやいますぜ」
それは同感なのだけれど、よくも惡くも、十分のものを八分に止めるより、十四五分までも突きぬけたい氣持が、抑え切れなくなつてゐた。來たのは、やつと二十二三だらうのに、すつかり姐さんぶつて、殆ど白粉ッ氣なしで、束髮にした、出ッ齒の女と、濃すぎる眉毛を、くツきりと狹く剃り込んで、銀杏返しの前髮や鬢をうんと張り出し、出來るだけ額や頰を小さくみせやうとしてゐる、二十そこ〳〵の肥つた女と、瓜實顔で、腫ぼッたい目つきの、柄は大きいが、

つい近頃一本になつたばかりらしい妓と、さう三人だつた。すぐ來ると云ふ話のが、一時間以上も手間どつたので、その間、まるツきりいけない萬壽を相手に、控へるともなく繋いでゐたせいか、氣持よく廻りそこなつた酒に、もう大分勢れこゐた直輔は、初ッから笑顏で迎へるだけの張りさへもなかつた。盃は廻さず、三味線は彈かせず、たまに云ふ洒落は樂屋落ちが多くてよく解らない、と云つた具合の厄介な客を、厄介とも思はないらしく、すぐ彼等同士の話に夢中になつて了つた。出先のお茶屋の蔭口、朋輩の噂、お客の品さだめ、およそきまつた話題だつた。藝人らしくもなく、ちよいと我儘なところのある萬壽は、それみろ、云はんことぢアない、と云つた顏つきで、にべもなく、ぷかり〳〵煙草を吃したりしてゐた。

「いかゞ」

自分たちの話の間に、ちよいと横目で見て、だしぬけに甲高い聲を出して、有繋に年かさのが、銚子を取り上げると、

「孑孑がわきますよ」

「うん」

色氣もなく、がツくり頰杖をついてゐた直輔は、唸るばかりで、埃の浮んだ盃のなかをぼんやり眺めてゐると、萬壽がすまして、

「盃に孑孑がわくと云ふのは珍しうごさんすから、一つわかしてみようぢアありませんか」

「俺もその方が贊成だな」

「あらいやアだ」

十六七のが、まるでお附の調子で、「孑孑なんて、ふんとにわいちア大變だわ」

「一つ頂きませうか」
「差上げませう」
　ざぶりと盃洗にあけると、
「あら、それアないでせう」
「ぢア、ついでください」
「こちらあがれるくせに」
　と、酌をしながら、「……えゝ、さうなのよ。いつだつてあの人ときたら……」
などゝ、もうすぐ肥つた女の方へ向いて、仕かけた話を續けてゐた。ちよいと口をつけたゞけで、直輔もまた盃を置いて了つた。そこに女中が名刺を持つて來て、
「お差支がなければ、ちよいとお目にかゝりたうございますがつて……」
「へえ、誰だらう」
　見ると、以前四谷の畫室の方へ、五六度繪を持つて來たことのある、まだ二十歳の畫生で、山口と云ふ男だつた。いづれ批評を聞きに來たのだらうと思つて、初ての時に、云ふと、なんのかのと理屈を並べて、決してあゝさうですか、とは云はなかつたので、その後は、持つて來た繪を、默つて見て、大人しく苦心談を聞かされることにしてゐた。そのくらゐだから、云ふまでもなく、好きではなかつた。この場合には、尙更ぞつとしない客だつた。
「どうして、あたしがゐるつてことが分つたらう」
「海から歸つていらつしやる時に、庭の方から見えたんですつて」

「ふうん、ぢアこゝに泊つてゐるんですね」

「えゝ、もう一月も前から……」

「どう云ふお方です」

顔いろで、およそもう見當をつけながら、萬壽が口を出した。

「繪かきさんだが、……ちよつと困つたね」

「ぢア……」

なんとか云つて斷つて了つたら、と云ふ顔つきをした。が、ふと直輔は、これを口實にして藝者たちを歸さう、と思ひついたので、

「えゝと、ぢアお目にかゝりますが、今こちらからお迎ひを差上げますから、つて云つといてくれないか。それから、なんだ、君たちは、お客さんがあるから、歸つて貰はふか」

「あたしたちがゐちア、お差支のあるやうな方なんですか」

その時、年增の女中が、金齒を見せてニヤ〳〵笑ひながら、

「いゝえ、やアさんだわよ」

「あらア」

と、三人が目を見合せた。折角の計畫がはづれさうになつたさへあるに、山口の逢ひたいと云ふ心持も、不快なものに感じられて、さつきからすつかり元氣を失つてゐた直輔は、どぎつい惡趣味の壓迫から、却つて、「ぢアいゝや、すぐ呼んで來たまい」と、危く口もとまで出かゝるのを、やつとこらへて、

「君たちにはやアさんかも知れないが、僕にはちやんとしたお客なんだから、斷然こまるよ。氣の毒だけれど歸つて貰はふ。……姐さん、俥を云ふなりどうなりして、この人たちを歸してくださいな。それから、一ぺんこゝをすつかり綺麗に片づけてくれませんかね。飯はまたあとで貰ひますから」

と、いつになく直輔は、きつぱりした口を利いた。

諦骨に白け返つた氣持をみせて、藝者たちが歸つて行つたあと、別の女中が來て、食ひ荒したものを片づけながら、

「山口さんがいらつしやるんですつて？」

と云つた調子には、山口に對する輕蔑と、延ては、そんな男を迎へるのに、藝者を歸し、部屋まで淸めたりする間ぬけさを、嘲笑つてゐるやうなところが感じられて、直輔の氣持は、救はれ憎いものになつて行つた。

「さア大變だ、もうこれで、晩まで御飯は頂けないんですか」

などゝ、おどけてみせる萬壽の志も、とても機嫌よくはうけられなかつた。

「腹がすいたら、どこか別の部屋に出して貰つて食ふんだね」

「へ――え」

「なに、すぐ歸しちまふよ。歸らなきア、こつちが出て行くばかりだが」

「ですからあたしが、はなツから紹綸はおよしなさいつて、どうです、云はないこつちアないでせう」

「こりゃ宗岸が一生の仕損、とくやんでもあとの祭り、さ」

「闇めも贊夜泣き悲み、朝夕も進まねば、もしや病が起らうかと、……すぐに乘りやアがる……」

山口が來てからは、直輔は始終にがりきつてゐた。急に藝者を歸し、好きを知つてゐる筈の酒までさげさせてあるこ

とで、山口もいゝ氣持はしなかつたが、それならばそれで、と云ふ風に、飽まで眞劍な藝術家らしい話題を持ち出した。

「この春の、農商務省の展覧會は御覧でしたか」

「えゝ、ちよつと出かけました」

「ゴツホやセザンヌは別として、あつちにも、さう大した畫かきはゐないやうですね」

「さうですかね」

「あなたは、誰がいゝと思ひました？」

「さうですね。……みんなそれ〲感心しましたよ」

「僕は、たゞ貰つてもいやな繪が隨分澤山あつたな」

「さア、ほしいほしくないはまた別ですがね」

「御病氣後は、まるつきりお描きにならないんですか」

「えゝ、醫者に禁められてますから」

「それア醫者は禁めますよ。だけど、醫者に禁められたくらゐで、描かずにゐられますかね」

「禁められないでも描けさうもありませんでした」

「どうしてです」

「どうしてつたつて、病氣ですもの」

「ゴツホなんぞ、氣違になつてからも描いてたんですつてね」

「さうですかね」

「僕は、こつちに來てから一月ばかりですが、二十五號が一枚と、八號が三枚と、それから板ツペらを五六枚やりました」

「へえ、それア大した御勉强でしたね」

「二十五號の風景と、八號の自畫像は、二科へ出してみようかと思つてますが、まア〇〇さんや××さんなんぞは、いくらかいゝ方だけれど、あとの連中と來たら……」

「……………」

萬壽は、と思つてみると、緣側に出て、逗子の停車場で買つたのを、そつくりバスケツトに入れて來た新聞の上に、のしかゝるやうに頰杖をついて、ポカンと見詰めてゐた。山口が、キユビズムや表現主義を論じだして、不思議な氣焰をあげる時分には、たうとう直輔もしびれを切らして了つた。

「……折角ですがね、僕にはさう云ふ方のことはちつとも分りません。」だつて、殆ど作品を見てゐないんですもの。いゝとも惡いとも、まるツきり見當がつきアしませんやね」

「然し理論としてですね……」

「その理論つてやつが、僕は嫌いなんだから……」

「さうですか」

と、有架に不愶な顔をして、「それぢアよしませう」

それでもうそろ〳〵歸り仕度をするだらうと思つてゐると、突然、

「さつき藤村が來てゐたやうですね」

「えゝ」
思はず顏を見ると、矢ツ張り藝術を談じる時のやうに、眉間に力を入れたまゝで、
「たしか富貴子の聲がしてゐたな」
「さうですかね。つい名前を聞きもしませんでしたが」
「肉づきのいゝ、ちよつとかう、ジンリツヒな感じのする女がゐたでせう」
「はゝあ」
「あいつ、ちよつと面白い性格の女ですよ。一味、表現主義と相通ずるところがありましてね」
「へえ」
「それから、金龍つて云ふ、あの一番若い妓が、こゝでの踊りの名手ですが、實際、ちよつと田舍に置くには惜しいほどの藝です」
「さうですかね」
「さつきは來てゐなかつたやうですが、若千代つてのが……」
「そろ〳〵仕度をなさらないと、あんまりおそくなりやアしませんか」
言葉の最中に、突然萬壽が、無遠慮に口を出して、「成可なら、明るいうちにむかふへ着くやうにしようぢアありませんか」
今日ぢうにどこそこまで行かう、と云ふやうな相談があつたわけでもないのに、態々ござんすございせんの言葉癖にまで氣をつけて、かう話しかけたのは、もう所詮辛抱がしきれない、なんのかのと相手になつてゐる直輔までが、腐痒

くつて、いつそ腹が立つて來る、と云つた氣持に違ひなかつた。そんなところは、業態に似合はず、直輔などよりも迥に短氣だつた。

「さうさね、いま何時だらう」

「さよう」

と立つて、違棚へ行つて、時計を見ながら、「えゝと、四時半、ちよつと過ぎてます」

「今日はお泊りぢアないんですか」

「えゝ、まだはつきりとはきめてないんですが、成可なら、箱根まで行つて了ひたいと思つてます」

「箱根もいゝですが、すつかり俗地になりましたなア」

「えゝ」

「どうです。ほんとにそろ〳〵仕度をしようぢアありませんか」

「うん。……ぢア甚だ失禮ですが……」

そんな風にして、やつと山口を歸すと、直輔は、慾も得もなく、ごろりとうしろにひつくり返つて了つた。

「あゝあ、驚いた〳〵」

「なんです、全體あれア」

「表現主義さ」

「ぢア、カリガリ博士ですか」

「ふうん、中々君はもの知りだね」

「表現主義ぐらゐは心得てますよ。うちが歪んで、瓦斯燈が倒れかゝつてれアいゝんでせう」

「藝者で云ふと、あの肥つた先生みたいなのがさうなんだとさ」

「なんとか云つてましたね、なんとやらの感じがするつて、あれ、なんのこつてす?」

「××くなるつて云ふやうなことだらう。……兎に角まゐつたよ」

「でもあなたは、すつかりねいれましたね」

「生意氣云つてやアがら」

「いえ、ほんとうに」

「お前はまたちつとねれなすぎるよ。今だにへんに怒りツぽいね。そこがまア、取柄と云やア取柄だけれど」

「えゝえ、あたしなら、あんなカリガリ博士なんぞ、頭ツから面會謝絶でさア」

「そいつがね、藝者よけの兕禁のつもりが、大しくぢりさ」

「兎に角、かうあやかしに憑かれちア仕様がありませんから、すぐ自動車をさう云つて貰つて、ひとのしに箱根へ行つちまふぢアござんせんか」

「うん」

それもいゝ、とは思ひながら、相應冗口は利いてゐるものゝ、なんとなく氣持が沈んで行つて、自分の意思ではつきり事をきめるのが、恐くなつて了つた。體もぐたぐたくだつた。煮えきらない返事をしてゐれば、萬壽はまた、お愛への執着と釋るだらう、と、それも考へてはゐるのだが、決然としてはね起きるやうな力は、どうしても出て來なかつた。

「どうです、ひと奮發なさいませんか」

「うーん、なにしろまゐつたよ」

「さうまゐつていらつしやらないで、……ぢアどうです、ひとツ風呂あびて御覧なさいましな。存外また氣持がすツとするかも知れませんぜ。ねえ、手を持つて引つ張り起してあげませうか」

「少しは腹もへつてるんだ」

「あゝさうでせう。あたしは何もかも頂いちまつたけれど……。えゝよござんす。なんか早いもんで御飯を出して貰ひませう」

それで、茶漬を食べ、湯にはいつてから、宿屋のゆかたのまゝで、ぶらりと出て來たのだつた。

「どうだい、歸つて、すぐ箱根へ行つちまはうぢアないか」

かうして、うちの知れないのも、今夜は尋ねるな、と云ふ何かの兆せかも知れない、そんなことを思ふほどに弱々しくなつて來た氣持を、なんとかして一變させたかつた。が、さう云つて了つてから、すぐまた、箱根への途中に何か兇變でも起りさうな氣がして來て、「それとも、歸つて、按摩でもとつてねちまふか」

「いや、それア、まだ時間は早いんですから、泊りはどの道箱根ときめて置いて、もうちつと探してみませうよ」

お愛に逢はせることを、萬壽が、職業上の義務のやうに感じてゐるんではないかしら、ふとそんな氣がして來ると、直輔は、この連をさへうとましく思ひ始めた。獨にかぎる、何もかも獨にかぎる、習との風もない眞暗な空を見詰めながら、そんなことを思つた。

輕便鐵道の停車場へ來た。萬壽は休茶屋の一つにはいつて行くと、襷がけのまゝ上框にぐつたりと腰かけてゐた女中を捉えて、また尋ねてみた。矢ツ張り知らない、と云ふ答だつた。

「……あの、なんです、少しお體のお惡い御婦人ですが……」
「ぢアお年寄の方ぢアないんですか」
「いゝえ、まだ二十六七くらゐの……」
「あゝ、それぢアおみ足の惡い方でせう?」
「えゝ、ですが、ちんばとかなんとか云ふんぢアございません、たゞ御病後で、少しひよろ〳〵なさる、つて云ふくらゐなことなら、さうかも知れません」
「えゝさう〳〵。そんなら、お向の○○屋さんへいらしつてお訊なすつて御覧なさい。足柄病院の往き來りに、よくあすこで休んでいらつしやるのを見かけますから。きつとあすこなら知つてませうよ」
「むゝさようですか。有難うございました、どうもお邪魔樣」
「どうやら手蔓がついたらしいな」
跳び出して來た萬壽に、直輔は、暗がりから聲をかけた。それだけで、もうちよつと、氣が引き立つてゐた。
「えゝ、たうとう嗅ぎつけたやうな按配です」
さつさと向ふ側の茶店へはいり込んで行つたが、小林と云ふと、すぐに知れた容子だつた。振り向いて、手まねぎをした。直輔も、そつちへ行つて、往來ばたに出してあつた椽臺に、ぐツたりと腰をおろして了つた。お喋らしい婆さんが、ちよつと知れ憎いところだから、いま誰かうちの者に送らせてあげませう、などゝ云ひながら、手早く茶を煎れて、直輔のそばへも持つて來たりした。
「遠いんですか」

「いゝえ、あなた、ついこの裏通りです。無理に賴まれましてね、手前どもで差配を致して居るもんですから、もうしよつちう、御散步がてらこゝへいらしつては、話し込んでおいでになりますよ。お一人ぢアあなた、御淋しうございますからね」

直輔に賴まれて、手土產を買ひに、萬壽が、果實屋まで引き返して行つたあとは、この婆さんが、お愛想のつもりで、ひとりで喋り續けてゐた。始終來ては休んで行くと云ふ、いま自分が腰かけてゐる緣臺を、ちよつと愼しむやうな、若々しい甘味に浸りながら、直輔は、うはの空で、たどうけ答へをしてゐた。そこに、二つか三つになる女の子をおんぶした上さんが、子供の言葉で何か云ひながら、どつかゝら歸つて來た。婆さんは、その娘だか嫁だかに、直輔たちを案內して行けと云ひつけて、背なかゝら孫をうけとつた。裸つたゆかたの胸を搔き合せて、上さんは、改めて「おいでなさいまし」と挨拶し、茶碗の上に、急須を倒に振つたり、湯をさして來たりした。萬壽は、なか〱歸つて來なかつた。

「おそいな、どうも」

「どうなさいましたかね。ちよつと見て參りませうか」

「いゝえ、よござんすよ。もう來るでせう」

三十分近くも待せて、萬壽が歸つて來た。手のついた大きな籠を、シワ〱と重さうにぶらさげてゐた。

「どうもお待たせいたしました」

「御苦勞様。隨分永くかゝつたね」

「えゝ、ちよつと手前用を一つ」

「なんだい」

「いゝえ、すぐお暇するつもりで出かけて來たやつが、こんなわけで、御覧なさい、足袋が眞黒けになつちまひましたから……」

「ぢア、お上さん、すみませんが……」

「へえ、御案内いたしませう」

案内料も含めたつもりで、少し餘分に茶代を置いて立ちあがると、孫を抱いたお婆さんや女中に、お愛想たら〳〵送り出された。子供があとを追つた。上さんは小戻りして、おんぶして、すぐあとから追ひついて來た。

「先刻はどうも。お蔭さんでやつと知れました」

道ばたに出てゐたさつきの女中に、萬壽はから言葉をかけて、その店についてはいり、やがて舊い屋敷町らしい、兩側に櫻の並木のある廣い往來の方へ曲つた。

「なんとウおつちやる、うちやぎちやん……」

突然女の子が唱ひだしたが、

「おや、上手だね」

と、萬壽にお愛想を云はれると、ぺたんと顏を背中におつつけて、それツきり默つて了つた。

「いくつです」

「いくつ？ねえ仙さん、お前さんいくつだつけね」

そんなことを云ひながら歩いてゐた。さつきから直輔は、婆さんとは反對に、口數の少い、朴訥な感じのするこの上さんが、ちよつと好きになつてゐた。獨にかぎる、さう肚のなかで呟いた時分と、一時間とは隔てゐないのだが、いつ

のまにか、心持が、うるほひ、和んで來てゐた。――直輔の厭人的な氣持は、いつも、決して永續きはしなかつたが……。

或る大きな門の耳門をはいつた。その邸うちが、また幾軒にも別れて、それ〴〵に竹垣を環らしてあつた。チラ〳〵とそれを透して、あつちこつちから、部屋のなかの灯が、樂しげに洩れてゐた。

「お客さまですよ」

二軒目の庭さきを通りかゝつた時に、いきなり上さんが、さううちへ聲をかけた。

「誰だ」

太い聲と一緒に、緣側の、灯を背負つた男の影繪が動いた。思はず直輔は足を停めた。その鼻のさきへ、にゆうッと萬壽の親指が出た。

答をしずに、上さんはもうガラ〳〵ッと格子戸をあけてゐた。萬壽は、大急ぎでそつちへ近よつて行つたが、

「こんばんはア……」

と、忽ち職業的な調子になつて、聲を張りあげた。「お分りンなりませんか、手前です……」

「あら」

お愛の呟くのが聞えた。

「お分りンなりましたか。ハヽヽ、どうも御無沙汰を……」

「萬壽さんですか」

その時には、もう玄關からづか〳〵あがつて、すぐその隣の部屋へ顏を出した。

「まア、お珍しい」

「どうも……」

敷居ぎはで、ぴよこりと一つ頭をさげて置いて、すぐ振り向いて、おもての闇をすかすやうにしながら、おいでおいでをした。あんまりもぢもぢしてゐても、上さんの手前、却つてへんなものが出來あがると思つて、その時には、直輔はもう格子戸のうちにはいつてゐたのだが、急に明るい灯を見た萬壽の目には、それが映らなかつた。

「おやッ」

と立つて來たのに、玄關の薄暗がりから、

「こゝにゐるよ」

「あゝ、なんだ」

耳もとに口をよせて、「遠ひますわ、おあがんなさい」

すぐあがりかけてから、氣がついて、直輔は、上さんに禮を述べ、

「さようなら、御苦勞さん」

それは子供に、輕く頭を撫でてやりながら云つた。それから、あがつて行つて、座敷に通つた。

「暫でした。いかゞです……」

云ひながらも、素早く、緣側にゐる男の方へ目を走らせた。角刈で、中形のゆかたに三尺をしめた、色の黑い、植木屋かなんからしい若い衆だつた。むかふでも、ぢろぢろ直輔の方を見てゐた。で、すぐ言葉を續けて、

「今日汽車で、偶然籐波刀自と一緒になりましてね、こつちだつてことを聞たもんですから……」

「あ、さうでしたか。それアどうも、よくおいでくださいました」

上半身を突ッ張らせて、寢床の上にキチンと坐つてゐる容子は、最後に鎌倉の歩廊で逢つた時よりも、慥にしッかりしてはゐたが、いつになく甲高な聲の調子と云ひ、なんとなく取りすましたやうな表情が、ちよつとヒステリックで、病人らしい感じが、却つて深かつた。――突ッ張り、惡いところへ來たのではないか、と云ふやうな氣持が、速い雨雲のやうに、あたまを掠めて行つた……。

「ぢア、なんです」

と、言葉の切れ目に、若い衆は腰を擡げ、兩手を緣側についたまゝ、額越しにお愛の方を見上げて、「よくまた先方へさう云つてやりますから……」

「えゝ、どうぞよく解るやうにさう云つてあげてください。始ッからあなた、そんな話なら、あたしどもで拜借するわけがありませんもの。なんか思ひ違ひでせうつて」

「へえ、承知いたしました。ぢア御免なさいまし」

「どうも御苦勞さんでした」

男は庭木戸から出て、まだそこにゐたとみえる上さんと、何か話しながら歸つて行つた。その足音を聞き送ると、篤諄が、ニヤリ〳〵笑ひかけて、

「どうです」

肝をつぶしたらう、と云ふ顏をした。

「鼻のさきに、親指を突き出されたにゃア驚いた」

「今ね」

と、お愛の方へ向いて、「てッきりもう高樹町さんだ、と思ッちまいましてね、——いゝえ、これアね、あちらはあんなさばけた方ですから、別にどうも思ひなさりやしますまいけれど、何しろこちらが、御存知の、柄にないてれ性と來てますからね、そこがかう、へんな具合なものになりやアしないかと思つて……」

「まアいやだ！あんな人と間違へられたの？」

「いや、これアどうも」

兩手をついて恭々しく頭をさげ、すぐまた顏をあげると、直輔の方へ、「どうです、來るなり早速一本やられちまいましたね」

「何しろ、あの『誰だ』が、ちよいと他人ぢア云へない臺詞だつたからね」

「さう〳〵、あれであたしも、ぎくツと來たのですよ」

「あれアなんでせう、あたしたちを連れて來てくれたお上さんの、御亭主ぢアないんですか」

「えゝ、さうなんです」

「ですもの、『誰だ』でいゝわけでさア。あれア、初め、自分のとこへお客が來たんだと思つたんでせうね」

「無論さうなんだらう。その迎ひだと思つたんだらう」

「いま、ちよいとあたし、あの人を捉へて、たんかみたいなものをきつてたの」

「へーえ、さう仰有りやア、はいつて來た時、ちよいとかう、きり〳〵ツと來てましたね」

萬藏は、兩方の中指で、目尻を吊りあげてみせた。

「さうでせう。だつて、あんまりわけの解らない家主なんですもの」

「上が十兩、下が五兩、鰹は半分貰つて行くよ、――あの口ですか」

「あれならいゝんですけれど……。かうなんですよ、一夏のお家賃てのを前拂ひにあげといたら、今になつて、あれは七月分だから、八月のをくださいつて云つてよこすんですもの。女ばかりだと思つて……」

「へえ、なんともどうも誠に相すみません。……こんな出來の惡いのでよろしければ、こゝに二人男が居りますから、どうぞどちらなりとも、御遠慮なく御召抱えに相成りまして……」

「うん、よし〳〵、然らば兩人ともに……、なアんて。……あゝ、お蔭さんで、やつと氣持がすツとしたわ。あゝ嬉しい……」

へんにお愛は亢奮してゐた。直輔の氣持は、低く取り殘されて、淋しかつたが、出來るだけ快活に、

「いゝえ、かう云ふ半開けの田舍町の人つてものは、どうして中々、油斷のなつたものぢアありませんよ」

「ほんとにさうですね。今の〇〇屋の若主人だつて、その約束で借りたくらゐ、自分が差配ですもの、ちやんと知つてるくせに、へえ、さうでしたか、なんて白ツ呆けてるんですよ。それア、ほんとうに憎しいツたらなかつたわ……。あゝもう、この話はよしませう」

「刀自から、くれ〳〵も宜敷つて。この頃は、旦那ンとこの子供さんたちを預つて、大ぶん閉口してゐるらしい……」

「まアさうですか。でも、よくねえ……」

「あゝみえて、いざとなると、案外良妻賢母がるのかも知れないね。いくらえばつたつて、大ぶもう、人間の出來が沓いもの」

「いえ、さうでもござんすまい。あちらなんぞまだ、いつ何時もう一旗あげるか分らない方ですよ」

「さうかねえ。……話がいろ〳〵になりますが、引き續き具合がよささうですね」

「あたしですか？えゝまアお陸さんで……。でも、今日も病院で聞いたんですが、矢ッ張りこの病氣で、今年で丁度十三年、ねたつきりの人があるんですつて。可厭ですわねえ、それくらゐなら、あたし、死んぢまつた方が、よつぽどましだと思ひますわ」

「あたくし、さつきからかうして拜見してるんですが、小しんちやん、あなた、前より餘ッ程血色もよし、お肥りンなりましたよ。ねえ、オーさん」

「あゝ、さうかも知れない。さう云やア、出てゐなすつた時分、隨分細かつたな」

「着やせがしますから、……なアんて。だつてね、萬壽さん、こゝの太いのは、これア肉ぢアありませんですよ。失禮ですが……」

と、直輔の方へ、ちよつと目で會釋して、襟もとを寛げ、コーセットをみせて、「ね？何しろ、かう云ふ鎧みたいなものを着込んでるんですもの……」

「ふうん」

さも感心したやうに眺めて、「隨分窮屈でせうね」

「えゝ、初のうちはね……。でも、もうこの頃は馴れちまいましたから……」

「さほどでもござんせんか。それで、なんですか、下の方はどのへんまで……、うるさいな」

「下はこゝまでゞすけれど、それだつてあなた、駄目よ」

「はゝあ、駄目ですか。ぢアそこへ錠をおろして、高樹町さんに鍵を渡してお置きんなれば……」

「いえもう、それまでにしないでも、十分安心して居りますから……」

「どうです、オーさん、これで二本やられました」
まい〳〵つぶろの角のやうに、二本の指を突き出して、「どうもこれあ、小田原は、大そうお暑いとこですなア」
そこへ女中が、云ひつけられたボルドウとコップとを盆に載せて來た。
「ぢア、どうぞまアこんなものでも。あんまり冷えてさうもありませんけれど……」
「へ、これアどうも」
と、うけとつて、噴きこぼれないやうに、うまく栓をぬき、二つのコップに注ぎ分けた。
「お宿はどちらです」
「○○つてうちです。暑いもんだから、ついこんな風をして出かけて來ちまひまして……」
「どう致しまして。……暫くこちらに御滯在ですか」
「いゝえ」
と、萬壽が引きとつて、「箱根へ行く途中を、ちよつとお寄りしたんですよ。これから宿屋へ歸つて、すぐまた上の方へ行かうつてんです」
「あら、それぢや、あたしのために態々宿をおとんなすつたやうなもんですわね？」
「いゝえ、さう云ふわけでもなかつたんです。着いたのが、日盛りで、あんまり暑かつたから、一休して行かうつてことになつたんですから」
「でもまア、ほんとによくお寄りくださいました。鎌倉ですとね、さうしよつちうお目にはかゝれないまでも、オーさんや女將さんが近いところにゐてくださる、と思ふ氣持だけで、なんとなくかう心丈夫なんですけど、こつちには、あな

た、一人だつてお心やすい方がございませんの」

どうしてまたそんなところへ越して來たのだ、と訊いてみたかつたけれども、直輔は控えた。夏場二月馬鹿高い家賃を貪る鎌倉を、ちよいと避けてゐる、そんな風な邪推が心を掠めたゞけでも、可厭な氣持だつたので、すぐほかのことを云つた。

「でも、こゝのA――病院つて云ふのは、大へん評判がいゝやうですね」

「えゝ、もう御年輩の方ですが、御親切な、それアいゝ先生です」

「さうですか、それアよござんすね」

「ときに、先生つて云へば、あの、しよつちう實業に來てゐた禿の先生ね……」

「えゝ、あちらどうなすつて」

これから、二人の間に、客や藝者や待合や、つまり彼等の「土地」の、お愛がゐなくなつてからの變遷(うつりかはり)が、暫のあひだ話題になつて續いた。その三分の一くらゐは、直輔にも、出さうと思へば、口が出せたが、興もなげに默つてゐた。また實際、それほど興はなかつたし、なんとなくその日のお愛に、初めて見舞つた時のやうな、しんみりした味がなく、調子づきすぎて、むしろカサ／＼した感じなのが、淋しく、もの足らなくてならなかつた。

「オーさん、あなたまたこの頃、御盛なんぢアないんですか」

「いゝえ、どう致しまして、あれッきりですよ」

「だつて……」

と、高濤の方へ目をやると、

「いゝえ、あたしはなんです、あんまり御無沙汰して了ひましたから、一年半振かそこらで、ちよいと御機嫌伺ひに出ましたんで、こちら、ほんとにあれッきりで、ちつともお出かけくださいませんのです」

「へえ、さうですか。それは感心……」

「感心でせう」

「おや、感心は手前の方じアないんですか。昔を忘れずに、さうしてちやんと御機嫌伺ひに出る。――その話ぢアないんですか」

「さうね、それも感心ね」

「ぢア、幇間美談かな」

「さう〳〵、幇間美談、萬壽の……忠節、ですかね。忠節はまづござんすか」

「さうさね、幇間美談、萬壽の、萬壽の……陸釣、はどうだい」

「あれだ！」

「どうしてまた、さうふツつりおやめなすつたんです？」

「それア勿論病氣ンなつたからですよ」

「いゝえ、それアさうですけど、今もつてお遊びにならないつて云ふのは……」

「それ〳〵、昨夜もあたし、こちらへ一晩御厄介になつて、それを云ふんですよ。今の若さで、あなたさう老ひ込んぢまつちアいけない、お頭は大ぶん涼しさうになつて來たけれど、あたしと云ふものがお側についてる限りにやア、何もさう恥をかゝせるやうなことばかりはさせないから、つてね、スペルミン、ヨヒンビン、いろ〳〵取りまぜ注射に及んだんですがね、どうも、すつかり氣おくれがしちまつたらしいんですよ」

「フン」

と、鼻のさきで笑つて、「可哀やいもと、そちやなんにも知らねえな、つてことがあるね」

一え〻、どうもさうらしいわね」
「へえ、さうですか。なんか、かう……」
ちよいと小指を出して、「……出來てるらしい容子ですか」
「……でせう？ねえ、オーさん」
「冗談いつちやアいけない。話を理に落せば、昔もらつた女房で、一ぺんに懲りちやつた態さ、それだけのことですよ」
「とはまた、うまく逃げましたね」
「ほんとね、づるいわ」
「づるい？……一體あなたは、遊ばなくなつたのを、感心だつて褒めた人ですよ。その舌の根の乾かぬうちに……」
「い〻え、ですから、何もお遊びにならなくつてもよござんすけれど……」
「おや〳〵おや、もつとこれア、敵身方が判然しなくなつて來たぞ」
「さうよ、あたしの云ふのはさうなのよ。萬壽さんみたいな悪友とは、絶交なすつても構はないから、矢ツ張り、……ねえ」
萬壽の方へ、救ひを求めるやうな目つきをやると、うんと一つ睨め返して、
「何がねえです。あたしは反對だ、大不贊成！」
「つまり、女房を貰へ、ですか」
「え〻」
靜に領かれると、直輔は、不意に心臟を刺されたやうになつて、疊に目を落した……。
「ねえ、萬壽さん、あなたさう思はない？」
沈默が、それより永びいたら、救はれ憎くなる、と云ふ瞬間に、お愛がさう問ひかけたのにかぶせて、やつと自分を河役した直輔が、

「たゞ、それアまア貰つてもいゝんですがね、實は、自分でほしい、と思つたことはたゞの一度もありませんね。そのくせ、ひとの女房を見ると、羨しくなることはあるんですよ。結局おんなじことかも知れないが、正直にあたしの心持を云つて、そんな風な違ひがある。今朝もさ、刀自ンとこの女中さんと、近所の桶屋の息子さんとがいゝ仲になつて、嫉妬して了つたのを、刀自の口利きで、なんのさわりもなしに夫婦になることにきまつたつて話を聞いて、ほんとにあたしは羨しかつた。羨しい……ともちよつと違ふやうな氣がするんだが、兎に角あたしは、偶然なことで、その二人がいゝ仲になつてるらしいつてことを、前から知つてゝね、なんとなくかう二人が好きになつちやつて、どうかしてうまく一緒になれるといゝが、なんて、餘計なおせつかいだけれど、蔭ながら力瘤を入れて贔屓にしてゐた人なんですよ。そのせいもありませう、具合よく纏つたと聞くと、馬鹿に嬉しくなつちやつたんですよ。二人して泣いて喜んだり、たまらなくなつてぎゆうツと抱きついたり、一緒になつてからも、いつまでもかう平和な、靜な幸福が續いて行く、――そんな氣持が、一々手にとるやうに解るやうな氣がして……つまり羨しいのかなア、なんだかかうもつと……、その人たちとおんなじやうに喜びたい、その喜びをむかうに眺めてゐるんでなくつて、そんな風に自分でも喜んでみたい、……つまり、羨しいんですかね。どうしても少し違ふやうなんだけれど、……解らないな。小説家にでも云はせたら、なんとかそこを、うまい具合に云つてくれるかも知れないけど、兎に角、それでゐてあたしが、自分に女房をほしいなんて、決して思つたことはないんだから、ちよつとへんでせう……?」

「へんですね、慥にへんですね。一種の變態性慾……、そんなやつアないか」

「いや、實際さうかも知れない……」

「さうですか、へえ、出鱈目も云つてみるもんですね」

「生意氣なことを云ふやうですが、……なんて云ふと、なほ生意氣に聞えるかも知れませんけれど、つまりかうなんぢアないんでせうか、あなたは、その女中さんと、桶屋さんでしたか、その息子さんと、目出度く一緒になれた時の喜びは、ようくお解りンなる、あんな風に喜べるもんなら、自分も結婚してもいゝ、だけど自分には、とてもあんな風に喜

ぺさうもない、――そんな風なんぢアないんですか」

「さう〳〵、偕にそれがあるんです。年のせいばかりぢアない、これアどうも、あたしの生得らしいんですよ。でなきやア、躾とかこれまでの經驗とか……兎に角こまつたもんです」

「どうもさうむづかしく込入つて來ると、矢ッ張りあたしの注射ぢア駄目かな」

「なアに、大變結構ですよ。歸り新參と云ふやつで、これからまたせい〳〵お引廻しを願ひたいと思つてるんだ」

「いやどうも、これア恐入ります。……然し驚きましたなア、小しんちやん、いつの間にあなた、そんな學者になちまつたんです。ちよいとかう、はたから聞いてると、オーさんより一枚うは手に出たやうな容子だつたぢアありませんか」

「それアもうあなた、心學の方ぢア、當時べにら坊なまるか、あたしかつて云はれてるくらゐなもんです」

「あ、さようで。手前から云ふ者でございますが、どうぞ今日からお弟子入りを……」

云ひながら、紐で首から掛けた大きな蟇口を取り出して、あつちこつち名刺を探してゐるのを、お愛はすかさず、

「いえもうどうぞ、そんな御心配はなさらないでください」

「どう致しまして……。あ、あつた〳〵」

云ふかと思ふと急に眞面目くさつて、「手前前のところから越しまして、番地も電話もこゝに書いてございますから、あのウ、私のやうなものでも、ひよいと、なんぞまた御用でもございました節には、ちよいとお電話なりお葉書なり頂きませばいつ何時でも、どちらへなりと跳んで伺ひますから、何分とも御贔屓に……。いえ、冗談のけて、東京でなくつちアないものがほしい、とかなんとか。そんな御用がありましたら、御遠慮なくさう云つてよこしてください。うちにも、二三人ごろ〳〵してゐるのが居りますから……」

「えゝ、有難う。どうぞまたお願ひ致します」

と、うけとつた名刺を見ながら、「申しおくれましたが、お宅の奥さん、お變りもいらつしやいませんか」

「へ、有難うございます。相變らず夫婦仲よく共稼ぎで、どうやらかうやらやつて居ります」
「結構ですわね」
「結構も結構だが、もういゝ加減に引ッ込めて、ちつと樂をさせてやつたらいゝぢアないか」
「ところが、うちの婆さん、それが嫌ひなんでしてね、矢ッ張り御座敷へ出て、くだらない大口でも利くとか、うまくもない唄でも唄つてる方がいゝとみえまして、矢ッ張りこのまゝにして置いてくれつて云ふもんですから、當人の望とありやア、これアどうも仕様がないと云ふんで、止むことを得ず……つまり稼がせてるんですな」
「おい、ちよいと斷つとくがね、さつき俺ア、ひとの女房を見ると羨しくなるつて云つたがね、お前さんとこの上さんだけは別だよ。どうぞさう思つて、安心してゐておくれ」
「なにヨウーこら、おもてえ出ろ！」
すつかり醉漢の身ぶりで、「巫山戯やアがつてからに、なんの恨があつて、矢鱈ひと様の女房にけちをつけやアがるんだ！」
「これさ、萬さん、お前さんまたボルドウに醉ちまつて、ほんとにしようがないね……」
「よう〳〵、ちよいと大和屋の面影があつた」
「あら、田圃の大夫のつもりですのに」
「さう云やア、澤村秀調ぐらゐには聞えましたね」
「さア、どうもすつかり喋り込んぢまつた、お說に從つて、そろ〳〵おもてへ出ることにしようぢアないか」
「まアおよろしいぢアありまんか」
「いゝえ、中々およろしくないんです。若旦那が眠くならないうちに、箱根までのしとかないと、これでまた明日になつて、天日に遇はふもんなら、土龍同然、忽ち動けなくなつちまふ方なんですからね」
「さアもう怨悶々云つてないで、さつさとおもてへ出るんだ。……ぢア御大事になさい。夜分出て、とんだお騒はが

せでした」

「どうも、いつもなんにもお構ひ出來ませんで……」

萬壽は、玄關から果實の籠を提げて來たが、

「これア、吾輩からお前にやる」

「すつかり燥(はしや)いぢまやアがつて、切上げの惡い太神樂だな」

「だ、い、か、ぐ、ら？……ヘツ、ひどいことになるもんだなア。重い籠を、こゝまでは誰が提げて來たと思つてるんだ」

「オーさん、毎度頂きますばかりで、どうも相すみません」

「お前と俺とのなかで、すむもすまないもないぢアないか、なアお愛……」

「おい、萬公、いゝ加減にしろツたら」

「たうとう叱られちやつた。……どうもこれア、ちよいと出ましていろ〳〵。……ボルドウを誠に御馳走様でした。お大事になさいまし。ぢア御免ください。……お女中さん、どうもおやかましう」

先に出た直輔は、もうさつさと門の方へ歩いてゐた。

「待つてくださいよウ、これアどうも暗いや」

「えゝ、そこほんとに暗いんですから、お氣をおつけなさいまし」

と、うちからお愛の聲で、「萬壽さん、お道さんにもどうぞよろしく」

「へえ、申し聞かせます。さようなら、お休み……」

往來に出てから、直輔に追ひつくと、

「小しんちやん、元氣なんですね、え？あたしやアもつと、ブツと病人々々してるのかと思つてました」

「あゝ、だけど、今日のはちつと病的だつたよ。家主(おほや)の一件で大ぶん亢奮してたらしいね」

「えゝ、さうかも知れません。何しろあたしがはいつてつた時には、きり〳〵ツと目が吊しあがつてましたもの」

「それアいゝが、あの『誰だ』にやア、ちよつと面喰つたね」

「驚きましたよ。まア、棒はないつて云やア棒はないやうなもんの、あちらにしろ、あなたにしろ、あすこで逢つちア、それアちよいと具合が悪うございますよ」

「それアさうさ。……然し萬さんの『今晩はア、お分りですか』は大した肚藝だつたよ。ちつとでも早くお愛さんに、來たのは萬壽だ、つてことを知らせやうとした、あの心根は買へるよ。若しあれが旦那だつたら、こつちがはツと思つたくらゐにア、お愛さんにだつてはツと來るわけだからね、もう一つ悪い想像を逞くして、――まアそこまで考へるにやア及ばないが、萬一お愛さんが悪いことでもしてゐりやア、尚更ぎツくり來てゐるところだからね、そいつを、その心配な時間を、一秒でも短かくしてやらうなんて親切心が、この萬さんにあらうとは……」

と、並んで歩いて行く肩に手をかけ、はた〳〵と輕く打ちながら、「憶にお前さん、男をあげたね」

「へゝゝゝへ」

「有繋にてれて、へゝゝゝと笑ふばかりは、いよ〳〵もつて嬉しいな。どうだ、いゝ心持だらう？」

「いゝ心持です」

「さうだらう？俺もいゝ心持だよ」

「嘘でせう、あなたはあんまりいゝ心持ぢアございますまい」

「なぜだい」

「だつて、……正直に云ひますよ」

「云へよ」

「おこりませんね」

「おこるもんかい」

「小しんちやん、旦那に惚れてますよ」

「うん、それだから俺がいゝ心持になつたんだよ。ちつとでも俺のことをなんとか思つてるか知らん、つて云ふ氣があつた間は、今から考へてみると、俺アちつともいゝ心持ぢアなかつたよ。今夜も、初のうちは駄目だつたが、今は馬鹿にいゝ心持だ。どうだい君が見たつて、大した御機嫌だらう。俺がこんなに機嫌のいゝのを、あんまり見たことがあるまい。つまりあの人が、自分の身を仕合だと思つて、喜んでることが解つたのが嬉しいんだよ。相手なんぞ誰だつていゝやね……」

「だけど、そのくせ淋しいんでせう」

「さうだ、それア、だけど仕方がないね。人間だもの……」

「それアさうと、だん〳〵暗い方に來ちまいますね。道はこれでいゝんですか。あなた分つてるんですか」

「まアいゝぢアないか、愉快だからもうちつと歩かうよ」

「へえ、歩きませう。ですが、病人を見舞ふなんて、なんだかかう、あとの氣持のいゝもんですね」

「すぐ續けて云ふのはへんだが、それから、墓參りね」

「え? そいつアあんまり……」

「いゝえ、いゝ心持だよ。どつちかつて云へば、墓參りの方がいゝかも知れない」

「さうですかね」

「さうさ。鶴龜々々、百年の後にだね、若しお愛さんが死んだら、時々一緒に墓參りをしようよ」

「暗いとこで、そんな話はよしませうよ」

「なんだい弱蟲! お墓の前で、お前さんとあたしと、こゝで一つお芝居をしようぢアありませんか、つてやつをやるんだね」

「太神樂を手向けるんですか」

「さうさ。いやかい」

「いやぢアありませんが……。なんだか足もとが、ふら〳〵して來ましたぜ」

「いゝよ〳〵。海岸の近くへ來たんだよ」

「だつて、あんまり愚圖々々してゐると、箱根の宿屋が締まつちまいますよ」

「なに、湯本や塔の澤なら大丈夫だ。萬一ねたつて、叩き起すばかりだ」

「ぢアまアそれアいゝとして、あなたは一體、……これから訊問しますよ」

「いゝとも」

「藤波さんとこの女中と、桶屋の息子とが、ですね……」

「へえ、へんなことを云ひだしたな」

「よござんすか、一緒になつた曉に、例へば舅姑(しうと)の氣に入らないとか、桶屋が道樂を始めるとか、上さんに陰男が出來るとか、やれ子供が死んだとかどうだとか、なんか不仕合が起る、——そんなことはお考なさらないんですか」

「それア考へないどころぢアない、自分でも一つどえらいめに會つて來てるけれど、ひとの身の上だと、そんなことはなささうな氣がするぢアないか。つまり、ひとの花が赤く見えるやつさ。赤く見えるのは、美しいからだらうけれど、生來、赤い花がすきで、それをいつまでも赤い色でもたせとくにやア、ひとの花として眺めてるよりほかに仕樣がないぢアないか。だから、赤い花なんて、實はないものだつてことも知てるし、さう思つてほしがらない人の惡口を云ふわけでもないんだよ。たゞ、なんの因果か、赤い花が好きに生れついてるだけの話さ」

「假名で書けば、一生女は拵へない、つてことですか」

「拵へられない、つてことだらう。まあどつちでもおんなじやうなもんだけれど、さう云つた方が大人しやかだ。……あゝ、くたびれた」

「あゝ、ほんとにお勞れでせう。もうそろ／＼引ッ返さうぢアありませんか」

「まアちよつと休ませてくれ」

道ばたの砂土手へ、勞れきつて、背を凭せかけた。まだそこには、晝のぬくもりがあつた。——直輔は、目をつぶつて、快い放心のうちに 夢の破れたあとの夢、そんな感じのフワ／＼としたものを、瞼の裏に眺めてゐた。（完）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區本石町 至誠堂
同 本郷區春木町 盛春堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大誠社
名古屋市富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾四錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年十月三十日印刷納本
大正十一年十一月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區本郷三丁目六番地 中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十一年十月三十日印刷納本
大正十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論 十一月號 （第三十七年第十二號）

定價金八十錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.